博　士　論　文

戦後学生セツルメントの展開に関する研究

Historical Study on the Development of Student Settlements Movement after WWⅡ in Japan.

2019年度

日 本 福 祉 大 学 大 学 院
福 祉 社 会 開 発 研 究 科
社会福祉学専攻博士課程

氏　　名：岡本 周佳

2020 年　　1 月　　7 日

論 文 要 旨

氏　　名：　岡本　周佳　　印

◆論文題目

戦後学生セツルメントの展開に関する研究

◆要　　旨

1. 本研究の目的と方法

本研究は、戦後から現在に至る学生セツルメントの歴史を分析することで、学生セツルメントが担ってきた役割や意義および課題を明らかにすることを目的とする。

研究の枠組みとして、研究課題と研究の視点をそれぞれ 4 点設定した。研究課題は、①各時期のさまざまな実践内容について検討し、果たした役割を明らかにする、②地域実践への着目と地域連合間の比較を通して、地域の広域連合と単一のセツルメント、全国学生セツルメント連合(以下、全セツ連)の各関係性を分析する、③組織構造や思想について、戦後の各時期における変遷を分析し、連続性と時期ごとの固有性を明らかにする、④社会構造の変化との関連を検討する、の 4 点であり、研究の視点は、①時代背景や社会状況の変化との関係、②地域での多様な実践と住民自治・主体性との関係、③社会運動・社会福祉運動の視点、④人間形成・自己教育の視点、の 4 点である。

研究方法は、歴史研究の手法を基本とし、史資料を用いて、時期ごとに学生セツルメントの 3 つの位相から論じる。3 つの位相とは、①全セツ連、②地域の広域連合、③単一のセツルメント、である。史資料に加え、オールドセツラーへのインタビュー調査で補足する。本研究における時期区分は、①学生セツルメントの再興期 1945 年－1955 年、②学生セツルメントの組織構築期 1956 年－1966 年、③学生セツルメントの転回期 1967 年－1973 年、④学生セツルメントの組織変容期 1974 年－1989 年、⑤1990 年－現在、の 5 期である。また、本研究では、学生セツルメントを次のように定義した。

学生セツルメント：大学拡張運動・セツルメント運動の系譜をもつ東京帝大セツルメントが解散したのち、戦後の東大セツルメントを端緒として学生が主体となり運営する部活動もしくはサークルとして位置づけられた団体。活動の分野や内容、地域は多岐にわたるが、セツルメントの人格的接触の精神を引き継いだ地域実践とともに、地域や住民の要求に応じた運動が展開された。また、地域や社会の現実に向き合うことで学生の人間形成の場になるという特徴も有していた。それぞれが地域の現実に即した多彩な活動を行いながらも、地域の広域連合や全国の連合といった組織化がなされ相互に関連していたが 1989 年の全国セツルメント連合の解散以降、その数は激減し実践の質も変容している。

2. 構成と内容

本論文は、序章と終章を含む全 8 章で構成される。序章では、研究の目的、視点、研究方法、時期区分、用語の定義、論文構成について述べた。第 1 章では、先行研究を概観し本研究における学生セツルメントの定義づけを行った。また、戦後の主なセツルメント研究の概観を通して、上述した 4 つの研究の視点を明らかにする必要があることを示した。

第 2 章から第 5 章では、各時期区分について、第 1 節で社会状況や社会福祉の動向、第 2 節で全国の学生セツルメントの動向と全国学生セツルメント連合における議論や方針、第 3 節で地域の広域連合における議論と展開、第 4 節で単一のセツルメントにおける実践などについて共通に論じた。

具体的には、第 2 章では、学生セツルメントの再興期として 1945 年から 1955 年を取り上げ、学生セツルメントが再建する経緯と本期の特徴について検討し、戦後の混乱状況の中で地域の要求に応じた先駆的・補完的な実践が取り組まれたこと、社会福祉運動の性質を有していたことを明らかにした。第 3 章では、学生セツルメントの組織構築期として 1956 年から 1966 年を取り上げ、1950 年代半ばから後半にかけて運動性の高い方針が出された経緯と背景、1960 年以降、学びの場としての位置づけを強調する方針へと転換する背景について検討した。その結果、地域実践と社会変革との揺れ動きの中で前者の方針が出されたこと、地域実践を否定する方針は多くの単一セツルメントで受け入れられず方針転換に至ったことが明らかになった。第 4 章では、学生セツルメントの転回期として 1967 年から 1973 年を取り上げ、地域の広域連合結成の動きが活発化する背景について検討し、学生運動の動向との関連が強いことを明らかにした。また、人間形成や自己教育が方針として位置づけられる本期の実践の特徴と変化についても検討し、地域住民と協働して地域の改善を図る実践や自主的組織化に携わる実践がみられること、セツラー自身が実践を通して学ぶことが強く意識されていたこと、を明らかにした。第 5 章では、学生セツルメントの組織変容期として 1974 年から 1989 年を取り上げ、全セツ連が解散に至る経緯について検討した。その結果、社会状況の変化に応じた実践や運動の展開が困難になったこと、学生をめぐる状況の変化などが背景にあることが明らかとなった。第 6 章では、1990 年から現在を取り上げ、全セツ連解散後の各地のセツルメントの状況について検討した。その結果、全セツ連解散後も地域の連合や単一のセツルメントは継続しているところがあったこと、実践内容には変化がみられること、を明らかにした。また、現代におけるセツルメントの状況についても検討し、さまざまな葛藤を抱きながらセツルメントとしてのあり方の模索が行われていることも明らかになった。終章では、学生セツルメントの展開について整理した上で、それぞれの時期区分について 4 つの視点から考察し、学生セツルメントの歴史的意義と役割、学生セツルメントの課題と未来への展望、本研究の意義と課題について論じた。

3. 本研究の結論と今後の課題

結論では、学生セツルメントの歴史的意義と役割を 4 点に整理した。

それは第一に、学生セツルメントの有していた運動性である。この点について、先行研究では、階級闘争や社会改良的視点から捉えられることが少なくなかった。しかし、戦後の学生セツルメントは「大衆の生活を守ろう」をスローガンに掲げて再建しており、社会福祉運動としての性格を強くもっていた。また、再建初期においては地域の人びとの要求や目の前の社会状況に応じて

医療、衛生、教育、保育など、多様な実践が展開され、法制度や社会資源の不足を補う、補完的役割を担った。イデオロギー的側面や学生運動の動向の影響からその運動的性質は常に揺れ動いたが、地道な地域実践を通して地域や社会を変えていくという運動性が軸としてあり、ソーシャル・アクションの役割を果たしていたと考える。また、学生セツルメントには、地域は社会の縮図であり地域に行くことによって社会の現実を知る、という地域から社会をみる視点があった。さまざまな社会の困難があらわれてくる場として地域を捉える視点にこそ、大きな特徴がある。

第二に、地域実践の果した役割である。学生セツルメントにおいては、「要求」の視点が常に重視されてきた。それは、地域や地域住民の要求とともに学生自身の要求である。その要求に基づく実践が、住民自治や地域の自主的な組織化につながっていった側面がある。また、要求を把握しようとする姿勢や態度が、地域や社会の状況に応じた実践を可能とし、必要に応じて新たな実践を創りだす役割も果たしていた。

第三に、学生セツルメントの思想や精神である。それは、イギリスで発祥したセツルメントを引き継ぐ大学拡張運動の影響と人格的接触の精神である。これは、戦前の大学セツルメントにもみられたが、戦後にも影響を与えていた。再興期から組織構築期にかけては、大学進学率の低さもあって大学生の社会的使命感として社会に対して何かできることをしたい、という考えが強くみられた。同時に、同じ人間として、友人として関わるという精神は、地域実践の展開のなかで、エンパワメントやアドボカシーにも通じる役割を果たしていたといえる。これらは、現代の社会福祉においては特別なことではないが、戦前からの伝統を引き継ぎ長年続けてきたという点で、重要な意味がある。

第四に、長年継続することができた背景には、組織構造の点が大きい。全国、地域の広域連合、単一のセツルメントという構造が明確であったからこそ、方針をもち、組織として運動を進めていくことができた側面がある。一方で、全セツ連と地域の広域連合や単一のセツルメントは必ずしも一致していたとはいえない側面もある。しかし、課題を含みつつも組織体系が整っていた点に、学生セツルメントが長年にわたり全国的な規模で活動を展開できた要因の１つが見出せる。

第五に、人間形成や自己教育の側面である。さまざまな地域で実践を行うセツルメントにとって、地域や社会の現実を知り、そこから学ぶ点は大きな意味があった。実践場所や内容、意識の差こそあれセツルメントで実践を行うことを通してセツラーは、それまで知らない世界を知り、何ができるのか、何が必要かを真剣に考え、学び、成長する機会になっていたといえる。また、これらには、セツルメント創成期の大学拡張運動の精神の継承も見出せる。

本研究の意義は、第一に、これまで全セツ連や特定の側面からの検討に留まっていた学生セツルメントについて、通史として実証的に戦後の展開を明らかにしたことである。第二に、研究枠組みとして、これまで十分に論じられてこなかった全セツ連、地域の広域連合、単一セツルメントの各関係性について４つの視点から体系的に分析した点である。第三に、個別のセツルメントの実践内容についても具体的な事例から検討し、多様な展開と果たした役割を明らかにした点が挙げられる。

一方で、本研究の課題は、①戦前の大学セツルメントおよび施設型セツルメントとの比較検討、②今回取り上げなかった地域連合や単一のセツルメントについての検討、③今日的課題や社会福祉の文脈における位置づけの検討、などである。これらについて、今後より検討を深めたい。

Abstract of Doctoral Dissertation

Student NO. : 17DA0052
Surname, First name : OKAMOTO, Chika

【Title】
A Historical Study on the Development of Student Settlements Movement after WW Ⅱ in Japan.

【Abstract】
1. The purpose and methodology

This dissertation analyzes the historical trajectory of Japanese student settlements (gakusei setsurumento) from the end of WWII to modern day in order to reveal their roles, significance and challenges. The study's framework comprises of four tasks: (1) to clarify what practices and roles of settlements are like in different historical periods; (2) to analyze the mutual relationship among the Japan Student Settlement Union (Zenkoku Gakusei Setsurument Rengou, or acronymed as Zensetsuren), regional student settlement unions and individual settlements through comparison among regional institutions and practices; (3) to reveal continuity and periodical uniqueness in the organizational structure and philosophy by different historical periods; and (4) to examine the influence of social changes to the features of the movement. In addition to this, the study will also consider four perspectives: (1) relevance to the historical background and social conditions of the time, (2) community practices in individual settlements and roles in forming the self-government and independence of the community residents, (3) characteristics of settlements' practices in terms of social movement or social welfare movement, (4) the impact of settlements' function to nurture humanity and deliver self-educational opportunities.

Based on historical research methods, the study was conducted using historical materials and sorting into five different time divisions and three layers according to the organizational structure of student settlements. Namely Japan Student Settlement Union, regional student settlement unions and individual settlements. Complimentary interviews of Old Settlers are also used to support historical materials. The time period discussed is from 1945 to the present and divided into five periods according to the movement's transformation: (1) 1945 - 1955, revival of student settlements, (2) 1956 - 1966, organizational development of the settlements, (3) 1967 - 1973, turning period of the settlements, (4) 1974 - 1989, organizational transformation of the settlements, (5) 1990 - present.

A student settlement in this study is defined as an organization that is formed as a student-run club or an extracurricular activity influenced by the establishment of the University of Tokyo Settlement after WWII. The University of Tokyo Settlement had the former body known as the Tokyo Imperial University Settlement, whose system and organizational policy was created based on the University Extension Movement and Settlement Movement which was dissolved before the war. The student settlements after WWII and their regional practices, whilst having a wide range of different programs, areas of concern and regional locations, have inherited the spirit of working with close personal connections to the locals and running activities according to the local demands. In addition to this, the movement offered students the characteristic opportunity to nurture their humanity by facing the realities of their community and of society. While individually working on regional issues, student settlements formed connections to one another which eventually led to forming regional unions and then went on to create a national union to maintain those mutual relationships. However, since the dissolution of the Japan Student Settlement Union in 1989, the number of settlements has dropped dramatically; and in turn a change of the quality of their practices has also been observed.

2. The structure and content

This paper consists of an introduction, conclusion and six chapters. The introduction explains the purpose of the research, the viewpoint, the research method, the time division,

the definition of terms and the structure of the paper. Chapter 1 provides an overview of the main postwar settlement studies, delivers the definition of a student settlement in this study as well as suggesting the necessity to examine the theme from each of the four perspectives. All of Chapters 2 through 5 have been allocated to different time periods to explain the details in its four sections about (1) trends in social conditions and social welfare, (2) trends in student settlements nationwide, and discussions and policies in the Japan Student Settlement Union, (3) discussions and developments in the regional unions and (4) practices in individual settlements.

Specifically, Chapter 2 covers the period of student settlement revival from 1945 to 1955, examining the history of the rebuilding of student settlements as well as their characteristics of this period and clarifies that its characteristics as a social welfare movement enabled frontier and complementary practices to be taken in response to local demands in the postwar turmoil.

Chapter 3 covers the period between 1956 and 1966 as an organizational development period, examining the policy change from highly motivated activism, present from the mid to late 1950s, toward an emphasis on their educational function from 1960. As a result, it became clear that the former policy was formed during the turbulent movement between local practice and social change, and that policies denying activities being practiced locally was not accepted in many individual settlements, which ended up leading to the policy change.

Chapter 4 examines the background of the turning period for student settlements during the time period of 1967 to 1973. It was during this time where an acceleration of the formation of regional unions was observed and is found to be strongly related to the emergence of campus activism. Moreover, the examination of the characteristics and changes of the practice of this time period, where human development and self-education are positioned as policies, revealed that settlements in this time collaborated with local people in order to improve the community and involved themselves with the formation of voluntarily organized local organizations. The settlers themselves were also strongly conscious of learning through practice during this time period.

Chapter 5 examines the transition from 1974 to 1989 as the period of student settlement's organizational change and the process of the Japan Student Settlement Union's dissolution. It became clear that settlements had difficulties in delivering practices in response to the changing social situations and in addition to that the circumstances of students had changed, too.

Chapter 6 illustrates the situation of the remaining settlements in various parts of the country after the Japan Student Settlement Union dissolution from 1990 to the present. Some regional unions and individual settlements have continued running even after the Japan Student Settlement Union dissolution but the content of their practices has changed. Despite holding various types of conflicts, the current settlements are seeking new motivation, purpose and identity of their groups.

The conclusion summarizes the development of student settlements, analyzes each period from the four perspectives and discusses the historical significance and role of student settlements, the challenges and prospects and the meaning of this research and future tasks.

3. Conclusion and future research tasks

The conclusion summarizes the historical significance and role of student settlements into five points. The first point is regarding the role of activism inherent in student settlements. In previous research there was much that pointed towards the activism being about social class or social issues but after WWII the settlements were rebuilt under the slogan "Protect the lives of the citizens" and the focus moved to being more like a social welfare movement. In the early stages of reconstruction, it also provides flexible practices for healthcare, hygiene, education, childcare, etc., depending on local needs and the contemporary social situation, playing a complementary role to cover the shortage in the legal system and social resources. The nature of activism fluctuated in certain areas due to the ideological aspects and the influence of campus activism trends. But since it always had

improving the region and society through steady local practices at the center of its activism, the role as a social action was observed. Moreover, student settlements are able to observe society as a whole through the local community, that is, the community was regarded as a microcosm of the society so the reality of society could be viewed through that microscope. One of the most characteristic factors of student settlements is the idea to think of the local community as a place which reflects various social difficulties.

The second point is the role that community practices played. In student settlements, the viewpoint of "understanding demands" has always been emphasized; it means students' own demands as well as the demands of the local people and the community. Practices based on local demands have promoted local autonomy and voluntary creation of organizations. In addition to that, the attitude and behavior of trying to grasp the demands enabled the deliverance of practices that respond to different local and social situations, and eventually to create new practices if needed.

The third point is the fact that the concept and spirit of student settlements is based on the influence of the university expansion movement that took over the settlement that originated in the United Kingdom as well as the spirit of personal connection. This was seen in pre-war university settlements, but it was still in effect after the war. From the revival period to the organizational development period, the university enrollment rate was low. Therefore, among students, there was a strong sense of social mission with motivation to do something helpful for society. At the same time, the spirit of providing support as friends and as fellow human beings played a role of what is now called empowerment and advocacy in the development of community practice. Even though these factors are nothing special in modern social welfare, this has important implications about the meaning of the student settlements movement that they had carried on the feature as a tradition since the pre-war period through many years.

The fourth point is the reason why student settlements have been able to continue running as organizations for many years and its relation to their organizational structure. Because of the clear structure layer of the Japan Student Settlement Union, regional unions, and individual settlements, they were able to share common policies and move forward as a unit of organizations. Of course, there are variants rather than a singular approach in the activities and attitudes of the Japan Student Settlement Union, regional unions and independent settlements. However, the solid organizational structure is an obvious reason for their long-lasting existence and nationwide spread of activities in spite of multiple challenges.

Finally, the Fifth point is the aspect of human development and self-education. Knowing the realities of the region and society, and then learning from it, was significant for the settlers who delivered practices in various regions. Despite the differences in their practicing location, activity content and degree of consciousness and awareness, it was an opportunity for settlers to learn and grow because they were able to face a world that they had never been exposed to, which evoked serious consideration about what is needed and what they could do. This factor also shows the inheritance of the spirit of the University Expansion Movement in the early days of settlement movement.

The significance of this study is the following three points. Firstly, the previous study of student settlements has been limited because they focused only on the Japan Student Settlement Union or examined merely from a specific aspect, but this dissertation has empirically clarified post-war development of student settlements throughout its history. Secondly, a systematic analysis was achieved by using the research frameworks of four perspectives in order to analyze the relationship among the Japan Student Settlement Union, the regional unions, and individual settlements, which has not been sufficiently discussed. Thirdly, it clarified the various process of development and various regional roles of individual settlements by utilizing concrete cases for examination.

On the other hand, the tasks remaining in this research are: (1) comparative studies with pre-war university and community welfare facilities, (2) examination of regional unions and individual settlements that were not covered in this study and (3) discussion about the positioning of student settlements in the context of current social issues and social welfare situation. Those tasks are expected to be explored in further studies.

【目次】

序章 1
第 1 節　研究の背景と目的 1
第 2 節　研究の視点と方法 2
1. 視点と研究課題 2
2. 研究方法 3
3. 時期区分について 3
4. 用いる史資料 4
5. 用語の定義 5
6. 地域の広域連合について 6
7. 倫理的配慮 6
第 3 節　研究の枠組みと構成 6
1. 研究の視点 7
2. 研究の課題 10
3. 本研究の構成 14

第 1 章　先行研究の到達点と課題 20
第 1 節　セツルメントの系譜と学生セツルメントの位置づけ 20
1. 欧米におけるセツルメントの展開 20
2. 日本におけるセツルメントの系譜 22
3. 東京帝大セツルメントから戦後学生セツルメントへの系譜と思想 22
4. 戦後学生セツルメントの定義 23
第 2 節　戦前のセツルメントに関する先行研究の概観 25
1. 大林宗嗣によるセツルメント研究 25
2. 大学セツルメントの誕生 26
3. 大学セツルメントの思想と特徴 29
4. 戦前と戦後の共通点と相違点―先行研究からの論点― 32
第 3 節　戦後の主なセツルメント研究の概観と変遷 35
1. 戦後～1960 年代 35
2. 1960 年代後半～1980 年代 37
3. 1990 年代～現在 38
4. 学生セツルメントをめぐる研究の変遷から―到達点と課題― 42
5. 課題別の先行研究の概観と論点 43
第 4 節　小括 46

第 2 章　学生セツルメントの再興期(1945－1955 年) 49
第 1 節　日本の社会状況と社会福祉の動向.....49
1. 日本社会の状況と戦後社会事業改革の原点 49
2. 社会福祉をめぐる動向と制度・政策にみる保護的・救済的特徴.....51
3. 組織化と社会運動.....53
第 2 節　全国における学生セツルメントの再興期.....55
1. 東京大学セツルメントの再建―組織化への萌芽としての東大セツルメント―.....55
2. 全国セツルメント連合の結成(1954－1955 年) 63
第 3 節　各地域における学生セツルメントの誕生.....63
1. 東京および関東におけるセツルメントの活動と組織化 65
2. 関西における学生セツルメントの成立 70
3. 再興期における戦前との連続性―教員・OS とのつながりから― 74
第 4 節　小括 77
1. 再興期における学生セツルメントの展開 77
2. 学生セツルメントの再興期における社会福祉運動との関係性.....78

第 3 章　学生セツルメントの組織構築期(1956－1966 年) 81
第 1 節　社会状況と社会福祉の動向.....81
1. 社会状況と国民生活―高度経済成長と国民生活の変化― 81
2. 社会福祉六法体制とその他の法整備.....83
3. 社会運動・学生運動の高揚.....84
4. 本期における社会福祉の特徴 86
第 2 節　全国における学生セツルメントの展開―方針に着目して― 86
1. 全セツ連の方針と議論.....86
2. 方針の背景と影響 90
第 3 節　各地域における学生セツルメントの組織化と展開 98
1. 関東セツルメント連合の動向と組織の実際 98
2. 関西におけるセツルメントの組織化―関西セツルメント連合の結成― 100
第 4 節　単一のセツルメントにおける実践―地域活動を着実に行ってきたセツルとは― 104
1. 関西における地域実践―東住吉セツルメントの勉強会― 104
2. 関東における地域実践―若者会・若者パートの実践から―.....107
3. その他の地域での実践 109
第 5 節　小括 112
1. 組織構築期における学生セツルメントの展開 112

2.60 テーゼまでの動向と社会福祉運動との関係性 112

第 4 章　学生セツルメントの組織転回期(1967－1973 年) 117

第 1 節　社会状況と社会福祉の動向..... 117

1. 国民生活と革新自治体の誕生、大学をめぐる変化.....117
2. 社会福祉をめぐる動向―地域福祉・ボランティアへの注目― 118
3. 社会運動の展開―住民の参加と学生運動の衰退―.....119

第 2 節　全国における学生セツルメントの動向―全セツ連の方針転換―..... 121

1. 安保闘争前夜―1968～1969 年を中心に― 121
2. 1970～1973 年にみられる方針転換―60 テーゼ以降の継承―.....124
3. 方針転換と組織構造 126

第 3 節　各地域における連合組織の展開―大阪と愛知を中心に―..... 128

1. 各地の連合組織の活発化 128
2. 関西セツルメント連合から大阪府学生セツルメント連合へ 129
3. 愛知県における連合結成 131

第 4 節　単一のセツルメントにおける実践..... 133

1. 阪セツ連所属セツルの実践―人間形成・地域との連携の視点から― 133
2. 愛セツ連所属セツルにおける実践―ヤジエセツルメント青年会の実践― 138
3. 各地の本期における実践 140

第 5 節　小括 146

1. 組織転回期における学生セツルメントの動向 146
2. 本期の実践にみられる特徴と変化 147

第 5 章　学生セツルメントの組織変容期(1974－1989 年) 152

第 1 節　社会状況と社会福祉の動向..... 152

1. 社会状況―日本経済の国際化と臨調行革路線― 152
2. 社会福祉をめぐる動向 152
3. 社会運動の動向―新たな社会運動の展開― 154

第 2 節　全国における学生セツルメントの動向―全セツ連の解散へ―..... 155

1. 全セツ連の拡大と衰退―加盟セツルの変遷から―.....155
2. 1970 年代後半における全セツ連の動向.....156
3. 1980 年代の全セツ連大会における議論と方針―全セツ連の解散―.....159
4. 全セツ連解散の背景 162

第 3 節　各地域の連合組織の動向―全セツ連との関係―..... 164

1. 阪セツ連の動向―加盟セツルの変遷と議論および特徴― 164

2. 愛セツ連の動向―加盟セツルの変遷と本期の特徴― 169
第 4 節　単一のセツルメントにおける実践..... 171
1. 関西における学生セツルメントの実践―障害児者パートの実践と学生をめぐる状況―.....171
2. 愛知における学生セツルメントの実践―本期の社会調査の実践から― 177
3. 各地の学生セツルメントの実践―追廻セツルメント老人パートの実践から―....179
第 5 節　小括 179

第 6 章　1990 年－現在.....182
第 1 節　社会状況と社会福祉の動向―1990 年代を中心として― 182
1. バブル崩壊と新自由主義傾向の進展 182
2. 1990 年代の社会福祉をめぐる動向―分野別の拡充と社会福祉基礎構造改革―..183
3. 地域福祉をめぐる動向と社会福祉養成教育 184
4. 社会運動・社会福祉運動をめぐる動向―非営利・協同の広がり― 185
5.「共生」概念と地域共生社会 186
第 2 節　全国の学生セツルメントの動向―解散後の全国集会と変遷― 187
1. 解散後の全国のつながりの模索 187
2. 1990 年以降における全国のセツルメントの動向 188
3. 1990 年代における実践の動向と特徴 193
第 3 節　現在も活動を続ける学生セツルメント（1）―弥次衛セツルメントを例として― 194
1. 伝統的な活動の継承と模索（1）―地域との関わりと調査活動、情宣活動― ..194
2. 伝統的な活動の継承と模索（2）―組織構造と行事、学習会― 194
3. 弥次衛セツルにみる継承とその課題 197
第 4 節　現在も活動を続ける学生セツルメント（2）―大阪府立大学セツルメントを例として― 199
1. 地域実践を離れた大阪府立大学セツルメントの実践とその経緯 199
2. 大阪府立大学セツルメントにおけるあり方をめぐる葛藤と悩み―「セツルメントといえるのか」という疑問― 201
3. 大阪府立大学セツルメントにおけるあり方の模索と取り組み 203
第 5 節　小括 205
1. 「1990 年から現在」における動向と現状 205
2. 本期における学生セツルメントの特徴 206

終章 210

第 1 節　本研究の総括 210
1. 学生セツルメントの展開 210
2. 学生セツルメントの展開の整理 212
3. 学生セツルメントの変化 214
4. 学生セツルメントにおける人間形成・自己教育の役割 215
第 2 節　総合考察 219
1. 学生セツルメントの再興期(1945－1955 年) 219
2. 学生セツルメントの組織構築期(1956－1966 年) 220
3. 学生セツルメントの組織転回期(1967－1973 年) 223
4. 学生セツルメントの組織変容期(1974－1989 年) 224
5. 1990 年－現在 226
第 3 節　結論 227
1. 学生セツルメントの歴史的意義と役割 227
2. 学生セツルメントの課題 229
3. 未来への展望 230
4. 本研究の意義と課題 231
5. おわりに―学生セツルメントの歴史と未来― 232
謝辞 234
文献 235
資料 248

序章

第１節　研究の背景と目的

19 世紀のイギリスで始まったセツルメントは、日本においても社会事業の中心として、大正期以降から昭和初期にかけて非常に活発化し、その研究もさまざまな観点からなされた。貧困を課題とする地域に定住(settle)し、人格的接触の精神をもって地域の人びとに関わるという思想と実践は、現代のソーシャルワークにおけるエンパワメントアプローチやソーシャル・アクション、ソーシャルネットワークアプローチの源流[1)]として、またコミュニティ・オーガニゼーション、コミュニティ・ワークの観点[2)]からも、高く評価されてきた。他方、施設を中心としたセツルメント・隣保事業と関連しながら、別の動きとして、大学セツルメントの流れがある。日本における最初の大学セツルメントは、1923 年の関東大震災を契機として始まった東京帝国大学セツルメントである。その後、複数の大学に広がりをみせ活発に展開されたが、戦時体制に入る中で 1938 年に解散を迎える。

この大学セツルメントの流れを汲み、1950 年に東京大学セツルメントが再建されたことで、戦後における学生セツルメントとして新たに出発することとなる。大学や短大、専門学校などの学生によって主体的・自主的に展開された戦後の学生セツルメントは、全国の大学に広がり、非常に活発化した。セツルメントの精神である人格的接触、友人としてともに関わるという姿勢は戦後も継承され、長年にわたり活動が続けられた。戦前とは異なり大学や企業の援助がない中、セツラーが主体となって地域の課題解決や要求実現を目指し地域住民とともに分野横断的な実践を行ってきた。これらの実践には、地域住民自身の主体形成も意図されていた。同時に、運動体としての側面も有し、制度や施策が不十分な中で、地域の多様な生活問題に対して先駆的取り組みも行ってきた。これらの点から、学生セツルメントの実践や展開を明らかにすることは、戦後の社会福祉および社会福祉運動の展開の一面を示すとともに、地域の自治・住民の主体形成の観点からも意味があると考えられる。

また、戦後の学生セツルメントは与えられた体験や活動ではなく、自身らで模索し、必要に応じて新たに創造する実践を展開した。地域での実践を通して地域や社会の現実を知り大学の学びとの往還が生まれることで、セツラーの「人間形成」や「自己教育」につながった側面がある。たしかに、現代のボランティア活動も多くの大学生が参加しているが、何をいつどこで行うか決められていることも少なくない。また、近年、大学においてもボランティア活動を単位として認める風潮があるが、学生の主体性や活動の継続性について疑問が残る。こうした点から、学生セツルメント史の検討は、ボランティア活動や学生の活動のあり方とともに大学教育のあり方の議論とも関連するといえる。

他方、学生セツルメントに関連する先行研究は、近年において、増加傾向にある。例えば、日本女子大学セツルメントを取り上げた黒岩(2015)、学生セツルメントの歴史から大学生の社会貢献活動の意義を検討した中村(2014)、大学生の地域協働について学生セツルメントの展開を交えて論じた高木(2015)、災害救援の視点から論じた浅井(2013)(2015)などの研究成果が挙げられる。このように、近年においては多角的な視点から学生セツルメ

ントの意義が改めて見直されているといえる。これらの研究成果は、学生セツルメントの意義を再検討する上で重要であるとともに、現代においても学生セツルメントの歴史から学ぶところがあることを示しているといえるよう。一方で、これらの研究成果は学生セツルメントがもつ一側面に注目したものであり、学生セツルメントを全体として捉えた研究はみられない。

また、総合的・包括的な社会福祉のあり方を目指す動向のなかで、分野横断的かつ自主的に展開した学生セツルメントの歴史は、ボランタリーな活動がもつ役割の点からも意味があると考える。加えて、学生を主体としたセツルメントが戦後も長年にわたり活動を継続することができた要素および衰退の要因を歴史から実証的に明らかにすることは、現在さまざまな形で展開されている学生団体や、各民間団体、NPO 等の活動の継続にとって重要な要素を明らかにすることにもつながるのではないだろうか。

本研究の目的は、上述の背景をふまえ、戦後から現在に至る学生セツルメントの歴史を分析することで、学生セツルメントが担ってきた役割や意義および課題を明らかにすることである。

第２節　研究の視点と方法

１．視点と研究課題

学生セツルメントはさまざまな要素を含むものであり、その歴史分析にあたっては、多様な視点からのアプローチや方法が考えられる。対象範囲の設定に限っても、ある一定の短い期間に着目して詳細に検討する方法や、特定のセツルメントについて着目して論じる方法もある。後述するが、組織体としての全国もしくは各地域の広域連合や財政状況、方針などに焦点を当てるかたちで対象を設定する方法などもあるだろう。分析の手法も、ソーシャル・アクションやアウト・リーチ、グループワークや地域福祉など、社会福祉学の視点からの分析や、社会学における社会運動論や社会教育学における自己教育論などの知見を用いた分析など、さまざまな方法が考えられる。

本研究は、これまで理論的に十分に整理されてこなかった学生セツルメントをテーマとしており、学生セツルメント史の基礎的研究としての位置づけを意識して、研究の視点と研究課題を設定した。研究の視点は、以下の 4 点である。

研究の視点

①時代背景や社会状況の変化との関係
②地域での多様な実践と住民自治・主体性との関係
③社会運動・社会福祉運動の視点
④人間形成・自己教育の視点

また、研究の課題は、以下の 4 点である。

研究課題

①各時期のさまざまな実践内容について検討し、果たした役割を明らかにする。

②地域実践への着目と地域連合間の比較を通して、地域の広域連合と単一のセツルメント、全国学生セツルメント連合(以下、全セツ連)の各関係性を分析する。

③組織構造や思想について、戦後の各時期における変遷を分析し、連続性と時期ごとの固有性を明らかにする。

④社会構造の変化との関連を検討する。

これらの視点と課題の設定理由については第3節で詳述する。

２．研究方法

研究にあたっては、歴史研究の手法を基本とし、後述する史資料を用いて、1945年から現在までの学生セツルメントの展開を時期ごとに明らかにする。史資料に加え、各年代のオールドセツラー[3)](以下 、OS)へのインタビュー調査を用いて補足する。

また、戦前の大学セツルメントについても前史として先行研究を検討して戦後との比較を行い、戦後の学生セツルメントの特徴を分析する上での手がかりとしたい。

戦後の学生セツルメントについては、時期区分ごとに学生セツルメントの3つの位相から論じる。３つの位相とは、①全国学生セツルメント連合、②地域の広域連合、③単一のセツルメント、である。

全セツ連解散後の学生セツルメントについては、今も活動を続けるセツルメントへのインタビューや発行物を手がかりに、その内容を検討する。

なお、引用にあたっては史資料の記述に準じたが、旧漢字は当用漢字に改めた。

３．時期区分について

戦後の学生セツルメントの展開は、社会の変化および社会福祉動向と不可分であり、それらとの結びつきのなかで検討を行う必要がある。

社会福祉動向の点から戦後の社会福祉史に関する通史的研究を参照すると、例えば吉田（2004）は、1945年から1957年あたりを「戦後社会と社会事業、社会福祉の視点」、1958年から1980年前後までを「高度経済成長、低成長の社会福祉」、1980年代から2004年を『「経済大国」「平成不況」下の社会福祉』とそれぞれ位置づけ、論じている。また、池田（1994）は、1945年から1954年を「戦後における社会福祉の再生」、1955年から1973年を「社会福祉の本格的形成」、1973年から本書執筆の1994年までを「これからの社会福祉」として区分している。学生セツルメントに関係する領域として、社会福祉運動史研究では、例えば真田(2003:59-76)は、1945～1960年前後、1960～1970年代半ば、1970年代後半から現在まで、の3期に時期区分している。

このように、重なり合う部分をもちながら、時期区分は論者によって異なるが、学生セツルメントの展開との関係から、社会福祉の動向については、おもに菊池ほか(2014)の時

期区分を参照することとした。なお、学生セツルメントの展開も考慮に入れ、本研究では以下の5期に区分する。ただし、社会福祉の動向と学生セツルメントの展開を具体的にみると、以下の5期で明確に区切ることはできない。そのため、必要に応じて重なり合う時期やより細かく分ける必要がある時期については本論で言及することとし、大枠として以下の5期を設定する。

①学生セツルメントの再興期 1945 年－1955 年
②学生セツルメントの組織構築期 1956 年－1966 年
③学生セツルメントの転回期 1967 年－1973 年
④学生セツルメントの組織変容期 1974－1989 年
⑤1990年－現在

なお、第5期については、現段階で歴史的評価が難しいため、このように名付けた。

４．用いる史資料

全セツ連、各地域の広域連合、単一のセツルメントそれぞれの動向を把握するにあたり、史資料がまとまって保管されているとの理由から、おもに以下の資料を用いる。ほかに、、OS個人からの提供資料も必要に応じて用いる。

①大阪府立大学所蔵の学生セツルメント関係資料：全国にわたる学生セツルメントの史資料が保管されており、ファイルや単体での保管資料は、推計で1200点、ファイルなどに整理されている個別資料数は、約3000点である。とくに、大阪府学生セツルメント連合(以下、阪セツ連)の大会報告はほぼ網羅されているため、地域の広域連合として、阪セツ連の議論や方針の動向を把握するのに用いる。また、全国学生セツルメント連合大会の基調報告や全国のセツルメントの実践記録のほか、個人のノートなども保管されているため、これらの資料も適宜用いる。暫定版目録集として岡本・山田編(2018)がある。また、大阪府立大学には、東大セツルメント・亀有セツルメント関係資料（山田2015a：23－80）およびOSからの寄贈資料も保管されている。これらの資料も、必要に応じて用いる。

②日本福祉大学所蔵の学生セツルメント関係資料：日本福祉大学のヤジエセツルメントには、愛知県学生セツルメント連合(以下、愛セツ連)の毎年の大会報告などの史資料が保管されている。地域の広域連合を捉える上で、本資料を用いる。また、同大学の井戸田セツルメントには、全セツ連関係資料が整理して保管されている。そのため、全セツ連での議論を捉える上で、本資料を用いる。

③セツルメント診療所保管資料：東京大学セツルメント診療所の流れをくむセツルメント診療所には、戦後初期の東京大学セツルメント診療所の関連資料が保管されている。資料種別としては、個別のノートや実践記録、機関誌や広報誌などが主であるが、戦後初期の個別実践や東京大学を中心としたその後の全国組織化への流れを捉える上で、本資料を

用いる。

④個人保管の資料：学生セツルメントの資料は、大学の統廃合やセツルメントの消失に伴い、散逸し、個人保管となっているものが少なくない。そのため、提供を受けた個人保管資料も用いて論じる。これらの個人保管資料は個人が記録したものよりも所属セツルメントの発行した実践記録や連合の機関紙、大会報告などが多く、個別の地域実践や広域連合および全セツ連における議論の把握などに用いる。

戦後学生セツルメントの資料については、大きく 7 種類に分類できる。それは、①全セツ連大会の基調報告や代表者会議報告など全セツ連関係の報告書・レポート、②各広域連合の大会の基調報告や代表者会議報告など広域連合関係の報告書・レポート、③実践記録、④機関誌（紙）、⑤パート会記録、⑥新聞や書籍、⑦その他、である。この中で、とくに、全国の学生セツルメントの展開については①の基調報告などを、地域の広域連合における議論については②の基調報告などを、各セツルメントの動向と活動内容については③の実践記録を、それぞれ用いて分析を実施する。さらに、④の機関紙や、⑦その他に含まれる個人のノートなどを補足的に用いて検討を加える。

５．用語の定義

本研究では、学生セツルメントについて、先行研究をふまえて検討し、以下のように定義づける。なお、本研究では、戦前の大学生によるセツルメント運動は大学セツルメントと表記して用いることとする。ただし、戦後についても大学セツルメントの名称を用いている文献もあるため、その場合は表記に準じる。

> 学生セツルメント：大学拡張運動・セツルメント運動の系譜をもつ東京帝大セツルメントが解散したのち、戦後の東大セツルメントを端緒として学生が主体となり運営する部活動もしくはサークルとして位置づけられた団体。活動の分野や内容、地域は多岐にわたるが、セツルメントの人格的接触の精神を引き継いだ地域実践とともに、地域や住民の要求に応じた運動が展開された。また、地域や社会の現実に向き合うことで学生の人間形成の場になるという特徴も有していた。それぞれが地域の現実に即した多彩な活動を行いながらも、地域の広域連合や全国の連合といった組織化がなされ相互に関連していたが 1989 年の全国セツルメント連合の解散以降、その数は激減し実践の質も変容している。
>
> 岡本(2018a:101)

学生セツルメントを上記のように定義づけた理由については、第 4 節で詳しく論じる。なお、本研究では、運動性を含む語として「学生セツルメント」を用いるが、明確化する必要がある場合において、「学生セツルメントの実践」や「学生セツルメントの運動」として記述することがある。このほか、本研究で用いる主な用語の定義は以下の通りである。

施設型セツルメント：公立の隣保館や市民館、民間の地域福祉施設等、セツルメントの

理念や精神を引き継ぎ地域福祉事業化した施設や団体を指し学生セツルメントと使い分けて用いる。

セツラー：学生セツルメントの従事者を指す。

オールドセツラー：セツルメントの OB・OG のこと。本研究では OS と表記する。

セツラーネーム：セツラーにつけられた愛称。戦後再建時の学生セツルメントは実名での活動であったが、1960 年代半ばあたりからセツラーネームを用いた活動となる。本研究における実名とセツラーネームの使い分けは資料に準じる。

６．地域の広域連合について

前述の 3 つの位相のうちの１つである地域の広域連合は、時代によっても異なるが、北海道から九州までおおむね６から７ほど存在した。そのなかで、本研究においては、おもに、関東学生セツルメント連合、関西学生セツルメント連合とその後の大阪府学生セツルメント連合、愛知県学生セツルメント連合を取り上げることとする。

関東学生セツルメント連合は、戦後、学生セツルメントを再建し、全国組織化の中心になる点で重要であり、とくに第 1 期から第 2 期における議論を取り上げる。関西学生セツルメント連合は、1962 年に発足(※1966 年以降、大阪府学生セツルメント連合に改称)しており、比較的早い時期にうまれた広域連合である。定期的な大会や交流集会では、地域の状況や所属している単一セツルメントの実践状況をふまえた活発な議論と展開がみられた。また、時期によっては思想的にも異なる大学やセツラーが中心を担っていた。他方、愛知県学生セツルメント連合は、1968 年に当時の学生運動の盛り上がりを背景として発足した。日本福祉大学のセツルメントが中心となって運営され、全セツ連や学生運動の動向および思想の影響が強くみられる。以上のことから、上記 3 つの広域連合はそれぞれ、学生セツルメントの特徴を表す代表的な連合と考えられるため、これらを中心に取り上げる。そして、各広域連合の特色と同時に、単一のセツルメントや全国学生セツルメント連合との関係性についても論じたい。

７．倫理的配慮

研究にあたっては、「日本福祉大学大学院倫理ガイドライン」および「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規定」（2018 年 5 月施行）を遵守した。

なお、本研究で用いる史資料には、現代の価値観からみると不適切あるいは差別的と思われる表現も含まれるが，時代背景や当時の価値観を示す表現として資料に準じて使用する。

第 3 節　研究の枠組みと構成

第 2 節では、本研究の視点と研究方法について論じた。本研究の視点と課題は上述のとおりであるが、本節ではその内容を説明して研究の枠組みと構成を示す。

まず、第 2 節をふまえて本研究の構成枠組みを便宜的に図示すると、図 0-1 のようにな

る。図で示した第 1 期から第 5 期がそれぞれ第 2 章から第 6 章に対応する。各章を通して前提となる、①時代背景や社会の変化、社会福祉の動向について各章の第 1 節で述べる。その上で、上述した研究課題について検討し、4 つの視点を用いて分析する。また、各章においては研究課題で示したとおり、学生セツルメントの実践内容と果たした役割について、具体的な実践例を交えて論じる。

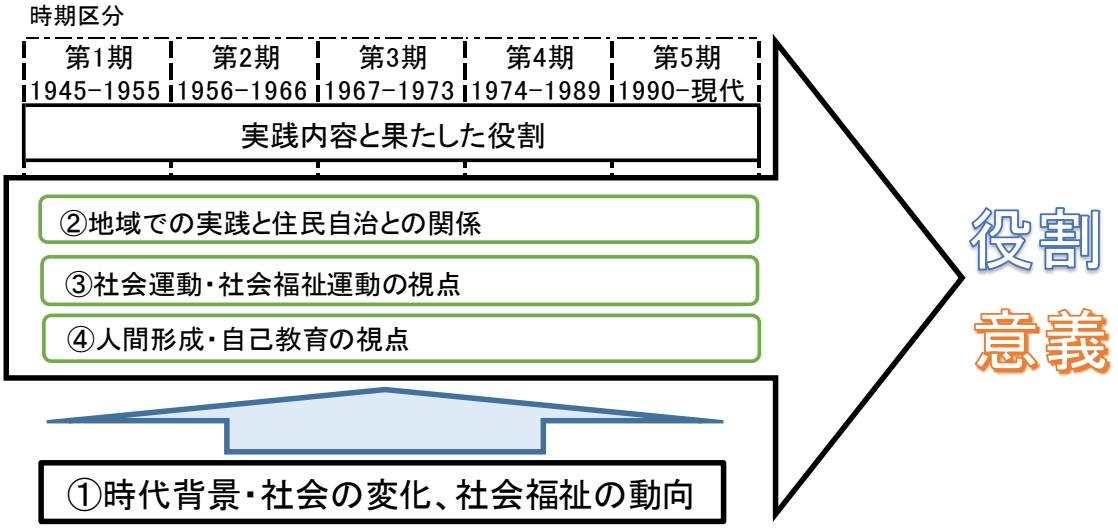

図 0－1　本研究の枠組み

１．研究の視点

（１）時代背景や社会の変化、社会福祉の動向との関係

セツルメントについては、これまで地域福祉や社会福祉史の視点から多くの研究蓄積がある。しかしそれらは、セツルメントの理念を引き継いだ地域福祉施設型のセツルメントに関する研究が大半であり、戦後の学生セツルメントに関する研究は数少ない。

高島進は、「学生セツルメントは常に社会福祉という枠組みで活動しているのではなく、またそれに限られるものでもないが、社会福祉がとりくんでいると同じ問題にとりくみ発展しているのである」(高島 1968:33)と述べた。学生セツルメントは社会福祉がとりくんでいる問題と同じ問題にとりくみ発展している、という指摘である。では、「社会福祉がとりくんでいる問題」とは何であるか。それは、例えば真田是(2003:49)の定義に基づくならば、「社会問題としての生活問題」といえるだろう。

学生セツルメントは、地域や地域住民がかかえる生活問題および生活課題の解決に地域や地域住民とともに取り組んできた歴史がある。しかし、そうした生活問題や生活課題とは、個人のものではなく、社会のなかでうみだされるものである。民主主義の成熟度や社会福祉の法整備との関係、地域のあり方の変化などによって、たえずその生活課題は変化する。また、真田是は、社会福祉運動には社会問題としての生活問題を顕在化させる機能があると述べたが、運動の成熟度と生活問題もまた大きく関係するといえる。

これらをふまえれば、学生セツルメントが各時期において何を課題としてどのような実

践や運動に取り組み、それはどのような役割を担ったのか、を検討する上で、政治や経済などの社会状況、社会福祉の動向や制度政策の動向との関連は非常に重要であると考える。

以上から、本研究では、時代背景や社会状況、社会福祉の動向と学生セツルメントの関係について、各時期の特徴を捉え、学生セツルメントが果たした意義や役割を見出す手がかりとしたい。

分析にあたっては、研究課題の検討と社会福祉史の先行研究をふまえ、社会福祉の制度・政策の変遷、実践や運動の動向と学生セツルメントの展開との関係性に着目する。また、社会福祉の動向は、社会の変化と不可分であることから、社会状況や社会背景についても整理をしながら、社会福祉の動向と学生セツルメントの展開との関係の把握を試みる。なお、この視点は、本研究および次に述べる他の視点の前提となるものである。

（２）地域での多様な実践と住民自治・主体性との関係

1950 年の東京大学セツルメント再建を端緒として全国に広がった戦後の学生セツルメントは、地域の実態調査をふまえ、住民らと共に地域の状況に応じた多様な活動を展開してきた。また、戦前とは異なり大学や企業の援助がない中、セツラーが中心となって地域の要求実現を目指し地域住民とともに実践を続けてきた。これらのことから、各地で取り組まれた地域実践が地域の要求実現や住民の自治実現、主体形成にどのような影響を与えたのか、という点について考察することは、地域において学生セツルメントが果した意義・役割を明らかにするうえで重要だと考える。

同時に、地域の広域連合と各セツルメントの関係性、地域の広域連合と全セツ連の関係性およびその変化についても検討する。これにより、地域福祉や地域の自治・主体形成の視点から地域の広域連合が担った役割を示すとともに学生セツルメント全体に共通して指摘できる点と広域連合の特性として評価できる点が整理できると考える。

分析にあたっては、地域福祉学や社会教育学の先行研究も用いて検討を行い、地域の自治実現や住民の主体形成という点から、学生セツルメントが果たした役割と限界について明らかにしたい。

（３）社会運動・社会福祉運動論の視点

先述のとおり、地域や住民の要求実現を目指して住民とともに取り組んできた実践や、セツルメントの背景にある大学拡張運動や社会改良運動をふまえれば、学生セツルメントの特徴を捉える上でも運動性の観点からの検討は重要といえる。たとえば北川(1958:13)は、「学生セッツルメントは他のセッツルメント活動とことなって、単なる社会事業、慈善事業ではなくて、その枠にとどまるところのない社会運動的側面を有している」と述べており、学生セツルメントが有する社会運動的側面の重要性を示唆している。学生セツルメントは、学生運動や平和運動等との関わりも深く、その運動は多岐に渡る。しかし、学生セツルメントが地域と地域住民、そしてその生活に密着した実践を長年にわたり行ってきたことをふまえれば、そうした実践と密接に結びついた社会福祉運動としても捉えられるの

ではないだろうか。裏返せば、社会福祉運動の視点から学生セツルメントの展開をみていくことで、地域における実践と運動の関係性を検討することが可能となり、学生セツルメントの変遷とその特性が明確になると考えられる。

これらをふまえ、分析にあたっては、社会運動や社会福祉運動に関する先行研究も用いて検討を行い、社会運動および社会福祉運動の視点から学生セツルメントの特性や役割について論じたい。

（4）人間形成・自己教育の視点

西内(1971)は学生セツルメントが「社会的実験室」の役割をもち「人生の一大礎石」ともいうべき人間形成の側面を有すると指摘した[4)]。また、セツルメント創成期の大学拡張運動や人格的接触の精神をふまえれば、セツラーの人間形成や自己教育の側面は学生セツルメントにとっても重要なものであったと推察される。これらのことから、学生セツルメントのもつ「人間形成」や「学び」の機能の特徴、地域実践を通じた当時のセツラーの「学び」の内実、将来への影響について検討することは、学生セツルメントがもつ役割を明らかにする上で重要なことだと考える。

また、先述のとおり、戦後の学生セツルメントは、与えられた体験や活動をするのではなく、自身らで模索し、地域住民とともに必要に応じて新たに実践を創造していった。1960年代以降、とくにこの方向性は顕著にあらわれ、全セツ連においても「人間形成の場」「自己教育運動」としての位置づけが明確となる。

人間形成・自己教育の視点から学生セツルメントを検討する際、大きく 2 つの論点が挙げられる。第一に、本来的に内包していたはずの人間形成・自己教育の側面が 1960 年代以降に改めて方針として明確化されるのはなぜか、という点である。第二に、当時の学生セツラーにとって、セツルメント運動の経験は、その後の人生にとってどのような影響を与えたのか、という点である。この 2 つの点を中心に本論で分析する。分析にあたっては、各地の OS への聞き取りや OS による出版物、社会教育学、教育福祉論における先行研究なども用いて論じる。

なお、自己教育の定義についてはさまざまな先行研究があるが本研究では、自己教育の思想史研究を概観した上で位置づけた山田（1987:179）による以下の定義を用いる。

> 自己教育の思想史の考察から得た自己教育とは、学習する主体が、自己の生活世界と社会システムの狭間で、みずからの生き方やアイデンティティを決定するために教育を進める、ダイナミックな運動であった。そこでは、教育し、教育されあう他者の関係が、一方向的なものではなく、相互主体的なものへと再構成され、その中で、バラバラの孤立した個人学習ではない、自己の学習を他者との関係を通して確認し、発展させていくことが展望されていた。このような意味において、自己教育とは、他者との相互主体的関係における学習者の主体的選択・実践の運動であり、それは、第三者が客観的と見せかけて特定の意味を付与することの対極に位置するものなのである。

山田(1987:179)

上記の定義に基づいて自己教育を捉えたとき、学生セツルメントは人間形成や自己教育の点において方針の中にどのように位置づけられ、また、どのような役割を果たしたといえるのだろうか。展開過程を通して検討したい。

以上、研究の視点の設定理由とその内容について述べた。なお、これらの視点については、第１章の先行研究概観でも検討を行いたい。次に、研究の課題について論じる。

2. 研究の課題

（１）実践内容と果たした役割の検討

研究課題の１点目は、「各時期のさまざまな実践内容について検討し、果たした役割を明らかにする」ことである。学生セツルメントは、地域において住民や地域の要求に応じた実践を展開し、必要に応じて地域や住民とともに新たな実践が創り出された。学生セツルメントは地域実践を軸にしており、地域の現実を目の当たりにすることで社会認識を深め、地域改善や社会変革を志向する運動性を有した団体であった。つまり、学生セツルメントの実践は、運動へとつながる性質も同時に含んでいたのである。そうした歴史をふまえると、どのような実践が行われたのか、そしてそれはどのような役割を果たしたのか、その背景にある社会状況や地域の状況、思想や考え方は何か、を丁寧に検討することが重要である。

個々のセツルメントが取り組んできた地域実践は、同じ時期でも地域によって、あるいはそれぞれのセツルメントによって異なるものだったのだろうか。それとも、共通するものはあったのだろうか。時代によって取り組まれた実践の内容に変化はあるのだろうか。変化があるとすれば、それはなぜなのだろうか。本論では、実践に取り組む主体としての大学生の変化、実践の場所、実践内容、対象とする課題や人の変化などに着目し、実践記録をはじめとした資料に基づき具体的に実践内容を検討していく。

実践内容の検討にあたっては、当時のセツラーが残した実践記録をもとに論じる。だが、個々の実践や実践記録によって学生セツルメント一般に通じる実践やその方法、思想、理論などが明らかになるのか、という疑問もあるだろう。この点に関して、長年保育史研究に携わり、戦後初期のセツラーでもある宍戸(2011)は、「実践記録と歴史的研究」と題した論文で、次のように述べる。

> 実践記録は保育者たち個人個人の主体的・具体的な実践の記録であり、ただちに一般化された理論とは言えないが、『一般に通じる方法を発見することができる』という意味で理論の上でも多くの事を学ぶことができるものと考えている。
>
> どの実践記録も、保育者はどういう子どもに育てたいのかという子ども像をもち、そのためにどういう実践をしたらいいのか、実践の目標と方法とを工夫し、計画をたてて実践した結果を反省し、よりよい保育実践をめざそうとしている。そこには、仮説を立て、実

験し、検証する科学者と同じようなまなざしと真剣さがあるといってよいだろう。

（宍戸 2011:17-18）

宍戸の論は、保育の実践記録について述べているものであるが、学生セツルメントの実践記録にも通じるものがある。すなわち、多様な実践記録を読み解く中で、共通する理論や思想、社会へのまなざしを見出すことができるのではないか、という認識である。また、学生セツルメントのなかには、子供会活動に取り組むセツルメントも多く、その実践記録や討論資料には「どういう子どもに育てたいのかという子ども像」が明確に示されている。これは、子どもに限らず、各セツルメントの実践記録では、対象に対して、このようにあってほしいという願いが書かれている。そのうえで、実践の目標や方法を定め、実践の結果とその検証が行われている点において、「仮説を立て、実験し、検証する科学者と同じようなまなざしと真剣さ」という宍戸の論と重なる。また、同じく戦後初期のセツラーである坂元(1980:37)は、『教育実践記録論』において、実践記録とは、「ある実践の部分をある問題意識によって選びとり、それを典型化して表現する努力の連続の一こまである」と述べ、実践者の問題意識をもとにして実践記録が書かれる側面を指摘している。

学生セツルメントの場合、1950 年から 1960 年代にかけては地域のかかえる生活課題の解決に重点が置かれ、1960 年代半ば以降には実践に携わるセツラー自身の学びに重点が置かれるようになり、その問題意識の重点が変化していったと考える。坂元の論をふまえれば、この学生セツルメントの問題意識の変化を捉えるうえでも、実践記録の検討はその一助となるのではないだろうか。

このように、実践記録を読み解くことで、実践内容や展開にとどまらず、学生セツルメントにおいて大切にされてきた理論や思想、そして学生セツラーの地域や社会に対するまなざしについても検討し、その果たした役割を明らかにしたいと考える。

これまで述べてきたとおり、地域での実践を丁寧に検討することは、学生セツルメントの意義や役割を明らかにする上で非常に重要である。

しかしながら、一次資料に基づく学生セツルメントの実践に関する先行研究は単一のセツルメントに限って言及したものか回顧録や小説といった形式が多く、全国にわたって広がったさまざまな活動を一次資料から検討した研究は見出し難い。そのため、本研究においては各時期区分に基づき、一次資料から多様な地域実践を取り上げて検討し、活動の具体的な内容とその意義を明らかにしたい。なお、どのような実践を取り上げるのか、という視点については、第 4 項で述べる。

（2）地域実践への着目と地域の広域連合・全セツ連との関係性

研究課題の 2 点目は、「地域実践への着目と地域連合間の比較を通して、地域の広域連合と単一セツル[5]、全国学生セツルメント連合(以下、全セツ連)の各関係性を分析する」である。

前項では、学生セツルメントの意義や役割を明らかにする上で、その実践内容を丹念に

検討する必要について述べた。だが一方で、各地で展開された多様な地域実践を網羅的に論じるだけでは、学生セツルメントの特徴や意義を明らかにする上で不十分である。また、どのような視点からその実践内容を取り上げるかという点においても曖昧である。それらをふまえると、単一のセツルメントの実践としてだけでなく、学生セツルメントの組織構造との関係性から捉えることが求められると考える。なぜならば、戦後の学生セツルメントは全国的に組織化していく点に、その特徴の１つがあるためである。

詳細な経緯は後述するが、1955 年 11 月、東京教育大学で全国学生セツルメント結成大会が行われ[6)]、全国学生セツルメント連合(以下、全セツ連)が結成、その後の定期的な全国大会の開催につながる。その後、北海道や関東、愛知など、地域ごとの連合体が結成され、全セツ連・各地域の広域連合・単一のセツルメントという組織構造がうまれる。各地域の広域連合でも定期的に大会が開かれ、それぞれの実践の報告や方針の確認が行われた。戦後の学生セツルメントは、このような組織構造によって成り立っていたのである。

では、そうした組織構造のなかで、単一のセツルメントと地域の広域連合、そして全セツ連はどういった影響関係にあったのだろうか。地域実践を各単一のセツルメントが展開する中で、地域の広域連合での大会や集会は実践内容や方針を深める場として機能し、組織をボトムアップしていく構造にあったのか、地域の広域連合のもつ特色が各単一セツルメントの実践や方向性に影響を与えたのか、それとも相互的な影響関係にあったのだろうか。また、全セツ連の方針は各地域の広域連合にどのような影響を与えたのか、その影響は広域連合によって差があるものなのだろうか。全セツ連の方針と単一のセツルメントにおける実践の関係はどういったものだったのか。これについて、学生セツルメントの組織体系と関係についてのイメージを示したものが図 0-2 である。矢印の関係性が実際にはどのようなものであったか、について本論で検討したい。

学生セツルメントは、各地で散発的に起きた運動ではなく、組織構造のもとで集合体として展開し発展してきた。そして、その組織構造があったからこそ長年にわたり継続してきた歴史がある。そのため、全セツ連、地域の広域連合、単一のセツルメントという三つの位相の関係性を検討することによって、地域実践を点としてではなく線として捉える視点につながる。ある実践は、そのセツルメントに特有のものなのか、その時期における全セツ連あるいは地域の広域連合の方針が影響しているのか、といった視点である。当然、組織の関係性だけを要素として述べることはできないが、それぞれの時期ごとに組織間のダイナミズムを検討することで、学生セツルメントを立体的に捉えることにもつながると考える。以上から、全セツ連とそれぞれの広域連合の特徴を検討することで、学生セツルメントに共通するといえるものと独自の動きといえるものを明らかにしたい。

先行研究においては、地域の広域連合間の比較はなされておらず、全セツ連の方針や展開に基づくものに限られ、地域の広域連合について十分な検討が行われてきたとは言い難い。しかし、先にも述べた通り、全国的な組織として展開していた学生セツルメントを捉えるうえでは、全セツ連の方針や展開のみでも、単一のセツルメントの展開のみでも十分とはいえない。その意味でも、地域実践への着目と地域連合間の比較という視点は重要で

あると考え、研究課題に設定した。

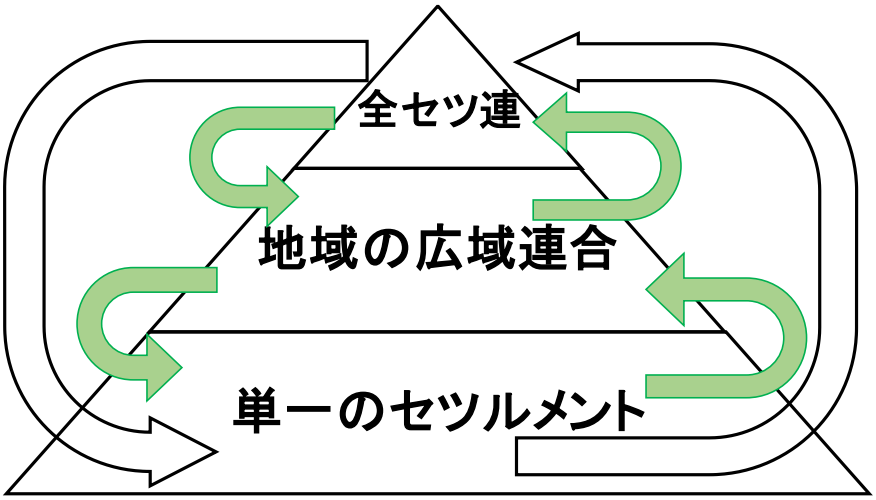

図 0-2　学生セツルメントの組織体系と関係のイメージ

（３）組織構造・思想の変遷―時期ごとの固有性―

研究課題の 3 点目は、「組織構造や思想について、戦後の各時期における変遷を分析し、連続性と時期ごとの固有性を明らかにする」である。これは、研究課題の 2 点目と４点目にも重なる部分がある。

次節で詳述するが、本研究では戦後から現在までを 5 期に区分し、各時期における全セツ連・地域の広域連合・単一のセツルメントの動向や実践について論じる。先にも述べたとおり、学生セツルメントは三位相からなる組織構造を有しており、組織体制が確立していたことが長年にわたって継続してきた要因のひとつといえる。しかし一方で、1989 年には全セツ連は解散し、2019 年現在において活動を継続しているセツルメントは 10 に満たない状況である。これをふまえれば、全セツ連の解散という組織体制の解体は、学生セツルメントを衰退させていく１つの要因であったとみることもできる。だが、この組織体制の解体は、どのような流れのなかで生じたものなのだろうか。その手掛かりとして、時期ごとに組織構造の変遷を分析したい。

また、ここでいう組織構造とは、組織体制や財政状況のみを指すのではない。全セツ連や地域の広域連合は毎年大会を開き、方針の提起や確認がなされていた。つまり、学生セツルメントが組織化された集団であることの意味は、思想や理念の継承の点にもあったといえる。では、そうした方針や思想は全セツ連・地域の広域連合・単一のセツルメントそれぞれにおいてどのように受け止められたのだろうか。この点について、これまでの先行研究では、全セツ連の方針を扱ったもののほか、氷川下セツルメント史編纂委員会編(2014)や寒川セツルメント史出版プロジェクト編(2018)において単一のセツルメントと全セツ連との関係について触れられている程度である。本研究では、資料の限界はあるが、全セツ連の方針と各広域連合、単一セツルメントにおける受けとめや影響についても検討したい。

同時に、学生セツルメントの有していた思想についても時期ごとの展開を通して変化していったものと変わらないものを検討する。そしてそれは、学生セツルメントとはなにか、という問いに接近する一つの方法になると考える。詳細な学生セツルメントの思想については、先行研究の概観および本論で述べる。

以上から、組織構造や思想について時期ごとの分析を研究課題に設定した。

（4）社会構造の変化との関連

研究課題の 4 点目は、「社会構造の変化との関連を検討する」ことである。先にも述べたとおり、学生セツルメントは、それぞれの地域において地域や住民らの要求に応じた実践を展開してきた。そしてそれらの実践は、地域の現実から社会のありかたを捉えるという視点を内包していた。

地域や住民の要求に応じた実践を行ううえで、その地域のありかたや社会の動向との関係は切り離せないものである。さらに、地域実践を通して社会に対して制度や政策の不備を訴えていくソーシャル・アクションの性質を有していたこともふまえれば、各時期における社会や政治・経済、社会福祉、大学をめぐる状況といった社会の変化と学生セツルメントの動向が深く関わってくることが理解される。

また、学生セツルメントは、社会福祉の法制度が不十分な時代において、学生による自発的・主体的な営みの中で新たな資源の創出や制度・政策の不備を補う役割も担っていた。一方で、1987 年に成立した社会福祉士及び介護福祉士法の制定をはじめ、社会福祉が専門分化するなかで、学生セツルメントはその役割を消失していくとともに社会の変化に応じた新たな役割を見出すことができなかった側面がある[7)]。

これは一側面であるが、戦後から現在までを通史的に検討するなかで、各時期において学生セツルメントは社会構造の変化とどのように関連し、変化していったといえるのだろうか。社会や政治・経済、人びとの生活や社会福祉の動向、大学のあり方や学生生活の状況といった社会動向と戦後の学生セツルメントの実践や運動との関連について検討する。

３．本研究の構成

（1）各章の構成と内容

本論文は、序章、終章を含めて全 8 章で構成される。

序章では、本研究の目的、研究の視点、研究方法、用語の定義、先行研究の概観、論文構成について述べる。

第 1 章では、セツルメントの歴史の概略を述べた上で、本章第 2 節に示した学生セツルメントの定義について、先行研究をふまえて論じたい。その上で、学生セツルメントに関する先行研究を概観し、その到達点と課題について論じ、本研究の取り組む課題を示す。また、戦前の大学セツルメントの思想と展開についても先行研究を概観し、大学セツルメントとの共通点や相違点について、成立の経緯や組織体制、思想などの面から検討する。

第 2 章から第 5 章は、各時期区分について、第 1 節で日本の社会や社会福祉の動向、第 2

節で全国の学生セツルメントの動向および全セツ連における議論と展開、第 3 節で地域の広域連合における議論と展開、第 4 節で単一のセツルメントにおける議論や実践、セツラーの思いなどについて共通して論じる。なお、単一のセツルメントについては、本研究で取り上げる地域の広域連合に属するセツルメントを中心としつつその時期において特徴的と考えられる実践についても論じたい。また同時に、OS の語りをもとに、どのような意識で学生セツルメントに参加し、そこから何を学んだのか、という人間形成・自己教育の視点からも共通して検討を行う。

具体的な内容について簡潔に述べると、第 2 章では、学生セツルメントの再興期として 1945 年から 1955 年を取り上げ、戦後キティ台風を契機として東大セツルメントが再建し全国セツルメント連合が結成されるに至る経緯と戦後の混乱状況の中で先駆的・補完的に取り組まれた実践について論じる。

第 3 章では、学生セツルメントの組織構築期として 1956 年から 1966 年を取り上げ、学生セツルメントが活発に展開した経緯とその背景について述べる。本期は、全セツ連から労働運動や平和運動に片寄った方針提起がなされ、その後の方針転換へと至る時期でもある。そうした方針提起や転換の経緯と背景とともに本期における地域の広域連合の議論や各セツルメントでの実践を検討することによって、三者の関係性の分析を深める。

第 4 章では、学生セツルメントの転回期として、1967 年から 1973 年を取り上げる。本期は、前期の影響を受け、学生の学びの場・自己教育運動としての位置づけが明確に打ち出される時期である。同時に、学生運動が 1968 年の東大安田講堂事件を頂点として陰りをみせはじめる時期でもある。そうしたなかで、学生セツルメントは、社会に何か貢献をしたいという学生のエネルギーの受け皿として、1970 年代にさらに拡大した側面がある。一方で、ボランティアの広がりや大学進学率の上昇、サークルの増加といった背景のなか、学生セツルメント独自のあり方を求められる時期でもあるといえる。本章では、このような社会動向との関連の中で、全セツ連の組織構造や方針の変化、地域の広域連合の動向、そして単一のセツルメントにおける多様な取り組みについて論じる。

第 5 章では、学生セツルメントの組織変容期として、1974 年から 1989 年を取り上げる。本期は、社会福祉の制度化がすすみ、大学教育のあり方の変化などがみられる時期である。学生セツルメントでは、前期の流れを汲み、全国的な広がりがみられたものの、1980 年代以降、執行部のセツラーの負担の大きさや運動に取り組む必要性に疑問を抱くセツラーの増加などを背景として、1989 年に全セツ連が解散する。このような動向のなかでの地域の広域連合における議論や単一のセツルメントの実践を検討し、三者の関係性の変化や実践において果たした役割と限界などについて論じる。

第 6 章では、1990 年から現在に至る学生セツルメントの展開について、資料および現在も活動を続けているセツルメントへの調査などを用いて検討したい。そして、学生セツルメントが縮小しているなか、セツラーにはどのような思索があり、どのような取り組みがみられるか、について論じ、歴史から受け継がれているものや今後への展望について考察する。なお、第 6 章で詳述するが、本期は、第 2 章から第 5 章と同様に三位相から論じる

ことが困難となる。そのため、第 6 章は、1990 年以降の展開と今日の実践に焦点をあてて論じることで、1990 年以降の展開ならびに現在も継続しているセツルメントについて検討を試みたい。

終章では、学生セツルメントの展開について整理した上で、それぞれの時期区分について先述の 4 つの視点から総括し、学生セツルメントの歴史的意義と役割、学生セツルメントの課題と未来への展望、本研究の課題について論じる。

本研究の構成は、本章の章末に論文構成図(図 0－3)を付し、全体の構成を示す。なお、全国と地域の広域連合、単一のセツルメントの関係は時期により異なるため、各位相をつなぐ線の種類で示した。具体的な内容は各章で詳述する。

（2）学生セツルメントの展開をどう捉えるか

これまで述べてきたように、本研究では、1945 年から現在までの学生セツルメントについて、全国・地域の広域連合・単一のセツルメントという 3 つの位相と 4 つの視点から論じながら、研究課題について検討する。そのことによって、学生セツルメントの担った役割や意義を明らかにすることを目的とする。

全国・地域の広域連合・単一のセツルメントという 3 つの位相のそれぞれについて展開過程を検討する中で、本研究ではとくに学生セツルメントの実践に着目して論をすすめる。全国や地域の広域連合の方針は、実践にどのような影響を与えたのか、またその影響はどの時期までみられ、どのように変化していったのだろうか。さらに、地域における学生セツルメントの実践は、地域の広域連合や全国の方針にどのような影響を与えていたのか。展開過程を論じる中で検討したい。また同時に、4 つの視点とのかかわりにおいても、実践の展開に着目しつつ検討を深めたい。具体的には、①時代背景や社会の変化、社会福祉の動向は実践にどのような影響を与えていたか、②地域における実践は、地域の自治との関連で、どのような役割を果たしていたといえるのか、③また、学生セツルメントの実践は社会運動・社会福祉運動の性格をどの時期までどのようにもっていたのか、④それらの実践を通してセツラーの人間形成や自己教育にはどのような関わりがあったか、という問いが挙げられる。これらについて厳密かつ明確に示すことが困難な部分もあるが、展開過程を論じる中で、実践に着目してこれらの問いについて検討したい。

また、学生セツルメントの展開を捉える上で、高島（1958:32）による論は 1 つの手がかりになると考える。高島は、「セツルメント法学」[8)]の論者にしたがって学生セツルメントの地域組織化の形態を三段階に概念構成した。以下に、その概念構成を示す。

Ⅰ. セツルから地元への（一方的な)、呼びかけの段階（活動の主体はセツル）

Ⅱ. セツルと地元との協働（相互的かつ共同の呼びかけ）の段階（活動主体は地元とセツル）

Ⅲ. 地元民が自らの力で自分達の生活をまもるために活動する段階（活動主体は地元）

そして、「セツルメントは第三段階においては消去され、『セツルの本質的に媒介的な

性格を示している』」とされた。

高島の論は、今日の社会福祉の動向をふまえれば、捉え直すべき点が多数あり、限界がある。一方で、第 1 章でも概観するとおり学生セツルメントの通史的研究は現代においてもほとんどなく、長年にわたって学生セツルメントの展開過程をみてきた高島(1958)による展開過程の整理は、今日においても有効な部分があると考える。そのため、この概念構成については、具体的な展開過程をみていく上での手がかりの 1 つとし、終章において、本研究で得られた知見をもとに改めてこの概念構成について検討したい。

次に、これまでの論をふまえ、各時期で明らかにすべき課題と焦点を示したい。

（3）各時期における課題と焦点

本研究の枠組みについてはすでに述べたとおりであるが、各時期において具体的に検討すべき課題や論の焦点を先に示し、本論を進めることとする。まず、組織再興期(第 2 章)にあたる 1945 年から 1955 年においては、先にもふれたとおり、社会資源や制度政策の不十分さを補いながら必要に応じて新たな実践を創りだす役割と運動性があったといえる。この時期、なぜ学生セツルメントは再建に至ったのだろうか。また、再建時における思想や理念はどのようなものであり、どういった課題に取り組んでいたのだろうか。学生セツルメントが再建に至る経緯とともに、どのような思想、理念を掲げていたのか、そして本期における学生セツルメントの定義づけについて検討したい。本期における学生セツルメントの思想や理念、その定義づけを明らかにすることは、のちの展開における学生セツルメントの位置づけや変化を捉える上でも重要である。また、戦後最初に再建した東京大学セツルメントは、その後の学生セツルメントの展開にとってどのような役割を果たしたのだろうか。東京大学セツルメントにおける議論と果たした役割や全セツ連結成への影響、前身である東京帝国大学学生救護団の思想や実践との連続性についても検討したい。実践面では、「社会資源や制度政策の不十分さを補いながら必要に応じて新たな実践を創りだす役割と運動性」がどのような点にみられるのか、具体的な実践を通して明らかにしたい。

組織構築期(第 3 章)にあたる 1955 年から 1966 年については、大きく 1960 年前後で大きく 2 の時期つに分けることができると考える。前半は、労働運動や平和運動の色彩が強い方針が出された時期であり、後半は、学生の学びの場としての位置づけへと転換する時期である。この点に本期の大きな特徴があると思われる。しかし、1950 年代後半から 1960 年前後にかけて、運動性の強い方針が出され、その後は学びの場としての位置づけへと方針転換することとなったのは、なぜなのだろうか。それは、どのような社会状況との関係の中で提起されてきたものであり、具体的には各セツルやセツラーにどのように受けとめられたのだろうか。これは、本期における重要な焦点の 1 つであると考える。そのため、具体的な議論および当時のセツラーの語りに基づきながら、これらについて検討したい。その上で、全国でセツルメントが広がり、関西でも連合組織が結成される本期において、連合発足に至る経緯や全セツ連との関係についても検討を加えたい。

組織転回期(第 4 章)にあたる 1967 年から 1973 年は、人間形成や自己教育運動など、セツラーの学びの場としての位置づけがより具体化し、明確になる時期である。そうした中で、各地で学生セツルメントの地域連合の動きが活発になる点にも、本期の特徴がある。本期における議論の焦点は大きく 3 点あると考える。1 点目は、人間形成や自己教育の場としての位置づけが強まる背景にはどのようなものがあったのだろうか、という点である。人間形成や自己教育の場としての役割は、本期に入ってうまれたものではなく、実際にはその発足当初より地域での調査や実践を通して学ぶ側面を有していたはずである。にもかかわらず、なぜ本期においてそれらの位置づけが強調されるに至ったのだろうか。これは、学生セツルメントの変化を捉える上で重要な点だと考える。2 点目は、地域連合結成の動きが活発化する中で、全セツ連と各地域の広域連合はどのような関係にあり、また各地域の広域連合間にはどのような関係性みられるのか、という点である。3 点目は、全国の方針や広域連合の動きの中で、各地域における実践にはどのような変化や特徴がみられるか、という点である。さらに、全国の方針や広域連合における議論と単一のセツルメントにおける実践との関係についても検討したい。第 4 章では、これら 3 点を中心に明らかにしたい。

組織変容期(第 5 章)にあたる 1974 年から 1989 年は、それまで蓄積してきた課題が顕在化し、1989 年に全セツ連が解散を迎えるという大きな節目の時期にあたる。全セツ連という全国組織が解散を迎える本期、組織としてもゆるやかに衰退していくのではないか、と考えるのが一般的ではないだろうか。しかし実際には、全セツ連解散に至る直前の 1980 年代まで全セツ連は量的には拡大していたのである。こうした現象は、社会状況や大学および大学生をめぐる動向との関係の中で、どのように捉えることができるのだろう。そして、本期において明らかにすべきもっとも重要な課題は、なぜ全セツ連が解散したのか、という点である。また、全セツ連の解散は、セツルメントの役割や意義との関係から、どのように捉えることができるのだろうか。一定役割を終えたとみるべきか、それとも別のかたちへの変化と捉えるべきなのだろうか。当時の議論や全国、地域連合、単一のセツルメントそれぞれの動向をふまえて検討したい。

1990 年－現在の時期区分における課題は、全セツ連解散後、学生セツルメントが具体的にどのように変化したのかを明らかにすることである。この点については、資料的限界はあるものの、量的変化および質的変化の両面から検討を試みる。また、今日においても継続しているセツルメントは、具体的にどのような実践を行っているのだろうか。そして、それらはどのように位置づけることができるのだろうか。第 6 章では、これらの点について、資料および現在も活動を続けるセツルメントへの調査などをふまえて論じたい。

以上、時期区分に基づき、検討すべき課題と焦点について述べた。これらの点について検討することを通し、学生セツルメントの変化を捉えるとともに、その歴史において果たした意義と役割を明らかにしたいと考える。

次章では、学生セツルメントに関する先行研究の到達点と課題について論じ、本研究の位置づけを示したい。

注

1) 久保・副田(2005)および根津(2014:213)参照

2) 高島(1958)、岡村(1968)、柴田(1971)、ほか参照

3) セツルメントの OB・OG の意

4) この他にも同時期の学生セツルメントに関する論として、例えば北川 (1958:13) による、学生セツルメントによって「培養される精神は、批判的魂であり、現実に対する行動性である」との指摘がある。

5) セツルメントの略称。以下、同様。

6) 約 26 団体 150 名が参加。

7) 岡本周佳(2016a)参照

8) 今浦問題対策委員会・セツル法学共同編集(1957:28)「鳥羽学校問題報告」(「セツルメント法学別冊」). 本資料については、その所蔵先が判明せず、高島(1958)より引用・記載した。

図0－3　論文構成図

テーマ:戦後学生セツルメントの展開に関する研究

＜序章＞　研究の概要（研究の背景と目的、視点、方法、用語の定義、研究の枠組みと構成）

〇研究の目的：戦後から現代に至る学生セツルメントの歴史を分析することで、学生セツルメントの独自性や担ってきた役割、意義を明らかにする。

〇用語の定義

学生セツルメント：大学拡張運動・セツルメント運動の系譜をもつ東京帝大セツルメントが解散したのち、戦後の東大セツルメントを端緒として学生が主体となり運営する部活動もしくはサークルとして位置づけられた団体。活動の分野や内容、地域は多岐にわたるが、セツルメントの人格的接触の精神を引き継いだ地域実践とともに、地域や住民の要求に応じた運動が展開された。また、地域や社会の現実に向き合うことで学生の人間形成の場になるという特徴も有していた。それぞれが地域の現実に即した多彩な活動を行いながらも、地域の広域連合や全国の連合といった組織化がなされ相互に関連していたが1989年の全国セツルメント連合の解散以降、その数は激減し実践の質も変容している。（岡本2018a）

研究の背景

①社会福祉を取り巻く状況
・地域の孤立化・貧困などの社会問題
・総合的、包括的な社会福祉のあり方を目指す方向性
②学生セツルメントの果たしてきた役割
③学生セツルメントの膨大な一次資料が散逸

先行研究から得た研究の知見と課題

①施設型セツルメントの思想・歴史の研究は多く地域福祉の点からの評価があ
②学生セツルメントは、セツルメントの源流であるにも関わらず、研究蓄積は乏し
③近年、学生セツルメントの研究は増えつつあるが、史資料に基づく具体的活動展開や社会福祉の観点からの意義については明らかにされていない。

研究方法

①全国組織、②複数の広域連合、③複数の単一セツルの、時期区分ごとの展開を一次資料に基づき論じるほか、インタビューを用いて補足する。

研究課題

①各時期のさまざまな実践内容について検討し果たした役割を明らかにする。

②地域実践への着目と地域連合間の比較を通して、地域の広域連合と単一セツル、全国学生セツルメント連合(全セツ連)の各関係性を分析す

③組織構造、思想の視点から、戦後の各時期における変遷を分析し、連続性と時期ごとの固有性を明らかにする。

④社会構造の変化との関連を検討する。

研究の視点と構成(※第1期～第5期はそれぞれ第2章から第6章に対応)

第1期	第2期	第3期	第4期	第5期
1945-1955	1956-1966	1967-1973	1974-1989	1990-現代

実践内容と果たした役割

②地域での実践と住民自治との関係

③社会運動・社会福祉運動の視点

④人間形成・自己教育の視点

①時代背景・社会の変化、社会福祉の動向

役割

意義

＜第1章＞　先行研究の到達点と課題

＜第2章＞　学生セツルメントの再興期（1945－1955）

［第1節］

日本の社会と社会福祉政策・実践
・戦後混乱期（失業、貧困、売春、犯罪等）
・占領政策下の公的扶助
・三法の成立及び社会事業法成立（1951）
　人権思想は不十分、保護的・救済的
　1947頃～逆コースの開始と強調
・大学・短大進学率10%（1954））
・生活保障費削減運動

［第2節］

全国の学生セツルメント
・1950年東大セツルメントの再建
戦後混乱期の社会情勢・地域の要求に呼応。OSの協力。みどり保育園の実践
・1955年全セツ連第1回大会
セツルメントの歴史と理論のつながり模索
戦後混乱状況を反映し地域の要求に応じた活動
定義や方針をめぐる議論

［第3節］

各地域におけるセツルメントの誕生
関西地域
大阪大学医学部α会(1952)
愛染園学生セツルメント(1954)
　大学教授などからの要請で開始
東京
誕生期：診療部、調査部
展開期；亀有、川崎セツルメント
　診療健康相談、保育園、勉強会
1954　関東セツルメント連合
（全国連合結成の準備）

［第4節］

＜第3章＞　学生セツルメントの組織構築期(1956-1966)

日本の社会と社会福祉政策・実践
・1958年～高度経済成長期
・同和対策審議会答申(1965)
・ボランティアの一般化
・大学・短大進学率16.1(1966)→32.7(1973)
・当事者運動の展開
・学生運動の活発化
　全共闘結成(1966)

全国の学生セツルメント
・1950年代後半まで　理論化の方針
　生産点論争とその挫折
・1960年以降
　方針転換（学びの場としての位置づけ）
　66テーゼ　”基本的性格”
・活発な活動と定期的な大会の開催
　憲法、安保問題、平和問題への提言
活動の活発化と現実から乖離した方針
学生セツルメントの独自性の模索

地域の広域セツルメント連合
関西地域
1962. 関西セツルメント連合の結成
東京
関東セツルメント連合大会
→全国各地からの参加
愛知(愛知セツルメント連合)
1966　名古屋南部セツルメント協議会
ヤジエ・井戸田を中心とした交流

単一のセツルメント
(関西)東住吉セツルの勉強会実践
　子供たち自身の勉強会へ
(東京)大原セツルの若い者会実践
　“生産点での実践”から、学びの側面へ
(各地)
子供会、医療部、保健衛生、高齢者、調査部
・ヤジエセツルメント保育所
　地域で地道な実践をするセツルメントの発展

＜第4章＞　学生セツルメントの転回期（1967－1973）

日本の社会と社会福祉政策・実践
・1970年代の低成長期
・新たな生活問題・対象の出現、中流意識
・大学・短大進学率16.1(1966)→32.7(1973)
　大学の「大衆化」、学生運動の変化
・六法体制の整備と福祉元年（1973）
・地域福祉・ボランティアへの注目

全国の学生セツルメント
・1967年財政ピンチ（全セツ連機関紙）
・1973年　26基調「自己教育運動」

地域実践の捉え直し、「学び」の側面の具体化

地域の広域セツルメント連合
大阪
1968. 阪セツ連の結成
愛知セツルメント連合
1968..愛セツ連の結成
関東セツルメント連絡協議会
1971.関東セツルメント連絡協議会

単一のセツルメント
(大阪)住吉・夕陽丘の子供会実践
　地域を知る、母親らの組織化へ
(愛知)ヤジエセツル青年会
　協働の姿勢、自主的な組織への願い
(各地)川崎、屋形町、北上の実践
　全セツ連による実践の積極的評価
　協働、地域実践から社会をみる視点、自主的・主体的組織づくり

＜第5章＞ 学生セツルメントの組織変容期（1974－1989）

日本の社会と社会福祉政策・実践
・二度のオイルショック(1973・1978)
　低成長による財政収入の悪化
・82年前後からのバブル現象
・福祉見直し論、日本型福祉社会の強調
　⇔生活問題の質の変化
　　施設重視から在宅支援重視へ
・国際障害者年（1981）
・1987年　社会福祉士及び介護福祉士法
・大学・短大進学率36－38%で推移

全国の学生セツルメント
・1974 全セツ連所属62、約4000名参加
・1976 第31回全セツ連大会
　敷居の低いスローガンへ(サークル化)
・量的拡大と組織課題の顕在化
　書記局の負担大
・1989 全セツ連機能停止宣言

⇔単セツの活動(地域の実態)との乖離、全セツ連の解散

地域の広域セツルメント連合
大阪
・年に各1回の大会・交流会の開催
愛知(愛知セツルメント連合
・活発化、単一大学の構成が多い
・日本福祉大学の影響大
　地域は社会の縮図として捉えた活動
　⇔地域や大学側のセツルメント・大学生に対する見方と反発

単一のセツルメント
(大阪)布摺・夕陽丘の障害児者パート
　地域からの要請と協働、補完的役割
(愛知)町っ子の社会調査
　社会調査の実践→身近な課題の調査へ
(各地)老人パート、病院での実践
　個人への働きかけの側面が強い
　専門的な実践の消失と新たなパートの展開（個人対象の色彩）

※線の太さは、関係の強さを示す。
－・－・－・－は、不明な関係をあらわす。

＜第6章＞ 1990年－現代

・1990年から2000年あたり：全セツ連とは異なるかたちで全国のセツルメントの交流が続けられる
・2000年代以降：単一のセツルメントがそれぞれ個別に展開
質的変化の特徴→①個別化の進展、②補完的役割・運動性の変化

＜終章＞

（1）学生セツルメントの展開と整理
（2）学生セツルメントの歴史的意義と役割
①運動性、②「要求」に応じた地域実践の果たした役割、③学生セツルメントの思想や精神、④体系的な組織構造、⑤人間形成や自己教育の役割
（3）学生セツルメントの課題と未来への展望
（4）研究の意義と課題
研究の意義：①学生セツルメントを通史として分析した点、②全国・地域の広域連合・単一セツルメントの3位相に着目して検討した点
本研究の課題：①4つの視点で論じることの限界、②地域の広域連合の限定、③戦前の大学セツルメント、地域福祉施設型のセツルメントとの比較検討、④各分野における実践の役割の検討
⑤今日的課題や現代の社会福祉における位置づけ、⑥近接領域の知見からの詳細な検討

第１章　先行研究の到達点と課題

本章では、セツルメントおよび学生セツルメントに関する先行研究を概観したうえで、研究の課題を整理したい。まず、第 1 節で、セツルメントの系譜と定義について概観し、本研究における学生セツルメントの用語を定義する。第 2 節では、戦前のセツルメント研究、とくに大学セツルメントに関する先行研究を中心に概観し、戦後との共通性と連続性を検討する。その上で、第 3 節では、戦後の各年代における研究動向の概観を行い、先行研究の到達点と課題を整理し、本研究における論点を示したい。なお、本章では、セツルメントおよび学生セツルメントに関する先行研究や文献を中心に取り上げ、到達点と課題を示すこととする。

また、論者によっては、戦前についても学生セツルメントの語を用いている例がみられるが、本研究においては、戦前の大学生によるセツルメント運動を大学セツルメントとし、戦後を学生セツルメントとする。これは、後述するように、戦前は大学による援助が大きく、戦後は学生が主体となって再建することによる使い分けである。

第１節　セツルメントの系譜と学生セツルメントの位置づけ[1)]

本節では、セツルメントの定義とその系譜について概観し、学生セツルメントの位置づけを確認した上で、本研究における学生セツルメントの用語を定義する。

１．欧米におけるセツルメントの展開

セツルメントの萌芽は、19 世紀初頭の大学拡張運動(University Extension Movement)にみられる。大学拡張運動とは、「大学と教育の機会に恵まれない労働者とを結びつけ、大学以外の場所で、大学の学問と知識を労働者に拡張しようとする労働者教育の運動」(山田 1977:17)とされる。数多くの著名な学者により取り組まれた大学拡張運動の流れを汲み、セツルメントとして具体化・事業化したのは、エドワード・デニスン (Edward Denison) である。「彼は労働者の貧困問題を、貧民の劣悪な環境と教育の欠如にあたるとして、彼等に金品を与えるよりも日常的接触によって、ブルジョアの独占している教育を与えるよう努めるべきだと考えた」(山田 1977:18)。この思想の背景には、当時の産業革命期のイギリスにおける社会状況、資本家と労働者階級の格差が広がるなかで、当時のイギリス社会は施与 (charity) の文化が根強くあったこと、公的な補償も救貧法に限られていたことなどが挙げられる。この段階ではセツルメントは組織化しておらず、彼の思想に共鳴した人々が貧民街に居を移して労働者とともに生活しつつ教育や地域の生活改善、住宅改良、衛生的向上等に貢献するといった個人的な形での地道な活動であった。サミュエル・バーネット(Samuel Bernett)も、セツルメントの思想に影響を受けた一人である。彼は、1872 年にイースト・エンド[2)]で英国国教会に所属する聖ユダ教会の司祭となり、大学拡張運動の東ロンドン支部の設立や青年扶助協会の都市支部の組織化を行ったほか、聖ユダ教会で文学と討論の会や美術展示を開催するなど、様々な地区活動に従事した[3)](Briggs and Macartney=1987:5,39)。そして、デニスンが若くして夭折した後、世界で最初のセツルメ

ントハウスとして、トインビー・ホールがバーネットによって設立された(1884 年)。トインビー・ホールの名称は、ロンドンのイースト・エンドに定住してセツルメント活動に従事し、1883 年に死去したアーノルド・トインビーを記念して名付けられたものである。

こうした経緯を踏まえると、セツルメントの精神を述べるうえで、トインビー・ホールの歴史から得るものは非常に多い。Asa and Anne (=1987)『トインビー・ホールの 100 年』は、以下のようにセツルメントの思想・精神について論じている。

> その世界は、教化されるのではなく、理解されなければならなかった。「たとえ 1 か月でも貧しい人々と生活をともにした人は、けっしてふたたび古い考えにとどまることはできない。」思考が感情と同じく必要であった。…略…彼(※バーネット：筆者注)の見地は、貧民を改宗させる福音的熱心さや貧民を礼拝に呼びかける大衆伝道とはおおきく異なっていた。彼は「定住」するだけでなく、経験を分かち合うこと、触れ合うだけでなく、共同体の形を望んだ(同上:8)。

イースト・エンドの教区に派遣された司祭としてのバーネットの仕事には、本来、伝道や教化が含まれるが、トインビー・ホールにおけるセツルメントは、単なる宗教的伝道を超えたものであった。一方で、トインビー・ホールにはさまざまな批判があった。しかし、これに対するバーネットの主張は以下のものであり、それは首尾一貫していたという。

> 彼がイースト・エンドに寄せ集めた人にたいして、くりかえし「伝道者としてではなく」「定住するために」そして、「教えること以上に学び、与えるもの以上に受けること」を説いた(同上:31)。

これらにトインビー・ホールの精神がみてとれるとともに、その後の日本におけるセツルメントの展開を検討するうえでの指針となる。

さらに、同書では、社会調査の領域においてトインビー・ホールが果たしてきた役割についても示されている。1890 年代、チャールズ・ブースはバーネットの誘いを受け、トインビー・ホールでの滞在を通して、貧困調査を行った。また、ウィリアム・ベヴァリッジは、社会問題を科学的に考察するためトインビー・ホールのレジデントとなり、1903 年には副館長となる。この他、「多くのトインビー・ホールのレジデントは、同類の調査の分類において有名に」(同上:71)なっており、アスキス(H.H. Asquith)も「トインビー・ホールを『社会の研究所』と評している」(同上:71)。

このトインビー・ホールの精神は、後の東京帝大セツルメントの成立時に、その性格づけとして「セツルメントは慈善事業にあらず」とし、本来の使命として労働者への「成人教育」と「社会調査」を二本柱に掲げた(宮田 1995:41)ことにも継承されているといえる。

これまで述べてきた通り、世界初のセツルメントであるトインビー・ホールは、単なる慈善や施与、同情ではなく、スラム地区に定住し、友人として接触をすることを通し、共

に学びあう相互的関係性の中から自立を促す試みであった。また、社会調査およびソーシャル・アクションの側面に力点が置かれていた。

さらに高島は、「セツルメントの定義自体が端的に社会改良を中心にすえている」（高島1979:119）と述べ、トインビー・ホール実践後のバーネットのセツルメント思想として、社会改良の視点を重視している。その上で、バーネットの著書から、「もともとセツルメントは伝道ではなく大学人と労働者が自然な交際を通じておたがいに知り合い、社会改良に協同する手段である」（同上:119）（※傍点ママ）との定義を引用[4]している。

一方、アメリカでは、1866 年、スタントン・コイトとジェーン・アダムスにより、ネイバーフッド・ギルドとハル・ハウスがそれぞれ設立された。アメリカにおけるセツルメントの展開について一番ケ瀬（1963:29）は、社会改良運動というよりも社会事業施設のデパートメント・ストアとして、さらにコミュニティ・センターとして展開していったとし「一般に、イギリス型セツルメント＝社会教育的、にたいし、アメリカ型セツルメント＝社会事業的、といわれる」と両者の違いを示す。

イギリス、アメリカで発展したセツルメントは日本にも大きな影響を与えて発展した。日本の学生セツルメントではとくにイギリスのセツルメントの系譜が強く、その影響は東京帝国大学セツルメントの創生期からみられた。

２．日本におけるセツルメントの系譜

欧米に展開したセツルメントは、日本にも広がる。その先駆としては、1897 年の片山潜によるキングスレー館が代表的である[5]。その後、日本全国に広がったセツルメントについて、吉田（1990:89-90）は以下のように分類している。

第一に、伝統的キリスト教型で「人格的接触」を主とするもの。それはさらに社会改良型で生活協同組合方式を取ったものと社会事業を主としたものに分かれる。第二に、仏教型。これも寺院のセツルメント化を図ったものと労働運動を主としながら総合社会事業の方向を取ったものに分かれる。第三に、地方自治体や半官半民団体型。第四に、階級調和型、そして第五に、「大学型」である。

吉田の分類は大正後半期のセツルメント運動を分類したものであり、戦前は大学や教授等の支援が大きくあり大学セツルメントとしての性格をもっていた。戦後は学生による運営へと変わり学生セツルメントという呼称が一般的になる。

一方で北川（1958:13）は、戦前と戦後の学生セツルメントに共通する本質を 3 点挙げ、「大学型」の系譜を学生セツルメントが引き継いでいる側面を示している。このことから、戦後の学生セツルメントを捉える上で大学セツルメントの系譜は重要といえる[6]。そのため、代表的な大学型セツルメントといえる東京帝大セツルメントについて触れたい。

３．東京帝大セツルメントから戦後学生セツルメントへの系譜と思想

1923 年の関東大震災における救援活動を機に翌 1924 年、東京帝国大学の教授と学生によって東京帝大セツルメントは設立した。このセツルを積極的に支援し指導した穂積重遠、

末弘厳太郎の両教授はいずれもイースト・エンドとトインビー・ホールを訪れたことがあり、それから示唆を受けた(音田 1958:9)。成立時に、「セツルメントは慈善事業にあらず」とし、本来の使命として労働者への「成人教育」と「社会調査」を二本柱に掲げた(宮田 1995:41)。大学拡張運動の流れを汲む「成人教育」の柱と、トインビー・ホールの担ってきた機能をふまえた「社会調査」の柱には、トインビー・ホールの精神の継承が見出せる。

このうち、大学拡張運動の流れを汲む「成人教育」は、労働者教育や社会改良への志向性がありその後の労働者運動や社会運動へとつながる運動性をもつ。一方で元根 (2011:189) は大学拡張運動の視点から、セツルメントを「自ら地域の改良や研究のために出向く」活動と分類する。そして、セツルメント活動をオックスフォード大学型とケンブリッジ大学型に分類したうえで、両者の目的は、地域の若者の育成と地域に入るレジデントの育成という違いはあったが、実際の社会であるセツルメントの実践の場では、両者が相互作用をもたらすことで研究と実際の融合につながったのではないかと指摘する(同上:189)。つまり、「成人教育」の源流にある大学拡張思想は、大学人や知識人による一方的な労働者教育・社会改良ではなく、大学人自身も地域の現実や住民の生活から学ぶという相互的な役割をも有していた。ここから、大学セツルメントの実践には、「学問によって得た知識を現実へ適用し、またその検証を行うことで、学問と実践の往還的学びを深め」る側面が見出せる(岡本 2016:120)。戦後、とくに 1960 年代以降、この成人教育の思想は、セツラー自身が実践から学ぶ側面が強調され、セツラー自身の主体形成へと視点が変化していく。その点については後述したい。

「成人教育」と「社会調査」の 2 本柱は、1937 年の東京帝大セツル閉鎖を経て 1949 年に東大セツルメントとして再建したのちも引き継がれる。ここに、戦前と戦後の連続性が垣間見られる。

一方で、戦前と戦後の「形式的な断絶」(北川 1958:14)の側面は、財政面と運営面に顕著にあらわれる。東京帝大セツルメントは天皇の下賜金を受け（大森編 1937）企業などの援助もあったが、戦時体制に入り軍国主義が高まりを見せる中で「弾圧」[7]を受け解散を余儀なくされる。その後再建した戦後の学生セツルメントは、戦前の大学セツルメントとは異なり、大学当局の関与はなく、大学教授もあくまで学生に対する助言者の立場にあるだけで、経営は学生の手によって行われることになる(音田 1958:12)。これらから、財政支援がなくなり、学生主体の運営になる点に戦前との「形式的な断絶」が示されているといえる。

４．戦後学生セツルメントの定義

ここまでの論をふまえたうえで戦後のセツルメントの定義をめぐる議論を検討し、学生セツルメントの定義づけを行いたい。

阿部(1957:43)は、アーノルド・トインビーの生涯と思想について検討した上で、「セツルメント運動はこの社会運動の一環として現れたもので社会問題を自らの手で解決せんとする思想性を包含する自由にして任意の運動である」とした。阿部による定義は学生セツルメントに限ったものではないが、社会問題を自らの手で解決しようとする社会運動とし

ての位置づけは、セツルメント創成期における思想をふまえたものであり、重要な視点が示されている。また、学生セツルメントについて、西内(1971:2-3)は、セツルメントを「『人格的常時接触＝人格交流運動』によって、地区の人々の心身両面の向上を図り、生活改善や防貧事業を行い、地区の欲求を入れて福祉増進を計ることが、セッツルメントの狙いである。したがって、階級と階級、知識ある者とない者、富者と貧者等の橋渡し、すなわち、人間関係の調整である」と定義した。そして、セツルメント創生当時から定住的セツルメントと教育的セツルメントの2つの流れがあり、「後者は定住者を必ずしも必要とせず、また、社会福祉事業を必ずしも必要としない。専ら教育という一点にその努力を集中するのである」(同上:209)とし、学生セツルメント運動は、大学延長運動[8)]である教育的セツルメントの傾向にあるといえるだろうと述べる。さらに、北川(1958:13)は、「学生セッツルメントは、他のセッツルメント活動とことなって、単なる社会事業、慈善事業ではなくて、その枠にとどまるところのない社会運動的側面を有している」と、その違いを示す。他方、音田(1958:13) は「時代の要求の変化とともにセツルメント自体のあり方が変わらなければならない」とする。

なお、阿部や西内[9)]、音田が述べた時代はセツルメント運動が活発であった時代であり、その後の展開もふまえた検討が必要である。『新版　地域福祉事典』によると、「戦前のセツルメント運動を直接継承したのは学生セツルメント運動であったが、1980 年代以降衰退の傾向を見せている」(永岡 2006:397)とされる。

以上から、先述した西内によるセツルメントの定義はあるものの、戦後の学生セツルメントとは一致しない点もあり、また学生セツルメント自体も時代や社会状況に応じて変化していく点をふまえれば、一括りに定義づけることは非常に困難である。ただ、論を進めるためにもこれまでの定義や先行研究を参照し、戦後学生セツルメントを以下のように簡潔に定義づけることとする。

> 大学拡張運動・セツルメント運動の系譜をもつ東京帝大セツルメントが解散したのち、戦後の東大セツルメントを端緒として学生が主体となり運営する部活動もしくはサークルとして位置づけられた団体。活動の分野や内容、地域は多岐にわたるが、セツルメントの人格的接触の精神を引き継いだ地域実践とともに、地域や住民の要求に応じた運動が展開された。また、地域や社会の現実に向き合うことで学生の人間形成の場になるという特徴も有していた。それぞれが地域の現実に即した多彩な活動を行いながらも、地域の広域連合や全国の連合といった組織化がなされ相互に関連していたが 1989 年の全国セツルメント連合の解散以降、その数は激減し実践の質も変容している。
>
> (岡本 2018a:101)

上記の定義は現代から学生セツルメントをみた際の概略的なものであり、詳細に展開を検討すれば、ズレが生じる時期もある。しかし、本研究においては上記の定義に基づき学生セツルメントについて論じることとする。また、これまで述べきたとおり、戦前は大学

や教員の援助が大きかったが、戦後は学生主体となる点に、その違いがみられる。そのため、本研究においては、戦前の大学生によるセツルメントを指す場合は「大学セツルメント」を、戦後については「学生セツルメント」を用いて使い分けることとする。

本節では、セツルメントの系譜を簡潔にたどり、本研究における「学生セツルメント」を定義した。次節では、戦前の大学セツルメントに関する先行研究を概観したい。

第 2 節　戦前のセツルメントに関する先行研究の概観

本研究の目的は戦後の学生セツルメントの展開と意義を明らかにすることであるが、大学生らによるセツルメント運動は戦前から行われており、戦前の展開をふまえて戦後の学生セツルメントが再建されているという点で重要である。また、戦前のセツルメントに関しては、セツルメントが社会事業において重要な役割をもち、さかんに広がった時期と関連して、数多くの研究蓄積がある。そのため、本節では、戦前のセツルメントに関する研究、とくに大学セツルメントを中心として先行研究の概観を行い、戦後との関連について検討したい。

１．大林宗嗣によるセツルメント研究

セツルメントを日本で初めて体系的・理論的に研究したとされる大林宗嗣（1926）は、セツルメントの思想について、「個人的接触を通じて労働者階級の物質的並に精神的要求を満たし且つ彼等に教育の機会を与へて自発的に自己の文化を創造し自己開発をなす人格を作らしむる事である。…略…換言せば其の運動の根底は『全人愛』にあると云ってよい。かの優越者が下級者に対して恩恵を施すが如き思想を全然排斥するのである」(大林 1926：14)とし、1922 年トインビー・ホールより出版された『Settlements and Their Outlook』の中の マクドウェル(Mary McDowell)の言葉を次のように訳した。

> セッツルメントの事業は凡ての隣人が齎し得るあらゆる思想、経験並に奉仕力を理解し、優勢なる社会的不正及び失業の原因を探究し、満足なる解決の方針を考案し、…中略…且つ凡ての種類、事情及び意見を持てる人々の中に自然的友情を開拓することに依って、『人々と共に生きる』技術を可能ならしむる、小社会生活（コミュニティライフ）の新形式を造り出すことである（同上：20)。

また、大林は、セッツルメントに必要な条件を 3 点に整理した。それは、「(一）欺業者が全き一個の友人として其の隣保に対して人格的接触をなし（二）絶えず其の隣人の福利の為めに物質的並に精神的欠乏を補給し（三）其のコムミュニティに定住又は仮住すると云う條件」というものである。さらに、その条件から考えると、「現今我国に行はれてゐる所謂セッツルメント事業と云うものを見るに、その中果たしてどれだけが之等の條件を満足に所有し且つ実行してゐるかは猶ほそこに疑問がないでもない」(大林 1926：39－41)と

続けている。

大林によるこれらの記述は、その後の時代の変遷や社会状況により異なってくる部分もあるが、セツルメントの初期における思想の本質を述べているだけでなく、その後の社会福祉実践・研究並びにそれらの動向に照らしても共通するところが多くあると考えられる。具体的には、「人々と共に生きる」という精神は、セツルメントに限らず今日の社会福祉全般においても共通していえるものである。そのため、社会福祉や社会事業成立以前に、その萌芽として生まれたセツルメントが現代の社会福祉に通底していることを示すものであるといえる。永岡（1996:89）は、これまで大林宗嗣の研究はその理想的で直訳駅な傾向のために取り上げられることが少なかったのではないかとする一方、「今日、地域福祉のしくみが社会福祉のあり方として急速に発展しているが、その基盤となる行政責任とボランタリズムの関係や地域民主主義と自治の問題を考えるとき、大林宗嗣が提示した論点は重要」だと評価する。また大林の指摘から、すでにセツルメントが多様化していた状況も窺い知ることができる。これは、濱野(2006)や中村(2014)など、多くの論者が指摘する、現代のセツルメントはセツルメントと言い得るのか、という議論 にも通じる。

戦前のセツルメントは、各地に隣保館や市民館、生活館ができ活発に展開されたことと関わって、細民教化事業、社会事業、隣保事業などの面からさかんに研究された[10)]。そうした中で、戦前の大学セツルメントに関してはどのように論じられてきたのだろうか。大学セツルメントの思想や意義、活動内容について先行研究を用いて概観し、戦後との比較の手がかりとしたい。

２．大学セツルメントの誕生

（１）東京帝大セツルメントの前史と活動および組織体制

日本で最初の大学セツルメントである東京帝大セツルメントの前史には、関東大震災を契機とした東京帝国大学の学生救護団の活動がある。1923 年 9 月、東京帝国大学の学生は、夏休みを利用した南洋諸島見学旅行の帰途の船中で関東大震災の発生を知る(池田 2019:39-40)。彼らは大学に戻ると、その日から大学構内に寝起きして救援活動を始めた(末弘 1928:75)。

東京帝国大学セツルメントの設立に深く関わり、この救援活動においても「統率者の役割」(池田 2019:41)を果たした末弘厳太郎(1928)は、この救援活動における仕事を大きく 3 点に整理した。

1 点目は、給養事務である。大学構内の被災者 2000 人への食糧配給のため、貨物自動車を使って各地に食物を探し求め、物資の収集を行った。そして、集めた食料の配給にあたり、学内避難者を複数の自治的団体に分け、食料品や慰問品の配給を任せることで自治的かつ公平に配給物資が行き渡るようにした。大学構内の救護が行き届くようになると、上野方面の窮状が学生のきこえてくるようになり、上野公園での救援活動も開始される。上野公園では、炊き出しの列に長時間並ばなければならない状況を目にして、被災者を 14 の地区に分割しそれぞれに役員を設けて食糧配給のための自治的な組織づくりを行った。ま

た、劣悪な衛生状況に対して、学生自身が鍬鋤を使って便所を新設したり汚物を掃除したりした。2 点目は、「尋ね人」の仕事であった。市内各所の避難所に調査に回り、避難者名簿を作成、尋ね人係を開設して連日無数の探索者に対して相談に応じた。「中には羅災後十数日にして初めて愛子の在所を発見し良心の避難所を知り得たやうな人々も少くなかった」(同上:79)という。そして 3 点目は、「東京羅災者情報局」の仕事であった。当時、地方から東京在住の親戚縁者の安否を気遣って上京する人によって、救護事務が妨げられる状況があった。そのため、問い合わせに応じる機関として「東京羅災者情報局」を設置した。それに伴い、①踏査調査によって火災による詳細な消失区域図の作成、②傷病者収容書の収容患者の情報カードの作成、③死亡者名簿及び羅災者の立ち退き先の調査、がなされ、それらの結果を町名番地別にして情報原簿三十巻を作成し、問い合わせに応じた(末弘 1928:75-80)。

この安否調査事業は、1923 年 10 月半ばで終わるが、解散式の折、「その一座の空気として、このような経験ある学生の活動組織を解散するにしのびず、さらに進んで永久的な活動団体を組織しようとする機運」(福島・石田ほか編 1984:3)が生まれ、1924 年 6 月に東京帝大セツルメントが発足した。

東京帝大セツルメントの組織は、総指導者、指導教授、セツラーと住み込みのセツラーであるレジデント、オールドセツラー、そして主事(1925 年に初代主事の内村治志が就任)から構成された。事業は、調査部、労働教育部、市民教育部、児童部、相談部、医療部に便宜上分けられた。東京帝大セツルメントについては、大森編(1937)、高島(1957)、福島・石田ほか編(1984)はじめ、近年では池田(2019)など多くの先行研究があるため、本研究では活動内容まで言及しない。

しかし、東京帝国大学の学生救護団による震災救援活動にみられる自主的・主体的な学生の動き、丹念な調査活動、自治的な組織づくりは、その後の東京帝大セツルメントや戦後の東大セツルメントにも引き継がれるものである。また、東京帝大セツルメントにみられる組織構造も、戦後の東京大学セツルメントに引き継がれる点で重要である。戦後の東京大学セツルメントの組織構造については、第 2 章で述べたい。

（2）大学セツルメントの概観と評価・位置づけ

戦前の大学セツルメントでは、東京帝大セツルメントについて論じられることが多いが、九州帝国大学セツルメント[11)](1925 年)、関東学院セツルメント[12)](1928 年)、明治学院セツルメント[13)](1929 年)、上智大学カトリック・セツルメント[14)](1931 年)などもみられる。

このほかに、大学生の関わったセツルメントの例がいくつかある。例えば、大正初期に大阪で篤志家によって創設された宿泊保護施設が関西学院学生奉仕団に経営移管されてセツルメントとなった大阪暁明館もその一つであり、宿泊保護に加え、授産、保育、教育、伝道教化など幅広い事業が行われた(小笠原 2013:71)。また、高島(1957:18)は、大学生の関わりのなかでうまれたセツルメントとして、大正 10 年末、京都労学会のメンバーであった京大の小林輝次が賀川豊彦の影響を受けてセツルメントを開いたことや、「全国水平社結

成と呼応して立命館大学の学生広瀬泉竜が七条の部落内に『ルンビニ学園』を開」いた例を示し、宗教的色彩を有している点を指摘する。なお、これらは、社会事業施設としてのセツルメントの設立や経営に大学生が関わった例であり、大阪暁明館とルンビニ学園はその後社会福祉法人の経営に移る。戦後において、社会事業施設との関わりという点で類似するのは、第2章で論じる亀有セツルメントみどり保育園や、善意の医師の協力のもとで設立した各地の診療所活動、伊勢湾台風の救援活動でうまれたヤジエセツルメント保育所などであろうが、診療所活動やヤジエセツルメント保育所は専門職の協力が大きい。みどり保育園についても、後述するが、専門職の必要性が痛感され設立後に保育士を雇用した経過がある。また、愛染園学生セツルメントは社会事業施設を拠点としており、戦前とは異なる形態である。さらに戦後では施設において法制度の枠組みの中での活動へと徐々に変化していく。これらをふまえると、学生が社会事業施設としてのセツルメントを経営するという点は、戦後再興期において一部は引き継がれた面もあるといえるが、戦前とは質を異にする部分も多い。その意味で、戦前における特色といえるのではないだろうか。ただし、この点については、慈善事業から社会事業、社会福祉への展開とも関連しているほか、大学セツルメントの範囲の問題も含む。

他方、小笠原(2013)は、戦前の大学セツルメントの資料を丹念に分析し、東京帝国大学セツルメント、九州帝国大学セツルメント、明治学院セツルメント、関東学院セツルメントにおける左翼運動との関わりに関する記述や「左傾化の実態」(同上:73)を明らかにし、当時の大学セツルメントが「左翼運動との関連を疑われて厳しい状況におかれていた」(同上:72)ことを裏付けている。また上智大学においては「左翼運動の影響を思わせる記述はなく、学生の左傾化の危惧もなかった」と推察し、「そういう運動とは関係の薄いままで存続可能であった」(同上:74)可能性を示す一方、戦時体制のもとで維持困難となった側面を示す。

こうした側面は、東京帝大セツルメントの成立に深く関わった末弘厳太郎の記述からもみられる。例えば、イギリスにおけるセツルメント運動の歴史を論じる中で「セツルメント事業の真髄」を次のように位置づける。「知識階級の人々が自ら労働者街に移住し、優越者が劣敗者に対して恩恵を施してやると云ふが如き慈善事業の態度ではなくて、貧民の友として彼等と共に住み、彼等と共に苦しみ、彼らを教育し、彼らに社会改革の必要を認めしめるやうに教育するのが、セツルメント事業の真髄である」(末弘 1930:9)。つまり、セツルメントは慈善ではなく、貧民と共に生き、そして社会改革の必要を認めさせるように教育する点にこそ「セツルメント事業の真髄」があるという主張である。その上で、「このセツルメント運動が大學を中心として勃興したことは重大な意義がある」(同上:10)とする。

> 大學は封建的な勢力と闘争し、プロレタリアートの味方として活動すべき資格を十分に有してゐた。大學の教授のみならず、特に若き理想に燃ゆる大學生達は民主主義の理想や運動にふれ、又社会理想主義の影響をも受けて、慈善事業に対する反感を抱きつゝセツルメント事業に参加した。かくして大學拡張運動は、当時の大学の進歩性を反映した、大学

関係者の社会的運動として、スタートを切られたのである。

（末弘 1930:10）

これは、「帝大セツルメントは、一般のセツルメントとはことなり、学生運動の中から生れたのであり、社会運動の一貫であつた」(高島 1957:17)との指摘にもつながるものである。関連して、Smith(=1978)は、新人会と東京帝大セツルメントが深い関係にあったことを明らかにしている。具体的には、帝大セツルメントの「無料診療所では、新人会に属する十数人の医学部学生が活躍」し、「帝大セツルメントの最初のセトラー一〇〇人のうち、三〇人以上が新人会員」であったと述べる(Smith=1978:125-126)。とくに、「帝大セツルメント労働学校」は、「東京最大の左翼系労働学校に成長」(同上:125)したとして、「セツルメントは、労働者に接触したいという若きインテリの熱望のはけ口であった」(同上:126)側面を示す。この側面は、当時の帝大セツルメントと新人会の思想的親和性にも関係しているといえる。「新人会にとって、セツルメントは会員獲得の場であっただけでなく、貧しい者、虐げられた者―その人たちのためにつくしたいと新人会は努力してきた―に対して直接手を差し伸べる場として、とくに重要な存在であった」(同上:125)。

このようにみてくると、戦時体制へと入る中で東京帝大セツルメントをはじめとした多くのセツルメントにおいて逮捕者が続出したことも当時の社会における思想的弾圧との関連から理解ができる。こうした状況を背景として、1930 年頃には多くの大学セツルメントが解散に追い込まれる。そうした中、東京帝大セツルメントは戦前のセツルメントとして最後まで残っていたが、1938 年には解散を余儀なくされる。

以上から、戦前の大学セツルメントには学生運動、左翼運動、社会運動としての傾向が強くあったこと、同時に社会からも「左翼運動」とみなされる風潮があったことがわかる。

そして、この傾向と風潮は戦後の学生セツルメントにも引き継がれる部分がある。詳細は第 2 章以降で論じるが、例えば戦後の学生セツルメントについて論じた高島(1968:33)も、「地域によってはいわゆる『アカ』呼ばわり」を受けることについてふれている。

ここまで、戦前の大学セツルメントについて戦後の評価や位置づけを確認した。では、大学セツルメントの思想や特徴について、当時はどのような議論がなされたのだろうか。

３．大学セツルメントの思想と特徴

（１）大学セツルメントの思想と対象、方法に着目して

光徳寺善隣館の創設者である佐伯祐正（1928:42-47）は、「勇ましい強い然ものび行く人間」として、また「物の施与のみに生きなければならん宿命的な貧民とは見ずに人間として同一水準に高められた」存在として関わる姿勢や態度、「物を与へるまでにこゝろを与へる」という思想にセツルメントの「真の理想」を見出した。そして、「社会改良に対する方法としての理想」の点で、第一の働き手である人間が最も重要であると指摘し、大学教授および学生を担い手とした大学植民や大学拡張、大学セツルメントへの「希望」を論じた。また「境遇に依つては馬鹿も大學に行ける時代」だとして、今のままの学徒であれば「階

級不安を増長」するだけではないか、と問いかけ知識の提供を主張した。同時に「その時代の心臓のどよめき渡る社会と接することなくしてはその理論は常に空理空論に終るであろう。／現実社会に接近して得られる材料こそ真の研究材料である[15)]」と述べ、大学生にとってのセツルメント運動の意味にも言及した。

佐伯の論はやや抽象的ではあるものの、セツルメントの思想、その実現の担い手としての大学セツルメントの位置づけ、大学生によるセツルメント運動の意味といった論点を示しているといえる。より具体的に、検討してみたい。

第一の働き手である人間が最も重要だとした佐伯の指摘は、関東学院セツルメント主任の渡邊一高[16)]（1930）が、セツルメントの公営・私営をめぐる議論の中で「要は人である」と論じたことにも通じる。「人」に関して、同じく渡部（1932:19）は、「大学セツルメントの最大の力と弱味は之に働く学生である」とし、「使命を感じた学生位真剣な努力をしてくれる者はない」と大学セツルメントに打ち込む学生について高く評価している。先に挙げた末弘（1928:77）も、東京帝国大学救護団について「其の見事なる仕事ぶりに驚喜した」と称賛の念を持って評価している。

さらに、渡邊（1930:64）は、セツルメントは慈善でも救済でもなく「彼等（※細民：筆者注）の物質的精神的生活を根本からつくりかへす一大教育運動であらねばならない」とする。そのために、戦う武器を与えるのではなく「彼等自らの手によつてその武器をつくらせること」、そして何よりも「戦ふ勇気と希望とを与へる」ことが重要だと述べた。関連して、小島（1928）は、セツルメントを、社会事業をおこない、定住者を必要とする「社会的セツルメント」と成人教育を主として定住者を必要としない「教育的セツルメント」に分け、総合社会事業に傾きがちな「隣保館」ではなく教育的セツルメントを増やすことを主張した。教育的機能や教育運動としてのセツルメントへの着目は、初期のセツルメント研究にも多くみられる。

他方で、佐伯、渡邊、そして末弘厳太郎も、階級闘争や社会改良としてのセツルメントの側面を念頭に置きながら論じており、対象となる社会問題として貧困問題を想定していることがわかる。階級闘争については、明治学院セツルメントの責任者であった三好豊太郎（1930:24-25）も「大学セッツルメントと階級の調和」と題した章でふれる。三好は、たとえ学生と貧困者という階級間に多くの偏見や我執があったとしても、二つの階級社会についての理解があれば、社会連帯によってその壁を超えることができると述べた。そして、社会連帯は、「理知的の事実ではなく、感情生活の事実」であり、「理解が愛を生み、愛は理解を育てる」ことにより、無理解な階級間の対立をのりこえることを証明する「実験室」としての役割を大学セツルメントが果たすと指摘している。

これらから、大学セツルメントにおいて、階級の調和や社会改良が課題として認識されていたことがわかる。では、それらの課題に対する具体的な方法論はどのようなものがあったのだろうか。

例えば渡部（1932:14）は、関東学院セツルメントでの経験から細民教化事業について述べる中で、観念的なプログラムは無意味なだけでなく「相手を殺す事になる」として、と

くに細民区域における「客観的状態の徹底的調査」の必要性を強調する。彼らの状況を正確にうつしとり、「同時に細民自身にもハツキリつかませる事」（同上:15)が、細民教化事業にとって重要だという主張である。そのためには総合的な社会科学の知識とともに、手段として家庭訪問が非常に重要な意味をもつことにも言及している。渡部は、「毎夜七時から九時半までかゝつて二軒位づゝ訪問」（同上:15-16）することや、セツルメント設立の前に指導者がセツルメントのことは言わずに住民として暮らし、2・3か月は地区内部の様子を研究することなど、具体的な方法についても詳細に論じている。ここでは、表面的・統計的調査ではなく、その地域に入り込み生活の実態を細かにつかむ「徹底的調査」こそが、前提として重要であることが示されている。他方、三好（1930）は、労働教育の側面を強調する。「セツルメントは其の周囲の社会集団の要求に応じて、之を向上し発展せしめる方法を取るのであるから、一概に其事業内容を定めることは困難」としつつも、労働教育は、一機能としてはずすことができないものだと論じている。

東京帝国大学設立趣意書[17]においても、その任務を智識の分与と社会事情の実地調査としており、上述の側面が確認できる。これらは、九州帝国大学新聞に掲載された九州帝国大学セツルメント創立委員会（1927）による「九州帝国大学セツルメント創立趣意書」にもみられる。この創立趣意書では、知識の分与によって「精神的に自由に且心身の能力を展開せしめ得る様に誘導する事」、その際、上から下へという態度をやめ、「無産者群の生活圏内に入り込んで家族的な小社会を形作り、知識を獲得せしむる機会を与ふる」とされている。また、的確な社会の現状把握と社会研究を行うことの記載もある。九州帝国大学セツルメントにおいて注目すべき点は「家庭的な小社会」形成への言及がみられる点であるだろう。

以上から、大学セツルメントの取り組むべき課題や方法として、階級間の調和、社会改良、細民教化、労働教育、小社会の形成、徹底的な実地調査、家庭訪問などについて論じられてきたことが明らかとなった。しかし、これらの多くは、大学セツルメント以外のセツルメントにも共通するものである。つまり、イギリスで発祥したセツルメントの精神や思想、実践を大学セツルメントにおいても共通して適用しようとしていたのである。ここに、戦後の学生セツルメントの展開につながる側面が見出される。このように、対象や方法の点で、ほかのセツルメントにも共通する点が示されていたことが明らかとなったが、具体的な大学セツルメントの特徴については、当時、どのような論があったのだろうか。

（2）大学セツルメントの担い手と経営に着目して

先に述べたとおり、佐伯は、大学セツルメントを通して携わった学生が現実から学ぶ側面を指摘した。佐伯（1928）は、アーノルド・トインビーを高く評価しており、トインビーの有した「その情熱その態度」そして「理知と創造と実行性」を、日本の大学生に重ね、大学セツルメントへの「希望」を論じているように思われる。大学生という側面に着目して大学セツルメントを論じたものは、ほかにもみられる。例えば三好（1930:18）は、大学生の就学動機の変化にふれ、大きな特徴として、就学に根本の動機を軍国主義的国家では

なく、隣人に置くようになっている点に注目する。「学徒の全体の傾向は寧ろ手近い隣人への奉仕の内に真に人間としての学修動機の満足を求めつゝあることは明らかにみられる点である」（三好 1930:19）。さらに、「彼等（※学徒：筆者注）は権力の執行者たらんとするよりは寧ろ自己の人間としての存在を満足せしめる斯かる方面に、より多くの関心と期待とを持たんとしつゝある」と続ける。そして、こうした傾向は「大学形態の変化」のなかに明確にみられると指摘する。つまり、大学生にとっては、社会のなかで「手近い隣人への奉仕」を通して人間として成長をしたいという要求を満たす場としてセツルメントが機能していたこと、それは大学の変化と大きく関連していたことがわかる。さらに三好は、記録についても、「職業的社会事業」と比較して形式や制限がなく「実に自由」であるとし、「たゞ純粋に彼等の良心と理智との命に従ふか否かゞ基本点であつて、その点だけに於て熱節なりや否やが問題とされる」とし、「大学セッツルメントは一般セッツルメントに対して大なる模型であると見ることができる」（同上:20）と述べる。その際、大学セツルメントが一般セツルメントに対して与える刺激と衝撃は、技術の幼稚さや内容の貧弱さ、不熟練の程度で非難できない多くの特徴を有するために、「大学セッツルメントを批評する人々はその態度と精神とを主として見るべきであり、その技術と内容とに対しては寛容であらねばならぬと思はれる」（同上:21）とする。

以上から、大学生という担い手に注目したとき、大学セツルメントの特徴として、大学生の純粋さや情熱によってなされる点、大学生自身が現実から学び成長に寄与する点、その態度や精神において一般セツルメントの模型とみることができる点などが論じられてきたことがわかる。大学生自身の学びという点については、実社会における「実験室」（三好 1930:25）「社会的実験室」（渡部 1936）としての役割の指摘もある。これは、その後、西内（1971）が学生セツルメントを「社会的実験室」と表現したことにもつながるもので、大学生にとってのセツルメント運動の意味として重要な点の 1 つといえるだろう。また、大学の変化によって大学生の変化があり、それがセツルメントへ向かう動機とも大きく関連しているという指摘も、戦後の学生セツルメントを検討するうえで重要な視点といえる。

もう 1 点、大学セツルメントの特徴として重要な点は、その経営にある。渡邊（1930:20）は関東学院セツルメントについて、学校経営であるため人件費はいらず、大学からの予算すべてを事業費に回すことができるとしている。この点は東京帝国大学セツルメントの場合、より特徴的で、大森編（1937:27）によれば、その収入には天皇の下賜金が含まれていた。このほか、企業による援助や発行物への広告掲載費収入など、大学を中心として多くの金銭的援助があった点、大学経営であった点が重要である。なお、援助は、金銭面に限らず、卒業生である OS によるものも大きく、診療所の医師に OS が就く例などもみられた。

こうして大学を拠点とするセツルメントは、大学の経営によって、また大学教授をはじめとした多くの援助のもとで活発な展開がなされ、東京帝大セツルメントの児童問題研究会（1933, 1934, 1935）による『児童問題研究』誌などにもその成果がみられる。

４．戦前と戦後の共通点と相違点―先行研究からの論点―

（1）北川による「共通する本質」と「形式的な断絶」の視点

これまで、戦前のセツルメント研究の代表として大林の論を検討したうえで、東京帝大セツルメントとその前史、大学セツルメントに関する戦後の評価や位置づけ、大学セツルメントをめぐる当時の議論を概観してきた。本項では、それらをふまえて戦後の展開を検討する際の論点を整理したい。

戦前と戦後を比較する上で、北川（1958）は、1つの手がかりになると考える。北川は、戦前と戦後の学生セツルメント運動を「共通する本質」と「形式的な断絶」という2つの側面から論じており、戦後の独自性を明らかにする上で有用な視点といえる。北川は、戦前と戦後に「共通する本質」（北川 1958:13）として、3点を挙げる。それは、第一に、「学生及びインテリゲンチャの持てる力、すなわち知識によって、（適当な表現ではないが媒介として）市民、農民、労働者との連携をつよめ、科学の私物化、御用化、象牙の塔化を排除すること、その現実への適用と検証を根底にもっている」（同上:13）という点。第二には、知識という武器によって貧困、社会的教育的不平等、戦争及び平和などの基本的問題に取り組み、ヒューマニズムによって各セツラーが支えられているため、思想やイデオロギー、年齢等の違いを超えて相互協力しうる基礎があるとする点。第三には、「これをふまえ、各セツラーが民主主義的討議によって自主的に運営に参加し、国家権力やその他の政治力に左右されず、少なくとも健康にして文化的な社会を指向し、行動する事（地元の人達をふくめて）によって結ばれている」（同上:13）という点である。さらに、学生セツルメント運動は社会事業や慈善事業の枠にとどまらない社会運動的側面を有しているとも述べる。一方で、北川の指摘した、戦前との「形式的な断絶」（同上:14）の側面は、財政面と運営面に顕著にあらわれる。東京帝大セツルメントは天皇の下賜金を受け（大森編 1937）企業などの援助もあったが、戦時体制に入り軍国主義が高まりを見せる中で「弾圧」[18]を受け、解散を余儀なくされる。その後再建した戦後の学生セツルメントは、戦前の大学セツルメントとは異なり、大学当局の関与はなく、大学教授も、あくまで学生に対する助言者の立場にあるだけで、経営は学生の手によって行われることになる（音田 1958:12）。つまり、財政支援がなくなり、学生主体の運営になる点に戦前との「形式的な断絶」の側面が見出されるのである。さらに、北川（1958:14）は、「学生のみによる再建」という点も「形式的な断絶」として挙げている。北川による指摘は、現代の学生セツルメントを論じるうえでも有用な視点といえるが、一方で、北川が論じた1958年とその後の学生セツルメントの状況は大きく異なっている。そのため、1958年以降の流れもふまえたうえで、「共通する本質」と「形式的な断絶」を検討する必要があろう。以下、この2つの視点を手がかりに、戦前の大学セツルメントに関する研究の概観から得られた知見をもとに検討したい。

（2）大学セツルメントと学生セツルメント―「共通する本質」と「形式的な断絶」の視点から―

大学セツルメントの思想や特徴に関する研究において指摘されてきた点を整理すると、次のようになるだろうか。

思想に関しては、①相手に対して、対等に、またのび行く力をもった存在として関わりともに生きるという姿勢や態度、換言すれば人格的接触の精神ともいうべきもの、②大学生の純粋さや情熱、主体性に基づく展開、③左翼運動や社会運動としての傾向と左翼運動としてみなされる風潮、である。対象や方法、取り組まれた内容との関連では、①大学拡張の精神に基づく労働教育や細民教化、そして①と関連して②教育的機能や教育運動の側面、③階級調和や社会改良の役割、④社会事業の経営、⑤自治的な組織づくりや小社会形成といった役割、⑥家庭訪問や社会調査による現実社会の把握、である。特徴に関しては、①大学生自身が現実から学び成長する「社会的実験室」としての側面、②大学経営の側面と大学や教授、OS らによる援助、③大学の変化や社会の変化と関連して展開される点、などが挙げられる。なお、便宜上、特徴を三点に整理したがこれらは互いに関連し合うものであり、厳密にわけることはできない。

北川（1958）による「共通する本質」も参照しつつ検討すると、①相手に対して、対等に、またのび行く力をもった存在として関わりともに生きるという姿勢や態度、換言すれば人格的接触の精神ともいうべきもの、②大学生の純粋さや情熱、主体性に基づく展開、③大学生自身が現実から学び成長する「社会的実験室」としての側面、④大学の変化や社会の変化と関連して展開される点、⑤家庭訪問や社会調査による現実社会の把握、については、戦後においても共通すると考える。ただし、その内実に関するより細かい検討と変化の把握および学生セツルメントの固有の特徴といえるか、という点は課題といえる。

他方で、「形式的な断絶」の側面としては、先にも指摘したとおり、大学経営であった点が大きい。ただし、戦後において学生の自主的・主体的な団体として再建してから、正式な大学の援助はなくなったとしても大学教授や OS の支援も「断絶」したといえるのか、本当に「学生のみによる再建」（同上:14）といえるのか、という点は検討を要する。ほかに、大学セツルメントにみられた社会事業経営の側面が戦後において変化していく点は、本節の第 2 項においても指摘した。

そして、上述した中で「共通する本質」というべきか否か、について検討を要する点が複数ある。それは、第一に、左翼運動や社会運動としての傾向と左翼運動としてみなされる風潮、である。戦前においてこうした傾向が強くあったことはこれまで述べてきたとおりであるが、戦後において実際にはどうだったのか、という点が課題である。この点については先行研究でも十分には検討されていない。実際、この点について明確にすることは困難である。しかし、学生セツルメントの思想的変遷をとらえる上での一つの論点にはなるのではないだろうか。また、この点に関連して、階級調和や社会改良の役割の変化も検討を要する。これは、思想的側面も多分に含むが、戦前の社会状況を反映したこうした思想や役割は、戦後においてどの程度意識されていたのだろうか。そしてそれは具体的な実践や運動の展開の中で、どのようなかたちであらわれたのだろうか。大学生による階級調和や社会改良には限界があるのみならず、社会の変化の中で、この側面はしだいに薄れていったと考えられるが、この点も課題といえるだろう。

第二に検討すべき点として、①労働教育や細民教化の側面、関連して、②教育的機能や

教育運動の側面、が挙げられる。大学セツルメントにおける対象として、労働問題や貧困問題は非常に重要な意味があり、労働教育、細民教化は大学以外のセツルメントと同様、大きな役割の１つであった。しかし、戦後、社会事業や社会福祉の法制度の整備がすすむなかで、労働教育や細民教化の役割は戦前と同じウエイトを占めていたとは考え難い。その意味で、学生セツルメントの対象にはどのような変化や展開があったかを明らかにすることが課題である。また、関連して、大学セツルメントの有していた教育的機能や教育運動の側面は、戦後のどの時期まで、またどの程度みられたのか、という点も課題といえるだろう。これは難しい課題であるが、少なくとも 1960 年代後半あたりから 1970 年代にかけて、大学進学率の上昇および地域住民が主体となる運動や自治的組織づくりなどの展開のなかで、学生が住民を教育するといった役割は消失していくと考えられる。この点も意識しつつ戦後の展開を検討したい。

第三に、自治的組織づくりや小社会形成といった役割である。戦後においても地域組織化といった用語で議論されてきたが、地域社会や地域福祉をめぐる変化の中で、学生セツルメントはこのような役割を果たしえたのだろうか。この点の把握にも限界があると考えられるが、全国組織の方針との関係、地域の状況やその変化との関連などから検討する必要があるだろう。また、自治的組織づくりや小社会形成という文脈で議論されるとき、主体を誰に置くのか、という点も着目すべき点であるだろう。

以上、戦前の大学セツルメントとの「共通する本質」と「形式的断絶」の視点を手がかりにしながら、大学セツルメントの先行研究から明らかになった知見について整理し、課題を示した。次に、戦後におけるセツルメントの研究について概観し、明らかになった点と課題を示したい。

第３節　戦後の主なセツルメント研究の概観と変遷

本節では、戦後における主なセツルメント研究について時代ごとに概観し、研究動向の変化を捉える。その上で、課題別に先行研究の知見を整理し、到達点と本研究で取り組むべき課題を示すこととする。

１．戦後～1960 年代

大林宗嗣に端を発した日本でのセツルメント研究は、戦後も活発化した。

阿部志郎は、ホワイト・チャペルの貧民窟でセツルメント運動に身を投じたトインビーについて「貧困の原因を個人の欠陥に帰する救貧法の根本的態度を歴史的に問うことから出発した」(阿部 1957:44)と述べ、その歴史的背景と意義を指摘する。その上で、セツルメント運動の思想的背景として、①社会主義思想、②理想主義、③キリスト教社会運動、④大学延長運動、の 4 点を挙げる。そして、「セツルメントの思想は、『大学延長運動』の中に根ざして居り、その背景に『大学』がある事は、セツルメントの歴史として興味深い事実である」(阿部 1955：40)としている。なお、西内(1971)[19]等は、日本におけるセツルメントの特色として、仏教系や民間のセツルメントの存在にも言及している。

西内潔は、日本のセツルメントの現状分析と将来性の章の中で、関東大震災（1923 年）を契機として全盛時代を迎えたセツルメントが少し前まで不振の傾向にあったとしたうえで、「しからば、セッツルメントは、現代に不要かといえば、今日程必要なときはない。社会福祉事業の科学化、専門化、技術化に伴う、社会福祉教育の実験室として、又、道義の頽廃に対する青少年不良化防止の施設として、健全娯楽の教場として、更にコムミュニティー・オーガニゼーションのセンターとしても必要である」(西内 1971：59)と述べている。さらに、公民館との違いとして、要求するものを誘引するのではなく要求するところに入り込む点を特色としている(同上:62-63)。一方、セツルメントに対して、社会主義者からは階級闘争の緩和剤、資本主義者には無産者階級の味方や赤の温床といわれるという点について、「セッツルメントは発生史的にこれを観れば、民主主義を基盤とした橋渡し作業であり、換言すれば、人格交流運動であり、生活教育であり、社会福祉教育であり、全人教育である」(同上：63)と批判している。

他方で、西内(1971)は、学生セツルメントについても言及する。その中で、専門的社会福祉事業と学生セツルメントを比較し、「前者は常に顧慮と細心と慎重とのうちに、種々なる社会的関係を考慮して経営されるが、後者は、この点は実に自由で、学生セッツラーは社会的思惑を神経質に顧慮せず、行動するに当って、良心と理知との命に従うか否かが、基本点のようである。もちろん、数々の問題が内在しているが、しかし、彼等は、この点において、かなり自由に、自己の思策と実験に向って勇敢に精進し、セッツルメントを社会的実験室としている。学生セッツルは一般セッツルのパイオニア的役割を果している」(同上：84－85)とその区別と意義を述べている。また、学生セツルメントに関する様々な見方があることについても触れ、「セッツル運動は、地域運動か、教育運動か、学生運動か、民主主義運動かについて、研究を続けている学生グループもいる。わたくしは、それらを綜合したものがセッツルメント運動であり、そのウエイトを地域におくか、教育におくか、学生運動におくか、将又、民主主義教育運動におくかは、その時代の思潮の流れと、地域社会のニードによって決定され、方向づけられるべきものであるとおもう」(同上:86)としたうえで、「セッツルにおいて、教えらるる、人生の縮図は、実在する累々たる鉱脈の一部であり、細片であるが、これを実験することは、学生セッツラーの人間形成への一大礎石というべきであろう」(同上:86-87)と述べる。

なお、本期の学生セツルメントに関する書籍としては、全国セツルメント連合書記局(1957)や名古屋保育問題研究所編(1963)などが挙げられる。これらは、直接実践や運動に関わった人物や団体による記録という色彩が強いものの当時どのような認識のもとで実践が行われたのかを知る上で重要といえる。

本期の研究はセツルメントの思想や意義、学生セツルメントとの違いとその意義についての視点を提示するものであり、後の研究にも大きな影響を与えた。セツルメントの思想的背景への注目、阿部の、セツルメント思想は「大学延長運動」の中に根ざしており、その背景に「大学」があるという指摘、西内(1971:86)の、学生セツルメントの特徴は「その時代の思潮の流れと、地域社会のニードによって決定され、方向づけられるべきものであ

るとおもう」との指摘は、学生セツルメントの意義や果たした役割を検討する上で非常に重要な論点といえる。さらに、学生セツルメントの有する人間形成の側面を「社会的実験室」とした西内の表現は、資格取得のためのカリキュラムやサービスラーニングの風潮が高まる今日の社会福祉分野における大学教育のあり方を考える上での１つの切り口にもなりうると考える。しかし、これらの研究にみられるような、学生セツルメントについてセツルメント本来の思想や精神をふまえてその意義を検討する研究は、現代に継承されているとは言い難い。その背景には学生セツルメントの質の変化があると推測されるが、その過程についての体系的な研究も見出し難い。

２．1960 年代後半～1980 年代

1960 年代後半には、浜野[20]（1966）がセツルメントに関する議論を整理した上でセツルメントの理論化と課題の検証をセツルメントの実践例を用いて論じている。それによると、セツルメントはその起源を明治にもちながら、その有効性や意義が一般社会の中で充分に認識されておらず、また、近代的市民権も獲得するに至っておらず、結果、社会事業法制の中でセツルメントが十分な位置を与えられていないとする。そうした現状認識の上で、セツルメントを理論上どのように考えるべきか、先行研究をふまえ、2 つの点を指摘した。1 つは、「セツルメントをどのようなものとみようとも、地域より隔絶したレベルでは問題は解決しない」(同上:82-83)という点、もう 1 つは「セツルメントをすくなくとも社会福祉という専門的観点からみようとすれば、セツルメントの果す、社会的諸問題の社会化という点が重要なポイントを提示する」(同上:83)点である。そして、「セツルメントは、あくまでそれが結びついている地域住民の生活要求を、それらを地域住民自体の問題として、そこに意識的な方法論を導入しながらとりあげ、否、それをこえて現代の社会構造のもたらす必然的な結果として提示することを要求されているものである。社会問題の社会化という、セツルメントに本質的な機能は、その具体的な方策として、多かれ少なかれ、地域の組織化という手続き、さらには social action への志向を含まざるをえない、と考えられる」(同上:83)と述べる。さらに、セツルメントの抱える課題として、その実践主体との関わりについて言及されてきておらず、「実践主体と、提示された理論ないし理念に深い断層のあるように思われる」(同上:83)とする。その上で、地域組織論にかかわる理論的提示をふまえた活動主体の論理の組み込みが必要であり「組織論の一つの問題として解決できないだろうか」、と結論づけている。

関連して岡村(1968)も、地域組織化との関連からセツルメント活動について論じるなかで、外面的な類似性とは別に、設立動機や活動の本質はセツルメントによって大きく異なることに触れ、「特に強調しなければならないのは単なる金品の給付よりも、地域住民の社会意識や文化的教養の開発等、内面的、人格的向上を目的としていた、という点である」(同上:11)と指摘した。さらに、「公営隣保事業の主張が有力になりつつある」状況に触れ、「公営公設の隣保館」が、「住民の主体性を基本とする共同社会づくりのような、すぐれて個性的な、自発的な住民の活動を、援助することができるのであろうか。官庁の御用団体や下

部組織になりさがった地域団体を、われわれは余りにも多く知っている」（同上:15）と述べた。

1970 年代～80 年代に入ると、高島（1979）（1980）や山田（1977）の他、河合（1977）等、イギリスにおけるセツルメント思想の歴史やセツルメントの基盤をつくった人物の歴史研究が多くみられるようになる。

また、横須賀基督教社会館の館長である岸川（1974）や、永岡（1987）をはじめとした隣保事業や地域福祉の源流として今日への発展を捉える方向性が高まる。1987 年には訳書である『トインビー・ホールの 100 年』が出版されるなど、日本の社会福祉において地域福祉的側面からセツルメントが注目された時期ともいえる。さらに、永岡・井上（1983）など、日本における民間・公立セツルメントの歴史研究も進む。

この時期、大学セツルメントに関しては、滋賀編（1979）、福島ら（1984）などの東京帝大セツルメントの回顧録や当時活動していたセツラーを中心に歴史を整理する動きがみられる。また、本研究の重要な論点を示す論文として、「学生セツルメントの動向」（高島 1968）が挙げられる。これは、学生セツルメントの誕生と足跡を述べた上で、当該時期における学生セツルメントの動向やその特色について論じたものである。詳細は本論で言及する。

このように、1960 年代後半～1980 年代は、それまでの研究蓄積をふまえてセツルメントを理論化していく試みや地域福祉の側面への注目、セツルメントの形成に関わった人物史・思想史の研究が活発に進められた。その背景には、社会福祉政策が在宅福祉・地域福祉へとシフトしていく動向、隣保事業を含めたセツルメント運動の広がりや社会運動、当事者運動の高まりといった社会状況があるといえる。

活発な論が展開されたなかでも、浜野（1966）による社会問題の社会化、地域住民の生活要求に対して地域組織化やソーシャル・アクションの手法を用いるという指摘および実践主体の問題は、学生セツルメントのあり方を検討する上でも重要な論点である。しかし、浜野による実践主体についての言及は隣保館や市民館の形態をとる施設型セツルメントについてのものであり、学生セツルメントを想定して論じられていない。また、岡村（1968）の指摘も、学生セツルメントについて直接論じたものではないが、セツルメントの精神を鋭く捉えた上で、当時の隣保館の公営化、地域福祉が国家単位ですすめられようとする状況に警鐘を鳴らしたものであり、地域共生社会がキーワードとなっている今日の地域福祉をめぐる状況とも重なるところがある。この点については本論で詳しく検討したい。

３．1990 年代～現在

次に、1990 年代以降における、学生セツルメントについての研究動向を検討したい。中村（2014:45）は、戦後の「大学セツルメント」[21]終焉後のセツルメントに関する文献は、当時活動していた学生によって編纂された回顧録や同人誌によって活動の具体的な様子や理念的なことを強調した記述がその多くを占めていると指摘する。具体的な文献は挙げられていないが、例えば、太田（2008）、小山（2015）、宍戸（2002, 2016）などによる自身の経験を回顧して自身の現在や現代社会における意義づけを行った小論、氷川下セツルメント史

編纂委員会(2007,2014)、寒川セツルメント史出版プロジェクト(2018)など資料を用いつつ単一のセツルメントの歴史や活動について記述した書籍、加賀(2002)、手塚(2009a)(2009b)らの自叙伝的小説などが挙げられるだろう。このように、当時活動していた学生による回顧録や自叙伝的小説、活動の具体的な様子や当時の理念について記述した書籍などが多くみられ、東大セツルメント以外の文献が増えることも本期の特徴の１つといえる。

中村による指摘の一方で、近年、学生セツルメントのもつ一定の性格や側面から論じた研究が増えており、多角的な視野から学生セツルメントが見直されているといえる。これらの背景には、現代の生活問題や社会問題には、学生セツルメントが取り組んできた地域課題や実践と重なるものがあるという認識があると推察される。この、多角的な視野について、①貧困に対する取り組みの側面、②大学との関係の側面、とくに大学拡張運動の起源としての側面、③医療活動・災害救援の側面、④単一の学生セツルメントや現代におけるセツルメントのあり方に関する側面、の 4 種類に大別して検討したい。

第一に、貧困に対する取り組みの側面から論じたものについては、柴田(2007)、高木(2015)、吉田(2016)などが挙げられる。柴田(2007:54-55)は、東京帝大セツルメントの歴史から学んだこととして、3 点を挙げる。それは、①「セツルメントや地域組織化の原点は調査で問題を掘り起こすこと」、②「教育的な方法から住民の主体化が芽生えることがある」こと、③「保育や児童の文化活動には、貧しい生活に『欠けているもの』について充足する可能性があり、それを媒介として人格的交流が芽生える」こと、である。3 点目の「保育や児童の文化活動」に限定している点は、ほかの活動もふまえた検討が求められるが、ここから、大学生によるセツルメント活動に対する評価の戦前期からの共通性が見出される。一方で柴田は、今日におけるセツルメントの課題として、「社会政策の方向とセツルメントの視点が一致するのか、セツルメントの視点を実現できるような力量を蓄積することができたのかが問われている」(同上:74)と述べる。これは、施設型セツルメントに関する論であるが、学生セツルメントを検討する上でも社会政策の動向（方向）との関連の中でどのように展開されてきたのか、という点は重要な視点となる。しかし、社会政策との関連の中での戦後の学生セツルメントに関する先行研究は見いだせず、十分な検討がなされているとはいえない。

他方、高木(2015)や吉田(2016)は、現代の子どもの貧困への取り組みとして各地に広がる子ども食堂などの起源として学生セツルメントを捉え、論じている。吉田(2016)は、「子ども食堂に通じる従前の民間支援活動の取り組み」(同上:360-361）としてセツルメントに言及しているが、地域福祉施設型のセツルメントの取り組みの検討に留まり、学生セツルメントについては今後の課題とされている。他方、高木(2015)は、今日における大学生の地域活動としてセツルメント運動を位置づけ、沖縄における学習支援活動や、市民団体が主催し大学生が担い手として参加する多文化共生との取り組みを紹介する。その上で、両者の取り組みは、従来のセツルメント運動の視点に加えて新たな価値として「居場所づくり」の概念を創造している、と述べる。高木による論考は、従来とは異なる現代的課題に応じたセツルメントの価値を見出す試みという点で意義がある。しかしながら、セツルメ

ントの概念を幅広く捉えたものであり、高木自身も「想定」(同上:29)しているとおり、前述の取り組みは学生セツルメントといえるか、という疑問は否めない。その意味でも、学生セツルメントの有する特徴を史資料に基づき歴史から丁寧に紐解くことが課題といえる。

第二に、大学との関係の側面、とくに大学拡張運動の起源として論じたものについては、元根(2011)や中村(2014)が挙げられる。これらは学生セツルメントの思想的背景にある大学拡張運動の視点から学生セツルメントの歴史を捉え、大学開放事業のあり方や大学における社会貢献活動のあり方を検討している。とくに中村(2014)は社会貢献活動の側面から大学セツルメントについて考察する中で、「大学拡張」と「社会調査」の二本柱に触れ、時代の流れに対する「抵抗」の意味を有した戦前と異なり、戦後は、「学問と実社会の間を往還した学びの深化と活動の広がり」(同上:50)が「大学セツルメント」を成長させたと考えられる点を指摘している。また、現在でも「セツルメント」という名称を残した学生ボランティアサークルは少ないながらも存在し、当時と類似した活動も続けられていると述べる一方で、「過去の学生セツルメントの歴史に匹敵する、大学教育として学生を社会貢献活動につなぐことの独自性の発展として顕著にみられるものは存在しているのだろうか」(同上:51)と投げかける。

中村(2014:50)による「往還した学びの深化と活動の広がり」の指摘は、先に挙げた西内(1971)とも共通するものであり、現代の学生セツルメントのあり方を問う視点は、のちに言及する宍戸(2010)、濱野(2006)とも共通するものである。「大学拡張」と「社会調査」を柱とした学生セツルメントは、社会や制度政策の変化と共に、時代にそぐわないものとなり質や実態が変化していった側面がある。しかし、その経過についての詳細な分析は先行研究からなされていない。また、中村(2014)では戦前と戦後という分け方に留まり詳細な時期区分からの検討が不十分といえる。

第三に、医療活動・災害救援の側面から論じたものとしては、浅井(2013)(2015)や和田編(2001)などが挙げられる。浅井(2015)は、ヤジエセツルメント保育所の実践から伊勢湾台風における保育の救援活動について論じている。東京帝大セツルメントは関東大震災の救援活動を、東京大学セツルメントはキティ台風の救援活動を契機に始まっており、浅井が取り上げているヤジエセツルメントも伊勢湾台風を機に始まった保育の救援活動であることをふまえれば、学生セツルメントと災害救援活動の関係性は深く、重要な側面の一つに位置づけられる。この意味で浅井の研究は意義深いものであり、ヤジエセツルメントの保育救援活動の展開を論じた上で、それらの活動が公立保育所設立や保育労働運動、保育所づくり運動につながっている点も明らかにしている。

また、戦後初期における医療活動も学生セツルメントの重要な側面の一つといえる。なかでも、東大セツルメントの診療所活動の歴史は長く、再建当初から数名の医師が生活を投げ打って学生とともに医療活動にあたってきた。とくに亀有セツルメントの診療所活動の系譜を引くセツルメント診療所は現在も地域の医療を担っており、その歴史は和田編(2001)に整理されている。こうした災害救援や医療活動は学生セツルメントが担ってきた大きな役割の１つであったが、前者は様々な学生ボランティア団体や市民団体に、後者は

より専門化しており現在では学生セツルメント固有のものではない。しかし、学生セツルメントがその分野において果たしてきた役割を丁寧に検討し、歴史の中でどのように布置することができるかを検討することは学生セツルメントの歴史的意義を明らかにするうえでも重要といえる。また同時に、社会福祉の専門分化が学生セツルメントの活動領域において影響を与えた側面も見出される。

第四に、単一のセツルメントや現代におけるセツルメントのあり方を追求するものとしては、黒岩(2015)や宍戸(2010)、濱野(2006)などが挙げられる。黒岩(2015)は、日本女子大学０町セツルメントの活動内容や経緯について「大学拡張、労働運動、社会運動、民主主義」をキーワードとして論じている。これは、一次資料を用いた丹念な検討によって学生セツルメントの内実を明らかにした点でこれまでの研究にはみられない意義がある。ただし、ほかのセツルメントの実践や組織体制からの検討が求められる。

他方、宍戸(2010)は、現代において改めてセツルメントのもつ意義の検討が必要であるとの認識のもと、伝統的セツルメントは今日に継承されていないのか、もし受け継がれる可能性があるならどのような形態であればセツルメントといえるか、という課題を設定し論証を試みている。同様に、濱野（2006:143）も、「社会福祉実践におけるソーシャル・セツルメントの伝統はまったく過去のことがらとなってしまったのか」という問いを立て、検証を試みている。宍戸（2010:78）は、セツルメントの思想に関して、「慈善事業に終わるのではなく地域住民のニーズ調査発掘により、地域の改善のための運動体であったこと。そして教育活動をとおして自立に向けての支援があったことなど社会福祉の理念を形作っていた」ことを指摘する。さらに、「人間関係を地域組織化へと方向づける」側面を有していた点などを挙げ、「今日の地域福祉への土台としてもその意義を見ることができる」と述べ、現代の社会福祉や地域福祉の源流として評価している。一方で、「セツルメントがかつてと同じ比重と価値とをもって社会のうちに存在を主張しえない理念的不明確さがある」(同上:71)とも指摘する。

このように、セツルメントの理念が現代における社会福祉・地域福祉に継承されているとして評価しながらも、理念的不明確さによってその活動や運動が現代社会に合わないものとなったことを明らかにしている。しかしながら、セツルメントの理念の変遷や現代における不明確さの背景についての言及はなされていない。加えて、セツルメント全般について論じており、実践や運動の展開をふまえた論証は十分とはいえないが、現代にも通じるセツルメントの意義を明らかにしたうえで現代のセツルメントの課題を示し、今後のあり方の検討を試みている点で意義があるといえる。さらに、多様な民間組織がセツルメントのもつ機能を何らかの形で受け継いでいる点についても指摘している。宍戸の指摘するセツルメントのもつ機能については、学生セツルメントについてもその展開の中で明らかにすることが現代の学生セツルメントの位置づけや今後のあり方を検討する上での手がかりになると考えられる。

なお、４つの分類にはあてはまらないが、学生セツルメントのもつ一定の性格や側面という点で本研究にとって重要な先行研究として渡邊（2014）も挙げられる。渡邊(2014)は、

ソーシャル・アクションの視点から、近代社会改良とソーシャル・アクションの関係について論じる。その中で、東京帝大セツルメントの社会運動的性格について言及した上で、明治学院大学セツルメントに携わっていた天達忠雄について論じている。久保(2007:641)は、『エンサイクロペディア社会福祉学』のなかで、ソーシャル・アクションを「社会・政治体制の変革などを求める社会運動や政治的運動とは異なり、セツルメント運動のような社会改良運動である」と解説する。また、ソーシャル・アクションについては、すでに述べた浜野(1966:83)の指摘にも重なる。ここに、セツルメント運動の有するソーシャル・アクションの側面が見出せる。また、天達忠雄[22]や東京帝大セツルメントに携わった浦辺史[23]などがそれぞれの立場からソーシャル・アクションや社会福祉運動について論じているほか、さまざまな社会運動および社会福祉運動に OS が関わっていることからも、セツルメントの影響を垣間見ることができる。ここでは、視点の１つとして示すにとどまり、詳細は本論にて論じる。ただし、一言付すと、地域組織化やソーシャル・アクションへの志向性の側面から学生セツルメントを捉えるとき、そこには主体形成の問題も大きく関わってくるといえる。

以上から、とくに 2000 年代以降、現代の生活問題や社会問題はセツルメントが取り組んできた地域課題や実践・運動の内容と重なるものがあるという認識にもとづき、多様な視点から改めて学生セツルメントに関する研究がなされつつあるといえる。これらの研究蓄積は、セツルメントの思想や特徴、そして現代における課題を示している点で意義があるものの、戦前と戦後の区別が曖昧であり、セツルメントの捉え方も論者によって大きく異なっている。また、セツルメントやその思想との関連での言及はあっても学生セツルメントそのものについて論じた先行研究は少ない。これらの背景の１つとして、学生セツルメントの歴史や展開についての論証が不十分である点が挙げられる。

４．学生セツルメントをめぐる研究の変遷から―到達点と課題―

これまでみてきたとおり、セツルメントや大学セツルメントに関してはさまざまな論者によって研究の蓄積がなされてきた。しかし、戦後の学生セツルメントに関しては、高島(1968)を境にその後、学生セツルメントそのものをテーマとして論証した研究はみられなかった。2000 年に入り、学生セツルメントに改めて注目する研究がみられるようになるが、それらは貧困問題、大学拡張運動や社会貢献活動、災害や医療など特定の分野の取り組みを検討する上で学生セツルメントとの関係を論じたものが中心となっている。この学生セツルメントへの注目の背景には、現代の生活問題や社会問題はセツルメントが取り組んできた地域課題や実践・運動の内容と重なるものがあるという認識があると推察される。また同時に、学生セツルメントの思想や意義、価値については社会福祉の理念との関係もふまえた模索がなされており、その重要性は近年改めて見直されていることも明らかとなった。しかしながら、学生セツルメントについて論じた研究は非常に限られており、体系的に明らかになっているとは言い難い。さらに、現代においては資料が全国に散逸しており、その収集や保管も課題となっている。その意味で、一次資料に基づき戦後の学生セツルメ

ントの実践や運動の展開を整理し、学生セツルメントの意義や特徴を明らかにする本研究には、先行研究にない意義があるといえる。

５．課題別の先行研究の概観と論点

これまで、時代ごとにセツルメントの先行研究を概観してきた。次に、先行研究からみえてきた課題を整理し、論点を示したい。

（１）先行研究からみえてきた課題の整理―学生セツルメントの資料に関して―

先行研究の検討を通し、セツルメントに関する先行研究は、隣保館や市民館といった施設型セツルメントに着目した研究が大半であり、地域福祉の側面からのセツルメントに関する文献や研究に比して学生セツルメントに関する研究は圧倒的に少ないことがわかった。一方、近年、多様な生活問題や社会問題とのかかわりのなかで、学生セツルメントの意義が見直されつつあることを背景に、その研究も少しずつ増えている。ただし、それらは一側面からの検討や一時期の資料のみによる検討に留まり、セツルメントの源流として位置づく学生セツルメントの今日に至るまでの展開とその内容・意義についての体系的な検討は十分とはいえない。

その理由の１つとして、学生セツルメントに関する史資料は、大学の統廃合などによって全国に散逸している状況であることが挙げられる。こうした状況をふまえると、先にも述べたとおり、全国における学生セツルメントの実践史・運動史について、一次資料を手がかりとして整理したうえで、学生セツルメントとはどのようなものであったか、その意義と課題は何か、なぜ衰退していったのか、について、明らかにすることが大きな課題といえる。

また、学生セツルメントは、全国学生セツルメント連合、地域の広域連合、単一のセツルメントという３つの位相からなる組織体であったが、これらをふまえた先行研究は、北川(1958)、西内(1971)、高島(1968)などにとどまり、これらも地域の広域連合に関する言及はほとんどなされていない。各位相の展開が相互に関係しあって実践や運動が展開されたことをふまえれば、各位相における議論や動向を整理し、時期ごとの変化を現代の視点から明らかにすることが課題といえる。

他方、山田(2015b:3-6)は、学生セツルメントの資料や研究の重要性を指摘しつつ、学生によって丁寧に保管されていた膨大な資料が歴史に埋もれた理由として、①学生セツラーの多忙さ、②セツルメントには、医療衛生、権利擁護、社会教育、社会福祉など様々な精神や実践が融合しており説明しにくいこと、③セツルメントの経験の意味、価値、意義が大きすぎて、言葉では表しきれないこと、の3点に加えて、学生運動や政治運動との関係が背景にあることに触れ「知られない方がいい」という心性を生んだのではないかと考察している。

歴史に埋もれてしまい、資料が散逸してきちんとした評価がなされないまま今日に至っている状況のなか、筆者は、先述した大阪府立大学[24]、日本福祉大学の井戸田セツルメント、

ヤジエセツルメント、東京都足立区のセツルメント診療所などにおいて保管されている学生セツルメント関連資料の発掘・保管・整理に関わってきた。また、多くの OS から個人保管の資料を提供もしくは貸し出しいただいた。本研究では、それらの資料に基づき全国的に展開した学生セツルメントの歴史的展開について実証的に明らかにしていきたい。

（２）先行研究からみえてきた論点の整理

これまでの先行研究の検討を通してみえてきた論点として、大きく4点を取り上げる。

1点目は、時代背景や社会の変化、社会福祉の動向との関係である。先述した濱野(2006)、宍戸(2010)、中村（2014）などにみられるとおり、現代のセツルメントはセツルメントと言い得るのか、という議論がある。例えば宍戸(2010:71)は、「セツルメントがかつてと同じ比重と価値とをもって社会のうちに存在を主張しえない理念的不明確さがある」と述べた。しかし、これは近年になって生じた問題ではなく、戦前、日本にセツルメントの理念が取り入れられたときから議論されてきたものである。この点は第1章で詳述するが、例えば、大林(1926：39-41)は、既に1928年の段階において、セツルメントの条件を満たしたものがどれほどあるか、との疑問を呈していた。

そのように考えると、セツルメントの思想が日本に取り入れられ、東京帝大セツルが発足した時代の定義や理念から、戦後再建後の定義や理念の変遷について検討する必要があるといえる。むしろ、学生セツルメントの、要求するものを誘引するのではなく要求するところに入り込む(西内1971:62-63)という特色、「社会問題の社会化」（浜野1966:83)という役割から考えれば、社会の動向や法制度、政策の変化によって変わることが必然といえる。これは、理念や定義だけでなく実践や運動についてもいえることである。実際、西内(1971:68)も、学生セツルメントは「その時代の思潮の流れと、地域社会のニードによって決定され、方向づけられるべきものであるとおもう」と述べた。では、時代や社会、法制度や政策の変化は、学生セツルメントにどのような影響を与えたのか。また学生セツルメントは各時期の社会状況の中でどのような役割を果たしたといえるのだろうか。学生セツルメントについて検討する前提として、社会、政治・経済、法制度や政策、そして人々の生活や地域状況の変化の把握が重要といえる。

2点目は、地域実践と住民自治との関係である。これまで述べてきたとおり、学生セツルメントは地域に入りこみ、地域や地域住民の現実を知るなかで住民の要求に応じた実践に取り組んできた。例えば、先にふれた岡村(1968:15)は、公営公設のセツルメントには「住民の主体性を基本とする共同社会づくりのような、すぐれて個性的な、自発的な住民の活動を、援助すること」ができるか、という批判を投げかけていたが、裏を返せば、ここには、地域住民の主体性を基本とする精神がセツルメントにはあることを示しているといえる。また、柴田(2007:54-55)も、「教育的な方法から住民の主体化が芽生えることがある」と指摘していた。浜野(1966)も地域組織化の視点からセツルメントを論じるなど、住民を主体として地域に働きかけるという姿勢がセツルメントにはあった。しかし、このような精神や姿勢は学生セツルメントにおいてどのように引き継がれてきたのだろうか。社会動

向との関連もふまえつつ学生セツルメントの地域実践を検討することを通して、地域や地域住民へのまなざし、そして地域住民の主体形成や地域の自治とのかかわりについて検討することが課題といえる。また、学生セツルメントの地域実践は地域の主体形成や自治を育む上でどのような役割を果たしたといえるのか検討することは、地域共生社会がキーワードとなっている今日においても重要な意味があると考える。

3点目は、社会運動・社会福祉運動の視点である。先にも引用したとおり、阿部(1957:43)は、「セツルメント運動はこの社会運動の一環として現れたもので社会問題を自らの手で解決せんとする思想性を包含する自由にして任意の運動である」と定義した。また、『エンサイクロペディア社会福祉学』でも、ソーシャル・アクションは「社会・政治体制の変革などを求める社会運動や政治的運動とは異なり、セツルメント運動のような社会改良運動である」と解説されていた。このように、セツルメントのもつソーシャル・アクションの側面への言及はなされているが、学生セツルメントの展開過程から具体的にソーシャル・アクションの側面の内実や変化について検討することが課題であるといえる。

セツルメントは、イギリスではじまった当初から、社会改良運動としての役割を果たしていた。日本の学生セツルメントの歴史においても、1950年12月に定められた東京大学セツルメントのはじめての規約では、「この会は貧困者の生活向上をはかるために種々の事業を行い、それを通じて調査研究をするを目的」(同上:Ⅰ8)とされた。ここにも、学生セツルメントの社会福祉運動としての側面を垣間見ることができる。一方で、真田は、1945－60年前後を戦後社会福祉運動の第1期と位置付けた上で、「今日からみれば、運動が未分化なところがあり、社会福祉運動も特化されずかえって広範な運動になった」「生活問題に対応し反映する運動は社会福祉領域に限らないさまざまな領域の運動となって現れたのであって、生活問題が運動を規定する関係は、社会福祉以外の領域の運動の総体との関連でみなくてはならない」(真田2003:65)と指摘した。これをふまえるならば、学生セツルメント運動は、単に社会福祉運動や社会改良運動と限定的にいうことはできず、社会運動・社会福祉運動としてとらえるほうがより的確であると考える。そのため、先行研究の検討を通して得られた論点の3点目を、社会運動・社会福祉運動の視点とした。

4点目は、人間形成・自己教育の視点である。西内は、セツルメントについて、「発生史的にこれを観れば、民主主義を基盤とした橋渡し作業であり、換言すれば、人格交流運動であり、生活教育であり、社会福祉教育であり、全人教育である」(西内 1971：63)と述べ、セツルメントの教育的側面を強調したが、ここにはセツルメントに携わる側も教育される対象であるという側面を含んでいる。それは、学生セツルメントを「社会的実験室」(同上:85)と表現し、社会の現実に触れ、そこから学ぶ面を示したことからもいえる。中村(2014:50)も、戦前と異なり戦後は、「学問と実社会の間を往還した学びの深化と活動の広がり」があったと述べる。ここには、セツルメントの起源である大学拡張運動の精神が戦後も継承されていた点が見出せる。すなわち、大学での学問を地域で活かし、また机上だけでは学べない地域の現実からの学びを大学に戻ってより深く追求していく、という往還

的学びの側面である。 本論でも言及するが、全セツ連は、1960 年代以降、学びの場・人間形成の場としての方針を強め、「自己教育運動」との定義を打ち出す。では、学生セツルメントがセツラーの人間形成、自己教育に大きな役割を果たしたとするならば、それはどのようなものであったのだろうか。また、卒業後のセツラーがどのようにセツルメントでの体験を位置付けているのか。この点について、資料や当時のセツラーへの聞き取りから明らかにすることが重要な課題といえる。そのため、4 点目を、学生にとっての人間形成・自己教育の視点とした。

以上、先行研究の検討を通して、序章で示した①時代背景・時代背景や社会状況、制度政策動向との関係、②地域実践と住民自治との関係、③社会運動・社会福祉運動の視点、④人間形成・自己教育の視点、の 4 つの視点が改めて整理されたと考える。これらを本研究の視点として、研究課題に取り組むなかで論じたい。

第 4 節　小括

本章では、戦前および戦後のセツルメント研究、とくに大学セツルメントと学生セツルメントに関する研究について概観した。

第 1 節では、先行研究を概観した上で本研究における学生セツルメントの定義づけを行った。第 2 節では、大学セツルメントをめぐる研究を中心に概観し、戦後における評価と位置づけ、当時における思想や意義をめぐる議論を確認した。それらを通して明らかになった点について、北川（1958）による戦前と戦後に「共通する本質」と「形式的な断絶」の視点を手がかりに整理した。その結果、「共通する本質」を、①相手に対して、対等に、またのび行く力をもった存在として関わりともに生きるという姿勢や態度、②大学生の純粋さや情熱、主体性に基づく展開、③大学生自身が現実から学び成長する「社会的実験室」としての側面、④大学の変化や社会の変化と関連して展開される点、⑤家庭訪問や社会調査による現実社会の把握、の 5 点に分類した。ただし、その内実に関するより細かい検討と変化の把握および学生セツルメントの固有の特徴といえるか、という点は課題といえる。また、「形式的な断絶」の側面としては、①戦前は大学による経営であった点、②大学セツルメントによる社会事業経営の側面、③戦後の「学生のみによる再建」(北川 1958:14)の点を示した。ただし、この 3 点目については、検討する必要がある。他方、「共通する本質」といいうるか検討を要する点として、①左翼運動や社会運動としての傾向と左翼運動としてみなされる風潮、②労働教育や細民教化の側面、関連して教育的機能や教育運動の側面、③自主的組織づくりや小社会形成の役割、の 3 点に整理した。

第 3 節では、戦後の主なセツルメント研究について概観し、到達点と本研究で取り組む課題を示した。研究動向を概観する中で、学生セツルメントに関する研究が近年増えており、多角的な視野からその意義を認められつつある一方で、その体系的な研究はみられないことを指摘した。また、先行研究の検討を通して、論点を整理した。それは、①時代背景や社会の変化、社会福祉の動向との関係、②地域実践と住民自治との関係、③社会運動・社会福祉運動の視点、④人間形成・自己教育の視点、の 4 点である。これは、序章で述べ

た本研究の視点とも対応する。以上のように、先行研究の検討からも序章で示した視点が本研究において重要であることが明らかとなったと考える。そのため、本研究では、この 4 点を本研究の視点として設定し、研究課題の検討とともに論じることとする。

次章以降では、時期区分に基づき学生セツルメントの展開について検討する。次章では、1945 年から 1955 年を学生セツルメントの組織再興期として、学生セツルメントが各地で再建していく過程や思想、組織などについて論じたい。

注

1) 岡本（2018a）の一部を加筆・修正したもの。

2) 1872 年、バーネットは、イーストエンドの聖ユダ教会の司祭となる。その際、彼の主教は、「『教区のなかでもっとも不良な地区で、人口の多数派犯罪者と施物によって生活能力を失った人々よって構成されている地区である」と語った(Asa and Anne=1987:5)。また、聖ユダ教区とトインビー・ホールが位置する地区であるホワイトチャペルは、長年ユダヤ人移民の主な中心地であり、英語が話せない彼らのコミュニティは「極貧」と性格づけられた。「イースト・エンドは、とくに20世紀の最初の10年間、貧困と同様に風土的な人種差別の場所であった」(同上:23)。

3) 山口信治(2004:134)によると、バーネットが聖ユダ教会の司祭となったのは 1867 年とされている。しかし、本稿では、Asa and Anne(＝1987:5)の記述に準じる。

4) Samuel & Henrietta Barnett (1915) *Practicable Socialism*, Longmans and Green, 127.

5) 日本におけるセツルメントは、諸説あり、西内(1971)は、アリス・アダムスによる岡山博愛会が最初であるとしている。一方、永岡(2007)は、「セツルメントとして明確な意図と内容をもったものとの観点から、最初のものをキングスレー館とし、次いで岡山博愛会としたい」としている。

6) 一番ケ瀬(1963)は、大学型セツルメントを「イギリス流の社会教育的なセツルメントをうけついだ」(同上:49)、「本来的セツルメント」(同上:45) と評している。ただし、戦後の学生セツルメントと大学型セツルメントを同様に考えることはできない。戦前と戦後のセツルメントの関係については、永岡（2006）参照

7) 西内(1971:88)など参照

8) 大学拡張運動のこと。論者により、「大学延長運動」の語を用いており、本研究では記述に準じることとする。

9) 初版は 1959 年である

10) 戦前におけるセツルメントや隣保事業をめぐる研究や議論については、柴田(2017)(2018)に詳しい。

11) 九州大学創立五十周年誌記念会編(1967)『九州大学五十年史　通史』のほか、九州大学新聞など参照

12) 関東学院(1931)「関東学院セツルメント記録」、佐藤貴洋(2009)「横浜で展開した関東学院のセツルメント活動―日本の社会事業活動の一形態」小林照夫・澤喜司郎・帆刈穀編「港都横浜

の文化論」関東学院大学出版会,165-178、関東学院 学院史資料室(2010)「関東学院 学院史資料室 ニューズレター第 13 号」など参照

13) 明治学院編(1977)『明治学院百年史』参照

14) 上智大学(1963)『上智大学五十年史』、栃本一三郎(2018)「上智の社会奉仕の変遷と今日 修道会・教育・社会事業、そして社会福祉教育の意味」『上智大学社会福祉研究』42,28-66など参照

15) 「／」は、原文において改行していることを示すため、筆者が加筆したものである。

16) 正式には「渡部」であるが、本研究では、論文の表記に準じた。以下、同様。

17) 福島・石田・清水編（1984:6－7）において、大森編（1937）より「東京帝国大学セツルメントの設立に就いて」が引用掲載されている。

18) 西内(1971:88)など参照

19) 本書は増補・第 3 版であるが、初版は 1959 年であり、戦後初期からセツルメントを体系的に論じた人物という点で、本期で扱うこととする。

20) 論文により、「浜野」と「濱野」の 2 種類の表記があるが、同一人物である。本研究では表記に従う。

21) 中村(2014)は、戦後についても「大学セツルメント」の語を用いている。中村(2014)の表記に準じる。

22) 天達忠雄(1959「ソーシャル・アクション」日本社会事業研究会編『社会事業要論』ミネルヴァ書房,164-173.

23) 浦辺史(1971)「社会福祉運動が示すもの―児童をめぐる教育と福祉―」『社会福祉学』11,1-10、浦辺史(1974)「保育運動の立場から」『文化評論』151, 25-29 など参照

24) 岡本周佳・山田正行編(2018)

第２章　学生セツルメントの再興期(1945－1955 年)

本期は、東大セツルメントの再建を機に各地で学生セツルメントが発足し、全国セツルメント連合が結成される時期である。本章では、東大セツルメントを中心とした再建の背景とその後の経緯や実践について論じたい。

第１節　日本の社会状況と社会福祉の動向

社会状況というと非常に幅広い概念であるが、本節では、学生セツルメントとの関連から、社会構造の変化、政治・経済の状況、人びとの暮らしや生活の様相、社会福祉をめぐる法制度や実践および教育の動向、さまざまな運動のあり方に焦点をあてて概略を述べる。

１．日本社会の状況と戦後社会事業改革の原点

（１）戦後日本社会と国民生活

1945 年 8 月 15 日、日本はポツダム宣言を受諾し、満州事変以来 15 年にわたる日中戦争、アジア・太平洋戦争は終わった。しかし、長年に及ぶ戦争の爪痕は、国民生活に大きな打撃を与えた。労働者の賃金は 1939 年を 100 としたとき、1945 年には 44 にまで低下し、労働力不足や肥料・器具の不足を背景に 1939 年以降の食糧生産は減少化の傾向をたどった[1)](由井 1995:34－35)。「戦争による生活破壊と軍需工場の閉鎖、海外からの軍人・民間人の引揚げなどによる大量失業者の発生、四五年の凶作による食糧不足、インフレーションの急激な進展などの諸要因が、国民生活を極度に困窮化させた」(同上:68)。また、都市における生活も、空襲をうけた後の焼野原の中で始められ、各地で戦災孤児がうまれ、大きな問題となったほか、深刻な食糧危機に見舞われた（雨宮 2008:116)。

吉田久一は、「敗戦後の混乱期の国民生活は、日本帝国『国家』の崩壊が招いた生活の破綻」(吉田 2004:283)であり、「まさに『焼け跡』生活で、国民生活の『総スラム』化現象である」(同上:283)と述べる一方で、この時期の生活や貧困は、戦時中消滅させられた「社会問題性」と生活者としての「生存権」を取戻す時期でもあったと評価している。また、戦時体制以来挫折を続けてきた「社会的視点」や生活者の「人権的視点」の再学習の時期でもあり、それこそが戦後生活の歴史的意義であるとも述べている。一方、本期は民主化や非軍事化がキーワードとして挙げられるが、それは占領軍との関係の中で捉える必要がある。

1945 年 GHQ 総司令官マッカーサーより五大改革指令が出されたことにより、思想警察の廃止や財閥解体、農地改革がなされ、労働組合と婦人参政権も実現する(由井 1995:57-60)。このように日本社会における民主主義形成の萌芽がみられるのがこの時期である。さらに、基本的人権・主権在民・戦争放棄を規定する日本国憲法が制定される。この憲法が示す、自由と民主主義と平和の理念を背景とする国民の生存権規定(第 25 条)を、戦後における社会事業改革の原点として池田(2001:171-172)は評価している。

（２）政党構造の変化

敗戦を迎え、日本の政党構造も大きく変化を迎えた。これは、この後に述べる学生運動および学生セツルメントの動向にも関係があるため、概略を述べる。

戦後政党の中で最初に結成されたのは日本社会党であった。これは、反東条連合、反総力戦体制派を中心に結成されたもので、「社会民主党、日本労農党、労農党など戦前四分五裂の状態にあった無産政党の大団結を目指した」(雨宮 2008:107-108)。社会党の綱領では、国民勤労階層の結合体として国民の政治的自由を確保し民主主義の確立を目指すこと、社会主義の断行により国民生活の安定と向上を目指すこと、反軍国主義等について触れている。社会党結成の 1 週間後に日本自由党が結成される。日本自由党の綱領の特徴は、「進歩党や社会党と比較すると、『自由なる経済活動』すなわち自由主義経済の主張にあり、しかも『社会政策』の重視を主張していた」(同上:110)点である。この二つの政党は、戦争責任を問われず、比較的早くから新党結成がなされた。一方、戦時中に議会で絶対多数を占め、戦争の推進力の一つであった大日本政治会を前身とする日本進歩党は、早くからの新党結成は困難であったが、総選挙を前に結成を迎える (同上:110)。日本進歩党の綱領は、「自由党とくらべると協同主義的な中身で協同自治を主張しており、戦時中の協同主義の流れを明確に継承したものであった」(同上:111)。そして、上記三党に遅れる形で日本協同党が設立される。これは、「護国同志会を一つのルーツに、戦時下産業組合を指導していた農村関係議員を集めたグループ」(同上:112)であり、綱領では「『皇統を護持し、一君万民の本義にもとづく民主的政治体制の確保を期す』ということを掲げて、『勤労、自主、相愛』を基調とする協同主義によって日本の『建設を期』すという特徴をもっていた」(同上:112)。また、人権指令を受けて釈放された徳田球一らは、日本共産党再建大会を行った。行動綱領には「第一に天皇制の打倒、人民共和国政府の樹立が掲げられた」(同上:113)。

選挙法改正後、GHQ による公職追放令によって当時の閣僚や多くの議員が公職から追放された。そして迎えた 1946 年 4 月、戦後初めての総選挙では、女性の参政権付与を大きな要因として有権者数が 1500 万弱から 3700 万弱へと倍増、投票率は 72%であった。結果は、自由党が第 1 党となり、進歩党、社会党、協同党、共産党、諸派無所属と続いた。「自由党が進歩党を上回り、社会党が五倍増の九三議席ということで、社会党が有力政党の一翼をはじめて占め、自由党、進歩党、社会党が三大政党になった」(同上:118)。また「共産党がはじめて議席を得、五名が当選した」(同上:118)。ここから、共産主義・社会主義思想の台頭が窺え、このことが本期における学生運動・学生セツルメントの展開にも少なからず影響していると推察される。

このように、戦後の政治をめぐる様相は、公職追放、選挙改革、女性参政権の付与により大きな変化をみせた。なお、本研究では学生セツルメント再建の背景としての把握に留め、その後の内閣・政党等の推移には言及しない。

（3）生活保護法制の成立

他方、戦後の社会状況の中で、売春の増加や犯罪の激増、戦災浮浪児や孤児、非行児等の要保護児童等の問題も山積していた。そうした中でもとくに離職と失業は、根本的な問

題となっていた。戦災による生産設備の破壊、重工業部門の禁止や制限、復員軍人、海外引揚者等々敗戦による離職者は膨大な数に達し、平時の失業対策というよりも治安対策や公的扶助の一面を有していた(吉田 2004：284)。そのような状況下における生活保護に関して、「被保護世帯で、労働力世帯が過半数を割るのは五十六年度から」であり、「被保護者数が二百万人台以下となるのは五十三年からである」(同上:286)との指摘からも、当時の失業や貧困の深刻さが窺える。こうした中、喫緊の対応を迫られた政府は 1945 年 11 月に「生活困窮者緊急生活援護要綱」を閣議決定、要援護者を 800 万人と推定し、民間団体や方面委員の協力を得て、ひろく一般の生活困窮者の援護を定めた。そして、非軍事化と平等の原則を打ち出した(池田 2001:172)。

こうした戦後の公的扶助が整備される背景には、占領政策がある。とくに、1946 年 2 月、GHQ が発した「SCAPIN775 号覚書」は占領政策下公的扶助の基本方針となったものである(吉田 2004:289)。この「覚書」で(1)無差別平等の措置、(2)国家責任と公私分離の明確化、(3)救済に必要で充分な費用の醵出の三原則が明示された(池田 2011:172)。この「無差別平等」などを基本として政府は 1946 年 9 月生活保護法を公布、10 月に実施する。しかし、法で定められた生活扶助基準は 1947 年 8 月に至っても「殺人的」な低さであった(吉田 2004:289-290)。また、保護の種類は、生活・医療・助産・生業・葬祭の五種目で、住宅と教育の扶助はなかった。さらに、事実上旧方面委員からなる民生委員を補助機関とし、保護請求権は認めず「欠格条項」を残すなど、救護法の延長としての側面も有していた。その後の 1950 年 5 月、新生活保護法が公布される。この新法は、生存権に基づく無差別平等の保護と最低生活の保障を目的とした。そして、保護請求権を明記すると共に自助原理に基づく保護の補足性を規定し、教育・住宅扶助も追加した。あわせて実施主体を有給の専門職である社会福祉主事(ケースワーカー)とし、民生委員を補助機関から協力機関に切り替えた。この生活保護法の目的に「その自立を助長すること」を追加していることから、公的扶助法制と同時に社会保障を補完あるいは代替する社会福祉法制としての側面も持っていた(池田 2001:173-174)。また、生活保護制度の運用に伴い「社会福祉主事の設置に関する法律案」が施行された。他方、膨大な低所得層の存在や完全雇用、最低賃金制、社会保障欠如の中、生活保護にしわ寄せが強いられた上、朝鮮特需以降の緊縮政策に逆コースの風潮も加わり、生活保護の引き締めが行われ、「生活保護による医療扶助の適正な実施について」前後から、医療扶助を中心に「適正化」時代に入る。これに対して、生活と健康を守る社会運動が活発に展開された。特に、1948 年末から 1949 年初めにかけての「社会保障費削減反対運動」は、画期的なソーシャル・アクションであった(吉田 2004:292-293)。

２． 社会福祉をめぐる動向と制度・政策にみる保護的・救貧的特徴

（１）社会福祉三法の制定とその他の法整備

前述のとおり、戦後の混乱状況の中、引揚者・孤児・失業者等を中心とした生活困窮者に対する緊急施策が求められた。1946 年の(旧)生活保護法に続き、浮浪児・孤児対策として 1947 年に児童福祉法、主として戦争による身体障害者を対象として 1949 年に身体障害

者福祉法が制定され、いわゆる社会福祉三法が成立を迎える。児童福祉法によって、戦争のための人材としての保護から、「児童の一般福祉」の実現が求められるようになり、満 18 歳以下の全ての児童に無差別平等に生活が保障され愛護される権利を認めた法制が日本で初めて成立した(池田 2001:174-175)。ただし、児童福祉法については「理念は別として、実体はまだ保護的色彩が濃厚に残っていた」(吉田 2004:294)との指摘もある。

敗戦を契機とする福祉の法制度化は徐々に進展したものの、社会福祉を実施する政府と民間施設の関係や社会的資源の配分に関する法律の必要性を背景として、1951 年に社会福祉事業法が制定された。これにより、共同募金や社会福祉協議会、福祉事務所が創設され、社会福祉施設の第 1 種と第 2 種の区分も定められた。

その他の法整備として、医療衛生の面に触れる。1947 年保健所が再建され、1951 年には栄養改善法が定められる。また 48 年には予防接種法を制定し、接種を義務付けた他、結核予防法も 1951 年に制定された(池田:161)。一方、母子保健では、異常に高い妊産婦乳幼児死亡率・罹患率の引き下げや児童の健康・発育の根本的対策等が図られ、1948 年に「母子衛生対策要綱」が出されたほか、1949 年の「母子福祉対策要綱」の通達で、公的扶助の徹底、居住環境の改善等の対策も図られた(吉田 2004:294)。この背景には、「終戦直後の不作などにより食糧が極度に不足し、衛生施設・資材の不足もあって伝染病が蔓延するなど、栄養・衛生状態も最悪のなかで、国民はギリギリの生活を余儀なくされた」(河野 2010:66)状況がある。これらのことから、当時の栄養状況や衛生状況が非常に劣悪であり、その改善が緊急の課題であったことが窺える。

（2）社会福祉教育の萌芽と本期の政策・制度の特徴

福祉制度を支える専門職を養成する教育制度が整えられ始めるのもこの時期である。同志社大学では神学科に属した社会事業専攻を社会学科に格上げし、1950 年に社会福祉学専攻として最初の大学院修士課程を設置したほか、日本女子大学の家政学部社会福祉学科への改組、日本社会事業学校の開設(1947 年専門学校、50 年短期大学)、1948 年には分校として大阪社会事業学校も開設される。公立大学でも、1949 年に京都府立・大阪女子・大阪市立大学などで社会福祉教育が始まる。こうした福祉実践家やソーシャルワーカー、研究者の増加もあり 1954 年日本社会福祉学会が設立される一方、学問の形成という側面からいえばケースワーク論はまだ萌芽期であった(池田 2001:164)。

社会保障の体系に関しては、1950 年 10 月に社会保障制度審議会が「社会保障制度に関する勧告」を提出した。この勧告は、憲法が規定する生存権を国家が保障する義務をもつとするもので、社会保障制度は、「疾病、負傷、分娩、廃疾、死亡、老齢、失業、多子その他困窮の原因に対し、保険的方法又は直接公の負担において経済保障の途を講じ、生活困窮に陥った者に対しては、国家扶助によって最低限度の生活を保障するとともに、公衆衛生及び社会福祉の向上を図」ることだとしている。また、本勧告は、「社会保障の中心は社会保険だということ、国民も『社会連帯の精神』を持つことにより『社会的義務』を果す必要を強調した」(菊池ほか 2014:162)とされる。

日本の社会事業は、占領軍のもとで非軍事化・民主化をはかることとなったが、1951 年 9 月講和条約並びに日米安全保障条約の締結により占領が終わるころから、日本社会事業の近代化路線に対し、「逆コース」が強調されるようになる。その理由は、「①日本社会事業にはまだ『人権』や『生存権』が十分理解されず、かつての『家族相助』や『隣保共助』等の『前期的』心情が復活したこと、②占領軍の指導は、先進国型の『社会事業方法論』等が中心で、日本ではまだそれを支える社会保障の実現もなく、国民生活が窮乏の中にあり、その上文化の相違点があったこと等」(吉田 2004:300-301)であるという。「逆コースの中で、『社会保障か』『再軍備か』が国民的テーマ」(同上:301)となるなど、人権や生存権の保障がなされた社会福祉の成立とは言い難かった。

上記の指摘に関連して、永岡(1986)は、戦後の社会福祉の発展の中で戦前の問題点がそのまま内含されることになったとし、第一に、慈恵性、隣保相助、あるいは自助・相互扶助等を挙げている。さらに、日本の地域共同体は、戦前の日本の封建的構造に依拠し上から地域支配の一環として疑似的・強制的に制度化されたものであり、それらが社会事業の隣保相扶、隣保共助の構造を支えていたとする。磯村(1989)も同様に、日本の社会構造が歴史的にも環境的にもタテ割的なものであり、戦前の町内会や隣組もタテ割的行政の底辺としての存在であったと指摘している。

他方、河野正輝は、戦後社会福祉法制の展開について、第 1 期を 1945 年～1959 年に設定し、その特徴について論じる。その中で、戦後は様々な法整備がなされたが、「これらの立法の内容およびその適用の実態からみると、社会保障に占める社会福祉の比重は問題にならなかったほど低かった」(河野 2002:67)と述べる。福祉措置の面からも高齢者福祉や知的障害者福祉などは生活保護事業における救貧事業として、生活保護事業の中に収斂されていた点に言及する。理論面からは社会福祉の体系的整序がなされたが、「実態としては、敗戦後から 1950 年代までの社会福祉は、生活保護制度から峻別されず、むしろ生活保護制度に収斂されたのであって、したがってまた、社会福祉の性格も事後処理的、救貧的対応の域を出なかったのである。敗戦直後の事態のもとでは、社会保障制度の課題は、何よりもまず、当面する緊急の窮乏対策に向けざるをえなかった」(同上:67-68)と論じている。

３．組織化と社会運動

（１）労働、社会福祉、生活をめぐる運動の諸相

戦後日本においては様々な組織が噴出し、福祉分野においても戦前からの施設の復活や新しい活動の開始もみられた(池田 2001:163)。労働者階級は続々と労働組合を結成し、飢餓突破、生活擁護の要求をかかげて立ち上がろうとしていた(山中 1981:9)。当事者運動でも、女性の選挙権を求める戦後対策婦人委員会の開催(1945 年)や戦争犠牲者遺族同盟の結成(1946 年)、日本患者同盟の結成等がある。また、1946 年には旧水平社のメンバーが部落解放全国委員会を結成し、居住地域の改善を求める動きを始める。その他、北海道アイヌ協会の再結成(1946 年)や在日朝鮮人連盟の結成(1945 年)等、多くの当事者団体の組織化と運動が展開される。また、専門職中心の団体の組織化もみられた(池田 2001:163-164)。

他方、1950 年代には地域や職場の中で、生活記録運動やサークル運動がさかんになってくる。「生活の矛盾を信頼できる仲間の中で表現し合うことで問題を共有し、解決の方策を求める、そのプロセスこそが『学習』であるとの『学習観』に支えられたのがサークル運動であり、生活記録運動の展開であった」(矢口 1990:18)。また生活記録運動の目的を、「今の生活を確認し、『生活をつくりあげる』主体性を獲得すること」(大門 2012:176)とし、権威的関係や家の関係、貧困など、「人びとの存在を制約する要因」を変えるために、「書くことで主体性を発揮しようとした」(同上)との指摘もある。本期の運動の組織化や地域・職場などの生活圏域でうまれた運動は、主体性の獲得や発揮という課題を有していた。これは、学生セツルメントが「サークル」として再建したことと無関係とはいえないだろう。

また、子どもを守る運動の活発化や、子ども会結成の芽生えもみられる。具体的には、1946 年、文部省による「児童愛護班結成に関する件」によって地域子供会、町内子ども会へとつながる流れと日本民主主義教育協会による教師・父母・知識人・労働組合・民主団体などの教育活動化が結集して「反ファッショ・反体制・反官僚」を掲げたものとに大別できる。また、1950 年に部落解放委員会が子ども会の方針を出すのと前後して、各地で部落子ども会が誕生している(中村 1978:34-35)。このように、上からの民主化・組織化と下からともいうべき民衆・大衆からの組織化がみられる。

（2）学生運動の諸相

本研究との関係から、本期の学生運動についても概観する。敗戦後間もなく水戸高校(現茨城大学文理学部)の民主化闘争を皮切りに、全国の旧制高専大学において学生運動が行われた。これらの運動に共通する性格は、「学校当局者の(一)農産物、配給物資の横領(二)民主化に逆行した封建的秩序に反対する要求であった」(山中 1981:11)という。また、山中は、1945 年から 46 年にかけて「学生運動が社会変革の闘いの一環として自覚されるようになった」(同上:17)とする。この一連の経緯は、学生運動が学生の自治確立や教育の民主化を求めた運動から、より政治的性格をもった運動へとシフトしていったことを示している。これらの経緯を基礎に 1946 年 11 月、全国大学高専学生連合会を改組し全国学生自治会連合が結成、1948 年の授業料値上げ反対運動を背景に全日本学生自治連合会(以下、全学連)の結成が実現した。北川(1958:14)は、学生セツルメントの組織化について「こうした組織化が可能となり、進展したのも戦後のわが国及び全世界の民主化と平和への動きが実は母胎となっている。そしてこの運動が全国化して学生の間にひろまったのも、戦後において、はじめての全学生の組織化＝全学連の結成などと無関係ではなかったのである」と指摘した。

全学連結成後、1949 年の団体等規制法、文部省令改定追加等により学生運動は弾圧を受ける。加えて 1950 年の朝鮮戦争勃発を契機に GHQ によるレッド･パージ促進の指示を受け、学生運動に対する弾圧は一層激しくなった。その結果、反レッド・パージ闘争が全国的に拡大し、「レッド・パージは全日本学生の総抵抗にあい、学園を席捲することはできなかった」(山中 1981:128)。こうして反レッド・パージ闘争は幕を閉じるが、単独講和締結の時

期になると、学生運動は、戦後築きあげた反帝・平和ではなく、「狂言的な極左冒険主義」(同上:158)とされる方向へと傾く。その結果、学生の大衆行動は暴力的色彩を強め、各所で激突事件をくり返される。この転換の背景には、「基本的には学生運動及び大衆諸組織に指導的役割をはたしてきた日共[2)]統一派（いわゆる所感派）の崩壊現象」（同上:149）があり、中国革命方式の模倣である「武装解放闘争」をこの時期の日本で再現しようとしたことにあるとされる。この方針によって各地で警官隊との衝突等が繰り広げられ、多くの犠牲者が出た。

1952 年、旧制大学は殆どが新制大学へと変わる中総選挙が実施され、自民党が第一党となり日本共産党は全議席を失った。このとき、左派社会党が大きく進出する。この結果を受けた日本共産党中央委員会の選挙総括では、戦略・戦術の誤りについて自己批判はなく、それは全学連も同様の状況であった(同上:178-182)。そして結果的に学生運動は統一化した行動目標を失い、孤立・分散化していき、「学生運動として完全に体をうしな」(同上:193)ってしまう。1955 年、2 年前のスターリン死去を背景に共産主義運動の偏向を是正する方向が進行してくると、日本共産党の「第六回全国協議会において、五〇年分裂の問題が自己批判され、『党の統一』が決議された、ここに五二年来全学連中執(※中央執行部：筆者注)を形成して来た日共主流の学生党員達は党の政策の誤りを晴天の霹靂のように受けとめた」(同上:197)。全学連の活動は日共主流の学生党員の動揺で一時的に解体状態に陥り、すでに日常要求主義、サークル主義へと変化していた学生運動は再び停滞期を迎える。

以上のとおり、戦後、占領軍の支配のもと、無差別平等などを基本とした社会保障、社会福祉政策がすすめられ、理念として生存権や人権の尊重が掲げられた。しかし実際には、日本においてまだ人権意識は浸透しておらず、国民総スラム化状態ともいうべき状態の中で、生活保護に収斂された制度体系にならざるをえない側面があった。また、占領軍の支配から独立したのち、再軍備へと傾く逆コースの中で人権は再び軽んじられ、戦前からの家族相助や隣保共助という考え方が再び政策の中に組み込まれていったといえる。運動の面においても、学生運動の組織化のほか、上からの民主化の流れと地域や職場などの生活圏域における人びとの運動の流れがみられた。このような本期において、学生セツルメントはどのように再建し実践や運動を展開したのだろうか。

第２節　全国における学生セツルメントの再興期

本節では、まず、戦後最初に再建し学生セツルメント組織化への萌芽となる東大セツルメントの概略を捉える。その上で、全国の組織化の経緯について論じる。

１．東京大学セツルメントの再建―組織化への萌芽としての東大セツルメント―

（１）東大セツルメント再建から第 4 回総会まで（1949 年～1952 年）

戦前、戦時中、国家による弾圧から解散を余儀なくされた大学生によるセツルメントだが、1949 年(昭和 24 年)9 月のキティ台風を契機に再建されることとなる。キティ台風による都内各所の惨状に対して、「ただちに救援活動が各団体の手により行われ、その中で、医学部を中心に東京大学学生も薬品注射器をもってこれに参加、泥まみれになって江東地区

を駆けずり回った。このような経験がきっかけとなって、もっと恒常的な民衆の文化、生活の向上のために学生の参加できるような組織を作ろうという声がおこって来た。戦前のセツルメント運動を伝え聞いた学生達はこの組織をセツルメントとして復活しうるものであるというように考えたのである」（全国セツルメント連合歴史小委員会[3]1957：Ⅰ7）[4]。

東京大学中央委員会はセツルメント再建を各団体によびかけ、山上会議所に各自治会、社会科学研究会、ＹＭＣＡその他が集まり設立準備会を開き、その直後に水害地救済対策本部から紹介された地区の調査を行い、活動場所を江戸川区葛西に決めた。このときの活動の中心は医学部であり、10 月には医療部、調査部が発足し実費診療が始まる。医療部活動にあたっては数名の医師が生活を投げ打ってセツルメントの医療部活動に加わっていた[5]。11 月上旬には社会科学研究会が中心となり葛西地区生活実態調査や、先輩・諸教授との懇談が行われ、戦前の経験を聞いて今後の方針に役立てようとした。こうして 1950 年 4 月、学内団体東京大学セツルメントは正式に発足する。

その他、地域との関係が分かる記述として、川崎の日本鋼管などの労働者との小規模な懇談会が開かれ、労働者たちは川崎に適当な土地を見つける約束をしてくれたことや、6 月になると品川区大井の保育園「緑の家」からの協力要請を受けて 8 月から活動の開始が決まったこと、診療所でも日曜日に無料健康相談会を実施する等予防活動にも力を入れていたこと等が資料に記載されている（同上：Ⅰ8）。

結成から 8 か月後の 12 月にセツル中央委員会は「東大セツルメント」規約をはじめて成文化した。その中で、「この会は貧困者の生活向上をはかるために種々の事業を行い、それを通じて調査研究をするを目的」（同上：Ⅰ8）とした。調査研究について、「調査部は『現状の把握なくしては如何なる活動も盲目とならざるをえない、科学的な調査こそセツルの枢要な活動の一つである』として、葛西、大井そして船堀の各地区に対して社会調査、実態調査、医療調査と大きな精力を注ぎこんだ」（同上：Ⅰ8-9）。このように、医療活動・調査活動を中心に東大セツルメントが再建することとなった。

1951 年の五月祭で、セツルメント活動の現状について展示がなされた折に発行されたパンフレット「同じ喜びと悲しみの中に」の冒頭に「我々はかく考えかく行動する」との宣言がある。内容を以下抜粋する。

> 一. …略…吾々は関東大震災後、末弘・穂積両教授指導の下に柳島にセツルハウスを建築し、太平洋戦争まで活躍した先輩の輝かしい歴史を回顧し呪れた戦争によってかくも傷ついた祖国の物質的精神的疲弊と混乱とを些かでも回復しなくてはならないという情熱が我々を再び、 セツルメント運動にかりたてていった。
>
> 二. 吾々は現在、江戸川区葛西及び品川区大井庚塚に二つのセツルメントハウスをもち、それを拠点としてその周辺の地域にあらゆる活動を行っている。半農半漁、都内の僻地である葛西は正に文化的社会的に基本的人権が擁護されているとは云い難い。一方又一応住宅地と考えられている大井庚塚に於ても、調査によって明確な如く、中産階級の生活難は何等かの社会保障を必要かくべからざるものとしている。診療健康相談、調査、文化の各部は今やその活動を軌道にのせ、両所共にすでに地元民とのはなれがたい結合をみせている。吾々の動きがたとえさゝやかではあれ、彼らの生活の中であらゆる意味での文化的な生活擁護のためのセツルメントとして利用されているからである。

（同上：Ⅰ10）

これらの記述から、第1節で概観したとおり、社会福祉三法が制定され法整備がなされても人権や生活の保障は十分ではなかったことを背景として、東大セツルメントによる診療所活動や子供会活動などの地域実践が行われたことがわかる。これらの地域実践は、調査活動と並行して実施する、もしくは調査活動に裏づけられた性格のものであり、調査における実践の重視という点においてもセツルメント運動発足時からの精神が引き継がれているといえる。他方、先にふれたパンフレットの名称「同じ喜びと悲しみの中に」は、戦後学生セツルメントに通底するキーワードであり、その後の全国学生セツルメント連合（以下、全セツ連）の大会基調やレポートなどでもしばしばみられる。これは、戦後の全セツ連より発行された書籍[6]のタイトルにもなっている。

先の引用に続く三では、何故セツルメント活動でなくてはならないか、セツルメントとは一体何であるのかという問いに対して、セツルメントは単なる慈善活動ではないとする。「何故なら吾々は大学にとじ込められた生活を、生きた社会に開き、その現実に入って吾々が果たさなくてはならぬ問題を正しくとらえ、それを行動に移すことであるからその問題とは明らかに『平和を守ること』である」（全国セツルメント連合歴史小委員会 1957：Ⅰ10）。そして「戦後セツルメントはその実践的な課題を『平和を守ること』と規定」（同上：Ⅰ11）したとして、戦前との違いについて論じている。ここから、戦後再建期の初期においてセツルメントの意義は、自身の生活を大学にとじ込めず「生きた社会」に開くこと、平和を守ることについて現実から正しくとらえ行動すること、に見出していることがわかる。前者からは、大学拡張運動との関連が、後者からは戦後という時代背景の影響が見出される。「敗戦直後の事態のもとでは、社会保障制度の課題は、何よりもまず、当面する緊急の窮乏対策に向けざるをえなかった」（河野 2002：68）とされるなかで、学生らは、主体的・自主的な動きの中で生活擁護、民主主義の実現、平和を守ることに学生セツルメントの存在意義と役割を見出していた。ここには、人権意識とヒューマニズムの精神によって、窮乏対策に留まらない生活を守る営みへの志向性が垣間見られる。

1951 年 6 月 17 日、メトロ（地下喫茶室）で開かれた第一回総会では、セツルメント活動の目標として、１．平和を守れ２．智識を生かせ３．川崎・亀有を重点地区として、労学提けいの方向に各地区で進もう、の 3 点が打ち出された（同上：10-16）[7]。

そして、1952 年 6 月の第 3 回総会では、以下の 3 点がスローガンに掲げられた。

一．真の科学の確立のために

二．大衆の生活を守ろう

三．平和こそ生活を守る（同上：18-19）

この三つのスローガンは、その後の全セツ連大会の記録においても散見され、中心的な柱の１つであったことが垣間見られる。

1952 年 11 月の第 4 回総会は、亀有セツルメント追い出し問題と川崎セツルメント健保問題[8]をふまえて実施された。亀有セツルメント追い出し問題については後述する。その中で、この時期の最大の成果として亀有セツルハウス[9]の完成をあげた上で、川崎問題の総括を通して 4 点の方針が示される。それは、①財政的基盤が非常に不安定で活動の障害となっている、②セツル友の会の強化、③レジデント[10]の確立と活動の合理化を図る、④各部活動の連絡を強化しセツラー相互の活動を図る、である（同上：Ⅰ25）。これらの方針提

起の一方で、亀有・川崎での問題と立て直しの経験から重大な問題を一部セツラーだけに任せるのではなく全組織をあげて対処できるような統一された委員会が必要との批判も生まれてくる。

（２）第五回総会における論点と組織化への方向づけ（1953 年～1954 年）

1953 年 6 月に開かれた第五回総会は、第 4 回総会で生まれた批判をふまえており、その後の全セツ連組織化につながる内容を含む。本総会の議案はそれまでの 4－8 頁のものと異なって 50 頁にも上る内容であった。その目次の主要点は以下のようなものであった。

第一章　新しい情勢と学生運動
第二章　セツル運動の展開
　①　地域の人々の生活は楽になったか
　②　地域における封建的しくみ
　③　健康と生活を守るために
　　a.地元の人達の動き　b.診療部　c.保育園　d.文化部　e.法律相談部　f.重要な活動
第三章　セツル運動の方向
　①セツル運動の当面の任務
　a.大衆の生活と平和を守るために　b.真の科学の確立について　c.セツルにおける規律と新しい人間像
　②機関紙活動と組織問題
　③財政問題

全国セツルメント連合歴史小委員会(1957)では、第五回総会の目次を紹介したのち、[課題］の項で、第五回総会議案の意図を 6 点挙げている。

「第一にセツル活動を綜合的にとらえ、整理することによって『セツルメントとは何か』という課題を明らかにしようとしたことである。ことに、セツルメントは『お坊ちゃん、お嬢さんの仕事だ』『学生では何も出来ないのではないか』といった疑惑に対して『否』という態度を前面に押し出した」(同上: I 27)。第二に、セツルメント活動の重要な課題として挙げられてきた「真の科学の確立」の内容について取り組み、その後における研究活動への道を開いたこと。第三に、「活動の規律とモラルを打ちたてるよう呼びかけたこと」。これに関しては、「『大衆に服務する』ということから生れる規律とモラルこそセツル活動の中でもっとも要請されなければならなかった」とされている。第四に、「機関紙（誌）活動の強化を呼びかけたこと」。第五に、それまでのように中央と地区活動が離れてしまうような組織ではなく、「地区活動を強めていくための中央組織を作ること」。同時にセツルメントにおける東大独占の段階から、「セツル連合結成へ前進してゆける形態をとる必要」を挙げる（同上: I 27)。第六は、「各パートの独立採算方式の原則がはじめて打ちだされたことである」（同上: I 28)。だが、この独立採算は実際にはほとんど実践されなかったという（阿部・小木 1956:38)。独立採算が提起される背景には、専従者[11]との関係がある。この点については、第七回総会時の法人化問題とあわせて述べるが、参考として、以下に第二回総会決定時の組織(図 2-1)と第五回総会決定の組織(図 2-2)を資料から転載する[12]。これによって、再建時から 1953 年にかけての東大セツルメントの体系的な組織化と拡大が確認できる。一方で、財政審議会に属する OS や代表の学生セツラーが「従業員」と記載されている専従者よりも上位にあり、権限が大きかったことがわか

る。ここに独立採算や法人化問題が生じる１つの要因がある。

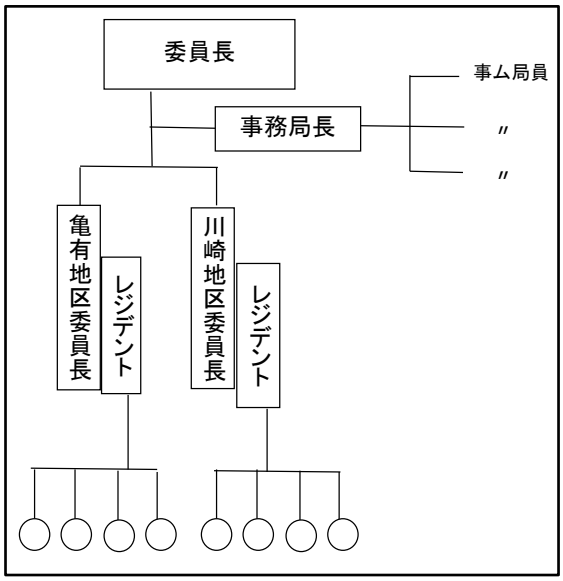

図２－１　第二回総会決定の組織(同上:28)

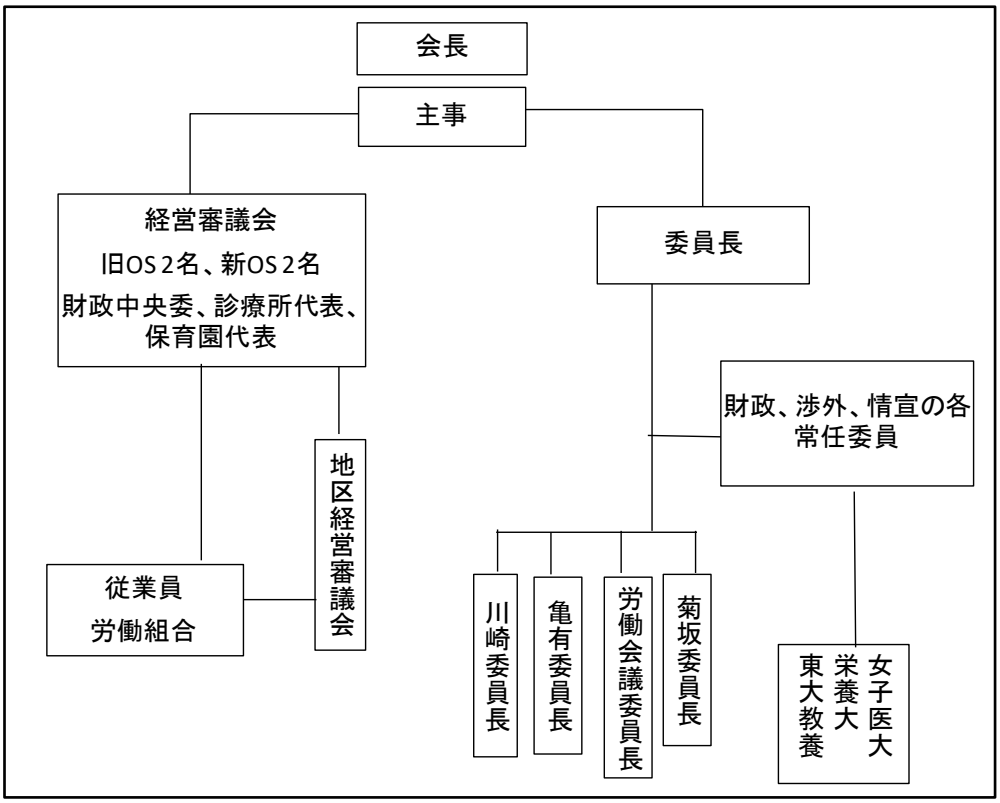

図２－２　第五回総会決定の組織(同上:28)

全国セツルメント連合歴史小委員会（1957）は、第五回総会での一番の問題点として、第三章の第一項「大衆の生活と平和を守るために」の内容に、学生運動一般に通じるスローガンを十五項目もあげたことを指摘している[13)]。そして、当然に生じる批判として「このような政治的なスローガンを掲げることによってセツル活動の巾をせばめてしまうこと

であり、またセツルの『三大スローガン』とどう関係するのかということ」（同上：Ⅰ30）を指摘した。中央委員会はこの総会において以下の自己批判を行った。それは、①スローガンに拘泥し「スローガン談議」になったことで当面のセツルの任務を益々不明確にしたこと、②スローガンそのものが誰でも納得出来るものでなかったこと。セツルメントは誰でも加入できるものであるにも関わらず、客観的にはきわめて巾のせまいスローガンを“押しつける”結果になってしまったこと、の2点である。関連して、「『ますゝセツルのことがわからなくなった』と総会が終って新しいセツラーが云っていました」との記述がある（同上：Ⅰ29-30）。

こうしたスローガンの背景として、セツルメントの活動を単に慈善的なものに終っている点に失望を感じセツル活動発展の障害と捉えたセツラーが、セツル活動を政治的に高めようとした、とされている。これについて、意図自体は正しかったとしながらも、実際の活動やセツラーの意識から離れて論じられていたのと指摘がある。上記の提起は「セツラーにとつてはあまりにも『抽象的』にきこえたのである。なぜなら実際には学問とセツル活動とは両立するのだろうかという悩みがようやく生れてきていたから」（同上：Ⅰ30-31）。

上述の「大衆の生活と平和を守るために」の内容に如実に現れるように、ここには学生運動との関連が見出される。当時のセツラーであり後述する宍戸健夫は、「セツルメントは学生運動」と語っており[14]、当時のセツラーにとって、社会変革を目指す学生運動の１つとして捉えられていたことが資料の記述や宍戸の語りからも理解される。一方で、地域での活動を通して学ぶという大学拡張運動の精神も意図されていたが、「学問とセツル活動」の結びつきはセツラーの共通認識ではなかった。ここに、中央委員会と実践にあたるセツラーとの意識差も垣間みられる。

（３）第六・第七回総会と独立採算・法人化の背景

第五回に続く第六回、第七回総会の内容は、上記の第五回総会の内容から発展したものといえる。1953 年 11 月の第六回総会において「現在のセツルメント活動の任ムは大衆の生活を守り、真の学問・文化をうちたてようとする日常活動をより一層発展させせることの中から平和ようごの国民的、国際的な統一戦線への大衆の組織化を促進させせることである（※傍点ママ）」（同上：Ⅰ31）と規定した。しかし、この規定は、セツル活動が平和運動であるという印象を与えセツル活動の特質をぼやかしてしまうという批判があり、亀有セツルメント有志による具体的修正案が提出された。

第七回総会（1954 年 6 月）では、①地元との結びつき、②活動理論の問題、③平和と民主主義を守ろう、の 3 点が確認された。そして、これまでの討論の総括として、討議を重ねた結果、「スローガン談ギ」に終止符が打たれることとなる。それは、①科学・芸術を国民の中から国民の中へ、②健康で文化的な生活をきずこう、③平和と民主主義を守ろう、というものであり、第五回から第七回にかけては、「セツルメント運動独自の活動方針を作りだして行った」過程として評価されている（同上：Ⅰ33-34）。

なお、第六・七回総会では、法人化問題が論点となっている。その背景の１つに、財政難から脱却する意図があったといえる。本期の東大セツルは、診療所や保育所などを運営しており、事業体としての性格もあった。他方、連合組織としての東大セツル[15]の財政難は深刻で、活動資金の不足を OS からの寄付や診療所収入などで賄う状況が続いており、専

従者からは不満や批判がうまれていた。そのため、独立採算や法人化問題が浮上してきた。しかし、法人の理事会を OS 中心でつくろうとしたことに対し、亀有セツルから批判があり（阿部・小木 1956:38-39）、東大セツル中央委員会（1954）は、機関紙上でこの点についての誤りを認め自己批判を行っている。

この点については、戦後の学生セツルメントを考える上で重要な問題を含むためもう少し述べたい。

阿部・小木（1956）は、亀有セツルメント機関紙「うみつばめ」19 号に掲載された 1954 年 6 月「専従者の要求」を引用している。

「専従者の毎日の生活は苦しい。しかもそれがセツル運動の支柱となっている。学生セツルメントは学生の運動なのに、この専従者の苦しい生活の上に、なお学生との交渉という仕事をおわされ、人事件も最近迄学生ににぎられていた。

五三年に経営審議会（専従部会）ができて後、これはいく分緩和されたが、いぜん「働くもの」中心の考えはうすい。」（同上:39）

その上で、「専従者は生活を守り、仕事を続けるため」に専従と学生の組織分離や学生活動への最低賃金、社会保険の即時適用、強制寄附反対など 11 項目の要求が挙げられている（同上:39-40）。このように、事業体・経営体としての性質をもっていた点で、戦前からの連続性がみられるが、運営は学生の手にあり、生活を守る運動や民主主義を掲げながら、労働者の権利は十分に守られていない実態があった。また、財政状況に関しても、戦前は企業や天皇からの下賜金など、外からの援助があったが、本期においては「学生は診療所の収入をセツル活動の財源と考えており、その額は年に十三万円にも達する」（学生セツルメント連合歴史小委員会 1957:Ⅱ8）と、診療所収入をセツル活動の財源にあてている状況にあった。そのため、専従者からは「学生は寮では生活が保証されているのに対し、専従者の生活は今の社会で保証されずドレイ的である」（同上）との不満や批判が生じていた。とくにこの問題ははじめから独立採算制をとっていた川崎とは異なり、亀有セツルで深刻であった（同上）。こうした事情から、診療所をはじめとした専従者から、独立採算や法人化問題の提起がなされる。その後、診療所はそれぞれ法人化し、学生セツルメントとは協力関係は保ちつつも別団体として展開することとなる。

ここから、外見上は戦前からの伝統を引き継いで組織体制を構築し、セツルメントハウスを拠点として専従者・レジデント・セツラーが多様な活動を展開していたが、学生が診療所や保育園を運営することとなり、戦前とは異なる財政状況のなかで、労働者である医師や看護師、保母などの専従者の地位が低く生活保障も不十分であったことがわかる。ここに、学生による事業所運営の限界が生じていたといえる。また、理念やスローガンをめぐっても、東大セツルメント発足以来、「セツルメントとは何か」について模索が続けられており不明確であったことが明らかとなった。とくに、戦後の社会情勢を反映した「平和を守る」という規定がより政治的色彩を浴びることで、実践にあたるセツラーの混乱や批判を招き、中央委員会と実践にあたるセツラーとの間に意識差があったことも見出された。第 5 回総会時にあがっていた地域からの、「セツルメントはお坊ちゃん、お嬢ちゃんの仕事ではないか」という声も、当時の進学率の低さ[16]からくる、大学生＝エリートによる活動で、自分たちとは違う人間の道楽というニュアンスを含んでいるといえる。そしてこれは、

専従者からの学生セツルへの批判とも重なるだろう。

（4）東大セツルメントにおける実践の理論的成果

ここまで、東大セツルメントの萌芽期における経緯と理論やスローガンについて概観してきた。東大セツルメントの活動については、次節で述べるが、全国セツルメント連合歴史小委員会（1957:Ⅰ 40－41）では、その活動から生まれた理論的成果が一覧としてまとめられている。そのごく一部を以下に引用する。

加古里子「児童画教育小論」　二十八年十一月、研究論文第一集
林安雄「数学教育についての一考」　二十八年五月、ながれ　NO・7
坂元忠芳「生活綴方実践報告」　二十八年十二月、ながれ　NO・10
戸井田嘉子「ケースワーク技術論」　二十八年十月、ながれ　NO・９
高島進「部の組織について」　二十八年九月、ポンス　NO・3
米田光樹「セツル運動と自分の学問との結びつき」　二十九年七月　ながれ　NO・13

同資料によると、“ながれ”は川崎セツルの機関紙、ポンスは亀有セツルの機関誌であり、ほかに菊坂セツル機関誌“がけした”や北町セツル機関誌“ひろば”があったという。また、セツルメント中央委員会による報告書や卒業論文などの成果についても言及されている。このように、セツルメントの経験を通して書かれた論考は幅広いことがわかる。

なお、上記の加古里子は、『からすのパン屋さん』などで有名な絵本作家のかこさとしであり、企業の研究員として働きながら毎週、川崎セツルメントの実践に来ていたという。当時のことを、先述の宍戸は次のように語った。

> 宍戸：そこ（※川崎セツル）が拠点でしたよね東大セツルメントの。川崎セツルメントにいて何をしていたかというと、日曜日か土曜日に子どもを集めて子ども会をしたんですね。その時は今絵本の作家で有名になった・・・
>
> 岡本：かこ先生ですか？
>
> 宍戸：かこさとしも一緒でね。彼がね、大きな模造紙にね紙芝居をつくってくるわけですよ。彼自身が、絵を描いてね。それを子どもたちに披露するわけですよ。私は、その、大…（※きいから）、２人がかりで持って、彼が喋ってひっくり返してね。普通の紙芝居という感じではなくて、非常に彼らしい、得意なね、やってましたね。楽しかった。必ず来てましたよね。

かこさとしの場合は、社会人になってから週に１度川崎セツルの子供会活動に参加していた。次項で述べる「全国セツルメント連合」や「関東セツルメント連合」のように、当時は「学生」がつかず、単に「セツルメント」と称していた。そのため、かこさとしのような社会人や、亀有セツルメント診療所所長・高野のような専従者も「セツラー」として関わっており、未分化なところがあった。この点についても戦前との類似性が見出せる。

なお、上記の「成果」には、1978 年に『子どもの発達と生活綴方』を出版する教育学者の坂元忠芳、イギリスのセツルメント思想史研究などで有名な社会福祉学研究者の高島進

などが名を連ねる。川崎セツルメント文化部（1952:1）には「川崎レジデント 三浦文夫」の名前もある。これらから、学生セツルメントでの経験がそれぞれの人間形成やその後の人生につながっている側面を垣間見ることができる。この点については先の論で深めたい。

2. 全国セツルメント連合の結成（1954 年－1955 年）

これまで述べてきたとおり、東大セツルメントの活動が再建し展開される中で、全国組織化への機運が高まってきた。本項では、全国セツルメント連合の結成の経緯について論じる。

1954 年 5 月 3 日、学生平和会議での討論後に子供を守る会およびセツルメント関係者の懇談会が開かれた。参加者は東大セツルメントの各大学[17)]、東北大学、宇都宮大学、京都大学、弘前大学、横浜国立大学、神戸大学、新潟大学、群馬大学、岐阜大学等の学生二十数名である。「参加者の大部分が子供を守る運動の代表者だった」ため、「話題は勉強会・子供会の問題が中心となり、宿題、騒ぐ子供の扱い方、会場を見つける困難、チューター間の意志の疎通など日常ぶつかっている様な困難や悩み」を訴え話し合い、主として東大セツルの経験を聞く形式となった（全国セツルメント連合歴史小委員会 1957:Ⅱ1)。「この話し合いの中で全国に叢生している子供を守る運動を含めたセツルメント運動を一層発展させるために、セツルメント連合準備会の結成が提案され、満場一致で可決された。そして当面事務局を東大セツルメント本部に置き、まず経験交流や情報交換のために機関紙を発行することになった」(同上:Ⅱ1)。この背景には、前述の第五回・第六回総会において全国セツルメント連合結成に努力することの決議がなされていたことや九州大学、京都大学からも強い要望が出されていたことが挙げられる。また、学生セツルメントは全国組織化の草創期から子供を守る運動や子供会活動と深く関わっていた点が指摘できる。

上記懇談会の後、代表者会議を経て 1954 年 11 月 27 日、東京教育大学において、全国学生セツルメント結成大会が開かれた。参加は約 26 団体 150 名で、参加団体及び参加セツルを表 2-1 に示す。なお、団体名や大学名が記載されていないものはセツルメントである。

東北	仙台、福島大学社医研
東海	名古屋
関東	寒川、群馬大学社医研、新宿、亀有、北町、菊坂、氷川下、江戸川橋、東京大学法相、久我山、愛宕、お茶の水大学社研、農学、川崎、清水ヶ丘、横浜市立大学社医研
関西	京都大学、京都大学社医研、京都高岸子供会、立命館大学法相、大阪大学
九州	九州医科大学、九州大学　など

表 2-1　全国学生セツルメント結成大会　参加団体およびセツルメント(同上:Ⅱ18 をもとに筆者作成)

この結成大会では、午前中は規約審議、参加各団体挨拶、人事について等が議題となり、午後からは、各部会に分かれての討論となった。全セツ連結成にあたっては、後述する関東セツルメント連合書記局が準備会の役割を担っていた。準備会報告では、規約について

全国学生セツルメント連合の性格と財政が問題となった点に触れ、「連合は加盟団体の経験交流の場であり、財政も各団体の現在の力を考え無理のないようにとりきめられた」として、「これから全国的に手をとり合っていこうと訴えた」（同上：Ⅱ18）。

全セツ連結成前日の代表者会議では結成に慎重な意見もあり、最終的に「連合は加盟団体間の経験、資料の交換をなす機関なのであって、中央のきめた方針を押しのけるようなことをすべきではない。団体の大小に関わらず同等の資格で参加し、各団体の活動に干渉するようなことは一切すべきではないこと、つまり連合は協力体的性格のものであることが確認された」（同上：Ⅱ17）。こうした経緯があり、結成大会では先述の方向性を一致点とした。

大会では、「最初の書記局は関東ブロックで構成されることが決定された」（同上：Ⅱ 18）。その背景が窺える資料として、著者、発行年未記載の冊子、「全セツ連の歴史」には、第1回大会[18]について、「セツル運動は当時かなり停滞しており、書記局体制を確立するのもきわめて困難であった」と記されている。

また、午後の各部会討議における各部会とは、勉強会部会、子供会部会、法律相談部、生活改善部、保健衛生部会、レジ[19]部会であった。なお、本大会の部会の討論内容等については西内（1971）でも述べられているため、本項では背景と状況のみに留める。

結成大会開催時の全セツ連加盟セツルメントを、表 2-2 に示す。

北海道	札幌医科大学セツル
東北	福島大学社医研
東海	名古屋セツル
関東	群馬大学社医研、新宿セツル、寒川セツル、川崎セツル、亀有セツル、北町セツル、菊坂セツル、氷川下セツル、久我山セツル、清水ヶ丘セツル、江戸川橋セツル、愛宕セツル、東大法相、東大セツル
関西	立命館法相、α会（※大阪大学医学部：筆者補足）
九州	九州大学セツルメント

表 2-2　結成大会開催時の全セツ連加盟セツルメント（同上：Ⅱ20 をもとに筆者作成）

以上から、困難な状況での全セツ連の結成であったこと、全国組織化の草創期から子供を守る運動や子供会活動と深く関わっていたこと、連合は「協力体的性格」との位置づけで、各団体の活動に一切干渉すべきではないと明言されていたことが明らかとなった。その後、全国セツルメント連合と地域の広域連合や単一セツルメントとの関係はどのように展開していくのか、第 3 章以降で論じる。

第３節　各地域における学生セツルメントの誕生

本節では、各地域におけるセツルメントについて誕生の経緯や活動内容、その特徴について論じる。序章で示したとおり、地域の広域連合としては本研究では関東、関西および大阪、愛知に焦点をあてるが、本期においては関西も愛知もまだ組織化には至っていなかった。しかし、大阪初のセツルである愛染園学生セツルメントは、複数の大学から構成され、1962 年の関西セツルメント連合結成につながる点で重要である。他方、名古屋セツル

メントは1955年6月の関東セツルメント連合の第2回大会、その後の全国セツルメント代表者会議、全セツ連結成大会に出席しており、全セツ連結成時より加盟していた。その意味で初期から活発なセツルメントであったといえるが、現段階でその実態は把握し難く、愛知における組織化は1968年になる。そのため、本節では、第一に、関東セツルメント連合結成の経緯と東大セツルメントの実践内容、第二に、愛染園学生セツルメント発足の経緯と実践内容について述べる。

北川（1958）は、戦前と戦後において本質的な差異はないと考えるとしつつも、社会的条件の変化に規定された「形式的な断絶」の存在を認め、具体的に、財政問題および「学生のみによる再建」（同上:14）について述べた。後者の「学生のみによる再建」とは、戦前は企業、天皇の下賜金、大学の援助があったということに対するものである。しかし、各地で草創期に取り組まれた診療所活動などの広範な活動に目を向けたとき、「学生のみによる再建」が的確といえるのだろうかという疑問が残る。言い換えれば、大学の教員や OS などの支援はなかったのか、という疑問である。これが第三の点である。この点については、戦前と戦後の連続性を捉える上での切り口として、第一、第二を含みつつ他のセツルにも目を向けながら論じたい。

１．東京および関東におけるセツルメントの活動と組織化

前節では、戦後に誕生した東京大学セツルメントの経過とその方針形成の変遷、および全国セツルメント連合の結成に至る経緯について概観してきた。これまで述べてきたとおり、東京大学セツルメントは戦後の学生セツルメントにおいて中心的存在であった。また、全セツ連結成の背景には東大セツルメントの動向と関東セツルメント連合の結成が大きく関わっている。そのため、本項では関東セツルメント連合結成の経緯について概観する。

（１）関東セツルメント連合の結成

関東セツルメント連合は、東大セツルメント第6回・第7回総会において全国セツルメント連合結成に努力する決議がなされ、準備会事務局の設置と全面的援助・推進が決まった。その際、東大セツルでは、「（１）当面の準備会は主として子供を守る運動の面を取扱う（２）並行して健康を守る運動の面を社医研セツル連合を通じて統一していく」（全国セツルメント連合歴史小委員会:Ⅱ 2）などを方針とした。また、東大セツルメントは川崎、亀有、氷川下などのセツルメントを含む連合の性質を有していたが、東京女子医大、栄養短大など多くの他大学生が参加するようになったことで、名称とその性質が一致しなくなっていた。それらを背景に、関東セツルメント連合結成が呼びかけられた（同上:Ⅱ2）。

結成に先立って準備会がもたれ、関セツ連ニュースが発行された。第3回準備会の出席は、「氷川下、江戸川橋、慈恵、江古田荘、川崎、亀有、上野、十一名」（関東セツルメント連合 1954）であった。その中で、各セツルが抱えている問題が記載されているが、共通に論じられるものとして、「例えば、活動と勉強とアルバイトの問題、セツル活動を何故やるか。「赤ではないか」等の思想的誤解。セツラーの活動条件の問題（殊に女子セツラー等）」が挙げられている。その上で、「何のために学生がセツル活動をやらなければならないかと云う事にまとめられる」とし、これらの問題について経験に基づき論議していくことで一

致している（同上）。

6回に及ぶ準備会を経て、1954年11月14日、東京教育大学で150名のセツラーが出席して関東セツルメント連合結成大会が開かれた(全国学生セツルメント連合歴史小委員会:Ⅱ 5)。大会当日までに申し込みをした関東セツルメント連合加盟のセツルメントを、表2－3に示す。

氷川下セツル	菊坂セツル	江戸川橋セツル	愛宕セツル	亀有セツル
清水ヶ丘セツル	江古田荘子供会	大仏坂セツル	川崎セツル	東大セツル

表2－3　大会当日までに加盟申し込みをしたセツル（同上:Ⅱ5より筆者作成）

ほかに、北町セツル・東京女子大セツル・上野セツルが「加盟ほぼ確実」とされるほか、傍聴に来たセツルや団体として、二子玉川子供会、子供を守る会学生懇談会、落合子供会、桐花寮子供を守る会、千葉大社医研、名古屋セツル、仙台綜合セツルが挙げられている。このように、関東セツルメント連合はその結成当初から多くのセツルが加盟したこと、全セツ連を見据えた組織であり関東以外からも注目されていたことが窺える。一方で、上記のうち、氷川下、菊坂、亀有、川崎、北町の各セツルはもともと東京大学セツルメントに含まれるセツルであり、これに東大セツルも加えると構成セツルの約半分に及ぶ。ここからも、先に指摘した、連合としての東大セツルから関東セツルメント連合への変化がみてとれるとともに子供会や子供を守る運動に関わる団体の参加が多いこともわかる。

関東セツルメント連合結成大会の総会後の討論では、「セツル活動は学問の一部だ」「セツル活動は国民の要求に基いたものであり、我々が活動をやるのは我々が国民の一人であるからだ」「地元との結びつきはまず地元と相談すること、また考えるだけでなく実践する中で解決される」などの諸点に意志が統一された（同上:5)。他方で、特別提案として、旧東大セツルからは日鋼室蘭の斗争の援助や「原水爆禁止に関し米大使館、日本政府に夜戦する。被害者に激励文を送ろう」との提案、氷川下セツルからは「セツル活動の中で病気で倒れていった人に激励文を送る」こと、亀有セツルからは「看護学院セツラーに対する都当局の弾圧に抗議すること、未公認学内セツルメントを公認させるために連合として努力すること」、川崎セツルからは独立採算制の提案が、それぞれ可決されている。独立採算制提案に関しては、苦しい条件の中で発展させてきた診療所が、「医療費の単位切り下げ等社会保障の改悪が行われようとしており、それが再軍備へまわされている」なかで、「まだ学生は診療所から活動ヒを貰おうとしている。学生は診療所の苦しみを理解し」、「社会保障の改悪問題や診療所の苦しさを地元の人に伝える様努力して欲しい」と述べられている（同上:6)。これらから、関東セツルメント連合がさまざまな地域や団体、組織とのつながりを有していたこと、実践との結びつきの中でセツルのあり方が強調されていたことのほか、その社会運動的性格や、活動の過酷さ、都および大学からの弾圧などが垣間見られる。

（2）東大セツルメントの活動―亀有セツルメントにおけるみどり保育園の実践から―

本項では、東大セツルメントの活動を具体的に取り上げて論じたい。先述のとおり、初期の東大セツルメントの中心としては、亀有セツル、川崎セツル、氷川下セツルなどがあり、医療部活動や子供会活動等がなされてきた。とくに医療部による診療所や保健衛生活

動は、草創期からセツルの中心的活動の１つであり、先行研究や文献などでも注目され紹介されている。一方で、先述のとおり、関東セツルメント連合や全国セツルメント連合結成には、子供を守る運動や子供会活動が深く関係していた。その意味でも、これまであまり注目されてこなかった子どもをめぐる草創期の活動として、亀有セツルのみどり保育園の実践を取り上げたい。戦後の状況を色濃く反映した地域において学生が主体となって運営してきたみどり保育園の取り組みは、先駆的かつ地域との密接な結びつきで展開されたもので、当時のセツルメント活動の具体例として様々な示唆を含むと考えるからである。また、亀有セツルを取り上げるのは、その立ち位置も関係している。先述のとおり、亀有セツルは東大セツルメントの総会においてもイデオロギー的な方針には批判的で立場にあった。全セツ連発行の「『同じ喜びと悲しみの中で』に収められた文章は、川崎や氷川下が多く、亀有は少ない。全セツ連との距離が反映されていると言える。これは聞き取りでも同様であった」（山田 2018:14）との指摘もあり、先行文献も非常に限られている。たしかに、専従者の問題等、財政面や運営面で決して円滑とはいえない側面もある。しかし、上記の理由から、戦後再建期における活動の具体例として亀有セツルメントのみどり保育園の活動を取り上げることによって戦後まもなくのセツルメントの役割について考察する一助としたい。

①地域特性と誕生の背景

亀有地区は、常盤線亀有駅より北に十五分、東に中川、三方を巨大な日立製作所、日立精機などの工場に囲まれ場所で、都の引揚者、戦災者寮が密集した地区である（全国セツルメント連合歴史小委員会：Ⅰ13）。戦災者寮は、元々日立製作所の工員寮であり農村出身の青年が軍事品を作っていたが、終戦後故郷に帰り徴用工もいなくなったことで、都の配慮として戦後引揚者の寮となったものとのことである[20]。この地域は、一方を川に、三方を工場に囲まれており、平坦低湿で排水が悪く、伝染病が蔓延する可能性が高いほか、住人の約三割が労働科学研究所の示す最低生存線をわっていることが当時の調査で明らかになっている(宍戸 1955:315-316)。また、地域の母親の言葉が次のように紹介され、当時の生活が垣間見られる。「昨日は六〇円。一昨日は百三〇円。これで親子五人がくらしていくのです。お金が入るとすぐ出ていってしまってこの頃では配給のお米も一度にとれないくらいなんですよ。一日の保育料二〇円[21]も出しにくいんです」（同上:316)。当時亀有セツルメントで活動していた宍戸健夫は、「軍事工場が潰れ、失業者がものすごく多かった。」「(※当時の仕事の多くは:筆者補足)焼け跡の整理や清掃活動」で１日働いて 240 円の日給である“ニコヨン”が少なくなかったと語る。このような地区において亀有みどり保育園での活動は始まった。

宍戸(同上:309-310）によると、東大セツルメント発足から２年目の 1951 年８月、亀有セツルメント発足から２か月後に亀有みどり保育園の活動が始まった。すでに診療活動や子ども会活動がはじまっており、その中から「働きにでたいが子どもを預かってもらえるところが欲しい」等の声を聞き、「なんでも大衆の要求にこたえよう」という、学生らしい気持ちでみどり保育園はつくられた。この背景には、当時の保育園づくり運動の高まりや、170 世帯、9 棟からなる寮の人たちが関心を示してくれ寮の一室を提供してくれたということ等があった。準備金 1000 円、保育料月 300 円。10 畳畳敷きの部屋からのスタート[22]で、絵本や積み木などの遊び道具は寄付に頼った。専門の保母はおらず、夜の保育学校に通っ

ていたＴさんと寮に住んでいたＩさん[23]の二人が手伝ってくれることとなり、他はセツルメントの学生が来て保育を行い、園長や運営もセツルメントが行うというものである。全国セツルメント連合歴史小委員会(1957：Ⅰ14) は、「大胆、無謀といえば無謀であった。それでも初期の情熱の生んだ産物と云うことができるだろう」と述べる。

②直面した困難と母親らの声

亀有セツルメント(1957)では、みどり保育園誕生から閉鎖までの経過を丁寧に記録している。これによると、開始からわずか半年、1952 年 3 月に東大セツル中央委員会は保育園の閉鎖を決議する。その理由は、3 人いた保母(無資格者及び保育経験のない者であり、正式な意味での保母とはいえない)が退職を希望していることと財政赤字によるものだった。しかし、セツル側が保育園を閉鎖するということを母の会にだしたとき、「やめてもらっては困る」という切実な声が飛びだし、「こんなに強い要求があるとは思いもよらなかった」と学生らは続ける方向を模索し、前述のＩさんに戻ってほしいとの交渉をする。子供達も同じ寮に住んでいるので、「先生ー」と呼びに行くということもあり、Ｉさんは再度保育園で働いてくれることとなる[24]。また、川崎セツルメントで子供会活動をしていた宍戸健夫氏に、保育園の活動を助けてほしいとの声がかかり、宍戸氏が 3 回生の時、前任の三浦文夫氏を引き継ぎ、3 代目の園長となる。当時のことについて、宍戸は次のように振り返る。

宍戸：私は、26 年は川崎に行って、27 年、私が本郷に移った時に、4 月はじめくらいに話があったんですね。亀有の保育園の仕事のほうに移ってくれないかという話があって、そこが人手不足でね。学生もあまり来なくて困っているということでしたね。それがね、4 月はじめぐらいだったと思うんだけどね、実際に移って活動したのは 5 月か 6 月ぐらいかなあ。私はね、家から川崎は近かったんですけど亀有は東京の北のはずれですからね、ものすごく遠いんですよ。ええ、ちょっとね、通うのがえらい大変でね。こんなところでやったら続けられないなあと思って断ったりしたんですけどね。だけど、ぜひということで…。で、その、私の前の担当が三浦文夫という。文学部の社会学ですよね。で、三浦文夫はね、もう 4 年生だったんだね。そして、卒業論文をもうその年に書かなきゃいけない、のに、保育園をしなきゃいかんという、ギリギリのときで。もう、お願いしますよってね、口説かれましたね。私は幼稚園も行ってないし、保育園なんてそんな経験も全くないし。だから、とてもできないって言ったんだけども。だから三浦君には、社会学でもできたんだから教育学だったらできるだろうと説得されて。教育学は幼児教育の方は勉強していないし抽象的な事ばっかり読んだり聞かされたりしてるばっかりだからね、まったく実践的にはゼロですよね。

岡本：川崎での活動も、子ども会の活動でしたけれども保育園に移るというのは先生の中ではちょっと違うというのがあったんですか。

宍戸：違う、違う。川崎は日曜日に行けば良いですよね、子どもが集まってくるし。こっちの保育園は毎日ですもんね。

宍戸氏が園長就任後、早速２つの問題が生じる。１つは、保育園の立ち退き問題(全国セ

ツルメント連合歴史小委員会(1957)の表現では「追い出し問題」)であり、もう１つは専門の保母を見つけるという問題だった。

1 つ目の保育園の立ち退き問題とは、寮総会決議によって引揚者寮の一室を借りて診療所を行っていたことに対して民生局援護係長が突然訪問して許可しがたいと発言したことに端を発する。保育園も同様に許可の期限が切れており、寮の代表者が何度も陳情に行くも「反共既成同盟と称する人たちはセツルは“赤”であることを理由に追い出しを宣伝」(同上:9)した。これに対して共産党が「寮のダニを追出せ」「診療所と保育園をまもれ」というポスターをはることによって「『セツルは“赤”だ』という印象」(同上:9)をあたえることとなった。一方で、診療所や保育園の活動をよく知ってくれている人たちは「『実際にこんなによい活動をしているのだから“赤”でも“白”でもいいじゃないですか』と弁明」(同上:9)してくれ、「私たちにそっと『噂をたてられるようなことはしてはいけませんよ』と注意して」(同上:9-10)くれた。そうした声に関わらず、一度は寮総会において閉鎖が決議されてしまう。しかし、保育園を利用する母親の「保育園だって私たちの生活の上で重要なんですよ」(同上:12)という訴えや「私たちはセツルをここにとどめるためにどんなところにでも陳情に行きます」(同上:12)という猛烈な反対[25]を受け、寮委員も寮長も保育園を黙認[26]することとなった。

もう１つの保母問題について述べる。当時は、毎日母親らが当番を決めて交代で保育にあたるほか学生も手伝いに来ていたが、全員が素人である上、学生は常に活動できるとは限らず、どうしても責任が毎日保育をしているＩさんにいってしまう状況があった。そうしたことから、専門の資格をもった保育士に来てもらうことが急務であった。この点について、当時の状況を体感してきた宍戸氏は、「学生の手だけでやることのよさはあるが、学生の手だけでやってきたことでの限界」があったこと、「いかなる活動にも専門性、技術性」が必要であると語り、自身も様々な保育園を見学する等したことで関心がより深まり、その後の保育研究につながったと述べた[27]。

こうした経緯をふまえ、有資格の保母を迎えるも退職する等、紆余曲折を経て、みどり保育園は、外部に保育所ができ寮の老朽化による閉鎖を迎える 1957 年まで活動を続ける。その間も何度も保母不足と財政難から閉鎖問題が持ち上がるがその度に地域住民や母親らの声で活動が継続されてきたことを亀有セツルメント(1957:16-23, 45-50)は示している。

③実際の活動内容とその特徴

宍戸(1955)は、保育日誌を引用してその活動の一端に触れている。8:00 に保育開始。内容は、自由遊び、紙芝居、歌、散歩、昼食、おやつ等であり、16:00 帰宅。16:00～18:00 は、特別保育[28]を実施していた。「毎日のプログラムは公立、私立の他の保育園と別にちがっているというところはない。しかし、園長の色で統一されてしまうというようなところと較べればここはすべて保母とセツラーの手によって行われているので若々しさがある」(宍戸 1955:321)。また、1954 年以降は寮外に保育園や幼稚園ができるが、保育料の面でも他に比べて随分安く設定されている点も特徴といえる。興味深いのは、保育日誌の引用にある［備考］の「知能検査 はと組 4 名　治療 診療所にて、三名…略…新入園児二名」(同上:319)である。これは、11 月のある 1 日の記録であるが、新入園が 2 名ということは、随時新入園を受け入れる柔軟な体制であったと推測される。また、知能検査と治療について、引用する。

健康管理は保健部の学生と診療所との協力で、安く、計画的に、子どもたちの地域、環境のけいもう宣伝を、児童部とのたすけあいで、少ない教材費を最も有効に、おやつをすこしでも　栄養価もあり、おなかにたまって子どもの喜ぶものに―えのぐを使わせて思う存分、絵をかいたり、はっぱをひろい並べたり、お母さんたちにためてもらった柿のたねに色をぬっておはじきにしたり、学生の技能を生かした知能テストをしたりしている（同上:321）

このように、保育園以外の各部もそれぞれの学問領域や部の特性を生かした協力をし、栄養面・健康面の他、診療や知能テスト等にも取り組んでいた点も特筆すべきと考える。

また、限られた備品と場所の中で、子どもたちが椅子や机を使ってさまざまな造形物を創りだし、想像力豊かに遊んでいた姿も生き生きと描かれている[29)]。

こうした活動を約5年間行ってくる上で、財政問題への言及は避けられない。この活動は、前述のとおり、保護者の保育料も財源となってはいたが、多くは、セツル中央委員会からの補助によるものであった。保育園が始まり2年目に入ってからは、毎月5000円の補助金により何とか保母への給与も支払えるようになった。閉鎖問題が何度も取り上げながらも、結局は、地元では必要だということで、赤字続きの経営の中、母の会の協力もあって活動は続けられた。他の園では当たり前の長期未納者に退園を迫ることも即断されるものではなかった。「こうした中で出されていたセツル中央委員会の補助金は、『非常な努力の中で集められた浄財』」（宍戸1955:326）であった。これについて宍戸氏によると、戦前からの伝統があり、多くのOSがいたことから、資金は先輩からのカンパで賄っていたこと、資金が足りないとなると東大セツルの事務局が駆け回ってお金を集め、保育所へ補助金を出していたとのことである[30)]。

このように、働く母親たちの要求を受け、亀有セツルメントみどり保育園は学生セツラーによって運営され、続けられた。さまざまな困難を抱えていたが、母の会の組織化と母親も保育にも協力する体制づくり、寮に住むＩさんほか住民の協力と連携がみられた。こうして続けられたみどり保育園は、地域に公立の保育園ができたことで、学生セツルメントとしての保育園の役割は終え、閉園を迎えることになる。ここに、学生セツルメントの果した補完的役割を見出すことができる。

なお、本項では、亀有セツルメントみどり保育園の実践を中心に取り上げたが、本節の最初に述べたとおり、保健衛生部の活動も重要である。川崎や亀有、氷川下のような診療所活動のほか、「地域としてかわったところ」として、水上生活者を対象とした保健衛生活動や梅毒の集団的血液検査を行っていた愛宕セツル、結核集検に取り組む菊坂セツル、亀有セツル、江戸川橋セツル、保健所と協力してケースワークをすすめている清水ヶ丘セツルなどの特徴的実践がみられた（全国セツルメント連合歴史小委員会1957:Ⅱ7-8）。このように、地域の諸機関と結びつきながら生活実態に応じた専門性の高い実践が行われていたことも注目すべきであろう。

２．関西における学生セツルメントの成立[31)]

（１）愛染園学生セツルメントの誕生とその背景

本節では、関西の学生セツルメントについて論じることで、東大セツルメント及び関東セツルメント連合、全国セツルメントの動向との比較をする。関西における戦後最初の学生セツルメントは、愛染園学生セツルメントであるため、本節では愛染園学生セツルメントについて述べる。

1952 年　大阪大学医学部α会が日東地区に入り活動を開始する。

α会は、元々、福島地区で結核の実態調査や主婦の結核に対する知識調査及び予防接種率の調査等を行い、福島保健所と協力して集団検診を行っていた。しかし、全般的な健康管理の実施を計画していたα会と保健所長の結核一本の方針と衝突が生じていた。そのような折、愛染橋病院の茨木健二郎氏が日東地区検便活動に人出を要するため大阪大学公衆衛生の関教授を訪ねたことから、日東地区でα会の活動が始まる。

当時、愛染園も戦時中医師全員応召から医師が復帰し、諸種の地域活動のための施設も復旧して愛染園本来の目的である地域との連携のもとに地域の要望に即した積極的な福祉活動を行おうとする機運が生まれてきていた。α会の愛染園への参加問題が起こったのはこのような時期である。そして、日赤十字団の幹部および民生委員に呼び掛け、α会と集会をしたところ、もっとも大きな生活問題として水道設備の改善と南京虫の駆除問題があがる。話し合いを重ね、地区もα会の活動意義を認めα会が正式に活動に入ることになる。

一方で、この活動について大阪朝日新聞厚生文化事業団に援助を要請したところ、かつて日東地区にはキリスト教関係の大学が入り込もうと努力したことがあるが失敗したこと、かつこのような所謂うるさい地区での活動は見込みがないという理由で話は進まなかった。

当時のα会の目的は、地区の中に入り自主的な健康管理の組織を作ることだった。これに対して地区側の要求は、日東地区を単位とする国民保険の創設にあった。α会としては、国民健康保険は市区町村単位であること、この地区だけに限れば人口が少なく保険料が高価になると言う理由から実現不可能と話していたが、地区の関心を繋ぎとめ、医療費の調査理由として便利なため態度をぼやかしていた。

1953 年　地区の実態調査を目指し、保健所・学校・区役所等の統計資料をもとに基礎調査を行う。並行して南京虫駆除を行うがこれは薬の関係で不成功に終わる。同年、検便を行う。

1953 年 7 月　日東地区活動を医学的見地からのみではなく、より広い立場に立って進めてはどうかという申し出から、大阪社会事業短期大学の有志によりα会と最初の懇親会が持たれる。同時期、大阪女子大学社会福祉学科の学生たちもこれに加わり、月に 1 回の定例会議で話し合いをもつ。これが、大阪社会事業短期大学の活動参加につながる。

1954 年　地区に結核が非常に多いこと、この問題を取り上げることにより地区の人々の健康に対する意識を高められるのではないかとの理由により、結核の地区住民集団検診を行

う[32]。この時発見された要注意以上の患者 31 名につきα会と園の協力によるケースワークを行い、さらに 3 か月ごとの定期検診を行う。このほか、検便を前年に引き続き行い、また、地区組織上主婦把握は必須として、主婦の労働について調査を行う一方、乳幼児の検診も行う。

1954 年　春より社大・女子大のメンバーにより児童部活動が計画、実施される。

これにより、愛染園の下にあって定常的予算を受けながら日東地区でセツルメント活動を行う愛染園学生セツルメントが誕生する。(6 月)

大阪女子大学と愛染園[33]の結びつきについて、また愛染園において学生セツルメント活動が始まったことの背景について、以下のような言及がみられる。

> 府立大音田正巳教授の勧めにより、社会福祉関係上お手伝いとして参加。当時は愛染園病院を中心として、日東、下寺地区にセツル活動していた医療部α会と社大の児童部とがあった。何故国が愛染園学生セツラーに援助を求めたのかを調べてみると「国の人々の悩みは地区の人々が国になじまないからというのであり、学生の手を借りて国と地区とを結びつけようとしたのである。」ということになっている。
>
> 大阪女子大学セツルメント（1964:2）

当時の活動としては、大阪女子大学・社会事業短期大学が子供会を担当し、紙芝居や七夕祭り、クリスマス会等の行事も実施していた。また、社会事業短期大学が勉強会を、大阪大学α会が医療部を担当し活動していた。ただし実態は、大阪女子大学は「お手伝い」の形であり、社会事業短期大学に依存しがちであったという(住吉セツルメント 1975a)。こうした状況の中、同年、南・北日東、下寺に子供会が新たに誕生する。活動内容としては、マンネリ化する活動からの変化・脱却のためにサークル（歌、絵、手芸工作、お花を植える会）が生まれる。また、勉強会は小学部・中学部で週 3 回開かれ、キャンプやクリスマス会、母の会も実施された。母の会では、小学部の勉強会について「勉強会発展の第一歩として母の会を開き勉強会を理解してもらうと共に子供に対して持っている問題についてはなし合った」(大阪女子大学セツルメント 1964:3)と意義づけられている。

1955 年　医療部に於いては結核の集団検診、検便ケースワークが行われる。児童部においては、子供会は「子供会を子供自身の自主的な意志にそって組織化してゆきたい」と云う子供たちによる自主的な子供会の育成を目標として活動を行う。また勉強会では学習面のみでなく学童のレクリエーションの面をも含めた活動計画が立てられ実行される。

（2）愛染園学生セツルメントの実際

愛染園学生セツルメントの具体的な組織や活動内容について論じるため、本節では、愛染園学生セツルメント(1952)を参照し、規約や活動内容についてみることとする。なお、

愛染園学生セツルメントに関しては、石井記念愛染園(2010)でも論じられている。

①愛染園学生セツルメントの規約

愛染園学生セツルメントの会々則

１．本会は愛染園学生セツルメントの会と云う

２．本会は石井記念愛染園と提携し、日東、下寺地区に於いてセツルメント事業を行うことを目的とする。

３．２の目的を達成するために次の事業を行う。

　１．児童福祉に関する事業

　１．成人教育

　１．保健衛生に関する事業

　１．環境改善に関する事業

　１．社会調査

　１．その他本会に於いて必要と認める事業

４．本会の事務所は大阪市浪速区北日東町４１番地、石井記念愛染園内に置く

５．本会の会員を分って正会員、特別会員及び賛助会員とする。

　正会員とは主体となって本事業を行う学生、或は学生団体を云う。

　特別会員とは愛染園の職員、各大学の教官および有識経験者にして本事業に参加するものを云う。

　賛助会員とは本事業に協力援助するものを云う。…[34)]

愛染園学生セツルメント(1952:4－5)

以上の経過から、α会の日東地区での保健医療活動の開始、愛染園学生セツルメントの発足において、大学の教員からの呼びかけであった点、セツルメントが運営母体ではない地域の施設を拠点としていた点および財政面において東大セツル創設時の経緯との違いがみられる。もっとも、東大セツルでは OS の協力が大きくあったためこの 3 点で明確に分けることはできないが、関東と大阪のちがいを捉える一つの手がかりといえる。

②活動の目的と役割

次に、具体的な活動の目的と内容についても触れたい。愛染園学生セツルメント(1952)の勉強会の活動報告では、勉強だけでなく子供の性格の面を重要視していくという方針が出されている。また、春休みに卓球大会やゲームの会、フォークダンスの会を実施したことや、セツラーが数人の児童を担当して一人ひとりケースワークを行い、生徒を勉強しやすい方向に持っていくという計画もみられる。子供会の活動報告では、子供会の目的を「地域生活の福祉増進」(同上:9)として、「子供会は直接的には子供の生活を豊かにすること、勉強会は教育、教化活動を行って児童福祉に資するとともに間接的には、社会福祉施設としての愛染園の地域福祉活動活発化のため、住民との交流の促進を計ると云う役割を果たしてきた」(同上:9)と、社会福祉の観点からの目的、愛染園で活動する学生セツルメント

としての役割が述べられている。

活動報告に続く「本年度子供会活動の考察」では、「児童部活動に於いて…（略）…中心となる機能は、紙芝居、幻燈、遊びによって子供達の情操を豊かにし、子供の持つ様々な欲求を満足させ、子供に生活をエンジョイさせる事である」(同上:12)としている。こうした機能が中心に置かれる背景として、活動地区である日東地区の子供たちの状態についても調査結果をもとに言及している。

下寺・日東地区実態調査第3部「幼児について」の調査によると「世帯員の手で幼児の保育が行われているのは33.6パーセントで約3分の1にすぎず､近所の子供と遊んでいるものは45.4パーセントと高率で、家族や近所の子供たちとも遊ばず1人でいるものは1割近い9.2%もある。このように保育の状態は不十分である。又日東小学校の生活指導の面に於て、学業成績その他知的発達に於いてはそう問題はないが、情緒の未熟・情そうめんの発達が一般的水準よりやゝ劣ることが云われて居り、保育状態と、この問題とはかなりの相関度をもつものと考えられる。調査報告も､『このような幼児達そのものをどう責めることもできない。幼児達を放っておかざるを得ない状況にある状態にこそ問題があり、何らかの社会的な手がさしのべられない限り家庭の問題、子どもの問題としては中々解決されないであろう』と結んでいる」(同上:12)とした上で、「このように、紙芝居、幻燈、人形芝居、歌等を通じて豊かな情操を養い、セツラーと子供達との愛情と善意に満ちた接触により、様々な情緒の充足、調整をはかり、共に遊ぶ中で社会性、協調性を身につけてゆくといった子供会の機能は、日東町に於ては非常な重要性を持つことは云うまでもないことである」(同上:12)としている。

３．再興期における戦前との連続性―教員・OSとのつながりから―

本節の冒頭で述べたとおり、北川（1958）は「学生のみによる再建」という点において、戦前との「形式的な断絶」を示した。この点に関して、これまで述べてきた東大セツルメント、愛染園学生セツルメントおよびその他のセツルメントを取り上げ、検討したい。

（1）東京大学セツルメントにおける教員やOSの支援

前述のとおり、東京大学セツルメントは、キティ台風の救援活動を機に、「もっと恒常的な民衆の文化、生活の向上のために学生の参加できるような組織を作ろうという声」があり、「戦前のセツルメント運動を伝え聞いた学生達はこの組織をセツルメントとして復活しうるものである」(全国セツルメント連合歴史小委員会 1957:Ⅰ7)と考え、再建した。その意味では学生の主体性・自発性を契機とした再建といえる。しかし、再建当初から財政面などで OS などの支援が大きかったことは先述のとおりであり、宍戸の語りでも聞かれた。では、具体的にはどのような人物が、どのようなかたちで関わっていたのだろうか。

みどり保育園（1952）は、「保育園更正願」と書かれた複数の紙片からなる書類で、民生局への提出書類の下書きのように思われる。そこには、保育園の経緯・概要とともに責任者として学生セツラー4名の氏名と住所、保母、嘱託医に続き、最後に「指導教官　東大教育学部　助教授　宮原誠一/太田尭」[35]の名前がある。つまり、学生主体のみどり保育園にあっても、大学の指導教官があっての運営であることが公式文書で示されていることにな

る。また、東大セツル中央委員会（1954）では、法人化に向けた「理事会構成をめぐって」の記事のなかで、理事候補の名前と略歴が列挙されている。【OS・指導教授側】の「指導教授」の欄では、川島武宣、来栖三郎、三木威男治、松岡脩吉の名がある。そして、来栖、三木、松岡については、戦後セツル復活以来の指導教授、と記されている。「教授有志」の欄では大河内一男、宮原誠一、「O・S」の欄では、曽田長英、磯村英一、福島正夫の名があり、計 9 名となる。【現役セツラー陣】では、川崎診療所長の南方や亀有診療所長の津山[36]、主事の筆宝和幸のほか、中央委員長ら計 8 名の氏名が並ぶ。

法人化の構想は実現しなかったものの、上記資料から、東大セツルメントは戦後再建期から OS のみならず大学教員が「指導教授」として関わっていたことがわかる。戦後の再興期にあたる本期において、東京大学セツルメントは、学生を主体として再建し、その運営も学生であった一方で、大学教授や OS と密接に結びついて支援を得、戦前の伝統を引き継ぎながら展開していったのである。

なお、1 点補足する。本章第 2 節で東大セツルメントの再建は、1949 年のキティ台風の救援活動を契機としたものであると述べた。一方で、朝日新聞・東京版の 1945 年 12 月 14 日付朝刊では、東大セツルメントは「終戦と共に再び再興の聲がわき上り、末弘教授指導の下に十二日東大法学部教室で初の準備委員會が開かれた。再興セツルメントは昔の都市勞働者、細民を対象としたのに反し農村に進出することになり、手始めにこの冬休みに埼玉縣に入る豫定である」とされている。この記事の内容の真偽やその後の動向については資料上の限界があり、詳細は不明である。ただ、戦前と同じく戦後も末弘が主導権をもってセツルメントを再建しようとした動きがあったことが垣間見られる。また、戦後、農村セツルメントの動きがみられる背景の一端として捉えることもできる。

（2）その他のセツルメントにおける教員の関わり

愛染園学生セツルメントの場合は、大学教授の関わりが東大とは異なるかたちであらわれる。先述のとおり、大阪大学α会の活動は、愛染橋病院の茨木健二郎氏が日東地区検便活動に人出を要するため大阪大学公衆衛生の関教授を訪ねたことから始まっている。大阪女子大学も府立大音田正巳教授の勧めにより、社会福祉関係上の手伝いとして参加したのがきっかけである。このように、大学教授がセツルメント活動に学生を誘ったことが直接的契機となっている点で、東大セツルの場合とは異なる。

次に、仙台綜合セツルメントについて取り上げる。仙台大学綜合セツルメントは、1954 年 7 月に東北大学、宮城学院大学を中心として設立し、同年 10 月には有明寮子供会もその一支部として合流している（鹿野セツルメント[37]1964:12-13）。1955 年 6 月の関東セツルメント連合第二回大会や全国セツルメント代表者会議などに出席しており、全セツ連結成前から活発に参画している（全国セツルメント連合歴史小委員会 1957:Ⅱ）。これらから、その後の仙台セツルメント連合結成の中心となるセツルメントといえる。十年史によれば、1954 年 7 月の創立総会によって、「理事長伊藤実（東北大学医学部教授）常任理事十人」を筆頭に、「市内六ケ所の活動地域で始まった」（鹿野セツルメント 1964:12）という。また、機

関誌第一号の理事長の言葉が次のように引用されている。「彼等はこの運動を理解して下さる人々から尊い援助を賜り、医師会や弁護士会の先輩にはげまされて、やっとささやかな仕事の路につくことができた」(同上:13)。

なお、仙台綜合セツルの趣意書では、憲法 25 条に触れ、「現在の日本ではこの基本的人権とも称すべき権利が十分には守られていない有様です」「現実の中で社会の下積みになって苦しんでいる人達の生活をすこしでもよいものにしようとするセツルメント運動が…略…学生を中心に行われてきました。それは自分達の学んでいる学問を自分達の持っている技術を少しでもそれらの人達の役にたっていこうとするささやかな努力の集積されてきたものです」と述べている。社会保障制度がその目的を達することができないなかで、セツル活動の必要性はますます増大している、として、趣意書でその活動意義が論じられていることを十年史で紹介している（同上:12-13)。ここにも、人びとの生活を守る運動や社会保障制度の補完としての役割が見出せる。

論を戻すと、資金募集活動を訴える昭和 30 年度（1950 年度）の趣意書には、当時の理事が連名で「広く一般に資金募集を訴えている」としており、理事には各大学の学長、教授、弁護士、市長などが記載されている。仙台綜合セツルメントにおいても、設立当初から大学教授らが理事であり、医師会や弁護士会、市長などの支援を受けていたことが理解できる。一方で、1963 年の規約には理事会規定はなく、肩書を「顧問」として大学教授の文章が掲載されている（同上:9-11)。ここには、保健部と法律相談部が消滅していることが関係していると推察される。

また、1957 年 7 月 22 日付の朝日新聞の記事では、青山セッツルメント（岩手大学、岩手医科大学、盛岡短期大学から構成）は、「各大学の教授を相談役、山本盛岡市長、県、両市社会福祉協議会、ロータリー・クラブのメンバーを賛助会員にし、それに地元の青山小学校が援助することを約束した。/このように外部の援助を得て出発したことが、この活動を経済的にも割合いに円滑にすすめることの出来た一つの、理由になっている」[38]とある。

（３）戦後再興期における大学教授らの支援

従来、戦後の学生セツルメントは、学生の自主性に基づく主体的な活動として再建したとされてきた。関連して北川(1958)は、「学生のみによる再建」と表現していた。たしかに、それは一面では正しいといえる。だが、診療所や保健医療活動、保育園、法律相談など、専門性の高い活動が展開された本期においては、大学教授や医師、弁護士らの支援によって、活動場所や財政面、活動内容が保障された側面もあることがこれまでの論で明らかとなった。また、再建にあたっては、東大セツルでは学生の声を契機として、愛染園学生セツルでは施設と結びつきながら、仙台綜合セツルでは大学教授や市長らからなる理事会が大きな役割を持つなど、支援のあり方と誕生の契機や活動内容が結びついていたことも示された。加えて、東大セツルにおいては専従者の地位は学生よりも低い上に診療所収入が活動資金にあてられるなど、学生主導の側面がみられた。一方で、仙台綜合セツルメントでは関東セツルメント連合結成初期から討論に参加していたにもかかわらず、全セツ連に

は準加盟の立場をとっている（鹿野セツルメント 1964)。本期の 1 年先であるが、1956 年 5 月 27 日の全セツ連第 2 回大会では、「（３）学生の限界など、外部的制約」の中で「九大、愛染園からは、市や他団体から財政的援助を受けている悩みが出された」（全国セツルメント連合歴史小委員会（1957:Ⅱ24）との記述もあり、市や他団体からの援助が自由な活動の制限につながっている側面も垣間見られる。以上から、外部の支援のあり方と運営とが大きく関係していることが本期の特徴の１つといえる。

一方で、大学からの支援や理解はどうだったのだろうか。戦前は大学からの援助も大きかったが、全セツ連第 2 回大会の討論に関して、「学校との関係」の項で、「実績をあげて認めてもらう」「お互いに柔かい雰囲気をつくる」（同上:22）とある。また、1955 年 6 月 19 日の第 2 回関東セツルメント連合大会では、「諸提案並びに決議」のなかで、「川崎セツルへの警察干渉抗議文」（同上:13）とあるなど、戦前の思想的側面への警戒が少なからずあったことを窺わせる記述がみられる。大学教授などのなかには、大学セツルメントで活動していた者も多いと推察され、そうした戦前の伝統を引き継ぎながらも、一方ではそれが制約となる面や、戦前との同一視からの警戒を受けていた面などが見出された。

第４節　小括

１.再興期における学生セツルメントの展開

本章では、1945 年－1955 年という戦後の 10 年を取り上げた。第 1 節では、国民の混乱し困窮した生活状況、占領下のもとで行われた公的扶助の特徴について述べた。その中で、基本的人権の尊重、生存権の保障が謳われながらも、実態としては国民総スラム化状態ともいうべき状態の中で、事後処理的な緊急の窮乏対策に追われ、法整備と実態が結びつくまでには至っていなかったということが明らかとなった。

第 2 節では､戦後初の学生セツルメントである東大セツルメントの誕生とその後の経緯、そして全国セツルメント連合結成とその背景について述べた。戦後の混乱状況の中から学生が立ち上がり戦前の帝大セツルメントの伝統を引き継ぐかたちで東大セツルメントが再建され、地域住民の必要や生活状況に応じた活動が行われた一方で、セツルメントとは何かという問いについて初期から大きな議論になっていたことが理解された。

第 3 節では、各地域のセツルメントとして、東大セツルメントから関東セツルメント連合の結成に至る経緯と、関西初の学生セツルメントである愛染園学生セツルメントについて述べた。そして、それぞれの実践の内容にも言及した。東大セツルと比較すると、愛染園は、地域福祉施設を拠点として学生がセツルメント活動を行っている点、国や教授の要請を受けて活動が始まっている点が特徴的といえる。一方で、両者とも、当時の時代背景や社会状況、衛生状況を反映し、保育や子供会活動、保健医療活動等の実践が展開されており、制度や政策の補完的役割を果たしていたことが指摘できる。また、大学教授や市長、他団体の支援を受けて再建や活動が展開されている点についても示し、本期は単純に「学生のみによる再建」と言い切れない側面があることも明らかにした。

２.学生セツルメントの再興期における社会福祉運動との関係性[39)]

本章の最後に、本期のセツルメントについて、社会福祉運動との関係から検討を加える。先述のとおり、東大セツルメントはキティ台風の救援活動を契機に国民の「生活の向上のための組織」を作ろうという趣旨から再建された。1950 年の東京大学セツルメントの規約でも、「この会は貧困者の生活向上をはかるために種々の事業を行い、それを通じて調査研究をするを目的」（全国セツルメント連合歴史小委員会：Ⅰ8）としていた。1951 年のパンフレットでは「吾々の動きがたとえさゝやかではあれ、彼らの生活の中であらゆる意義での文化的な生活擁護のためのセツルメント（※筆者傍線）として利用されている」（同上：Ⅰ10）との記述もある。また 1952 年の三大スローガンでは「大衆の生活を守ろう」が挙げられていた。これらからは、戦後の混乱期、人々が苦しい生活を迫られる中で、学生セツルメントが国民の生活擁護、社会福祉の実現を目指していたことがわかる。

また、戦後さまざまな資源が不足している状況で、地域に合わせて新たに創りだしていく運動体としての機能も併せ持っていた。

真田は、社会福祉運動を「社会問題としての生活問題を解決ないし改善しようとする社会運動」と定義づけ、「社会福祉運動は、社会福祉の原動力である社会運動」（真田 2003：49）だと述べる。この真田の定義に基づけば、初期の戦後学生セツルメントの目的やスローガンは、社会福祉運動にも重なるものであった。また、実践面においても、診療所やみどり保育園の実践はまさに「社会問題としての生活問題を解決ないし改善しようとする」性質をもっていたといえる。

次章では 1956 年－1973 年を対象とし、この時期の活動がどのように継続され、展開していったかについて検討したい。

注

1）池田（2001：171）によると、1945 年の農業生産は戦前水準に対して 6 割に落ち、工業生産は二割まで急落、実質賃金も 1947 年に戦前水準の 3 割に低下した。

2）日本共産党の略称

3）宍戸健夫氏によると、全国学生セツルメント連合歴史小委員会は、恒常的な組織ではなく、本冊子を作るために結成されたものであったとのこと。（2016 年 2 月 14 日の聞き取りにて）

4）本資料は、二部構成で、宍戸健夫による「第一部 東大セツルメント史」と田辺尭による「第二部 全国セツルメント連合小史」からなる。そのため、Ⅰ・Ⅱと表記した。

5）専従者といい、セツルメントの活動で生計を立てるものを指す。診療所の医師や看護師などが含まれた。

6）機関紙や報告書、大会基調等は戦後の全セツ連からも多数発行されている。なお、それらは各大学図書館や国立国会図書館でその一部が保管されているが、ごく一部にすぎない。

7）第 1 回総会の 3 か月後となる 1951 年 9 月に法律相談部が正式に発足し、総務部の下に診療部・情宣部・文化部（勉強会・子供会）・法律相談部という組織体制となる。

8）県庁保護課より①健康保険の制限枠外の診療、②実際の診療額を上回る過剰請求、③保険医不在の中での保険診療、の 3 点から健康保険医資格のはく奪と診療所閉鎖通知が来たという問題。地元住民の 1300 に上る署名と何回もの陳情が行われた結果、県庁側が譲歩する形で診療所は存続することになる。この問題の背景には、他の診療所に比してセツルメント診療所が重点的に調査を行われた点にあるとされている（全国セツルメント連合歴史小委員会 1957：Ⅰ23-25）。

9）セツルメントハウスの略称。戦前から、セツルメントハウスには拠点としての機能があった。

10）レジデントとはセツルメントハウスに住み込みの者で、学生が主であった。レジデントは、戦前の大学セツルメントにもみられた。

11）仕事として生計を立てている労働者のことで、診療所の医師や看護師、保育所の保母などが専従者にあたる。

12）なお、「第 5 回総会決定の組織」の表の注では、「この組織は、法人化とセツル連合結成への二つの問題を準備している。主事は有給、セツルの経営責任者及び対外責任者として両地区経営体の指導、経営審議会の運営、維持会ヒ獲得を任務とする。常任委はできるだけ有給にする。O・S、維持会員名簿作製、維持会ヒ徴収、他大学あるいは他セツルとの交流、中央経理、各地区の財政把握調整、セツルニュース発行、各部・各地区情宣交流、学内宣伝、研究発表」と書かれており、組織としての形式化が意識的に強く進められたことが分かる。

13）例として、「①平和と独立のための斗い」の中で「朝鮮休戦の完全な実行」「再軍備徴用反対」はじめ五項目、「②健康と民主々義的勝利のための斗い」の中で「低賃金、労働強化、失業の反対」「社会保障、生活保ゴなどの社会保障制度の拡充」はじめ六項目が挙げられている。

14）2016 年 2 月 14 日の聞き取りより

15）東大セツルは、「東大セツルメント中央委員会」として、複数のセツルメントおよび活動領域を含む連合組織であった。

16）1954 年の短大・大学進学率は 10．1％であった（文部科学省（2018）「文部科学統計要覧」（http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1403130.html，2018.12.8）。

17）東大セツルメントには、当時、東京女子医大、栄養短大など多くの他大学生が参加していた（全国学生セツルメント連合歴史小委員会 1957）。

18）当該資料では、「第 1 回大会」と記されており、「結成大会」と同義である。

19）レジデントの略

20）2016 年 2 月 14 日に実施した宍戸健夫氏への聞き取りより

21）生活状況を鑑み、みどり保育園は保育料の分割払いや日払いを認めていた。この方式は、運営上は厳しいものだったが、母親らの要求により閉鎖まで続いた（亀有セツルメント 1957）。

22）その後、この部屋は出なければならなくなり元風呂場を 2 部屋の保育室と事務所に改造して使用する（亀有セツルメント 1957）。

23）研究倫理の観点から、Ⅰさんと表記する。

24）開始 2 か月でⅠさんに対して支払われた金額は 3000 円であり、正式に「働いていた」とは

言い難い側面をもっている。また、復帰後も、Ｉさんは一人で保育の中心を担う立場にありながら、財政難から、最低限度の生活保障すらままならない程度の額しか支払いができない状況が続いていた(亀有セツルメント 1957)。なお、当時の保母への給与の詳細は、亀有セツルメント(1957)に表で示されている。

25) 「猛烈な反対」は、宍戸(1955)の引用。

26) この黙認は、保育園だけでなく、診療所と勉強会についても同様である(亀有セツルメント 1957)。

27) 2016 年 2 月 14 日宍戸氏への聞き取りでの言葉。

28) 特別保育は、「ただでは申し訳ない」との母親の声から、10 円に設定していた (宍戸 1955)。

29) 亀有セツルメントみどり保育園の活動や川崎セツルメントの診療所活動などについては、高岩震(1982)『きみがまだ生まれなかった頃 1952 高岩震写真集』に活動のようすが分かる写真が掲載されている。なお、保育園の写真については、宍戸氏からの提供写真とも複数点一致した。

30) 2016 年 2 月 14 日宍戸氏への聞き取りより。なお、収入には、地域からの寄付なども含まれている。

31) 本節は、岡本(2014)を加筆・修正したものである。記述にあたっての参照資料は、愛染園学生セツルメント (1952) 及び住吉セツルメント(1975a)、大阪女子大学セツルメント (1964) である。

32) 昭和２７年 (1952 年) にできた結核予防法の一部改正により保健所は年に１度管轄区内の集検を行わなければならないことになっており、大阪市衛生局との交渉の結果、学生実習の規定により集検費用無料となる (愛染園学生セツルメント 1952)。

33) 愛染園は、「社会事業施設としての機能を果たしつつ、社会改良の理念のもとで地域住民の二―ドを受け入れその解決を通じて地域社会の向上をはかっていくもの」と位置付けられている(東住吉セツルメント(1963)「道標　第 5 号」42-45.)。

34) 本会則は 9 項目で構成されている。

35) 「／」は、原文において改行していることを示すため、筆者が加筆したものである。

36) 「津山直」はペンネームであり、本名は「高野勲」である。詳細は、大阪教育大学・社会教育学研究室 (2012)「亀有セツルメント診療所所長 高野勲(津山直)追悼特集」『社会教育学研究』25 参照。

37) 仙台綜合セツルメントは、1956 年に鹿野セツルメントに改称。

38)この記事は、 西内(1971:98-104)にて引用掲載されている。なお、「／」は、原文において改行していることを示すため、筆者が加筆したものである。

39) 岡本 (2018a) の一部を加筆・修正したもの。

第３章　学生セツルメントの組織構築期（1956－1966 年）

本期は、学生セツルメントの組織構築期として、1956－1966 年を区分し、論じる。本期の時期区分について、社会福祉史との関係では、菊池ほか(2014)による 1956－1973 年、真田(2002)の 1955－1974 年、河野(2002)の 1960－1973 年、吉田(2004)の 1958－80 年代前後と、論者によって幅はあるが、社会福祉の制度政策が整備され福祉元年を迎える 1973 年あるいは低成長とともに福祉見直しといわれる状況が生じる 1974 年あたりを区切りとする場合が多い。しかし、本研究においては、学生セツルメントの動向との関係もふまえ、1956－1973 年のうち、1966 年までを本章の対象とする。具体的には第 2 節以降で論じるが、本期は、学生セツルメントにおいて理論化が進められる時期と学びの場としての位置づけへと方針転換する時期を含む。そして後者は、その後 1960 年代後半以降の方針や組織体制が変化につながっていく。また、学生運動の様相も 1960 年代後半以降、変化していく。これらをふまえ、1966 年までを区切りとする。ただし、必要に応じて前後する時期も含め論じる。

第１節　社会状況と社会福祉の動向[1)]

本期は、高度経済成長期に位置付けられ、日本の社会状況・社会福祉の双方において、大きな変化のあった時期といえる。本節では、学生セツルメント活動との関係を検討するため、本期の社会状況や社会福祉政策・実践を概観したい。

１．社会状況と国民生活―高度経済成長と国民生活の変化―

1955 年から 1973 年までの 18 年間は、高度経済成長期といわれる。神武景気(1955－57 年)、岩戸景気(1958－61 年)、そしていざなぎ景気(1966－70 年)の三階梯を通じて「重化学工業化」が進んだ（中村 1995）。また、景気上昇を背景に政治面でも経済政策が積極的に進められる。1960 年に発足した池田内閣は「所得倍増計画」を掲げ、欧米先進国を大きく上回る高成長を記録した(武田 2008:80)。また一方で、貿易自由化も推進し、企業の設備投資や新技術の導入が図られた結果、1963 年には OECD に加盟、先進国の仲間入りを果たした(中村 1995:32-33)。政治面でも、1956 年日ソ共同宣言発効により日ソの国交が回復、同日、国際連合への加盟が承認された（武田 2008:26）。

高度経済成長により、国民の生活も大きな変化を迎えた。石炭から石油へのエネルギー革命は、三種の神器といわれる家電製品の普及を促し、家事労働時間の短縮につながった。

また、人口の多数を占めた第一次産業従事者は、戦後の二度にわたる農地改革やエネルギー革命、工業化推進の影響により減少したほか、後述する集団就職や出稼ぎにより農村では過疎化が生じ、都市部は過密化する。50 年代の農村の様子と高度経済成長に伴う変化について、雨宮(2008)は以下のように記述している。「敗戦後の日本では、軍隊からの帰還者、軍需工場から解放された二〇歳前後の若者たちが村にあふれていた。彼らは同一世代全員加盟制を基本とする民主的な青年団を地域ごとに結成し、社交ダンス、農村劇など

の『農村文化運動』をおこなった。…当時は農民組合や民主的な青年団の活動が盛んで、農村のコミュニティは革新側が主導権をもっていた。このような動向が大きく変化するのは五五年ころである。農産物の自由化、農産物自体の変化、保守主導による農業基盤の整備などに伴って農民の生活と意識が大きく変化しはじめた。伝統的な暮らしが一変し、労働と生活のすべてが市場メカニズムの中に組み込まれていく」(同上:183)。

高度成長が本格化する 50 年代後半には、農村地域の若年層の多くが都市近郊や都市部集団就職で移動してきた。 都市部への人口の大量流入である(武田 2008:96)。これらの単身世帯は、都市部の核家族世帯となっていく。また、雨宮(2008:182)は、厚生労働省の人口動態統計を参照しつつ、1950 年代から 60 年の間に自宅出産の子どもの数および自宅で亡くなる割合が急激に減少していることを指摘した。

本期は、高度経済成長のひずみが生じる時期ともいえる。例えば吉田(1990)は、「高度経済成長が直接生み出した貧困」への注目を促した。また、岩田(2018:135-136)は経済・労働の「二重構造化」が進んだ点を指摘する。二重構造とは、「一部の人びとが労働市場からも福祉国家からも排除されていること」を指し、「『一流国民』と『二流国民』への社会的分裂」(同上:137)として、所得格差の拡大に触れている。また、水俣での水銀中毒問題や都市部の大気汚染が問題となった(武田 2008:114)。1960 年代には物価上昇も国民の生活にとって大きな影響を与えていた。このように経済成長は、人々の生活の場やライフスタイル、家族構造の変化など、暮らしや生活に大きな影響を与えた。

本期は、子どもの文化にも変化がみられた。50 年代、子どもたちはおおむね「ガキ大将」に率いられた地域の遊び集団に属しており、異年齢の縦集団の中でべーごま、めんこ、石けりなど伝承遊びのルールや技術、さらに集団行動における個人の役割や勝負の厳しさなど、人間社会の「掟」の原型を身につけていった。「この遊び集団は大人の指導や管理から解放された、大人立入禁止の『子ども共和国』であり、大人社会から比較的自由であった」(雨宮 2008:185)。また、貸本屋や駄菓子屋に象徴される「路地裏文化」も存在していた。これらの「ガキ大将文化」「路地裏文化」は、50 年代後半からのテレビの普及や学歴社会の開始によって解体し、衰退していった(同上:185-186)。

教育の面では、大学・短大への進学率が高まり[2)]、高学歴者が増加した。その背景には、56 年の教育委員会の任命制への変更と教科書検定の強化、57 年の教員勤務評定の強行、58 年の指導要領の強制化、等が挙げられる(同上:186)。一連の動向は、「中央集権によって地域の個性や教員集団の自立性を解体させて、均一な一つの基準による教育の体制がつくられたことを意味する」と雨宮(2008:186)は述べる。この動きは子ども会とも関連する。

前章で述べたとおり、学生セツルメントと子ども会活動には密接なつながりがあるため、概略を述べる。1955 年に文部省が「青少年団体活動の促進について」を出す。これは、「校下又は地域」を中心に「団体共同生活を通じて友愛、相互扶助、共同奉仕、規律節制、郷土愛等の精神を体得するような運動が全国的に促進されることが必要である」というものであり、秩序維持や非行対策としての意味合いも含んでいた。そして、学校教育をめぐる一連の改革が完了する 1958 年には、「ボーイスカウトなど全国組織を除き、『児童クラブ』

『児童愛護班』合わせて約 6000 団体、400 万人が組織」(中村 1978:37)されたという。他方で 1951 年結成の全社協は、厚生省との共催で「子どもレクリエーション・キャンプ指導者講習会」を始めその後も改称しながら 1961 年まで継続した。 さらに、1963 年に文部省主催の「少年生活指導研究集会」に参加していた子ども会指導者の有志をメンバーとして 1964 年に結成された「全国少年団体指導者連絡協議会」が「全国子ども会連合会」へと改称し活動が始まった。他に、少し遡るが、1950 年に部落解放委員会が『解放新聞』に「子供会のつくり方」を掲載するのと前後して、各地で部落子供会がうまれている(同上:35)。このように本期は、子ども会が注目され各地で子ども会結成への機運が高まっていく時期といえる。

２．社会福祉六法体制とその他の法整備

高度経済成長に伴う産業構造及び人々の生活スタイル・家族構造等の変化がみられた本期は、社会福祉も大きく発展をみせる時期である。

本期の少し先であるが、真田是は、社会福祉の内容や水準に基底的な影響を与えている枠組みとして三元構造論を提起した[3)]。三元構造論とは、①対象となる社会問題としての生活問題、②社会福祉をおこなう政策主体、③社会運動、からなる理論である。

この理論を骨格として本期の社会福祉の概略を述べる。まず、本期の生活問題は、それまでの所得・収入の不足といった経済問題だけではなくなり、社会福祉の対象としての生活問題が多様化する(真田 2002:27-28) 。そのため「生活困窮者に対する『事後的な救済』に加え、一般国民の老齢、障害、死亡などからくる『貧困の予防』の重要性・現実性が増していった」河野 (2002:73) 。これらの状況を背景として、1959 年には国民皆保険・皆年金制度が導入され、「生活保護中心から社会保険中心の時代へと移行することとなった」(同上:73)。池田 (1994:184) は、社会保障が経済成長のための手段として認識されると同時に経済成長が社会保障前進のために必要となったことを背景に、「国民皆保険・皆年金」が政府主導で行われたと指摘する。また、そのために、60 年度版の『厚生白書』は、「福祉国家への途」とのサブタイトルをもつことになったと述べる。これは、政策主体による社会問題の認識の問題と関係する。

また、生活保護については、1945-57 年の生活扶助基準の据え置きなどを背景に「一九六〇年には平均的な勤労者の生活水準の四割以下になり、生活保護史上最低を記録する」(同上:181)。「この間保護率が一九五五年の二一. 六から六〇年の一七.四に低下する。こうした状況が、生活保護基準の憲法判断をもとめる朝日訴訟につながった」(同上:181)。朝日訴訟の詳細は本稿では割愛するが第 1 審の原告勝訴判決の翌年、1961 年の第 17 次改定により保護基準は 18%の大幅引き上げとなる。保護基準の算定方式も 1962 年にマーケットバスケット方式からエンゲル係数方式へ、1967 年には格差縮小方式へと改善されることとなった。このように、朝日茂による「裁判提起は、生活保護基準の上昇に影響をあたえただけでなく、生存権をめぐる権利意識を国民に拡げることとなった」(同上:182)。また、河野(2002:72)は、この点について、権利意識に加えて権利運動の形成への影響にも触れてい

る。つまり、真田の三元論に基づけば、社会福祉運動が政策主体の社会問題認識を促し看過できない問題として顕在化させた側面、権利を求める社会運動によって政策主体に社会問題の改善を促した側面があるといえる。一方で、経済成長によって被保護世帯における稼働率が大きく低下したのも本期の特徴である。池田（1994:182）は、生活保護行政の抑制的運営にその背景をみる。そして、本期の雇用状況や生活構造の転換が公的扶助の役割を低下させ、社会福祉サービスの必要性が高まりそのための立法化が進んだと指摘する。すなわち、「生活保護万能時代から社会保険中心の時代に入り、社会福祉の単法化傾向が進んだ」(吉田 2004:317)のである。

こうして福祉三法に加えて 1960 年に精神薄弱者福祉法、1963 年に老人福祉法、1964 年に母子福祉法の三法がそれぞれ公布・追加され、生活保護法以外に児童・老人・身体障害者・知的障害者・母子のための福祉サービス立法にもとづく「福祉六法」時代をむかえることとなった。加えて、それぞれの分野における関連法案の他、福祉司・相談員といったソーシャルワーカーが制度化された。1965 年には障害者のリハビリ(社会復帰)を援助する専門職、理学療法士（PT）、作業療法士（OT）も制度化され、60 年に日本ソーシャルワーク協会、64 年には日本精神医学ソーシャルワーカー協会も結成された（菊池ほか 2014:172-173）。

また、この時期の重要な動きに、部落問題がある。1958 年の社会福祉事業法改正を背景に、第 2 種社会事業に定められた社会福祉施設として、同和地区隣保館の設置が進み、1969 年までに 292 館が設置された(全国隣保館連絡協議会 2016)。セツルメントの系譜をもつ隣保館の中には同和地区に存在するものもあったが、こうした背景をもとに同和地区の社会福祉施設としての隣保館の設置も進む。また、1965 年の「同和対策審議会の答申により『同和問題の解決』が国の責任とされ、国民的課題と認識された」（菊池ほか 2014:175）。

本期は、資本主義社会のなかで、政策主体である政府が雇用増大や労働力確保、経済成長を意図して社会福祉に関する法制度の整備拡充をすすめる動きと住民や当事者のなかから権利保障を求める運動の高まりによって、そしてその両者の関係性によって、社会問題としての多様な生活問題が認識されさまざまな問題が社会福祉の対象として認識され制度化につながる時期といえる。

３．社会運動・学生運動の高揚

先述のとおり、本期は多様な社会運動が展開される時期であり、そうした運動は政治や社会福祉との関係の中で展開された。住民や市民主体の運動が活発に展開され、学生運動でも大学紛争に限らず、政治や社会情勢にかかわる市民運動・住民運動との協働がみられた。

（１）労働運動及び社会運動・学生運動の諸相

労働運動では、エネルギー革命を背景に国内最大の炭鉱であった三池鉱業所にて経営側からの人員削減や労使慣行改革の提案に端を発し 1959 年から 60 年にかけて三池争議が起

こる。指名退職勧告、従わない者への解雇通告といった「経営側の姿勢は、合理化が求められ雇用の調整が必要であるという状況を利用して、労使関係のあり方そのものを変えていこうという強い意志が働いていたためであった。それゆえ、これに対する労働組合側の対応も強硬なものとなった」(武田 2008:42)。結果的に三池争議は労働組合側が敗退した。これは、「敗戦後の民主化政策のなかで、生活防衛のために生まれた強い闘争主体としての労働組合運動が、その時代の役割を終えたことを意味した」(同上:43)とされる。「戦後復興期の労働運動は戦闘的な方針によって経営側と対決し、労働条件の改善を勝ち取ってきた」(同上:72)が、三池争議の敗退を契機に春闘方式が定着したことで激しい闘争方針による労働組合は後退し、協調的な労使関係へと歩むことへとなった。

同時期に起きた安保条約改正阻止運動も、本期における重要な運動であり、「安保闘争程大規模な『国民運動』は、それ以降起きていない」(星野 1995:181)とされるほど大規模なものであった。1959 年に総評や社会党を中心に結成された「安保改定阻止国民会議」が組織的な取り組みを展開する。しかし、衆議院で強行採決がなされると反対運動は一挙に倒閣運動の色彩を強め、デモが国会周辺で激しく繰り広げられることとなり、自衛隊の出動を要請するほどであった。安保改正阻止運動(いわゆる安保闘争)には、多くの学生運動家も参加し、そうした中で、国会構内で東大生が死亡するという事件も起きた(武田 2008:55-61)。その他、原水爆禁止運動やベトナム反戦運動[4]、公害反対運動、沖縄返還運動といった国民運動がさかんに繰り広げられた。

これらの「国民運動」では、「『丸抱え』『勢揃い』型の運動組織とは異質の、市民が自発的に形成した団体も登場した」(星野 2004:181)点に特徴がある。このように、「1960 年代には市民によって自発的に形成される運動がさまざまな分野で生まれた」(同上)。また、こうした運動には安保闘争と同様、多くの学生が加わり、それは学生セツラーにとっても例外ではなかった。他方、1950 年代後半にはサークル運動が高揚期を迎えることも本期の特徴といえる。こうした地域住民や市民が主体となって生活や身近な問題の改善・解決を求める運動の動向は、社会福祉をめぐる運動にも関係する。

（2）社会福祉をめぐる運動の諸相―当事者運動を中心に―

本期の社会福祉をめぐる運動は、当事者運動の広がりに 1 つの特徴がある。1964 年に全国進行性筋萎縮症親の会（翌年日本筋ジストロフィー協会）、1965 年に全国精神障害者家族連合会、難聴幼児を持つ親の会、1957 年には青い芝の会など、相次いで家族会や親の会、当事者会が結成された（菊池ほか 2014:172-173）。また、前述の朝日訴訟も生存権保障を求める重要な運動の 1 つである。大門(2012:185)は、「五〇年代から六〇年代半ばの「生存」の運動は、国保と生活保護を対象にした生存権を求める運動に代表される」と述べる[5]。また、「高度成長政策による女性労働力の動員が『ポストの数ほど保育所を』の要求と運動を全国的に巻き起こし、これらに公害や過密・過疎の環境問題も加わって、自治体改革の住民運動も高揚した」(真田 2002:28-29)との指摘もある。このように本期は、「政治や労働の運動と社会福祉の運動とがこの時期には通底していることがわかりやすく示された

運動の高揚期」(同上:29)であり、「生活問題に新しい生活問題も加わった」ことを「国民が主体的に受けとめて要求・運動を展開したことが政策主体に施策を迫ることになった」(同上:30)時期だといえる。

４．本期における社会福祉の特徴

本期は、通所施設や在宅福祉サービスの拡充が進み、地域福祉が着目され始める。「戦後の混乱期を経過し、一定の安定をみるようになると、在宅生活をしながら施設サービスを受けたいというニーズが顕在化してきた」(小笠原 2002:186)。このことを背景に通所施設も広がりをみせる。そうした動きは以前よりあり、それらを受けて 1957 年に知的障害児通園施設が児童福祉法に規定された。学童保育に関しては、各地での自主的な運動を背景に 1966 年に文部省が「留守家庭児童会補助事業」を制度化するが、公的な制度化は 1997 年まで待たねばならなかった。また、在宅福祉サービスの主要形態の一つであるホームヘルプも、各地での先駆的な取り組みの結果、1963 年の老人福祉法で「老人家庭奉仕委員」が正式に法制化された。1965 年には老人家庭奉仕員事業の対象は要保護から低所得へと拡大し、1967 年には身体障害者家庭奉仕員制度等も成立する。

また、ボランティアが注目され始めるのも本期である。これについては、社会福祉協議会が大きな役割を果たした。全社協結成後の 1953 年に設けられた地域社会福祉研究会の中に、地域奉仕部会が設置された。これが 1959 年、社会福祉のボランティア育成と活動推進のための組織であるボランティア活動研究会の設置へとつながった(菊池ほか 2014:175－176)。

本期は、社会の変化が社会福祉の実践・政策や理論にも大きな影響を与えた時期であり、それらは学生セツルメントの動向にも影響を与えるものであった。

第２節　全国における学生セツルメントの展開―方針に着目して―

１.全セツ連の方針と議論[6)]

本期の全セツ連は、その方針のあり方に基づけば、1960 年前後で大きく 2 期に区分できる。簡潔にいえば、学生セツルメントの理論化を志向した運動論的方針が出される前半と、学生にとっての“学び”の場としての側面が強調されサークル論的方針が出される後半である。本項では、そうした方針の内容と議論、経緯について論じた上で、その背景や実際の活動との関係について検討したい。

（１）生産点論の完成

全セツ連は、1950 年代後半からの学生運動の盛り上がりに比例してより組織を拡大し活発化していく。一方で、1950 年代後半から 1960 年にかけて、学生セツルメントの理論化を求めていくつものテーゼ[7)]が全セツ連より提起される点にこの時期の大きな特徴がある。

理論化へ進む背景の１つには、1956年の全セツ連第2回大会[8]前日の連合委員会において、「セツル＝定着しているといえるか等　当面の問題と関連して、運動としての発展のための理論化の必要性が強調された」[9]ことが挙げられる。

また、第3回大会が開催された1957年5月には、1月のアイクドクトリン発表を受け、書記局が積極的に原水爆禁止運動に取り組む決定をした点も背景の１つに挙げられる。平和活動をセツルにおいてどのように取り上げるか、という点について、当時の全セツ連書記、藤岡貞彦は、「平和擁護はセツル活動の本質的な課題である」とし、平和を守る仕事は日々の各部活動と同様にセツルにいては抜くことが出来ない活動であり、平和の観点から各部活動をどのように展開していくかが問題であると主張した(不明:2-3)。

1958 年に全セツ連の委員長となった藤岡は、藤岡テーゼを提起し、セツル活動の中心的課題を「平和活動」として、平和活動が日常活動に先行すると主張した。続く浦田テーゼでは、「今までの日常活動を『完全に受身な地域追従主義』」(住吉セツルメント 1975b:6)と批判した。また、一般大衆には生産点で地域活動を通じて斗う力を支えていくことを提起し、生産点論と呼ばれた。生産点とは、「日常の生産現場」(住吉セツルメント 1976:5)であり、具体的には工場等の労働の現場を指し、労働運動で用いられる用語である。生産点論とは、そうした生産現場での実践こそがセツルメントの使命だとする主張である。そして1959年の「藤川テーゼ」では、学生セツルメントの基本任務を「学生として可能な限りのエネルギーを労働者階級の力の強化と結束にそそぐコト」(同上:3)とし、生産点論の完成とみなされた。

1960 年の園田テーゼでは、労働者及びセツラーの理論武装の強調に加え、一般市民、父母、病弱者に活動基盤をおくことはセツルの仕事をぼかし時代遅れの慈善事業とする、とこれまでの活動を全面的に批判的した。しかし、園田テーゼは全国のセツルメントに受け入れられず、60テーゼまで全セツ連書記局は無方針となる。

（２）60テーゼ―「生産点論の克服」―

1960年第7回全セツ連大会で提起された「生産点論の克服」と称される60テーゼ[10]は、実際に生産点論に則ってセツル活動を行ってきたセツルは行き詰まり地域活動を着実に行ってきたセツルが発展していることを明らかにした。 つまり、生産点論をめぐる議論は、労働運動や平和運動ではなく地域活動を土台として展開される運動にこそ学生セツルの意味があると実証されたことで、終結をみたのである。具体的には、生産点論の評価と教訓が以下の5点に整理されている。

①原水爆大会を始めとした平和運動、政治運動へのとりくみがセツルメントでは敬遠されていたことに対して全セツ連書記局から呼びかけを出したこと

②学生運動が安保闘争の高揚の中でトロツキズムの影響をうけたこと

③各セツルメントで地域活動が停滞し新しい運動論をさがし求めていたこと

<u>④全セツ連書記局へ各セツルメントの実践が集約されていなかったこと</u>(※筆者傍線)

⑤全セツ連書記局が「藤岡テーゼ」「浦田テーゼ」「藤川テーゼ」と委員長名でいわれるのでもわかるように個人指導であり集団指導体制が貫徹されていなかったこと

（住吉セツルメント 1976:4）

そして、「セツルメント運動は日常的な諸活動を通じて地域住民の立ち上がりを求め共に『地域社会の問題の解決＝生活文化の向上』を実現していこうとする運動（※筆者傍線）であり、このような位置づけがないと活動は自己満足に陥ってしまう危険がある」とした。また、「生産点論の克服から 60 テーゼが生まれるまで」との項では、「生産点論にのっとってセツル活動を行ってきたセツルは行きづまり地域活動を着実に行ってきたセツルが非常な勢いで発展してきていることが明らかにされた（※筆者傍線）」[11]（住吉セツルメント 1976:4）と記されている。その上で、生産論の欠陥として、①今までの学生セツルメント運動の歴史や日常活動を否定し頭の中であみだした理論であった点、②短期の学生生活における活動であり能力の面から定められた限界や責任の面から限界があることを忘れた点、③セツラーの自己変革と労働者又は労働運動に対する把握があまりにも幼稚であった点、④学生サークルの面を忘れた点、等が挙げられている（住吉セツルメント 1976:5）。

以上のような生産点論の評価をふまえた 60 テーゼのスローガンは、「平和、民主主義、生活ヨウ護のための国民的統一の一環として対称とする人々と共にねばり強い運動を進めよう」（住吉セツルメント 1975:9）であった。この生産点論の総括をふまえて 1960 年代以降の全セツ連はその方向性を転換することとなる。

（３）60 テーゼ以降の全セツ連の議論―方針転換と“学びの場”の明確化―

先述のとおり、1960 年の 60 テーゼを機に、全セツ連は方針を転換していく。本節では、1960 年代後半につながる 60 テーゼ以降の流れを概観する。

60 テーゼから 2 年後の 1962 年の第 12 回拡大連合委員会で確認された 62 テーゼにおいて、学生セツルメントは、セツラー自身の要求や主体的条件を大切にし、学生が学び自己変革をするところであるとの理念が確認される。翌年の 63 テーゼでは、学生セツルメントの 2 側面が確認された。第 1 は、セツルメント運動は具体的要求を出発点として独立、平和、民主主義、生活向上のための国民的統一の一翼を担う人民大衆の運動であり、地域運動の主体はあくまで地域の父母大衆青年であること、第 2 は、セツルの活動が学生の様々な要求を基盤としたサークル活動であり、学生セツラーはセツル活動を通して、民主主義的にも政治的にも覚醒され、教育されるべきであるという 2 点である（住吉セツルメント 1975:10）。

これらの議論を経て 1966 年に提起された 66 テーゼでは、学生セツルメント運動の基本的性格を以下のように位置付けている。

私たちのセツルメント活動の基本的な性格は、学生の、真の友情を得たい・子どもと遊

びたい・働く人々と話して何かを得たい・専門の勉強と結びついた活動がしたい・社会活動をしてみたい等の要求を具体的出発点にし、第二に、これらの活動を、仲間と共に実際に地域に働きかけるなかで実現する活動であり、第三に、そのことを通して社会の現実にふれ、働く人々の生き方から学び、私たちの生き方を追求する学生のサークル活動である、ということです。

（全国セツルメント連合書記局 1966a:5）

このように、1960 年代後半以降、学生セツルメントでは、学生自身が生き方を追求する学びの場として、またサークル活動としての位置づけが明確になされ、学生にとっての意味付けが強調される。関連して、全国学生セツルメント連合書記局（1967a:1）は、1960 年以降の「セツル活動の発展は何よりも、一貫して、主体である学生の変革の問題が重視されるようになってきた点に」あると評価する。1960 年以前の全セツ連には、学生セツルメントが主体となって地域組織化や住民の主体形成を図るという論調が強くみられた。しかし、63 テーゼによって「地域運動の主体はあくまで地域の父母大衆青年であること」が示されるなど、1960 年以降の方針転換には、大きな変化がみられる。つまり、学生セツラー自身も地域実践を通して学ぶ主体である、という主体認識を全セツ連が明文化した点に大きな変化が見出せる。

一方で、基本的性格の確認とともに注意すべき傾向として 2 点挙げられている。1 点目は、「地域の要求をどれだけとり上げ認識できたかという面のみを重視する傾向」（全国セツルメント連合書記局 1966a:5）である。「地域でぶつかる矛盾は実に複雑で時として深刻」であり、「私たちセツラーが『解決してあげる』には余りにもぼう大」（同上）だとした上で、何よりも、「地域の要求を実現してゆく主体はあくまでも現実に地域で生活している人々です」（同上）と述べる。

この原則を無視して、セツル活動を、地域の矛盾を解決するための活動と規定するならば、終局的には学生インテリ好みの「ザセツ」に行きつかざるを得ないし、一部の「意識の高い」学生の活動にセクト化してしまいます。あるいはまったく逆に、単なる地域奉仕の活動に矮小化する道を開きます（同上）。

2 点目は、「セツラーの自己変革を実践活動と切り離して重視する傾向」である。「地域の人びとの要求について真剣に考え、その実現のために一緒に活動する中で実践的に学ぶ」のだと述べる。

なお、1966 年の基本的性格への方向性は、当時の全セツ連大会に向けた委員会の討論資料からもみてとれる。全国セツルメント連合（1965）の「(3)学生運動の中でのセツルの果す役割」では、次のようにある。「昨年 12 月、全学連が再建されてから、きびしい情勢の中で、学生の生活と権利を守る斗い、ベトナム・日韓問題などの平和と独立の斗い、学生のあらゆる要求をとりあげた文化、スポーツ、サークル運動も全国的な規模で前進して、学

生運動も全民主勢力に信頼され新しい段階にはいりました。/こうした中で、私たちのセツルメント運動は、学生のいろいろな要求―子どもが好きだ、労働者の生活を直接みてみたい、友だちがほしい、―を出発点としたサークル活動であり、その中で、セツラーが地域活動を通して学び、自己変革して成長していく場として学生運動を支える重要な分野となっています」[12)]。この記述から、学生運動の 1 つとして学生セツルメントを捉えていることがわかる。これは、全セツ連大会の基調報告で「国民的闘いの一翼として」の章が設けられていること、これまでの OS への聞き取り内容とも一致している。つまり、地域実践にシフトし、運動性が消えるわけではなく、運動性を有しつつさまざまな学生の要求にこたえながら地域実践を行い、自己変革し成長していく場としての位置づけである。運動性を前面に出すのではなく、あらゆる学生が入りやすい方針に変化していることも見出せる。次項では、これらの方針が出される背景とその影響について論じたい。

２．方針の背景と影響

これまでみてきたとおり、本期は、1960 年前後を境に理論化を目指す方針提起と、その後、サークル活動として、学生にとっての意味付けを強調し学びの場として位置づける方針へと転換していく 2 つの特徴を含む。では、そうした方針が打ち出される背景は何だったのだろうか。また、地域実践に取り組むセツルメントやセツラーへの影響はどのようなものだったのだろうか。本項で、検討したい。なお、66 テーゼの基本的性格にみられた方針は、本期ののちにも継承され、より具体化していく。そのため、1960 年以降の方針の背景については、第 4 章でも検討することとし、本項では 1960 年前後の動向をめぐる背景および実際のセツルメントやセツラーへの影響を中心に検討する。その上で、1966 年の「基本的性格」が提起される背景とその影響について、言及したい。

（1）1960 年前後の動向をめぐる背景①―学生セツルメントの動向と社会背景から―

1950 年代後半から 1960 年にかけて、学生セツルメントの理論化が求められ学生運動・平和運動・労働運動との線引きが曖昧になるテーゼが 1950 年代後半に何度も提起された。こうした動きの背景は、大きく 4 点に整理できる。

1 点目は、定義の不明確さである。1949 年に再建された東大セツルメントにも、戦前の東京帝大セツルメントの 2 本柱である「社会調査」「成人教育」の影響がみられ、社会調査や社会状況に基づく活動展開と成人教育の理念からの労働者教育の精神は受け継がれていた。しかし、この定義はイギリスでのセツルメント発足当時からのものであり、時代や地域状況に合った定義がないままのスタートとなった。また、地域実践を多様に繰り広げながらも、一方で「セツルメントを単なる慈善活動に終わらせて良いのか」という問いがあった。これらがその後の運動性重視につながったといえる。

2 点目は、直前の戦争の影響である。日々の生活や日常が崩れ去る戦争体験は、戦後、民主主義・平和を強く求める思想や運動へとつながった。これは、東大セツルメントの 3 大スローガンの 1 つ、「平和こそ生活を守る」にも反映されている。しかし、この民主主義

や平和への希求ばかりがその後の議論の中で強調されたことで学生運動との違いが不透明になった側面も指摘できよう。

3 点目は、全セツ連の姿勢や組織体制である。1950 年代後半、全セツ連が平和運動・労働運動に偏った方針をとることで、初期の「大衆の生活を守ろう」というスローガンは薄れ、社会福祉の視点を見失った運動の追求へとつながった。ここには、全セツ連の執行部と地域実践に携わるセツラーが必ずしも一致していなかったこと、当時の執行部や事務局の中には地域実践に携わっていないセツラーもいた点が関係していると考える。

（2）1960 年前後の動向をめぐる背景②―テーゼと実際の活動との関係―

①北町セツルメントにおける地域転換論をめぐる議論と背景

なぜ、1950 年代後半に多くのテーゼが出されたのか、を検討する上では、学生セツルメントにおける社会認識の問題が論点となる。そのため、テーゼをふまえた活動の例から検討を試みる。

自身のセツルメント経験をもとにした自伝的小説である『酔十夢』を出版した手塚英男は、1957 年に東京大学に入学し、北町セツルメントで 3 年間活動したのち、川崎セツルメントへと移った OS である。東京大学では、最初の 2 年間は教養学部で駒場キャンパスとなるため、最初はキャンパスから近い北町セツルメントに入るセツラーが多かったという。藤岡テーゼがうまれる背景を手塚は次のように語る[13)]。（※以下、T は手塚、0 は筆者）

> T:ただ地元に通って子供会やってた、とかっていってね。地域活動に汗を流してって、それだけでいいのか、っていう議論があって。で、平和っていうテーマをセツルメントは、セツラーは、もっと大事にしないといけない。平和のために自分たちが、何ができるか、とか。それは一方では、学生運動に自ら積極的に参加してっていうことだけれどね。もう一つは平和の問題を地域からどういうふうに語りあったり実現していくかっていう、地域からの平和運動みたいなね。
>
> それで、北町はどうだったかっていうと、いつも全学連のデモ、駒場の先頭に立っているような、ね。またそういうことが期待されたんですよ。北町セツルの連中は。デモ行くぞって、北町セツルの旗もって飛び出していくっていう。

北町セツルメントの場合、学生運動の色彩が強く、「他の大学から来ている人も含めてで、ほぼ 100%、積極的に参加していた。学生運動なんて関係ない、私は地元へ通えばいいやっていう人は北町の場合はまずいなかった」という。なお、セツラーが全て何らかのセクトに属していたというわけではない。手塚によれば、「学生運動のあの潮流に入る、とかは（※なくて）。それがセツルのノンポリなんだ」という。他方で、デモへの参加や学生運動とセツルメントは、直接的にはあまり結びついていなかったかもしれない、とする。

> T:セツラーっていう、要するに、仲間意識で行っているんだけどね、セツルメントの活

動どうこうしようというんじゃなくてね、一人の学生としてね。うん。平和運動。あの頃でいう。私が入った年に、砂川基地闘争、砂川裁判になってね。砂川から始まって原水禁、勤評、飯島に基地を作るとかって、そして、60 年安保。そういうのを学生としてどういう風に対決していくかとかね、というようなことがあって。そこで、そういう中でデモに行くのは、セツルメントって仲間意識で、セツルメントにこういう課題があるからそれを解決するために平和運動、とかっていうのとはちょっと違ったと思うけどね(笑)。

ここから、本期のテーゼの大きな背景の 1 つに、当時の社会状況との密接な関係性、またそれに学生がどうかかわるか、が問われていたことが見出せる。さまざまな社会問題に対する学生運動が非常に活発であった本期、セツルメントに限らず、デモ参加自体は特別なことではなかった。ただ、北町セツルメントの場合、とくに学生運動の理論が強く、藤岡テーゼに対しては「まだ生ぬるい」という立場だったという。

T:藤岡さんたちは川崎セツルメントで、川崎セツルメントは、鉄鋼労働者の住宅街にあって、レジデントっていう(※人もいて)ハウスだったり診療所もあったりして、まさに労働者階級の町で活動していてね。労働者階級の町の真っただ中でそういう多面的な活動しているならば、こういう活動こそセツルメントだ、別の言葉で言えば、労学提携の活動だっていうことで、ちゃんと指し示せよっていうようなことを全セツ連大会で言ったことがある。

0:だれがですか?

T:藤岡理論なんかに対して、我々が。それは、川崎セツルのセツラーがね、あんまりデモには参加しないんだよね。学生運動のデモにはね。地元中心主義みたいなところがあって。労働学校やったりね。労働者の学習活動やったりもしていたんだけど。

ここから、藤岡テーゼが実践に基づきながら提起された理論であり、先鋭的なセツルからは批判があったことも垣間見られる。他方で、学生運動家からは、セツル批判もあった。

T:経験主義とかセンチメンタリズムとか、無料の家庭教師やって自己満足してるんじゃないか、とか、そういう批判がずっとあって。樺美智子とか、そういう立場の人はそういうこと言うわけだわ。セツラーは一生懸命熱心に地元に通っていることはわかるけど、そこでどういう子ども育てようっていう子ども観、教育観はどうなっているの、とかね。

0:あれ(※手塚(2009a)の記述)って、実際、先生が樺さんとお話されたこと?

T: そうそう。デモやっていて座り込んでいたら、たまたま一緒になったりするよね。そういうときに、セツル批判とか。北町セツルは、女子学生も何人かいたんだけどね、樺さんは活動の上ではセツルとは一線画していたから、そういう批判は樺さんからもあったし、のちにブンドっていうね、集団になる人たちからもあった。

北町セツルメントの場合、これらの事情や藤岡テーゼを微温的とする立場があったほか、歴史の浅い北町セツルメントの実践の中で、「何が変わったか」が不明確であることへの葛藤もあった。そうした中、全セツ連の生産点論が出され、北町セツルメントにおいても労働者の町に行こうという地域転換論が浮上する。これは、労学提携を目指すもので、労働組合が熱心で後ろ盾になってくれた労働者の住宅街への地域転換を図った。

T: 子ども会なんかやればうんと人気なもんで、子ども集まってくるし。でも、いきなりどっかからやってきた学生が、ここでセツル活動やらしてくださいって言ってもね、うさんくさくみられたのかな。全学連のアカい学生が来たってそういう風評が立ってね。4つか5つ、候補を決めていったけど、労働者の壁みたいなのにはねかえされて、結局、品川の労働者の中にそういう拠点をつくることは失敗したんだよね。

T:学生運動の先端部はね、今の労働組合の幹部は生ぬるいっていうかね、正しい闘争方針持ってない、経済闘争中心で。だから、学生運動の理論で、労働者を変えていかなきゃいけない、みたいなね。勤評闘争も、日教組の労働者の課題であるとともに地域の教育運動の課題でもあるからそういう理論を地域に持ちこんで、とかね。それが実に、その社宅に住んでる人から見れば大それた、学生が住民を指導するみたいな、たぶん、受け取られた…。そんなに労働者の町でやりたいなら、お前がここの労働者になって、この社宅に住みこんで、それでやれ、とかね(※言われた)。

上記引用から、当時の労働運動の衰退との関連が見出せるほか、一連の経緯は、先に引用した60テーゼの「生産点論にのっとってセツル活動を行ってきたセツルは行きづまり地域活動を着実に行ってきたセツルが非常な勢いで発展してきていることが明らかにされた」との総括とも一致する。ただ地域に通い、子供会をするだけでいいのだろうかという問いかけの中で、さまざまな政治的課題や社会問題に取り組まなければならないという認識と、地域実践とを融合させるかたちで、「労働者の町」での実践につながった。一方で、地域住民からは、「学生が住民を指導する」と受け取られた側面も否めず、地域転換論は挫折をし、北町セツルメントは地域を1つ残して川崎セツルメントへと合流することとなる。

なお、ほぼ100%のセツラーがデモに参加していたという北町セツルメント内部も、決して一枚岩ではなく、学生運動の大切さは認めつつも地域実践を通して自身も成長したのであり地域実践は大切だとして「地域に通い詰める」「実践派」と地域実践にはまず行かず、「部室で議論を吹っ掛ける」ような「理論派」といわれる立場に分かれたという。関連して、山田(2010:35)は、セツルメント診療所(医療法人ひこばえ会)の永山素男理事長の「過激な学生はセツルメントに入らない。入っても出ていく」との言葉を引用しながら、自身のセツラー経験を振り返り、「セツルは社会を変えるには不十分である」(同上:34)としてセツルを去り学生運動に身を投じていったドブチューについて述懐している。全国セツルメント連合(1965)における、「セツルの中心メンバーが学内の活動家になってしまって困ったという声もよく聞きます」との記述からも、社会変革への志向が強く実践に意義を見

出せないセツラーはセツルメントを去っていったことが理解できる。

上記の傾向は、本期においてもいえることであるとともに、セツルメント内部での立場の違いと、学生運動が分派する本期の流れは関連しているといえるだろう。

②亀有セツルメントと生産点論

上記では、語りを中心に実際の活動について論じた。次に、生産点論に基づき会社の社員寮を拠点とする案が出された際の資料を手がかりに、検討を試みる。

亀有セツルメント書記局(1959a)[14]では、昭和34年(1954年)の後期書記局総括の中で、1月合宿での個人提案の内容とその評価が記されている。積極的側面として、「セツル運動を反体制運動の一翼として捉えながら」それまでの方針や実践の批判の上に今後の方向を出した点について「大きく評価した」。その上で以下のように述べる。

> 具体的には、現実の社会で、社会を変革する原動力は労働者階級であり、これを少しでも支援する方向を確立する必要。セツルのいわゆる組織づくりということも、労働者階級をバックアップしうるものであってはじめて意味をもつことを明らかにしたこと。
>
> (同上)

一方で、この提案は「重要なあいまいさを残していた」と指摘する。1月合宿での個人提案の詳細は不明だが、当時、社員寮であるH寮[15]に全パートが移ることを含む提案であったことが以下からわかる。

> セツルの現実的な変革運動における役割―実際の効果を強く問題としながら、全パートがH寮に移るということによってその様な実際の力―効果があがるのか、ということを厳密に考えなかったことである。
>
> 変革の力としての労働者階級という時、その労働者は生産活動に於て、日々、人間性を奪われながら、自己の敵対者たる資本家の力を増大させるために(自分の首をますますしめるために)資本を再生産し、その二重の疎外による非人間的状況の故に社会変革の力たりうる労働者なのであり、いったん家庭に入った消ヒ面での労働者は、あたりまえのバラバラの大衆の一人にすぎないのであって、その労働者と更にセツルの日常活動＝あるいは法律問題、あるいは教育問題を通じてのつながりをもち、そのコネクションを生かして…ということは不可能である。
>
> …略…
>
> このようにある意味では妥協の上に成っていた1月方針は「労働者と結びつく」「日常活動」の二つ共、駄目にしてしまう可能性があった。
>
> (同上)

上記引用から、生産点論の基盤には、労働者が二重の疎外状況にあり、社会の矛盾の集

積した存在として、変革主体になりうる可能性を有しているというマルクス主義的社会観が垣間見られる。同時に、「労働者と結びつく」こと、言い換えれば、「社会変革」と「日常活動」を両立させようとしたところに生産点論の本質があるといえる。しかしながら、その論理は矛盾を含むもので現実的には実現困難であることも 60 テーゼ以前の 1959 年時点で理解されていた点も注目に値する。一方で、すでに H 寮に入っていた文化部[16)]からの批判もあり、6 月方針の修正案では、「H 寮に全パートが原則として移る」と提起される。しかし、「現実には各パートは寮に移る意志はあまりなかった」。そして、結果的には、「全セツルの先駆として H 寮に入った文化部の場合、致命的」で、「沈滞」を招いた。また、1954 年度は活動全体が非常に「低調」であったことも総括されている。補足になるが、文化部の「沈滞」について、書記局は全パートが寮に移っていたら「沈滞」は拡大生産していたこと、文化部セツラーが強い意志の一致なく寮に入ったことを批判的に述べた上で、最終的な責任は書記局にあるとする。ここから、パート間の不一致、組織としての未熟さが見出される一方で、単一のセツル内でもトップダウンではなくある程度自由な判断が可能であった側面も見出せる。ただし、単一セツルにおいて、その方針の矛盾に気付きつつも実行に移し、結果的に沈滞を招いたことをふまえれば、全セツ連との関係性を慎重に検討する必要があるだろう。他方で、「セツルが革命思想の拠点で、労働者と結びつくという考え方には批判的だった」と語る OS もおり、「ごく少数の人間が言っていることであり、全セツ連も少数の代表者が行っているものだった」との証言もある。その意味では、全セツ連の方針は、各セツルメントやセツラーの“総意”の上に成立したものであるかについては検討を要するといえる。

また、時期ごとの特徴を捉える上では、先に挙げた社会変革もしくは社会運動への志向性と、日常活動・地域実践という 2 つの軸を用いることができると考える。そのため本章以降も含め学生セツルメント史を 2 軸にも着目しながら概観したい。

③2 つの事例を通して―本期の学生セツルメントと社会運動・学生運動―

以上、2 つの例を取り上げて論じた。これらから、本期の学生セツルメントは、1954－55 年の再興期同様、平和運動をどのように位置づけるか、という点に理論化の焦点があり、それが再興期よりも強まるかたちで運動論に近い方針につながったといえる。他方で、全セツ連の方針に従った実践は、学生が上から労働者を指導するという色彩をもつもので地域から受け入れられず、60 テーゼ以降の流れにつながることも実際の例を通して明らかになった。以上から、①で挙げた 3 点に加え、当時の社会状況や学生運動の動向も本期の方針の背景に大きくあることが見出された。そのため、本期の学生セツルメントにおける運動性は、社会運動との関係から分析する必要がある。

真田は、1945-60 年前後を戦後社会福祉運動の第 1 期と位置付けた上で、本期は「今日からみれば、運動が未分化なところがあり、社会福祉運動も特化されずかえって広範な運動になった」「生活問題に対応し反映する運動は社会福祉領域に限らないさまざまな領域の運動となって現れたのであって、生活問題が運動を規定する関係は、社会福祉以外の領域

の運動の総体との関連でみなくてはならない」(真田 2003:65)と指摘した。高島も、「学生セツルメントは常に社会福祉という枠組みで活動しているのではなく、またそれに限られるものでもないが、社会福祉がとりくんでいると同じ問題にとりくみ発展しているのである」(1968:33)と述べている。学生セツルメントでは、再建時の、生活や暮らしを守る運動という位置づけや民主主義および平和への志向が混在し、後者が強まった結果、多くのテーゼが出され、セツルメントと学生運動の違いが不明瞭になった側面が示された。また、社会変革の志向が強いセツラーからは、地域実践で社会を変えることが出来るのか、という点が鋭く問われ、セツルメントに意義を見出せないセツラーは離れていくという結果もうまれた。さらに、地域実践を大切に思いながらも一方で、社会への働きかけの大切さも感じるセツラーは、相当な葛藤を抱えることになった。手塚の場合も、「地域に通って通って通い詰める」セツラーだったため、地域転換論の折には「自己矛盾」を抱えたという。

> T:北町の人に申し訳ないとかね。一緒に遊んだ子どもがいるわけだから。一緒に風呂入ったりとかね、そういう子どもがいるわけだから。そういう子どもと地域の人達に申し訳ないという気持ちと、発足以来 6 年だか 7 年やってきて、それで何が変わったのか、とかね。勤評闘争っていうのはアカい学生だろうとかって言われて、子ども会にはうちの子は出しませんとかっていうこともあったりして。やっぱり、組織労働者の住んでいる町、そういう生活点でセツル活動をやると、地域っていうものが変わるとか、うん。地域の石が転がり落ちていくとか。そういう、やっぱり、両方の気持ちは最後までつきまとったね。

なお、無論、学生運動への参加とセツルメントとの結びつきや受け止めは個人差がある。手塚の 2 年先輩で、1955 年に東大に入学した島田修一は、当時、地域と結びつく活動ではなかったこともあり、セツルに対してこども文化活動をする地域活動という認識しかなかったという。だが、「川崎（セツル）は、ちょっと違うな」と思ったという[17)]。「色んな大学が入っていたが、和やかにやっていた」。そうした川崎セツルの中の“政治的意識の強い”セツラーとともに、「砂川基地反対運動に、まずは見に行こう」ということで、本格的に取り組むことなどは考えず、見学に行った。そのとき、ただ見に来ただけの自分たちに対して、おばあさんから手を合わせて「ありがとう」と言われた。日の暮れるころ、赤とんぼの歌が自然と歌われて、みんなでスクラムを組んだ。これが強烈な印象となり、支援することを決めたという[18)]。

こうした砂川闘争の経験から、セツルに対する考えも少し変化する。

> 地域の農村のおっちゃんおばちゃんの参加を見た。土地に杭は打たれても心に杭は打たれない、って。(※その姿を見て）セツルに意味があると改めて思ったね。
>
> 亀有セツルでは、保健部活動、診療所活動を医学部の学生が、文化部活動を保育専門学校などの学生がしていたのだけど、当時は「地域に奉仕する」（※の意味）だった。
>
> で、健康を守る活動は地域住民と共に行われていたの。(※そういうのを見て)地域に結びつかないといけないと考えるようになったね。

文化部活動は、親との語りあいや結びつきがなく、地域ともつながらない。(※一方で、)地域や地域の人と地域のこと考えるっていいことなんだなあと思うようになった。(※当時のセツルは) サービスになっていたから。地域の人達とつくっていくものでないといけない、と思ったの。

島田の場合、砂川基地反対闘争を地域住民の参加による運動の面に重きを置いて捉え、自身のセツルでの活動を振り返る契機としている。そしてそれは、「セツルに意味がある」との考えにもつながった一方で、上記に挙げた学生とは別の意味での「セツルで何ができるのか」という問いを生み、その答えとして、社会教育学への道を歩むことになる。この点については後述したい。

本期の動向は、テーゼを中心として理論的・観念的な面に注目されがちだが、それらは地域実践との結びつきの中で生まれ、各セツルメントやセツラーの中で、具体的・現実的に受け止められながら、どのように生かしていくか、が絶えず意識されていた点が重要であろう。

（3）66 テーゼ「セツルメント活動の基本的性格」の背景と影響

上述のとおり、1950 年代後半は運動論的な方針が多く出され、理論化への志向が高まった。60 テーゼ以降、その方針は転換し、学びの場、学生のサークル活動としての位置づけが強調され、1966 年の 66 テーゼでセツルメントの基本的性格が出される。

これについて、のちのセツルメント関連の資料などでは肯定的評価が多いが、その背景について述べられているものは少ない。たしかに、学生の要求を出発点として実践の中から学んでいくことを強調し、サークルとして位置づけた点には現実に即した方針転換として意義があるといえる。また、「地域の要求を実現してゆく主体はあくまでも現実に地域で生活している人々」だとした点からは、それまでのセツルメントが「援助」して地域組織化を進めるという方向は間違っているということを示しているとも受け取れる。だが、なぜこのような方針の転換へと至ったのだろうか。ここでは、学生運動の面から 66 テーゼの背景について触れ、第 4 章で 60 テーゼ以降の方針について人間形成の視点から考察することとする。

本期の全セツ連では、大会やその方針において紆余曲折があったが、その一方で、全セツ連大会は年に 1 回、定期的に開催されていた。1963 年の第 10 回全セツ連大会は 600 名のセツラーが参加したほか、1966 年に全セツ連が発行した機関紙(全国学生セツルメント連合 1966)では、セツラーが 1 万人を超えたことが記載されており、本期において全国的に学生セツルメントが活発な活動を展開していたことを示している。

この時期の全セツ連大会について、「大会に出席して目立ったことは、日本民主青年同盟が中心となっている全セツ連に、その民青の根本思想（方法論）が誤りであるという新左翼（原則論）とが感情的にぶつかり、最後まで議論が平行した点です」（関セツ連書記局 1963:7)との意見もある。ここから、当時の学生運動および民青の運動方針が深く関わっている全セツ連の状況を学生セツラーの立場から垣間みることができる。

66テーゼの基本的性格が出される前に開かれた1966年の全セツ連拡大書記局会議に出席したOSへの聞き取りによれば、当時、「氷川下の分裂問題」が焦点だったという。語りに基づくと、氷川下の分裂問題とは、新たに別の氷川下セツルをつくるというものであり、学生運動の分裂問題がセツルに波及し、路線のちがいとしてあらわれたものだという。当時、全学連の主流派・反主流派の影響が全セツ連にも反映されており、セツル活動は地域から学ぶ活動だという主張と、セツル活動では安保は破れないとする分裂派で、全セツ連はどちらを認めるかという議論があった。当時は、全学連の民主化の動きもあり、分裂派の氷川下のメンバーは少数で、民主的に議論しようといいつつ、「袋叩き」のような状況があったという。

上記は、語りに基づくものであるが、学生運動が分化していく流れとセツルメントの流れの関係性は、先述の手塚の語りとも一致するといえるだろう。

関連して、氷川下セツルメント史編纂委員会編(2014:331)では、「基本的性格」が、学ぶ場であることを強調したものである一方、「学生セツラーの果す役割と負うべき一定の責任については触れていない」とする。そして、「児童部では、当初、『基本的性格』に対して賛否両論がおこり、一部に戸惑いが生じた」(同上)という。この戸惑いについては、注釈で、感想に特徴的にみられる2つの傾向に言及し、1つは「『基調報告が自分のやって来たことが整理されるようでピッタリした…略…全体的に良かった。元気が出た。』という傾向」(同上:335-336)で、もう1つは「『基調報告の述べていることが物足りない、分科会が物足りない』という傾向」(同上336)を挙げる。前者には1年生が多く、後者には古いセツラーが多かったという(同上:336)。

氷川下セツルメント史編纂委員会(2014)では、具体的な論及は見出し難いが、上記引用部分において、語りとの重なりが見出せる。

以上から、1950年代後半にみられる学生運動の活発化およびさまざまな運動の展開、そして、1960年代、「『新左翼諸党派』が続々と誕生した」(星野2004:181)学生運動の分派の流れの影響が本期のテーゼの背景の1つにあることが示された。なお、60テーゼ以降の方針の背景については、他の側面からも次章で検討する。

第3節　各地域における学生セツルメントの組織化と展開

全国的にセツルメントが広がる本期は、関西でも連合が結成される。本節では、関東セツルメント連合の動向および実際と関西セツルメント連合の結成について述べる。

1．関東セツルメント連合の動向と組織の実際

本項では、本期における関東セツルメント連合および全セツ連の動向との関係から、1955年の第2回大会を含めて論じる。関東では、4回におよぶ連合委員会を経て、1955年6月19日、東京教育大学で関東セツルメント連合第2回大会が開催される。大会では、「九大セツル、東大医、関東大学演劇連盟、静岡生協勉強会、仙台綜合セツル、名古屋セツル、医学連、大阪愛染園セツルからそれぞれメッセージが、日本子供を守る会及び、原水爆禁

止世界大会日本準備会からそれぞれ祝電が寄せられ、札幌医大セツルから挨拶があった」(全国セツルメント連合歴史小委員会 1957:Ⅱ12)。なお、メッセージが寄せられているセツルは、分科会への参加が資料から確認でき、全国各地から集まっていたことがわかる。関東セツルメント連合の位置づけは、前章でも確認したとおり、全セツ連を目指すという色彩が強く、本大会でも全国連合の結成については満場の拍手をもって確認されたと記されている(同上:13)。

このほか、「学内との結びつき、国民に奉仕する立場を貫こう」「生活と平和を守るすべての活動と協力していこう」のほか、委員会の隔月開催、資料交換と財政活動を深める、「連絡のため準加盟制度をおく」といった項目が満場の拍手で確認されたとのことである(同上:13)。分科会では、学内での結びつきをいかに強めるかについての討論で、「愛宕、仙台、日医大では学内でアカいと見られたり圧迫が加えられたりしている。しかし九大では民主勢力が強くそういう問題は起らぬ」(同上:14)と、大学による温度差が垣間見られる。また、セツルメントにおける平和運動について、「仙台では平和運動をやりたいけれども色々の点で圧力が強い。学内の圧迫、川崎や菊坂では警察の圧力がある。…略…セツル活動の中で平和の問題がうまくとり上げられないということは、本当に平和に対する要求が人々の中にあるのかということを考えて行きたい。平和がセツラーの間に問題にならない場合、その条件をなくす様に努力したいし、又そういう中で外へも出ていきたい。セツラーの中で平和の話し合いを強めようと話し合われた」(同上:14-15)とある。ここから、大会に参加するような一部のセツラーや中心となるセツラーの中で、平和運動への希求が高いこと、一方で、単一セツル内でも平和運動に取り組むことへの意識は差があることが理解される。また、これは、第 2 節で述べた平和運動への志向性が高まるテーゼの背景として捉えられるとともに、戦後再建期からの民主主義、平和を求める運動としてのセツルメントの姿勢が継承されているともいえる。

論を戻すと、関東セツルメント連合の結成が全国連合を企図したものであり、それは全セツ連結成大会の際、関東セツルメント連合の「書記局は当面全セツ連書記局をかねる」(同上:21)と決定されたことからもいえる。関東セツルメント連合における全国連合を見据えた動向は、討論内容のみでなく、関セツ連大会の翌日(6 月 20 日)に全セツ連代表者会議が開かれていることからもわかる(同上:15)。また、1956 年 4 月 14 日の関東ブロック連合委員会では、全セツ連第 2 回大会の開催が 5 月 27 日に決定する。そして、5 月 6 日の関東ブロック連合委員会では、全セツ連大会準備会の設置も決定されている(同上:21)。他方、同年 10 月の関東ブロック連合委員会には菊坂、北町、新宿、若葉町、氷川下、寒川が出席し、砂川問題にも積極的に参加すべきであるとされ(同上:26)関東の所属セツル間の経験交流のみならず、全国的な運動への参加についても全セツ連の方針と一致するかたちでその方針が出されていたことが垣間見られる。このように、1950 年代後半における関東セツルメント連合は、運動への志向性を強く有していた。

前章で述べたとおり、最初の全セツ連書記局は関東ブロックで構成されることとなっており、それは 1956 年の第 2 回全セツ連大会でも同様であった。

その後の展開としては、本期の後の展開になるが、1971 年に関東セツルメント連絡会議が結成されたことが資料から確認できる(全国セツルメント連合書記局 1971:94)。これに関して、1971 年に入学し大阪府学生セツルメント連合の委員長を務めたまろ氏によると、連合体にしてもっと先進的な運動をしていこう、という動きがあったが、社会を変えていく流れにシフトしてしまうもので間違いだったという声があり、ゆるやかな組織でよいとの考えからその名称を用いていたという[19)]。また、同じく 1971 年入学で全セツ連書記局および副委員長を務めたガン太氏によれば、関セツ連は連合ではないかたちで存在はしていたが、大会はなく、会議のみだったという。全セツ連の執行部や歴代の委員長が関東から選出されており全セツ連と重なり合うこと、セツル数が多く収拾がつかなくなることもあって地域組織としてのまとまりではなかったのだと思う、との旨が聞かれた[20)]。関連して、1973 年に関東学生セツルメント連絡会議が「関東学生セツルメント連合結成連合委員会招請状」を発行しており、まろ氏の語りとも一致する。また、1960 年代の関東セツルメント連合については、「『東京は東京としての団結がうすい』といわれてきた」(全国セツルメント連合 1969:99)との記述がある。大会や交流会の開催に関しても、資料からは断片的にしか捉えられず、聞き取りからも具体的な実態の把握ができなかった。

以上から、関東セツルメント連合はもともと全セツ連結成を企図して結成された組織であり、全セツ連と重なり合う性質を有していたといえる。また、結成時期のような大会の推移もその後は明確にはわからず、資料も非常に限られていること、関東のセツラーが代々全セツ連委員長であったことなどをふまえれば、関セツ連はゆるやかな組織であったと推察される。そのため、本期以降の関セツ連の動向ついては資料収集を含め今後の課題としたい。次に、本期における関西での連合結成の動向について述べ、関東の連合と比較する。

２．関西におけるセツルメントの組織化―関西セツルメント連合の結成―

（１）社医研セツル懇話会

第 2 章でも述べたとおり、学生セツルメントにおいて医療部の活動は重要かつ大きな役割を果たしていた。その中では、民医連との関係があるセツルもみられたほか、社医研との関わりも強く見られた。本項では関西セツルメント連合につながる動きとして、関西社医研連合との関係から検討を試みる。

全国セツルメント連合歴史小委員会(1957:Ⅱ25)より、以下に引用する。

〇関西社医研セツル懇話会

昭和三十年春ごろまで関西社医研連合が健在し、社医研白書の出版や懇談会の開催をしていたが、仕事の困難さのため、また国内ゼミ、関西ゼミ、全セツ連大会などそれに代わるものが相ついで行われたため、立ち消えの形になっていた。

しかし、近隣のサークルが再び手をとり合い、高め合うための集会の必要性が再び叫ばれるようになり、昭和三十一年七月一日、京都府立医大社医研、京大セツル、京大予医研、

三重医大自治会、関西医大、大阪市立大学社医研、大阪女子大セツル、岡山大社医研、阪大α会から三十二名が出席して、関西社医研セツル懇話会が大阪大学で開かれた。

1956 年開催の関西社医研セツル懇話会では、各セツルの活動報告ののち、討議が行われた。そこでは、学生生活と活動の両立、諸団体との連携などが討議された。討議内容のうち、「学内に対する働きかけ」の中で、「一般学生からの浮き上り、セクト主義、教授による改名問題などが出され、対策を論議した」という。また、「セツルと社医研の関係」の中では、「調査活動中心の社医研が、地区の健康を守るセツル活動に移行するのは、発展的解消である。しかし、普遍的なものをつかもうとする社医研的性格はあくまでも必要である」とされている。そして、「地区の人達が自分たちの力で健康な文化生活を建設する自主的な組織を育てると共に、理論も一歩ずつ高めていこう」という方向が確認された。加えて、連合組織についても話し合われたほか、資料交換や懇話会を通じた経験交流を行っていくことも確認された。ここには、地域組織化をセツルが主導するのではなく、あくまでも地区の人達による自主的な組織づくりが意図されていることとともに、理論化を目指す志向性において全セツ連の 1950 年代後半の動きとの一致が見られる。

同年 11 月 25 日にも関西社医研セツル懇話会が開かれ、図 3－1 に示す団体、45 名が出席し、①財政について、②サークル内の問題、③外部団体との連携、④将来進むべき方向、の 4 つの問題が出された(同上:27)。そして、これらの問題について「保健部会と法相・児童部会を開いて討論を深めた」という。11 月の社医研セツル懇話会は、図 3－1 に示す通り、社医研に限らない幅広いセツルや団体、大学が参加しており、議論も幅広かったことをふまえれば、この関西社医研セツル懇話会が、関西セツルメント連合の萌芽とみることもできる。

関西の参加セツルおよび団体	関西医大	京大セツル	京都府立医大社医研
	阪大α会	大阪女子大	立命館大学・法相
その他の参加セツルおよび団体	金澤大社医研	岡山大予医研	青山セツル
	氷川下セツル	亀有セツル	菊坂セツル
	北町セツル	久我山セツル	寒川セツル
	若葉町セツル	九大セツル	関東ブロック栄養部会

図 3－1 関西社医研セツル懇話会出席団体(全国セツルメント連合歴史小委員会(1957:Ⅱ27)をもとに筆者作成)

（2）大阪における学生セツルメントの動向―全セツ連加盟問題とセツル間の相違―

本期は、関西セツルメント連合が結成される時期であるが、構成セツルのほとんどが大阪の学生セツルメントであり、のちの連合結成時にも関係することから、本期の大阪における動向について岡本(2014:33-34)に基づき論じる。なお、用いた資料は、住吉セツルメント(1975a) (1975b)および大阪女子大学セツルメント(1964)である。

第 2 章で述べたとおり、愛染園学生セツルメントは大阪女子大学、社会事業短期大学、阪大α会から組織され愛染園を拠点としていた関西初の学生セツルメントである。この愛染園学生セツルメントにおいて 1956 年､全セツ連加盟問題が浮上する｡この点については、「思想的面を恐れて加盟を拒む国と、加盟を望む学生との間でも意思統一は必ずしも行われていなかった様である。特に女子大に関しては国から岡村・大和両教授を通じて加盟しない様に、との声」(大阪女子大学セツルメント 1964:6)があり、愛染園学生セツルメントは準加盟となる。また、女子大が愛染園でセツル活動を始めた動機は国の手伝いであったという前提の上で、「しかし国の仕事は学生のセツル活動より慈善的色彩の強いものであると思う。目的は地区の生活向上と福祉増進にあり、私達もそれを願うものであるが、地区の内部からの組織化という点に関しては、園と私達の目指す方向、方法が少しちがうのではないかしらと当時のセツラーが書き残しているとおり、この問題は国と学生とのセツル観のくいちがいの一つの現われであり、その底には案外大きな意味がひそんでいるのではないかと思われる」(同上:5)としている。当時のセツラーは「園と私達の目指す方向」のちがいと書いているのに対し、1964 年発行の本資料では、「国と学生とのセツル観のくいちがい」と書かれている。これは、国の手伝いとしてセツル活動が始まったことが背景にある。そして、この記述から、国はセツルメントに福祉増進の協力者としての位置を期待していたものの、セツルメントが組織化することで反体制的な側面をもちうるという危機感を抱かせたのではないかと推察される。ここに、戦前のセツルメントとの連続性との問題が指摘できる。その意味では、学生セツルメントとして、戦前のセツルメントとの違いやその思想について明確に打ち出すことができなかった点に問題があったといえる。また、他方では、国と大学と学生セツルメント 3 者の関係性の問題も内含されている。

「国と学生とのセツル観のくいちがい」について、3 者の関係性から指摘したが、愛染園と愛染園学生セツルを構成する 3 大学の考え方のちがいも 1960 年に明確化する。具体的には、「愛染園は社会事業施設としての機能を果しつつ社会改良の理念の下で地域住民の要求を受け入れその解決を通じて地域社会の向上発展をはかってゆくものであると考えておりこの方向がみとめられないなら学生セツラーは他へ移って新しく活動してもらいたいとの要請」に端を発し、各大学はその方向性の違いを明確にする。「まず、大阪女子大学は、『セツル活動』の本質を社会の全体的な発展との関連においてとらえるべき」と考え、愛染園を離れて東住吉セツルメントとして活動を始める。次に、社会事業短大は、社会事業的なものから始まり漸次社会改良への道をとっていく方針を打ち出し、愛染園と同じような立場で今までの活動を日東地区に留まって続けていくことになる。そして、大阪大学α会は、社医研が強く、セツルから分離する方向となる。

このように、愛染園学生セツルメント内部でも大学間で考え方・方針の違いがみられた。同時に、それは国や大学の考え方とも関係していることが推察される。

（3）関西セツルメント連合の結成

上述した流れの上に、1962 年、関西セツルメント連合が結成される。このとき、社会事

業短期大学セツルと東住吉セツルのみが加盟する。準加盟として、セツルメント兄弟会[21]、市大ＳＶＣ、あゆみが承認される。

1963 年の関セツ連第 1 回大会は、社会事業短期大学、東住吉セツルメント、あゆみ、兄弟会、未知の会が出席した。「①大きな視野に立って地域活動をおしすすめよう。②地域の人々を主体とする地域活動をしてゆこう。③この運動をおしすすめるために関セツ連を強化してゆこう」(住吉セツルメント 1975b:23)の 3 点が大会において確認された。地域活動の強調がみられるが、これは関セツ連の特徴と一言で言えるものではなく、全セツ連において生産点論が見直され、60 テーゼ以降その方針転換が大きく変わったこととも少なからず関係があるといえるだろう。全セツ連の影響は、各セツルメントの報告や冊子からも垣間見ることができる。例えば、東住吉セツルメントの資料では、全セツ連の各分科会報告が記述されている(東住吉セツルメント 1963:37-41)ほか、セツルメントのスローガンが日常活動の中でどのように具体化されていったかについて総括されている(同上:8-11)。このように、本期における全セツ連と関セツ連及び阪セツ連や単一のセツルメントは、その方針を受けて活動を振り返るという点において関連があったといえる。

また、別の視点から関西セツルメント連合の意義に言及しているものを、以下で引用する。

> セツルは地域の人達の生活の向上をめざし活動するものであるが、我々がそれを与えるのではなく、地域の人達の主体的な運動であらねばならない。すなわち地域の人が自分達の手で現実の諸々の問題にぶつかり解決していくのである。それ故に我々は地域に深く入り、セツル活動を理解し、協力してもらい、次第に具体的な生活面での問題をとりあげ、地域の組織化を推進しなければならない。
>
> 更に現在の地域を東住吉セツルという一つのわくの中にとどまらず、他の地域に、社会体に目を向け、現在の生活をよりよくしようと斗っている人の団体と提携する事が必要である。一方、セツル相互の連携をなさねばならない。ここに関セツ連結成が大きく評価され、今後の活動が重要な意義をもつのである。
>
> (東住吉セツルメント 1963a:45)

地域の人が主体的な地域変革の担い手となる組織化を推進するという論調は、先に述べた関西社医研セツル懇話会での内容と一致する。また同時にこれは、1956 年の全セツ連第 2 回大会での議論とも一致する。全セツ連第 2 回大会では、「地区との結びつきについては地区の人びとが自主的に動くことが肝要であり、我々はその方向を援助する様に活動すべきだという意見が出された」(全国セツルメント連合歴史小委員会 1957:Ⅱ22)。この地域組織化の点については、2 つの見方があると考える。1 つは、住民による自主的な地域の組織化、というものの、関西セツルメント連合においては「セツル活動を理解し、協力してもらい」、「推進」するとされ、全セツ連においては「援助する」という表現が用いられていることから、対等な関係とはみておらず全セツ連の認識や考え方と一致しているという

見方である。そしてもう 1 つは、関西セツルメント連合においては地域の人びとの理解や協力があってこそ、自主的な地域組織化が進むという認識であり、それは全セツ連の「援助」を前提とした地域組織化とは質を異にするという見方である。連合の執行部は、全セツ連のイデオロギーと近いセツラーが多く集まっていたことをふまえれば、個人によっても多様な考え方があり、資料を書いた人物によるところも大きいため、どちらの側面も有するといえる。ただ、筆者としては、その後の阪セツ連の議論やこれまでの聞き取りをふまえ、後者の特徴のほうが強かったと考える。

この、“ともに地域の自主的な組織化を進める”という点、また、第 2 節で取り上げた「生産点論に則ってセツル活動を行ってきたセツルは行き詰まり地域活動を着実に行ってきたセツルが発展している」点について考察する上でも、関西セツルメント連合を構成していた東住吉セツルメントの実践について次節で論じる。

第４節　単一のセツルメントにおける実践―地域活動を着実に行ってきたセツルとは―

本章第 2 節では、1950 年代半ばから後半にかけて全セツ連で理論化を志向したテーゼが何度も出され、60 テーゼを機に人間形成の場としての位置づけへと変化していくこと、「地域活動を着実に行ってきたセツルが発展している」との評価に言及した。では、「地域活動を着実に行ってきたセツル」とはどのようなものだろうか。本期の実践例を通して検討したい。なお、取り上げる年代の関係から、関西における実践について先に論じる。

１．関西における地域実践―東住吉セツルメントの勉強会―

第 1 節で述べたとおり、本期は、高度経済成長の一方で、「貧困の二重構造化」（岩田 2017:135）がみられる時期である。先にも述べたとおり、東住吉セツルメントは、愛染園学生セツルメントから独立して 1960 年に大阪女子大学生を中心として活動を始めた。大阪女子大学は、社会事業短期大学とともに愛染園学生セツルメント時代から児童部活動に取り組み、東住吉地域に移ってからも子供会活動、勉強会活動を行っていた。しかし、2 年後の 1962 年 3－5 月に子供会は一時中止に追い込まれる。背景には、次のような事情がある。

1962 年 2 月の合宿の総括にて、子供会のマンネリ化や参加数の減少、セツラーの計画不足や不熱心さが指摘され、目標を立て計画的にやる方針が話し合われた。だが、同月末に「中学生のけんか、お金を紛失した事件をきっかけに、これ以上子供会をつづけていく事が出来なくなり、子供会を一時中止して問題点をもっと深く考えようということになった」（東住吉セツルメント 1963a:5）。時期を同じくして、中学校では「不良化問題」も起っていた。「不良化問題」とは、「三月頃中学校で一部中学生が授業中、授業にも出ないでたばこを吸ったり、廊下をぶらついて他の教室に踏み込んだりしてひやかしてまわったり、先生が注意するとその先生をとりかこんですごんだりするといった全く手がつけられない状態」（東住吉セツルメント 1963b:21）を指し、その大半はセツルの子供会に来ているまたは来ていた子だった。子供会でも喫煙や夜の徘徊などがみられたという。以下は、セツラーと中学生との話の記録である。

私たちは彼らと話をしてみた。何故学校で暴れたりするのかを聞いてみると彼らの言い

ぶんはこうであった。“学校の勉強はちっともわからへん。おもしろない”“先生は始めから出来る者と出来へん者を区別しとる”“授業中オマエはアホか、オマエなんか学校へ来んとけ、なんか言う”“一寸したことがあっても自分らの言うことは何も聞かんと家に言うぞといったりする”“出来る子と出来へん子が同じことしても出来へん子はものすごう叱られる”だから“学校なんておもろない”というわけである。

(同上:21-22)

彼らの言葉を受け、当時のセツラーは「学校側がこれらの子供に人間として人格を認めていないところにも原因の一つがあるのではなかろうか」(東住吉セツルメント:1963c:4)と記す。また、「不良化問題」を個人の性格などの問題ではなく、社会問題として取り組むべきだとし、子供会でも、集団組織の中で差別のない教育を行い、家庭・学校と緊密な連絡を保つ方向が示されている(東住吉セツルメント 1963b:23-24)。

一方、子供について、「子供会に来ている子供はほとんどが学校の成績が悪い子供です。彼らは今のゆがめられた学校教育の一番の犠牲者であると言えます。つまり彼らは今の教育からはすっかりみはなされた子供なのです」(同上:27)と述べる。その上で、教育課程改定後、学校で教えきれない量を宿題に肩代わりして出す状況が生じるが、「子供会に来ている子供の家庭は皆決して裕福では」なく、家庭教師がついている子や参考書を買い与えられている子との差がつき、学力も学ぶ意欲も失われていると考察[22]する(同上:28)。学力が低く「クラスではすっかりとりのこされた存在で先生からも生徒からも認められること」のない子供たちは、「子供会で認められようとしてデモンストレーション」を行うという。ゲームの中でわざと鬼になったりゲームの中心となってかきまわしたりする。それは、「この子供会では羽を伸ばせるからであり子供会以外ではそんな所がないから」だと論じている(同上:29)。

上述の文章には現代の価値観からみると不適切あるいは差別的と思われる表現も含まれるが、当時のセツラーの子供や学校、家庭、社会に関する視点や、子供会のあり方への展望が表れていると考え、複数の資料を用いて引用した。ただし、ほかの事例も含めて客観的な検討は求められる。

他方、上述の「不良化問題」は、地域全体で取り組むべき問題であるとしつつも具体的解決方法が見出せず、中学校の先生や大学教授に話を聞きに行くほか、地域との結びつきの継続のために一時休止中の 3〜4 月も、週 3 回は地域に出かけて子供たちと遊ぶ活動を続けていた。以下、その後の経緯を引用する。

四月末になりセツラーも子供会を早くはじめる方がいいとの意見だったし又中学生からも学校へ行って勉強をしたいから子供会で勉強を教えて欲しいという子供会再開の声があがって来た(※筆者傍線)。彼らとセツラーとで地域で子供会のできる場所を捜したが見つからず、保育園で暴れない、けんかをしないという約束で中学生が園長さんに頼んで再び五月から中学生(男子のみ)の子供会をはじめた。セツラーと一緒に地域で場所を捜した事によって中学生の中に自分達の子供会であるという意識が生まれた様に思う。勉強を教えてほしいという子供達の要求が原動力となって子供会はうまく行きはじめた。

東住吉セツルメント(1963a:5-6)

一連の総括では、「この一年間でいわゆるセツルの子供会の形態―我々が与えるのではなく子供自身の子供会に一歩進んだことが言えるだろう」(同上:18)と述べられている。学びの場であるはずの学校において取り残された子どもたちにとって、セツルメントの子供会は学校で勉強するために必要な場となっていたことが一時休止によって理解され、子供会再開の要求へとつながった。そして、活動場所を共に探すことで、中学生自身に主体性が生まれ「自分たちの子供会」という意識につながったといえる。

なお、一点、のちの展開として補足すると東住吉セツルメントは、1967 年時点では住吉セツルメントとなり、住吉地域へと実践地域が変わっている(住吉セツルメント 1975b)。しかし 2 年後の 1969 年、近隣地域で起きた「矢田問題[23]を踏絵にしてこれを差別と認められないものは部落問題の本質がわからないことであるからそのようなものには子供を指導できないとの理由」(同上:6)で地域の青年から子供会停止を要求され青年らの手による子供会も始まる。翌年の 1970 年には新今宮地域への地域転換が資料から確認できるが(同上:7)、その背景には、上述の出来事があったと推察される。これは、第 2 回大阪府学生セツルメント連合大会の討論資料にみられる、「住吉セツルメントでは、地域の解同との関係が非常に困難な状況の中で活動をすすめている」(大阪府学生セツルメント連合書記局 1969:7)との記述にも一致する。こうした経緯には、青年ら自身で子供会を新たに立ち上げる主体性の契機となった側面の一方で、住吉セツルメントに対して社会認識の甘さを投げかける側面も含まれていたといえる。また、地域の青年らと理解しあい協働することができず、結果的に地域転換せざるを得なかったという限界も見出せる。なお、一連の出来事については、部落子ども会[24]、同和地区住民らの主体的な取り組みによる自治の高まり、部落解放運動などとの関連からも検討が必要である。

東住吉セツルメントの勉強会実践は、子どもたちの「学校に行って勉強がしたいから子ども会を再開してほしい」という要求を受け、ともに活動場所を探し、再開された。この実践が行われた 1964 年の子ども白書では「あらしの中の中学生」の項の小見出しに、「テストだけあって教育がない学校!?」「進学競争の激化と非行の増大」(日本子どもを守る会編 1964:49)といった言葉が並ぶ。これらは白書としての客観性の点で疑問は残るが、社会の変化や学校をめぐる一連の改革が子どもへのしわよせとなってあらわれる本期の特徴を表しているといえる。このような学校、子どもをめぐる状況を背景に子どもたちの要求がうまれ、実践が展開された。実践記録にもみられるように、目の前の子どもだけでなく、その状況を形成している社会のあり方へのまなざしを、学生セツルメントは有していた。これは、現代のソーシャルワークでいうマクロ視点とも重なり合う。また、地域に出向き要求に応じて実践を展開するという、アウトリーチの役割も果たしていた。こうした地域実践を通して社会をみるという視点や地域の要求に基づく実践展開は、生活向上や社会変革を求める運動へとつながる側面を有していた。不足部分を補いつつも社会の問題として認識し、制度や政策を変えていくことを求める運動性である。これらの点については、次章で取り上げる屋形町セツルメントの実践の考察と含めて総合考察で深めたい。

２．関東における地域実践―若者会・若者パートの実践から―

第 2 節で述べたとおり、本期は、セツラーの学びの場、人間形成の場としての位置づけが強い方針が出される点にその特徴がある。本項では、厳密には本期の 1 年後になるが、1967 年の大原セツルの若者会パートの実践を手がかりに、セツラーが実践を通して学んでいったことや思索について検討したい。若者会や若者パート、青年部、青年パートなどと呼ばれる青年労働者らと関わる活動は、保健医療活動を行う保健衛生部や子供会活動を行う児童部、法律相談部に加え、学生セツルメントの再建当初からみられるものである[25]。労働者と関わる活動は、イギリスにおけるセツルメントの歴史に遡ることができ、東京帝大セツルメントでも「成人教育」と「社会調査」が２本柱になっていたことからも、非常に重要な活動に位置付けられていた。それらの意味からも、学生セツルメントの特徴を捉える上で重要であると考え、大原セツルの実践を主に取り上げながら論じたい。

（1）若者会に参加する「若者」とセツラー

大原セツルメントは、1966 年から、「それまでの活動の場であった大原寮の若者に若者会を作ろうと働きかけた」(東京都立大学大原セツルメント 1967:5)ことから始まる。“あおぞら”という名称で始まった若者会の活動は、「フォークダンス、ハイキング、ダベリング等を中心として、毎週土曜日の夜に行われ」た。しかし、「若者からは『主催者』側であるセツラーがたるんでいるから」という意見もあり、セツラーと若者からなる幹事会を置き、セツラー主体の運営に「若者」たちも、「若者からの要求で参加」(同上)するようになる。では、どのような「若者」が若者会に参加しどのような関わりがありどのような変化があったのか、セツラーの捉え方から垣間見たい。

T 君

二十才、○[26]製作所。はじめの頃、四、五月は会に来てもほとんど話もせず、歌もうたわず、お酒をのんだときしか話しませんでした。→現在とても親しみやすくなってきた。(全セツラーの意見)それはセツラーが、T くんのアパートへ泊りに行ったり、一緒に飲みに行ったりして積極的に接していったから。－生活感－以前は無気力的であった。(お金の使い方、競馬の事等)原因は、一. 東京にあこがれて来た。(ドラムに興味があった)二. 田舎に田畑があり、そこで農業をする気ならやれるから、という二点が大きいと思われます。会に入って変わってきました。

(同上:15)

そして、変わってきた点として、誰とでも気軽に話したり歌を歌ったりするようになるなど積極的に会のメンバーと交流をもち参加するようになったこと、「一人でアパートに住み始めた」(同上:16)ことなどが挙げられている。彼は、自身のアパートで新年会をやることを提案する。「これは仲間として積極的に、一緒にやっていこうとする姿勢の表れで、かなり親しみや信頼関係というものがでてきた様に思われます」(同上)と評している。

ある日T君に「羽田事件があったが、学生がなにもあすこまでやる必要はないじゃないか。佐藤さんが行きたいものなら行かせればいいじゃないか。」とセツラーが言われ、学生運動がどういうものであるか、佐藤訪米、訪ベトがなにを意味するのかを、T君に解りやすく話してあげられませんでした。この点につき、やはりセツラーはこういう問題を自分の問題としてじっくり考えたことがないからではないか、と総括の中で話し合われました。

（同上）

学生と変わらない年の若者との関わりの中では、セツラーと若者という線引きが難しい部分もあったと思われるが、反面で、泊りに行ったり飲みに行ったりという、柔軟な関わり方ができた面もあるといえる。ここには、同じ人間として関わり続ける姿勢が見出せる。これは、セツルメントの人格的接触の精神とも重なるといえる。そしてそのことが、信頼関係の構築につながり、T君自身の変化にもつながったといえるだろう。また、T君の素朴な疑問が学生自身のあり方への問い直しにつながっている側面も見出される。

また、川崎セツルメントでは、船荷の屑物買い取りの仕事をしており雨の日や船荷のない日は無収入である青年について、生活に計画性を持てず、仕事終わりは毎日酒を飲んだり仲間と賭け事をしている状況にあると述べる。その上で、彼の「昨年の 5 月頃から急に仕事が良くなったんだ。いわゆるベトナム特需とかなんとかいうやつで。」「今、仕事する船はほとんどアメリカのベトナム関係の船だ。」といった言葉を取り上げ、「日本はずいぶんベトナム戦争に協力してるんだなということがひしひしとわかります」（川崎セツルメント 1967:5）とする。ベトナム戦争に関する感想は検討を要するが、セツラーにとってはベトナム戦争が日本での仕事を増やし生活に直結している点など働く者の現実や社会を現実的に知る契機となっている点が見出せる。また、「若者」らにとっても、大学生との関わりは新たな視野や刺激をうんだともいえる。それは例えば、通信制高校で学びながら働く美容師を見守る例などにもみられる（東京都立大学大原セツルメント 1967:18）。また、川崎セツルの若者パートでは、「何かしら真剣に話せる友達を求めて、時々セツラーの下宿へふらりと現れる」という若者の姿を指摘する（川崎セツルメント 1967:5）。

若者会や若者パートは、会に参加する年の変わらない彼ら・彼女らを「若者」や「青年」、「労働者」等とする点で、大学生であるセツラーとは違う存在として意識されていた面は否めない。しかし、実際には、学生が働く若者から学ぶ部分が非常に大きかったのではないかと思われる。その点について、検討してみたい。なお、本項では詳述しないが、若者会や青年パートの活動は、その地域の企業や職種とも大きく関わっており、関東では機械工業などの大企業が多くある地域での活動が戦後早い時期から多くみられた。

（2）セツラーは若者会から何を学んだか

先述したとおり、労働者との関わりは、セツルメントの歴史上でも重要な意味をもつ。しかし、生産点論以降の学生セツルメントにおいては、その意味合いはイギリスでの創成

期や大学セツルメントのものとは異なってくる。つまり、労働者教育、無産者教育といった色彩のものではなく、セツラーが実践を通して学ぶという意味合いへの変化である。では、具体的にどのような学びがあったのか。大原セツルメントの総括から一部引用する。

☆セツラーの物の見方の変化

セツルに入った当時のセツラーがもっていた労働者に対するイメージというのは、ほとんどが「仕事につかれて帰ってきて、テレビを見て寝てしまい本を読んだり物を考えたりすることがあまりない」というような常識的な一般論でした。

自分達と同世代のたくさんの若者が働いているということを考えたこともなかったセツラーもいました、そういうイメージをもって活動をやっていくうち、当然「若者に接触しても何も得るものはないんじゃないか！それならこんな活動しても何になるんだ」というような事が出てきました。しかし、新聞を配りにいったり、一緒に飲みに行ったりしていく中で、若者がどんなことを感じているのか、どういう生活をしたいのかを知るようになり、だんだんセツラーの労働者観も変わってきました。…略…このようにセツラー一人一人が持たされていた観念的な労働者に対するイメージは活動の中での若者との接触で、どんどんこわされていき、自分達にも身近な若者像がうかびあがってきました。そして、同時に今までは単に頭の中だけで考えてきた思考方法から具体的な一つ一つのことから考えていき、それをまたすぐ事実に照らしあわせて考えて確かめるというような思考方法に変わってきました。

（東京都立大学大原セツルメント 1967:21-22）

この例からは、第 2 節で取り上げた生産点論に基づく 1950 年代後半の実践のあり方と大きく変化する実践のあり方が見出せる。すなわち、労働の場に拠点を置いて労働者を変革するという考え方ではなく、学生自身が労働者との関わりを通して、何を学ぶかに力点が置かれているという変化である。そして、その学びの内実は、観念的なものではなく、事実を通して現実を考えるという思考へと変化していることも理解できる。他方で、学生セツラーの役割として、「学生は働く人よりも社会の目から隠されている事実というのをよりたくさん知ることができる立場にいるので、そういう事実を若者に伝えていくのが学生としてのセツラーの責任であるということが意志統一されました」（同上:23）と述べられており、学生としてのセツラーの役割についても変化が見出せる。

若者会や青年部といった名称の活動は、関西や他の地域でもあるものの、地域の特性や戦後初期からの活動の継承という点から、関東において戦後の再興期から活発になされてきた印象を受ける。これは、氷川下セツルメント史編纂委員会（2007）（2014）などの先行研究からもいえることであろう。次に、本期の他の地域での実践についても検討してみたい。

３．その他の地域での実践

本節では、まず関東セツルメント連合と関西セツルメント連合に属するセツルメントの実践を取り上げた。そのほかの重要な活動として、1959 年、まさに全セツ連が生産点論を

推し進めようとしていた年、伊勢湾台風をきっかけにヤジエセツルメントにおいて行われたヤジエ保育所の実践が挙げられる。これについては、当時愛知県立大学の専任講師であり、ヤジエセツルメント保育所の実践にあたって学生と共に中心的役割を果たした宍戸(2016)等でも触れられているほか、名古屋保育問題研究会(1963)で取り上げられているため、本稿では扱わない。しかし、ヤジエ保育所の実践は、当時の全国組織としてのセツルメントの動きはどうあれ地域の緊急的な状況に対して、「大学の枠をこえて、連携しあう、学生・教員の輪が広がって」(宍戸 2016:91)地域に密着した取り組みが行われたことを示す重要な実践であるといえる。

ヤジエセツルメント保育所は、大学の枠を超えて学生や教員の輪が広がり、また保育士なども加わりながら連携してつくりあげられた実践であった。ほかに、諸団体や諸運動との連携という点から全セツ連機関紙をみると、全国学生集会、全教ゼミへの参加呼びかけ、民主少年団との経験交流の促しや大学教授復職斗争などの記事がある(全国セツルメント連合書記局 1966b)。その中で、農村生活を実際に体験した援農について述べる。

援農とは、「援農交流会」の略で、1966 年 8 月、全学連、全寮連、民青、全セツ連が主催[27]し、「福島市周辺の農家に分泊し、農村青年との交流を深める」農村活動だという。「東大、千葉大、京大など計二〇数名が参加」(同上:10)して「再開」された。「再開」には次の事情があるという。

> 一九六〇年までは、全学連が積極的役割を果し、毎年、五、六百名から成る教授・学生が大挙して全国の農村に入っていたということです。六〇年以降の全学連、学生運動の分裂は、援農を中止させました。それが今回、名実ともに百万学友の全学連が建設されたのを機会に援農再開となったものです。(同上)

すでに、熊本や北海道のどんぐりセツルメントなどでは、農村での農業手伝いの実践などが始まっていた。高島(1968:33)は、「活動地域が都市にかぎらず、農山村にもひろがっていることが戦後学生セツルのいま一つの特徴だろう」とし、「農山村の現状もまたセツルを要求しているのである」と述べる。第 1 節で述べた通り、都市への出稼ぎや集団就職が増え、農村をめぐる状況も大きく変化していた。そうした中、都会のセツラーは農村生活を体験する。

> 朝五時に起きて桑の葉をつみ、カイコ様にくべて、朝食。再び桑つみ…というように周期的な桑つみを中心に、その合間に草取り、とうもろこしとりなどをやった感じです。
> …略…土質はきわめて悪いものでした。しかも一町一反の畑に労働者がたった一人。農村の人不足というのがハダで感じられます。汗水たらして育てた収かく物も価格の保証もなく買いたたかれているのが現状です。(全国学生セツルメント連合書記局 1966b:10)

別のセツラーは、6 日間の援農活動を通して肌で感じたことを以下のように述べる。

我々学生は本当の農民の姿、農村の状態をとらえる為には、じかに農村に行き、農村の状態、農民の声をはだで感じ取ってくる必要があるのではないか。そして、農村にはいるにあたって、その地域で継続的にやっていかなければ、その成果も少ないのではないかということです。(同上:11)

以上の援農の実践は、セツルの継続的なものではなく、体験として行われたものであるが現地に行って生活を体験し、農村の現実を肌で学ぶことにつながった。こうした農村での実践は、農村セツルと呼ばれるものにつながる動きであると考える。また、全学連、全寮連、民青、全セツ連の主催であることから、セツルメントがこれらの団体と深い関係性にあることがわかる。それはすなわち、政治的な諸問題に対する立ち位置も示すものであるといえるだろう。同時に、農村での実践は、別の側面からも検討できる。

東京大学で社会教育学の教授であった宮原誠一の研究室では、「セツルメントの扉は宮原研究室へ。宮原研究室の扉は農村へつながる」と言われていたという(山田 2014:40-41)。先に挙げた手塚英男も島田修一もともに宮原研究室の出身であり[28]、同窓会資料[29]に記載されている同窓生 13 名だけみても、内 9 名がセツルメントに所属していた。そして、それらの卒業生の多くは、社会教育主事あるいは公民館主事となっている。例えば、手塚は卒業後に長野県の社会教育主事となり、島田も卒業後は茨城県で社会教育主事となっている。

島田修一は、高校時代に『学生評論』に掲載された手記に影響を受け、経済学部志望を社会学(文Ⅱ)志望に変えたという。それは、法学部を卒業し定時制の教員になった人の手記で、「どういう人の役に立つか(考えた時)、苦労する人の役に立つ(と考えた)」と書かれていた。そうした経緯があり地域の近代化・民主化に魅かれ、入学後は地域の住民活動をやっている団体に入ろうと考えていたところ、寮のセツルの部屋[30]に「人民のなかから人民のなかへ」というスローガンが掲げられている[31]のを見つけ、「これだ!」という思いでセツルに入ったという。だが、当時、島田が所属していたセツルでは母親らや地域と結びつくことが難しい状況にあった。一方で、社会教育を学ぶうちに、「地域住民と触れる中で地域を変えていかないと」と思うようになったという。島田にとっては、セツルはあくまでも「奉仕的文化活動」であり、「文化活動に特化したセツルを批判するかたちで社会教育活動に入った」のだという。そして、「問われてみればセツルは通過点であって、自身の体験の中ではテーゼの問い返しもなかった。地域社会をどう組み立て直すかという意識もなかった」と話す。他方で、「セツルに入る前、入ったのちのいろんな人の影響を受けながら、セツル的なものを抱きながら生きてきたのだと思う」「一貫してセツルメントをやっているという意識もあった。本物のセツルだ、と。」と、社会教育の道に歩みつつもそこに通底するセツルメント精神について振り返っている。また、島田をはじめ多くの OS が今もさまざまな住民運動、社会運動に関わっていることも上述の同窓会資料やこれまでの聞き取りからいえることである。

島田の場合は、セツルメントを批判するかたちであったが、地域により深く入り込み地

域住民と共に活動することを志して農村の社会教育主事となった過程が見出せる。このように考えてくると、セツルメントと農村、そして社会教育のつながりが見出せるとともに、セツルメント出身者に社会教育関係者が多いことも理解できる。ただその場限りではなく、その地域に住み、地域住民と学びあいながら地域をよりよくしようと協働すること、農村での生活のあり方を考えたり学びあったりしていくこと、それはセツルメントの精神にも通じるものである。だが同時に、学生セツルメントの場合、それを実現するには学生としての限界や、本期の方針をめぐる議論の混乱状況もありセツルメントの本質が不明瞭になることを背景として、「奉仕的な文化活動」もしくは「指導的」の両極端に傾きやすい性質を有していた点も本期の特徴といえるだろう。

第５節　小括

１．組織構築期における学生セツルメントの展開

本章では、1956 年－1966 年の高度経済成長期を取り上げた。第 1 節では、高度経済成長とともに人びとの生活やライフスタイルも変わり、高齢化や核家族化が始まるとともに、貧困の二重構造化という側面も有している点について述べた。また、住民運動や市民運動といった、地域の身近な問題として住民が声を上げる運動が活発化し、学生も学内の運動に限らずそうした社会運動に参画していった点にも言及した。

第 2 節では、本期の全セツ連の動向として、1950 年代後半から 60 年前後を境としてその方針が大きく変わっていくことを示した。その上で、1950 年代後半のテーゼの内容とその議論について、従来イデオロギー的側面への着目が強かったが、地域実践と学生運動との間の揺れ動きともいえるような状況の中で、地域実践をふまえて出された経緯があったことを明らかにした。また、テーゼについては、セツルメントやセツラーによっても多様な受け止めがあったことを資料や語りをもとに示した。

第 3 節では、各地域のセツルメントとして、関東セツルメント連合の展開と関西セツルメント連合の結成について論じた。その中で、関東セツルメント連合は全セツ連と密接な関係にあり、その意味でほかの連合とは異なっていること、名称も連絡会議としてゆるやかな組織体のかたちとなることを明らかにした。また、関西においては、愛染園学生セツルメントを構成するセツルメント間の立場・考え方の違いが明確にあらわれ愛染園から独立する流れとともに、関西セツルメント連合結成の経緯についても述べた。

第 4 節では、「地域実践を着実に行ってきたセツルメント」の実践例を取り上げ、地域に出向き要求に応じた活動が展開された側面、地域実践を通して社会をみる視点があり、それらは運動性へとつながるものであったことを明らかにした。

２．60 テーゼまでの動向と社会福祉運動との関係性[32)]

本期のうち、60 テーゼまでの動向を社会福祉運動との関係から考察したい。戦前、明治学院大学のセツラーであった天達忠雄(1959)は、ソーシャル・アクションの機能として、①請願・陳情でなく社会的組織的圧力を政府または国会等に加えてもっとましな政策を実

施させること、②上からの政策を待たずにみずからの集団の内部でみずからの力による共済活動をみずからの力を拡大しながら行うこと、の 2 点を挙げている。天達によるソーシャル・アクションの機能分類に従えば、 概ね学生運動は①であり、本来的なセツルメント運動は②だといえるだろうが、1960 年前後の学生セツルメントは①に重なり合う部分を含んでおり、そのことがその後、学生セツルメントの独自性を見失わせ衰退へ至る一因になったともいえる。

1950 年代後半の全セツ連の動向は、セツルメントの理論化を求めた結果として、政治志向性の高まりや社会変革的思想への傾倒につながったとみることができる。社会福祉運動と社会運動が未分化であった時代とはいえ、明らかに社会運動・労働運動・平和運動への志向が高く、社会福祉運動とは性質を異にしていた。ここには、地域実践だけで社会を変革できるのか、という当時の社会情勢や運動の高まりが背景にある。他方で、地道に地域実践を続けるセツルメントもあった。そうした実践の内実には、地域の要求に応じた展開とともにセツラーも地域の現実を通して学ぶ人間形成の場としての機能があった。これらから、1960 年前後の動向は、理論化へ進む全セツ連の方針と地道に地域実践を続ける各セツルメントの“乖離”がみられる時期としても位置付けられる。これは、先述の、生産点論は「ごく少数の人間が言っていることで、全セツ連も少数の代表者が行っていた」との証言からもいえる。

もともと、地域実践をふまえて出されたテーゼであったが、地域実践が地域住民とともに地道に取り組まれ、内容を深化していった側面への評価が適切になされず、全セツ連の方針が労働運動・平和運動に偏っていくことになる。ここに、“乖離”の大きな要因の 1 つが見出せる。実践に取り組むセツラーによって地域実践が全セツ連レベルできちんと評価・総括されていたならば、1950 年代後半以降にみられるような理論化ではなく学生セツルメントとしてのあり方を別の側面から検討する道筋もあったのではないだろうか。

また、方針が理論化へと進んだ背景には単なる慈善事業に終わらせたくないという戦後初期からの思考の連続性と定義の不明確さが見出される。しかし、セツルメントの実践は、地域の「要求」に基づいて展開されたものであり単なる慈善事業として括れるものではなく、地域住民の生活実態に即した運動性をもったものであった。この点については改めて評価する必要があろう。

次に、60 テーゼのもつ意味を考察したい。60 テーゼでは、歴史・地域実践の否定からなされた生産点論を批判し、本来のセツルメントのあり方が改めて検討されたという点において大きな意味をもつ。60 テーゼでは、「セツルメント運動は日常的な諸活動を通じて地域住民とともに『地域社会の問題の解決＝生活文化の向上』を実現していこうとする運動」とされた。そして、スローガンに「平和、民主主義、生活ヨウ護のための国民的統一の一貫として対称とする人々と共にねばり強い運動を進めよう」が掲げられた。ここには、再興期にみられた学生セツルメントの社会福祉運動的性質への再着目がみられる。

しかし、60 テーゼ以降は、社会福祉の制度展開や学生運動の挫折、セツルメントのイデ

オロギーに対する偏見やセツルメントの組織拡大の意図などを背景に、「学びの場」として位置づけられ、運動性を前面には掲げないスローガンとなる。つまり、60 テーゼで改めて見直された社会福祉運動的性格は、後の方針に継承されるものにはならなかったのである。このことは、その後次第に学生セツルメントと学生ボランティアとの違いが曖昧になっていく背景の１つとみることもできる。その意味では 60 テーゼで見直された性格を継承しながら時代背景や実践に基づいた適切な評価・分析の上にセツルメントの性格および方針が検討される必要があっただろう。

以上をまとめると、本期の学生セツルメントには、 地域や住民らの要求を受けて住民とともにその生活課題の解決を図るという運動的性格が見出された。これは、社会福祉運動とも重なる。しかし、1950 年代後半以降、地域状況や実践と離れた理論化が進められ、学生運動や平和運動、労働運動へと傾倒した。1960 年の総括を経て再度社会福祉運動的側面への着目がみられるが、その後の全セツ連はセツラーの人間形成の場としての位置づけへと転換していく。この人間形成の場としての位置づけに転換していく 1967 年以降の動向について、次章で検討する。

注

1) 岡本（2019）の一部を大幅に加筆・修正したもの。

2) 大学・短大進学率は 1954 年の 10. 1%から，1966 年には 16. 1%に上昇(文部科学省(2018)「文部科学統計要覧」(http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1403130.html,2018.12.8).

3) 総合社会福祉研究所編(2012)『真田是著作集 第 3 巻』参照

4) 1965 年に「ベトナムに平和を！市民連合」（通称、ベ平連)が組織される。

5) 他方で、1950 年代の生存権をめぐる運動は、朝日訴訟以前の時期から地域で憲法 25 条の具体化を求める運動として存在していたとの指摘もなされている（大門 2012:185)。

6) 本項の（1）（2）は、岡本（2018）を加筆・修正したもの。(3）は、岡本（2019）を加筆・修正したものである。

7) 「テーゼ：方針書(直面した情勢に即応した方針、運動方法、形態を説明した文書)」(住吉セツルメント 1976:5)

8) 第 2 回大会の内容については西内(1971:108-111)参照。なお、西内も述べているとおり、午後の総会では「わかもの」の合唱ののち、東京大学セツル顧問で東京大学教養学部助教授の山下肇が挨拶し、立命館大学の末川博総長からメッセージが寄せられた。ここから、大学や大学教授の理解や支援の程度には差があることが垣間見られる。

9) 不明(不明:1)「全セツ連の歴史」

10) 本研究では､のちの客観的評価として住吉セツルメント(1976)を用いて要点のみに留めるが､氷川下セツルメント史編纂委員会編(2014:113－116)において､1960 年の全国セツルメント連合臨時大会討論資料を一部抜粋し、60 テーゼの記述が掲載されている。

11) この点について、住吉セツルメント(1976:4-5)では、60 テーゼの 1 か月後、1960 年 12 月に

は川崎問題が明らかになったとしている。川崎問題とは、川崎セツルが 2 つのグループに分裂し、そのうちの 1 つが生産点論にのっとり実践に移す段階で破たんしたものであるとの説明がなされている。

12) 「／」は、原文において改行していることを示すため、筆者が加筆したものである。

13) 2018 年 5 月 12 日、手塚英男氏への聞き取りより。以下、同様。なお、聞き取りの内容は、手塚(2009a)(2009b)とも重なるものである。

14) 医療法人ひこばえ会・セツルメント診療所保管資料。

15) 研究倫理の観点から、H 寮と表記する。

16) 勉強会や子供会活動に取り組むパートで、当時は、「部」という名称を用いていた。

17) 2018 年 12 月 3 日、島田修一氏への聞き取りより。以下、同様。なお、島田氏の人生史に関しては森田尚人(2006)が参考になり、語りとの重なりがみられた。

18) これについては、島田修一(2018:3)「信州宮原研究会報告　「応える」とはどういうことかを追い求めて 60 年」にも記載されている。

19) 2018 年 11 月 25 日、日東セツルメント OS まろ氏への聞き取りより

20) 2019 年 2 月 24 日、坂下セツルメント OS ガン太氏、川崎セツルメント OS ダボハゼ氏への聞き取りの中で、ガン太氏より聞かれた内容。

21) セツルメント兄弟会は、立命館大、ノートルダム女子大、華頂短大、京大、日赤看護学院から構成され、対象地区は住民数約 4500、北に内浜部落がある京都市南区東九条で活動を行っていた。活動日は週 3 回、東岩本町の希望の家を中心にしており、週 2 回は北屋形町で地域子ども会をしていた(兄弟会 1964)。

22) 日本子どもを守る会編(1965:34)『数字でみる子ども白書’65 年』では、学習塾・家庭教師についている 1 クラスあたりの生徒割合が示されている。それによると、全国の中学校において塾に通っている生徒が 10 人以下の割合は 17。3%であり、大半の生徒が学習塾・家庭教師についていることがわかる。

23) 「1969 年(昭和 44)3 月，大阪市教職員組合東南支部役員選挙に立候補した中学教諭の立候補あいさつ状ならびに同僚教諭の推薦状が，労働条件改善に名を借りた差別文書であるとして，同年 4 月 9 日関係教諭が，部落解放同盟大阪府連矢田支部の“糾弾”を受けた一連の事件」山上益朗(2001:42)「矢田教育差別事件」『部落問題・人権事典』解放出版社.

24) 中村拡三(2001:344)「部落子ども会」『部落問題・人権事典』解放出版社のほか，同地域の子ども会活動との関連では，社団法人大阪市同和事業促進協議会 50 周年記念事業実行委員会(2003:232-233)「子ども会育成事業」『市同促協創立 50 周年記念誌 50 年のあゆみ』など参照。

25) 1955 年 11 月の関東セツルメント連合の結成大会では、すでに成人教育部の分科会が開かれており、川崎セツルにおける川崎労働学校、川崎うたう会の実践や、氷川下セツルの氷川下うたう会などが行われていた(全国セツルメント連合歴史小委員会 1957:Ⅱ 9)。

26) 資料では、イニシャルだが、研究倫理の観点から、〇と表記する。

27）全国セツルメント連合書記局(1966a:60)には、全学連、全寮連、民青、全セツ連のアピールを受けて援農が行われた旨の記載があり、全国セツルメント連合書記局(1966b:10)では「全セツ連等四団体の主催」とあることから、上記4団体が主催団体であると考える。

28）「研究室の扉は信濃の農村につながっているといわれた」（手塚 2009b:87）

29）手塚英男氏作成の2014年同窓会用資料「宮原誠一理論を信州・茨城の各地で地域実践してきた社教(公民館)主事たち　長野県・茨城県東大社会教育同窓会」では、同窓生アンケートの返信が掲載されており、各同窓生の卒業年度、所属セツルや学内活動、卒業後の仕事や退職後の運動・活動などが記されている。

30）当時、東京大学の駒場寮は、サークル単位で部屋を貸していた。

31）上述の聞き取りでは、どのような形で貼り出されていたか、までは思い出せないとのことだったが、「人民から人民のなかへ」という言葉は強烈に印象に残っているとのことが聞かれた。

32）岡本(2018)の一部を加筆・修正したもの。

第４章　学生セツルメントの組織転回期(1967－1973 年)

本章では、1967 年から 1973 年を学生セツルメントの組織転回期として論じる。本期は、社会福祉の制度政策の整備が進み、地域福祉への着目、ボランティアの広がりがみられる時期である。他方で、学生運動が過激化し衰退する中で、学生セツルメントの組織のあり方が問われる時期でもある。本期における学生セツルメントのあり方を通して、その方針からみられる運動のあり方の変化や実践の内実と人間形成・自己教育に与えた影響などについて論じたい。

第１節　社会状況と社会福祉の動向[1)]

１．国民生活と革新自治体の誕生、大学をめぐる変化

本期は、高度経済成長期後半から 1970 年代の低成長期へと至る時期である。1960 年代には物価上昇が国民の生活にとって大きな問題となっていた。加えて、1973 年、石油ショックによる石油価格の急騰が起こり、「狂乱物価」と呼ばれる混乱が生じてくる（武田 2008:203）。こうして、18 年間続いた高度経済成長は 1960 年代以降の緩やかな低成長と 1970 年以降の円高不況、石油ショック等による世界同時不況によって終焉を迎える。

また、本期、「中流意識」や「一億総中流化」という言葉が広がる。一方で、岩田(2017:194)は、「いぜん貧困世帯は残っている」とする 1970 年度の経済白書に触れ、貧困世帯には「成長から取り残された階層」が含まれることも示す。 さらに、「一億総中流化の中」にあっても、旧産炭地域やバタヤ部落、同和地区部落、寄せ場などにおける貧困の実態は残った。

政治の面では、革新自治体が生まれることもその特徴である。1967 年、東京都知事選では、社共両党推薦の美濃部亮吉が当選して、東京都に初めて革新知事が誕生し、1972 年には「革新知事は全国で七人、全国六百四十三市のうち百二十六市が革新市長となった」（武田 2008:160)。とくに都市部を中心に保守が基盤を失った背景には、深刻化する公害などの環境問題に対する政府の対応の遅れがあった。武田(2008:159)は、鹿児島県志布志湾、青森県むつ小川原の反公害住民運動、石川や新潟での原子力発電所建設をめぐる住民投票などを例に挙げ、「革新自治体の増加の基盤には、地方政治のあり方を変えていこうとする住民運動、住民の政治参加があった」とする。そして、美濃部をはじめとする革新自治体は、社会福祉・環境政策も積極的に進展させていった(同上:158-160)(吉見 2009:124-126)。

他方、大学をめぐっては、短大・大学への進学率が 1966 年の 16.1%から 1973 年には 32.7%と倍増する[2)]。こうした状況を「大衆化」と表現した高島(1968:32)は、「大衆化した大学と、国民生活の変化は地域の労働者・農民・勤労市民と学生との距離をちぢめ、基本的に同一の利害をもつ関係においている」と述べる。さらに、1967 年の第 14 回基調を引用した上で、「地域の問題と要求は(※と：筆者補足)学生の問題と要求とは一つのものとして自覚され結び付けられている」とも述べている。高島によるこれらの指摘は、大学生も一人の生活者として、地域住民の抱える生活課題が他人事ではなくなり、地域の問題や要求に密接に関わる主体へと変化していることを意味している。

２．社会福祉をめぐる動向―地域福祉・ボランティアへの注目―

本期の生活問題としては、核家族化の進行、過疎・過密問題の顕在化のほか、1970 年には「高齢化社会」に入ったとされることなどが挙げられる(菊池ほか編 2014：166)。社会福祉では、コミュニティケアや在宅福祉の理論が紹介され、地域福祉への注目が高まる。

井岡(2002:214)は、「一九七〇年前後には高度経済成長政策の矛盾がピークに達し、物価高騰、公害はじめ住民の地域生活環境や福祉条件の悪化・破壊が拡大深化し、生活防衛に立ち上った住民運動の高揚と生活・福祉優先を掲げる革新自治体の広がりがみられた」とする。一方で、「経済政策としてはなお高度成長路線が追及されるなかで、その矛盾への対応策としてコミュニティ政策と結び付けた地域福祉政策が提起され、そのサービス体系として在宅福祉が包括され、強調されていく」(同上)と指摘した。そうした中で 1971 年 12 月の中央社会福祉審議会答申「コミュニティ形成と社会福祉」は出された。「そこでは共同地域社会の解体が進む中で、コミュニティ形成の不可欠が論じられ、その基本として生活優先の原則、住民参加等が提示され、地域組織活動等の必要性が述べられている」(吉田 2004:317-318) 。この答申は、経済重視から生活重視への転換を主張するものである一方、「コミュニティへの関心は現実的には地域の解体の反映でもあった」(菊池ほか 2014:174)との指摘もある。公害問題や過疎・過密の拡がりが地域の相互扶助や親族組織を壊していったことで、コミュニティ形成が必要とされた側面もあったのである(同上:170)。

関連して、ボランティアが広がるのも本期の特徴である。1968 年、全国社会福祉協議会は「ボランティア基本要綱」を策定し、「ボランティア」も一般化しはじめた(吉田 2004:318)。

また、1973 年には老人医療費の無料化が実現したほか、年金制度へのスライド制の導入、厚生年金の給付水準引き上げなど、さまざまな施策がとられ、「社会福祉・社会保障関係費が前年より二十八・二%増加した」(菊池ほか 2014:170)。これらの社会福祉制度の整備・拡充を背景に、1973 年を政府は「福祉元年」と名付けた。しかし、先に述べた石油ショックを契機として経済成長が終息し、低成長へと転じたことによって財政困難を理由とする「福祉見直し」論をもたらす(池田 1994:187-188)。同年、「経済社会基本計画」が閣議決定し、「社会福祉について、施設の計画的・重点的整備とともに、『家庭奉仕員の増員をはじめ、コミュニティケア、在宅ケア等の充実をはかる』とし、政府の経済計画として在宅福祉の充実方針を初めて明示した」(井岡 2002:214)。

また、部落問題に関して、政府は 1969 年 7 月、「議会に『同和対策事業特別措置法案』を提出し、六九年から一〇か年計画にわたる被差別部落の環境改善、産業・職業・教育等の振興をはかる」(菊池ほか 2003:319)とした。

このように、本期の社会福祉は経済成長とともにニーズが高まり社会保障・社会福祉に関する制度施策の整備・拡充がすすめられ、地域福祉・在宅福祉のほか、ボランティアも広がっていく。一方で、石油ショックを契機として「福祉元年」が一転して「福祉見直し」に変わる時期でもある。

３．社会運動の展開―住民の参加と学生運動の衰退―

（１）社会運動および社会福祉運動の諸相

高度経済成長は、「都市問題や公害問題を引き起こし、企業や政府の責任を追及する市民運動が展開した」（菊池ほか 2003:171）。水俣病などについて、相次いで政府や企業責任を追及する訴訟が起き、1970 年代はじめに被害住民側の勝訴となる判決が下される（同上）。また、ウーマンリブや沖縄の祖国復帰運動、ゴザ騒動など、全国的な課題および地域や身近な課題に対する住民運動や市民運動が活発に展開され、革新自治体の誕生と全国的な増加につながる。これについて、先にも述べたとおり、武田（2008:159）は、「革新自治体の増加の基盤には、地方政治のあり方を変えていこうとする住民運動、住民の政治参加があった」と指摘する。これらから、本期は、住民や市民が主体となる運動が政治にも影響を与え、社会福祉や環境行政が進められる時期といえる。

社会福祉をめぐっては、当事者運動も前期に続き活発に広がるとともに、当事者と社会福祉労働者らによる研究運動の組織化が進むのも本期の特徴である。1967 年には障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会、全国障害者問題研究会が発足、共同作業所運動も広がり、1977 年には共同作業所全国連絡会が結成される。児童をめぐっては 1969 年に全国保育研究集会が発展して全国保育団体合同研究集会となったほか、全国養護問題研究会（1972 年）も結成される。

（２）児童文化運動と学校外教育

これまでも述べてきたとおり、学生セツルメントでは再建期から子供会活動が活発に行われてきた。1970 年代は、子ども会活動が全国的に広がり多様な主体によって展開される時期でもある。この、子ども会活動の背景には、児童文化運動や学校外教育がある。そのため、本期の学生セツルメントの実践や動向に関わる運動として、1970 年代に広がりをみせる児童文化運動および学校外教育と学生セツルメントの関係について述べる。

1960 年代後半からみられた地域の子どもに直接かかわる自主的なとりくみが 70 年代に入ると地域での「父母住民の手による新しい共同の子育て運動＜地域教育福祉文化運動＞」（増山 1958:5）となり広がる。こうした運動などを背景に、社会教育の流れを汲む「学校外教育」への注目が高まる。増山（1989:8）は、「子どもを直接対象とする社会教育活動の範疇を『学校外教育』の概念でおさえるとすれば」と前置きし、活動を 5 種に分類した（※傍点ママ）。そのうち、「民間の児童文化運動・地域教育運動・地域福祉運動」の類に、子ども会と学生セツルメントの子ども会が併記されている。また、学校外教育運動の現代的意義を「＜教育＞と＜福祉＞を統一的にとらえ、子どもの生活と教育の結合を追求し、生活権と発達権の統一的保障をめざすいとなみを実践的に模索している」（同上:110）点にあるとし、「歴史的にみれば、＜教育＞と＜福祉＞が統一してすすめられた活動の典型をセツルメント運動に見いだすことができる」（同上:110-111）と述べる。1970 年代に活発化した「学校外教育論」は、1930 年代、松永健哉によって「東京帝大セツルメントの実践と研究のなかでうみだされ」たものである。「松永らが追求した『校外教育論』のなかには、＜

子どもの教育＞と＜子どもの福祉＞とそして同時に＜子どもの文化＞を一つのものとしてとらえる視点がつらぬかれていた」(同上:111)。また、＜子どもの文化＞に関連して、菅(1960:199)は、「児童文化」という言葉の起源を東京帝大セツルメントの児童問題研究会(1933 年成立)にさかのぼり、「セツルメントの活動に代表される校外教育の実践を一般化し理論化する過程で、児童の文化生活を総括的にとらえる発想が形づくられて来た」と述べる。

このように、本期における子ども会活動の活発化の背景には、父母住民による児童文化運動の高まり、学校外教育への注目があった。そして、この学校外教育や児童文化運動は、大学セツルメントの歴史的文脈に位置づけられる[3)]。

（３）学生運動の諸相―「過激化」と衰退―

学生運動の側面でも、環境問題に関する市民レベルの運動が高揚していた 1968－69 年には、各地の大学で紛争が多発していた。医学部の学生処分問題に端を発した東京大学では、処分取り消し要求から全学部・大学院を巻き込んだ全学ストライキに発展するなど、同様の状況が各地の大学で広がっていた（武田 2008:164-165)。「長期にわたるストライキとバリケードによる大学封鎖によって大学の機能は麻痺し、大衆団交や警察機動隊導入などの事件が連日、報道されていた。…略…学生たちは、複数のセクトに分裂しており、「大学解体」を叫ぶ全共闘運動が、三派全学連（社学同、社青同解放派、中核派）を母体として一部のノンセクト学生を巻き込んで拡大し、他方で『大学の民主化』を求める共産党系の民主青年同盟を基盤とする、もう一つの全学連とが対立していた。この年の秋以降には、両者の対立はヘルメットにゲバ棒・投石による暴力的な衝突にエスカレートした」(同上:165)という。大学紛争は、学費値上げや管理上の問題等をきっかけに各大学で始まり、それらの紛争に立ち上った学生らが全国的な連帯を強めた。「大学紛争によって盛り上がった学生運動の勢いは学園紛争の域を超え、街頭に戦線を広げていった」(同上:167)。そうした中、1969 年には東京大学で安田講堂の封鎖が起こり、機動隊を導入するも入学試験は中止された。各地での大学に対する機動隊の導入は常態化し、これに対する学生らの反発として学生運動は「過激化」（吉見 2009:39）したものの、そのエネルギーは急速に衰えていくことになる。武田(2008:169)は、「既成の秩序への異議申し立てという意味で、全共闘など新左翼の活動には、三里塚闘争など重要な問題が含まれていた。しかし、その性急な運動と手段を選ばない行動に対して支持は集まらなかった。とくに七〇年代に入って、その一部が企業爆破事件を起こし、あるいは内ゲバが頻発するようになると、それは完全に運動の基盤を失い、自壊した」と述べる。こうして、学生運動はその目的を見失い、暴力的な方向性へと身を投じた結果、収拾がつかなくなり、孤立・衰退へと向かう側面が見出される。こうした若者たちの運動という意味では、1972 年 2 月の連合赤軍あさま山荘事件が挙げられる。これは「新左翼運動の悲劇的な結末を象徴」(吉見 2009:2)するものといえる。

吉見(2009:39)は、1960 年代から 70 年代にかけての社会運動について、「3 つの異なるタイプの歴史の主体がせめぎ合っていた」とする。

第一に、大衆的な政治運動の担い手であったこともある労働運動や左翼政党は、すでに高度成長のシステムに組み込まれ、民主的な変革の主体ではあり得なくなっていた。第二に、学生たちの運動は、現実の政治的変革への具体的な展望や回路を失って、理念的な空想の中で自己閉鎖的な過激化への道をたどる。…略…第三に、そうした組織化された運動や若者たちの観念的な運動の周縁で、ベ平連やウーマンリブのような、一人ひとりの個の肯定から出発する緩やかなネットワークが、いくつかの個別イシューをめぐる新しい社会運動のスタイルとして浮上しつつあった(同上:39-40)。

このように、吉見(2009:39-40)は、左翼政党や学生運動のあり方の変質に言及した上で、「一人ひとりの個の肯定から出発する」新しい社会運動のスタイルが浮上してきたと述べた。前章で述べたとおり、学生セツルメント、とくに全セツ連の展開には学生運動および労働運動の展開が大きく関連している側面がある。その意味で、学生運動の展開を取り上げたが、学生セツルメントの場合、上述した「過激化」の動きとは一致しない側面が大きい。そのため、次節では、1966－1973 年における学生セツルメントの動向を通し、その立ち位置や思想についても検討を深めたい。

第２節　全国における学生セツルメントの動向―全セツ連の方針転換―

１．安保闘争前夜―1968～1969 年を中心に―[4)]

1966 年、セツラーが全国で 1 万人を超えたとの記事[5)]が出るなど全国に広がったセツルメントは、本期に入っても「要求」という視点に基づき、各地で多様な実践を展開した。一方で、進学率上昇に伴う大学の「大衆化」(高島 1968:32)、地域福祉・在宅福祉への注目、ボランティアの広がりなどを背景として、全セツ連の方針はそれまでの平和運動や労働運動への志向性が高いものから、学生自身の学びの場、人間形成の場としての意義づけを明確化する（岡本 2019)。その意味で、本期の全セツ連の動向を集約すれば、1960 年以降の流れを継承し、より具体化していく段階といえる。だが、1970 年前後を境としてやや状況は異なる。その意味で、1968－1969 年を中心に当時の全セツ連の議論や特徴について論じる。

住吉セツルメント(1976)では、1969 年の第 19 大会にあたり「革命的に介入」し「全セツ連解体」を叫ぶセツラーがいたと記されている。これは、城北セツル、青葉セツル、森ケ崎セツル、馬淵セツル[6)]などのセツルが全セツ連のボイコット等を確認し、分派会議の必要性を強調したものであったが、全国のセツラーから糾弾されたという。ここから、前章および本章第 1 節で確認した学生運動の分派との関係や学生運動の状況の反映が見出せるとともに、学生セツルメント内部においても分裂しうるおそれがあったこともわかる。なお、この記述は前章第 2 節で言及した「全学連の主流派・反主流派の影響が全セツ連にも反映されて」いたとの語りとも重なる。これは、1966 年当時の全セツ連大会においてセツル活動は地域から学ぶ活動だという主張と、セツル活動では安保は破れないとする分裂派があ

り、全セツ連はどちらを認めるかという議論の中で分裂派が「袋叩き」のような状況になった、という語りである。これらをふまえれば、全セツ連としては当時の「過激化」とされる学生運動の展開とは異なる立場をとりながらもその影響は大きく、単一のセツルメントではさまざまな立場があったことが垣間見られる。

次に、当時の実践領域や議論の内容からその特徴を知るために、1969 年 8 月 4〜6 日に東京大学駒場キャンパスで行われた第 19 回全セツ連大会討論資料の目次の一部を以下に示す。

目次

書記局報告

Ⅰ各分野の活動発展のために

一、児童部活動／二、青年部活動／三、婦人部活動／四、幼児部活動／五、栄養部活動／六、保健部活動／七、法律相談部活動／八、農村僻地での活動

Ⅱ祖国・地域・学園をめぐる情勢を明らかにし、私達の斗いの課題とその方向を明らかにするために

一、平和と独立の課題／二、生活と健康と権利を守る課題／三、民主的な文化・スポーツをそだてる課題／四、地域民主化の課題／五、民主教育を守り育てる課題／六、学生運動とセツル活動

Ⅲ総合的科学的セツルメント活動の発展のために

一、セツラー会議を中心として／二、学習調査活動／三、セツル集団の諸活動について

全国学生セツルメント連合書記局(1969)

第 19 回大会は同年 1 月、安田講堂封鎖が起きた東京大学教養学部の駒場キャンパスで開かれた。討論資料の冒頭、「書記局報告」では、「ここ東大教養学部は…略…民主主義の砦としての大学の姿を全国に提起した歴史的な場」といった肯定的表現が多くみられ、任務として「学生セツルメントが自治会に結集し、学生運動の一翼、一分野として斗う方針を明らかにすること」「日常実践と安保条約破棄の斗いの関係を明らかにすること」などが記されている(同上:1) 。

本資料からは、本期の学生運動の影響を強く受けていること、示されている任務は 1960 年以前のテーゼに退行しているような内容であることなどが指摘できる。しかし、これについては慎重な検討を要する。本資料は、表紙が「基調報告」となっているにもかかわらず、目次では「書記局報告」とされ、中身では「基調報告」が手書きの二重線で消され「書記局報告」と手書きで書き換えられている(同上:1)。さらにいえば、筆者の手元にある 19 回大会討論資料の裏表紙には、「全セツ連第 19 回大会を成功させよう/一部のセツラーの分裂行動を許すな」の手書きの文字が残されている[7)]。これらから、当時の混乱状況が窺えるほか、当時の状況において基調報告とすることは難しく、全セツ連書記局の一部のセツラーによる書記局報告として出されるに至ったと推察される。実際、同資料には、「情勢に見合ったたたかいを組んでいく」の小見出しに続いて、「中央書記局としての方針、とりくみ

を敏速に全国のセツラーにかえし、書記局だけでやってしまうようなことを克服」しなければならないという「弱点」を抱えているとの記載もある(同上:99)。ここから、中央書記局の方針は全国のセツルメントで共有され一致していたわけではないことが見出せる。上記の方針は、現代からみれば、セツルメントの課題として取り組むべきものかという点で疑問があり、観念的で現実の実践や単一のセツルメントの実態に応じているとは言い難い。ただ、書記局員は、ある意味で“熱心に”セツルメントに取り組んだメンバーとして捉えることもでき、社会を変えるために何ができるかを考えた結果としての書記局報告であるという側面もある。当時の社会状況の中で、何かをしなければならないという学生のエネルギーはセツルにおいても影響を与えていた。また、東大闘争に関する書記局報告の言及からは、全セツ連の執行部といわれる書記局の考え方や立ち位置も示されているといえる。

他方、2 年前にあたる 1967 年 12 月に開催された第 16 回全セツ連大会の討論資料には、上記目次のⅡの章、すなわち、「祖国・地域・学園をめぐる情勢を明らかにし、私達の斗いの課題とその方向を明らかにするために」はみられない。また、第 19 回大会と 1970 年の第 20 回大会の討論資料はほぼ同じ目次であるものの、1971 年以降の目次は大きく異なる。ここには、学生である全セツ連役員や書記局員の交替が関わっていると考えられる。以上から、上記目次のⅡにみられる方向性は、セツラーの総意とはいえず、一部のセツラーによって形成されたものだと推察される。これは、「末端は大してテーゼを意識していない。それよりも、生き方論で、地域から何を学ぶか、ということのほうが大切だった」という証言[8)]や、70 年代前半に入学したセツラーから「自分が地域から何を学んだか・何を学ぶか」を大切にしていたことが多数聞かれていることからも裏付けられる。以上から、1968－1969 年にみられる全セツ連の方向性は、学生運動や大学紛争などの社会状況から強く規定された特殊なものだったと推察する。

非常に重要なことは、上述の「分裂派」とされる過激な動きや全セツ連書記局の出した方針は、ごく一部のことであり、大半のセツルメントは地域での地道な実践から学ぶことを意識して取り組んでいたことである。このことは、前章でも述べた、過激な運動を志向するセツラーはセツルメントからは去り学生運動へと「身を投じていった」(山田 2010:34)との指摘とも重なる。

山田(2015b:5-6)は、1960 年代から 70 年代にかけて学生運動が激化し、学生セツルメントもそれに関わらざるを得ないところがあったと述べる。その背景には、学生セツラーのうち、全セツ連や各地の広域連合のリーダーや中心的メンバーの多くは日本共産党員や民青同盟員であったと「洞察」されることが関係しているという。日本共産党は、暴力革命ではなく平和革命を標榜していたが、当時の学生運動では、「『共産』を冠するセクトが活動し、実際に『ゲバ学生』『暴力学生』による殺傷事件さえ起きており、日本共産党の平和革命は暴力革命や叛乱とは違うことを説明するのは容易ではなかった」(同上:6)という指摘である。つまり、学生運動は社会変革を目指し「過激化」していくのに対し、セツルメントは、人格的接触を通し地域での地道な活動から 1 歩ずつ改善を目指すというものであり、「分裂派」「過激派」とされる動きとは質を異にするものであった。また、個々

のセツラーも思想的に一致していたわけではなく、特定の党派に所属する者もいれば、子どもが好きであるとか友人をつくりたい、自身の学びを深めたいなどの動機で入った者もおり、学部もさまざまで、非常に多様であった。こうしたセツルメントの特徴が、1970 年代、学生運動の衰退に比して全国的に広がっていくことにもつながる。この点については次章も含めて論じる。

２．1970～1973 年にみられる方針転換―60 テーゼ以降の継承―

次に、1970 年代前半の動向を論じることで、1968－1969 年に出された方向性が、特殊であったことを論証してみたい。

まず、1971 年 3 月に東京学芸大学で開催された第 22 回全セツ連大会討論資料の目次の一部を以下に示す。

目次

基調報告

各分野の活動の発展のために

1. 児童部／(イ)小学生を中心とした活動／(ロ)中学生を対象とした活動／(ハ)「家庭訪問」「父母の会」の実践を中心として

2. 青年部／(イ)高校生を対象とする活動／(ロ)青年労働者を対象とした活動

3. 栄養部／4. 保健部／5. 法律相談部／6. 幼児部

70 年代の歴史的課題にこたえる総合的科学的セツルメント活動のために

1. ＜70 年から 71 年へ＞／2. 民主教育の課題／3. 文化・イデオロギー／4. 学生セツルメント運動における“総括”の意義と方法／5. 現代の貧困と差別／6. 地域活動／7. 重大化する大学民主化の課題とセツラーの果す役割

全国学生セツルメント連合書記局(1971)

上記目次は、1969 年のものと比較して、「Ⅱ 祖国・地域・学園をめぐる情勢を明らかにし、私達の斗いの課題とその方向を明らかにするために」の章が削除されているなど、大きく異なっていることがわかる。興味深いのは、基調報告の第一章「この一年の運動の前進と問題点」の構成である。「第一節 豊かで力強い地域実践の発展」「(一)日常実践の深まりと巾広い発展」「(二)日常実践を基軸に地域運動の発展」(同上:2、3、9) となっており、地域実践や日常実践という言葉が目立ち、実践の内容についても詳述されている。ここには、学生運動から地域実践への回帰、もしくは生産点論から 66 テーゼへの回帰ともいえる状況がみられる。次に、71 年以降の方針や議論について、概略を述べる。

1972 年の 24 回大会基調では、2 本柱に、「①民主的学生活動としての側面と地域運動としての側面を組織的に統一させることを基本として、それと共にセツルメント活動が学生運動、地域運動のそれぞれの面における組織的安定と確立を克ちとること」、「②セツルメント運動を貫く大原則として、“学ぶ”機能を定着させること、“学ぶ”ことを基本に据え

たセツルメント運動を確立すること」を提起した(全国学生セツルメント連合 1972:7)。

さらに、1973 年 5 月の 26 基調では、学生セツルメントの社会的性格が示される。それは、「学生の基本的要求であり社会的責務でもある学ぶ要求と権利を基礎に、現代日本の社会諸矛盾の縮図[9]にほかならない地域にかかわり、地域の人々の要求実現と私達セツラーの自己形成を統一的にめざす社会的実践を通じて、社会の課題にまで自らの要求と課題を高め、地域の人々の立場に立って生き方と生き方を支える力を学ぶ学生の民主的自己教育運動である」(全国学生セツルメント連合書記局 1973a:9)というものである。そして、地域実践の性格について、次のように述べる。「地域実践とは、私たち学生が自己形成していく方向と内容が具体的に凝縮されている過程であり、地域への意識的な働きかけを通して、地域に具体的諸相を伴ってあらわれている現代日本のかかえている歴史的社会的課題を、私たち自身の課題として学びとることができる性格をもっています」(同上:13)。同時に、地域実践は、地域問題の一定の解決につながるという意味で、「地域的社会的基盤に基づいた国民的な運動の一翼を担える可能性をもった活動だといえます」とも述べる。そして、学生にとっての地域実践は、「真に住民の側に立って」、「住民主体の原則に基づいて具体的な実践課題」に取り組むことで、「私たち自身が真に歴史的社会的課題を担える主体として形成していくことが可能になるといった関係にある」、と位置付ける(同上:13)。

26 基調の社会的性格では、地域実践を通して地域や社会の課題を知ることによって、人間形成、および「国民的運動の一翼」にもつながるという位置づけをしている。こうした 1970 年代前半にみられる地域実践の重視、学生の主体形成や人間形成の強調は、本期以降にも引き継がれることになる。

学生運動の動向、大学の「大衆化」、地域福祉・在宅福祉への注目とボランティアの広がり等といった本期の社会状況の中で、学生セツルメントは、従来とは異なる独自の方針を打ち出し組織の維持・拡大を図ることが課題になっていたと推察される。そうした中での模索が、上述の展開に現れているといえよう。同時に本期の基調からは、学生セツルメントにおける「学び」を具体化していく方向もみられる。

また、大学の「大衆化」とされる大学生をめぐる変化に関連し、北海道どんぐり会(1968a:15-17)では、米価や公共料金、授業料、下宿代などの値上げによる生活困難、カリキュラムの厳格化や取得単位数の増加などが相まってサークル活動が保障されないなどの状況が生じているとする。そして、大学生と「同じような状況が地域にも起きているのを私たちは活動の中で見てきました」(同上:16) と述べる。その上で、生活のために親が出稼ぎに行き子供らだけが残され、農民も夜遅くまで働いているがそれでも生活の保障が困難となっている農村の実情など、事例を挙げて論じている。つまり、大学進学率が上昇し、大学生が一種の“エリート”ではなくなる中で、学生自身も生活者として、地域の問題をより身近に自分の問題としてとらえられるようになってきていることがわかる。以上から、1970 年代前半には、住民を主体とした地域実践を通して学生自身が学ぶという側面が強調される方針への再転換がみられるが、同時に、地域実践を通して地域や社会の現実を知ることで、暮らしや生活をよりよくする運動につながる側面も有していたといえる。

では、本期の方針転換は組織構造にどのような影響を与えたのだろう。以下で検討する。

３．方針転換と組織構造

1969 年の第 19 回大会の討論資料によると、1966 年の第 13 回大会の加盟セツルが 32 であり、3 年後の 1969 年に表 4－1 で示す 51 セツルに増加したという（全国学生セツルメント連合書記局 1969：98）。上記で確認したとおり、本資料についてはその時代背景も含めて慎重に検討する必要があるが、これに基づくならば、学生運動の動向と全セツ連の動向が密接に関係する 1966 年から 1969 年の間に新たに 19 ものセツルができ、その数だけみると組織としては“拡大”しているといえる。ただ、1965 年の入学で、全セツ連大会にも出席していたセツラーからは、当時の学生運動の活発化に伴い、「どんどん連合ができていたが、活動家の絶対数に比べたら中身がなかった」こと、「開店休業状態」だったとの語りもある。そうした連合が新たにできる動きに呼応して単一セツルメントが増えたという推察ができ、単純に“拡大”とは言い切れない。そのため、表 4－2 において、1973 年 8 月の第 27 回大会時点での全セツ連加盟セツルを示し、比較を試みる。その際、第 27 回大会時点では名前のないセツルメントを表 4－1 で斜体とし、第 27 回大会時点で新たに名前のあるセツルメントを表 4－2 で太字として示す。なお、第 27 回大会は、学生セツルメントの社会的性格が示された 26 回大会の次に開催された大会で、本期の最後にあたる 1973 年の開催である。

北海道	あらぐさ、札幌、ズンガリ、どんぐり会、*まつぼっくり*、*日新*
東北	青山、秋田、宮城野、中江、鹿野、*幸町*、仙台保健部
関東	寒川、氷川下、中野、亀有、八千代町、*堀之内*、*森ケ崎*、坂下、大原、*若葉*、城北、十条、代沢、北鹿浜、*小岩*、塩浜、*大橋*、*菊坂*、*にじのこ*、川崎、清水ヶ丘
北陸	*舟江*、あかつき
東海	井戸田、ヤジ江、トロッコ、島田一ツ山
京都	屋形町、マンモス、高瀬川
大阪	夕陽丘、猪飼野、住吉、日東、*馬淵*
中国	岡山
九州	*福岡*、熊本

表 4－1　第 19 回大会時点の全セツ連加盟セツルメント（全国学生セツルメント連合書記局（1969：102）をもとに筆者作成）

北海道	あらぐさ、札幌、ズンガリ、どんぐり会、**どんぐり**、**どろんこ**、**じゃがいも**、**山の子**
東北	青山、秋田、**北上**、宮城野、中江、鹿野、仙台保健部、**追廻**

関東	寒川、**こぶし**、氷川下、中野、亀有、八千代町、坂下、大原、城北、十条、代沢、北鹿浜、**一之江**、塩浜、**ぐみの会**、**境南**、**幸泉**、**大泉**、川崎、清水ヶ丘
北陸	あかつき
東海	井戸田、ヤジ江、トロッコ、島田一ツ山、**町ッ子**、**大根**
京都	屋形町、マンモス、高瀬川、**岩本**、**鴨川**
大阪	夕陽丘、猪飼野、住吉、日東、**東淀川**
中国	岡山、**神戸大**
九州	熊本

表4－2　第27回大会時点の全セツ連加盟セツルメント（全国学生セツルメント連合書記局(1973b:110)をもとに筆者作成）

1969年から1973年にかけて、13のセツルの名前が消失し18のセツルが新たに増え、1973年段階で、全セツ連加盟セツルは56となる。ただし、全セツ連の加盟から抜けたとしても、活動がなくなったとは限らない。例えば、1961 年頃に設立した[10]堀の内セツルメントの創部50周年記念誌によれば、「1970年代半ばから、子供会自身のアイデンティティをどこに置くのか、部員の間で模索が始まって」(前田2010:2)いるとし、1973年の「地域に根ざした子供会活動を中心にサークル員の多面的要求実現を追求する」という方向を、新入生ガイドブックを引用して示している(同上:2)。その上で、「呼称に転機が訪れる」のは、1970年代後半から80年代前半にかけてであるとされる。背景について、次の記述がある。「1970年前後の『大学紛争』が沈静化しつつ、大学生の政治離れが確実に進行していきました。…略…就職活動の際にセツルメント運動にかかわっていることがいい影響を与えないといった風評が、名称変更の背景にありました」(同上:2)。こうした経緯から、全セツ連加盟セツルからは名前がなくなったものの、その後も「堀の内セツルメント立教大学子供会」として活動を続け50周年記念誌を発行するに至っている。堀の内セツルメントの例からも、本期の社会状況や全セツ連をめぐる状況を背景として、全セツ連やセツルメントからは距離を置くかたちで活動を継続していった例があることも推察される。

関連して、1971年に東京大学に入学したOSからは、法学部を中心として1970年頃に全セツ連非加盟の「おにっこセツル」が誕生し、バタヤ部落で地域実践を行っていたとの証言もある[11]。大会への参加や実践記録の作成などがなかったとの記憶であり、現段階で資料は見出し難いが、このOSは、先輩から「セツルをやらないか、大事なことは現実で、現実から学ばなくてはいけないのではないか。法学部に入ったなら労弁を目指すべきではないか。そのためには現実を知るべきだ」と誘われたという。また、「現実から学ばないといけない」「矛盾に満ちた社会の実態から目を離しちゃいけない」という思いがあり地域実践を行っていたとの語りもあった。これらから、全セツ連非加盟とはいえ、学生セツルメントとしてのアイデンティティをもった活動であったことがわかる。このおにっこセツルには、東大のほかに、学芸大、中央大、明治学院大、青山学院大、文化女子大、と幅広い大学が参加していたという。これらの例からも、全セツ連とは距離を置くかたちで活動を

していたセツルメントがあったといえるだろう。

加えて、先に言及した「どんどん連合ができていたが、活動家の絶対数に比べたら中身がなかった」「開店休業状態」との語りに基づくならば、セツラーの減少や「中身がない」ことによる自然消滅なども消滅の理由に挙げられると考える。

他方、新たに 15 のセツルが増えている点については、既存のセツルメントが未加盟から加盟となる例や分離して新たに設立される例がみられる。例えば、表 4－2 のうち、北上、はらい川、こぶし、大泉、町っ子などは、上述のおにっこセツルのように未加盟であったが、全セツ連書記局の「セツラー拡大により一層の援助をし、未加盟セツルに加盟への援助を強める」(全国学生セツルメント連合書記局 1971:94)という取り組みを背景に加盟セツルが増加したと推察される。また、北海道大学のどんぐりや島田一ツ山から分離した中京大学の大根セツルメントなど、元のセツルから分離し新しく設立している例もみられる。他方で、「明学大、駒沢大、ICU、大東文化大などから『セツルを作りたい』という連絡」(同上) があったとの記録から、自主的なセツル結成の動きが広がっていたことがわかる。

これらをふまえると、1970 年代前半の方針転換に伴い全セツ連の構成セツルが大きく変わることで、その内実も変化していく側面が見出される。地域住民を主体とした地域実践を通してその現実から学生が学ぶという本期の方針に共鳴するセツルメントが新たに加わることで、組織の性格も転換していくと考えられるためである。同時に、全セツ連にとって、1960 年代後半の大学紛争の影響からの加盟セツル減少は深刻な事態であり、積極的に拡大路線をとったことにより、より多様性をもつ組織に変わった側面も指摘できる。組織拡大の背景については、後述の論で深めたい。

では、本期において各地域の連合では、どのような展開があり、全セツ連の動向とどのような関係性にあったのだろうか。次節で検討する。

第３節　各地域における連合組織の展開―大阪と愛知を中心に―

本期は、各地で連合の動きが活発化する時期である。いくつかの例を示してから、本節では関西と愛知を中心に論じる。

１．各地の連合組織の活発化

まず、各地の連合組織について、概略を述べる。関東の地域連合の動きとしては、1967 年段階で、関児連、関青連という名称で、児童部や青年部の集まりがあったことが垣間見られるが、関児連は 5 セツル 14 名の参加、関青連は情勢のきびしさに伴い活動が困難な状況にあることが記されている(全国学生セツルメント連合書記局 1967c:54)。また、1969 年、全セツ連書記局の援助もあり、関東交流集会が開かれ、350 名の参加があったという(全国学生セツルメント連合書記局 1969:99)。

そして、第 3 章で述べたとおり、1971 年に関東セツルメント連絡協議会が結成される(全国学生セツルメント連合書記局 1971:94)。また、1973 年には、関東における連合化の動きがみられる。関セツ連(1973:5)では、「関セツ連『連合化』、全セツ連第 27 回関東大会に

向けた関東ぐるみの新歓にー」との見出しの冊子を発行している。その中では、「関東 20 数セツル、1000 余りの Sr.は従来の自然発生的、分散的傾向を関東代表者会議（関代 K と略す）、関セツ連常任委員会を中軸として 12 月集会、26 回大会へのとりくみを通じて克服してきました。今、関セツ連の『連合化』が具体的な展望となってきています。」と記述されている。しかし、その後「関東セツルメント連合」としての資料や大会開催は筆者の資料収集及び聞き取りの範囲では見出せない。これについては、第 3 章でも言及したが、連合化は社会を変えていく流れにシフトしてしまうもので間違いだったという声があり、ゆるやかな組織でよいとの考えから関東セツルメント連絡協議会の名称を用いていた、という語りがある。この語りに基づくならば、関東において連合化の議論はあったものの、結果的には連絡協議会の名称で継続していくことになったと考えられる。また、関東の場合、上記引用からもわかるとおり、セツラー数が非常に多く散発的な動きはみられても、関東の単位で結束して連合組織を展開していくのは困難であったと推察される。

このほか、北海道セツルメント連合は、1967 年 12 月に開催された道セツ連大会で、12 セツル 500 名が参加するなど、大きく広がりをみせていたことがわかる(全国学生セツルメント連合書記局 1967c:53)。また、仙台セツルメント連合では、「ニュースの復刊、朝鮮学校の訪問、各セツルを写真で紹介したパネル展示など」多様な活動がなされていた(同上)。

２．関西セツルメント連合から大阪府学生セツルメント連合へ

（１）大阪府学生セツルメント連合への「発展的解消」とその背景

関西の組織動向としては、関西セツルメント連合結成から 6 年後の 1968 年、関西セツルメント連合を「発展的に解消」し、大阪府学生セツルメント連合(以下、阪セツ連)が結成されることとなった(住吉セツルメント 1975a:24-25)。阪セツ連の加盟セツルと構成大学は、以下の通りである。

結成時より加盟…住吉、夕陽丘、猪飼野、日東
○住吉…府立大、女子大、大谷
○夕陽丘…社大、外大
○猪飼野…教育大、関外大
○日東…市大、キリ短、関短
○東淀川…第 4 回大会より加盟。関大、成蹊、金蘭
○衣摺…第 6 回大会より加盟。（日東より独立）近大、樟蔭、東短（東大阪短大）
○庄内…未加盟（1974 年、猪飼野より独立。）阪大
○馬渕…結成時より 1969 年に消滅するまで加盟。府立大、市大で構成(同上:25)

関西セツルメント連合の「発展的」解消と阪セツ連の結成に至る経過と意義については、「関西のセツルをさらに発展させていくためには一つ一つのセツルが自主的に発展していくことであり、そのためにも相互の日常的経験交流が多様な形でなされていく事が最も重要な斗いとして一般セツラーの要求の高まりとなって」（大阪府学生セツルメント連合 1968:1)きたこと、「その斗いを積極的に押し進めていく上で、京都の組織化と発展、京都・

大阪を中心とする学生運動の一翼としての役割り、キョリ的に近い方が有利などという理由から」(同上:1-2)と述べられている。

しかし、「発展的」解消の内実は、関西セツルメント連合の実態と密接に関係していたことが聞き取りから推察される。1965 年に大阪教育大学に入学し猪飼野セツルメントに入った G 氏は、住吉セツルと猪飼野セツルの先輩から声がかかり、2 回生から関西セツルメント連合の委員長になった。しかし、1966 年時点で大会などはなく、実態も不明で、拠点もない状況で、組織的に選出された関西の連合と呼べるほどの内実はなかったという[12)]。名前だけで実態がない状況に対して、「実態をつくらないといけない」と考えた。当時、京都―大阪間の交通費が保障されない負担もあり、「関西では広すぎる」、「日常的に交流できるエリア」にしよう、「もうちょっと地域に即した組織にした方がいい」という考えから、大阪府下に変更することとなり、1967 年、大阪府学生セツルメント連合の結成へと舵を切ることになったという。全セツ連書記局の承諾を得られたこと、学連も大阪府学生自治会連合会として府の単位であることから、セツルも阪セツ連として初代委員長に猪飼野セツルメントのおはぎ[13)]が就任し、1968 年から新たにスタートを切ることになる。なお、「発展的解消」という言葉は、後付けであり、阪セツ連結成当初のものではないという。

阪セツ連委員の構成としては、委員長、副委員長、事務局長、書記局長、会計があり、その下に複数の書記局員がいるという構成であった。阪セツ連では毎年、大会と交流会がそれぞれ 1 回ずつ開催されており、それらに向けた情勢討論や活動報告、スケジュール確認のために各セツルの書記局員を集めた会議が大阪教育大学の天王寺分校において毎週行われていたという。さらに、書記局員の会議の前には常任委員の会議が週に 2 回持たれており、非常に多忙であったことがわかる。とくに、大会や交流会前は実践報告や討論、資料作りがあり、メンバーで雑魚寝をして布団にもぐり込んで話し合うような伝統があったという[14)]。なお、この多忙さは全セツ連の委員においても同様か、それ以上であった。

（2）阪セツ連における議論と特徴

次に、阪セツ連での議論について、とくに大会の基調報告を用いながら概観し、全セツ連やほかの連合との比較を試みる。1968 年の阪セツ連第 1 回大会の基調報告(大阪府学生セツルメント連合 1968)では、1966 年の全セツ連大会で確認された学生セツルメントの基本的性格をふまえ、「『地域変革か自己変革か』というアレコレ式(※傍点ママ)の一面的な活動の理解の仕方から地域住民の要求の積(※極:筆者補足)的な発展過程とセツラーの要求の発展過程の実践的統合の過程とそれを担う主体としてのセツラーの位置がセツラーの自己変革として把握」(同上:2)され、貴重な指針となったと述べている。また、阪セツ連の基本的役割として、「①各セツルの実践の集約と日常的活動を保障[15)]する役割②地方連合として全セツ連に結集し全国のセツルとの実践交流を保障する役割り　そのための全セツ連の基調の意識的な集約と具体化③府下の大学にセツル・セツラーを拡大する役割り④民主的団体及び個人との連絡、協力を保障する役割り」(同上:3)が挙げられている。阪セツ連発足時の性格は全セツ連の下部組織的色彩が強いことがうかがえるが、一方で、大阪府においてセツルメントの連合組織が結成されたことによって、より地域実践の報告や交流が深められやすくなった点もあるといえる。後者について少し述べると、全セツ連の基調報告は、社会情勢から始まり理念や理論等抽象的な話題が非常に多く、各セツルメントの

報告は別の大会用レポートにまとめられていることが多い。とくに、阪セツ連結成時期にあたる 1960 年代後半はその傾向が顕著である。しかし、阪セツ連の第 1 回大会基調報告では、前半に方針や社会情勢、活動の現状と問題点及び課題が述べられている点では全セツ連の基調と同様の構成であるが、活動の現状と問題点及び課題の部分においては、実際の阪セツ連加盟セツルの活動から感じたことを問題点や課題に落とし込んでいる。続く部別(児童部、中学生会、青年部)の報告においても各セツルメントの活動状況の報告に触れている。また、父母会活動、生活と健康と権利を守る問題、部落問題や朝鮮人問題についても言及しているが、生活と健康と権利を守る問題をのぞく全てにおいて、実際のセツルメント活動からその問題意識を述べている（同上)。このように、各セツルメントの活動内容に応じた報告や議論がなされており、各セツルメントでの地域実践を重視していた点が特徴の 1 つといえるだろう。

また、阪セツ連では、府知事選への取り組みをすすめていたことも特徴に挙げられる(阪セツ連常任委員会 1978)。これは、次章で述べる 1970 年代後半も含め、各セツルでも取り組まれてきたものである。例えば、大阪府立大学セツラー会（1975:10)では、「何故府知事選を考えなければならないのか『府知事選を考えることが、セツラーに何を生むのか』」から議論がなされ、黒田革新府政支持の決議と支援を話し合いの中で決め、「黒田支持決議のタテカンを作る事、学生向けのビラを作る事を確認」(同上:11)している。ここには、セツルの活動と政治課題の結びつきについて話し合いの中で確認しながら、共通認識を持って取り組まれた過程が見出せる。ただし、この話し合いの参加者は 9 名であり、関心のある者が参加していたと考えれば、一面的に共通認識と言い切ることはできない。だが、「今まで、セツルメントで政治課題を考えるのはおかしい、反発を感じる、と言っていたセツラーが、積極的に政治課題を考える姿勢に変わったという事である。それは、セツルの理念、一言でいうならば、地域実践、学内活動を通じて、民主主義を学び、それを発展させる事を追及する中で必然的に出てくるものであろう。また、セツル活動を地域にだけに目を向けたものではなく、こうした政治課題を大学民主化の一貫として、セツルに課されたものだと認識できたことだと思う」(同上:12)との評価もなされており、話し合いを通してセツラーの中に意識変化がうまれたことも窺える。

３．愛知県における連合結成

本期の阪セツ連の動向は、愛知における連合の動向とも重なっているといえる。阪セツ連結成の 1968 年、愛知でも愛知県学生セツルメント連合(以下、愛セツ連)が結成される。その経緯について述べる。

1966 年、井戸田セツル、ヤジエセツル、柴田セツルなどの交流の場として、名古屋南部セツルメント協議会が結成された(おおねセツルメント 1973:3)。実践交流会が開かれていたが、「協議会であること、名南セツル員[16]の問題もあって全 Sr の要求を共にしていない。情勢についていけない。」等の問題があり、1967 年 7 月、名古屋南部セツルメント協議会から愛セツ連結成準備会がつくられ、数十回の会議を経て 1968 年 9 月 17 日に愛セツ連結成大会が開かれる(愛知県学生セツルメント連合書記局 1971)。

結成大会では、「平和と民主主義を守り、地域住民の福祉向上と学生の自主的民主的学問研究を目指すことを理念とする」ことが確認された。これを基本理念し、その目的は「加盟セツルの経験交流とセツル・Sr の拡大」とされた。同時に、1968 年 12 月の第 18 回全セツ連大会の名古屋開催に向けて、活動や連合の強化が図られた。1969 年 2 月の方針では、「日常実践活動・全国のセツルメント運動の方向性ということから地域住民のニードの発掘と地域ぐるみの運動の要求・地域拡大の追求」や、「福祉大の民主化の果す役割、単セツ指ド教化・組織強化」などが挙げられた(同上)。

結成大会時の構成セツルは、日本福祉大学のヤジエ・井戸田と、島田一ツ山セツルメントであった。島田一ツ山セツルメントは、島田一ツ山連合協議会という夏季学童保育を土台としており、1968 年の夏、カギッ子対策として学童保育実施が決定されたことが背景にある。「セツルへ要請がき、地域拡大を考えていた日福大のセツルでは、これを受け、井戸田セツル、ヤジエセツルの在名セツラー七名（部落研一名を含む）が指導員として地域に入り」始まった（おおねセツルメント 1973:3）。

その後、1973 年時点では、日本福祉大学を主としたヤジエ、井戸田、トロッコ、島田一ツ山と、愛知大学を主とした町っ子、そして島田一ツ山で活動していた中京大学セツラーが分離して結成した大根セツルメントの 6 セツルから構成されることとなる(全国学生セツルメント連合書記局 1973b:110)[17]。

1971 年発行の「愛セツ連のあゆみ」は、第 3 回愛セツ連大会(1969 年)から第 5 回愛セツ連大会(1970 年)までの活動について次のように位置づける。「今迄のセツル活動は地域実践を重視するあまりに、極端な場合は『分からないことは地域へ行けば分かる。』と言われていた活動から学内における講演・ゼミ・クラス・他サークルとの関連をはっきりさせて、更には先生たちや専門機関とも提携しながら地域での現状をより科学的に分析し、学問的に追及すると共に現実的に解決していける活動にと発展してきている」。そして、「セツルメント活動の発展と同じく学生運動そのものも…略…学生が斗うことと学ぶことを統一させてゆく事と、…略…広範な労働者、市民と共に考えてゆくことが非常に大切である事が認識されてきた」(愛知県学生セツルメント連合書記局 1971)と述べる。

これらから、愛セツ連の特徴は、主に次の 3 点が挙げられる。第一に、日本福祉大学を中心とした結成であること。それに関わって、第二は、加盟セツルは、単一もしくは限られた大学で構成されたセツルメントであること。他の連合では、いくつかの大学から一つのセツルメントが構成されていることが多く、さらに、複数のセツルメントによって連合が成立していた。しかし、愛セツ連の場合、1973 年時点で日本福祉大学から成るセツルが 3 分の 2 を占める。結成当初の理念にみられる「地域住民の福祉向上」といった社会福祉的視点や、「福祉大の民主化の果す役割」との記述からも、その影響は垣間見られる。他のセツルに関しても、愛知大学や中京大学など、限られた大学での構成が多い点が特徴といえる。第三に、学生セツルメントを学生運動の一部として位置付けている性格が明確であることが挙げられる。全セツ連において地域実践重視への再転換が図られる 1971 年、愛セツ連では、学生セツルメントと学生運動を並列して論じ、地域実践を重視しすぎる傾向に

は否定的であることが上記引用から垣間見られる。

以上から、愛セツ連は全セツ連と親和的な性質を有するが、より学生運動としてのセツルメントの位置づけが明確であるといえる。また、結成時の理念や方針に「地域住民の福祉向上」「福祉大の民主化の果す役割」を挙げるなど、社会福祉的視点が強いことから、連合といえども圧倒的多数を占める日本福祉大学が強い影響力を持っていたと考えられる。

本節で述べてきたとおり、1968 年前後、各地で連合が新たに結成されるなど連合の活動が活発化する状況がみられる。これについては、当時の OS への聞き取りの中で、学生運動の活発化に伴い、「どんどん連合ができていた」時期であり、「むやみに連合組織を作らないようにという指導があった」との旨が聞かれた。こうした学生運動の高まりのとの関連の中で、阪セツ連や愛セツ連の結成につながっていると推察される。ただし、その性格は、阪セツ連が、より「地域に即した組織」を志向し、実態のある実践交流の場としての結成であったのに対して、愛セツ連では、多数派を占める日本福祉大学の影響が強く福祉的視点と、同時に学生運動としての位置づけを強調する視点が強かったといえる。この学生運動の側面に関して、少し補足する。例えば、島田一ツ山セツルでは、「1970 年 9 月～11 月　民主化斗争に大きく貢献」したとして学生会の選挙にセツラーを出し「定員 19 名を全員当選させた」ことが記されているほか、「1971 年 5 月～6 月　トロツキストが学生会室を暴力的に占拠」という事態があったことも記されている。そこでは、「中京大のセツラーは、ライト室を部室がわりに使っていましたが、そこも彼らにのっとられ、登行すら危い時期が続きました。しかし、セツラーは、学生会の定義する抗議行動・集会に参加し、傷つきながらも不屈に斗いぬきました」とある。なお、この間、「実践も地道に続け」た旨も記されている(おおねセツルメント 1971:3)。上述の「学生会」については、中京大学学生会執行委員会(1971)が「暴力集団「全共斗」一派のテロ・リンチを許すな！」と呼びかける内容のビラもヤジエセツルメントの部室に保管されている。これらから、愛セツ連の、学生運動における立ち位置も窺い知ることができる。そしてこれは、大学の特徴や政治的なイデオロギーとも関連していると推察できる。

これまで、学生セツルメントの組織構造やその展開について論じてきた。次節で、それぞれの連合に所属するセツルメントの地域実践について検討する。

第４節　単一のセツルメントにおける実践

１．阪セツ連所属セツルの実践―人間形成・地域との連携の視点から―

（１）住吉セツルメントの子供会実践[18)]

上述のとおり、本期は、1960 年代後半から 1970 年にかけての学生運動の高まりに呼応する方針が出される時期を含むものの、大きくは、地域に働きかけ、社会の現実や人々の生き方から学び、自身らの生き方を追求するという方向性が明確になる。それは、運動の主体としてではなく、実践から学ぶサークルとしての位置づけへと変化していることも意味する。このように、実践を通して学ぶことが方針になってくるなかで、個別の実践ではど

のようなことが行われ、セツラーにはどのような思索があったのか。実践事例から検討したい。なお、阪セツ連は、多様な大学・学部のセツラーが所属する多くのセツルメントから構成されていたが、本項ではこれらの点に注目するため、住吉セツルメントの実践の一部を取り上げたい。

当時、大阪府立大学、大阪女子大学などから構成された住吉セツルメントは、1970 年から新今宮地域へと実践地域を移す。この地域は、屋台業や日雇い労働などの不安定就労者が多く、路上で寝ている労働者が多く見受けられた。また、住居も 4 畳一間に家族全員が寝起きし、水道やトイレは共同使用といった状況であった（住吉セツルメント 1970a:8)。

本節では、小学校低学年パートの K[19]という少年の記述を中心に取り上げ、新今宮地域での実践を通してセツラーが考えたことを知る一助としたい。

K の提案で陣取りをはじめた部分から引用する。

> 途中で K がおぶっている赤ちゃんが泣き出したので K がぬけてしまった。“ぼく土曜日[20]が一番おもしろいんや”という彼のことばにもっとＳｒ[21]は確心して子供たち(※に:筆者補足)働きかけていくべきであろう。
>
> ふだんは赤ちゃんおぶっているため、あそべない彼。小学生なのにあまり学校にもいけず、特殊学級に最近入れられた。K。
>
> 夜出かけ、親はきれい、子供はドロだらけというあべこべのこの私達が入っている都市スラム、愛隣地区。もっともっと家訪をして地域の現実を目でたしかめる必要があるでしょう。
>
> （住吉セツルメント 1970b:6)

赤ちゃんをおぶっても陣取りに参加していた K は、セツルメントの実践日である土曜日が一番面白いと発言する。その中に、セツラーは、「遊びたい」という K の要求を見いだしている。また、同資料では、実践内容や総括をふまえ、「今後の方針」が記載されている。その中の、「①子供のおかれている状況を知る。分析。」という項では、子どもをめぐる情勢として、「赤ん坊をお守りしているため、自由に遊べない K」「夕方になるとお母さんが出ていくため、500 円もらって店で夕食をすませる」姉妹のこと等が挙げられている（住吉セツルメント 1970b:15）。この他に、父母との結びつきを深めるための家庭訪問、子供の要求を実現できる遊びの開発や地域の歴史、性格を検討し、地域を理解すること等も今後の課題とされている（同上）。

1974 年に入学し新今宮地域で活動していたセツラーは、「地方から出てきた人たちが日雇いをしやすいように日払いのアパートに住んでいた。子どもたちは、小さい子どもを背負って共同の炊事場で洗い物をしていた。そんな所に子どもがいるのが不思議で、こんな所があるのだと知った。」「日払いなんて、セツルに入るまで知らなかった。生活を知った」等と語る[22]。

このように単一のセツルメントでは、地域から学び、何ができるのかを模索し実践が創られていった側面が見出される。

（2）夕陽丘セツルメント幼児パートの実践―地域住民との関係に着目して―[23)]

本期は、地域実践から学ぶことに加え、1973 年の基調報告にみられるように「住民主体の原則に基づいて具体的な実践課題」に取り組むことなど、住民主体の強調がなされていた。本項では、夕陽丘セツルメント幼児パートの実践記録を取り上げ、母親や地域住民の主体形成、および地域との連携や自治との関連から検討したい。

夕陽丘セツルメント(1972)[24)]では、大学祭である社大祭、ハイキング、ヤキイモの実践、クリスマス会、廃品回収の 5 つの実践を中心にまとめている。そのうち、ハイキングとクリスマス会を中心に取り上げる。

ハイキングは、5、7、11 月に行われ、参加希望の母親も一緒に行く。最初は自分の子や近所の子を心配しての同伴で、セツラーともあまり接する機会がなかった母親らも、回を重ねるごとに積極的な参加がみられるようになったという。続く文章を引用する。

> 11 月のハイキングに参加された A[25)]の母は、母子 2 人家族で、日頃は仕事に忙しく、A と遊ぶ時間などほどほど(※ほとんどの誤字と推測:筆者注)ない。家訪[26)]に行っても、いらっしゃらないことが多く、セツラーともあまり話す機会などなかったが、「11 月のハイキングは北千里公園に行ったらどうですか。」とお母さんのほうから、積極的に言ってこられた。日ごろ、子どもとの触れあいの場が少ないのを、お母さんも痛感しておられ、ハイキングでは、子どもといっしょになって、服のよごれるのもかまわずかけまわっておられた。…略…
>
> また、M のお母さんは、「家庭から解放されて、はねをのばしたい、おもいきり動いて、やせなければ…。」といって、ハイキングに参加された。
>
> T のお母さんは、セツラーと冗談やアホなことを言っては、終始、笑いがとだえなかった。
>
> お母さん方は、ただ単に、子どもが心配だからついてこられるというのではなく、自分自身もハイキングで楽しみたいという要求をもっておられることが、わかった。
>
> 社大祭以来、家訪など通じて、お母さんと徐徐に親しくなり、セツラーはもちろんのことであるが、お母さん自身もセツラーと親しくなりたいという気持ちがみられた。そして、子ども会の中に、子どもをぬきにしてお母さん自身が楽しめる場があるのでは…と感じられている姿があった。
>
> （夕陽丘セツルメント 1972:7）

社大祭、ハイキング、ヤキイモの実践と重ねる中で、少しずつ父母の積極的な協力の姿が見られるようになった。その背景には、第 1 回父母会で、「お母さん方が、自分の子供を通して、子ども会に非常に期待をもっておられることがわかった」（同上:11）点が関係しているといえる。そうして、父母・子供・セツラーの三者がひとつになって取り組んでい

こうとするクリスマス会に向け、父母会が 3 度開かれ、クリスマス会実施に向け準備がなされた。

クリスマス会目前の父母会では、10 数名の参加があり、その中では、食事作りについて、「主婦ならではのユニークな意見がポンポン出された」(同上:11)。「全体を通してお母さん方がどんどん話をすすめていかれ、クリスマス会のイメージもうかびあがってきた。セツラーの働きかけしだいで反応してきてくれる積極的なお母さんの姿、セツラーだけに子ども会をまかせておけないというお母さんの大きな力をみた。しかし、父母会に参加されなかったお母さん、特に古い地域のお母さん方をまきこんで盛り上げていくにはどうしたらよいのかという問題は残されたままであった」(同上:12)。

このように地域の母親らが準備や話し合いに積極的に参加することによって、クリスマス会に対するイメージが膨らみ、母親らの役割も明確化された。そして、上記で述べた古い地域と新しい地域の意識の違いについても、以下のような変化がみられるようになった。

「古い地域ではふだん忙しくて父母会への呼びかけにも、あまり応じられないけれど、セツラーの注文には協力的な態度を示される。新しい地域では父母会にも参加され、セツラーへの注文・提案も、ポンポン飛び出すようになっていった」(同上:13)。

さらに、クリスマス会の実施にあたり必要な費用工面のための廃品回収についても、積極的な父母らの姿が記述されている。以下、引用する。

> 廃品あつめでは、持ちきれないほどの廃品を出してくれたり、何もないからと、タンスからハンカチを出してくれたり、新しいセッケンの中身をわざわざ出して箱をくださったり（S 母）、ラベルのひもを人形の髪の毛にでも使ってくれと何百枚も出して、ヒモをはずしたり（T 母）、自分もできる範囲で参加したいという気持ちがうかがわれた。また、食事づくりを分担して行うときも、ソーセージの分担量が少ないと言われたり（K 母）、買い出しのためセツラーの来るのを待っていてくれたお母さん（M 母）の姿があった。さらに、自分は当日参加出来なくて、廃品も出すものもないと、お金で渡されるお母さんもいた。（Y 母）
>
> この中でセツラーは、どんなに忙しい家でも、何らかの形で、自分のできる範囲で子供会に参加したいというお母さんの要求を見いだしていった…略…
>
> （夕陽丘セツルメント 1972:13-14）

そして迎えたクリスマス会当日は、30～40 名の父母が参加され、各コーナーや食事づくりの原動力になってくれ、実に楽しい雰囲気で行うことができたと記述されている。

> とくに、食事づくりでは、ふだん交流のない地域のお母さんが、いろんな話をしながら楽しくなごやかにすすめられた。中には、子供が参加していないにもかかわらず、手伝いに来てくださるお母さんもあった。終始、お母さん方のきびきびした行動で、お母さんのペースですすめられた。ホットドックが出来あがってからも、それを子供たちに渡すのに、

Sr はひとりひとりに配っていこうと考えていたのを、お母さんは、そんなめんどうなことをしないで子供たちにとりにこさせて渡せばよいと言われた。…略…ここで私たちは、子供会は、セツラーだけでつくっていくものでないことが実感された（同上:14）。

その後、以下のような記述が続く。「クリスマス会の食事づくりの中で極めて重要なことが確信された。それは、お母さん独自としての要求―楽しみたい・話したい―という要求の実現できる場がこの中にあったということである。お姑さんの話や旦那さんののろけ話など、ふだん口に出せないことを、はばかりなく言えて、そしてそれに共鳴してくれるお母さんがいること、さらに話し合うことの少ない“若い”セツラーとの対話がそこにはあった」（同上:14-15）。そして、母親らから出てきた話として、コンパの企画や新年会を一緒に開き、子どもをセツラーに交代でみてもらい、母親は楽しもうという提案まで出されたことが記述されている。これについて、「ここでは、もう、子どもと切りはなされたお母さん方自身がもっている楽しみたいとか話したいという要求が素直なかたちであらわれていた」（同上:15）と振り返りをしている。

同資料では、最後に、クリスマス会後の反省点等が記述されている。その中で、クリスマス会を通して確認したこととして 4 点が挙げられている。それは、

「（1）お母さんも何らかの形で子供会に参加したいという要求をもつ。

- 子供のため
- お母さん独自の要求のため

（2）お母さん同志共鳴しあえる場・自分の考えをぶつけられる場がある。

（3）子供会はセツラーだけでつくり得るものではない。

（4）お母さんを子どもの母親としてだけでなく地域の生活人として見ることができた」（同上:15-16）というものである。

こうした父母の積極的な参加姿勢への変化は、セツラーの姿や実践に触発されたものであるといえる。また一方で、セツラーは、そうした父母の姿から様々な学びや視点を得ていることもうかがえる。とくに、セツラーが父母の姿から現実や生活を捉えるとき、そこに「要求」という視点が常にあるということが分かる。

前章で述べたが、それまでの全セツ連の方針は、「地域の組織化」を学生が主体となって進めるという方向が顕著にみられた。ここには、ある種のエリート意識が垣間見られる。だが、実践現場である地域において、学生が指揮をとって地域の組織化をするということは現実的ではない。また、大学の大衆化に伴い、地域住民と近い立場への変化がみられるのも本期の特徴である。それらをふまえると、夕陽丘セツルの実践にみられる地域住民や対象としている人々が主体性をもってその地域の活動に参画していくに至る過程においてセツルメントの活動が一つの刺激になり、ともに地域での活動を作っていった、といえるのではないだろうか。これは、実際に地域に対して指導的立場を取っていたセツルメントは先の生産点論の失敗によって行き詰まりを見せたという経過からもいえることである。労働者を指導し覚醒させるという視点に立つ生産点論は、労働者や地域住民に寄り添うも

のではなく、上から組織化をして運動を進めるというものであり、労働者や地域住民から受け入れられるものではなかった。これに対し、上述の例は地域住民と共に活動を創り出し、その中で主体性が育まれていったものである。ここから、「地域の組織化」という目的は同じでもアプローチの違いによって地域の受け入れが大きく異なること、またそれは、その後の各セツルメントの展開にも大きく影響していることが改めて理解される。子どもたちを対象としている活動であったとしても、地域のなかでの活動であるという意識があったからこそ、母親らの要求に気付き、実践も要求に応じて、地域の父母らとともに創造されていくという展開がうまれていったのではないだろうか。

２．愛セツ連所属セツルにおける実践―ヤジエセツルメント青年会の実践―

本項では、東大の安田講堂閉鎖と同じ 1969 年、ヤジエセツルメントの青年会である竹の子班の実践記録から、当時の実践のようすやセツラーの捉え方をみてみたい。

学生セツルの実践記録では、その多くが冒頭に「地域紹介」から始まるが、ヤジエセツルメント青年部(1969)では、「情勢」から始まるのが特徴的である。社会情勢についての記述の後、青年をめぐって、次のような記述がある。

> ある青年の「会社にはいつもタンカがある」といい、セツラーは「準備がいいなあ」と思っていると、その会社は労働条件が悪く労働災害がひんぱんに起るため、タンカでけがをしたものを外につれだすためのものなのです。そうすると、賠償金が少なくてすむからです。会社に対する不満があっても「組合を作ると会社側がいやがるから、企業主と話し合えばいいではないか」という青年がいるし、「みんな給料に不満があるのでしょう。みんなでなんとか会社側と交渉ができるような組合なんかないの？」「そんなものあるか。」「どうしてブツブツばかりいっていて組織しようとしないの」「バカ、そんなことしたら会社がつぶれてしまうじゃねえか」と、ほとんど不満を感じなくさせられている青年、感じなくなっている青年が多くなっています。…略…「あんたら油まみれになった作業服を着て電車に乗ったらどうする。にげるだろう」「にげないよ」「きたない土を顔につきつけられたらにげるんか」確かにきたない作業服、きたない土がそばにあったら服をよごさないためによけるでしょう。
>
> しかしその青年は、労働者に対する軽べつ、労働者がきたないからさけるんだというように考えているのです。「あんたら、おれたちをモルモットにしている」という発言までもありました。今までの生活の中で、学校を出ていないというところで差別されてきたための劣等感、又差別されてきた資本家に対する怒りがあるのです。
>
> ヤジエセツルメント青年部(1969:2)

上記資料は、書いた人物の主観による可能性があり、セツルとしての見解といえるのか、という点で疑問があるが、セツラーの労働者に対する見方が明確に反映されているといえる。前章でも指摘したとおり青年と関わる活動は学生セツルにおいても大きな位置づけを

もっていたが、上記引用からは、働く青年らに対して一面的な見方にとどまっており、「あんたら、おれたちをモルモットにしている」という発言についても、十分に深めた検討がなされているとは言い難い。なお、こういった発言は、ほかのセツルでも青年から投げかけられた言葉として聞き取りのなかで聞かれた。「学生も労働者も同等」とする一方で、セツルでの実践とは別にセツラー会議がもたれていることが、青年にそのように感じさせた要因だったという[27]。しかし、学生セツルメントの場合、イギリスでのセツルメント創成期の思想にみられるような成人教育、労働者教育というよりも、青年との関わりのなかからセツラーも学ぶという意識がとくに本期では強まっている。それは、「何か教えるのはおこがましい」という語り[28]からも垣間見られる。また、労働者の生活を知ろうと実際に企業の工場でアルバイトをしたセツラーもいた[29]。こうした、青年とともに学ぶという意識は、ヤジエセツルメント青年部でも、同様であった。では、ヤジエセツルメント青年部である竹の子班の本期の実践について、具体的に検討するため、一部を引用する。

6月にはいると会員の友達とか、NHKのテレビ放送[30]もあってか、会社でサークルをつくりたいという青年やオルグ等による新会員が8名加わり、青年が12・13名Sr14名前後で合計30名をこす会となった。…略…

卓球大会は、会員一人ひとりが会をつくってゆくための係の強化が叫ばれている中で、係対抗で行われた。新しい人がずっと休んでいた会員も加わり、にぎやかな応援合戦もあってみんなが生き生きしていた。

会社に運動施設もあり、竹の子でなくてもいつでも卓球のできるN青年は、「卓球はいつやるんだ。」と楽しみにしていた青年の一人だった。

会社で卓球をするのと竹の子でするのと、どうちがうのだろう。…略…

そこでは、青年が要求を出し、みんなでやってゆこうというより、単に卓球をしたいという要求を表面的に満足させられている。また、ただ卓球の設備が目の前にあり、その他なにもすることがないので暇つぶしで卓球をする青年もいる。竹の子には、上下関係はない。初めて卓球をする人も卓球そのものを楽しむことができる。考えない教育をされ、会社ではバラバラにさせられる青年にとって、みんなでする、みんなで作ってゆくということが、N青年を楽しみにさせ、会員一人ひとりを楽しくさせている。それと、スポーツに対する要求を満たすものであったことも、この会を楽しいものにさせた。…略…

若者の夕べ

月一回づつ行われる誕生日会には、スタンツ漫才、隠し芸、自作の歌の発表など創造的取り組みもみられるようになった。レク係でうちあわせ反省会がもたれるようになったし、ゲームの本を研究して、どんどん新しいゲームをもってくる青年が育ってきている。こうして一人ゝが積極的に参加するようになり、自分も回を構成している一人だという自覚がもたれるようになったのだろう。以前はフォークダンスやゲームに加わらない青年が多かったが、そういう人はいなくなってきている。

（ヤジエセツルメント青年部 1969:12-13）

青年たち自身の中に、ともに会をつくっていくという意識がうまれ、自主的・主体的な集団になっていくことがセツルの中での願いになっていた。その中では、集団にどのように働きかけていくか、という視点が意識されていた。実際、年齢の変わらない青年たちとの活動は困難な部分も多く、ヤジエセツルメントでは大学立法の学習会を青年らと開いたときに、青年の現実と大学立法がどのように結びつくのかをうまく説明できなかったという課題もあった(同上:13-15)。また引用した資料は、セツラーの、労働者や企業、社会、政治、教育などに対する見方が反映されている記録であることも否めない。ただ、実践や青年とのかかわりを通して社会をみようとする視点があったこと、青年たちが生き生きとできる集団づくりを意図して取り組むなかで、青年らをとりまく状況を知り、それが大学での机上の学問にとどまらないセツラーの学びになったということは指摘できるだろう。また、青年にとっても会社以外で集まり他者と交流する場になっていたと考えられる。

３．各地の本期における実践

（１）全セツ連における地域実践の評価―全セツ連大会討論資料を手がかりに―

本期の全セツ連の方針は、日常実践と運動との関係を具体的に位置づけていった過程とみることもできる。その意味で、本期の全セツ連は各地の地域実践をどのように取り上げ評価していたのか、は重要な点である。そのため、1971 年の全セツ連大会討論資料(全国学生セツルメント連合書記局 1971)を手がかりに、2 つの実践を取り上げてみたい。

1 つ目は、川崎セツルメントの栄養部における実践である。ここでは、家庭訪問に拒否的だった糖尿病の M さんにねばりづよく働きかけ、郷里の話をしてくれたりお菓子を出してくれたりするようになる過程が描かれている。また、もともとセツラーの運営だった「糖尿病教室」が、「『セツラーばかり任せていないで運営員会をつくりましょう。』という提案が実現」(同上:8)し、始まった「糖さん会」についても紹介されている。会の中心にいるＩさんは、「昔は午後になると柱にもたれかからなければ立っていられないくらい重症」だったが、「セツラーの食事療法を一つ一つ実行して行って、その苦しい斗いのなかで、診療所の人やセツラーと接し、自覚的にほかの人をさそってきたりするように」なったという(同上:8)。そして、「糖さん会」は、「『一生食事療法をしないと直らない』糖尿病の患者さんをお互いに結びつけ、支え合い、励まし合う大きな役割を担っている」とする(同上:8-9)。

その上で、専門部の活動から、「私たちは何を学ぶことができるのかという点を考えていきたい」とし、次のように記している。

> 糖さん会での説明のとき、「ビタミン B1」ということばを平気でつかっていたら「よくわからない。何に入っていて、どんなものか！」という糖さんの声にハッとさせられた栄養部のセツラー。家庭訪問で「カゼひかないための冬の体力づくりには牛乳がいい」とセ

ツラーが話したら、M さんは「なかなか買えなくてねぇー」といいます。失業保健もらいながら一万円の学費を払って体に悪いのを知りながら働かざるをえない M さんのそんな生活を知らなければ本当の栄養指導なんてできないとセツラーは「地域の人の立場に立った」生き方を考え、それを支える自分の専門の学問を考えていこうとしています。

（全国学生セツルメント連合 1971:9）

上記の「糖さん会」の例には、「セツラーばかりに任せて」いる状況に気付き、主体的・自主的に会に関わっていく経過が示されている。また、引用部分については、地域や人びとの暮らしの現実から学び、専門の学問と結びつけながら、現実に活用できる学問の必要性にセツラーが気付いていく過程が示されているといえる。全セツ連によるまとめと評価であるという点に注意は必要であるが、ねばり強い実践、地域住民による自主的な組織化、実践と学びの関係など、方針で理論的に示されている点について、具体例から示していることが窺える。

2 つ目は、北上セツルの例である。第 2 節でも述べたが、1971 年の全セツ連大会討論資料では「日常実践を基礎に地域運動の発展」という項がある。では、日常実践を基礎に発展した地域運動とはどのようなものなのか。「特徴的な実践」（同上:10）を引用し論じる。

「キャッチボール、自転車乗り入れ、禁止。北上市」―いつものように公園にやって来たセツラーの目に映った真白な立て札。「どうして？どうして？」と口々に言い、疑問を投げかけてくる子供たちの要求を、「国体を契機に花いっぱい運動をやっているので、花が荒らされると困るから」というセツラーにとっても納得のできない現実の中でしっかり受け止めました。小さな北上セツルメント始まって以来という子供、お母さん、セツラーが一緒に考え、地域ぐるみでとりくんだ児童公園をめぐる運動はこうして出発しました。

（同上:10）

セツラーは子供たちとの約束で、区長や福祉事務所などに話を聞きに行くが、それぞれに意見が異なっていた。「児童公園は子供達のもののはずだ」と思うセツラーが一生懸命訴える姿をみていた子供たちの中から、「子供たちだけで考えてもダメなんだ。お母さんも考えればいいのに」「区長さんもお母さんのいう事なら聞いてくれるかもしれないよ」という言葉が出てくる。

こんな子供たちの切実なことばを初めて聞いたセツラーは、お母さんにも働きかけ更に地域に入って行きました。子供達とセツラーは更に話し合いを持ち、「公園をどんな風にしたらいいと思っているのか」と討論を進め、「道路で遊ぶのは危ないから公園で遊びたいんだ」「公園を飾りたいのだったら、花壇に金網をはってもらいたい」「禁止する前に遊べる所をつくってほしい。」と次々に出てくる要求をまとめ、全体会を開いて区長さんに聞いてもらうことにしました。続いてお母さん達の話し合いを持つと、それには 44 世帯

のうち 23 人ものお母さんが集まり、「自転車だって、学校では道路で乗ってはいけませんというし、市では公園で乗ってはいけないと言う。いったい自転車はどこで乗ればいいんでしょう。」「そんなに花が大事なら金網をはればいいのに」と熱心に、そして共通してどんどん出てくるお母さんたちの声に、セツラーは改めてその願いの強さを知り、得るものも多く、いっそう地域に根ざしていくように思いました。全体会は子供 26 人、お母さん 13 人、セツラー13 人で開かれ、こんな会は初めてのお母さん達からの発言は少なかったけれど、子供会のまとめた要求やセツラーの発言の中で、とうとう「来年から花壇の配置を変える。やわらかいボールは使っていい」という二点まで克ち取ることができました。「ワッー」と歓声をあげて公園へ飛び出す子供達。区長さんは途中で、…略…「ところで、セツルの存在をお母さんたちは認めているのですか」と聴きました。お母さん達が「ええ、わかっています。」と力強く答えてくれた時、「私達は、この川原町で活動してきたんだ！」という思いがみんなの中にこみあげました。

全国学生セツルメント連合（1971：10－11）

全セツ連大会の討論資料では、上記の実践についての総括が述べられている。その中で、「地域の問題を真に解決するのは地域の人々自身であることをはっきりさせ」、子供たち、お母さんたちの気持ちや要求を大切にし、地域住民自身が解決をその要求を明確にし、まとめながら一歩一歩進んでいる点を評価している。また、「教訓的なこと」として、「日常実践の地道な成果と、その上に立った信頼関係こそが大切な土台になって」、話し合いの会に多くの母親らが参加したことにも言及し、日常実践が要求や願いにかなっているものであった点も重要だとしている。

北上セツルの例では、日常実践の積み重ねが信頼をうみ、そのなかでうまれた要求を汲み取って子どもたちや母親らを主体とした運動へと発展していく過程を捉えているとともに、実践が発展した背景や要因についての評価をしていることもわかる。実際には成功事例ばかりではないが、セツルメントとしての目指すべき実践と、その実現のために必要な要素や視点を示すことによって、ほかの単一セツルメントにおいても地域実践が発展していくことを企図していることが理解できる。このように、1970 年に入ってからは、地域の要求に応じた地域実践を軸として地域や社会を改善する運動へと発展させていくという方針を、実際の実践と結びつかせながら論じているのが特徴といえる。ただし、この点については、資料を作成する全セツ連の書記局員によるところも大きく、その意味では個人差によって資料の内容が変化する可能性も有していたといえる。また、こうした基調報告での実践の取り上げ方の背景には、セツラーにとっての実践や運動の意味付けを明確にする意図もあったと考えられる。

いくつかの課題はあるものの、1968～1969 年代にみられたような理念的・観念的要素の強い大会資料ではなく、地域実践に即して記述されている点は重要だといえるだろう。

（2）屋形町セツルメント民主小学生パートにおける実践―差別と貧困―

①実践地域と子どもを取り巻く状況

第１節で述べた通り、高度経済成長期の本期にあっても、旧産炭地域やバタヤ部落、同和地区部落、寄せ場などにおける貧困の実態は残った。学生セツルメントはさまざまな地域に入って活動をしていたため、その地域の抱える課題に直面する側面も有していた。とくに、貧困地域での活動は、セツルメントの源流にある。これらをふまえ、バタヤ地区といわれる地域での屋形町セツルメントの実践について検討したい。

屋形町セツルメントは、実践地域である屋形町について以下のように記している。「屋形町は、下京区にあり、…略…東九条と言われ、とくに問題を集中的に抱えている山王学区の河原町以東の４ヶ町の北部に隣接している。また、同和地区と呼ばれている東七条の南部に隣接している」「東九条の実態調査(S.43)からもはずされており…略…危険住宅調査の対象からもはずされている。このように、行政の手の届かない地域と言えそうだ」(京セツ連屋形町民主小 P1975:2)。

上記資料は本期の少し後のものだが、地域の状況を端的に表したものといえる。この地域には、「住民はおもにバタヤという職業についている」(同上:15)というＡアパート[31]と他の住宅があった。Ａアパートについて、「NSｒ[32]として初めてＡアパートに入った時その住宅状況の悪さに、正直言って驚き嫌悪感までもよおした。１つ１つの部屋はなく狭くその上そこにすべての家財道具が並びその上そこに５、６人もの家族が住んでいるのだ。トイレは共同で外に２つあり炊事場も共同」(屋形町かけっこパート 1972:2)と記されている。

また、子どもをめぐる状況としては、バタヤで生計を立てている住民が多く住むＡアパートとそうでないＢ住宅[33]などに住む子ども間の差別が、この地域では根深い問題となっていた。以下、資料を用いて実践の経緯を述べる。

(1)バタ屋の子

公園へ行く途中、Ａアパートのところで Kちゃん[34](小２)とＮ(小 3)に会う。むこうから元気に「オッス」といってくる。…略…「公園でオレと野球やろ」と言うとあっさり OK した。そこへＢ住宅のＨ(小 4)とＴがやってきた。そして彼らがセツラーに「オーッ」と声をかけるとＡの子はトタンにシュンとなり、セツラーのうでを強く引っぱって“向うへ行くな”“オレ達を見捨ててくれるな”と言わんばかりのポーズをとる。…略…公園でＨから「オレこいつらなんか一緒に野球セえへんぞォ」と言われるとやはり２人ともうつむいて、公園の隅の方へボテボテと行ってしまった。Ａの子のあれだけの元気さ、ヤル気がＢらの子のひと言で簡単にぶっつぶれてしまう。Ｂらの子のＡの子に対する差別の問題は、歴史的なもので、いつも公園に出てくることすらできないＡの子が、たまに公園に出てきたところを他のアパートの子にいじめられるということは、セツラーのだれもが一度は経験する問題だけど、子どもの間に差別があることを知るのが、セツラーの「学ぶ」内容でありその差別の克服を実践課題として正面に据えるということができていない。そのことの困難、差別の根強さをこの日あらためて痛感した。そして決してその克服を目標としたのでもなかったし、またその可能性を信じられたわけでもなかったけれど、Ｋちゃんや Ｎの笑顔や元気さを頼りにともかく来週からＡに入ろうと決意した。

（屋形町セツルメント 1970:1）

屋形町セツルメントでは、A アパートの子らが近くの公園も自由に使えないような状況を「セツラーのだれもが一度は経験」しながらも、「差別があることを知るのがセツラーの『学ぶ』内容」とするに留まり、実践課題として向き合ってこなかった。そうした中、A アパートでの実践が始まったのである。セツラーの直面した状況が個別課題に留まるものでなく、その背景にバタヤという職業に対する偏見や差別といった社会的問題や地域課題が存在していることを意識して実践が始まった点に着目すべきであろう。

②「子どもの広場」の実践―セツラーと子どもとの関係性の変化―

上述の経緯から A アパートに入り始めるが、「家に行くと、『またこいつ来よった』『お前、何しに来たんや、帰れ！』とセツラーに食ってかかる。そしてツバをかける。足でけり上げる」（同上:2）状況が続く。これについてセツラーは、「この 2 週間でNのセツラーへの態度は、単に“セツラーがキライ”などという低次元のものでないのに気付いた。これまでずっとセツラーが“公園で B 住宅のヤツらと遊ぶヤツ”であり、決して自分たちの味方ではなかったことに対する抗議の意味を、その底にもっているのではないかと思えてきた。それと同時にそれまでの自分が、このような子どもの痛切な願いや、どこにもぶつけていきようのない腹立ちに対して、無頓着で、無知で、無力であったことを思い知らされた」（同上;2）とする。上述の引用は個人の感想であり、客観性の点で限界はある。しかし、 子どもらの行動の描写とセツラーによる考察は、当時の屋形町セツルの姿勢やあり方を示すものと考える。Nの激しい行動は、それまでの実践が A の子らと正面から向き合うものでなく、セツラーもまた地域の差別構造の中に取り込まれている存在であるという抗議の意味を含んだ表現として理解されている。また同時に、問題の根深さへの気付きと自己批判も含む。自身の無知や無力に気付いたセツラー、そして信頼できる相手か試しているような子どもらはどのように変化していったのか、実践の展開とともに論じたい。

セツラーは粘り強く A アパートに通うが、Nの態度はなおもセツラーに対して攻撃的であった。しかし、「はじめて正面からぶつかり合えた」（同上:3）というような経験を通して少しずつ関係性は進展し、大学祭の「子どもの広場」に誘うことに成功する。「子どもの広場」当日、子どもらを誘いに来たセツラーは子どもの広場に行くためセツラーを待っていた B 住宅らの子どもたちに遭遇する。以下、その後の展開である。

> チャンスを逃してはならぬと思い、ウキウキしているHを引きとめて、「ちょっと待て、話がある。」と迫ると、彼らも“何事か”という感じで神妙になる。「お前ら、子どもの広場行くのやな」「うん」「ようし、どんなんあるか知ってるな、映画とか人形劇とか」「なあメシも食わしてくれるんやろ？」「おう、すし作って食べさしたる。よし、あのナおれらはナ、A の子もいっしょに連れていくんや。おまえらケンカすんなよ！」と威嚇的にやると、「A てどこの子や？」ととぼける。更に、「H、おまえな、ケンカせえへんな」と進撃すると「おうええぞ」と言った。…略…この時は内心「ヤッタァ」という気持ちと「A の子とうまくいくかなあ」という不安がいり混じっていた。…略…（※Nは:筆者補足）ど

うしてもダメで、Ｋちゃんと２人で立命へ行く。学校について映画会場に入ると、なんと先着のＨとＴが手を振っている。セツラーとＫちゃんに対してである。これなら、別行動をとるのは日和見主義と思い「よーし行こ」と、オドオドするＫちゃんの手を引っぱって、彼らが座っているところに行くと、ＴがＫちゃんをさし招いて「ここに来いや」と自分のとなりに座らせた。…略…次の人形げきのところでもＫちゃんはＴの隣にすわり「あれ、見たことあるわ」「オレもや」と今度は話し出せるようになり、終わりにはいっしょに拍手ができて、同じ調子で笑いあえる２人になった。この日のことは子どもたちにとってはどうなのかという点では、もう少し理解できないけれど、何よりもセツラーに、「子どもたちは条件があれば、こんなに力量を発揮できるんだ。」ということを確信させてくれたし、10 月までの、B 住宅と A アパートのどうしようもない問題という半ばあきらめの念をすっとばしてくれた。

（屋形町セツルメント 1970:3-4）

親の職業や生活状況などへの差別や偏見が子どもらの関係にも影響を及ぼしている地域状況の中、A と B の子らがともに同じ行事に参加する場をセツラーがつくることで、子ども同士は「同じ調子で笑いあえる」関係へと変化していった。そしてこれは、個別課題としてではなく、地域課題の解決への糸口として捉えていることが上記引用から理解できる。

③「子どもまつり」の実践―A アパートの子と B 住宅の子の共同作業へ―

子どもの広場の翌週、「Ｎの態度がガラリと変わっていた。2 人で部屋にいるのだけれどＮの方が『ブラジル[35]来たゾ！』と大声で叫ぶ。セツラーが横に座ると、騒ぎ出す、笑い出すでセツラーを歓迎しているのが手に取るように分かる」（同上:5）。そして、これまで B の子らに遠慮して公園で充分に遊べなかった A の子たちはセツラーという味方を得て、セツラーとともに公園で遊ぶようになる。

実践計画を立て、宿題や公園遊びなどの実践を続けた 12 月、「子どもまつり」の準備を A アパートと B 住宅の子ら別々ですることとなる。前年のクリスマス会で A の子らは B の子から「バタ屋、あっちいけ」と仲間外れにされてアパートへすごすごと帰って行き、そのことに怒ったＫちゃんの母が B 住宅のＨを追いかけまわして抗議するということが起きていた。そのため、「再び去年の屈辱を繰り返すな」をスローガンに、準備が進められた。A アパートの子らは、セツラーの作った台本をもとにペープサードをすることを思いつき、熱心に人形作りを始める。すると、そこへ B 住宅のＨがやってくる。ＨがＡアパートに入ってきたのを見たのは初めてだった。

Ｈは、「なんやお前、この頃…A の奴らとばっかり遊んで…」と入口のところでひざまづいてこちらをのぞき込んでいる。Ｉもうしろにいる。「おい…ブラジル…入らせや」ガラにもなく小さな声でおかど違いもはなはだしくセツラーに聞いてくる。「Ｋちゃん、Ｈが入れてくれ言うとるぞ」と興味津々に聞くと、「お母ちゃんに聞かなわかれへん」と言う。事実上の OK と判断して「Ｈ入れ」と言うとＨとＩはテレテレの顔をして入ってきた。

（同上:10）

この後、「犬猿の仲」であったAアパートとB住宅の子らが協力して、人形作りを完成させる。そして、子どもまつり当日、紆余曲折を経てそれぞれが自分の役割を果たし何とか1回の練習を終えた時、「子どもらの顔は、“あっ、できた。できた”という自分達にも信じられないくらい力を集中して出せることが出来たという感じだった」(同上:15)。

この成果は、「AアパートとB住宅で何か一つのものをやろうとは到底及びもつかなかった」(同上:12)セツラーにとっても想定外のことだったといえる。一方で、同資料の＜むすびにかえて＞では、「この実践で差別の克服とか子供に力をつけるという点では、表面的に派手な成果のわりには本質的には何一つできていないという気がする」としている。だが同時に、「この実践を通じて自分の意識の底でくすぶっていた“万年スラムの東九条”のイメージが払しょくされつつあり、東九条が変るということについて理論的にも実践的にも無関心でいられなくなった」(同上:15)とセツラー自身の変化も記されている。また、そうした子どもらの変化を見て、母親らも変化していく様子も本資料では描かれている。

一連の屋形町セツルメントにおける実践は、バタヤを主な職業とする住民が住むアパートの子らとその他の住宅に住む子らの間にある差別意識に対して、手探りで体当たりの中取り組まれたものといえるだろう。根深い差別意識を感じながらも、子どもらの遊びたい、仲間に加わりたいといった表面に現れない要求に寄り添い、粘り強い関わりを続けることで、子ども同士の関係性の変化や子ども自身のエンパワメントにつながったといえる。また、大西(2018:175)は、現代の子どもの貧困に関する論の中で、「子どもの貧困に対する支援は、子ども一人ひとりへの働きかけを意味すると同時に、貧困問題が社会全体の問題であることから、制度やそれらを運用する自治体の働きかけを意味している」とし、「常にマクロの視点をもちながら、目の前のミクロ支援に取り組むこと」が、「地域の社会資源を支えていくことにつながる」と述べた。こうした指摘の背景には、子どもの貧困問題をめぐる多様な取り組みが民間に依存している現状[36)]や目の前の「ミクロ支援」に目がいき、「マクロの視点」が欠けている現状があると推察される。その意味で、子どもの置かれた状況をリアルにとらえながら社会変革の視点を有していた学生セツルメントの歴史から学ぶべきところがあるのではないだろうか[37)]。

以上から、本節で取り上げた実践は、関係機関との連携など課題はあるものの地域に出向き、「子どもの置かれた阻害状況」や「要求」を「リアルにとらえていく」ことによって、地域で補完的役割を担いながらその主体性や自治を育んでいったものだといえる。また、大西の指摘した「常にマクロの視点をもちながら、目の前のミクロ支援に取り組む」姿勢も実践例から示されたと考える。

第５節　小括

１．組織転回期における学生セツルメントの動向

本章では、学生セツルメントの組織転回期として、1967 年－1973 年を取り上げた。第 1 節では、高度経済成長期から低成長へと至る本期において、人びとの生活問題が多様化し、それらに対応する社会福祉の法制度の整備とともに地域福祉への着目が高まりボランティアも広がっていくことについて言及した。また、労働運動の衰退、学生運動の「過激化」と衰退のなかで、住民が主体となってすすめる運動や当事者運動が活発化するのも本期の特徴といえる。なお、1970 年代に活発化する児童文化運動や学校外教育は、学生セツルメ

ントの子供会活動とも深い関係性をもっていることについても明らかにした。

第 2 節では、本期の全セツ連の方針や議論について論じた。本期は、60 テーゼ以降の流れを継承し、学生にとっての人間形成や自己教育の側面をより具体化していく過程といえる。一方で、東大闘争が起こる 1968 年前後には、学生運動の動向に呼応して学生セツルメントにおいてもセツルメントで社会は変えられないとする「分裂派」といわれる動きがあった。しかしそれは一部であり、大半のセツルやセツラーは地道な実践を通して地域から学ぶこと、地域や社会の改善に住民とともに取り組むことを大切にしてきたことを明らかにした。また、そうした蓄積の結果として、1973 年の 28 基調で学生セツルメントの社会的性格が提起された。28 基調では、地域実践を通して地域や社会の課題を知り、人間形成につながるとともにそれが「国民的運動の一翼」にもつながるという位置づけがなされた。こうした 1970 年代前半にみられる地域実践の重視、学生の主体形成や人間形成の強調、それらを通して地域や社会を変えていくことにつながるという位置づけは、本期以降にも引き継がれることになる。

第 3 節では、本期における地域連合の動きとして、1968 年に結成される大阪府学生セツルメント連合、愛知県学生セツルメント連合の動向について述べ、本期の連合結成の動きの背景には、学生運動との関係があると推察されることを示した。また、阪セツ連は全セツ連の方針をふまえつつも、各セツルメントでの地域実践を重視した議論がなされていた点に特徴の 1 つがあるといえることを明らかにした。他方、愛セツ連は、日本福祉大学のセツルが中心の組織であること、全セツ連と親和的な性質を有するが、より学生運動としてのセツルメントの位置づけが明確であることについて言及した。

第 4 節では、各地の地域実践について取り上げ論じた。生活問題が多様化する本期において、各地で地域や住民の要求に基づく実践が取り組まれ、その中では、社会のあり方への視点、地域住民や子どもらの主体的・自主的な集団づくりにつながる側面が見出された。本期の実践については、次項で整理を試みたい。

２．本期の実践にみられる特徴と変化

本章第 4 節では、生活課題の広がりに呼応するように多様に展開された実践を取り上げた。それらの特徴と、実践の変化について検討したい。

第 4 節第 1 項で取り上げた住吉セツルメントの実践では、さまざまな課題を抱える地域での実践を通して子どもの生活実態や現実を知ることを通して学び、何ができるのかを模索するセツラーの姿が見出された。夕陽丘セツルメント幼児パートでは、実践を通して母親らの主体性も育まれていく過程を示すとともに、母親らの要求に応じて新たな実践の展開がうまれてきた側面についても明らかにした。他方、愛セツ連所属セツルとして、ヤジエセツルメントの青年会の実践を取り上げた。その中では、実践や青年とのかかわりを通して社会をみようとする視点と実践を通した学びの側面、青年たちが生き生きとできる集団づくりの側面や、会社以外で他者と交流する場となっていた側面などが見出された。子どもを対象とした活動と青年を対象とした活動では比較が難しいが、ヤジエセツルメントにおいては社会や青年に対する一定の見方をもちながら、実践を行っていたことが特徴と

いえるだろう。

また、各地の実践としては、全セツ連の討論資料をもとに、3 つの実践を取り上げた。1 つ目は、川崎セツルメント栄養部の実践で、糖尿病の患者らからなる糖さん会が、自主的・主体的な集団に育っていった例である。ここには、セツラーの働きかけによって“糖さん”がエンパワメントされ、主体的、積極的な集団づくりへと発展していき、現代でいうセルフヘルプグループのような集団となっていったことが垣間見られる。2 つ目は、北上セツルの児童公園をめぐる運動の実践である。ここからは、それまであまり関わりのなかった母親らにも働きかけて地域の問題として児童公園の問題を運動へと発展していった過程が見出された。3 つ目は、屋形町セツルでのバタヤ地区における実践である。セツラーも「どうしようもない」と考えていた差別的な状況に対し、ねばり強く関わる中で、子どもらの要求や変化を捉え、子どもらの主体性が育まれ子ども同士の関係性に変化がみられるようになった結果、母親にも変化がみられるようになった点に言及した。

本期は、地域の状況に応じて多様な実践が展開された。法律相談部や保健衛生部など、戦後に活発であった専門的な活動は、法整備の進展に従い、学生にとって可能なかたちでの実践に変わっていったといえる。他方、学生セツルメントの子供会活動については、第 1 節で教育文化運動や学校外教育論との関わりが深く戦前の大学セツルメントから児童文化運動という点でも歴史的につながっている点について述べた。第 1 節でも引用したとおり、増山(1989:110) は、学校外教育運動の現代的意義を「＜教育＞と＜福祉＞を統一的にとらえ、子どもの生活と教育の結合を追求し、生活権と発達権の統一的保障をめざすいとなみを実践的に模索している」点にあるとし、「歴史的にみれば、＜教育＞と＜福祉＞が統一してすすめられた活動の典型をセツルメント運動に見いだすことができる」(同上:110-111)と述べた。関連して、小川利夫は、基本的に重要なことは児童の生活と教育を全面的にとらえることだとしてその責任を自治体に求めた。その際問題となるのは、「制度改革の変革主体としての国民とくに住民の教育と福祉の権利要求であり、その運動・実戦の進展」(小川 1985:169)だと指摘する。そして、そうした見地からは、何よりもまず「子どもの教育と福祉の権利状態について、その阻害状況を全体としてリアルにとらえていくこと」(同上:169)が重要だとした。これらをふまえると、本章で取り上げた東住吉セツルや屋形町セツルなどの実践は「子どもの置かれた阻害状況をリアルにとらえていく」なかで、子どもらの要求に応じて展開されたものだといえる。

次に、本期の実践に共通して言えることとして、3 点に整理したい。1 点目は、「要求」の視点を重視し、地域や地域住民、そしてセツラーの要求に寄り添いながら実践が展開された点である。「要求」の視点を軸とした実践であったからこそ、実践が豊かに広がり、また、北上セツルの例のように必要に応じて制度政策や行政のあり方を問う運動へと展開することにつながったといえる。2 点目は、学生と地域住民との関係性の点である。本章でも言及したとおり、戦後直後と異なり、進学率が高まり大学が「大衆化」する中で、学生セツラーの抱える生活課題や地域住民の抱える課題とは共通性をもって認識され始めた側面がある。そうした中で、ともに協働して地域や生活をよりよいものにしていこうという

かたちへと変化していったのではないかと考えられる。それは、本章で取り上げた夕陽丘セツルメントの例からも垣間見られる。3 点目は、先の 2 点にもかかわるが、自主的・主体的な組織化が目指されていた点である。この点は、戦後の再興期から、各セツルやセツラーの意識および実践ではみられたが、生産点論など、労働運動や平和運動に傾いた 1950 年代後半の動きもあり、全国的に一致していたとは言い難い側面もある。その意味でも、本期の実践は、全セツ連が基調報告に掲載した川崎セツル、北上セツルに限らず、住吉、夕陽丘、ヤジエ、屋形町など本章で取り上げた各セツルの実践においてもその成果の多少は別として、関わる人びとの主体性、自主性を尊重する姿勢が共通して見出されるといえる。

なお、1 点目の要求の視点については、実践の面では戦後再興期から共通してみられるものの、全セツ連の方針としてみられるのは 1963 年の 63 テーゼからであり、そのあたりから、地域や地域住民のみでなく、活動に携わるセツラー自身の要求の視点が加わった点が 1960 年代半ば以降の変化として挙げられる。そして、そのセツラー自身の要求という視点が、セツラーの学びの場、人間形成の場としての位置づけへとつながっていたといえる。

このように、本期における大学進学率の上昇や地域住民の自治の高まりといった社会状況の変化、自己教育運動という全セツ連の位置づけは、組織構造の変化だけでなく、各地の実践においてもより地域に身近なかたちでの活動へと変わる契機となった側面が見出せる。

各地で多様な実践が展開され全国的に広がる一方で、組織が大きくなり、さまざまな要求をもったセツラーが活動するようになると、組織としての困難も生じてくる。そうした組織としての課題が浮き彫りになる 1974 年以降の展開について次章で論じる。

注

1) 岡本(2019)の一部を大幅に加筆・修正したもの。

2) 文部科学省文部省統計調査企画課「文部統計要覧」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1403130.html, 2018.12.8).

3) 東京帝大セツルメントの児童問題研究会による、児童問題研究会(1933)(1934)(1355)『児童問題研究』参照

4) 岡本(2019)の一部を大幅に加筆・修正したもの。

5) 全国学生セツルメント(1966)「せつるめんと　全セツ連機関紙」.

6) 馬淵セツルは、1965 年、日東セツルメントを母体として大阪府立大学・大阪市立大学から構成されていたが、1969 年に「崩壊」(住吉セツルメント 1975a:28)している。「崩壊」の理由は、「『大学解体』論の影響をうけたセツラーが学生セツルメントの性格を否定し、ある者は学業と大学改革を放棄して『地区党』建設のため地域で『専従化』する方向をとり、またある者は、地域活動を放棄して『バリケード封鎖』に全てを解消したため」(同上:28)とされている。なお、引用資料はページ表記がないため筆者が目次を除いて数えたものである。

7) 「／」は、原文において改行していることを示すため、筆者が加筆したものである。

8) 1965 年入学の OS への聞き取りより

9) 住吉セツルメント(1976:12)では、「現代日本の社会的諸矛盾の縮図」に注釈がつけられており、「ある地域の問題がその地域の問題に留まらず、本質的には日本の社会の根本的なあり方そのものという問題の性格をもっていること。」とする。なお、「地域は日本の縮図」という言葉は、1974年入学の住吉セツルメントのOSへのインタビュー(2015年8月15日実施)でも聞かれ、広く浸透していたことを窺わせる。

10) 前田(2010:1)

11) 2019 年 5 月 29 日の聞き取りより

12) 2019 年 2 月 1 日の聞き取りより

13) セツラーネーム

14) 2015 年 4 月 19 日、住吉セツルメント OS で 1974 年入学のジャンパチ、クルル、ボタリン、アグネ及び 1972 年入学の二世の各氏より聞き取りした内容。とくに、本部分についてはジャンパチ氏(阪セツ連委員長)、クルル氏(全セツ連委員)の発言によるところが大きい。

15) 本資料の原本では、「保障」の部分に赤いインクが付着し解読不能であったため、その部分については住吉セツルメント(1975a)を参照し、記述した。

16) 名古屋南部セツルメント協議会の役員のこと

17) 各セツルの構成大学については、1991 年度愛知県学生セツルメント連合書記局(1991)「第 39 回愛知県学生セツルメント連合定期連合委員会基調報告」を参照した。

18) 岡本(2019)の一部を大幅に加筆・修正したもの。

19) 資料は個人名だが、研究倫理の観点から K と表記する。

20) セツルメントの実践日

21) セツラーの意

22) 2015 年 4 月 19 日、住吉セツルメント OS で 1974 年入学のジャンパチ、クルル、ボタリン、アグネ及び 1972 年入学の二世の各氏より聞き取り

23) 岡本(2016:57－59)を加筆・修正したもの。

24) 当該資料には発行年が書かれていないが、本文より、1972 年発行と推定した。

25) 資料は固有名であるが、個人情報の観点から、アルファベットで表記する。以下、同様。

26) 家庭訪問のこと。

27) 1971 年に入学し、坂下セツルメントの青年パートであるわかもの会で活動していたセツラーへの聞き取りより

28) 同上

29) 1971 年に入学し、川崎セツルメントの青年パートであるやまびこサークルで活動していたセツラーへの聞き取りより

30) NHK から取材の申し込みがあり、受け入れるかについて青年らと話し合い、青年らの積極

的な意見から受け入れた経緯がある(ヤジエセツルメント青年部 1969:10-11)。

31)　資料は固有名であるが、研究倫理の点から A アパート、もしくは A と表記する。

32)　新入生セツラーの意

33)　資料は固有名であるが、研究倫理の点から B 住宅、もしくは B と表記する。

34) 資料は固有名であるが、研究倫理の点からアルファベット表記とする。以下、同様である。なお、K ちゃんは、男子の名前と推察される。

35) セツラーネーム

36) 浅井(2017:132,150)参照

37) ただし、今回取り上げた時期以降，学生セツルメントの性質や活動は徐々に変質していくため、学生セツルメント全体を指してこの点を指摘することはできない。

第５章　学生セツルメントの組織変容期(1974-1989 年)

本章では、1977 年から 1989 年を学生セツルメントの組織変容期として論じる。

第１節　社会状況と社会福祉の動向

本期は、高度成長期以降の低成長期であり、その後のバブル期に入る時期である。この間、社会福祉は、臨調行革路線の影響を受けたほか、社会福祉士及び介護福祉士法の成立など、専門化を辿る。本節では、本期の社会状況及び社会福祉政策・実践を概観することで、本期における学生セツルメント活動との関連を検討したい。

１．社会状況―日本経済の国際化と臨調行革路線―

本期は、高度成長期以降の低成長期であり、その後のバブル期に入る時期である。1973 年の石油ショック等を契機として、世界経済は不況に突入した。そうした動揺に対処するため、1975 年から先進国首脳会議(サミット)が毎年一回開催されることになる。また、日本国内でも景気浮揚政策として、1975 年度以降の公共事業費や住宅建設関連費等の予算を増額し、金融政策でも金融緩和を実施した。その一方で、租税収入が低迷する中での歳出増加は、財政体質の悪化を招き、1976 年以降、赤字国債の抱え込みが始まる。企業経営においても、減量経営の方針が出され、「量的成長重視」から「経営効率向上重視」への変化を迎える（鹿野 1995:5-15)。

経済界の減量経営が進行するなか、累積する赤字国債を抱えた財政再建が政府の大きな課題となった。そのため、鈴木内閣で行政管理庁長官に就任した中曽根康弘が 1980 年に第二次臨時行政調査会(以下、第二次臨調)を設置する方針を決定、1981 年に発足した。第二次臨調は、「増税なき財政再建」を軸に、1983 年の解散まで 2 年間に 5 回の答申を提出した(同上:21)。理念に、「活力ある福祉社会の実現」「国際社会に対する貢献の増大」を挙げている。鹿野(1995：21-22)は、第二次臨調の特徴として二点示している。第一は、生活に直接関係する分野での負担増を求める方針が打ち出されたことである。具体的には、老人医療費無料制の廃止、高額医療費の自己負担額の引上げ、公共事業関係費の抑制等である。第二には、「民間の活力」を強調するかたちで国鉄の民営化等につながったことである。

また、経済面・貿易面において日本は「国際化」の提唱と推進がなされていき、海外への企業進出がさかんになった。1985 年のいわゆるプラザ合意を契機に円高・ドル安が急激に進行、1987 年の緊急経済対策によって景気が一気に上昇する。これらの動きが、1980 年代末の大型景気、いわゆるバブル景気につながる。一方でこの大型景気は、株価と地価の上昇により資産格差の拡大もうみだした。

２．社会福祉をめぐる動向

（１）臨調行革と日本型福祉社会―社会福祉の専門分化と民営化―

前述の臨調行革路線により、福祉政策についての見直しの議論も盛んになった。自治体の福祉行政について「福祉ばらまき」が批判され、1975 年、地方制度調査会より自治体の福祉見直しが答申された。1979 年には「閣議決定で、自助と地域の相互扶助を基本にした日本型福祉社会を目標とする新経済社会七か年計画を策定した」(菊池ほか 2014:182)。同様の日本型福祉社会の提言は財界・労働界・学者の協力機関・社会経済国民会議からも 1978

年に出されており、「政府と自治体が公的責任を持つ福祉国家に対して、個人や家族、地域共同体が福祉の役割を果たすのが福祉社会とされた」（同上:182)。こうした日本型福祉社会論に伴う大きな制度改正としては、老人医療の無料化の廃止・一部負担を導入した老人保健法(1982 年)、年金水準の見直しと基礎年金制度を創設した国民年金・厚生年金保険法等の年金法改正(1985 年)や、老人保健施設の創設(1983 年)等が挙げられる(河野 2002:80)。

こうした動きの中、自治体出資の第三セクター方式が福祉の世界にも導入され始め、1989 年には福祉での市場原理導入が現実化されることとなった[1)]。また、地方分権の方向性もこの時期打ち出される（菊池ほか 2014:182-183)。池田（1994:190）は、「自立・互助・民間の活力を基本」とし、公費を節減するという第二臨調の考えは、「市民権主張と相容れず、西欧の高福祉高負担論を拒否するものであった。したがってその制度改革は、一方で制度統一を前進させるが、他方で独立採算制の強調や部分的な営利事業導入など問題を残したと言わざるを得ない」とする。一方で、政府によって短期保護事業や通所サービス事業等が始められ、施設重視から在宅生活の支援が重視されだした面があることも指摘し、福祉見直しが福祉政策を衰退させたのではないとの指摘もある(菊池ほか 2014:183）。

障害者福祉の分野は、「戦後以来の福祉の歴史でも十分な施策は行われなかった」（同上:183)。しかし、1981 年国連総会は「完全参加と平等」を掲げた国際障害者年を採択した。これを契機にノーマライゼーションの考えが広がり、身体障害者福祉センター、通所授産施設等の整備が進められたほか、1987 年に精神衛生法を改正し精神保健法が成立、1986 年には障害者基礎年金制度の創設もなされる。こうした法制化やサービス拡充の背景には、それまでの当事者運動の取組みがあることも重要な点である。

障害福祉に限らず、国際化の影響を受け、女子差別を含む様々な法律の改正がなされた。加えて、「国際条約の国内への適用では、在日外国人の福祉の保障にも影響があった」（同上:185)。政治・社会に限らず、福祉の面でも国際化がみられるのが本期の特徴といえる。

また、 1987 年の社会福祉士及び介護福祉士法にみられる専門職の役割規定と福祉分業も進み、社会福祉は専門化を辿るとともに 1989 年には「高齢者保健福祉推進十か年戦略」が策定され、その後の福祉関係八法改正へとつながる。

（２）本期における社会福祉の特徴と社会福祉理論・社会福祉教育の展開

河野（2002:81-82）は「一九七〇年代後半以降、国及び地方自治体の財政硬直化という背景のなかで、①社会福祉ニーズの変化と需要の増大にともない、社会福祉は必ずしも貧困層・低所得者対策に終始できなくなってきたこと、②社会福祉の推進にあたっては公的責任のみでは果たしえない部分が生じてきたこと、③公的年金等による所得保障が整備されるにしたがい社会福祉サービスの受益者も、一定部分の費用負担が可能となってきたこと」等を理由として、受益者負担の強調傾向が強まったと指摘する。また、同じく河野（2002:82）は、本期について「財政再建、行革の一環としての消極面と、福祉ニーズの変化と需要の増大に対して新しい理念（生活の質、ノーマライゼーション等）にもとづいて対応しようとする積極面の二面性が含まれていた」とする。しかし、積極面においても、要援護者にとって利用しうる在宅サービスの内容・程度は法制上不透明であったという点を指摘している。

社会福祉理論の面で、吉田(2004:321)は、小松源助の『ケースワーク論』(1975 年）に、従来の「医学モデル」から「生活モデル」への転換をみる。また、岡村重夫や右田紀久恵、

三浦文夫らによる地域福祉論の展開も本期にみられる。

さらに、吉田（1990:398）は、「低成長期以降の福祉ブームを背景に社会福祉教育が盛んになった」と述べ、1977 年時点で日本社会事業学校連盟に所属する学校は 43 校あるとした上で、「専攻の所属学部やカリキュラムも異なり、教育が目的とするあるべき人間像もさまざまで、その定型化は将来の問題である」（同上:398）と指摘している。その上で、現在また「福祉教育」が提起されていると述べ「しかし教育は福祉従事者の生涯を左右する長期の問題で、社会福祉関係教員の研究的深まりと、あるべき人間像の形成を含めた学生側の学習が前提で、単にカリキュラムの問題だけにはとどまらない」（同上:398）と主張している。社会福祉教育に関する吉田の指摘は、現代にもつながるものといえる。「あるべき人間像の形成を含めた学生側の学習が前提」という点において、学生セツルメントにおける自主的な活動と学びのプロセスには意味があるといえる。この点については、総合考察で検討したい。

３．社会運動の動向―新たな社会運動の展開―

これまで社会運動として大きな役割を担っていた労働運動であったが、賃上げ自粛ムードを基調とする労働組合内の空気に加えて、「春闘の中核となっていた公労協が、七五年に行った争議権回復をかけてのストライキ（スト権スト）が敗北に終わったことも、労働運動の気勢をそいだ」（鹿野 1995:14）。鹿野は、それらをきっかけに組合は労使協調的色彩を強め、「労働運動のもつ社会的威信は大幅に減退した」（同上:14）と述べる。

労働運動の衰退の一方で、「都市を基盤とする新しい住民運動」（同上:29）が誕生した。主婦層がその主な担い手となり、静穏権・環境権・眺望権等という新しい権利観念が生活上の争点として取り上げられていった。また、1965 年に主婦たちの牛乳共同購入運動から生まれた生活クラブ協同組合は、1978 年には組合員 5 万 5000 世帯余へと拡大し、食品公害等にも取り組んだ。「それらの運動は規制の組織と異なり、人と人とを網の目のように結んでひろがる場合が多く、ネットワーキングという言葉はそこから生れた」（同上:29）。

先述の女性問題に関する様々な法律の改正の背景にも運動的側面は大きく関係している。1972 年、国連は 1975 年を「国際婦人年」とすることを決議し、その後の世界会議では男女が「人間」として平等との「宣言」と、各国政府に実効ある諸政策を求める「世界行動計画」とを採択した。そして、それを保障するため同年の国連総会は 1976-85 年を「国際婦人の 10 年」と宣言した（同上:44-45）。こうした動きを受けて日本では、様々な女性運動が合流し、「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」がつくられ、政府も様々な差別撤廃の法的整備を実施するに至った。

学生運動では、1975 年 3 月に中核派の書記長が革マル派に襲撃・殺害され、「中核派は『全面無期限戦争突入』を宣言、『内ゲバ』は無限定に拡大されることになった」（山中 1981:312）。7 月の皇太子訪沖阻止羽田闘争の帰途、新宿駅で中核、革マル派学生集団が大乱闘し、死者・負傷者及び多数の逮捕者を出した。1975 年の「内ゲバ」の被害は「死亡者二〇名、負傷者五三〇名、件数二二四件と公表されている」（同上:312）という。本期においてもデモやストが行われ、機動隊の導入もなされた（同上:316）。1980 年には、リムバック 80 阻止闘争、大平訪米阻止闘争、金大中救出連続闘争など、様々な立場から闘われた。また、反原発闘争が強まったほか、学費値上げ反対闘争も一定の盛り上がりを見せた。各派に分かれた「全学連」はそれぞれストライキや大会を開催するなどの動きがみられた（同

上:320-322)。1980 年を迎えても、暴力的な方向性は変わらず、孤立化を深める姿がそこには見いだされ、大学の自治や民主化を求めて始まった学生運動の性質は変化し、内部闘争の様相を呈していく側面がある。

第２節　全国における学生セツルメントの動向－全セツ連の解散へ―

第 3 章～第 4 章で述べてきたとおり、全セツ連の方針をめぐっては、1950 年代後半にみられた生産点論の反省から 60 テーゼを経て 1973 年に学生セツルメントの社会的性格が打ち出された。本期は、1970 年代前半にみられた自己教育運動としての位置づけを継承する側面と、それまで抱えてきた問題が顕在化する中で、組織維持が困難になる両方の側面を抱えている。そのため、本章では、全セツ連の組織構造と方針の転換を中心に概観する。

1. 全セツ連の拡大と衰退―加盟セツルメントの変遷から―

1974 年の段階で、全セツ連では、約 4000 名のセツラーが活動していたされる(大谷女子大 Sr 会 1974:5)。1974 年の全セツ連第 28 回大会時点での加盟セツルを、表 5－1 に示す。

北海道	あらぐさ、札幌、ズンガリ、どんぐり会、どんぐり、どろんこ、じゃがいも、山の子
東北	青山、秋田、北上／宮城野、中江、鹿野、仙台保健部、追廻
関東	寒川、こぶし、市川／氷川下、中野、亀有、八千代町、坂下、大原、城北、十条、代沢、北鹿浜、一之江、塩浜、ぐみの会、境南、幸泉、大泉／川崎、清水ヶ丘
北陸	あかつき
東海	井戸田、ヤジエ、トロッコ、島田一ツ山、町っ子、大根
京都	屋形町、マンモス、高瀬川、岩本、鴨川、四十番地
大阪	夕陽丘、猪飼野、住吉、日東、東淀川
中国	岡山、神戸大
九州	熊本

表 5－1　第 28 回全セツ連大会時における全セツ連加盟セツルメント

(全国学生セツルメント連合書記局 1974:98)をもとに筆者作成

1974 年の第 28 回大会時点では加盟は 58 セツルとなっていたが､2 年後の 1976 年 8 月の第 31 回大会定期連合委員会の時点で、67 に増加する（全国学生セツルメント連合 1976)。

その後、1982 年当時の全セツ連の構成と意義について、大阪府学生セツルメント連合書記局(1983:1)は、「学生セツルメントは、北は北海道から南は熊本まで、63 単セツ（82 年 3 月現在）あり、地方連セツは、北海道、仙台、千葉、関東、愛知、京都、大阪の 7 連セツ[2)]があります。これらのセツルの交流を図り、全国的な発展を克ちとるために全国学生セツルメント連合があるわけです｡全国のセツラーの交流の場として大会が年 1 回開かれ、そこで各単セツの教訓を持ち寄るとともに、年間のセツルメント運動の総括をし、方針を確認したり、セツルメント運動の継承を行っています」と述べている。

この記述から、1982 年の全セツ連の構成は、1974 年、1976 年と比較しても単一のセツ

ルメント、地域の連合ともに数の変化はほぼみられない。また、全国学生セツルメント連合(1983:47)によると 1983 年時点で全セツ連には 67 セツルが加盟しており、未加盟セツルや新たに北海道大学旭川分校、高知大学児文研の学生らによるセツルが誕生し「セツルメント活動が更に拡大しようとしています」とある(同上:47)。しかし、次項で見るようにこの時期には既に各セツルメントや全セツ連においてさまざまな問題が顕在化していた。1983 年までは組織構造に大きな変化の見られなかった全セツ連だが、全セツ連解散の 3 年前にあたる 1986 年 8 月時点で、「加盟セツル数 55」(全国学生セツルメント連合 1987:35)となり、1983 年からの 3 年間で 12 のセツルが消失している。1986 年 8 月時点の加盟セツルを表 5－2 に示す。

北海道	あらぐさ、札幌、大谷地、ズンガリ、新篠津、どんぐり、山の子
東北	青山、はらい川／宮城野、中江、鹿野、仙台保健部、追廻、国見、杜の子
関東	群馬/ 寒川、こぶし、市川/ 氷川下、亀有、綾瀬、坂下、大原、北鹿浜、一之江、ぐみの会、境南、幸泉、大泉、小平、池袋/ 川崎、清水ヶ丘
北陸	あかつき
東海	井戸田、ヤジエ、トロッコ、島田一ッ山、町っ子、名短
京都	屋形町、マンモス、岩本町、鴨川、四十番地、つくしんぼ
大阪	夕陽丘、住吉、日東、東淀川、衣摺、庄内
中国	岡山
九州	熊本

表 5－2　1986 年 8 月時点の全セツ連加盟セツルメント

(全国学生セツルメント連合(1987:35)をもとに筆者作成)

1970 年代から 1980 年代前半にかけて、全セツ連加盟セツルが増加していたにもかかわらず、1980 年代後半になるとその数は大幅に減少する。その背景には、全セツ連が抱えていた矛盾や問題の顕在化があるといえる。

２．1970 年代後半における全セツ連の動向

（１）議論と方針―70 年代にふさわしいセツルメント像と問題の顕在化―

1976 年の第 31 回全セツ連大会では、70 年代にふさわしいセツルメント像として、「1. だれでもどこからでも参加できるセツルメント 2. だれもが日々の実践で感動し確信をつかんでいけるセツルメント 3. 一人ひとりが現在と将来の生き方までをも考えられるセツルメント」(全国学生セツルメント連合書記局 1976:1)の 3 点が確認された。この説明の中で、「地域ぐるみの運動の中で何を学んでいくのかがわからない」(同上:8)や「セツルをやっていて地域がどう変ったのかわからない」(同上:11)といったセツラーの声が取り上げられている。31 回大会で示されたセツルメント像からは、それまでの政治性・運動性の側面を表す言葉は消え、学生目線の平易な表現になっていることが特徴である。これは、セツルメント運動に意義を見出せないセツラーの増加やセツラーの獲得及び組織体制の維持・拡大が課題になっていた側面の反映といえる。さらにいえば、様々な団体が生まれ、制度・

政策が整備されてきた中でセツルメントの独自性の追求が改めて求められていたとも考えられる。また、全セツ連の方針を一方的に示すかたちではなく、各セツルメントの意見や実践の中での声を取り入れていく組織体制となっている点も指摘できる。

翌 1977 年の第 32 回大会では、セツルメントの長期的見通しとして①学生が学んでいく力をつけていく事にセツルの独自性を生かしながら貢献していく、②多くの学生、地域住民にセツルメントが育まれていく、③これらを保障していく組織、活動のテンポもセツラーの成長にこそ基本をおく、の 3 点が提起された(全国学生セツルメント連合書記局 1977a:16-17)。一方で、この間みられる傾向と問題点として、「第一に、KS(※経験セツラー[3]:筆者注)が生き生きしていない、自らの課題を見すえきれていない、第二に、セツラーが地域にいっても問題を感じきれない、地域の情勢をなかなかとらえきれない、第三に、Sr 会での学習会がとりくまれながらも、なかなか系統的にとりくめない」(全国学生セツルメント連合書記局 1977b:7-8)等が挙げられている。こうした傾向や問題点の記述から、1970 年代後半のセツルメントがそのあり方を見失いつつある側面が見出される。

また、全国学生セツルメント連合書記局(1977a)では、第 7 章「組織・執行部活動」において、学生セツルメントの基本的な性格について述べている。それは、第一に、サークルであるということであり、そこでは学生の要求を基礎に置くということ、学生が自主的に運営していくという 2 点を強調している。第二に、学生セツルメントは、学生が学び成長することを基本に据えたサークルであるということである。そして第三に、地域実践系のサークルであるとした上で、「学生が、地域の人々に何らかの形で力になっていこうとする精神、何かを求めて地域へ足を踏み出そうとする精神は学生セツルメントの根本をなすものであり、その歴史を貫くもの」(同上:40)であるとしている。

それらをふまえた上で、学生セツルメント執行部の性格について、セツラーから選出されたサークル運営機関であり、セツラーの学び成長する要求を実現するためにサークルを運営していくことを一人一人のセツラーから委任された機関であると位置付ける。そして、全パートを総括し集約しうる役割が執行部にはあり、一人一人のセツラーの地域認識をより拡大するような提起をする必要があること、執行部は一人一人のセツラーの成長を保障するために存するが一部の犠牲のもとに成り立つものであってはいけないとしている。また執行部は自主的学生サークルの核としての役割を持つ一方で、会議の数が増え時間的に余裕をなくしてしまう、執行部の意図が伝わらない、「執行部が浮いている」「おしつけがある」といった声があるなどの問題点にも触れている(同上:39-41)。なお、執行部の原則的活動には①状況の集約、②評価、③方針の提起、④実践、⑤総括、の 5 点が挙げられている(同上:42)。

本資料が全セツ連から発行された討論資料であるために、執行部の問題点が充分に挙げられていると言い切れない側面もあるが、少なくとも執行部に求められる役割の多さや、執行部と地域実践に取り組むセツラーとの溝の一端が垣間見られる。こうした執行部の抱える性質は、本期において新たに生まれたものではなく、それ以前からあったものが顕在化したものであり、その後の全セツ連の解散にも関わる問題であると考える。

1980 年代後半以降の減少や衰退状況については後述で論じることとし、1960 年代後半から 1980 年代にかけての組織拡大の背景について次項で検討する。

（2）1960 年代後半から 1980 年代にかけての組織拡大の背景―方針との関係から―[4)]

第 2・3 章で述べてきたとおり、1950 年代後半から 1960 年にかけて、全セツ連では、理論化を目指し、平和運動や労働運動への志向性が高いテーゼが出され、生産点論が提起された。しかし、そうした方向性は、地域実践に地道に取り組む単一のセツルメントの実態とは異なる[5)]ものであった。そのため、1960 年の 60 テーゼ以降、学生セツルメントは、学生にとっての学びの場としての位置づけや地域実践を強調し、地域実践を通して社会を知り生きる力を育む「自己教育運動」として定義づけられていく。本節第 1 項で確認したとおり、1960 年代後半以降、1980 年代に入っても学生運動が衰退していく中で、学生セツルメントは量的には拡大してきた。それは、どのような背景によるものだろうか。これについては、本期の方針転換との関係が大きい。そのため、人間形成や自己教育を方針に位置付けるようになった背景について主な 4 点を挙げて論じながら、拡大の背景についても検討したい。

1 点目は、制度・政策の変化である。専門職が規定され大学が「大衆化」するなかで、戦後直後に医学生のセツラーが医療行為を行う例にみられた “準専門職”のような役割は消失する。また、ボランティアの広がりなどのインフォーマルな社会福祉の拡大と生活問題の多様化による公的社会福祉領域の拡大、制度政策の整備により、学生セツルメントは、その独自性を追求することが一層求められるとともに東大セツルメント再建当時から曖昧であった定義づけも大きな課題となっていた。このほか、学生運動の衰退も、全セツ連の方針転換に影響していたといえる。つまり、学生運動のイデオロギーや方針とは別の方向性が求められたなかで、セツルメントが取り組んできた地域実践への回帰と実践を通した学びの側面の強調へと転換したといえる。

2 点目は、セツラーの変化である。運動に意義を見出せないセツラーが増え、「地域がどう変わったか分からない」との声があがるなど、学生セツルメントによる地域組織化は必ずしもうまくいっていたとはいえない[6)]。そうしたなかで、1960 年以前にみられた学生セツルメントが中心となって地域を組織化するという方向性は、現実にそぐわなかっただけでなく、セツラーにとっても正当な意義づけにはなりえなかった。その意味では、地域実践への回帰はセツルメントの実情に近づいた方向転換といえる。また、大学進学が身近なものとなりさまざまな選択肢があるなかで、魅力のあるセツルメントの方向性を打ち出す必要性が生じた点や、第 4 章で述べたように大学生が地域の状況を自身らの問題に重ね合わせて考えるような状況が生まれていた点も指摘できる。

3 点目は、当時の教育学、とくに社会教育学の研究動向である。村田(1987:97)は、1960 年代後半から 70 年代にかけて、自己教育論をめぐる論争的構造が社会教育研究の主要な位置を占めるようになった、と述べる。こうした社会教育学における自己教育論の台頭、国民や労働者の自己教育運動などの流れから、1960 年代後半以降の全セツ連の方針には、社会教育学の研究動向との関連も見出せる。その意味では、本期において学生セツルメントを「自己教育運動」とした定義づけ自体に、大学の学問と実践の結びつき[7)]があったといえる。同時に、大学拡張運動に連なるセツルメント思想の連続性も指摘できるのではないだろうか。

4 点目は、組織構造の問題である。先述のとおり、学生セツルメントは、全セツ連、地域の広域連合、単一のセツルメント、と 3 位相からなる組織体として成立していた。しかし、1967 年には財政ピンチを伝える記事(全国学生セツルメント連合書記局 1967b:14)が機関紙に掲載されている。1975 年時点での愛セツ連加盟 7 セツル全ての全セツ連への多額の滞納状況の記録（愛知県学生セツルメント連合 1975）からも、財政難は深刻だったことが分かる。組織継続のためには財源確保と人材確保が不可欠であり、その点でも、学生にとってより敷居が低く意味を見出しやすい定義やスローガンが求められていたと推察される。しかし、先に述べた通り、財政的な困難は抱えながらも組織としては拡大をみせていた。1974 年時点でも全セツ連に 62 ものセツルが所属し、4000 名のセツラーが参加していた（大谷女子大学 Sr 会 1974:5）ほか、阪セツ連でも、1971 年の 70 名ほどに対して 1974 年には 330 名あまりのセツラーが大阪全域で頑張っているとの記述があり（同上:5)、組織としても活動体としても活発であったことがわかる。1972 年の冬から第 5 代阪セツ連委員長を務めたまろ氏によると、当時、セツル拡大の動きがあり、セツルをつくりたいという大学が多くあり、「全セツ連がなくなるのが想像できるような時代ではなかった」という[8)]。後述するが、1983 年時点でも全セツ連に 67 セツルが加盟しており、未加盟セツルや新たなセツルも誕生し「セツルメント活動が更に拡大しようとして」いる状況があった(全国学生セツルメント連合 1983:47)。その背景について、まろ氏は、「大きな広がりを見せていた学生運動が下火となり、社会的な活動をしたい学生の受け皿になっていたのでは」[9)]と分析する。つまり、組織維持の側面に留まらず、社会に何らかの貢献をしたいという学生が、学生運動の過激化や変質に伴い別のかたちを求めた結果、セツラーが増加し、組織拡大につながったという見方である。同時に、自身の成長や人間形成、自己変革といった要求をもつ学生がセツルメントに入ったと考えれば、学生自身の内発的な要求と自己教育や人間形成という本期の方針は相互に関連しあっていたとも捉えることができるだろう。一方で、さまざまな考え方や思想、動機をもった学生が集まったからこそ、そのあり方が問われ、活動や運動に意味を見出せず離れていくセツラーもうまれたのだともいえる。

このように、本期の背景は、因果論的に捉えることができるものではなく、複数の要素が相互に関連しあっていた。では、1980 年代における全セツ連ではどのような議論がなされ、これほどまでに拡大していた組織が 1980 年代後半になると衰退をみせるのはなぜなのだろうか。次項で検討する。

３．1980 年代の全セツ連大会における議論と方針―全セツ連の解散―

（１）1980 年代前半における全セツ連大会の議論―混迷―

1980 年の代表者会議では、「セツルメント運動は真に地域の人の立場に立った生き方と、生き方を支える力を育てる自己教育運動として、…略…そして学園に於いては、学問を真に国民の利益に役立つものとして探究することを各々の独自な活動と、その統一の中で明らかにして」(全国学生セツルメント連合書記局 1980:1)いくことが強く求められるとする一方、セツルメントをめぐる現実として、総括の不足、実践における問題意識や目的意識の不鮮明さ、方針や系統性が一貫していない点等に言及があり、問題の山積状況が窺える

(同上:1)。

1983 年の第 38 回全セツ連大会の基調報告においても、学生セツルメントの置かれた厳しさが垣間見られる。本資料では、セツルメント活動が青年期の活動であり、未来に生きる青年としての全面発達を保障する活動であり、更に現実を変革してゆく主体者として成長してゆく活動でもあることを捉え、先輩らが大切にしてきた「統一・団結」「友情と連帯」という言葉の重みを再度捉え直す必要があると述べる(全国学生セツルメント連合書記局 1983)。そのうえで、「『大会は金がかかり過ぎる』『大学の勉強とセツルをやるのは大変…』『会議主義だ』など、…略…様々な困難な状況やある面での矛盾をもって」(同上:47)いる点について言及している。これについて、現実に立脚し動いている活動だからこそ起きる側面であり、各セツル内部や組織的な問題の本質を全てのセツラーの中で明らかにし、全体の中で解決していくことが重要であると述べる(同上:47)。しかし、こうした問題への対策については具体化されておらず、脱却できない状況が続くこととなる。

（2）1980 年代後半における議論―全セツ連と現実・実践との乖離―

こうした中で、1986 年の第 41 回全セツ連大会の基調報告は「“学ぶ場”としての位置づけから、何を学ぶのか(研究対象)、何を通していかに学ぶのか(研究方法)、何のために学ぶのか(研究目的)の明確化」(全国学生セツルメント連合 1986:56)が必要だと指摘する。

その上で、セツルメントが捉えてきたものは、ナマのくらし、「生活現実」であり、「セツルメントがその目的(国民全体のよりよいくらしをめざす)に向けてのアプローチとして地域に関わって、そのくらしを浮き彫りにし、また多面的に働きかけて目的達成にむけて運動を進めてきたこと」「『地域のくらし』にじかにふれ、それを通して学んでいくという他サークルにない独自の専門性をもっている」(同上:57)ことに言及している。

さらに、「『現代日本の社会そのもの』を解明するサークルは多々ありますが、学生セツルメント運動においては、地域住民のナマの『くらし』という現実の社会の中で学ぶ点に優位性があります。またそれと平行して、机上(学園)でも学び、双方を総合的・有機的に結びつけ相互に検証しあって研究を進めることが学習調査活動です。学び、働きかけ、その中で学び、啓発され尚一層学んでいく活動を統一的に展開する中で、目的―即ち、よりよいくらしをめざし、更にその運動の中でセツラーが自己教育を行い成長するということが達成されていく」(同上:57)とする。一方で、「セツルメントの中心的魅力は誰の目にも明らかな様に地域実践活動が行えるということです。しかし、近年『ただ地域に行って子どもと接しているだけ…。』という声に代表される様に、そこに於いて学べないというセツラーが数多く見うけられます」(同上:57)と指摘する。その上で、現代社会は高度成長期のように矛盾がストレートには見えない現状があるため、生活問題を正しくとらえ、問題を問題として捉えられる科学的視野を養う上での学習経験、学習調査活動の必要性を論じている。また、本資料の第 7 章では学生セツルメントを自己教育運動として、その位置づけを明確に示している。しかし、「矛盾したことに、自己教育運動であるセツルの中でも、なかなか権威的な関係を克服できていません(本音で話せない。NS が KS の顔色をうかがう。KS が自分の疑問を出さない)。これらは、私たちの生育史や情勢から規定されながらも、運

動づくり自体に矛盾があるためだと思われます。私たちは対等の立場で学びあう場を大胆につくり出す必要があるのではないでしょうか」(同上:75)とも述べている。これらの記述からは、セツラー間の意識の差、また突き詰めれば全セツ連執行部と各セツルの実践に“温度差”があらわれていることが読み取れる。

“温度差”に関して、同資料の第6章に「国民的闘いの一翼として」があり、時代や実践とのズレを感じざるを得ない記述がみられる。以下、一部引用する。

> 全セツ連 36 大会では、統一戦線運動を“圧倒的多数の国民と共に社会的立場のちがいを前提として、要求を統一し一致点で行動することにより、政治的課題を実際に解決できる場であり”“民主的知識人を目ざすセツラーが要求実現のための学習、行動を通じて学生としての主体的民主主義的要素と友情と連帯の思想を身につけていく場”であるとおさえられてきました。さらに 37 大会では統一戦線運動の一翼としてのセツルメントの性格として“地域・学園そして国民全体にかけられている攻撃を、セツラー集団として他の民主勢力と共に運動し、解決できる場であり、セツラー集団の力を基盤に働きかける中、基盤に民主的な力を蓄える場であり、その二つの行動を通じて、統一と団結の行動能力を身につけ、民主的主権者、組織者として自己形成する場”として位置づけていました。このように、大学や地域における日常的な生活利害にかかわる政治的実践を、いろんな団体、諸組織と行うことを通してセツラー自らの下からの「対抗力」を身につけることができるのです。ですから「私たち一人一人が『力』をつけ」「手をつないでいこう」という視点をもって大学の諸機関・サークルや、地域の民主的諸団体と提携し、交流し、共に運動をしていくことは、ものすごく価値のあることであり結局一人では何もできないという無力感を克服しつつ、一人の力は二倍三倍と大きくなっていくものなのです。このような闘いの運動を各単セツ、各連セツで取り組んでいくことは、今非常に求められています(同上:65)。

1976 年の第 31 回大会において、「1. だれでもどこからでも参加できるセツルメント 2. だれもが日々の実践で感動し確信をつかんでいけるセツルメント 3. 一人ひとりが現在と将来の生き方までをも考えられるセツルメント」という学生目線のスローガンが掲げられ、翌年の第 32 回大会では、「活動のテンポもセツラーの成長にこそ基本をおく」ことが確認された。また、1986 年の第 41 回大会基調では、「学生の自己教育の場」として学生セツルメントの位置づけが再度明示された。しかしながら、第 31 回大会以降の議論は揺れ動きともいえるもので、全セツ連が解散を迎える 3 年前の 1986 年にあっても理論偏重の感が否めず、政治的思考性の強さがみられる。社会福祉分野において専門職の役割が明確化され、また大学進学率も伸び学生の意識も変容する中で、上述の運動論や地域実践の意義づけは、現実に見合ったものとはいえなかった。ここに、情勢把握の不充分さおよび全セツ連の提起と単一セツルの実践との乖離を認めざるを得ない。

（3）全セツ連の解散とその後―第 42 回大会以降の動向―

この間の基調報告等では理論や方針の議論が続き、セツラーの声として一部が取り上げられるのみであったが、全セツ連の「危機的状況」について、1987 年の第 42 回全セツ連大

会基調報告に明記される。それは、大会の意義、任務についての中で、「二.セツル運動の危機的状況にかんがみ、活動に対する実感を率直にだしあい、相互評価を旺盛に行っていく中で今後の結集の軸となるセツル像、および依ってたつべき民主的価値観を確立していく場」(全国学生セツルメント連合 1987)というものである。ここにきて初めて全セツ連の公式文書に「危機的状況」という言葉がみられるが、これまでの論から、それ以前よりその兆候はあったと推察される。また、第 2 章「私たちのあゆみ」では、41 回大会の内容に触れ、「41 基調の基本的な問題意識として汲みとれる、『活動像の不明確化』『セツルメントのお遊びサークル化(分散化)』の傾向は、多くの執行部セツラーが危機を感じてはいても、解消の方向性をみいだしている所は少ないというのが現状です。また、新歓も、…略…低い到達にとどまり、単セツ自体の存続も危うい所が多々見受けられます」(同上:4)と述べる。

こうした 1980 年代後半の全セツ連大会の基調報告から、全セツ連と各セツルの実践との温度差や乖離がみられ、組織としての維持が「危機的状況」にあることがわかる。そして、それまで内在化していた問題が「決議機関が実質的には機能せず、書記局も人事が立たない」(かろちん 1990:1)状況として顕在化し、1989 年 3 月 14 日に全セツ連は「機能停止を宣言」することとなる。決議機関としての全セツ連の連合委員会が機能しない根本問題として、単一セツルの中で継承ができていないために書記局の人事が立たないこと、それが全セツ連の継承を妨げることになるという悪循環をうんだとの指摘がある(同上:1)。一方で、単一のセツルメントはその後も地域実践を継続しており、ここからも全セツ連の方針と実際のセツルメントのありようが一致していなかった側面が見出せる。

４．全セツ連解散の背景

これまでの論から、全セツ連解散の背景として、財政難、運動に意義を見出せないセツラーの増加、理念や思想の不一致などが見出せる。他方で、直接の原因とされている「書記局も人事が立たない」という点に注目するならば、全セツ連の執行部、書記局の体制や負担の問題も背景にあると考える。日東セツルメント(1982)によれば、「全セツ連の執行部を全セツ連連合書記局というのですが、阪セツ連からは 2 年半ものあいだ、この書記局員が選出されていません」(同上:25)[10]とある。ここから、人数的には増加している 1980 年の段階ではすでに、地域連合のレベルで「書記局も人事が立たない」状況があり、組織体制維持の困難さが出ていたことがわかる。

組織体制について補足すると、各単一のセツルメントは、地域の連合に所属し、同時に全セツ連に所属することになる。そのため、例えば、阪セツ連所属セツルの場合、セツル内部での役割のほかに、阪セツ連の執行部にあたる常任委員と書記局員を選出し、さらに全セツ連の書記局員も選出しなければならない。日東セツルの場合、全セツ連の連合委員および書記局員を含む常任委員会は 6 名から成る。そして、中間執行部として大学セツラー会の執行部が大学ごとに複数名割り当てられ、さらに地域執行部として各パート[11]のリーダー(パートキャップ)、各大学セツラー会の事務局員と阪セツ連事務局員という体制となる(同上:27)。これらを合計すると、日東セツルメントの 82 年度前期の体制・人事の場合で、30 名を超えるセツラーが何らかの役職に就くことになる。このような体制は、セツ

ラー数の多いセツルメントでは可能であったとしても、人数が少ないセツルで、かつ4年間で卒業する大学においてこの体制を維持することは困難であったことが推察できる。

1988年にこぶしセツルに入り、最後の全セツ連大会に参加したペーター氏によると、大会に向けて執行部や書記局は1週間泊まり込みで資料作成を行う他、全国のセツラーが集まって定期的に会議を開催するなど、その負担がとても大きかったという[12)]。こうした書記局員の多忙さについては、ほかのOSからも多く聞かれた。関連して、大谷女子大Sr会(1974)ではセツルにおける1週間の主なスケジュールが記されている(表5−3)。

月曜日	書記局会議
火曜日	Sr総会または大学Sr会
水曜日	中パのパート会
木曜日	執行部会議
金曜日	小パ(2つ)幼パのパート会
土曜日	実践
日曜日	中パの勉強会(隔週)

表5−3　セツルの1週間　　(大谷女子大Sr会1974:5のB)

上記の表に加え、書記局会議の前には常任委員の会議が週に2回、全セツ連大会の中央実行委員にはその会議もあった[13)]。これらから、非常にハードスケジュールだったことは想像に難くない。また役員の学生は大会準備、定期委員会の出席、討論資料や大会基調の作成、機関紙の発行や加盟セツルへの連絡など、多忙を極め、学生生活よりもセツルメント活動を優先せねばならないような状況も少なくなかった。しかし、大学生をめぐる状況に目を向ければ､進学率が上昇し大学進学が身近になる一方で大学の学費や物価が上がり、学費や生活費のためにアルバイトをする学生も多く、また、大学においてもカリキュラムが厳格化され、資格取得に力が入れられる中で、それまでのようにサークル活動に時間を使うことができなくなっていた。

この組織体制は伝統的に引き継がれてきたものであるが、大学をめぐる状況の変化に対応していたとは言い難い。大学進学が広がり、課外活動の選択肢も増える一方で課外活動に使える時間は減るといった本期の状況、現実に合った体制ではなかったといえる。全セツ連大会の基調では､「大学をめぐる情勢」の項があり、上記で指摘した学費の問題、アルバイトや大学のカリキュラムの問題への言及も頻繁にみられた。そうした情勢把握と実際の組織体制のあり方が結びついていたならば、別の可能性もあったのかもしれない。

ただし、全セツ連の衰退と解散には、もう1つ大きな背景があると考えられる。本節第2 項での指摘にも関わるが、社会福祉の専門分化が進み、制度・政策の整備・拡充も進むなかで、それまでの実践内容やフィールドの転換を迫られた側面である。その意味で、本期は、社会の状況変化に合わせた新たな活動の創造や転換が強く求められていたが、現実には社会状況に応じた活動の創造や転換がなされなかったセツルが徐々に衰退をみせ、全セツ連体制の維持困難にまで至ったといえる。この点については後述でも論じたい。さらに、セツルメントのもつ運動の側面の位置づけが不明確であったこと、政治的課題とセツルの活動がどのように結びつくのかがわからず、大学生の政治への関心や意識も変容して

いることなども全セツ連解散の背景に挙げられるだろう。言い換えれば、日常実践から地域運動を展望していくことが難しい社会になってきたこと、学生の意識差が大きくなってきたことが全セツ連の解散に関係しているといえる。一方で、的確な情勢把握とそれに伴う実践の転換、学生セツルメントの意義づけなどが明確であれば、ほかの道もあったのかもしれない。

以上をふまえれば、全セツ連解散の背景は、財政難、運動に意義を見出せないセツラーの増加、理念や思想の不一致、執行部の多忙さ、活動内容の問題のほか、社会状況や社会福祉の動向との関連など、複数の要素が相互に関連しあっていたといえる。

では、全セツ連解散を含む本期において、各地域の連合ではどのような動きがあったのだろうか。次節で述べる。

第３節　各地域の連合組織の動向―全セツ連との関係―

第 2 節では、全セツ連のなかでさまざまな問題が顕在化する中、学生セツルメントの定義・意義づけを試みてきたこと、全セツ連執行部と各セツルの間に温度差がみられ、結果的に 1989 年に全セツ連が解散に至った経緯について述べた。本節では、本期における、各連合の動向を概観することで全セツ連との関係性について検討したい。

１．阪セツ連の動向―加盟セツルの変遷と議論および特徴―

（１）阪セツ連加盟セツルの変遷

1968 年に成立した阪セツ連は、その後も活動を継続し大会と交流会がそれぞれ年に 1 回開かれた他、各代表者は大会や交流会の前から何度も集まり準備や討論を重ねていた。ここでは、本期における阪セツ連の構成を中心に概観することで、その展開を知る一助としたい。

1976 年発行と推察される[14]夕陽丘セツルメン発行の「夕陽丘セツル 10 月方針合宿！」では、阪セツ連の歴史と当時の構成大学・地域について記述されている。これによると、阪セツ連は、常任委員会の下に書記局と事務局が設置されている運営組織があり、9 セツルメント 12 地域から成る。なお、組織構造としては書記局員を阪セツ連の常任委員が育て、書記局員が各セツルメントで話をし、広げていくという構造だった[15]。以下、資料をもとにセツルメント名、受け持ち地域数（資料に沿って丸囲みで記述）、構成大学を示す。

夕陽丘①…社会事業短期大学、大阪外国語大学、阪南大学
猪飼野②…大阪教育大学、清和女子
日東③④…大阪市立大学、奈良教員養成所、基督教短期大学、関西女子短期大学、厚生学院、愛泉女子大学
住吉⑤⑥…府立大学、白菊看学、大阪女子大学、大谷女子大学、公衆衛生短期大学
東淀川⑦⑧…関西大学、成蹊短期大学、金蘭短期大学
衣摺⑨…近畿大学、四条畷、四天王寺、樟蔭
庄内⑩…阪大、医（？）短
未加盟　八戸ノ里（東大阪短期大学⑪）、星ヶ丘（関西外国語大学⑫）

夕陽丘セツルメント（不明：5）

大谷女子大学 Sr 会(1974)では、住吉、日東、東淀川、夕陽丘、猪飼野、衣摺の 6 セツルが阪セツ連の構成セツルとなっており、庄内、八戸ノ里、星ヶ丘が加わっていることが読み取れる。また、近隣を中心に複数の大学がともに活動していたことも分かる。さらに、同資料では、1971 年は 70 名ほどのセツラーだったのに対し、1974 年には 330 名あまりのセツラーが大阪全域で頑張っているとの記述があり、組織としても大きく、活動も活発であったといえる。

その後の展開として、1981 年時点での阪セツ連の構成と具体的な人数、パート、活動内容を表にして示す(表 5－4)。

セツルメント名	実働数	構成大学	地域	パート
住吉	65 名	大阪府立大学、大阪女子大学、大谷女子大学、府立公衆衛生専門学校、大阪千代田女子短期大学、大阪女子短期大学、他に府立看護短期大学と大阪工業大学の学生が 1 名ずつ参加	新今宮地域（恵美公園）と白鷺地域（府営百舌鳥梅町団地）	幼児パート・小学校低学年パート・高学年パート・中高青パートの 4 パート×２の計 8 パート
夕陽丘	17 名	大阪社会事業短期大学と阪南大学	夕陽丘地域と四条畷地域、天美地域	障害パートは四条畷地域、幼児パートは学内、夕陽丘、天美
猪飼野	約 10 名	大阪教育大学、帝国女子大学	大阪市天王寺区桃谷	
日東	55 名あまり	大阪市立大学、関西女子短期大学、大阪基督教短期大学、市大付属看護学校	浪速区の下寺、日東地域。愛染公園やアパートの屋上、路地でドッチボールや王様陣取りや、地域の集会場で勉強会等	下寺幼パ・児童部・中パ（男）（女)・老パ、日東小低①②・小高（男）・中パ（女)・中高青パの 10 パート
衣摺	約 50 名	近畿大学、東大阪短期大学、四天王寺国際仏教大学、樟蔭女子大学		衣摺地域、八戸ノ里地域、障害者パートの地域・パート構成

表 5－4　1981 年時点の阪セツ連の構成

四天セツラー会(1981)をもとに筆者作成

1976 年と比較すると 4 セツルが消失しているものの、1981 年段階でも、様々な大学が協同でセツルメントを構成し、児童・障害・高齢・青年など多分野にまたがった活動を大阪だけで 200 名近くが行っていたことが分かる。

前節で見た通り、本期の最後となる 1989 年に全セツ連は体制維持が困難となり解散を余儀なくされる。では、阪セツ連に加盟していた各セツルの状況はどうだったのか。それを知るために、全セツ連解散の 2 年前、1987 年の阪セツ連の構成を表 5－5 で示す。

セツルメント名	構成大学	パート・その他
日東	大阪市立大学、大阪市立大学医学部付属看護専門部、大阪府立看護短大、関西女子短期大学、大阪キリスト教短期大学	日東児童部（３歳～小６）日東中学部、日東高等部、下寺幼児部（３歳～小３くらいまで）、下寺児童部（小６中心）、下寺中学部、下寺高校生・青年部（小学校の体育館でバレーボール、集会所で話し合いを交代にしている）、下寺老人部（一人のおばあちゃんの家を訪問して散歩に行くなど）
夕陽丘	阪南大学、大阪女子短期大学	障害児（者）と児童部
衣摺	メインは近畿大学。他に、東大阪短大、大阪樟蔭女子大、大阪商業大学	幼児と障害者
住吉	大阪府立大学、千代田短期大学、大谷女子大学、大阪女子大学	1986 年に幼児対象のパオパオパートが新設される。

表 5－5　1987 年段階の阪セツ連構成セツル

（大阪府学生セツルメント連合(1987)をもとに筆者作成）

本資料では、セツラー数が記載されていないため、全体を捉えるうえでの限界があるが、猪飼野セツルの消失、構成大学の変化がわかる。なお、結成時より夕陽丘セツルメントの中心的存在であった社会事業短期大学は、1981 年 4 月に大阪府立大学社会福祉学部となり、1987 年にはキャンパスも夕陽丘から大阪府立大学の中百舌鳥キャンパスに移転している（大阪府立大学創基 130 年事業企画委員会編 2015:30-31）。そのため、夕陽丘セツルメントの構成大学から名前が消失している。なお、阪セツ連大会は 1989 年の冬の大会以降の記録が見当たらないが前節で述べた通り、全セツ連解散後も各セツルメントの活動は継続されている。ただし、その質は、大きく異なっていく。この点は、次章で述べる。

1970 年代後半にかけての加盟セツルおよびセツラーの増加、1980 年代に入って微減をみせ、1980 年代後半での縮小という流れは、全セツ連の流れとも一致する。単純な加盟数だけで比較すれば、1980 年代前半から後半にかけては、全セツ連の減少が大きいが、これは複数の地域連合からなる全国組織であることからくるものであると考えられる。そのため、

加盟セツル数の変遷のみをみるならば、全セツ連の動向とも重なるといえる。

ここまで、阪セツ連加盟セツルの変遷から、おもに阪セツ連の量的な変化について概観した。では、全セツ連が解散に至る本期において、地域の広域連合としての阪セツ連ではどのような議論がなされていたのだろうか。また、それらの議論は全セツ連との関係からどのように捉えることができるのだろうか。

（2）阪セツ連大会における議論とその特徴

①阪セツ連大会討論資料にみる特徴と具体的な議論の内容―現実に即した方針―

阪セツ連大会の討論資料の構成は、「私たちをめぐる情勢」「この一年間の私たちのあゆみ」「国民的闘いの一翼を担って」「学習調査活動」「執行部問題」等と各部報告とに分かれている点で全セツ連大会の討論資料と共通している。しかし、その年によってニュアンスは異なるものの「地域実践の飛躍のために」や「大阪の地に根ざした総合的科学的学生セツルメント運動の実践化を目指して」といった項目は全セツ連大会の討論資料にはみられない。また、第18回大会の討論資料（大阪府学生セツルメント連合書記局1985）からは、全セツ連大会の討論資料で1987年まで確認できた「国民的闘いの一翼を担って」の項目が消失していることも特徴といえる。

議論の内容としては、全セツ連大会の討論資料が社会情勢や政治への言及、運動論的な文章が多かったのに比して、阪セツ連大会の資料は全セツ連で出された提起を引用・継承しつつも大阪府の社会状況への言及や各項目に阪セツ連加盟セツルの実践例が多く取り入れられ、平易な言葉で論じられていること、実践内容についての詳細な記述が多い。

次に、具体的な議論内容について述べる。

1977年、10年目を迎えた第10回阪セツ連大会の討論資料では、数十名で出発した阪セツ連が、2回の全セツ連大会を大阪で開催したほか、9回の阪セツ連大会、8回の阪セツ連交流会を行い、26大学300名と大きく発展してきた（大阪府学生セツルメント連合書記局1977：1）とした上で、発展に至る試練として馬淵セツルの歴史について触れている。それは、1960年代前半の生産点論争の時期、馬淵セツルが「当時強まりつつあった過激な学生運動の影響を受けて、セツラーが学生であることを放棄し、『専従』の形で、地域住民を『指導』する運動として行われた」（同上：14）ことを指し、そのことによって地域住民の信頼を失い、地域から追い出され、解体していったというものである。その頃は、「60年安保闘争の高揚の中でトロツキスト暴力学生集団が全学連の指導部を占拠し、その組織を分裂・崩壊させていった時代」（同上：14）であり、「多くのセツルで地域からの追い出しが続出」（同上：14）したと振り返る。そうした「誤った運動」（同上：14）は、①学ぶことを基本に据えること、②要求実現を運動の基礎に置いたことの2点を貫く中で克服した、と述べている。学生セツルメントの発展の要因にも上記の2点のほか学生の社会的地位の変化を挙げている。これは、「学生生活全般が厳しくなる中で、誰でもが活動でき、学べる活動形態にせざるを得ないという必然性が活動形態の変化を促して」（同上：15）きたとしている。ここから、阪セツ連が1960年代以降の学生セツルメントの流れをどのように捉えてきたかが読み取れる。即ち、地域住民を指導する運動は「誤った運動」であること、また学生セツルメントが学ぶことを基本に据え、誰もが参加できる形態に変化したことは、学生生活全般が厳しくなる中での必然であったという捉え方である。10年という節目であり、かつ、地域を限定した組織で、しかも地域性を反映した議論を重ねてきた阪セツ連だからこそ、こうした、あ

る意味で率直といえる振り返り方ができたのではないだろうか。

また、本資料では、母親らの要望と力で生まれた共同保育所「つみき園」に八戸ノ里セツルメントのセツラーも協力を深め、子どもを守る運動として発展してきている例などを挙げ、「掲げる運動」から「実現していく運動」として住民運動が広がっているとし、「その中でのセツルメントの役割は更に大きくなってきている」と述べる(同上:42)。つまり、住民運動が活発化するなかで、ともに協働していく運動の中にセツルメントのあり方を見出そうとしているといえる。この点に関しては、大阪府学生セツルメント連合書記局(1979)からも指摘できる。本資料では、「私たちの学生セツルメント運動は『地域における方向性』として地域の民主的発展を展望し、地域の教育力の回復や住民自身の手による民主的自治組織の確立をめざしていることをしっかりと確認しておきたい」(同上:14)とした上で、全セツ連の基調を引用し、それを認めつつも「そのことと、今の情勢から求められている活動像、運動の方向性を明確にしておくことは区別」(同上:14)すべきとしている。そして「過渡的にはセツラーが組織者、援助者（ひっぱっていく立場）になりうるにしても、…略…住民の組織化の過程には、住民自身の認識の変化とセツラーの認識の変化が豊かに含まれて」（同上:14）いると述べる。全セツ連がセツルを中心として地域を組織化するというニュアンスが強かったのに対し、住民もセツラーも互いに認識が変化する中で、住民自身の手による民主的自治組織が確立されるとした点に特徴があるといえる。

一方で、セツルメント運動から学びきれていないことや、セツル活動を子ども会活動に矮小化してしまっている傾向を指摘し、1980 年代は定式化されたセツルメント像ではなく、「実践の哲学」の神髄を貫くことで「八〇年代にふさわしい総合的科学的セツルメント像」を探求していくことが必要だと述べる(同上:46)。

本資料では、今後 1 年間の基本的な方針として①身の回りや地域・学園の現状と要求の把握、②学習・調査活動や他団体との提携の強化、③セツルメント運動 54 年間の歴史で蓄積されてきた「原則的内容」を創造的に学ぶと共に OS や知識人・専門家などとの結びつきを強め、そこから豊かに学んでいく事、④民主主義を貫く事、⑤週に 3 度も 4 度も会議があるといった不合理性を検討し緊急かつ独自の課題として活動スタイルを改善していく事、の 5 点が挙げられている(同上:43-44)。ここから、全セツ連の方針と比べて、より実践や各セツルの現状に見合った方針が検討されていることが分かる。以上をふまえると、阪セツ連は全セツ連の議論や方針とは一定の距離感を持っていたといえるだろう。

一方で、全セツ連が解散に至る本期において、阪セツ連はどのような課題や問題意識があったのだろうか。全セツ連での議論との重なりや違いに着目しつつ検討したい。

②1980 年代の阪セツ連大会における議論―問題の顕在化―

第 14 回阪セツ連大会の討論資料(大阪府学生セツルメント連合書記局 1981:14)では、実践やパート会に意味を見いだせなくなってきているセツラーの声、実践だけ行けばいいのではないか、という声が聞かれること、実践はできていてもパート会がもたれていないパートが多数見受けられることに触れている。また、パート会でもなかなか一致点を見出せない状況になっており、「セツラー自身が問い返されたり、認識の変化に迫っていくような討議がなかなかなされません」（同上:15)と、この間の傾向を述べている。

また「地域に根ざした地域運動の発展のために」の項では、地域住民が主体の組織と提携していき、一定地域の人々の要求を探ってきている点や機関紙の地域定着を進めようと

している点を前進面として評価しながらも、日常実践から地域運動を展望できていない点や地域住民の要求の本質を捉えられない点を弱点とする(同上:18-19)。

1984 年の第 18 回阪セツ連大会においては、上述の通り、「国民的闘いの一翼を担って」の項が消失している。これについて、この間阪セツ連において斗いの運動は位置付けられなかったことの背景として、「第一にセツラーの『見る力』の弱さにより、日常実践における問題と情勢との関連が見えなくなっていること。第二に対象の生活背景は捉えられてもそれを地域情勢・祖国情勢と関連させることができず、対象者の要求および成長・発達とそれをはばむ情勢の対立点が明らかにしきれていないこと。第三に真実を伝えきらないマスコミの影響『政治嫌い』。第四に以上のこととあいまって執行部セツラーが斗いの運動を切り捨ててしまい、スケジュールに組み込まないこと、又、『情勢や斗いのことを出すと他のセツラーがいやがるのでは』等の現実主義・消極主義がある」(大阪府学生セツルメント連合書記局 1984:13-14)ことを挙げている。

ここまでの討論内容や記述から、多様なセツラーがいることによって生じる意識差、関連して地域での日常実践と運動の関連が見出せないセツラーの存在、運動を掲げていくことでの組織維持の難しさが垣間見られる。これらから、全セツ連での議論内容との共通性が見出せる。他方で、阪セツ連では、構成セツルや個々のセツラーの声をより具体的に反映しているといえる。つまり、本項での検討をふまえれば、阪セツ連は全セツ連と一定の距離感がある一方で個別のセツルや個々のセツラーに近い立場であったと考えられる。

次に、愛セツ連の動向や議論についても検討し、阪セツ連の動向との比較および全セツ連との関係性の検討を試みたい。

２．愛セツ連の動向―加盟セツルの変遷と本期の特徴―

次に、愛セツ連の本期における動向について述べる。1974 年時点で、愛セツ連は、井戸田、ヤジエ、トロッコ、島田一ツ山、町ッ子、大根の 6 セツルから構成されていた。また、「少年少女を育てる愛知センター設立に愛セツ連として参加」(全国学生セツルメント連合書記局 1974:43)するなど、連合としての取り組みがあったこともわかる。1978 年の愛セツ連加盟セツルは、ヤジエ、井戸田、島田一ツ山、トロッコ、大根(中京大)、柴田(名工大)、町っ子(愛知大・淑徳短大・名古屋市看護専門学校・名古屋商業大学等)、呼続と 8 セツルに広がる(愛セツ連大会実行委員会 1978)。そして、「あわせて四百四十八名の学生セツラーを擁し愛知県下十数校の大学で活躍している」(愛知県学生セツルメント連合 1978:3)とされるなど、活発な広がりをみせていることがわかる。1983 年段階でも、柴田セツルを除く 7 セツルが活動(愛知県学生セツルメント連合書記局 1983:202)している。1986 年 8 月になると、柴田セツル、呼続セツルがなくなり、名古屋短期大学からなる名短セツルが加わっている。全セツ連、阪セツ連が 1980 年代後半になって加盟セツル数を減らすのに対し、愛知では新たなセツルが増えていることが特徴的である。その理由としては、第 4 章でも述べたとおり、日本福祉大学からなるセツルが愛セツ連の大半を占めていることから本期の大学合併などの影響を受けなかったこと、思想的にも一致しているという性質を有していたことが考えられる。

思想的一致という点については、例えば、1983 年の第 19 回愛セツ連大会基調報告では、「国民的闘いの一翼をめざして」の章に 14 ページが使われ、大きな位置づけをもっていたことが窺える。そのなかでは、「先期、地域の子どもの生活実態にひきつけたところで、保

育行政に視点をあてて臨調を批判していこうとした」「日本型社会福祉の福祉観とセツラーの福祉観を明らかにしてきた」(愛知県学生セツルメント連合 1983:221)など、実践と政治的課題および社会福祉のあり方を結び付けながら考えようとする姿勢が垣間見られる。

「子どもの生活現実」と「その中での対象の要求」を視点とした情勢学習会の討論から具体的にみてみたい。

ヤジエセツルに参加しているAは、実践が終わってからいつも昼ご飯を他の子のところで食べさせてもらっているという。

> NS・PK//子どもAには何の責任もない。両親の離婚、親の蒸発という現状が今って、どこにでもあるなあ。もっと考えないといかん、子どもAにも他の子と同じように生活していく権利があるはず。保育所の必要性が問われる。少しでも子どもらしく生活していく権利を保障するような保育所が大切。」
>
> Sr・N//子どもAにはどうなってほしいと思っているのか。
>
> NS・PK//子どもAだったら、みんなと一緒に思い切り遊んで欲しい。
>
> 愛知県学生セツルメント連合(1983):221

このほか、「ふだん、地域に入っても子ども遊んでいない。お母さんが働いている間、保育園へあずけている。地域の中で遊ぶ時間ない。日常的にどう遊びが位置づいているのかというところを考えると保育園で遊ぶこと大切。夫婦そろって働いても 20 万も収入はない。…略…お母さんいつ休めるかわからない。そんな中で子育てのこと考えるの大変。働いてる間保育所に入れる必要ある。社会サービスによってお父さんお母さんの要求満たせない」といった意見から、「保育所は子どもの発達の保障の場」として必要であることが確認される。

> Sr・P//地域の住民たちの要求は社会保障なしには実現できない。今、臨調の政策で保母さん、児童センターの職員などの自治体労働者が削られている。専門を学んでいない人が社会福祉職にまわされたり。社会福祉を講義で学ぶことは価値のあることだ。今だったら、地域から求められてる社会福祉がカットされている。反面、福祉関係につきたい人は増えてるが労働者の保障されるのか。今の攻撃は自分たちにもかかってきている。
>
> (同上:222)

上記から、実践で出会った地域の現実について、子ども、父母、地域住民やセツラー自身の要求の視点から考え、政治的課題と結びつけて考えていることがわかる。また、セツラー自身が学んでいる社会福祉学と現実との関連を意識していることや、将来福祉職に就く自分自身にも関係する課題として考えていることも指摘できる。ここでは、全セツ連が陥りがちであった観念的な運動論ではなく、実践を通して出会った子どもらや地域の現実に結びつけて現実的な課題から捉えている点に特徴があるといえるだろう。

さらに、愛セツ連においては、政治的課題のみが「国民的闘い」として位置づけられていたわけではない。同じ章の中の別の情勢学習会の内容を取り上げる。

> 視点④今何を大切にしていきたいか。自分のやりたい福祉ってどんなもんか。

NSｒ・Ar//大学入るまで日曜学校やっていて、福祉には興味あった。いろんな人と接する中で自分をみがいていきたい。将来は養護学校の先生になりたい。

保育所とか必要としているのがあれば何らかの形でおぎなっていくことが大切。今、入所基準とかあって入れない子どもがいる。こういうのなくしていきたい。日曜学校やっている時は感覚的だったけど、理論だてて話すことができるようになった

…略…

自分たちのやっていきたいこと、政府と対立している。実践でやっていきたいこと、子どもの発達保障していこうということ、自分の要求でもある。

学ぶ活動自体も運動なんだ。全てつながっている。根底には子どもへの願いがある。自分のために実践やってるんだし、自分がいて、対象がいて、願いがあって、学習して運動がある。

このセツラーは、セツルの活動は理論が伴うという点で、日曜学校との違いと感じている。また、地域に出向き、地域の生活や現実に向き合う中で、願いや要求をもちながら関わり、学んでいくことそのものが運動であるとの位置づけがセツラーの中で体感を伴って理解されている。ここには、学生セツルメントの地域実践と運動の側面とが有機的な連関が見出される。「国民的闘いの一翼として」という表現や、愛セツ連の基調報告の論調は全セツ連と親和性が高いことが見出される一方、議論を通して現実に応じた位置づけがなされていたこともわかる。

第4節　単一のセツルメントにおける実践

本期は、全国組織としてのセツルメントのあり方が大きく問われる時期であることについて、第2節、第3節で述べてきた。その一方で、学生運動とはまた別のかたちで何かをしたいという学生が入ることで1960年代後半から1980年代前半の組織拡大につながった側面がある点にも言及した。では、そのような本期において、どのような実践が行われたのか、検討したい。

１．関西における学生セツルメントの実践―障害児者パートの実践と学生をめぐる状況―

（１）障害児者パートの取り組み

第 1 節で述べた通り、社会福祉の専門化、法整備が進んだ本期であるが、障害分野は他の分野に比べて法整備や制度化が遅れていたため、施設数も不足していた。この点について小笠原(2002:187)は、「今日でも障害者施設の絶対的不足をカバーしているのが、全国に約四〇〇〇カ所に及ぶ無認可の小規模共同作業所であるが、この施設も通所施設として障害者、親、職員たちの努力によって社会的な役割を果たしている」と述べている。こうした共同作業所づくりの取り組みは、障害者施設の不足や遠隔地にあり利用しづらいといった状況を背景に、「『身近で利用できる施設を』という要望にもとづいて親や関係者の努力によって全国に急速に広がっていった」(同上:188)ものである。こうした障害児者をめぐる状況を背景に、関西では夕陽丘セツルメントと衣摺セツルメントの二つのセツルメントが障害児者のパートをつくり活動をしていた。そうしたパートがつくられた経緯は後述す

るが、1986 年時点で障害児者部として活動を行っていたのは先に述べた 2 つの他、仙セツ連仙台保健部セツルメント西多賀ブロックのみであった(全国学生セツルメント連合 1986:45)ことを考えると、関西のセツルメントとして特色がある活動であったといえるかもしれない。以下、具体的な活動やパート結成の経緯などについて述べる。

まず、衣摺セツルメントの障害者パート成立の経緯について以下に引用する。

> 昭和 51 年（1976 年）に東大阪障害児者を守る連絡協議会において、障害者の働く場を保障する共同作業所づくりの運動がすすむ中で、障害を持つ仲間の多くが、学校を卒業しても、働く場もなく、ずっと家の中に閉じこもっており、社会の中で孤立していることがわかりました。そこで、障害を持つ仲間や親が集まってひとりぼっちの青年をなくそうということで「なかよし青年会」をつくりました。そして、衣摺セツルメントにボランティアの要請があり、4 人の Sr が青年会に入会し、障害者パートが発足したのです。そして卒業した後も社会人としてなかよし青年会に参加していたため、社会人や一般学生を保障するために、なかよし青年会のボランティアが集まって障害者問題を学ぶ会「こよし会」が結成されました。それから障パはこよし会と一緒に青年会（実践）に参加しています。
>
> （衣摺セツルメント 1982:1）

上述のように、地域の団体からの要請をもとにパートが結成された。衣摺セツルメントの障害者パートでの実践は第 2・第 4 日曜の月 2 回で、平均 20 名程が参加していた。対象は 16 歳から 32 歳の青年で、養護学校に通学している人、共同作業所や一般企業で働いている人、家の中にずっと閉じこもっている人等、様々である。また、障害種別は知的障がいや肢体不自由、情緒障害等で、障害種別も重さも様々であった。活動内容は、「仲間」[16]が中心となった実行委員会で決めていた。話し合いや昼食の買い物、歌やゲームといったレクリエーションからなる日常実践の他、ぶどう狩りやハイキング、クリスマス会等の行事も実施していた(同上:1-3)。

①夕陽丘セツルメント障害児パートの実践―成立の背景―

次に、夕陽丘セツルメント障害児パートを例に、より具体的な活動内容について述べる。

夕陽丘セツルメントの障害児パートの成立経過について、夕陽丘セツルメント(1977:4-5)[17]では、以下のように記述されている。

1975 年、「守口障害児を守る会」の方から話がある。その内容は、

① 大阪府立寝屋川養護学校ができ、学校に行けるようになったが、午後 2 時ごろに終わるため、お母さんは休む暇もなく迎えに行かなくてはならない。

② 施設に行っていた子供もおり、学校が終わってからの事は母子とも大きな問題点である。

③ 「守る会」としては障害児の学童保育を制度化して行政に認めてもらいたいが、すぐには無理なので制度化が勝ちとれるまで子供会としてセツルメントにやってもらいた

い。

とのことであった。

セツルに申し込まれた理由として、１.組織がしっかりしている、２.地域のことを充分考えている、３.Sr の中にも障害児（者）問題への要求がある、の 3 点が挙げられている。

本資料は、他のレポートと同様、地域紹介から始まっているが、その次に「お母さんの願い」という節が設けられているのが特徴的である。その部分を引用する。

〇お母さんの願い

障害をもった子供達はほとんどが小学校あるいは養護学校に通っていますが、学校の終わるのが早く、帰宅後はお母さんがどうしても目を離せないため満足に買い物にも出れない、働きたくても働けない、自営業で夫婦共に働かねばやっていけず、障害をもった子供をやむなく遠い施設に入れている、といった現状があります。

そのような状況で、四条畷、手をつなぐ親の会のお母さん方から、放課後、健常児のように学童保育を制度化してほしい、という切実な要求が出されてきたのです。―学童保育さえ実施されたら、家事も楽になるし働きにも出れる、施設から呼び戻して一緒に暮らせる。そこで、即制度化が無理なら 1 週間に 1 度でもいいから自主的に学童保育を始め、実績をつくっていこうと私達の実践が始まりました。

（同上:2）

障害児パートだけは実践場所が夕陽丘でなく四条畷である理由は、お母さんの要求がとても強いこと、にも関わらず運動が遅れているので強化していくためであるとされている(同上:4)。活動は、毎週土曜日、障害児通所施設を借りて行っている。活動にあたっては、施設の保母(親の会の中心人物)や夕陽丘セツルの OS、障害児パートの子ども達が通う学校の先生等がアドバイザーとして参加しており、母の会、施設、学校等との協力・連携のもとでの実践が行われていることが資料より読み取れる。

具体的な実践内容としては、14:00－16:30 を実践時間とし、かけっこ・挨拶・体操(15 分間)→設定保育(30 分間)→おやつ(45 分間)→自由遊び(50 分間)→終わりの挨拶(10 分間)と明確に設定されている。設定保育としては、これまで、こいのぼり作りや公園での外遊び、水遊び、汽車ごっこ、砂遊びなどをしてきたとのこと(同上:3)で、同資料の中に毎回の実践の具体的な内容や反省点も書かれている。また、夏休みには宿泊実践が予定されていることも記されている(同上:9)。実践では、通所施設のプレイルームと外の砂場・ブランコを利用しており、母親らはその間ホールで話し合いをしている(同上:3)。

②夕陽丘セツルメント障害児パートの実践―セツラーが学んだこととおかあさんの声―

夕陽丘セツルでの障害児パートの実践を通してセツラーはどのようなことを感じたのだろうか。セツラーが合宿で語りあった「思い出に残る実践」を一部引用する。

○思い出に残る実践

K1/わたしは、6 月 11 日の実践。Ｎちゃん[18]はいつも、ねころんでばかりで、わたし自身もこの子は何も出来ないんだって思ってたんだけど、偶然「せっせっせ」をやってみたら、ちゃんと、Ｎちゃんはやって、もっとやるように求めてくるんよね。わたしは、なんか、Ｎちゃんのことを、はじめて知ることが出来た気がした。

S/それは、また、Ｎちゃんの働きかけが K1 を変えたとも言えるとも思う。そして、今度はそれがＮちゃんを変えていく原動力になってほしいと思う。感動を大切にすることが必要だと思うよ。

P1/わたしは、5 月 21 日の実践。あの日は公園に遊びに出て、身体は疲れたけど、思いっきり身体を動かして喜ぶＲちゃんの顔を見て、とても、うれしかった。それから、7 月 2 日の実践。Ｙちゃんが水遊びですっごく生き生きしていたのでうれしかった。

S/子供が生き生きするということは、Sr も生き生きしているということであると思う。

M/生き生きするって、どういうことだと思う？

S/僕は、興奮していることだと思う。

M/僕は、没頭することだと思う。なんでも子供を中心に考えることが重要やと思うんや。

S/僕は、6 月 25 日の実践。あの日、僕はＹちゃんに、おもらしされたんやけど、なんかＹちゃんのことがかわいく思えて来たんだ。障パというと、実践が技術的になってしまう面があるけど、同じ人間として、認めて愛してやることが必要だと感じた。Ｙちゃんの淋しさを感じた気がして、Ｙちゃんに一段と近づいた気がした。守ってやりたい、という気持ちになった。

K1/子供に対する愛情というのが最も重要だと思う。

H/僕は、6 月 11 日の実践。僕にとっては、はじめての実践だったんだけど、Ｙちゃん「きしゃ」と言ったのを Sr が手ばなしで、すっごく喜んでいるのを見て驚いたんだ。

K2/普通なら、子供がしゃべるのはあたりまえという意識があるんで、Sr が単純に喜んでいるのは新鮮に写(マ)っ(マ)たんだと思うよ。

（夕陽丘セツルメント 1977:10－11）

ここから、実践のリアルな様子やセツラーが感じたこと等について話し合うことで深めていく姿が浮かび上がってくるのではないだろうか。また、それぞれの意見を尊重し、否定しない民主的な話し合いの場が持たれていることが伝わってくる。

上記とは別で、障害児パートの実践に関するセツラーの自己統括も一部を引用したい。

4－7 月の G(※実践:筆者注)を終えて、今思うことは子供の可能性を信ずることの大切さということ。…略…Ｔ君は自閉的傾向が強い子で途中から学童保育に加わったためにそれまで担当の Sr がついてなかった。それでパート会でＴ君の話がだされても”わからない”の一言で済まされがちだった。去年から”変化あるのかな”なんて不安いっぱいでＴ君の

担当になった。…略…でも 2 回ついてみて、T君の中に偉大な可能性がひそんでいるのでは、と確信した。呼んでも反応はないと思いこんでいたけれど、T君が気にいることで何回か繰り返し呼んだらちゃーんとわかる。…略…一番うれしかったのは、T君がおかしを私にくれたこと…T君の中に私が入れた、そんな大それたことではないけれどそんな気がした。…略…それとやっぱり“子供の可能性”にハッとさせられ今まで発展的に見ていなかった自分が問い返されたと思う。障害児の場合、“長い目”が大切なのだが、その長い目も、可能性を信じての長い目が必要だと思った。“変化あるのかな”という感じで見がちになっていた私には一大転機となった。子どもから学ぶ。Sr が変化してこそ、子どもも変わる…そうだと思った。

（同上:18）

ここまで、Sr の視点から夕陽丘障害児パートの実践を見てきた。では、母親らはどう感じていたのだろうか。同資料内「おかあさんの声」より一部引用する。

〇おかあさんの声　―成長とともに思う―

…略…障害を背負って生まれてきた子供には健常児のように自由に生活出来ない。外出する時も、外で遊ぶ時も誰かの手をかりないと危なくてほっておけない。二人三脚ではじめて、一人前以下の生活しかできない。心身やことばに障害をもつ人たちや家族の悩みや苦しみは、障害者本人とその家族だけにしかわかりません。…略…仲間はずれにされる我が子を見て涙を流す月日も多くあります。そんな時、やさしく手をかして下さったのがセツルの学生さんです。暑い日も、寒い日も、雨の日も、母親以上に熱心に 1 時間以上もかかる時間をついやして毎週土曜日保育に来て下さるその気持に励まされて、この子供たちが成長しても安心して働ける場所を近くに作ってあげよう…と思う心のゆとりも出来ました。…略…

（同上:16）

障害児の学童保育が制度化されていない状況のなか、親の会などと連携し、実績をつくろうと週に 1 回の実践を続けた経過からは、セツルの補完的役割と、社会に対して制度化を求める草の根的な運動の側面が見出せる。また同時に、セツラーの中にも障害パートを始めたいという要求があり、母親らや地域の要求、セツラーの要求に応じて実践が展開されたことや、セツラー自身の変化にもつながっていることも指摘できる。

しかし、活動が常に順風満帆だったわけではなく、毎回の実践の反省では、様々な課題について言及されており、問題点として、①場当たり的、②系統性がない、③Sr 集団がぎこちない(マンツーマン的、設定保育中の集中不足、学習不足、全体的な見方の不足)、が挙げられており、それらの解決に向けての見通し等も記述されている(同上:13-15)。他方で、セツルメントの課題は、内部の問題に限らない。その意味で、四天セツラー会の事例に触れる。

（2）学生セツルメントをめぐる状況―四天セツラー会の事例から―

セツルメント活動は、常に地域から歓迎され、受け入れられてきたというものではない。第 3 章 4 節では住吉セツルにおいて、矢田問題を契機に青年らが新たな子ども会を立ち上げた例を取り上げた。これは、部落問題に関わるケースだが、この他に、学生セツルメントが否定的に受け取られる背景には、セツルメントがもつ政治性・思想性に大きく関係している場合もあった。実際には、全セツラーが同じ思想のもとで活動していたのではなく、様々な考えをもつ幅広い学部の学生が活動していたが、学生セツルメントに対して、日本共産党と関係しているという見方は地域にも少なからずあった。夕陽丘セツルメント(1975)の幼児パートの報告では、子供会に協力的だった親の態度が「共産党系だから」とセツルメントの子供会に子どもを参加させず、子ども自身も子供会に行きたい気持ちと親から行くなと言われての板挟みで困惑している様子が記述されている。また、住吉セツルメント(1973:3)でも、「運営上の問題として」の中で、「セツル＝民青[19]の打破」とある。

こうした学生セツルメントに対する見方は以前よりあったが、本期でも続いており、地域だけでなく、大学にもみられるものであった。典型的な例として、四天セツラー会(1981)では、はじめに四天 Sr 会についての説明がなされている。そこでは、学校側から方針にあわないということで、やや強制的に廃部を言い渡され学校側から部室を取り上げられた中で、それでも残った少数の KS と NS で頑張っていこうと盛り上げてきた、と記述されている。四天 Sr 会の母体は四天王寺女子大学、女子短期大学であり、衣摺セツルメントの構成大学であったが、1981 年春に四天王寺国際仏教大学（IBU）へと改名され、共学となる。本資料は、大学改名以降の「セツル攻撃」についてその経緯を記述したものである。なお、注意書きとして、このレポートが学校当局の手に入らないように、見つかると Sr が個人的な攻撃を受ける、と書かれている。以下、「前期四天 Sr 会の流れに沿って」より引用する。

> 1981 年 4 月 23 日 1 限朝拝後、男子学生全員がその場に残され、学校当局より次のような話がされる。
>
> ・セツルメント活動自体は良いこと、つまり子ども会活動ということでしょう
>
> ・しかし、St(※セツルメント：筆者注)の全セツ連、阪セツ連は民青(以下 M)によってバックアップされている
>
> ・学校の方針に共産党思想は合わない、つまり仏教思想と相反するものだ。もしそういう思想が入ってきたら大学内がめちゃくちゃにあらされるからそういう関(※連：判別不可のため筆者加筆)はたちたい
>
> ・就職に関して、就職が St に入っていると不利になる場合がある。会社は、共産党思想持っている人が入ってきて集団作られるとこまるからそういう危険分子はとらない
>
> ・男子はこれからの生活がかかっている。だから St に入っている人は考えなおして自分のやりたいようにして下さい。
>
> (四天セツラー会 1981:9)

これを契機に、Sr 内での話し合いが複数回もたれる。その後について以下一部引用する。

5 月 20 日、”セツルメント部、部長以下全員“が呼び出され、副学長、常務理事、学生部長から「セツルメントは学校の方針にあわないから、しばらく休部にしなさい」と言い渡されました。(しかし、次の日に、学生課長がつけ加えたのは、クックロビン[20]が承認されたらセツルは自動的廃部ということです。)その理由としては、(学校側もうまくはぐらかしながら、話すので、はっきりしなかったが)衣摺まで遠い、この春からの部員の出入りがはげしい、阪セツ連に加盟してて、その後には、大きなものが、ついている。セツルやっていると就職に不利だ(学校の就職率も下げてしまう)などです。一応我々の子ども会活動やクラブ活動として活発にまじめにやっている姿は認めてくれたのですが、とにかく、セツルメント活動に不審があるし、学校の方針にあわないというのです。”私達はやましい活動ははやっていません“と言っても、一方的に決めつけて言われ、話し合いになどなれませんでした。

学校側もかなり言葉を選んで言おうとするのですが、“M(民青)に入っている人がいるとかいううわさを聞いた”とおどしてみたり、あんた M やろと名指しで言われたりもしました。学校側の方針に合っていないと処分も免れない。そして、私達セツルメントに対して、みんなでよく話し合って見解を出しなさいとのこと言い渡されました(同上:14)。

その後 1 週間、Sr は毎日のように話し合い、一人一人が悩み苦しむ。資料では、その様子も記録されている。

5 月 28 日、学校から正式に“セツルメント廃部”が掲示される。その結果として、Sr 会ではみんなで退部届を出そうと決め、学校に届けず、活動していこうということになり、残ったのが四天 Sr 会である(同上：15)。

以上の経緯により、大学の公式サークルではない形で四天セツラー会が活動をしていくことになる。ただ、前述のとおり、1987 年段階では衣摺セツルメントの構成大学に四天王寺国際仏教大学が入っていないことを考えると、大学側の承認やサポートがない状態でのセツルの存続は厳しかったのではないかと推測される。

本項では、本期の阪セツ連において特徴的といえる障害児者パートの実践を取り上げ論じた。また、四天セツラー会の記録をもとに、セツルメントと大学との関係の一端も示した。なお、四天セツラー会のような例はほかにもあったことが推察されるが、こうした問題は、大学の思想とも深く関連しているといえるだろう。

次に、愛セツ連所属セツルの実践について、検討したい。

２．愛知における学生セツルメントの実践―本期の社会調査の実践から―

学生セツルメントでは、戦前の伝統を引き継ぎ、社会調査の側面も重視されてきた。学

生セツルメントの歴史のなかで、調査に基づく実践という側面も重要な点といえる。そうした、社会調査の側面の重視は、行政や専門機関による統計調査などがすすめられる本期においても同様にみられる。具体例として、愛セツ連の町っ子セツルの学習調査活動について論じたい。

町っ子セツル幼児部では、「“あそびの意欲を高めながら、子どもたち同士の自然なかかわり合いをもたせていこう”」(愛知県学生セツルメント連合 1983:203)という実践方針を立てていた。しかし、「本当にこのような実践方針でよいのかといった意義づけがなく、感覚的に実践を行っている」という課題を捉え、実践の課題と一致する調査テーマを立てることになる。そして、パート会では、「調査を現実の実践と見合ったものにしたい」「実践での問題意識と調査項目を一致させたい」(同上)という意識のもと、実践や家庭訪問で感じている子どもの問題について話し合われた。その中では、子どものあそびに関する課題や子ども集団の課題などとともに、「こどもをとりまく状況を知らなさすぎるのではないか」といった意見が出された。また、「本に書いていることが今の子どもの現状にあてはまるのか?」(同上:204)という疑問もあがった。それらをふまえ、調査目的は、「“地域の子どもたちの現状を知ることによって、どういう願いをもってどんな実践をしていけばいいのかその根拠になるものを明らかにしていきたい”」(同上:203)となり、調査テーマは「幼児の遊びと生活」として実践地域の幼児の現状をテーマにすることに決まる。「そして、全体的な傾向(情勢)と地域の現状をより比較するために、(経セツラーの中には、学習をしながら仮説立てといった意識性)学習会を行うことをパート会で一致」し、学習会を経てアンケート調査が行われる(同上)。

調査後は、アンケート結果の分析をふまえ、地域の子どもたちの現実を捉えるとともに、今後の実践活動の中で大切にしていくことが話し合われた。そして、実践方針の「大切さを具体的な地域の子どもたちのリアルな生活現実から引きつけてパート集団として一致して」(同上:207)きたとされる。また、セツラー内で終わるのではなく、「調査の集計分析をパンフにして家庭訪問・父母会にもちこんで」、「それに対する父母の意識を探って行こうと」(同上)している点にも特徴があるといえる。同資料では、「お母さんの声から自分たちの学習調査活動を問いかえしてきているセツラーの姿」についても言及している。

> 「睡眠時間 10 時間では少ないの?と言われた時、それ以上何も言っていけなかった。幼児さんだったらどれくらいの睡眠時間が必要なのか学習しないといけない。」と自分たちの分析の甘さを問いかえし学習の必要性を感じてきています。また、「超合金のおもちゃでも、それだけで遊ぶんじゃなくてイスを引っぱりだしたりして超合金を使いながら、いろいろみたてて遊んでますよ。」というお母さんの声から、「超合金だからいけないとかでなくて、それをどう使っていくかが問題だなあ」とお母さんの声から、学んできているセツラーの姿もみられました。
>
> (同上:207)

このように、町っ子セツルでは、地域の子どもをめぐる現実と実践方針を一致させていくことを目的とした調査が行われ、その結果を地域にも返すことで、セツラー自身の新たな視点の獲得や学びにつながっていることがわかる。こうした社会調査は各地のセツルで

行われていたが、同じ愛セツ連のヤジエセツルの老人パートでも、聞き取りも含めた非常に詳細な「老人生活実態調査」がなされている(ヤジエセツルメント 1987)。

３．各地の学生セツルメントの実践―追廻セツルメント老人パートの実践から―

本期は、本節第 1 項で挙げた障害児者パートのほか、老人パートや病院での実践などがみられる点に大きな特徴がある。具体的な実践事例を取り上げて論じる。

仙台学生セツルメント連合常任委員会(1981:88-90)では追廻セツルメント老人パートで、1976 年から実践に行っている H さんとのかかわりについて述べられている。それによると、H さんは一人暮らしだったが 2 年前から娘さんと 2 人で暮らすようになったこと、以前から足が悪かったが老人性白内障も患い、それまでしていた裁縫などができなくなったという。「セツラーは、H さんは生活の中で目の悪い事、足の悪い事が、思うように生活できない原因となっていると考え、そういった H さんに対して目や足を治してほしいと願い働きかけて」いったが、なかなか治療に積極的ではなかった。セツラーは、その原因の 1 つに医療費が気になるのではないかと考え、白内障手術費支給事業について調査し、H さんに伝えたが、「一向に積極的にならず、『年を取って身体が利かなくなったら、老人は我儘言わず嫁や家族の世話になるべきだ』とか言って」くる状況だった。パート会では、H さんについて、好きなことをするためにも治したほうがいいこと、娘に対する遠慮があるようだということ、一方で娘も治したほうがいいと思っているようであり H さんがそれを知ったら変わるのではないか、などの意見が出された。さらに、どうして治してほしいのかをもっと伝えていきたい、娘さんと一緒に考えていきたい、H さんにもやりたいことをやりたいという気持ちを出してほしい、といった願いや要求が確認される。それらをふまえ、娘さんと話をして H さんへの願いを一致させていこうということも確認される。「更に、地域向け機関紙を配りながら、近所の人へ H さんの事を伝えていき、治療をすすめるよう呼びかけていきます」(同上:89)という方向性も示されている。

ここまで述べてきた追廻セツルメント老人パートの実践は、H さんという個人を対象に働きかけている点に 1 つの特徴がある。これまでの実践記録でも、個人に注目する視点はみられたが、集団や地域の中で対象となる人に対してどのように働きかければよりよい集団もしくは地域になるか、より生き生きとなるか、という視点であった。その意味で、視点と働きかけに変化がみられるといえる。一方で、その対象となる人の姿をとらえ、願いや要求を確認し、方向性をもって関わるという姿勢は、継続されていることもわかる。また、H さん個人への働きかけに対して、地域住民にも理解と協力を求め、地域の問題として考えていこうという視点も垣間見られる。さらに、社会資源について調べ、その利用をすすめるということも特徴的であり、ソーシャルワークやケースワークに近くなっているように思われる。これは、1980 年から病院で実践を始めた保健部セツル西多賀ブロックについてもいえることである。このセツルでは、小学生や青年の進行性筋ジストロフィー患者を対象としている(同上:90)。ここからも個人に対する働きかけに変わっている側面が指摘できるだろう。

第 5 節　小括

本章では、学生セツルメントの組織変容期として 1974 年－1989 年を取り上げた。第 1

節では、低成長期の中で臨調行革路線による民営化や社会福祉サービスにおける自己負担の引き上げが進められ、日本型福祉社会論が台頭してきた点に言及した。また、社会福祉教育がさかんになるほか、1987 年には社会福祉士及び介護福祉士法が制定され、社会福祉の専門分化が進んで行くのも本期の特徴である。

第 2 節では、1960 年代後半以降、1980 年代前半にかけて全セツ連が組織的にも拡大していく過程について論じ、その背景には、学生運動とは別のかたちで社会に何か貢献をしたいという学生の受け皿としてセツルメントが機能していた側面を明らかにした。同時に、大学生がアルバイトや講義で時間が取れなくなる中、執行部の多忙さや運動に意義を見出せないセツラーの増加などの問題が顕在化し、1989 年に全セツ連は人事が立たないことから解散せざるを得なくなった点についても論じた。

第 3 節では、各地域の連合組織として阪セツ連と愛セツ連を取り上げ、阪セツ連では 1980 年代半ばには「国民的闘いの一翼」の章がなくなり、地域実践を重視する傾向にあったこと、愛セツ連では、地域実践を通した運動の位置づけがなされていたことを示した。

第 4 節では、単一のセツルメントにおける実践として、障害児者パートの実践や社会調査の実践、老人パートの実践などを取り上げた。社会調査については、戦後再興期からみられたものの、専門的な調査というよりも学生セツラーの関心や疑問に基づいた調査が行われるようになるのが本期の特徴といえる。また、障害児者パートの実践においては、在宅福祉の法整備やノーマライゼーションの理念の広がりの一方で、不足している資源を他団体と協力しながら補完する役目を担っていたことが示された。同時に、地域住民との協働によって取り組まれた実践である点も大きな特徴といえるだろう。障害児者パートや老人パートは 1970 年代あたりから新たにみられるパートであり、在宅福祉の広がりとともに新たな活動の形態が模索されていった側面も見出される。これらのパートでは施設や個人宅において、個人との関わりが中心となっている点に、実践の変化があるといえる。

全セツ連が解散を迎えても、学生セツルメントの実践は単一セツルメントにおいて続けられたほか、全国でのつながりの継続も模索された。それらの点について、次章で論じる。

注

1) 「老人福祉分野での民間業者の参入を促進する法律」の制定による。

2) 地域の広域連合のこと

3) セツルメント活動をはじめて 2 年目以降のセツラーのこと

4) 岡本(2019)の一部を加筆・修正したもの。

5) 実践と方針が一致しなかった背景には、全セツ連の執行部や書記局のセツラーの中には地域実践に関わっていないセツラーが少なくなかったことが関係している(岡本 2018b)。

6) 例えば柴田(2007:73)は、地域組織化について「スラム地区の住民を主体化するためには学生のアマチュアリズムだけでは限界があり、住民を組織化し、団体を運営する専門的な方法が必要だったのである」と指摘する。

7) なお、学生セツルメントを自己教育運動と定義した 1973 年の全セツ連 26 回大会における全セツ連委員長は教育学部のセツラーであった。また、中村(2014)は「学問と実社会の間を往還した学びの深化と活動の広がり」と表現している。

8）2018 年 11 月 25 日の聞き取りより

9）同上の聞き取りによる

10）本資料はページ数が付されていないため、筆者が数えたものである。

11）パートとは、地域実践に行く際のグループで、実践の地域や対象によって決まっておりセツラーは、何らかのパートに所属して実践を行うことになる。なお、同じ意味で、法律相談部や青年部というように部という名称を用いていたセツルもある。

12）2014 年 8 月 18 日、ペーター氏へのインタビューより

13）前出 2015 年 4 月 19 日のインタビューより（クルル氏、ジャンパチ氏）

14）前後の資料とその内容から 1976 年発行と推測する。

15）前出 2015 年 4 月 19 日のインタビューより（ジャンパチ氏）

16）青年会のメンバーを「仲間」と呼んでいた。

17）本資料にはページ数の表記がないため、筆者が数えたページ数で記述している。

18 資料は固有名だが、研究倫理の点から、アルファベットで表記する。以下、同様である。

19）日本民主青年同盟の略

20）サークルの名称と推測される。

第６章　1990 年－現在

本章では、全セツ連解散後にあたる 1990 年から現在について論じる。本期は、全セツ連の解散に伴い、それまでの組織構造がなくなる時期であり、全セツ連、地域の広域連合、単一のセツルメントというそれまでの枠組みで論じることに限界がある。一方で、三位相で論じることに限界がうまれるという点に一つの特徴を見出すことができる。このような意味で、本期は、大きな質的変化を伴う時期であるといえる。これまで論じてきた学生セツルメントの歴史を鑑みると、「学生セツルメントの転回期」にあたる 1960 年代後半も、大きく質が変化する時期であったと考える。しかし、本期においては、学生セツルメントの構造や思想、活動内容など、あらゆる面において大きな変化がみられ、1960 年代後半とは異なるかたちでの変化が生じる時期であると捉えることができる。また、今日における展開も含む区分としており、歴史的評価も困難である。以上から、本期については、時期区分の名称はつけず、「1990 年－現在」として論じることとする。

本期は、現在までを範囲としているが、大きくは 2 つの時期に分けられると考える。それは第一に、全国のつながりのあり方が模索され、それまでとは異なるかたちで全国の交流が続けられる 1990 年から 2000 年あたりまでであり、第二に、単一のセツルメントがそれぞれ個別に展開していく 2000 年代以降である。後者の 2000 年代以降については、とくに現時点での評価や位置づけが困難である。そのため、現在も継続しているセツルメントを取り上げ現状について示し、今後の展望を検討する手がかりとしたい。

これらをふまえ、本章では、第 1 節で社会状況と社会福祉の動向を述べたうえで、第 2 節で 1990 年から 2000 年あたりまでの展開を検討する。そして、第 3 節と第 4 節は、現在も活動を続ける学生セツルメントとして弥次衛セツルメント[1)]と大阪府立大学セツルメントの実践や取り組みから現状を論じることとする。

第１節　社会状況と社会福祉の動向―1990 年代を中心として―

本期は、現在までの時期区分としているが、社会状況と社会福祉の動向について、この時期区分では限界がある。そのため、社会福祉基礎構造改革、地域福祉をめぐる動向、社会運動・社会福祉運動、社会福祉教育をめぐる議論などに焦点をあてて整理をする。そのうえで、全セツ連解散以降の学生セツルメントにおける社会認識の変化や本期の社会状況と学生セツルメントの関係などについて次節以降で論じたい。

１．バブル崩壊と新自由主義傾向の進展

1980 年代のいわゆるバブルの発生は、「中曽根政権以降の金融政策やその背景をなした世界経済の新自由主義路線と深く結びついて」いた（吉見 2009：166）。しかし、1990 年代半ばにはこのバブルは崩壊し、「複合不況」（菊池ほか 2014：186）の時代へと入っていくことになる。政治の面でも、1993 年、55 年体制といわれた自民党一党支配体制が解体し、非自民党政権が成立する。この非自民連合による内閣は短命に終わり、社会党と結びついて自民党政権が復活する。一方で、中曽根政権以降の小さな政府を掲げる

新自由主義の傾向や規制緩和は進行していった。また、労働をめぐっても、終身雇用や企業内組合などの日本的経営のかたちは変わり、多国籍化が進むほか、非正規雇用の急増も本期の特徴に挙げられる。岩田(2017:265)は、「他の先進諸国が一九八〇年代に苦労した、ポスト工業化と金融のグローバリゼーションへの政策的対応は、日本ではバブル期以降に多様な『規制緩和』として提案されていたが、『労働ビッグ・バン』といわれた規制緩和はバブル崩壊後に本格化した」と述べる。1985 年に導入された労働者派遣法は、のちの改正で対象業務を拡大していった。こうした労働における規制緩和が、若者の非正規雇用と失業者の急速な増大につながる 。他方で、非正規雇用全般への社会的関心も高まったことにより、これらの労働者が個人で加盟できる組合づくりも進んだ(岩田 2018:263-266)。菊池ほか(2014:186)は、「バブル崩壊以降の日本社会は、不況の長期化とあいまって、失業と経済格差が現れつつある」と指摘している。

また、世界に目を向けると、1989 年にドイツでベルリンの壁が崩壊し、中国では天安門事件が起き、1991 年にはソ連が解体するなど、社会主義国家が次々とその限界をみせていく時期でもある。

ほかに、本期の社会福祉とも大きく関連することとして、1995 年 1 月の阪神・淡路大震災の発生が挙げられる。この震災は甚大な被害をもたらしたが、災害への備えや災害時のボランティアおよび社会福祉の役割が改めて注目され、その後の社会福祉、地域福祉の展開にも大きな影響を与えることとなった。

２．1990 年代の社会福祉をめぐる動向―分野別の拡充と社会福祉基礎構造改革―

河野(2002:84)は、1989 年以降の流れについて、措置制度の基本的枠組みの中で改革が進められた時期(1989～1996 年)と基礎構造そのものの転換をめざす時期(1997 年～)に分けて論じている。具体的には、上述のような政治・経済の動向を反映し、「福祉においても、自助・自立を基本に置いた相互連帯と、民間活力・民間資本の競争化の主張が力を持ち出した」という指摘がある(菊池ほか 2014:186)。同時にそれは、福祉の民営化、営利化、商品化、の進展を意味する。本期の 1 年前にあたる 1989 年には、福祉の充実を名目に消費税が導入されていた。その際、超高齢社会を見据え高齢者保健福祉推進 10 か年戦略(ゴールドプラン)を提起し、在宅福祉を中心とした高齢者福祉実現の具体的数値が示された。しかし、1990 年の老人福祉法を中心とした八法改正で、「市町村への権限移譲により福祉サービスを実現しようとしたが、地方老人保健福祉計画の策定が進むと、当初の計画を上回る基盤整備が必要なこと、合計特殊出張率の一.五七ショック(九〇年)で少子化が予想以上に進展していること」(同上:186-187)が明らかとなり、1994 年に新ゴールドプランおよび少子化対策および子育て支援としてエンゼルプランが提示される。また要介護高齢者の増加が見込まれる中、1997 年に介護保険法が成立し、2000 年より実施されることとなる。これは、措置制度から利用・契約制度への転換を含むものであり、後述する社会福祉基礎構造改革と深く関連する。

障害者福祉の分野では、1992 年に国と自治体の障害者計画の作成を義務付ける障害

者基本法が制定された。これに基づき、1995 年に「障害者プラン～ノーマライゼーション七か年計画」が策定された。また、同年、「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」(精神保健福祉法)が制定された。1997 年には、精神保健福祉士も法制化され、それまで不十分であった精神障害の分野においても法整備が進み専門職が規定された。本期における八法改正および高齢者・障害者・子育て支援の計画化は、「地域福祉・在宅福祉の特徴的動向」(井岡 2002:224)としてとらえることができる。井岡(2002:224)は、八法改正のポイントを、「市町村に福祉施設への入所措置権限を移譲し、あわせて在宅福祉サービスの法的整備等により、施設福祉と在宅福祉とを地域福祉の中に統合的に位置づけ、計画的に実施する方向を規定した」(井岡 2002:224)ことだと述べる。

他方で、1995 年の社会保障制度審議会勧告では、「国民に健やかで安心できる生活を保障」するための「社会保障制度の再構築」が唱えられた。これを受け、中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会は 1998 年に「社会福祉基礎構造改革について(中間まとめ)」を提出した。これには、成年後見制度の補完としての地域福祉権利擁護事業や苦情解決のしくみ・手続きの制度化、福祉サービスの質の向上や地域福祉計画策定の義務づけなどが意図されていた。他方で、真田(2002:37)は、「社会福祉における有料化の促進と営利事業体を含めた供給体制、つまりは市場原理を社会福祉領域にも貫徹させようとするもの」で、「これを完成させようとするのが社会福祉基礎構造改革である」と述べる。そして、社会福祉領域にも市場原理が導入されることで、「購買力の十分ない国民層が社会福祉から排除されるという背理」を含んでいるとも指摘する。この社会福祉基礎構造改革は、21 世紀以降の社会福祉においても大きな意味をもっており、市場化・民営化による供給主体の増大や社会資源の地域格差などにもつながっている。

３．地域福祉をめぐる動向と社会福祉養成教育

社会福祉八法改正および社会福祉基礎構造改革、そして 2000 年の社会福祉法への改称･改正の中で、地域での自立生活支援が強調される点も、本期の特徴といえるだろう。以下で、本期の地域福祉をめぐる動向について概観する。

1990 年の社会福祉事業法の改正により、社会福祉協議会の事業に在宅福祉サービス等の「事業の企画・実施」規定が加えられた。また、「福祉人材確保の一環として、『住民参加型在宅サービス』の担い手づくりを含むボランティア対策が打ち出されたこと」(井岡 2002:224)も本期の大きな特徴である。1993 年には、「国の『人材確保方針』とあわせ『国民の福祉活動への参加促進指針』、中央社会福祉審議会『ボランティア活動の中長期的な振興方策』が提示され、『住民参加型在宅福祉サービス』と『会員制・有償性・互酬性』によるボランティア活動への期待が表明された」(同上:224-225)。国としても社会福祉の需要が高まり人材確保が課題となる中で、ボランティアの育成と拡大に期待が寄せられていた。他方、1995 年に甚大な被害をもたらした阪神淡路大震災では、130 万人ものボランティアが駆け付けた。そうした取り組みのなかからボランティア活動支援策として「NPO 法」の必要性が提起され、運動の広がりをもとにして 1998

年に「特定非営利活動法」が制定されることとなる(同上:225)。

在宅福祉にかかわる法制度の整備は、社会福祉の担い手の問題とも深く関わる。先に述べた1989年のゴールドプランでは、ホームヘルパーを10年間で10万人にする計画が打ち出されたが、それだけの労働力(マンパワー)が確保できるのかという議論もうまれた(大橋2002:237)。これを背景に、ゴールドプランに対応するかたちで1992年にいわゆる「福祉人材確保法」が改正される。その後の1993年、厚生大臣告示の人材確保の基本方針では、ふれあいのまちづくり事業で市町村社会福祉協議会に設置する地域福祉活動コーデイネーターに社会福祉士の登用促進が明記された。同様に、在宅介護支援センターへの社会福祉士登用も明記されるなど、社会福祉士及び介護福祉士法による資格要件とその有資格者の任用とがリンクされるようになる点も本期の特徴といえる(大橋2002:236-237)。大橋は、戦後社会福祉におけるマンパワー対策と社会福祉教育の課題を論じる中で、本期に入り「ようやくケアワーカーとソーシャルワーカーが異なる職務であり、養成の方法にも違いがあることが認識されてきた」と述べる(同上:238)。また、1990年の社会福祉関係八法改正以降は、在宅福祉サービスの法制度化とともに、個別援助計画や地域での自立生活を支援するための専門的な技術や方法が求められるようになり、社会福祉マンパワー問題がより本格化したとも指摘する(同上)。

地域福祉や在宅福祉を中心とした法制度化の進展とそれに伴う専門職養成が課題となる中で、2000年に社会福祉士及び介護福祉士法が改正される。大橋は、この改正によりますます「社会福祉学とは何か、社会福祉教育のあり方、社会福祉教育方法それ自体が問われることになる」(同上)と述べた。一方で大橋は、その13年後にあたる2015年11月18日付の福祉新聞の記事で「社会福祉士ができてから、(※大学での教育は:筆者補足)福祉制度の解説にとどまっている」と指摘している。専門職としての役割期待が高まると、その養成も急務となり、大学における教育内容でも資格取得が重視されるようになる。その過程において、「社会福祉学とは何か、社会福祉教育のあり方、社会福祉教育方法それ自体」の問い直しが不十分であった点も指摘できるだろう。なお、資格取得を重視する大学教育のあり方には、少子化に伴う大学運営との関係もある。

４．社会運動・社会福祉運動をめぐる動向―非営利・協同の広がり―

すでに述べたように、本期は社会福祉八法改正、在宅福祉サービスの法制度化、分権化、供給主体の多様化、3プランの作成、そして社会保障改革から社会福祉基礎構造改革に至る動きがある。

永岡(2018:9)は、「そうした政策主導の流れの中で、関係団体から危機の表明や批判があり、反対運動が行われたが、状況は変わらなかった」と述べる。一方で、1970年代からみられた市民社会型の運動や当事者運動は1990年代の地域福祉活動の組織化にも関連するとともに、阪神淡路大震災を契機にさらに大きな広がりをみせた点にも言及している(同上)。

先にもふれたとおり、1995年の阪神淡路大震災の際、多くのボランティアが駆け付

け、その後のNPO法制定へとつながる。労働組合でも、大震災発生直後から組合員の自発的な動きによってNPOや市民団体と連携しつつ支援活動に取り組んだ点も注目に値する。

労働組合では、その組織率低下が問題となりつつも、NPOや市民団体との連携、組合員のニーズの多様化に対応したボランティア活動への取り組み、コミュニティユニオンや「派遣労働ネットワーク」「女性ユニオン」などの「非典型労働組合」の登場といった新たな展開と特徴がみられる（坂2004:154-160)。つまり、それまでの大規模組織としての一致した運動ではなく、それぞれの属性や問題意識、組合員のニーズなどに応じた個別的な運動の展開である。

こうした中で、非営利・協同の議論が本期において活発となる。例えばNPOについて田端(2002:290)は、「社会福祉の市場化とそれに対する日本のNPOはどのような位置にあるのかが問題になる」として、「日本ではボランタリーの思想的基盤が弱く、精神的にも経済的にも社会的資源が乏しいまま、新しい時代の波のなかでその意欲を展開する方向と方策を模索しながら、活動をスタートさせた状態にある」と、その課題を示す。真田(2003:87)は、非営利・協同の運動には、利用者や地域住民の参加が「大きな決め手」になると指摘する。「利用者や地域住民の参加が具体化していくと、まずは、社会福祉領域の変質を許さない結果をもたらす。その上に、非営利・協同の運動は、社会福祉運動によって地域を変え、自治体を変える。社会福祉内にとどまらない大きな影響を持ったものになっていくはずである」(同上)。非営利・協同は、社会福祉事業のあり方の1形態としてではなく、真田の言葉でいう「社会福祉の原動力」[2)]としての社会福祉運動の性質を含むものである。このように考えれば、地域福祉に携わるNPOの活動の活発化および非営利・協同の流れは、本期の重要なファクターであるとともに、学生セツルメントとの関連からも重要である。この点に関連して、今日の地域福祉をめぐる展開について少しふれたい。

５．「共生」概念と地域共生社会

田端(2002:291)は、1990年代より「共生」という用語がキーワードになりはじめた点にふれ、「共生」を問題にする際の積極的意味に言及する。それは、「人が生きる社会において異質な価値を認め、すべての人が『生きる、生かしあう』関係を創ることに一人ひとりが責任をもってはじめて実態となる概念である」というものである。加えて、『共生』を提起することは競争社会の生き方から自己変革し、すべての異質なものの共存を承認する事である」とも述べる。ここには、現在の地域共生社会の概念にも通じるものがあり、政策主導ではなく一人一人が責任をもって互いを尊重する関係性にこそ共生概念が存立しうるということが示されている。戦後学生セツルメントは、この、互いを認め合う関係性、人格的接触の精神のなかで展開されたものであり、自己変革の思想も多分に含んでいた。このような意味において、学生セツルメントの展開は、田端の指摘する「共生」の概念にも通じる。そしてその点にこそ、学生セツルメントは1つの大きな意味を見出すことがで

きると考える。

また、共生をめぐる今日的展開としては、2017 年 2 月に厚生労働省の「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部より「『地域共生社会』の実現に向けて（当面の改革工程）」が発表され、地域住民が主体となって支え合う地域づくりを進める方針が明確に打ち出された（厚生労働省「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部 2017）。つまり、専門分化した縦割りの社会福祉のあり方ではなく、総合的・包括的な社会福祉のあり方を目指す方向が政策主導で進められているのが今日の地域福祉をめぐる動向である。そうした中で、地域に根ざし地域の人びとととともに生きる営みを分野横断的に行ってきた学生セツルメントの歴史は改めて見直される時期にあるといえるのではないだろうか。

だが一方で、上記の学生セツルメントの歴史や実践、性格は、本期も継承されているといえるのだろうか。第 2 節以降で、具体的な展開から検討したい。

第２節 全国の学生セツルメントの動向―解散後の全国集会と変遷―

本節では、全セツ連解散後の学生セツルメントの動向について概観する。組織としての全セツ連解散後、各地域の連合や単一のセツルメントはどうなったのだろうか。数や活動内容はどのように変化したのだろうか。本節では、1990 年代から 2000 年あたりの動向を中心に動向を論じ、これらの問いについて検討したい。なお、1990 年代から 2000 年あたりにかけては、全セツ連解散後、学生セツルメントのあり方が大きく転換を求められる時期であり、そのあり方の模索がなされた時期ともいえる。他方、全国的な交流の場がなくなる 2000 年代以降は個別化・分散化傾向が強まる時期とみることができる。こうした時期的特徴と背景にも焦点をあてながら検討を試みたい。

１．解散後の全国のつながりの模索

前章で述べたとおり、1989 年、全セツ連は、人事が立たないとの理由から解散を余儀なくされる。

一方で、全セツ連の解散後、「全国の新たなつながりを模索するための会議を千葉でやることを確認」（かろちん 1990:1）し、全国のつながりは継続する方向が模索された。1989 年 3 月の全セツ連大会では、28 の単一セツルメントが確認でき、「『全国のつながり』のあり方について論議」された。「その中で理念（活動目標）を一致させていくことを求める単セツと、それは無理だとする単セツとがある」（同上:1）。話し合いの結果、単セツ毎の活動目標を他単セツに知らせ、一致点を見つけていくこと、その手段として文書による通信活動を行うことを確認する。さらに、“全国セツルメントの会”と称して形を変えて活動をしていくことについて、全単セツに配布、賛否の返答を求めることとなる。しかし、全単セツに求めた“全国セツルメントの会”賛否に返答はなかった。その原因の一例として、「単セツの中でも目標がない（目標を一つに決めていく必要はない）という単セツがいくつかあり、結果として活動目標を一致させていくことが事実上不可能となる」（同上:1）という点が挙げられている。そして、事実上活動目標を一致させていくことができないということから、集会というかたちでの全国の交流が検討される。「その根拠は、『現在、全国の

セツルを意識する場がイベントしかなく、これがなくては全国に関わる人がいなくなる』という危機感を抱く人が多かったことに依る。しかし、その場では『何を目的に集会を持つか(ひいては何のために全国のつながりを作るのか)』について話されず、(中身も決めずに)全国のつながりを維持していく手段だけが話される結果となる。これが以後に『日ごろ関わっていない単セツが入り込めない』問題を引き起こすことになる」(同上:2)。

以上の経過を経て全セツ連は1989年に解散したものの、1990年には第1回全国学生セツルメントフェスティバルとして、以降は全国セツルメント集会や全国学生セツルメントの会等の名称で 2005 年まで全国的な交流のための集会が定期的に開催されることとなる[3)]。1990 年以降は、全国組織として理念を一致させるのではなく、つながりを継続し、交流をもつ目的で集会が継続された。そのため、全セツ連大会のような製本された基調報告集はなくパンフレットというかたちになり、方針や基調も、毎年の集会のスローガンというかたちに変わった。

例えば、1995年3月、北海道で開かれた「第6回全国学生セツルメントの会」では、「ここから始まる」がスローガンとなる。これは、「集会が参加者全員にとって、何かを始められる一つの“きっかけ”になればいいな、そういう想いからできました」(中央実行委員会1995:2)と述べられている。このスローガンからも、全セツ連解散前との質の違いが垣間見られる。すなわち、全セツ連解散前の大会は、セツルメントの方向性がテーゼや方針、あるいはスローガンとして掲げられていたのに対し、解散後の集会では、大会そのものの意義づけを示すスローガンとなっている点に大きな違いがある。

大会と異なり、集会はイベントであり、目的や理念、目標を一致させることを意図していない。また、本期においてはすでに単一のセツルメント内でも目標の一致が困難な状況にあったことも先の引用からも推察される。

一方で、1995年3月の大会開催にあたり1994年5月に仙台、8月に愛知、11月に福島、12月に千葉、1995年3月に北海道で、それぞれ会議が開かれており、実行委員の負担の大きさと全国的な規模での開催がうかがえる。ここから、全セツ連が抱えていた執行部の負担の問題については本期においても十分には解消されていない側面が見出される。セツルメントの理念の不明確さ、執行部の負担問題など課題は残されたまま、全国の交流を図るイベントという位置づけで集会は続けられることになるのである。

では、地域の広域連合や単一のセツルメントにはどのような量的・質的変化がみられたのだろうか。次項で、各セツルメントの動向について概観する。

２．1990年以降における全国のセツルメントの動向

（１）組織構造の変遷

1980年代後半以降、その数は激減し、1990年には28となっていた単一のセツルメントであるが、その後の動向はどうだったのだろうか。1995 年の第 6 回全国セツルメントの会 3 月集会のパンフレットをもとに、1995年時点の状況を表6－1に示す。

地域	セツルメント	構成大学	人数
北海道	ずんがり	北海道教育大学札幌分校	42
	The セツルメント	北海道大学（含 医療短期大学）、藤女子大学、天使女子大学、武蔵女子大学	約 50
東北	青山セツルメント	岩手大学	19
	国見セツルメント	宮城教育大学	11
	追廻セツルメント	東北大学、東北福祉大学	25 前後
	保健部セツルメント	東北大学、東北大学医療技術短大	25 前後
	宮城野セツルメント	主に東北大学	9
	鹿野セツルメント	東北大学、尚絅女学院短大	20 前後
	はらい川セツルメント	福島大学	53
関東	こぶしセツルメント	淑徳大学	86
	一之江セツルメント	日本社会事業大学	15
愛知	トロッコセツルメント	日本福祉大学	36
	弥次衛セツルメント	日本福祉大学	27
	井戸田セツルメント	日本福祉大学	17
京都	つくしんぼセツルメント	立命館大学	20
	鴨川セツルメント	佛教大学	21
大阪	夕陽丘セツルメント	阪南大学	39
	住吉セツルメント	大阪府立大学、大阪女子大学	12

表 6－1　1995 年時点の全国のセツルメントの状況

（中央実行委員会(1995)をもとに筆者作成）

上記から、1995 年時点で 18 のセツルがあり、500 名を超えるセツラーが全国で活動をしていることがわかる。ただし、用いた資料は、連絡がとれ寄稿があったセツルのみを記載していると推察され、実態は上記より微増すると思われる。それは、仙台のセツルについて「5 つ以外にも、いくつかのセツルが存在するらしいが、現在交流はない」(同上:28)との記述や、表 6－2 と比較して大原セツルが抜けている点などからいえる。

興味深い点は、地域の広域連合の動向である。愛知では、1992 年時点で愛セツ連が存続していた(1991 年度愛知県学生セツルメント連合書記局 1992)。京都でも、京都セツルメント連合が存続しており 1995 年 2 月に 3 日間の大会を開催している（中央実行委員会 1995:11-12)。仙台でも、追廻・鹿野・国見・宮城野・保健部の 5 つのセツルの交流・意見交換を目的とした仙台集会が年 2 回開かれている（同上:28)との記載がある。このほか、1995 年時点で大阪の住吉と夕陽丘の交流も資料から確認できる(住吉セツルメント 1996)。

全セツ連解散後の各地域連合の動向については、資料的限界から十分な把握が難しいが、

少なくとも 1995 年時点の京都と仙台では大会や集会の開催が続けられていたこと、京都と愛知における連合の存続、大阪におけるセツル間の交流などがわかる。つまり、全セツ連の動向と地域の広域連合との動向は必ずしも一致するものではなく、各連合の個別の動きによって地域連合としての交流や活動は続けられていたのである。ここには、地域の広域連合を構成する各セツルの状況や、連合への意味付けなどが関係していると考えられる。加えて、地域の各団体との連携や地域課題との関係などの側面からの検討も求められる。

他方、1995 年 1 月の阪神淡路大震災を受けて支援の呼びかけが、全国セツルメントの会・三役および代表者一同(1995)からなされているが、組織的な支援の動きは見出せず、個別の動きだったのではないかと推察される。このように、全国組織としての運動性は本期においては見出しにくく、非常に矮小化している。阪神淡路大震災の際に、個人や小規模なグループが数多く参加してその復興に大きな役割を果たしたことなどをふまえれば、本期における学生セツルメントの個別化傾向とも関係しているといえるのではないだろうか。

次に、4 年後の 1999 年時点での学生セツルメントの状況を表 6－2 に示す。

地域	セツルメント	構成大学
北海道	ずんがりセツルメント	北海道教育大学札幌校
	The セツルメント	北海道大学、藤女子大学
東北	青山セツルメント	岩手大学
	国見セツルメント	宮城教育大学
	おいまわしセツルメント	東北大学、東北福祉大学
	保健部セツルメント	東北大学
	鹿野セツルメント	東北大学、尚絅女子短期大学
関東	いちのえセツルメント	日本社会事業大学
	大原セツルメント	東京都立大学、大妻女子大学、跡見女学園
愛知	トロッコセツルメント	日本福祉大学
	弥次衛セツルメント	日本福祉大学
	井戸田セツルメント	日本福祉大学
京都	つくしんぼセツルメント	立命館大学
	鴨川セツルメント	佛教大学
大阪	夕陽丘セツルメント	阪南大学
	住吉セツルメント	大阪府立大学、大阪女子大学

表 6－2　1999 年 4 月時点での学生セツルメントの状況

(郷右近(1999)をもとに筆者作成)

表 6－2 で参照した郷右近(1999)は調査研究に基づく卒業論文であり、限界はあると思わ

れるが、全セツ連解散後 10 年が経過しても、少なくとも 16 のセツルが全国で活動をしていたことがわかる。

なお、2000 年に入ってからの全国的なセツルメントの動向を把握するのは資料的限界があり、非常に困難である。

2019 年現在において、大学やセツルメントのホームページや SNS、調査から判明しているセツルメントは、The セツルメント(北海道大学、藤女子大学)[4]、国見セツル(宮城教育大学)[5]、保健部セツル(東北大学医学部)[6]、おいまわしセツル(東北福祉大学)[7]、はらい川セツル(福島大学)[8]、ヤジエセツル(日本福祉大学)[9]、井戸田セツル(日本福祉大学)、立命館大学[10]、大阪府立大学[11]の 9 つのセツルである。これらのセツルの大半は、「ボランティアサークル」として紹介[12]され、公園などで子どもと遊ぶ活動や地域の行事の運営や手伝いを行っている。特徴的な実践としては、ヤジエセツルメントの居住調査、老人パートの実践や大阪府立大学の児童福祉施設における実践が挙げられる。これらについては、後述する。

これまでみてきたとおり、60 を超えるセツルにおいて 1 万人を超えるセツラーが活動をしていた 1960 年代と比べると、全セツ連解散後は縮小し続け、現在残っているセツルも 10 に満たない状況である。ただし、学生セツルメントであった団体が、名称を変えて活動を継続している場合もある。例えば、立教大学子ども会は、堀の内セツルから始まっており、早稲田大学などの学生を中心とした池袋子ども会も、池袋セツル[13]から始まっている。また、医療保健活動に関しては、学生セツルメントをルーツとする診療所や訪問看護ステーション、医療生協といったかたちで現在でも地域に根付いた医療を展開している。具体的には、亀有セツルをルーツにもつ医療法人ひこばえ会のセツルメント診療所や、つやま訪問看護ステーション[14]のほか、川崎セツルメント診療所、セツルメント菊坂診療所、熊本セツルをルーツにもつ熊本赤十字病院、氷川下セツルメント診療所歯科[15]、介護老人保健施設「ひかわした」、南医療生協、そしてセツルメントを含む 3 つの医療運動の流れをくむ東京保健生協などが挙げられる[16]。このように、学生セツルメントをルーツにもつ大学のサークルや診療所などのかたちで、当時の歴史を引き継いでいる例が多く見出される。

本項では組織構造、とくに量的側面から本期の動向を論じた。1989 年 3 月時点で 28 のセツルが確認されていたが、1990 年代に入って 20 を下回り、2019 年現在ではセツルメントを名乗るサークルは 10 に満たない。一方で、セツルメントを起源とした子ども会や地域の医療、福祉を担う医療機関や施設など、法制度に準じた事業体への展開例も見出された。

では、質的側面からはどのような変化が挙げられるのだろうか。具体的には、本期の集会ではどのような議論がなされ、全セツ連大会との違いはどのような点にあるといえるのだろうか。質的側面から検討する手がかりとして、具体的な議論を概観する。

（2）議論の内容―分科会のテーマから―

全セツ連大会では、年によって異なるものの 1 日目に開会全体会と記念講演、2 日目に分野別分科会や各セツルの交流会、3 日目に課題別シンポジウムおよび課題別分科会という構成となっていた。記念講演に限らず、分野別分科会や課題別分科会でも各分野で活躍する

OS をはじめさまざまな講師を招いた講演も実施されていた。全セツ連解散後、集会というかたちに変わってからも分野別分科会と課題別分科会が実施されていたが、その内容は解散前とはずいぶん異なる。表 6－3 に 1995 年 3 月開催の第 6 回全国学生セツルメントの会 3 月集会における分野別分科会と課題別分科会のテーマ一覧を示す。

<table>
<tr><th colspan="2">分野別分科会</th><th>課題別分科会</th></tr>
<tr><td>老人</td><td>1. 老人とセツラーの関わり方について
2. 老人と集団の話</td><td rowspan="5">1. セツルメントは必要なものなのか
2. セツラーの中の共通意識について
3. パート間の関わりについて
4. 「愛」について
5. セツルをやめる時
6. 新歓について
7. 活動において自分自身どう変わるか？
8. 役職を通してのセツラーの協力や理解とは？
9. セツルメントの中の友だち（人間関係の結びつき）
10. セツルメントとは何か
11. セツルメントで何を得るか</td></tr>
<tr><td>児童</td><td>3. セツラーの限界～いじめに Sr はどこまでの態度をとれるか～
4. 子どもに注意することについて
5. 今の集団遊びについて
6. 集団の中のわがまま
7. 子どもにとってセツラーとは
8. 子どもと接していくなかで</td></tr>
<tr><td>障パ</td><td>9. 子どもの成長にあった遊び</td></tr>
<tr><td>児童</td><td>10. 理想と現実の実践
11. 調整中</td></tr>
</table>

表 6－3　1995 年第 6 回全国学生セツルメントの会 3 月集会における分科会一覧

（中央実行委員会（1995：40）より筆者作成）

本研究では毎年の分科会テーマを取り上げていない[17]が、分科会テーマは、第 4 章第 2 節などで取り上げた基調報告の目次と対応するものである。比較すると、大きく異なることがわかる。例えば、分野別分科会は、「幼児部」「児童部」「青年部」「法律相談部」「栄養部」といった分け方が長年なされてきた。課題別も、平和や文化の問題、学習調査活動や総括の意義と方法など、時代に応じて多少表現に変化はあるものの、前年までのテーマを踏襲した設定になっており共通性も大きくあった。しかし、全セツ連解散後は、分野別において各分野の中でより具体的なテーマ設定がなされており、課題別においても日々の実践の中で直面している具体的・現実的な課題設定となっていることがわかる。同時に、課題別の 1、2、5、7、11 など、「セツルメントとは何か」を具体的に模索するテーマ設定が多く、そのアイデンティティが改めて各セツル、セツラーにとって問われていたことが窺える。全セツ連が方針や基調を出していたころは、時代によってその思想や理念、セツルメントとは何かといった像は揺れ動いていたものの、各セツルはそれをもとに討論ができたし、その方針や基調が、「セツルメントとは何か」の指針になる部分も少なからずあった。その意味で、全セツ連が解散し、方針や基調がなくなったことで、個々のセツルやセツラーのあり方が鋭く問われることにつながった側面が指摘できる。従来のような

組織形態がなくなり、個別化・分散化の傾向が高まるとともに個別のセツルのあり方が問われる中、継続しているセツルにおいてはどのような実践が展開されたのだろうか。次項で1990年代の実践を概観し、その特徴について検討する。

３．1990年代における実践の動向と特徴

表6－1で示したとおり、1995年時点で、全体的な規模は縮小しているといえる。一方で、各セツルでは特徴的な実践も展開されていた。パート別では、小学生、中学生、高校生、青年などの各パートや団地パート、地域別のパートのほか、老人、障害者、病院などの各パートがみられる。なお、多くのセツルでは複数のパートをもち活動していた。特徴的な実践について、具体例を挙げれば、ずんがりセツル病院パートでは小児病棟のプレイルームで入院中の子どもらと遊ぶ活動が行われ、こぶしセツルの老人パートでは団地の訪問活動や給食サービスへの参加といった活動をしていた。また、Theセツルメント老人パートでは病院に出向き毎週工作などの企画を用意して交流する活動や、在宅の高齢者を対象に食事やカラオケに行く活動などもみられる。このほか、住吉セツルメント児童パートでは児童福祉施設に出向き施設で生活する子どもらと遊ぶ活動をしていた(中央実行委員会 1995)。

他方、長年、多くのセツルで行われてきた団地や地域の公園で子どもらと遊ぶ子供会活動は、本期においても非常に多い[18]が、子供会活動について登録制をとるセツルもみられるようになる[19]。これは、個人情報や責任の所在などの問題が背景にあるものと考えられる。また、子供会活動と同様、戦後再興期から重要な意味をもっていた法律相談や医療保健活動を行うセツルはみられなくなっているのも本期の特徴といえる。

1990年代後半に入ると、セツルメントの活動の場は、地域のみならず、病院や施設など、人びとの生活の場や社会状況に応じて変化していく面が見出せる。ただし、この点については、人びとの生活の場の変化のみならず、さまざまな法律や制度が整備され、社会福祉の専門分化がすすむなかで、学生による活動の内容や場が規定されるようになった側面も大きいといえる。そのため、活動の場は多様化するものの、広がったといえるかは疑問が残る。法制度や社会的な枠組みの中での活動へのシフトという捉え方のほうが的確ではないだろうか。

なお、施設での活動は、1970 年代にもみられ、宿所提供施設での活動がいくつかあったが、そうした施設での活動は確認できない。

第2項でも述べたとおり、今日ではほぼ全てのセツルが子どもと遊ぶ活動を行っており、ボランティアサークルとして自らを位置づける表現がなされている。ここには、セツルメントという用語のもつ意味が不明瞭なまま今日に至っており、ボランティアという用語のほうが分かりやすいという意図も背景の 1 つにあると考えられる。また、かつての学生セツルメントには、地域実践の積み重ねから地域や社会の改善を図るという運動性や法制度の補完的役割があったが、そうした運動性や補完的役割は、本期において見出し難いのも事実である。地域の人びとともに要求に応じた活動を展開してきた学生セツルメントだが、ボランティアの広がりや組織化、地域福祉にかかわるNPO法人の誕生、専門職の確立・

拡大と職域の明確化などによって、かつてのような実践が困難になった側面がある。他方で、設立当初からの伝統を守り、地域での実践を継続しているセツルもある。

しかし、本期において重要なことは、実践の場よりもセツルメントとしてのあり方ではないだろうか。言い換えれば、本来のセツルメントとしてのあり方が現在のセツルメントにおいてどこまで意識されているのか、という問いである。その意味で、今日的なあり方を追求し、模索しているセツルメントがあるという点は注目に値する。次節では、設立当初からの地域実践を継続している例と地域実践を離れ児童福祉施設での実践を行っている例を取り上げ、今日におけるセツルメントの取り組みの一端を示したい。

第３節 現在も活動を続ける学生セツルメント（１）―弥次衛セツルメントを例として―

第 2 節でも述べたように、セツルメントとして継続していたとしても、地域や社会の変化とともに、地域での実践をやめるケースや実践地域を変えるケースも少なくなかった。そうした中で、長年にわたり同じ地域での実践を継続しているセツルメントもある。たとえば、東北福祉大学のおいまわしセツルは 1971 年の発足で、創部から 45 年を迎える 2016 年 10 月、仙台市社会福祉協議会長感謝状を受賞している(東北福祉大学 2016)。これは、長年の地域に密着した活動を認められたものだといえるだろう。

本節では、伝統的な活動を続けるセツルとして、弥次衛セツルについて論じたい。

１．伝統的な活動の継承と模索（１）―地域との関わりと調査活動、情宣活動―

弥次衛セツルは、1959 年 9 月 26 日の伊勢湾台風の救援活動およびその後の保育所設立を契機として、1960 年 1 月 24 日に誕生した。弥次衛町に建てられた被災者の仮設住宅が当初の実践場所であったが、現在は建て替え後の市営住宅が実践場所となっている。活動の柱には、「発達保障の地域づくり」と「自己教育(自己変革)運動」(弥次衛セツルメント 2017:2)を掲げる[20]。2019 年 4 月現在において児童部と老人部の 2 パートで月に 2 回、日曜日に実践をしている。児童部では、公園や団地内の集会所での遊びやお出かけといった活動を行い、2013 年度で実践に参加する小学生は 17 名、中学生は 1 名となっている(弥次衛セツルメント 2014a:26-31、84)。老人部では、家庭訪問や集会所で高齢者の方との会話を中心に活動を行い、2013 年度に家庭訪問した人数は 185 名となっている(同上:34、84)。本項で、伝統的な活動を続けるセツルとして弥次衛セツルを取り上げたのは、地域での活動の継続のみならず、組織のあり方や年間のスケジュール、方法論などの点において、長年積み上げてきたものを守り続ける姿勢があることに弥次衛セツルの大きな特徴が見出されるからである。これについて、地域との関わり、調査活動、情宣活動、組織構造、行事、学習会、の 6 点に着目して論じる。なお、この 6 点は相互に関連しているため、その関連をふまえながら論じることとする。

先にも述べたとおり、弥次衛セツルは、発足当初から同じ地域での活動を長年続けてきている。そのため、親子 2 代にわたりセツルと関わりのある家庭や、長年にわたってセツルの活動を見守って来た地域住民に支えられている側面がある。そうした中で、あるセツ

ラーは、長年同地域で生活している住民から、「どうして中学生が来なくなったか分かる？」と聞かれ、「もうちょっと教育的な活動をしないと」と言われたという。この言葉は、そのセツラーにとって衝撃的なものだった。そして、「最近ずっと同じ活動になっている。今の活動はボランティアに近い。」と改めて強く感じ現在の活動に疑問を抱いた。また、「もっと変化のある活動をしないと」という思いや、「自分たちのためになることをしないと」という思いも抱いたという[21)]。この、ずっと同じ活動になっているという点は、他のセツルにも共通する課題ともいえる。だが同時に、地域住民から活動のあり方について意見が挙がるほど、地域に根付いた実践を続け、見守られてきた側面も指摘できる。こうした意見は、セツルのあり方への鋭い批判にも受け取れるが、セツルの実践と歴史を肯定的に評価したうえでの意見ともいえるだろう。ほかにも、老人部という名称はやめてほしいという住民らの声から 2017 年に敬老部へ名称変更したほか、要望を受けて茶話会を開催するなど、地域の声や要求を反映した活動のあり方が現在も模索されている。

地域との関わりは、地域住民との関わりに限らない。2017 年度あたりに、社会福祉協議会から「一緒におまつりしませんか」「子どもたちの宿題をすすめるために協力しあいませんか」という声がかかり、協力関係がうまれている[22)]。さらに、2018 年 3 月には、社会福祉協議会から、2019 年度の地域福祉計画作成にあたり「南地区の地域福祉計画に関わりませんか」と弥次衛セツルに声がかかった。本来は、6 年間程度関わるものであるが、大学生の活動という特性上、次の代に引き継ぐことになるということについても了承を得られたという。そうして、6 月から地域福祉計画策定の会議に、大学生でありながら、地域に関わりの深い団体という立場で関わっていくことになる[23)]。このように、近年、弥次衛セツルでは社協や民生委員などとの協力関係が高まり、ともに地域をよりよくする活動の模索が行われている。ここには、地域での長年にわたる活動が認められたことによって、今日における新たな展開をうんでいる側面が見出せる。

地域との関わりにも関連するが、弥次衛セツルでは、発足当初から「居住調査」を行っており、各家庭を訪問して聞き取りの内容を記録し、保管している[24)]。学習調査活動について、2017 年度の理念基調は、「対象の問題の本質を理解し、より広い価値観と視野を身につけるための活動が学習であり調査」(弥次衛セツルメント 2017:21)と述べ、「学習や調査により明らかになったことを自分自身の問題として引き付けて考え、地域の住民と共に問題を解決していくこと」によって、弥次衛セツルの柱である「発達保障の地域づくり」につながると位置づける。同時に、学ぶこと・知ることによってものの見方・考え方が身につき、自身の価値観・人生観の形成にもつながるとしている(同上:22)。なお、2014 年の理念基調にも同じ文章が書かれており、代々引き継がれているものであることがわかる。

膨大な数におよぶ居住調査の記録票には、各家庭のことや住民自身の地域や住まいについての考え、セツルに望むことなどが記載され、それらを集約し、明らかになったことを総括などで整理し、次の世代へと引き継いでいる[25)]。これは、社会調査を柱の 1 つとして戸口調査を行っていた東京帝大セツルメントに遡ることができる[26)]ものであり、その調査の水準は別として、現在も続けられている点に意義があるといえる。一方で、居住調査をめぐ

っては、地域住民から拒否されることもある。そうした家庭については引継ぎをして家庭訪問を控えるようにしている。ただし、訪問には拒否的でも地域の中で出会うと挨拶をしてくれるなど、一定の理解があることも窺えた[27)]。しかし、引っ越しなどによる入れ替わりも多くあり、家庭訪問の折に、「寝ているから起こすな。周りみんな迷惑している。大学にも電話した。」と言われたこともあったという[28)]。理念基調を引用し、学習調査活動の意義づけを述べたが、現在の居住調査は、実情を知り実践に活かすためというよりも地域にセツルを知ってもらうという意味合いが強い。ただし、単身者や外国人居住者の増加、世帯の入れ替わりの激しさなどがあり、地域からの理解を得ることに苦労している側面も見出された。

3点目の情宣活動も、戦後再興期から各地のセツルで行われていたもので、具体的には機関誌(紙)の発行などを指す。弥次衛セツルにおいては、現在でもレンガの名称で機関紙を発行している。その目的は、セツルについて理解を得ること、地域住民の声の集約、地域住民の声を載せることで住民の地域に対する認識を深め、要求の自覚化や住民の交流・要求の組織化につなげることとされている(弥次衛セツルメント 2017:9)。ほかにも、生活に密着して興味をもってもらえる記事を考え発行している。こうした機関誌の発行や居住調査を可能にするのは、弥次衛セツルメントの組織体制である。

２．伝統的な活動の継承と模索（２）―組織構造と行事、学習会―

弥次衛セツルメントは、実践を行う各パート(老人部・児童部)のほかに、組織としての役割分担があり、セツラーは実践のパートに加えそのいずれかの役割にも同時に属する。2009年10月改正の弥次衛セツルメント規約(弥次衛セツルメント2014a:3-4)をもとにその組織構造を述べると、セツルの最高決定機関である総会に次ぐ決定機関および執行機関として執行部がある。なお、執行部は、週に2回の会議を行うことも規約で定められている。さらに、事務局、地域対策部、機関紙考案部という部局活動があり、そのいずれかに各セツラーが所属するという構造になっている。事務局は、事務局長、およびパートから構成された数名の事務局員から構成され、セツルの情宣活動、学習、資料保存、通信活動を行う。地域対策部は、地域対策部長およびパートから選出された数名で構成され、学習、調査活動、渉外活動、日常実践の分析を行う。機関紙考案部は、機関誌考案部長およびパートから選出された数名により構成され、機関紙「レンガ」の発行、居住調査、学内情宣紙の発行を行う。こうした体系的な組織構造が発足時より長年継承されてきたが、1997年9月18日の部局活動停止に伴い、地域対策部、機関紙考案部の活動停止時には地域係を置くという条文が追加される。

地域係には、ぐるみ班・レンガ班・学習・提携班を置き、情宣紙「レンガ」の発行、学習、調査活動、渉外活動(諸団体)、日常実践の分析を行うこととされており、毎週のパート会に加えて係の会議も設定されている。なお、ぐるみとは、全セツ連での「地域ぐるみ運動」からきた用語と推察される。弥次衛セツルでは、「ぐるみ活動」を、「地域という広い視点から、地域住民に働きかけ、つながりをつくっていくこと」と位置づけ、その意

義を 4 点に整理している。それは、「地域の人同士の日常の縦、横の人間関係作り」、「様々な年齢層が集うことによって、地域の一員としての意識をつくる」、「セツルメントの地域への組織定着」、「文化継承」、の 4 点である(弥次衛セツルメント 2014b:9)。具体的には、11 月のあったかまつりや新年会などを企画し、パートの垣根をとって地域の人が参加できる行事の企画・運営などを行っている。

1997 年以降、現状に即したかたちに変化しつつも、実践のパートとは別に組織としての役割があり、体系的な組織構造を有している点から、全セツ連解散前の各セツルにおける組織のあり方を継承している側面が見出せる。さらに、弥次衛セツルでは年に 2 回理念基調と総括を発行している。理念基調は、執行部が前の期のものを読み深めて学習し、当該期の理念基調を作成する。そして完成した理念基調を全体学習会で読み合わせることで、歴史や理念の継承を図っている。なお、参考に 2014 年の理念基調の目次を挙げると、「地域への組織定着をめざして」「実践・パート会総論」「大学活動全般」「学習調査活動の充実のために」「国民的闘いの一翼として」「新入生歓迎会運動」「組織活動」となっており、前後の年度とも共通した項目となっている。また、総括は理念基調の倍以上、2014 年度で 90 ページを超える内容となっており、とくに「実践・パート会総論」の中の「児童・中高生パート傾向」では、「めざす集団像・願い出し」や簡潔な実践記録、そして関わっている 1 人 1 人について「姿」「願い」「働きかけ」「到達点」が記載されている。これは、老人部についても同様である(弥次衛セツルメント 2014:25-40)。ここには、個別の働きかけと同時に集団としてのあり方を追求する姿勢が見出される。

これらは、社会との関係の中では捉えられておらず、不十分である。しかし、上述した組織構造、理念基調や総括の作成と学習会など、役割分担とそれに伴う年間のスケジュールが確立しておりそれらを継続していることが、伝統的なスタイルを次の世代に引き継ぐことにつながっている。それは、年間の行事についてもいえることである。セツル内での活動のほかに、3 週間連続で実践を行う集中実践、セツル主催の公園での夏まつり、11 月のあったかまつり、そして定期的なぐるみ活動など、年間の行事やそれに伴う準備などのスケジュールも記録を残し、毎年継承されている。

３．弥次衛セツルにみる継承とその課題

先にもふれたとおり、弥次衛セツルにおいては、新入生が入って少し経つ頃の 6 月のほか定期的な学習会が設定され、セツルメントの歴史を学び、継承する機会を設けている。実践においても、実践前、実践後、そして毎週のパート会の場で活動内容の確認や、実践で関わる一人一人を捉え、願いをもち、働きかけ、その結果を実践記録に残すなど、視点を明確にもって実践に臨むことが意識されている。これらの点において、弥次衛セツルでは伝統的なセツルメントのスタイルを継承しようとしているといえる。これは、学習会や居住調査、理念基調や総括の作成など、セツラー一人一人が真剣に、多くの時間を使って活動に取り組んでいることからもいえるだろう。また、社協との協力関係の構築や、全戸の居住調査を現在でも実施できる背景には、地域に根ざした活動を半世紀以上続けてきた

ことによる地域との信頼関係が挙げられる。町内会長や地域住民の理解や協力が非常に重要な後押しとなっているといえるだろう。

このように、方法論の継承と実践の長年の積み重ねによる地域との信頼関係、要求に応じた実践の模索、社協との協力関係に基づく新たな展開などは、評価に値する。だが、セツルメントとして現在の弥次衛セツルをみるとき、その内実や理念、思想的側面において、セツルメントといえるのか、という疑問が生じる。これは、先に挙げた「ずっと同じ活動になっている」というセツラーの語りや、理念基調が毎年ほぼ同じ内容になっていることからもいえる。例えば理念基調の「国民的闘いの一翼として」の項は、全セツ連や各広域連合の基調報告にもみられたが、現在においては抽象的な内容にとどまり、情勢についての具体的な記載もない。2013 年度の総括では、「国民的闘いの一翼として」の章の中に、今期の傾向、住宅の建て替え問題、闘いの理念の 3 項目を挙げて記述しているが、今期の傾向や社会情勢について具体的な記載はみられない。住宅の建て替え問題についても、各パートの意見が載せられているが、執行部含め全パートで「具体的な取り組みについて考えていくことも必要性を感じなかったため行いませんでした」といった記述となっている。闘いの理念については、「闘いの理念を理解した上で、闘いの視点(本質を見抜く・共感する・連帯する)を意識した実践・パート会活動を行っていくことができました」と全てのパートで同様の記述が並ぶ(弥次衛セツルメント 2014:62-65)。抽象論として、実践の視点や実践と運動のつながりを理解する試みはなされているものの、長年学生セツルが培ってきた地域実践を通して社会をみるという視点、「地域は社会の縮図」として捉える視点は本期においては見出し難い。また、学生セツルでは要求に応じた創造的な実践が行われてきたが、本期においては受身的であり、結果的にはほぼ変わらない活動を毎年繰り返すかたちになっている。これらから、実践、理念基調を作る意味、現在のあり方などの問い返しが十分であるかという疑問が残る。他方、これまで述べてきたとおり学生セツルメントは、人間形成や自己教育への志向性と運動体の側面も有していた。これは、戦後社会のあり方と学生の意識のあり方との関係によって規定されている面があるが、今日においては、自己変革や社会のあり方を問うことの必要性や必然性がセツルに限らず学生にとって薄れていることも関係しているといえるのではないだろうか[29)]。

以上から、弥次衛セツルにおいては長年の伝統を守っていこうとする姿勢があり、形式的には継承への取り組みが認められるものの、実態としての実践のあり方や理念、思想などの点においては継承されているとは言い難い。その意味で、伝統を守りながら社会に応じたあり方を追求することが今後も求められる。ただし、現在においても、形式的とはいえそれまでの組織や学習調査活動を継続し続けている点には、大きな意味があるといえる。なぜならば、多くのセツルでは、現在、地域での子ども会活動や子どもと遊ぶ活動としての位置づけになり、上記で指摘したような体制は引き継がれていないからである。そのような状況をふまえれば、組織体系や学習調査活動を社会の中でどのように位置づけ活かしていくか、が問われているともいえるだろう。

また他方で、本期において、地域実践から離れて新たな実践を始めたセツルもある。そ

うしたセツルの例として、大阪府立大学セツルメントを取り上げ次節で論じる。

第４節　現在も活動を続ける学生セツルメント（２）―大阪府立大学セツルメントを例として―

１．地域実践を離れた大阪府立大学セツルメントの実践とその経緯[30)]

先述のとおり、本期になると、多くのセツルメントが「子どもと遊ぶボランティアサークル」という位置づけをしており、公園などでの実践が主流になる。そうした中で、大阪府立大学のセツルメントでは、地域実践を離れ、保育園での実践を経て、20 年以上児童養護施設での実践を行っている。そのような実践へと転換する経緯は、セツルメントのあり方の模索としても捉えることができる。そのため、大阪府立大学セツルメントの概略を述べた上で、実践の場が転換していく経緯を岡本(2018b)(2018c)に基づき論じる。

大阪府立大学セツルは、現在、大阪府立大学の文化部サークルの 1 つに位置付けられている。午前と午後のパートに分かれ、それぞれのパートで別の児童養護施設にて実践を行っている。実践内容は、午前は幼児から小学生を対象として、遊びや宿題をみるといったものであり、午後は幼児を対象に遊ぶことを中心としている。子どもたちとの外の出企画や施設でのセツルメント主催のクリスマス会の実施、大学祭への子どもたちの招待のほか、施設からの求めやセツラーの希望を考慮しつつ活動を行っている。また、実践後の反省会や週に 1 回のパート会といった会議も重要な活動の１つである。

2017 年 10 月時点で、午前パートは 20 名、午後パートは 21 名が所属している。その内訳は、大学院生 2 名、4 回生 8 名、3 回生 8 名、2 回生 11 名、1 回生 12 名で男女比は 13:28 である(岡本 2018b:10)。

大阪府立大学セツルメントの歴史は、1952 年に誕生した愛染園学生セツルメントに遡ることができる。第 2 章および 3 章で述べてきたとおり、愛染園学生セツルメントは大阪女子大学および社会事業短期大学も構成大学に含まれており、これらがその後大阪府立大学に統合していくという点においてその系譜を引くものといえる(大阪府立大学創基 130 年事業企画委員会編 2015)。大阪女子大学は愛染園学生セツルメントから分離して東住吉セツルメントを設立したのち、1966 年に住吉セツルメントへと改称する。なお、翌年の 1967 年には大阪府立大学が住吉セツルメントの実践に加わっている（住吉セツルメント 1975a)。1970 年以降は新今宮地域で実践を行っていたが、1977 年より白鷺地域にも実践地域を拡大する。その背景には、当時、セツラーが 120 名を超えていたことや、「特別な地域だけに終始していいのだろうか」という疑問、「地域は日本の縮図」「どこでも地域の課題は抱えているはずだ」[31)]という認識と、団地の会長からの要請もあったという。

新今宮地域、白鷺地域で地域に根ざした活動を展開していた住吉セツルメントだが、1990 年、保育園での実践へと実践場所を大きく変えることになる。以下、その経緯を引用する。

以前は、新今宮地域とよばれる貧困地区に入り、小学生を中心とした児童を対象として、

近くにある公園で遊んだり、廃品回収などの作業の手伝い、行事として、もちつき大会・ハイキングなどの企画をして、少しでも貧困地区と呼ばれる地域をよりよくするための手助けになればという願いのもとで活動してきたわけですが、このような本来セツルメントとしてあるべき活動が部員の皆にとって魅力の少ないものに感じてきていました。そういう時に、…略…保育所でのお楽しみ会のイベントの 1 つとして人形劇をやってもらえないだろうかと誘っていただいたのが最初の出会いでした。（このように）今やっている活動を疑問視する意見が多く、セツルメントとしての方向転換の時期でもあったわけで、せっかくの金岡保育所でのこのようなご縁を新たな活動に結びつけられないだろうかと、人形劇が終わってから部員同志で話し合いをもちました。その結果、今までとは違う幼児とはどんなものだろうか知ってみたいという意見や、1 年ごとに手にとるように分かる幼児の成長過程を手助けできたら良いし、またそれによって自分たちももっと自己成長していけるのではという意見が出ました。そして、このような活動を地域のみんなに少しずつでも理解してもらいそこから一歩進んで大学付近の地域に出て本来のセツルメントの地域での活動をもう一度やっていこうと考えました。（※筆者下線）その方がみんなにとってはやりがいの持てる活動にできると思ったからです。そういうわけで、金岡保育所の所長さんをはじめ保母さんのご理解のもとで実践を行うことになりました。

（大阪府立大学・大阪女子大学セツルメント 1993:1）

具体的には、1990 年 12 月に保育所からの要請を受けて人形劇を行うようになり、1991 年 12 月、1992 年と 1993 年は年に 2 回、人形劇を実施している。なお、住吉セツルメントの金銭出納帳には、保育所から人形劇の謝礼が記載されており、当初は手伝いのようなかたちであったことがわかる。具体的な実践は 1993 年から始まるが、同年 10 月には保育所での実践を終えていることが当時のセツラーの実践記録から読み取れる（住吉セツルメント・ボブ 2004）。短期間で保育所での実践を終えることになった背景については定かではないが、同時期における複数の児童養護施設の資料が保管されていることから、新たな実践場所として施設を検討していたと推察される。そして 1993 年からはセツラーのつながりなどもあり、児童養護施設での実践が始まる。さらに、5 年後の 1998 年には新たに別の施設にも実践場所を拡大し、現在の活動形態となる。なお、先にも述べたとおり、大阪女子大学と大阪府立大学からなる住吉セツルメントは 1967 年以降活動してきたが、2005 年に大阪女子大学が大阪府立大学に統合された[32]ことから、住吉セツルメントの構成大学は大阪府立大学単独となり、大阪府立大学セツルメントと自然に名乗るようになったと推察される。

上記から、「本来セツルメントとしてあるべき」地域での実践に、セツラーが魅力を感じられなくなってきたことが地域実践を離れる背景にあったと考えられる。一方で、当初は、地道な実践を続けることで地域の信頼を構築し、大学付近の地域での実践に再び戻る計画があった。しかし、実際には児童養護施設での実践が現在でも継続されている。ここ

には、セツラーが大学生であることから入れ替わりが激しく、「地域での活動をもう一度やっていこう」という方向性の継承がなされなかった点が見出される。

では、「本来セツルメントとしてあるべき」地域での実践に、セツラーが魅力を感じられなくなってきたのは、なぜだろうか。明確に示す資料は現在のところ見当たらないが、住吉セツルが実践を行っていた地域の変化が大きいと考える。住吉セツルが長年実践を続けてきた新今宮地域は、日雇い労働者が多い地域であった。もともと子どもが少なく単身者の多い地域であったが、1990 年に入るとバブル崩壊に伴い求人数が大幅に激減し、「日雇い労働者の高齢化が急激なスピードで進展していた」(白波瀬 2017:59)。また、同地域では 1990 年に 17 年ぶりの暴動が起きている(同上:51-53)。他方で、白波瀬(2017)をはじめとした多くの論者が指摘するように、同地域はキリスト教や仏教、その他さまざまな支援団体が存在しており、民間のセーフティネットとして機能していた。これらをふまえると、高齢化の進行に伴う子どもの減少、地域住民の流動化と住まいの変化、民間のセーフティネットのなかで、学生セツルメントとして従来のような子どもと遊ぶ活動の継続は難しくなっていたのではないかと推測される。また、同地域の子どもをめぐっては、西成・ベビーセンター[33]が 1971 年に、子どもの広場[34]が 1977 年に設立され、さまざまな困難を抱える子どもや家庭の支援に大きな役割を発揮していた。これらをふまえると、学生によるセツルメントとしては 1990 年にはすでに役割を終えていたとみることができるかもしれない。

そうした中で、地域実践を「本来セツルメントとしてあるべき」姿と位置付けながらも、その意義や魅力が見出せなくなり地域を離れた実践を求めることになったと推察される。一方で、これらのプロセスからは、「今までとは違う幼児とはどんなものだろうか知ってみたい」「幼児の成長過程を手助けできたら良いし、またそれによって自分たちももっと自己成長していけるのでは」というセツラーの願いや要求に基づいて新たな実践のあり方が追求されていった点も指摘できる。加えて、こうした実践の転換過程は、実践のあり方の議論に留まるものではなく、セツルメントとしてのアイデンティティの模索の意味も含んでいるといえるだろう。しかしながら、地域実践を離れた経緯は必ずしも引き継がれてはおらず、「自分たちの活動はセツルメントといえるのか」という葛藤をうみだしている。

２．大阪府立大学セツルメントにおけるあり方をめぐる葛藤と悩み―「セツルメントといえるのか」という疑問―

現在の大阪府立大学セツルメントは、セツルメントの名称を残しつつも、その実践の場は児童養護施設に移っており地域での実践は行われていない。そのことが、「セツルメントとは何か」「今の活動はセツルメントといえるのか」というセツラーの悩みをうんでいるといえる。そうした中で、大阪府立大学セツルメントでは、そのあり方の模索が行われている。岡本・山田編(2018)に寄稿された 2017 年度のセツラーの文章からは現役セツラーの悩みや葛藤が垣間見られる。

2017 年当時 3 回生であった西尾(2018a:22)は、セツラーとして活動する中での疑問として、2 点を挙げる。1 点目は、「今大阪府立大学セツルメントが行っている活動は『セツル

メント』と呼べるのだろうかということ」であり、「本来的なセツルメント活動をしているわけではないのに、セツルメントと名乗っていることに違和感がある。また、本来のセツルメントの意味や大阪府立大学セツルメントの歩みを知らないまま、ただ単に子どもと遊ぶ部活だということで入部し、部活を続けている部員がいることにも何か悶々とするものがある」と述べる。2 点目は、「今の児童養護施設に行って子どもたちと遊ぶという活動は何を目的としているのかという疑問だ。何のために私たちは活動しているのか、見失ってしまうことがある。それはなぜなのか、何を目標に活動をしているのか」と投げかける。また、同じく 2017 年当時 3 回生の楊(2018a:15)は、実践の側面から、次のように述べる。「毎週毎週子どもたちと関わり続けることが大阪府立大学セツルメントの信念であるのだが、その一方で活動に慣れて活動の目的や意義があまり意識されず、活動を続けてしまっている傾向があった。私自身一回生の頃、毎週の活動に対して『毎週実践に行くことになっているから行く。』という気持ちがあった。もちろん毎週実践に行くことは大事なことであるのだが、手段が目的となっておりそれでは子どもたちのこれからのためにはならないと感じた」。

また、少し遡るが、2011 年当時 4 回生であった筆者自身も、「もともとのセツルメント実践とは離れていることから、一貫した方針というものを見出しにくく、方向性を模索しながら、ただただ 1 人 1 人が真剣にまじめに子どもに関わるという姿勢で活動を続けているというのが現状」(岡本 2011:106)であり、「意識のズレを生むこともしばしばある」と感じていた。そして、「大阪府立大学セツルメントの根本には『自分も楽しくなければ子どもも楽しくない』という考え」があることを認めながらも、「ただ楽しいだけでいいのか、様々な事情があって児童養護施設で暮らしている子どもたちとどのような関わりのありかたがあるのか、今後もセツルメントが続いていくようなかたちでの方針立てはないのか」(同上:107)という葛藤を抱えていた。

これらの文章から、現在の実践のあり方がセツラーにとって悩みや葛藤をうんでいることがわかる。ただし、「活動に慣れて活動の目的や意義があまり意識されず、活動を続けてしまっている傾向」は、大阪府立大学セツルに限らず、各地のセツルにもみられる状況である。そして、これは本期に限った課題ではなく、1950 年代からすでに議論がみられた[35)]。大学生の主体的な活動であるという性格上、学生セツルの実践はマンネリ化傾向に陥りやすいという限界を共通に有している。一方で、1989 年の全セツ連解散まで、そしてその後も 2005 年までは実践交流をする場が担保されており、日常の実践での悩みや葛藤を共有し、他のセツルがどのようにしているかを知る機会があった。地域の連合で開催されていた大会も、そうした実践交流や悩みの共有の場として機能していた。そのことによって、各セツルは、新たな視点を得て軌道修正を図ることや、全セツ連の方針を道標に、あるべき実践を追求することにつながる可能性をもっていた。この点が、現在のセツルメントをめぐる状況と大きく異なる。先にも述べたとおり、2005 年以降は全国のセツルメントの交流の

場はなく、セツル間の交流は図られていないと推察される[36)]。このことから、単一のセツルの主体性・自主性に依拠せざるを得ない状況をうみ、活動の客観視やマンネリ化から抜け出すことをより困難にしていると考えられる。

こうした困難状況の中で、現在も活動を続けるセツルは上述のような悩みや葛藤にどのように向き合ってきたのだろうか。大阪府立大学の試みを手がかりにして、論じたい。

３．大阪府立大学セツルメントにおけるあり方の模索と取り組み

前項では、学生セツルメントとしてのあり方に関する葛藤や悩みを取り上げた。それらに対する取り組みについて論じる前に、実践の側面からの葛藤と模索について筆者の経験を交えて少し述べる。

大阪府立大学セツルでは、定期的に施設職員との懇談会の場を設けていたが、2008 年の懇談会で、「あなたたちはいったい何をしにきているの」という正鵠を射た職員からの問いかけに、筆者自身、閉口した経験がある。毎週ただ漫然と遊んで帰るという繰り返しへの疑問が施設職員からも投げかけられたのである。このままではいけない、という想いでセツラーは一致し、具体的な取り組みが始まった。それからの実践では施設側の協力を得て、毎週の実践のうち月に 1 回は、バルーンアート、お菓子作り、レクリエーション、工作、手作りのシャボン玉など、さまざまな取り組みを企画し、時間をかけて準備し実践に臨むようになった。また、職員との日常的な交流を図るために職員とセツラーとの交換ノートも始めた。信頼関係を 0 から作り直すところから始めた取り組みは、2 年、3 年と続き、施設や職員からのまなざしが変化していったことを感じた。そして、4 年後の 2012 年には、子どもたちと遠出するというセツラーからの企画が快諾されるまでに至った[37)]。

地域での実践の場合、セツラーやセツルメント内部とは別に、地域住民や地域との関係性において葛藤が生じる状況がみられた。これが、施設での実践になると、施設職員や関わる子どもたちとの関係性の問題になる。その意味で、実践の場は異なるが、構造としては共通している部分があるといえる。

さて、あり方の具体的模索に論を戻す。大阪府立大学セツルでは上記で挙げた悩みや葛藤に関連して、大阪府立大学セツルの午前パートでは、「部員どうしの交流、やりとりが希薄であるという一面」(楊 2018a:15)があったという。当時のパートリーダーであった楊は、「部員どうしではこれについて分かっているが、そこからのどうしようかという話がほぼないようにも感じることがあった」(同上)と述べる。こうした状況に対して、「部員どうしの交流する機会や本音で語り合う機会」として、午前パートでのワークショップが企画される。ワークショップは、現在の実践の位置づけや実践がよりよいものになるとはどういう状態か、そして、反省会の位置づけなどが論点として構想された。実際のワークショップでは、①今のセツルの好きなところ、②こんなセツルだったらいいな、③今のセツルの良くないと思うところ、④こんなセツルになってほしくない、の 4 点について KJ 法を用いて模造紙に貼りだした上で、図 6-1 のように貼り直し、現状分析と課題、理想のビジョン、それに向けた方法を可視化した。写真 6-1 がその際の模造紙の写真である。

良くないところ、問題点	（こういう方法あるよ！）	こんなセツルだったら！

図 6-1　ワークショップの内容

楊(2018a:18)一部改変

写真 6-1　ワークショップで使用した模造紙　(楊 2018a:19)

このワークショップはセツル内でのものだが、大阪府立大学と同様に児童養護施設で活動する他大学のボランティアサークルとの交流会も企画・実施された。そのきっかけについて、西尾（2018b:27)は、次のように述べる。「私は、今私たちが行っている活動が本来の settlement の意味と少し離れているように感じ、疑問を持ち、セツルメントという名前が残っている意義は何だろうかと考えていた。そこで、他大学のセツルメントと交流し、どのような活動をしているのかを知り、セツルメントの意義について話したいと思ったことが、交流会を開こうと考えたはじめのきっかけである」。そして、幹部での相談の中で、「『セツルメント』との交流会よりも、大阪府立大学のセツルメントの活動と似た活動をしている団体、所謂児童養護施設に出向いて活動している団体との交流会を開く方が、実践的であり、活動のためになるのではないかという意見」が出たことで、同様の活動を行っているサークルとの交流会が行われることとなった。具体的には、ワールド・カフェの

方式を用い、部活に入った動機や今まで活動してきて感じたことなどが話し合われた。交流会を通して、自身らの活動やあり方を問い直し、振り返る契機となったことが西尾・楊(2018:31-34)の考察より垣間見られる。

また、「今の活動はセツルメントと呼べるのか」という悩みを抱えていた西尾(2018a:23)は、これらの取り組みや学習を進めていった結果、「今の活動は「セツルメント」とは呼べないと思う」と述べる。一方で、「私は『セツルメント』という名前を残すことだけにも意味があると考える。実際、私は『セツルメント』の意味を知らず、活動内容に興味があったため、この部活に入ったのだが、『セツルメント』という名前が残っていたからこそ、疑問を感じ、調べることができた。もし『ボランティア部』だったとしたら、セツルメント活動について全く知らないまま過ごすことになっただろう」とし、「部員に歴史を伝える機会を設けるべき」とも述べる。ここに、セツルメントの歴史を学ぶ必要が理解されていることがわかる。そして、実際にセツルメントの歴史を学ぶ勉強会がパート会の中で開かれるに至った。

これらの取り組みは、自身らの実践を通してうまれた具体的な悩みや課題に対して、その解決やヒントを得るために取り組まれたものであり、要求に基づく自主的・主体的な活動といえる。同時に、セツルメントとしてのアイデンティティの模索としての側面も見出される。今日においては、セツルメントの意味を知らずに入るセツラーがほとんどであり、活動を続けているセツラーの中にも意味を知らない者が少なくない。そうした中で、上述したワークショップや交流会、学習会などは、自身らの活動の意義を見出そうとする模索的な取り組みだといえる。

これらをふまえると、大阪府立大学セツルメントの実践は、思想・理念においてもその内容においても、必ずしもセツルメントの歴史や意義が継承されているとはいえず、社会福祉の枠組みの中での活動に留まっているといえる。一方で、現在の児童養護施設の慢性的な人不足の状況を考えるならば、お兄ちゃん・お姉ちゃんという年代のセツラーと密に遊ぶ機会を継続してつくることは、ある種の補完的な役割を担う可能性を有しているとみることはできないだろうか[38)]。加えて、施設の理解と協力のもとに、可能な範囲で創造的な実践を考えて実施しようとしている点、セツラーの現実の要求に基づく活動や取り組みが行われている点には積極的側面を見出すことができる。ただし、この積極的側面とはセツルメントとしての性格を引き継いでいるというよりも、現在の状況に合わせた方法でセツルメントとは何かという問いに向き合っているという意味である。

第５節　小括

１．「1990 年から現在」における動向と現状

本章では、1990 年から現在までの概略を論じた。第 1 節では、社会と社会福祉をめぐる状況として、バブル崩壊以降、各分野の福祉政策が進展し、より細分化していく一方で、2000 年以降、地域福祉の役割が非常に高まってきていることについて述べた。第 2 節では、本期のセツルメントの動向として、全セツ連解散以降も 2005 年まで全国の交流会が続けら

れたものの、思想や理念を共有するというよりも各セツルメントの交流の場としての側面が大きかったこと、2019 年現在においてセツルメントの名称で活動している団体は 10 に満たないことを明らかにした。第 3 節では、現在も活動を続けるセツルメントとして弥次衛セツルメントを例に挙げ、歴史を継承した実践と学習調査活動などが行われている一方で社会福祉協議会との協力関係など新たな展開がうまれていることについても明らかにした。第 4 節では、大阪府立大学セツルメントを例に挙げ、地域実践から離れた経緯について検討した上で、ワークショップや他大学のサークルとの交流会、学習会などが自主的・主体的に行われていることについて論じた。そして、これらの取り組みの中には、セツルメントとしてのアイデンティティを模索する側面が見出された。

２．本期における学生セツルメントの特徴

これまでの論から、本期の学生セツルメントは、全セツ連解散前と大きく質が変化していることがわかる。具体的に大きく 2 点を挙げる。

第一には、個別化の進展である。単一のセツルメントが個別に、そして多様に活動を展開していく点に本期の一つの特徴を見出せる。全セツ連の解散によって、それぞれのセツルメントのあり方が鋭く問われた結果、独自の実践や取り組みが追及され多様な個性をもちながら、個別に展開していくことになったといえるだろう。

第二には、それまでのセツルメントが有していた生活課題に対する補完的な役割や、必要に応じて制度化を求める運動性の変化である。これらは、法制度の整備や専門分化、社会や地域の変化、学生をとりまく状況の変化、学生自身の社会認識の変化、ボランティアや NPO、市民団体、学生団体などの広がりといった要因が複合的に重なり合う中で、その役割をシフトしていったとみることもできる。社会の急激な変化の中で、学生セツルメントも従来と同様の活動をしていくことが困難となっていった側面がある。

他方で、本章では、今日においてもセツルメントの理念や歴史を学び、守っていこうとする姿勢をもつセツルの実例を示し検討を行った。ここから、セツルメントという名称が残っていることによって、その意味の追求や歴史の継承を可能にしている側面が見出された。さらに、歴史の継承を図り今日の状況に応じたあり方を模索する取り組みからは、現代におけるセツルメントとは何かという問いに真摯に向き合う積極的側面も見出される。同時に、地域や施設など、実践を通して現実の地域や社会、子どもたちの状況を知り、学生自身のあり方が問い直されるという側面も指摘できる。たしかに、これはほかのボランティア活動にもみられるものであるが、パート会や反省会、実践記録などの体系が現在においても引き継がれている点には一定の意味があるといえるだろう。

また、学生セツルメントが制度や政策の不備を補う補完的役割を担っていた側面に着目するならば、制度・政策の谷間や狭間といわれる問題や課題を発見し、それらの改善や解決を図る実践の模索と学生セツルメントの理念や思想の継承が今後の学生セツルにとっての課題といえるのではないだろうか。無論、現代において学生セツルメントの独自性としてそれらをいうことはできない。しかし、人格的接触の精神をもって主体的・自主的に多

様な要求に基づく実践を地域住民とともに行ってきた歴史や思想、精神を継承していくことは、地域での助け合いを地域共生社会として政策主導で求められる今日の社会状況の中で、意味があるのではないだろうか。学生セツルメントの実践は、学生によるものであると同時に、地域や地域住民とともに取り組まれたものである。そしてそれは、学生のみならず地域住民の主体形成にもつながる営みであった。地域とともにあゆむ中で、その主体性を培っていった側面は改めて着目されるべき点であるだろう。

注

1) 本期以降、「ヤジエセツルメント」から「弥次衛セツルメント」の表記が主となる。そのため、本章では原則的に「弥次衛セツルメント」とし、資料に準じて記述する。

2) 真田是(1994)『現代の社会福祉理論―構造と論点』労働旬報社など参照

3) 会の名称は年により異なる。詳細は、巻末資料の年表を参照

4) 2019 年 5 月 10 日、代表者とメールでやりとりし、団体の継続が確認できている。

5) 宮城教育大学(2019)「国見セツルメント」
(https://www.miyakyo-u.ac.jp/student_life/circle/ct2_3.html,2019.9.1).

6) 東北大学大学院医学系研究科・医学部(2019)「医学部のサークル活動」
(https://www.med.tohoku.ac.jp/campus/club.html,2019.9.1)のほか、保健部セツルメント(2019)(https://twitter.com/hokenbu1,2019.9.1)では、2019 年 8 月 23 日付の記事が掲載されている。

7) 東北福祉大学(2019)「おいまわしセツルメント」
(https://www.tfu.ac.jp/club/30.html,2019.9.1).

8) 福島大学(2019)「統一サークル連合公認サークル(71 団体)」
(http://gakusei.adb.fukushima-u.ac.jp/e_circle.html,2019.9.1).

9) 日本福祉大学のヤジエセツル・井戸田セツルには聞き取り調査および資料整理のため 2014 年から関わりがあり、直近では 2018 年 6 月 15 日に訪問しており、2019 年 4 月時点においても活動の継続が確認できている。

10) 立命館大学(2018)「セツルメント」
(http://www.ritsumei.ac.jp/sports-culture/culture/group/detail/?id=111,9.1)において、2018 年度の活動目標と活動計画が掲載されているほか、立命館大学ボランティア セツルメント(2019)(https://twitter.com/setsuru_ritsu,2019.9.1)では、2019 年 5 月 29 日の記事が掲載されている。

11) 2011 年から資料整理・調査に関わっており、2019 年 4 月時点においても活動の継続が確認できている。

12) 弥次衛セツルメントの SNS における紹介では、「地域福祉系サークル」とされているが、新歓用冊子の弥次衛セツルメント(2014)「ヤジエセツルメント」では、「ボランティア」との記述

もみられる。

13）坂下セツルから分離してうまれたセツルである。

14）和田清美・医療法人財団ひこばえ会・セツルメント診療所ほか編(2001)『大都市における地域医療、看護・介護の理想と現実～東京都足立区セツルメント診療所 50 年のあゆみ＝』参照

15）氷川下セツルメント史編纂委員会(2014)など参照

16）医療生協とセツルメントの歴史は深く、学生セツルメントから始まった医療活動が医療生協になっている流れもみられる。この点については他稿に譲るが、日本医療福祉生活協同組合連合会(2012:38-54)「医療生協の前史」『医療生協の生い立ち』などが参考に挙げられる。

17）1960-1975 年の全セツ連の分科会テーマについては氷川下セツルメント史編纂委員会(2014:104-112)に整理されている。

18）18 の各セツルの紹介文の中で、記載されているパートは 49 で、そのうち 39 が児童パートである。

19）例えば、ずんがりセツルメント(中央実行委員会 1995:31)では、5 パートのうち 2 パートで「小学 3・4 年生を中心に登録されてる子どもだけで 41 人」「小学 3 年生を中心に 45 人の子どもが登録」との記載がある。また、子供会活動を行う井戸田セツルでも、子供会は登録制を取っていることが 2014 年 11 月 28 日のインタビューで聞かれた。

20）これは、99 期の全体学習会で掲げられた柱であり、計算によると 99 期は 1990 年あたりと考えられる。

21）2018 年 1 月 21 日、弥次衛セツル 4 回生・ほちょるへの聞き取りより

22）同上

23）2018 年 6 月 15 日、弥次衛セツル代表者への聞き取りより

24）2017 年 6 月 3 日、弥次衛セツルメントの BOX(部室)での調査・聞き取りによる。

25）弥次衛セツルメント(2014:83-94)「南区弥次衛町の地域像」のほか、同上 2017 年 6 月 3 日の調査および聞き取りによるもの。

26）東利久(1984)「東大セツルメントの生い立ち」福島正夫・石田哲一・清水誠（1937)『回想の東京帝大セツルメント』,64.

27）2018 年 6 月 15 日、弥次衛セツルメントのセツラーへの聞き取りより

28）同上の聞き取りより

29）一方で、SEAL s にみられるような大学生などによる社会運動がみられるのも事実である。「若者」の社会運動について論じた富永(2017)は、「SEAL s　KANSAI」のメンバーが運動に関わるようになる前の語りを引用した上で、次のように分析する。「デモは、何となく『政治意識の高』そうなもので、周囲にいる多くの人々も『痛い』という印象を持っている。実際にデモや団体の存在を知ってすぐに彼はデモに行き始めたわけではなく、そこには『俺が行かなくてもなんとかなるだろう』『こういうところでやるのはちょっとな』というためらいがある」（富永 2017:84)。ここには、デモや社会運動への参加に対する「多くの人々」の否定的な印象が現れている。また、

富永によれば、若者たちは、「一九六〇年代後半から根強くみられたような「古い」運動を、自らの携わっている運動と区別」(同上:226)し、「日常」の中で使われる「共通言語」を用いてメッセージを発信していることを指摘する(同上:226-227)。学生セツルメントの運動性は、富永の言葉でいうところの「古い」運動を引き継いできたものであり、現代の「若者」の「日常」にコミットしにくい性質があるといえる。

30) 岡本(2018b)(2028c)の一部を加筆・修正したもの。

31) 2015 年 8 月 15 日、住吉セツルメント出身セツラーへの聞き取りより。参加者は、1974 年入学のジャンパチ、トッポ、アグネ、クルル、八重丸、キャンディと 1972 年入学の二世の各氏。

32) 大阪府立大学創基 130 年事業企画委員会編(2015)参照

33) ミッドナイト・ミッションでドイツから派遣されたエリザベート・ストローム氏によるもので 1965 年には「家庭保育の家」を始めており、すでに 1960 年代にその萌芽があった。西成・ベビーセンターは、現在のストローム福祉会の前身にあたる。現在、ストローム福祉会は、児童館である山王こどもセンターなどを運営している。エリザベート・ストローム(1988)『喜望の町 釜ヶ崎に生きて二〇年』日本基督教団出版局など参照。

34) 荘保共子氏がはじめたものであり、1980 年より「こどもの里」となる。現在は認定 NPO 法人「こどもの里」として、児童館のほかファミリーホームや自立援助ホームなどを運営している。大阪市ボランティア・市民活動センター(2019)「COMVO 3 月号」などさまざまなところで紹介されており、2015 年には「さとにきたらええやん」として映画化している。

35) 例えば、1954 年の愛染園学生セツルメントでは、マンネリ化する活動からの変化・脱却のためにサークル(歌、絵、手芸工作、お花を植える会)が生まれた旨が記載されている(大阪女子大学セツルメント 1964:3)。このほか、第 3 章で取り上げた東住吉セツルメントでも 1952 年の合宿で子供会のマンネリ化が議論されている(東住吉セツルメント 1963a:5)。このように、早い段階から、しばしば活動のマンネリ化は議論となっていた。

36) 少なくとも筆者が在籍していた 2008 年以降、大阪府立大学では他セツルとの交流はない。弥次衛セツルでも部室を共有(同じ部屋をロッカーで区切るかたちで使用)している井戸田セツルとの交流がないことが 2018 年 6 月 15 日のヤジエ・井戸田両セツルへの聞き取りで確認された。なお、現在も活動を続けている各セツルの公式ページなどを見る限りにおいても、他セツルとの交流は確認できない。

37) 筆者の記憶と同級生セツラーおよび後輩セツラーへの聞き取りによる。

38) 関連して、2012 年 9 月の大阪社会福祉史研究会において、大阪府立大学セツルメントの歴史と活動を報告した際、出席者より「現在の大阪府立大学セツルメントの児童養護施設での活動は、『補完的な活動』を十分に行っている」との評価があった。詳細は、岡本(2014)参照。

終章

第１節　本研究の総括

１．学生セツルメントの展開

本研究では、1945 年から現在までの学生セツルメントについて、全国・地域の広域連合・単一のセツルメントという 3 つの位相と 4 つの視点から論じながら、研究課題を検討することで、学生セツルメントの担った役割や意義を明らかにすることを目的としてきた。本節では、各章の総括を簡潔に行い、明らかになったことを整理したい。なお、第 2 章以降の内容については、本節では各年代の展開として述べ、次節で時期区分に基づき整理する。

第 1 章では、まず、先行研究の検討を通して本研究における学生セツルメントの定義づけを行った。次に、戦前の先行研究を概観し、北川（1958）による戦前と戦後に「共通する本質」と「形式的な断絶」の視点を手がかりに整理した。その結果、「共通する本質」を、①相手に対して対等に、またのび行く力をもった存在として関わりともに生きるという姿勢や態度、②大学生の純粋さや情熱、主体性に基づく展開、③大学生自身が現実から学び成長する「社会的実験室」としての側面、④大学の変化や社会の変化と関連して展開される点、⑤家庭訪問や社会調査による現実社会の把握、の 5 点に分類した。また、「形式的な断絶」の側面としては、大学による経営の側面と、大学セツルメントによる社会事業経営の側面を示した。そして、戦前との関係から検討すべき課題として、①左翼運動や社会運動としての傾向と左翼運動としてみなされる風潮、②労働教育や細民教化の側面、関連して教育的機能や教育運動の側面、③自主的組織づくりや小社会形成の役割、の 3 点を挙げた。その上で、戦後の主なセツルメント研究についての概観を通して、課題を整理した。その結果、①時代背景や社会の変化、社会福祉の動向との関係、②地域実践と住民自治との関係、③社会運動・社会福祉運動の視点、④人間形成・自己教育の視点、の 4 点を本研究の視点として設定し、研究課題の検討とともに論じることとした。

第 2 章から第 6 章では、1945 年から現在までを時期区分し、それぞれの時期の展開について各章で論じた。以下、概略を示す。

戦後、学生セツルメント再建時の理念には、生活や暮らしを守る運動という位置づけと民主主義および平和への志向が含まれていた。簡略化すると、学生セツルメントの再建から 1950 年代後半あたりまでは、この 2 軸の揺れ動きの中で理解することができると考える。1950 年の再建当初から 1950 年代半ばにかけては、人権保障や社会福祉概念が未成熟で制度政策が不十分な中、前者の位置づけが強く、地域の要求に応じて医療・衛生・法律相談・保育・教育などの分野において、不足する資源を補うとともに新たに創りだす役割を担った。ここには、社会福祉運動としての側面も含まれていた。1950 年代半ばから後半にかけて、全国組織としての学生セツルメントの方針では、さまざまな政治課題の浮上、労働運動や学生運動の活発化と関わって民主主義や平和への志向性が強まり、平和運動や労働運動の色彩を強めた。全国組織のレベルでは、砂川基地反対闘争や安保

改定阻止の運動など、政治的・社会的問題を、学生セツルメントの取り組むべき課題として取り上げる方向があった。一方で、地域においては、子どもの教育保障や保健衛生の向上、災害救援、人口の流動化に伴う農村の人不足など、社会や地域の状況に応じて地域課題の解決や人びとの生活や暮らしを守ることを志向する地道な実践があった。また同時に、大学進学率が低い中、社会に対して何かをしたいという学生の要求がこうした運動や実践へと駆り立てた面がある。

1960 年代に入ると、全国レベルでの方針の挫折により学生セツルメントは大きく方針転換することとなる。高度経済成長に伴い、社会福祉の法整備が進み地域福祉への注目が高まる中で、運動性を強調する方針から学生の人間形成の場としての方針が強調されるようになる。大学生としてのあり方を問う側面を多分に含みつつ地域実践に取り組むなかで、生活課題の解決のみならず、セツラーが大学での学びをいかに地域に還元するか、また地域実践から自身は何を学ぶか、ということに大きな関心が向けられるようになる。

こうした方向性は、1970 年代にも引き継がれる。1970 年代に入り各地で地域住民自身が担い手となる運動が高まる中で、学生セツルメントでは、地域住民自身が組織化していく過程に携わる実践や、住民とともに地域改善に取り組む実践がみられた。大学の進学率の向上により大学が「大衆化」する中で、学生の抱える問題と地域住民の問題とが密接に関連するものとして、認識されるようになるのである。1970 年代以降はとくに現実から何を学ぶのか、という意識がセツラーの中で高まっていく点にもその特徴がある。

1970 年代後半以降も、地域の中にこそ社会の矛盾が含まれるという視点から、地域実践から学ぶという視点は継続された。ただし、大学進学率の上昇、法制度の整備、社会福祉の専門分化などの流れのなかで、学生セツルメントが初期において大きな役割を発揮した法律相談や医療、保健衛生などの領域ではその役目を終えていく。その一方で、学生運動が変質する本期において、学生運動とはちがったかたちで社会から学びたい、社会のなかで何かをしたいという学生のエネルギーが学生セツルメントに向かい、1970 年代後半から 1980 年代にあっても量的には広がりをみせていた。実践では、法整備の遅れていた障害児の学童保育や障害者の共同作業所づくりの運動に地域の団体と連携しながら取り組まれた例などがみられる。一方で、学生セツルメントが有していた地域課題の発見や制度政策の補完的機能といった役割は 1970 年代以降徐々に薄れている。また、1970 年代後半は、運動の意義づけやセツルメント理念の曖昧さなど、それまで蓄積していた課題とともに、大学におけるカリキュラムの厳格化、アルバイト、サークルの多様化など大学生をめぐる状況の変化に対応できなくなってくる。そうした中で、学生セツルメントは組織としての継続が困難となり、1989 年に全セツ連が解散を迎える。

その後も規模は縮小しつつも学生セツルメントは継続する。組織体系がなくなってからは、単一のセツルメントによる個別化がすすみ、多様な展開がなされている。一方で、社会や社会福祉、大学をめぐる変化などを背景に、地域の生活や暮らしの課題を発見しその解決を図るという役割や制度・政策の補完的役割は、見出し難い状況にある。

以上が、第 2 章から第 6 章を通して論じてきた学生セツルメントの展開である。これを

ふまえた上で、学生セツルメントの展開過程について整理を試みたい。

２．学生セツルメントの展開の整理

序章でも示したとおり、高島（1958:32）は、「セツルメント法学」[1)]の論者にしたがって学生セツルメントの地域組織化の形態を以下の三段階に概念構成した。

Ⅰ.セツルから地元への（一方的な）、呼びかけの段階（活動の主体はセツル）

Ⅱ.セツルと地元との協働（相互的かつ共同の呼びかけ）の段階（活動主体は地元とセツル）

Ⅲ.地元民が自らの力で自分達の生活をまもるために活動する段階（活動主体は地元）

そして、「セツルメントは第三段階においては消去され、『セツルの本質的に媒介的な性格を示している』」とした。

高島の論は、今日の社会福祉の動向をふまえれば、捉え直すべき点が多数ある。例えば、高島は、第三段階においてセツルメントは消去されるとしたが、公私協働論が重視される今日においては上記の三段階論には無理がある。また、多様な学生や学生団体による社会的活動、NPO や市民活動などの役割は、当時とは異なっている。これらの限界があるものの、序章、第 1 章で示したように学生セツルメントの通史的研究は現代においてもみられず、長年にわたって学生セツルメントの展開過程をみてきた高島(1958)による展開過程の整理は、今日においても有効な部分があると考える。そのため、この段階論そのものは捉え直し、本論文で検討した具体的実践内容をふまえて整理を試みたい。

まず、第一段階についてであるが、これは、戦後再興期初期(1050 年代初頭まで)の学生セツルメントにおいては必ずしも一致するとはいえない面がある。なぜならば、戦後の混乱状況の余韻を残し、さまざまな資源や制度が不足する中で、地域の「うめき」(柴田 2007:70)ともいえる要請や要求に応じて目の前の課題に取り組んだ側面があるからである。また、再建当初においては、大学教授や OS らの支援があったことも明らかとなっていることから、単純にセツル主体とは言い切れない側面もある。ただし、1950 年代半ばから後半にかけては、この第一段階が指摘する「活動の主体はセツル」という側面はあったといえる。これまで指摘してきたとおり、学生セツルメントが主体となって地域組織化を進めるという論調が、とくに 1950 年代半ばから 1950 年代後半にかけての全セツ連で強くみられ、それが生産点論につながった側面があるためである。次に、第二段階についてであるが、これは、1970 年代に入ってからとくに顕著にあらわれる。先にも指摘したとおり、1970 年代に入ると、地域社会の変化や地域福祉への着目、地域住民自身による運動の高まりなどと関連して、地域住民自身が組織化していく過程に携わる実践や、住民とともに地域改善に取り組む実践がみられるのである。ここで、1 つの疑問として、1960 年から 1970 年にかけての段階をどのようにとらえるか、という問題が浮上する。この点については、後述することとして、第三段階に論を進めると、1970 年代以降

の地域や地域福祉をめぐる動向の変化との関連の中で、学生セツルメントが従来と同様の活動をすることが困難になっていく時期と一致することが見出せる。つまり、セツルメントを「本質的に媒介的な性格」をもつものとしてとらえ、地域組織化の側面から展開を検討すると、その「本質的に媒介的な性格」は一定の役割を果たしていったという見方ができるのである。高島の示した概念構成は 1958 年の論にもかかわらず、現代からみても、ある程度一致しているといえる点で非常に興味深い。

しかし、上述のとおり、三段階の概念整理では、無理がある側面も否めない。そのため、高島の概念構成を参考にしつつ、本研究で得られた知見をもとに概念構成を組み替えてみたい。ただし、高島は、地域組織化という観点で概念構成を行ったが、本研究においては、上述した展開をもとに、①時代背景や社会の変化、社会福祉の動向との関係、②地域実践と住民自治との関係、③社会運動・社会福祉運動の視点、の 3 つの研究の視点から概念構成を試みる。そうすると、次のようになるだろうか。

Ⅰ. 再興期前半：1945～1950 年代初頭

地域からセツルへの段階(地域の切迫した要求が原動力、活動の主体は、OS や大学教授らの支援を受けたセツル)

Ⅱ. 再興期後半・組織構築期前半：1950 年代半ば～1950 年代後半

セツルから地域への(一方的な)呼びかけの側面が強い段階(活動主体はセツル)

Ⅲ. 組織構築期後半・組織転回期前半：1960 年～1970 年

セツルから地域への(寄り添う)意識が強まる段階・地域との関係を模索する段階(活動の主体はセツルと地域)

Ⅳ. 組織転回期後半・組織変容期前半：1970 年ごろ～1970 年代半ば

セツルと地域の協働（相互的かつ共同の呼びかけ）の段階（活動主体は地域とセツル）

Ⅴ. 組織変容期後半以降：1970 年代～

地域住民が自らの力で自分たちの生活をまもるために活動する段階（活動主体は地域）

あくまでも上記は概念構成であり、上記のように明確にはいえない部分もある。また、重なりのある時期もある。しかし、セツルメントの変化をとらえるという点で、高島(1958)の知見は意味があると考え、援用を試みた。なお、第 3 段階を、「セツルから地域への(寄り添う)意識が強まる段階・地域との関係を模索する段階」としたのは、1950 年代後半までの運動への志向性が強い方針から、地域実践を通して学ぶ側面が強調される時期であり、地域実践への再着目ともいえる時期であるためである。

ここまで、学生セツルメントの展開について本研究で明らかになったことを述べた。その上で、それらをふまえて学生セツルメントの段階について、①時代背景や社会の変化、社会福祉の動向との関係、②地域実践と住民自治との関係、③社会運動・社会福祉運動の視点、の 3 つの視点から概念構成を試みた。概念構成にあたって高島の論を援用したが、これは先にも述べたとおり、地域組織化の観点からなされた概念構成であった。では、学

生セツルメントの展開過程に着目するならば、その画期はどの時期にあるといえるだろうか。

３．学生セツルメントの変化

本研究の知見をふまえ、戦後から現在に至る学生セツルメントの展開過程を、その性質の変化から大きく分けるとすれば、2 つの画期があったと考える。

本研究の時期区分でいう再興期から組織構築期、すなわち 1950 年の再建から 1960 年代後半あたりにかけて、学生セツルメントはさまざまな制度や資源の不足を補いながら、学生の主体性に基づいて新たな資源を創りだす役割を一定担っていた。この時期には、医療や保健衛生、法律相談など、専門職とも協力しながら専門性の高い社会調査や実践が行われていた。同時に、地域の課題から必要な制度政策を求める運動性も有していた。

学生セツルメントの画期の第一は、このような性質や役割が大きく転換する組織転回期のうちの 1960 年代後半から末にかけてだと考える。この時期は、社会福祉の法制度の整備が進み、学生運動にも 1969 年の東大安田講堂事件にみられる大きな転換がある中で、学生セツルメントの位置づけが改めて求められる局面であったといえる。そうした中で、人間形成および自己教育の場としての位置づけを強め、実践においても、セツラーが地域での実践を通してどのように社会問題を認識し、学ぶか、ということに主眼が置かれるようになった。また、法制度の整備や地域福祉への注目、住民自治の高まりなどと関連しながら、地域住民や地域の団体とともにその課題の解決を図るという方向がより強くみられるようになる。ここには、法整備や専門職の規定がなされる中で、専門性の高い実践は学生セツルメントの実践として取り組むことが困難になっていくという面も含まれる。これらの側面は、1970 年代に入りますます強まる。

社会情勢や地域の変化を捉え、必要に応じた実践が取り組まれてきた学生セツルメントであるが、組織が拡大し多様化する一方で、徐々に組織として一致した方向性をもつことが困難になってきていた。そして、それまでの組織体制の抱えていた課題が、財政難、運動に取り組むことへの意義づけやイデオロギーの問題、執行部の負担といったかたちで顕在化し、全セツ連は解散を迎える。

この、全セツ連が解散後の 1990 年あたりに第二の画期をみることができると考える。それは、全セツ連の解散により、学生セツルメントの体系を支えてきた組織構造が消失していくという理由だけではない。体系的な組織の消失は、単一のセツルメントに対して学生セツルメントのアイデンティティを鋭く問うことにつながった。その結果、個別のセツルメントがそれぞれに独自性を発揮しながら多様に展開をしていくことになった。ここには、それまでのセツルメントにみられたイデオロギー的側面や社会認識の視点の変化、法制度の枠組みの中での実践といった質的変化がみられる。他方、社会福祉が専門分化する中で、学生セツルメントが担ってきた補完的・創造的役割や運動性は、専門職やボランティア、社協、NPO、地域の団体など、多様な主体へと担い手が広がっていったともいえるだろう。

以上から、学生セツルメントの展開における第一の画期は、地域の要求に基づいた実践

によって制度や政策の補完的役割や運動性を有していた時期から、地域実践を通してセツラーが人間形成、自己教育していく場としての位置づけに転換し地域との協働の意識が強まる 1960 年代後半から末にかけてだといえる。そしてその後、組織体系が消失し、単一セツルメントの個別化がすすみ、法制度の枠組みの中での実践へと転換する 1990 年あたりに第二の画期を見出すことができる。ただし、これらの 2 つの画期は、あくまで学生セツルメントの質の変化として大きいと考えられる時期である。これまでみてきたとおり、社会や地域、大学生をとりまく状況など、さまざまな要素が絡みあって質的に変化しており、良い・悪いという一面的な評価をすることができるものではない。

また、これまで一般的に、学生セツルメントは 1960 年代あたりまで活発化したもののその後は衰退して現在では存在しない、と語られることも少なくなかった。しかし、本研究においてはその内実と変化についてより具体的に明らかにしたと考える。次に、人間形成・自己教育の側面について本研究で明らかになった知見をもとに論じたい。

４．学生セツルメントにおける人間形成・自己教育の役割[2)]

（１）序章から残された課題と自己教育の定義

序章において、人間形成・自己教育の視点から学生セツルメントを検討する際、大きく 2 つの論点があることを示した。それは第一に、本来的に内在していたはずの人間形成・自己教育の側面が 1960 年代後半になって改めて方針として明確化されるのはなぜか、という点である。そして第二に、当時の学生セツラーにとって、セツルメント運動の経験は、その後の人生にとってどのような影響を与えたのか、という点である。第一の点については第 5 章第 2 節で論じたため、本項では、第二の点を中心に検討する。

なお、序章でも示したが、自己教育の定義について、本研究では、自己教育の思想史研究を概観した上で位置づけた山田（1987:179）による以下の定義を用いることとする。

> 自己教育の思想史の考察から得た自己教育とは、学習する主体が、自己の生活世界と社会システムの狭間で、みずからの生き方やアイデンティティを決定するために教育を進める、ダイナミックな運動であった。そこでは、教育し、教育されあう他者の関係が、一方向的なものではなく、相互主体的なものへと再構成され、その中で、バラバラの孤立した個人学習ではない、自己の学習を他者との関係を通して確認し、発展させていくことが展望されていた。このような意味において、自己教育とは、他者との相互主体的関係における学習者の主体的選択・実践の運動であり、それは、第三者が客観的と見せかけて特定の意味を付与することの対極に位置するものなのである。

先述のとおり、戦後再興期および組織構築期の前半にあたる 1950 年から 1960 年あたりにかけて学生セツルメントにおいては、生活や暮らしを守る運動という位置づけと民主主義および平和への志向が含まれ、この両者の揺れ動きがみられた。一方で、地域実践を否定するかたちで運動性を強調する方針が出されたことの反省から、1960 年の 60 テーゼ以降、

その流れが変わってくる。具体的には、1962 年の 62 テーゼにおいて、学生セツルメントは、セツラー自身の要求や主体的条件を大切にし、学生が学び自己変革をするところであるとの理念が確認される。62 テーゼ以降、1970 年代に入ってからは、地域実践を通して社会を知り生きる力を育む「自己教育運動」として定義づけられていく。第 5 章では、こうした方針転換の背景を複数挙げ、それらの要素が相互に関連しあっていたことを示した。

では、セツラー自身はセツルメントを通してどのような学びがあったのだろうか。また、それは、卒業後にどのような影響を与えたのだろうか。

（2）セツラーにとってのセツルメント―OS への聞き取りを中心に―

さまざまな地域で実践を行うセツルメントにとって、地域や社会の現実を知り、そこから学ぶ点は大きかった。それは、第 4 章第 4 節で引用した「日払いなんて、セツルに入るまで知らなかった。生活を知った」などの言葉や「(地域に何か) やらせてもらったというよりも、学びに行っていた。活動を通して成長したというのが学び」[3]といった言葉にも代表される。実践場所や内容、意識の差こそあれセツルメントで実践を行うことを通して、学生セツラーは、それまで知らない世界を知り、何ができるのか、何が必要かを真剣に考え、学び、成長する機会になっていたといえる。これは、「机の上だけの勉強ではなく、現実の社会(地域)に飛び込み、そこにある大小さまざまの矛盾と四つに組み、地域の人々と共に悩み、喜ぶ中で自分の生き方を学んだ沢山の学生セツラーを社会に送り出してき」たとの記述(全国学生セツルメント連合書記局 1967a:1)にも一致する。また、これらには、セツルメント創成期の大学拡張運動の精神が継承されていた点も見出せる。この点についてはより詳細な検討も求められるが、セツラーのそれまでの価値観を超えた実践知を得る契機となったことは確かであろう。

また、学生セツルメントでは、各セツルメントで毎週のように会議がもたれたほか、全セツ連大会、広域連合ごとの大会や合宿、代表者会議など、多くの会議や大会があった。大会が近づくと、セツラーは「雑魚寝で布団に潜り込んで」[4]話し合ったほか、毎回の実践記録や大会に向けた資料や記録、実践総括の作成が行われた。また、セツルは「何でも言えた。どんなことでも聞いてくれた。」「何でも話せる場」[5]であり、受け止めてくれた、など、話し合いを大切にする姿勢は、大会に向けた準備に留まらず日常的にあった[6]ことがわかる。これらから、徹底的に話し合う経験を通して実践が深化するとともに、学びあいにつながった側面も見出せる。確かに、これは他のサークル活動でもいえることである。しかし、学生セツルメントには、セツラーが残した膨大な資料や記録があり、多くの話し合いや作業がなされ、それを記録する習慣があったことを物語っている。さらに付言すれば、学生セツルメントには社会福祉に限らず、経済、工学、文学、理数などさまざまな学部の学生が参加していた。その意味でも、セツラーの議論そのものが視野を広げ、学びを広げる機会にもなったと推察される。

そして、学生セツルメントでは、大学生活の 4 年間が終わればそれで終わりと考えられていたわけではない。66 テーゼで「私たちの生き方を追求する学生サークル活動」との性格づけがなされていたように、社会や地域の現実から、将来どう生きたいか、社会でどのような生き方をしていきたいかを追求していく場としての意義づけも大切にされてきた。では、学生セツルメントを経験し、通過したセツラーは、どのような生き方を選択してい

ったのだろうか。

例えば、「セツルをしていたから、こういう人生を歩んでいたと思う」と語るオールドセツラーは、学童の指導員や小学校講師を経て、地域の親子劇場等の活動に関わり、保育園がなかった地域でつくられた共同保育園を母体とした保育園の園長となった。また、「子どもの見方や教師としてのあり方の原点になっている」と語るセツラーや、一見セツルには関係のない職を選択しても「セツルの経験が人生の原点」と語るセツラーもいる。これらから、自身の“今”があるのは、セツルの経験があるからだと感じているセツラーが多くいることが指摘できる。

一方で、セツルメントの経験について、多くは語らないセツラーや、今も葛藤を抱えるOSがいることも事実である。聞き取りの中でも、「自分たちは学ばせてもらったが、やりっぱなしの感がある」「もっと大変なことや大変な人がいるのに、自分だけが安定した生活をしていいのか」という思い等も聞かれた。また、第5章で示したように1960年以降も、大学側が思想的側面を警戒して「就職で不利になる」などと言って解散を迫る例などもみられた。このようなことから、「“知られない方がいいようだ”という心性」山田(2015b:5-6)が働き、セツルについて多くを語らないOSもいるだろう。しかし、どのような主体的意味付けがなされていたとしてもセツルメントの経験が各セツラーの卒業後の人生において大きな影響をもって存在しているといえよう。

（3）セツラーの葛藤―資料を手がかりにして―

セツルメントを卒業して各地でさまざまな活躍をしているOSがいる一方で、セツルメントを離れるセツラーもいた。また、セツルメントの経験が美しく感動的なものばかりだったとはいえず、当時のセツラーが書き残したノートや記録でも、活動の中での悩みや苦しみの記述は少なくない。例えば、1976－77年のものと推察される[7]「セツルと私」と題した文章では、「私にとってセツルって何なんだろう。今まで何をしてきたんだろう。セツルをやっていていったいなんになるのかナ。私はただみんながやるからやって、みんなにただついて行っているだけなのかナ。自分自身このごろなにがなんだかわからなくなってきているんです。セツラーっていったいなんですか。私はやっぱり本当のセツラーになれないのでは、なんて最近こんなことばかり考えている私です…略…」（関短Sr会(不明)）と記されている。

また、1968年発行と推察される紙片[8]には、一年間に辞めた者や休部している者が、十数人にもなると記され、その理由は、「“セツルをやっていると時間的に余裕がなくほかにやりたいことがあってもやれない”“性格的に合わない”“民青のことがひっかかる”“子供達が何をしたいのかと考えていると自分は何をしたいのだろうと疑問を持つ”」（府大セツラー会(不明)）等であるとされている。

どんぐり会（1974:1）では、新入生セツラーであるパンクが、1年間でパートメンバーのうち2名が辞め、どんぐり会全体でも「輪は相当小さく」なり、「私自身活動に確信をもっているとは言えないので引きとめることもできずその度に考えさせられました」と述べる。その上で、「活動に対する疑問を解決しないままでKSr[9]になるのは不安」だとして、どんぐり会に対する批判や疑問点を整理している。パンクによる整理は、次の4点である。

①傲慢ではないか。
　地域の人について情報を寄せ合い願いを持ちビラ（※で：筆者補足）働きかけるのを決める事。
②甘いのではないか
　時間とお金を使って子供たちと遊んでくること。それで学んだとする事。
③地域よりも、自分の生き方の方が大切ではないか。どうやって生かしていくのか。
④利用しているのではないか。
　自分の理論の根拠づけに地域現実をこじつけているのではないか。
⑤嘘があるのではないか。
　愛情深い言動に憧れてしまい、心が伴わないまま人に対したり、気分がのらないのにしらけまいとあること。

（同上:1）

これらの、セツルメントに対する葛藤や退部の理由、そして批判や疑問について、１つずつ検討することは困難だが、重要な点は、真剣にセツルメントに向き合い、自身に問い返した結果の言葉であるということであろう。これらの言葉には、先に述べた山田（1987:189）による自己教育の定義と重なる部分が見出される。すなわち、「自己教育とは、他者との相互主体的関係における学習者の主体的選択・実践の運動」であるというものである。この定義に基づくならば、セツルメントを卒業したとしても、辞めたとしても、通過していった者にとって、それは自己教育の意味を十分にもつものなのではないだろうか。そして、「第三者が客観的と見せかけて特定の意味を付与することの対極に位置するもの」（同上）との定義に基づくならば、上述の言葉そのものにセツルメントを通過していったセツラーの主体的選択と実践が内含されているといえるだろう。

また、別の面からみれば、これらの記録が残っているのは、セツルメントを通過していったセツラーにとって、これらの言葉の中に共感できる要素があったこと、否定的な意見であっても排除せずに受け止める環境であったことを意味しているのではないだろうか。

（４）学生セツルメントにおける人間形成・自己教育の視点と大学教育のあり方

また、人間形成・自己教育の視点は、大学教育に関しても意味があると考える。第 6 章でも示したとおり、大橋謙策は、2015 年 11 月 18 日付の福祉新聞の記事で「社会福祉士ができてから、(※大学での教育は:筆者補足)福祉制度の解説にとどまっている」と指摘した。大学の教育内容において資格取得が重視される現代でも、大橋(2002:238)の「「社会福祉学とは何か、社会福祉教育のあり方、社会福祉教育方法それ自体が問われることになる」という指摘は重要な意味をもつだろう。

他方、大学教育をめぐって、経済学者の木下(2009)は、現在の大学において学生が消費者になっており、教えるというサービスを消費するものだと学生は思っているのではないかと指摘する。そして、大学は、学生を消費者から生産者にしなければならないと主張する。「それは、いわば思考の冷凍人間が自らを解凍してゆく場である。『板書→筆記→暗記』という外発的なサイクルから自分を解き放ち、自分で『餌』を求めて獲得できる力を身につけるところである」(木下 2009:115)。さまざまな葛藤を抱えつつも、地域の現実に向き

合う実践を通して、自身の「生き方」を見つめるセツルメントの実践と運動は、与えられるのではなく、他者との関係や討論を通し、考え抜き、そして主体的に取り組むことで、相互主体的な学びを得るというプロセスを含んでいた。

たしかに、他のサークル活動や学生運動にも自己教育の役割はある。しかし、戦後の学生セツルメントは、主体的・自主的かつ継続的な地域実践を通して地域の現実や要求に応じて新たな実践を創り出しており、結果ではなくその過程を重視した。また、徹底的な討論や、地域住民とともに地域の現実に向き合って創り出された実践を通してなされたセツラー自身による主体的意味付けには、一定の評価ができるのではないだろうか。

本節では、本研究の総括として、学生セツルメントの展開について分析した上で、人間形成・自己教育の側面から検討を加えた。次に、第 2 章から第 6 章で論じてきた各時期の展開について本研究の 4 つの視点から考察したい。

第２節　総合考察

１．学生セツルメントの再興期　(1945－1955 年)

第 2 章では、戦後再建期における学生セツルメントの特徴について検討し、戦後の混乱状況の中で地域の要求に応じた先駆的・補完的な実践が取り組まれたこと、社会福祉運動の性質を有していたことを明らかにした。

（１）時代背景や社会の変化、社会福祉の動向との関連

本期は、終戦後の混乱期であり、GHQ の占領下のもと社会福祉に関する法整備がなされるものの、事後処理的な対応であり、人権保障や生存権の保障が実態として伴っていたとはいえなかった。そうした中で、キティ台風の救援活動を契機として東京大学セツルメントが再建する。その際、三大スローガンの 1 つに「平和こそ生活を守る」が掲げられた点からは、戦争の経験や民主主義への志向がみられ、大きな意味があったといえる。同時期、大阪では愛染園学生セツルメントが発足するが、地域福祉施設を拠点としたセツルメントである点、国や教授の要請を受けて活動が始まっている点が特徴的であるといえる。ここには、直前の戦争の影響による人手不足や、国および大学教授からの期待が背景あったと考えられる。北川(1958:14)は、「学生のみによる再建」に、戦前との「形式的断絶」の側面を見出しており、学生主体による再建という見方は先行研究にもみられたが、実際には、本期においては東京大学セツルメントや他のセツルでも OS や大学教授の支援があった点が明らかとなった。また、上述の社会状況や衛生状況を反映し、保育や子供会活動、保健医療活動などの実践が展開され、法制度の補完的役割を果たしていた点も指摘できる。

（２）地域での実践と住民自治との関係

地域において、劣悪な衛生状況、医療費の捻出が難しい生活状況、生活していくために働きに出たいが保育所がないなど、日々の生活を成立させることで精一杯という状況が珍しくない本期、セツルにおいても目の前の要求への対応に追われる状況があったといえる。そのため、住民の自治的な組織づくりという点は強く意識されていたとは言い難い。実際、

地域での実践や地域の要求を受けてつくられた亀有セツルメントみどり保育園の運営はセツルメント主体で行われていた。しかし一方で、保育園を運営するにあたって、母の会の結成と協力は大きく、また、日々の保育においても母親らが交代で手伝いにくるなど、地域との協力関係の中で実践がすすめられた側面もあった。

（3）社会運動・社会福祉運動の側面

東京大学セツルメントの再建にあたっては、「生活の向上のための組織」を作ろうという趣旨があった。また、1952 年の三大スローガンの 1 つにも「大衆の生活を守ろう」が掲げられていた。これらからは、戦後の混乱期、人々が苦しい生活を迫られる中で、学生セツルメントが国民の生活擁護、社会福祉の実現を目指す社会福祉運動の側面を有していたことが指摘できる。同時に、戦後さまざまな資源が不足しているなか、地域の状況に合わせて新たに創りだしていく運動体としての機能も併せ持っていたといえる。学生セツルメント再建時の理念には、生活や暮らしを守る運動という位置づけと民主主義および平和への志向が含まれていたが、本期においてはとくに前者の視点が強くみられた。

なお、本期の最後にあたる 1955 年には全セツ連が結成されるが、これは関東セツルメント連合をその前身としており、その後も関東セツルメント連合から全セツ連の執行部が出されるなど、全セツ連と関東セツルメント連合はほぼ重なり合うものであったことも明らかとなった。

（4）人間形成・自己教育の側面

本期のセツラーには、のちに保育史の研究者となる宍戸健夫や社会福祉学の研究者となる三浦文夫、高島進、教育学の研究者となる坂元忠芳のほか、絵本作家のかこさとしなどが挙げられる。本期は、かこさとしのように社会人の立場で参加するセツラーや三浦文夫のようにレジデントとして、住み込みのセツラーもいた。かこさとし[10)]は、当時、企業に勤めていたが川崎セツルの実践では大きな手製の紙芝居を子どもたちに見せており、こうした経験がその後の絵本作家として進む道の基礎にあったことが窺える。また宍戸は、保育園の園長という立場で毎日保育園に通っており、当時は教育学を専攻していたが、のちに、保育研究へと歩む原点としてセツルメントの経験があった。高島は事務局の立場から、資金集めや OS への協力に奔走した。坂元は、自身の実践経験をもとに機関紙に「生活綴方実践報告」を掲載しており、その後の『教育実践記録論』などにみられる研究の礎になっていることが窺える。本期は、支援があったとしても、基本的には学生が主体となって運営や経営を進めなければならなかった。ここで挙げた人物はほんの一握りにすぎないが、さまざまな立場で密接にセツルメントと関わった経験が、それぞれの人物の人生において大きな影響を与えていることが垣間見られる。

２．学生セツルメントの組織構築期　(1956－1966 年)

第 3 章では、1950 年代半ばから後半にかけて、運動性の高い方針が出された経緯と背景、1960 年以降、学びの場としての位置づけを強調する方針へと転換する背景について検討した。その結果、地域実践と社会変革という 2 つの軸の揺れ動きの中で運動性の高い方針が出されたこと、地域実践を否定する方針は各地のセツルメントには受け入れられず方針転換へと至ったことが明らかになった。

（1）時代背景や社会の変化、社会福祉の動向との関連

本期は、1950 年代後半から 1950 年代末にかけてと、1960 年以降の動きに大きく分けることができる。1950 年代後半から末にかけて、全国組織としての学生セツルメントの方針では、さまざまな政治課題の浮上、労働運動や学生運動の活発化と関わって民主主義や平和への志向性が強まり、平和運動や労働運動の色彩を強めた。全国組織のレベルでは、砂川基地反対闘争や安保改定阻止の運動など、政治的・社会的問題を、学生セツルメントの取り組むべき課題として取り上げる方向があった。ここには、地域実践だけで社会を変革できるのか、という当時の社会情勢や運動の高まりが背景にある。一方で、1960 年以降は、高度経済成長に伴い、社会福祉の法整備が進み地域福祉への注目が高まる中で、運動性を強調する方針から学生の人間形成の場としての方針が強調されるようになる。また、本期における方針転換のプロセスは、地域実践とのかかわりや社会運動・社会福祉運動とも大きく関連する。

（2）地域での実践と住民自治との関係

1950 年代後半にみられた労働者の生産点において実践を行うという生産点論に則って活動を行ってきたセツルは行き詰まり地域活動を着実に行ってきたセツルが発展していることが明らかになる中で、1960 年の 60 テーゼにより地域実践が改めて見直される。本期の生産点論をめぐる議論は、労働運動や平和運動ではなく地域実践を土台として展開される運動にこそ学生セツルの意味があると実証されたことで、終結をみた。つまり、実際には、全セツ連の方針である生産点論にすべてのセツルメントが従ったわけではなく、地域で地道な実践を続けるセツルメントが多くあったのである。これらから、1960 年前後の動向は、理論化へ進む全セツ連の方針と地道に地域実践を続ける各セツルメントの“乖離”がみられる時期としても位置付けられる。こうした経過を経て、1960 年以降は、地域実践を通じてセツラーが学ぶ場としての位置づけが強まる。本期は、「学校に行って勉強をしたいから子供会で勉強会をしてほしい」という声を受けて子供らとともに場所を探すことによって「子供たち自身の子供会」として再開した東住吉セツルメントの実践や、伊勢湾台風を契機として取り組まれたヤジエセツルメント保育所の実践など、地域の状況に応じて新たに創り出される実践の展開や自主的な組織化がみられる。

（3）社会運動・社会福祉運動の側面

本期の前半にあたる 1950 年代後半から 1960 年にかけての学生セツルメントは、その理

論化が図られ、民主主義および平和への志向性が強く学生運動や労働運動、平和運動との親和性が高い方針が出された点に特徴がある。それは、とくに労働者が働く生産現場に入って実践を行い、労働者を組織化するという生産点論に象徴される。これは、セツルメントによる一方通行的な組織化への志向ともいえる。その背景には、「単なる慈善事業に終わらせたくない」という再興期からの思考の連続性と学生セツルメントの定義の不明確さ、社会変革と日常実践を統合する意図などがあった。セツルメントの実践は、単なる慈善事業として括れるものではなく、地域住民の生活実態や「要求」に応じて展開される運動性を含んでいたが、この点の評価が十分になされず地域実践を否定する方針へと向かったといえる。ただし、これらの方針は全セツ連によるものであり、組織として一致していたとはいえない側面もある。これらから、運動をすすめる組織としての課題が本期にはすでにあらわれていたことが指摘できる。その後、地道に地域実践を続けるセツルが発展していることを背景にして 1960 年に出された 60 テーゼでは、社会福祉運動的性質への再着目がみられた。しかし、60 テーゼ以降は、社会福祉の制度展開や学生運動の変化、セツルメントのイデオロギーに対する偏見や組織拡大の意図などを背景として、「学びの場」としての位置づけが強まり、運動性を前面には掲げないスローガンとなる。つまり、60 テーゼで改めて見直された社会福祉運動的性格は、後の方針に継承されるものにはならなかったのである。このことは、その後次第に学生セツルメントと学生ボランティアとの違いが曖昧になっていく背景の 1 つとみることもできる。その意味では 60 テーゼで見直された性格を継承しながら時代背景や実践に基づいた適切な評価・分析の上にセツルメントの性格および方針が検討される必要があったといえる。これらをふまえると、本期は、学生セツルメントにとっての大きな転換点の 1 つであると考える。

なお、本期は、方針上の混乱はみられたものの 1966 年にはセツラーが 1 万人を超えるなど、1955 年の全セツ連結成以降、全国にセツルメントが広がり、組織は拡大していく。

（4）人間形成・自己教育の側面

地域実践を通して地域や社会の現実から学ぶという「社会的実験室」（西内 1971）の側面は戦後再興期よりあったが、本期の後半にあたる 1960 年以降、全セツ連の方針では学生の学びの場としての位置づけが強くなる。それは、1966 年の 66 テーゼによる、学生の要求を出発点として生き方を追求するサークルという定義にもみられる。

一方で、専門性の異なる多様な立場・考え方のセツラーがいる中で、さまざまな葛藤があったことが垣間見られた。セツラーの中には、地域実践では社会を変えられないとして学生運動家の道に進んだ者や、セツルメントの実践では不十分であり、より地域に入り込む必要を感じて卒業後は社会教育の道に進んだ者、セツルメントと安保闘争が自身の人生にとって大きな影響をもっていると位置づける者などがいた。セツルメントは多様な学生から構成されており、その性格も地域に根付いた実践と運動性とが混在していた。また、地域や各セツルメントによってその実践や運動の内容も異なっていた。決して一枚岩とは

いえず揺れ動きのあるセツルメントの性格は、柔軟な活動を可能にした反面、セツラーによってはその不明瞭な位置づけに葛藤を抱く場合もあったと考えられる。他方で、学生運動や社会運動の高まりのなか、社会に対して大学生である自分は何をするか、という意識をもった学生が数多くセツルメントに加わった点も指摘できる。

３．学生セツルメントの組織転回期　(1967－1973 年)

第４章では、地域の連合結成の動きが活発化する背景について検討し、学生運動の動向との関連が強いことを明らかにした。また、人間形成や自己教育が方針として位置づけられる本期における実践の特徴と変化について検討し、地域住民と協働して地域の改善を図る実践や自主的組織化に携わる実践がみられること、セツラー自身が実践を通して学ぶことが強く意識されていたこと、を明らかにした。

（１）時代背景や社会の変化、社会福祉の動向との関連

本期は、高度経済成長から低成長へと至る時期であり、社会福祉の法整備が進められ、地域福祉への着目、ボランティアの広がりのほか、地域住民自身による運動がみられる時期である。社会の変化はライフスタイルの変化にもつながり、生活課題が多様化する中で、セツルの実践も多様な広がりをみせる。一方で、法律相談部や保健衛生部など、戦後に活発であった専門的な活動は、法整備や社会福祉の専門分化にしたがい、学生にとって可能なかたちでの実践に変わっていった側面がある。また、地域福祉やボランティアが広がるなかで、学生セツルメントの独自性の追求が求められる時期であったともいえる。

（２）地域での実践と住民自治との関係

生活課題が多様化し、各地で地域住民自身が担い手となる運動が高まる中で、1970 年代に入ると学生セツルメントの実践は、特徴的な変化をみせる。それは第一に、学生と地域住民との関係性の変化である。進学率が高まり大学が「大衆化」する中で、学生セツラーの抱える生活課題や地域住民の抱える課題とは共通性をもって認識されるようになる。そうした中で、北上セツルの公園使用をめぐる実践や夕陽丘セツル幼児パートの実践のように、地域住民とセツラーがともに協働して地域や生活の改善を図る実践がみられる。第二に、地域住民自身による自主的・主体的な組織化が目指されていた点が挙げられる。具体的には、川崎セツル栄養部の糖さん会にみられるような地域住民自身が組織化していく過程に携わる実践がみられた。一方で、現実から何を学ぶのか、という意識がセツラーの中でより高まっていくことにも特徴がある。そうした意識や視点はヤジエセツルメントの青年会の実践のほか、屋形町セツルや住吉セツルの子供会実践に顕著にみられる。さまざまな課題を抱えた地域での実践においては、地域の自治的な組織づくりや地域改善というよりも、地道な実践の積み重ねによる関係性の構築や地域の現実から何を学ぶかといったことに力点が置かれていた。ここには、積極的な側面のみならず、複雑な課題を抱える地域における学生としての限界の側面もあったといえる。

（3）社会運動・社会福祉運動との関係

本期は、各地で地域連合結成の動きが高まる時期である。とくに、1968 年に関西セツルメント連合が阪セツ連へ「発展的解消」をし、愛知でも同年愛セツ連がうまれるなど、学生運動の活発化との関連が示唆された。一方で、愛セツ連には全セツ連の方針との親和性の高さが見出され、阪セツ連には地域に根ざす方向性がみられるなど、地域連合間の性格にも差があることが明らかとなった。また、1960 年代後半には学生運動の動向の影響を受けた方針がみられるが、1970 年代に入ると自己教育運動として明確に位置づけられるようになる。1970 年代に入ってからは、とくに、地域は社会矛盾の縮図であるという認識が高まり、地域実践への着目が全セツ連のレベルでもみられる。これは、地域実践を通して社会の矛盾や現実を知り、そして改善していくことを意図する運動性への変化であるといえる。他方で、各地で革新自治体がうまれる本期、阪セツ連では府知事選にむけた取り組みがみられるなど、革新自治体を支持する運動もみられた。

（4）人間形成・自己教育の側面

本期において重要な事項として、1973 年の 28 基調における学生セツルメントの社会的性格が挙げられる。それは、「学生の基本的要求であり社会的責務でもある学ぶ要求と権利を基礎に、現代日本の社会諸矛盾の縮図にほかならない地域にかかわり、地域の人々の要求実現と私達セツラーの自己形成を統一的にめざす社会的実践を通じて、社会の課題にまで自らの要求と課題を高め、地域の人々の立場に立って生き方と生き方を支える力を学ぶ学生の民主的自己教育運動である」というものである。この社会的性格では、地域実践を通して地域や社会の課題を知ることによって、人間形成および「国民的運動の一翼」にもつながるという位置づけがなされている。また、1970 年代前半にみられる地域実践の重視、学生の主体形成や人間形成の強調は、本期以降にも引き継がれることになる。

学生運動の動向、大学の「大衆化」、地域福祉・在宅福祉への注目とボランティアの広がり等といった本期の社会状況の中で、学生セツルメントは、従来とは異なる独自の方針を打ち出し組織の維持・拡大を図ることが課題になっていたことがこうした方向性の背景にあることが示唆された。また、こうした方針は、学生運動とは別のかたちで社会に貢献したいと考える学生の要求にも一致するかたちで組織拡大につながった側面があることも明らかになった。

４．学生セツルメントの組織変容期　(1974－1989 年)

第 5 章では、学生セツルメントの組織変容期として 1974 年から 1989 年を取り上げ、全セツ連が解散に至る背景と経緯について検討した。その結果、社会状況の変化に応じた実践や運動の展開が困難になったこと、学生をめぐる状況の変化などを背景にあることが明らかとなった。

（1）時代背景や社会の変化、社会福祉の動向との関連

本期は、低成長期の中で臨調行革路線による民営化や社会福祉サービスにおける自己負担の引き上げが進められ、日本型福祉社会論が台頭してきた一方で、専門分化が進み、専門職の規定も整備されてくる。そうした中、学生セツルメントでは臨調行革路線を批判する情勢把握が全セツ連大会の基調などではみられるが、社会状況や社会の変化に応じた実践や運動の展開、必要に応じた実践を創りだす機能は徐々に衰退しつつあった。その背景として、運動の意義づけやセツルメント理念の曖昧さなど、それまで蓄積していた課題の顕在化のほか、大学におけるカリキュラムの厳格化、アルバイト、サークルの多様化など大学生をめぐる状況の変化、学生セツラーの多忙さ、などが挙げられる。同時に、社会福祉の法整備が進み、専門分化していく中で、実践領域が限られ、学生セツルメントが従来のような実践を展開することが困難になっていった側面も明らかとなった。

（2）地域での実践と住民自治との関係

社会福祉の専門分化が進み活動の領域が限られてくる本期にあって、1970 年代後半、障害児の親らの要求を受けて学童保育や共同作業所づくりの実践を地域の団体と協働して行う障害児者パートが新たにつくられたことは特筆すべき点だといえる。セツルに対して協力が申し込まれた背景には、実践の蓄積による地域との信頼関係があった。在宅福祉の法整備やノーマライゼーションの理念の広がりの一方で、障害児者福祉をめぐる法制度の整備は遅れており、不足している資源を地域の団体と協働して補完する役割を担っていたことが示された。障害児者パートや老人パートは 1970 年代あたりから新たにみられるパートであり、在宅福祉の広がりとともに新たな活動の形態が模索されていった側面も見出された。一方で、老人パートにおいては家庭訪問が中心とする実践が多く、それまでの地域を対象とする実践から個人を対象とする実践へと変化していることも明らかとなった。

（3）社会運動・社会福祉運動との関係

本期においては、全セツ連の基調報告などにおいても、運動に意義を見出せない、地域に行っても情勢を感じ取ることができないといったセツラーの声が掲載されており、学生セツルメントの担ってきた地域実践を通じた地域課題の発見機能や運動についてのセツラーの意義づけが変化していることが垣間見られる。この背景には、情勢把握の不十分さおよび全セツ連の方針提起と単一セツルの実践との乖離があることが示唆された。また、阪セツ連では運動に関する章が 1980 年代半ばには消失し、地域実践を重視する傾向にあった一方で、愛セツ連では地域実践を通した運動の位置づけがなされており、地域の広域連合間でも違いがあったことが見出された。そうした中でも、全セツ連加盟セツル数は 1980 年代前半まで大きな変化がみられなかったが、1980 年代後半以降、急激にセツルの数が減り、1989 年、人事が立たないという理由で全セツ連は解散を迎える。その背景には、全セツ連執行部の過大な負担があったことも示唆された。

（4）人間形成・自己教育の側面

本期は、地域実践から学べないといったセツラーの声が全セツ連の基調報告で紹介される一方で、セツラーの要求と地域の要求とが一致するかたちで新たに展開された障害児パートの実践において、セツラーが子どもたちとの関わりを通して、新たな気付きや発見をしていく姿が実践記録から見出された。また、本期においても、地域の現実から学ぶという姿勢は大切にされてきていたが、多様なセツラーが参加しているなかで、その内実には違いがあったと考えられる。

５． 1990 年－現在

第 6 章では、全セツ連解散後の各地のセツルメントの状況について検討し、全セツ連解散後も地域の連合や単一のセツルメントは継続しているところがあったこと、実践内容には変化がみられること、を明らかにした。また、現在も活動を継続するセツルメントについても検討し、さまざまな葛藤を抱きながらセツルメントとしてのあり方の模索が行われていることも明らかになった。

（1）時代背景や社会の変化、社会福祉の動向との関連

本期は、大きく 2 つに時期に分けることができると考える。それは第一に、全国のつながりのあり方が模索され、それまでとは異なるかたちで全国の交流が続けられる 1990 年から 2000 年あたりまでであり、第二に、単一のセツルメントがそれぞれ個別に展開していく 2000 年代以降である。

本期は、社会福祉の専門分化、社会や地域の変化、ボランティアの広がりと組織化、大学教育における資格重視の傾向やサークルの多様化といった大学や大学生をめぐる変化など、さまざまな要素が複合的に重なり合い、従来と同様の活動が困難になる時期だといえる。そうした中で、それまでのセツルメントにみられた地域実践を通して社会を捉えるという社会認識の視点は変化し、法制度の枠組みの中での実践に変わっていく点に本期の 1 つの特徴がある。

（2）地域での実践と住民自治との関係

1990 年代半ばになると、セツルメントの活動の場は、地域に限らず、病院や施設など、人びとの生活の場や社会状況に応じて変化している面が見出せる。ただし、この点については、人びとの生活の場の変化のみならず、学生による活動の内容や場が規定されるようになった側面も背景にある。法制度や社会的な枠組みの中での活動へのシフトという捉え方をすれば、それまでの地域における補完的役割は、専門職や NPO、市民団体など多様な担い手に広がっていったともいえる。一方で、2019 年現在においても長年同じ地域で実践を続けているセツルメントもある。例えば、弥次衛セツルメントでは、地域住民からの理解を得ながら団地の全戸訪問調査が現在でも続けられていること、また、社会福祉協議会や

民生委員などとの連携や協力といった新たな展開がうまれていることも見出された。

（３）社会運動・社会福祉運動との関係

全セツ連解散後も、全国のセツルメントの交流を目的とした集会は 2005 年まで続けられたが、交流の場としての位置づけであり運動をすすめる組織体としての全セツ連の役割は本期にはみられない。一方で、全セツ連解散後もいくつかの地域において広域連合や同地域のセツル間交流は続けられたことも明らかとなった。

現在においても活動を続けているセツルメントはあるものの、「ボランティアサークル」として位置づけているところがほとんどであり、その歴史や思想の継承が課題といえる。

（４）人間形成・自己教育の側面

本期においても、実践を通した学びの側面は指摘できるが、今日においてはほかのボランティアサークルとのちがいを見出すことは難しい部分がある。しかし、セツルメントの歴史の継承、人間形成、生活と地域の実態理解などの点で、今日においても客観的な追求がなされているセツルメントの存在も見出された。また同時に、セツルメントのあり方を主体的に模索する取り組みが行われていることも明らかになった。そして、これらの取り組みは、歴史的な意義を今日に引き継ぐ意識をもって行われている側面があることも垣間見られた。

第 3 節　結論

１．学生セツルメントの歴史的意義と役割

本研究では、学生セツルメントの戦後の展開について 4 つの視点を中心に置きながら論じてきた。それらを通して明らかになった学生セツルメントの歴史的意義と役割を整理したい。

それは、第一に、学生セツルメントの有していた運動性である。運動性については、従来、階級闘争や社会改良的視点から捉えられることが少なくなかった。そうした捉え方の背景には、戦前の大学セツルメントの影響も根強くあるといえる。しかし、キティ台風の救援活動を契機として学生が主体となってはじまった東京大学セツルメントは、ヒューマニズムの精神と学生の情熱から、戦後の混乱状況にある社会のなかで、「生活の向上のための組織」をつくるという趣旨から再建され、三大スローガンには「大衆の生活を守ろう」が掲げられるなど、社会福祉運動としての性格を強くもっていた。再建初期の学生セツルメントでは、地域の人びとの要求や目の前の社会状況に応じて医療、衛生、教育、保育など、多様な実践が展開され、法制度や資源が不足している中で、補完的役割を担った。イデオロギー的側面や学生運動の動向の影響を受けながら、その運動的性質は常に揺れ動くものであったが、地道な地域実践を通して地域や社会を変えていくという運動性が戦後における軸としてあり、現代におけるソーシャル・アクションの役割を果たしていたと考える。ただし、こうした運動性が 1970 年代以降次第に薄れていった点は、すでに指摘したと

おりである。しかしそれは、さまざまな法制度の整備がなされる中で、一定の役割を終えたという見方もできるのではないだろうか。何より、学生セツルメントの運動性に関して重要なことは、地域実践を通じた運動という点である。「地域は社会の縮図」であり、地域に行くことによって社会の現実を知る、という地域から社会認識を深めようとする視点が学生セツルメントにはあった。これは、言い換えれば、個別実践を通して社会矛盾に気付くともいえるかもしれない。さまざまな社会の困難があらわれてくる現実として地域を捉える視点にこそ、学生セツルメントの運動性の特徴があったといえる。

第二に、地域実践の果した役割である。上記にも関連するが、学生セツルメントにおいては、「要求」の視点が常に重視されてきた。それは、地域や地域住民の要求とともに学生自身の要求である。その要求に基づく実践によって、地域において人びとが主体者としてエンパワメントされ自主的な組織化につながっていった側面もある。また、時には声にならない声に耳を澄ませ、表出されない要求を把握しようと議論を重ねた記録が残されている。そうした要求を把握しようとする姿勢と態度が、地域や社会の状況に応じた実践を可能とし、また必要に応じて新たに創りだす役割も果たしていた。他方で、とくに 1970 年代あたりからは、地域住民との協働による実践や運動の展開や、自主的な住民の組織化が行われた例がみられた。なお、地域実践に関して、1950 年代後半あたりまでは労働運動に近い方針や議論、展開がみられたが、これには戦前との連続性が垣間見られる。そうした意味で、1960 年以降の学生セツルメントの実践は、戦後初期の医療や法律相談、保健衛生などにみられるような専門的な展開が難しくなった反面、さまざまな地域や生活の課題、要求に応じて、多様な実践が展開された側面がある。これについては、細民教化についても同様である。戦前には大学セツルメントの取り組む課題とされていたが、戦後においては専門職の規定がなされる中で、学生にとってより身近な課題に地域住民とともに取り組んでいったといえる。また、学生セツルメントの実践記録には、毎回の実践において、願いや要求、実践の内容、その後の反省が詳細に記録されており、学部や専門性の異なるセツラーが参加している中で、ソーシャルワークに重なる方法が取られていた点も注目すべき点と考える。

第三には、学生セツルメントの思想や精神が挙げられる。それは、イギリスで発祥したセツルメントを引き継ぐ大学拡張運動の影響と人格的接触の精神である。これは、戦前の大学セツルメントにもみられたが、戦後においても影響を与えていた。戦後再興期から組織構築期にかけては、大学進学率の低さもあって大学生の社会的使命感として社会に対して何かできることをしたい、という考えが強くみられた。同時に、同じ人間として、友人として関わるという精神は、地域実践の展開のなかで、エンパワメントやアドボカシーにも通じる役割を果たしていたといえる。これらは、現代の社会福祉において特別なことではないが、戦前からの伝統を引き継いで長年続けてきたという点で、重要な意味がある。

第四に、長年継続することができた背景には、組織構造の点が大きい。全国、地域の広域連合、単一のセツルメントという構造と役割が明確にあったからこそ、方針をもち、組織として運動を進めていくことが可能になった側面がある。一方で、全セツ連から地域の

現実や実態に合わない方針が出されるなど、必ずしも一致していたとは言えない側面がある。それは、地域の広域連合と全セツ連の関係についても同様であり、例えば関東セツルメント連合は全セツ連とほぼ重なり合う組織であり、愛セツ連もまた全セツ連の方針と親和性をもっていた。対して、阪セツ連は、組織変容期にあたる 1970 年代あたりには各セツルメントの実情や地域に合わせた議論がなされていた側面があり、それぞれの連合においても性格が異なっていたことが明らかとなった。同時に、単一のセツルメントにおいても一致した方向性であったとはいえず、学生運動との関係の中で分裂する動きなどもみられた。ここには、イデオロギー的な側面も背景にあるといえる。ただし、こうした課題を含みつつも、組織体系が整っていた点に学生セツルメントが長年にわたって全国的な規模で活動を展開することができた要因の 1 つが見出せる。

第五に、人間形成や自己教育の側面である。さまざまな地域で実践を行うセツルメントにとって、地域や社会の現実を知り、そこから学ぶ点は大きかった。実践場所や内容、意識の差こそあれセツルメントで実践を行うことを通してセツラーは、それまで知らない世界を知り、何ができるのか、何が必要かを真剣に考え、学び、成長する機会になっていたといえる。また、これらには、セツルメント創成期の大学拡張運動の精神の継承も見出せる。

２．学生セツルメントの課題

学生セツルメントの歴史的意義を上述したが、学生セツルメントは、同時にさまざまな課題を持っていた。主な点として、3 点挙げたい。

第一には、その定義や理念についてである。定義や理念をめぐっては、戦後の再興期から議論があった。これは、直前の戦争の影響を受けて民主主義や平和が大きな課題として取り上げられていたことが関係している。また、イギリスにおけるセツルメントや戦前の大学セツルメントにおける考え方をそのまま取り入れたために、齟齬が生じた側面がある。

第二に、組織構造がもつ課題である。先にも指摘したとおり、全セツ連の方針は必ずしも地域や個別のセツルメントの状況に即したものではなかった側面がある。そうしたことが全セツ連と単一セツルメントの間の“乖離”をうみ、のちの展開のなかで組織維持が困難になった要因を含んでいるといえる。また、組織構造における執行部や全セツ連役員の過大な負担の問題もある。大学をめぐる状況が変わり、カリキュラムの厳格化やアルバイトなど、時間的制約が生じるなかで、セツルメントに使える時間は限られてくる状況にあった。にもかかわらず、会議や大会など、役員は非常に多忙なスケジュールに追われる生活をせざるを得なかった。これらから、地域や個別のセツルメントの状況に対応した方針や組織体制のあり方が検討されていたならば、展開はまた違っていたのかもしれない。

第三に、第二に関連して、社会や地域の状況に応じた実践の側面である。これは、前項でも指摘したとおり、ある時期まで果たすことができていた役割だといえる。しかし、専門職が規定され社会福祉に関する法整備がすすみ、活動領域が限られてくる中で、時代や社会の変化に応じた実践が展開できなかった側面も有している。このことが、のちの全セ

ツ連の解散につながった点も指摘できる。

なお、学生としての未熟さや技術不足といった点も課題に挙げることができるだろうが、三好(1930:20)が戦前の大学セツルメントについて指摘した点、すなわち「大学セツルメントを批評する人々はその態度と精神とを主として見るべきであり、その技術と内容とに対しては寛容であらねばならぬと思われる」という点に筆者も同意する。学生セツルメントにおいては、技術的な面よりも、その展開の中でどのような過程や思索があったか、に注目すべきではないだろうか。その意味では、毎回の実践の記録を残し評価や反省を行い、次の実践に活かされていたプロセスは重要な点であるだろう。

３．未来への展望

本章でも述べたとおり、学生セツルメントは現在においては全盛期に比べその数は減り、位置づけとしても内容としてもボランティアサークルとのちがいが不明瞭になっている。その一方で、学生セツルメントが担ってきた役割や意義を継承しているといえる学生団体の運動や活動、NPO 法人や民間団体の活動等が昨今活発化している。そうした中で、学生セツルメントの歴史や意義が改めて問われているといえるのではないだろうか。

関連して、宍戸(2010:63)も同様の問題意識のもと、「果たして伝統的セツルメントは今日に継承されていないのだろうか。もし受け継がれる可能性があるならどのような形態であればその活動をセツルメントという名称で呼べるのだろうか」と問いかけ、論じている[11)]。

この点について、少しだけ筆者の考えを述べたい。たしかに、現在の学生セツルメントについては、学生セツルメントと言い得るのか、という疑問が生じる。実際、現代においてボランティアと学生セツルメントのちがいをどこに求めるか、となると、難しい問題であり、それは歴史と思想や精神ということになるだろう。先駆的意味、源流としての意義はあったとしても、現代において学生セツルメントの独自性を直接的にいうことは難しい。

しかし他方で、第 6 章で述べたとおり、現在においても地道な実践とアイデンティティの模索を続けるセツルメントがあることもまた事実である。そして、この、現在においても存在しているということにこそ、一つの価値があるのではないだろうか。半世紀以上にわたって実践が続けられているセツルや、その足跡である膨大な資料が保管されているセツルがあること、今も迷いながら各地のセツラーが実践を続けていること、そのことに大きな意味があると考える。なぜならば、今存在するということは、未来がありえるということだからである。

大きくいえば、その未来の方向性には、3 点が考えられる。

第一に、名称が残っているところについては現在のあり方のまま、ゆるやかに存続していくという方向性である。第二に、名称を残し、セツルメントの思想や精神を継承していくとともに現代の社会や地域のあり方に合わせた実践を模索していくという方向性である。こうした思想や精神の継承には、OS の協力や支援を得ながら、ともに新たな展開を考えて

いくという方法もありえるだろう。第三に、他団体との結合や連携の方向性であり、名称はなくなったとしても、学生セツルメントの理念や精神を引き継ぎながら活動を展開していくというあり方である。

現在考えられる方向性として大きく 3 点を挙げたが、未来への展望を具体的に示すには、現代において当時の学生セツルメントと同様の活動をしている団体との比較検討や各地のセツルメントの現状分析、施設型セツルメントの比較検討などが必要であり、これらは今後の課題としたい。

なお、現状考えうる 3 つの方向性について、筆者は、2 点目を選びたいと考える。先にも述べたとおり、存在しているということは未来があるということである。ただし、現状のままのセツルメントのあり方は、継続性という点で疑問が残る。また、学生セツルメントの歴史が近年の研究において見直されていることもふまえれば、セツルメントとしてのアイデンティティを改めて問い直し、歴史や思想を継承していくことが重要なのではないだろうか。

４．本研究の意義と課題

本研究の意義は、大きくは次の 3 点であると考える。第一に、これまで全セツ連や特定の側面からの検討に留まっていた学生セツルメントについて、通史として実証的に戦後の展開を明らかにしたことである。第二に、研究枠組みとして、これまで十分に論じられてこなかった全セツ連、地域の広域連合、単一セツルメントの各関係性について 4 つの視点から体系的に分析した点である。第三に、個別のセツルメントの実践内容についても具体的な事例から検討し、多様な展開と果たした役割を明らかにした点が挙げられる。

一方で、本研究の課題としては次のことが挙げられる。

まず、研究方法に関してである。本研究では、4 つの視点から分析を行ったが、それらの視点だけでは論じきれない学生セツルメントの実践や運動についても検討する必要がある。それは例えば、学生の社会運動史としての側面、学生セツラーの思想や人生史の側面、施設型セツルメントとの比較検討、などが挙げられるだろう。また、地域の広域連合についても、本研究では特徴的と考えられる 3 つの連合を中心に論じたが、ほかの連合についても検討を深めることが課題といえる。さらに、本研究では、戦前の大学セツルメントについては先行研究の概観に留めており、比較検討は十分とは言い難い。戦前の大学セツルメントとの比較検討は、戦後に継承されている連続性とともに戦後の固有性を明らかにすることにもつながり、学生セツルメントとは何か、という問いを別の視点から深めることができると考える。分析手法に関しても、学生セツルメントがもつ多様性を考えたとき、社会教育、教育福祉、社会学、社会運動論など、近接領域の知見も用いた幅広い分析が求められる。同様に、資料についても今後も収集・保管をすすめ、幅広い資料から検討を続ける必要がある。

次に、実践内容に関する課題である。本研究では、研究の視点や研究課題に沿って特徴的と考えられる実践を時期ごとに取り上げた。実践の分野についても、特定の分野にこだ

わらず、多様に展開された実践とその内容について論じた。そのため、各分野において果たした役割については十分論じられていない側面がある。このことから、分野ごとの展開にはどのような特徴がみられるのか、についても今後検討を深める必要がある。また、各セツルメントの実践の変化や展開についても、特定のセツルメントを対象として通史的に捉えることで地域や社会状況といった外的要因による変化と学生セツルメントの方針などによる内的要因による変化をより明確に捉えることができると考える。

さらに、重要な課題としては、今日的課題や社会福祉における位置づけの問題が挙げられる。学生セツルメントが社会福祉の一部分において一定の役割を果たしたことは本研究から示されたと考えるが、学生セツルメントの歴史から今日の社会福祉においていえることはなにか、という点については今後の課題としたい。この点については、先にも述べたとおり、現代において学生セツルメントと同様の活動を行っている団体や NPO、多様なボランティア活動などとの比較検討が求められる。

５．おわりに―学生セツルメントの歴史と未来―

本研究では、戦後の学生セツルメントの歴史を三位相から検討し、その意義と役割について論じてきた。しかしながら、これまで述べてきたとおり、学生セツルメントは歴史的遺産ではなく、現在でも継続しており、今も各地で学生セツラーが日々の実践に向き合っている。そのことに想いを馳せたとき、現在の実践やこれから先あゆんでいく道のりが歴史を創っていくのだといえるだろう。

学生セツルメントがその歴史において、さまざまな困難や壁にぶつかりながらも、その時代や社会、地域に合わせた活動のあり方を模索し続けたように、現代に応じたあり方の模索と展開に期待したい。

注

1）今浦問題対策委員会・セツル法学共同編集(1957:28)「鳥羽学校問題報告」(「セツルメント法学別冊」).本資料については、その所蔵先が判明せず、高島(1958)より引用・記載した。

2）岡本(2019)の一部を加筆・修正したもの。

3）2018 年 8 月 11 日に実施した 1974 年入学の住吉セツルメント OS への聞き取りより

4）前出、2015 年 4 月 19 日の聞き取りより

5）前出、2015 年 8 月 15 日の聞き取りより

6）筆者がこれまでインタビューしてきた限りであり、この点についてはより詳細な検討が必要である。

7）引用部分の後に 1977 年 3 月の 32 回大会前であることが記述されているため、1976 年～1977 年発行と推察。なお、Sr のいちごによる文章である。

8）1968 年の大学祭に関する資料を綴じたファイル内に保管されていたため、1968 年発行と推察。

9）経験セツラーの略語。2 年目以降のセツラーを意味する。

10）例えば、日経 DUAL(2016)にはセツルメントの経験をふまえた彼のインタビューが掲載されている。

11）なお、宍戸の論はセツルメントの理念を継承する地域福祉施設についてであるが、問題意識は共通している。

謝辞

2010 年 7 月、当時大学 4 回生であった筆者は、大阪教育大学の山田正行教授(当時)との出会いをきっかけに、大阪府立大学に残されていた膨大な学生セツルメント関係資料の保管・整理に携わることになった。薄暗い倉庫で資料に初めて触れたとき、学生セツラーの当時の熱気が伝わってくるような気持ちがして、鳥肌が立ったことを今でも鮮明に覚えている。働きながら資料整理を続け、大学院に進学し、気付けば 10 年が経とうとしている。この間、学生セツルメントとは何か、という問いに向き合ってきたが、まだまだ追及すべき課題が多いと痛感している。しかし、こうして一つの区切りを迎えることができたことに、まずは感謝したい。

日本福祉大学大学院 福祉社会開発研究科 永岡正己名誉教授には、修士課程のころから、常にあたたかく見守っていただき、粘り強く、丁寧なご指導・ご助言をいただいた。論文内容のみならず、研究者としての態度や姿勢など、数多くのことを学ばせて頂いた。永岡先生のもとで学ぶことができたことは、私の人生にとっても本当に幸せなことであった。日本福祉大学を退職される年に博士論文を提出することができることは望外の喜びである。

また、さまざまな視点から的確なご指導・ご助言をいただいた日本福祉大学大学院 福祉社会開発研究科 木全和巳教授、湯原悦子教授、桜花学園大学の柏倉秀克教授にもこの場を借りてお礼申し上げたい。

本稿は、数えきれないほど多くの出会いの中で紡がれてきたものであり、一人では到底たどりつくことができなかった。

筆者に研究のきっかけをくださった大阪教育大学の山田正行特任教授には、いつも背中を押していただいている。大阪府立大学の山東功教授には、資料の保管場所および目録集刊行など、さまざまな面で支えていただいている。また、日本福祉大学の先生方、社会事業史学会の先生方など、多くの先生方から頂いたご助言や励ましも大きな力となった。

そして、本研究にあたっては、オールドセツラー、現役セツラーの協力が非常に大きい。ここに一人一人の名前を挙げることができないのは残念だが、未熟で無知な筆者に対して、長時間におよぶ聞き取りや資料の提供など、本当に多くの、そしてあたたかなご協力を頂いた。自身が生まれる前も含む本研究にあたっては、とくにオールドセツラーの皆様からの聞き取りによって追体験させていただいた部分が大きいと感じている。同時に、精神的にも非常に多くの励ましをいただいた。この場を借りて、心より御礼申し上げたい。

筆者の力量不足から、さまざまな方のご協力に十分に応えることができず、申し訳なく感じている。しかしながら、これからも研究を続け、学生セツルメントの歴史と意義を後世につないでいくことで少しずつ恩返しができればと考えている。

最後になったが、博士論文執筆という一つの節目を迎えることができたのは、ほかならぬ家族の支えがあったからこそである。いつも筆者の体を気遣いつつ進む道を応援してくれる両親ときょうだいへ、この場を借りて改めて感謝の意を表したい。

2020 年 1 月

岡本　周佳

【文献】

A

・愛知県学生セツルメント連合書記局(1971)「愛セツ連のあゆみ」

・愛知県学生セツルメント連合書記局(1978)「季刊せつるめんと　第 3 号=復刊号=」

・愛知県学生セツルメント連合(1975)「 第 16 回定期連合委員会第 14 回愛セツ連大会基調報告（案)」

・愛知県学生セツルメント連合書記局(1983) 「第 28 回愛知県学生セツルメント連合大会 第 31 回愛知県学生セツルメント連合委員会＜基調報告＞」

・愛知県学生セツルメント連合(1983)「第 29 回愛知県学生セツルメント連合大会　第 32 回愛知県学生セツルメント連合委員会＜基調報告＞」

・愛セツ連大会実行委員会(1978)「第 22 回 愛知セツルメント連合大会＝今こそ見つめよう 80 年代の夜明けを＝」

・朝日新聞社(1957)「苦難超えて信頼うる―岩手大・盛岡短大・岩手医大―“白い目”に耐えた一年間」朝日新聞東京版・夕刊,1957,7,22.

・浅井春夫(2017)『子どもの貧困 解決への道 実践と政策からのアプローチ』自治体研究社.

・浅井純二(2013)「名古屋セツルメント活動についての史的考察 ： 星崎診療所の活動を中心に」『社会事業史研究 』44,127-143.

・浅井純二(2015) 「伊勢湾台風における保育の救援活動に関する考察 ： ヤジエセツルメント保育所を中心に」『社会福祉学』56(2),13-25.

・阿部志郎(1955)「セツルメント運動の社会思想史的考察-1-」明治学院論叢 36(1) ,31-49.

・阿部志郎(1957)「アーノルド・トインビーの生涯と思想」『明治学院論叢』44(1),27-50.

・阿部由明・小木和孝 (1956)「思想史としての亀有セツルメント保健部五年史」『Pons No.16』,11-78.

・愛染園学生セツルメント (1952)「昭和３１年度日東地区に於ける諸活動 (第四報)」

・天達忠雄 (1959)「ソーシァル・アクション」日本社会事業研究会編『社会事業要論』ミネルヴァ書房,164-173.

B

・Briggs, Asa and Macartney, Anne (1984) *Toynbee Hall: the First Hundred Years*, Routledge & Kegan Paul.(＝1987,阿部志郎監訳・岸川洋治・ほか訳『トインビー・ホールの 100 年』全国社会福祉協議会)

C

・中京大学学生会執行委員会(1971) 「すべての中京大学友に向けて/ 緊急アピール！/ 暴力集団「全共斗」一派の○○(※判読不明)テロ・リンチを許すな！執行委員(一名)監禁

される！」
・中央実行委員会(1995)「～第6回 全国学生セツルメントの会～“3月集会”」

D
・どんぐり会(1974)「どんぐり会C班自主レポート」

F
・府大セツラー会（不明)「セツラー会のあり方について」
・福島正夫・石田哲一・清水誠(1984)『回想の東京帝大セツルメント』日本評論社.

G
・郷右近歩(1999)「『セツルメント』概念の推移―発祥からの変遷・活動形態の分化・捉え方の諸相より―」(一九九九年度宮城教育大学卒業論文）.

H
・浜野一郎(1966)「セツルメントに於ける実践と理論」明治学院論叢 112,69-84.
・濱野一郎(2006)「セツルメントと現代―伝統と適応―」聖学院大学総合研究所紀要 37,143-172.
・阪セツ連常任委員会(1978)「仲間のうた 学習討論資料NO１―大阪府知事選と私たち―」
・東住吉セツルメント(1963a)「道標 第5号」
・東住吉セツルメント(1963b)「花には太陽を 子供には平和を」
・東住吉セツルメント(1963c)「東住吉中学の生徒の不良化問題について」
・氷川下セツルメント史編纂委員会編(2007)『氷川下セツルメント:「太陽のない街」の青春群像』エイデル研究所.
・氷川下セツルメント史編纂委員会編(2014)『氷川下セツルメント史：半世紀にわたる活動の記録』エイデル研究所.
・星野潔(2004)「現代の社会運動の組織形態」帯刀治・北川隆吉編『社会運動研究入門』文化書房博文社,160-197.
・北海道大学どんぐり会(1968)「基調報告」

I
・一番ケ瀬康子(1963)「日本セツルメント史素描」『日本女子大学文学部紀要. 文学部』(13),23-51.
・池田浩士 (2019)『ボランティアとファシズム　自発性と社会貢献の近現代史』人文書院.
・池田敬正(1994)『日本における社会福祉のあゆみ』法律文化社.
・井岡勉(2002)「在宅福祉サービスの政策的展開」三浦文夫・高橋紘士・田端光美・ほか

編『戦後社会福祉の総括と二十一世紀への展望　Ⅲ政策と制度』ドメス出版,210-231.
・井岡勉(2006)「セツルメント運動の形成と展開」『新版　地域福祉事典』中央法規出版,376-377.
・石井記念愛染園(2010)『石井十次の残したもの ： 愛染園セツルメントの 100 年』石井記念愛染園隣保館.
・磯村英一(1989)「人権基本の社会福祉体制への展望」『社会福祉学』30(1),106-128.
・岩田正美(2016)『社会福祉のトポス』有斐閣.
・岩田正美 (2017)『貧困の戦後史』筑摩書房.

J
・児童問題研究会(1933)『児童問題研究 1』
・児童問題研究会 (1934)『児童問題研究 2』
・児童問題研究会(1935)『児童問題研究 3』

K
・加賀乙彦(2002)『雲の都　第一部　広場』新潮社.
・亀有セツルメント(1957)「みどり保育園経過報告書」
・亀有セツルメント書記局(1959)「34 年後期書記局総括」
・鹿野政直(1995)「1970－90 年代の日本―経済大国」朝尾直弘・網野善彦・石井進・ほか編『岩波講座 日本通史 第 21 巻 現代 2』岩波書店,3-74.
・鹿野セツルメント (1954)「たいわ　鹿野セツルメント 10 年史」
・河合克義(1977)「Edward Denison(1840～70)の救貧思想について」『明治学院論叢』(明治学院大学)260,1-30.
・関短 Sr 会(不明)「関短 Sr 会合宿総括集」
・関東セツルメント連合 (1954)「関セツ連ニュース NO.1」
・関東学生セツルメント連絡会議(1973)「関東学生セツルメント連合結成連合委員会招請状」
・関西セツルメント連合(不明)「関セツ連ニュース　かがり火第 4 号」
・関セツ連(1973)「今、関セツ連で・・・＜オリテー資料＞」
・かろちん(1990)「全国学生セツルメント祭典　パネルディスカッション参考資料　1989 年度のあゆみ」
・川崎セツルメント文化部 (1952)「合宿報告」
・川崎セツルメント(1967)「第 15 回全セツ連大会若者会活動報告」
・木下順(2009)「マンパワー政策と非教育」元木健・田中萬年編著『非「教育」の論理 「働くための学習」の課題』明石ライブラリー,85-120.
・菊池正治・清水教恵・田中和男・ほか編(2014)『日本社会福祉の歴史　付・資料―制度・実践・思想―　改訂版』ミネルヴァ書房.

・岸川洋治(1974)「地域福祉活動における施設と住民の役割―隣保事業施設と住民の活動」月刊福祉 57(7),26-31.
・北川隆吉(1958)「学生セッツルメント運動の理解と課題について」『社会事業』39(12),10-16.
・衣摺セツルメント(1982)「熱中時代　ナンバー2　交流会正式レポート」
・小島幸治 (1928)「青年運動とセツルメント」『社会事業研究』16(5)(復刻版第 1 刷,1976 年,文京出版).
・河野正輝(2002)「戦後社会福祉法制の展開」三浦文夫・高橋紘士・田端光美・ほか編『戦後社会福祉の総括と二十一世紀への展望　Ⅲ政策と制度』ドメス出版,64－92.
・厚生労働省(2016)「ニッポン一億総活躍プラン」
(https://www.kantei.go.jp/jp/singi/ichiokusoukatsuyaku/pdf/plan1.pdf#search=%27%E3%83%8B%E3%83%83%E3%83%9D%E3%83%B3%E4%B8%80%E5%84%84%E7%B7%8F%E6%B4%BB%E8%BA%8D%E3%83%97%E3%83%A9%E3%83%B3+%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E5%85%B1%E7%94%9F%E7%A4%BE%E4%BC%9A%27,2019.7.16).
・厚生労働省「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部(2017)「『地域共生社会』の実現に向けて(当面の改革工程)」
(https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000150632.pdf#search=%27%E3%80%8C%E3%80%8E%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E5%85%B1%E7%94%9F%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E3%80%8F%E3%81%AE%E5%AE%9F%E7%8F%BE%E3%81%AB%E5%90%91%E3%81%91%E3%81%A6%28%E5%BD%93%E9%9D%A2%E3%81%AE%E6%94%B9%E9%9D%A9%E5%B7%A5%E7%A8%8B%29+%E3%80%8D%27,2019.7.15).
・小山和作(2015)「農村医学は世直し運動！～私の歩んできた道　⑦セツルメントから農村医学研究会へ」『文化連情報』451,44-47.
・久保紘章・副田あけみ編著(2005)『ソーシャルワークの実践モデル 心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店.
・久保美紀(2007)「5 ソーシャルアクション」仲村優一・一番ケ瀬康子・右田紀久恵監修『エンサイクロペディア社会福祉学』,641.
・黒岩亮子(2015)「大学セツルメント活動が地域に果たした役割：日本女子大学 0 町セツルメントの事例から」『東京福祉史研究』9,49-71.
・兄弟会(1964)「関セツ連大会のためのレポート」
・京セツ連屋形町民主小 P(1975)「あ　生きってる！」
・九州帝国大学セツルメント創立委員会 (1927)「九州帝国大学セツルメント創立趣意書」『九州大学新聞』昭和二年十月十日発行第二号、四面.

M
・前田一男 (2010)「お祝いの言葉～子供会 50 年の歴史を貫くもの～」立教大学子供会『堀

の内セツルメント創部 50 周年記念誌』
・みどり保育園（1952）「保育園更正申請願」
・宮田親平(1995)『だれが風を見たでしょう　ボランティアの原点・東大セツルメント物語』文藝春秋.
・三好豊太郎(1930)「大學セツツルメントの社會的意義」『社会福利』14(8),17-26.
・森田尚人(2006)「島田修一先生を送る」中央大学教育学研究室編『多摩の緑 ひと 育みて』
・元根朋美(2011)「大学開放の起源：イギリスのセツルメントを中心として」『奈良女子大学人間文化研究科年報』26,185-193.

N
・永岡正己・井上和子(1983)「北市民館の歴史とその意義―閉館によせて」『地域福祉研究』(日本生命済生会)11,47-57.
・永岡正己(1986)「社会福祉の戦後四〇年を考える―戦争責任・戦後責任の問題を中心に―」『社会福祉学』28(1),87-105.
・永岡正己(1987)「地域福祉の系譜と思想－戦前の歩みを中心として―」『地域福祉研究』(日本生命済生会)15,1－10.
・永岡正己(1996)「大林宗嗣と『セッツルメントの研究』」『戦前機社会事業基本文献集第30巻　大林宗嗣「セッツルメントの研究」』解説」日本図書センター.
・永岡正己(2006)「日本の地域福祉の源流③日本のセツルメント運動・隣保事業」『新版　地域福祉事典』中央法規出版,376-377.
・永岡正己(2007)「日本セツルメント運動史再考」日本社会福祉学会第55回大会報告・配布資料.
・永岡正己(2018)「日本における社会福祉運動の発達とその特徴」『韓国・中国・日本における社会福祉運動の発達とその特徴』一般財団法人日本社会福祉学会第66回秋季大会国際学術シンポジウム（金城学院大学),1-11.
・名古屋保育問題研究所編(1963)『レンガの子ども―ヤジエ・セツルメント保育所の実践と理論』名古屋保育問題研究会.
・中村拡三(1978)『子ども会の歴史と現状』明治図書.
・中村政則(1995)「一九五〇－六〇年代の日本―高度経済成長―」朝尾直弘・網野善彦・石井進・ほか編『岩波講座 日本通史 第20巻 現代１』岩波書店,1-68.
・中村みどり(2014)「大学における社会貢献活動支援の意義について：大学セツルメントの歴史から見出すもの」上智大学教育学論集48,43-56.
・根津敦(2014)「ソーシャルアクション」日本社会福祉学会辞典編集委員会編『社会福祉学事典』丸善出版.
・日本医療福祉生活協同組合連合会(2012)「医療生協の生い立ち」

・日本子どもを守る会編(1964)「あらしの中の中学生」『子ども白書 1964 年度版』,49-50.
・日経 DUAL(2016)「かこさとし　思い通りにならないから子どもは面白い」(http://dual.nikkei.co.jp).
・西尾歩莉(2018a)「(2)「セツルメント」と名乗る意義と現在の活動の目的」岡本周佳・山田正行編『学生セツルメントと大阪府立大学【大阪府立大学史資料叢書Ⅰ】』大阪府立大学　研究推進機構　大学史編纂研究所,22-24.
・西尾歩莉(2018b)「A.交流会を開いたきっかけ」岡本周佳・山田正行編『学生セツルメントと大阪府立大学【大阪府立大学史資料叢書Ⅰ】』大阪府立大学　研究推進機構　大学史編纂研究所,27-28.
・西尾歩莉・楊睿昕(2018)「(4)阪大フロンティアとセツルメントの交流会」岡本周佳・山田正行編『学生セツルメントと大阪府立大学【大阪府立大学史資料叢書Ⅰ】』大阪府立大学　研究推進機構　大学史編纂研究所,27-34.
・西内潔(1971)『日本セッツルメント研究序説』宗高書房,増補・第 3 版.

0

・小笠原慶彰(2013)「大阪暁明館と関西学院学生奉仕団―カール・秋谷一郎の役割を中心として―」『人間福祉学研究』関西学院大学,6(1),69-98.
・小笠原裕次(2002)「社会福祉施設体系の整備・再編と施設サービス」三浦文夫・高橋紘士・田端光美・ほか編『戦後社会福祉の総括と二十一世紀への展望　Ⅲ政策と制度』ドメス出版,181-209.
・小川利夫(1985)『教育福祉の基本問題 』勁草書房.
・岡本周佳(2011)「３．学生セツルメントについて改めて考える～住吉セツルメントの資料から見えてきたもの～」『社会教育学研究』大阪教育大学・社会教育学研究室,21,104-111.
・岡本周佳(2014)「学生セツルメントについての考察―おおさか社会福祉史研究会での発表をもとに―」『社会教育学研究』(大阪教育大学社会教育学研究室)30, 28-37.
・岡本周佳(2016)「戦後学生セツルメント運動の展開と歴史的意義」日本福祉大学社会福祉学研究科社会福祉学専攻 2016 年度修士論文.
・岡本周佳(2018a)「1950 年代後半から 1960 年代半ばにおける学生セツルメントの展開―社会福祉運動の視点から―」『社会事業史研究』社会事業史学会,54,97-112.
・岡本周佳(2018b)「大阪府立大学セツルメントのあゆみ」岡本周佳・山田正行編『学生セツルメントと大阪府立大学【大阪府立大学史資料叢書Ⅰ】』大阪府立大学　研究推進機構　大学史編纂研究所,5-10.
・岡本周佳(2018c)「大阪府立大学セツルメントの現在―実践事例を通して―」岡本周佳・山田正行編『学生セツルメントと大阪府立大学【大阪府立大学史資料叢書Ⅰ】』大阪府立大学　研究推進機構　大学史編纂研究所,10-14.

・岡本周佳(2019)「1960 年代後半から 1980 年代における学生セツルメント運動の展開―人間形成・自己教育の視点から―」『社会事業史研究』56,75-90.
・岡本周佳・山田正行編(2018)『学生セツルメントと大阪府立大学 【大阪府立大学史資料叢書Ⅰ】』大阪府立大学研究推進機構大学史編纂研究所.
・岡村重夫(1968)「セッツルメント活動と地域組織化」『月刊福祉』51(10),10-16.
・音田正巳(1958)「わが国セツルメント事業の回顧と展望」『社会問題研究』8(2),1-14.
・大林宗嗣(1926)『セッツルメントの研究』同人社書店.
・大橋謙策「戦後社会福祉におけるマンパワー対策と社会福祉教育の課題」三浦文夫・高橋紘士・田端光美・ほか編『戦後社会福祉の総括と二十一世紀への展望 Ⅲ政策と制度』ドメス出版,232-274.
・大門正克(2012)「6 「生活」「いのち」「生存」をめぐる運動」安田常雄編『社会を問う人びと』,岩波書店,168-196.
・おおねセツルメント(1973)「第 26 回大会 全セツ連加盟レポート」
・大西良(2018)編著『貧困のなかにいる子どものソーシャルワーク』中央法規.
・久保鉱章・副田あけみ編著(2005)『ソーシャルワークの実践モデル 心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店.
・大森俊雄編(1937)『東京帝国大学セツルメント十二年史』東京帝国大学セツルメント.
・大阪府学生セツルメント連合(1968)「大阪府学生セツルメント連合大会 第 1 回」
・大阪府学生セツルメント連合書記局(1969)「第 2 回大阪府学生セツルメント連合大会 基調報告」
・大阪府学生セツルメント連合書記局(1977)「第 10 回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料」
・大阪府学生セツルメント連合書記局(1979)「第 12 回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料」
・大阪府学生セツルメント連合書記局(1981)「第 14 回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料」
・大阪府学生セツルメント連合書記局(1983)「朝の詩 No.102 ・府知事選について ・39 大会開催問題」
・大阪府学生セツルメント連合書記局(1984)「第 17 回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料」
・大阪府学生セツルメント連合書記局(1985)「第 18 回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料」
・大阪府学生セツルメント連合(1987)「新入生歓迎ハイク」
・大阪府学生セツルメント連合書記局(1983)「朝の詩 No.102 ・府知事選について ・39 大会開催問題」
・大阪府立大学 21 世紀科学研究機構大学史編纂研究所編 代表執筆者:岡本周佳・山田正行

(2015)『学生セツルメント関係資料解説目録』
・岡本周佳・山田正行編(2018)『学生セツルメントと大阪府立大学【大阪府立大学史資料叢書Ⅰ】』大阪府立大学研究推進機構　大学史編纂研究所.
・大阪府立大学・大阪女子大学セツルメント(1993)「総括　大阪府立大学・大阪女子大学セツルメント」
・大阪府立大学セツラー会(1975)「'75　全セツ連３０大会大学分科会レポート　みんしゅてき大学づくりめざして」
・大阪府立大学創基 130 年事業企画委員会編(2015)『大阪府立大学 130 年の歩み』大阪府立大学.
・大阪女子大学セツルメント (1964)「女子大セツルの歴史」
・大阪教育大学社会教育学研究室「社会教育学研究」(2012)25.
・太田政男(2008)「セツルメントから社会教育への接近―『氷川下セツルメント―「太陽のない街」の青春群像』を読んで」『月刊社会教育』52(1),88-92.
・大谷女子大学 Sr 会 (1974)「お山の大将　住吉セツルメント大谷女子大 Sr 会機関紙創刊号」

S
・佐伯祐正(1928)「セツツルメント運動と學徒への希望」『社会事業研究』16(4),42-47.(復刊第 1 刷,1976,文京出版).
・坂幸夫(2004)「日米比較にみる労働組合運動と他の社会運動」帯刀治・北川隆吉編(2004)『社会運動研究入門』文化書房博文社,144-168.
・坂元忠芳(1980)『教育実践記録論』あゆみ出版.
・寒川セツルメント史出版プロジェクト(2018)『寒川セツルメント史　千葉における戦後学生セツルメント運動』本の泉社.
・真田是(2002)「戦後社会福祉の政策展開と展望(一)－政策批判の視点から」三浦文夫・高橋紘士・田端光美・ほか編『戦後社会福祉の総括と二十一世紀への展望　Ⅲ政策と制度』ドメス出版,21-42.
・真田是(2003)「第 1 章　社会福祉運動とはなにか」「第 2 章　社会福祉運動の戦後過程」浅井春夫・小賀久・真田是編『社会福祉運動とはなにか』かもがわ出版,40-76.
・仙台学生セツルメント連合常任委員会(1981)「第 21 回　仙台学生セツルメント連合大会討論資料」
・1991 年度愛知県学生セツルメント連合書記局(1992)「第 39 回愛知県学生セツルメント連合定期連合委員会基調報告」
・柴田謙治(2007)『貧困と地域福祉活動―セツルメントと社会福祉協議会の記録―』(株)みらい.
・柴田謙治(2017)「戦前の日本におけるセツルメント・隣保事業の定義、目的と人権思想」

『金城学院大学論集(社会科学編)』14(1),24-46.
・柴田謙治(2018)「戦前の日本におけるセツルメント・隣保事業の対象と運営主体、実践方法をめぐる議論」『金城学院大学論集(社会科学編)』14(2),31-47.
・柴田善守(1971)「セッツルメント運動の現代的課題」『月刊福祉』54(7),37-40.
・滋賀秀俊編(1979)『東京帝大 柳島セツルメント医療部史 ： 医学生の戦前社会運動黎明期の記録』新日本医学出版社.
・白波瀬達也(2017)『貧困と地域 あいちん地区からみる高齢化と孤立死』中公新書.
・宍戸健夫(1955)「学生セツルメントの亀有みどり保育園」羽仁説子編著『新しい保育園の運営』博文社,309-323.
・宍戸健夫(2002)「私がこの道を選んだ理由」『橡』(セルフセンター東樹)34,6-7.
・宍戸健夫(2011)「実践記録と歴史的研究－保育実践史研究序説―」『幼児教育史研究』6,17-41.
・宍戸健夫(2016)「保育問題の歴史的研究にかかわった私の歩み」『社会事業史研究』49,89-97.
・宍戸明美 (2010)「グローバル時代の“セツルメント”再興の意義」『名古屋学院大学論集』社会科学篇, 46(3),63-83.
・Smith ,Henry D(1972)*Japan's First Student Radicals*, Harvard University Press,(＝松尾尊兊・森史子訳(1978)『新人会の研究』東京大学出版会).
・末弘厳太郎(1927)「帝大學生救護團の活動に就いて」『改造』改造社,5(19),74-81.
・末弘厳太郎(1930)「セツルメント」『岩波講座教育科學』11,1-25.
・住吉セツルメント(1970a)「第21回全セツ連大会　幼児パート　実践報告」
・住吉セツルメント (1970b)「住吉セツルメント 夏合宿各Part実践報告集 於：小豆島」
・住吉セツルメント(1973)「’73年度新歓の圧倒的成功を勝ちとり住吉に更なる前進の灯をかかげよう！No.1-No.5・－学生セツラーにとって政治とは何か？（意義と任務）―」
・住吉セツルメント(1975a) 「愛染園セツルメント時代・東住吉セツルメント時代・住吉セツルメント時代」
・住吉セツルメント (1975b)「せつるめんとの偉大なる歩み」
・住吉セツルメント(1976)「セツルメントの歴史なのだ」
・住吉セツルメント(1996)「1995年度　年間総括　’95年度の反省と’96年度に向けての目標」
・住吉セツルメント・ボブ(2004)「実践記録　ボブ」

T
・田端光美(2002)「福祉的環境づくりの政策課題と展望」三浦文夫・高橋紘士・田端光美・ほか編『戦後社会福祉の総括と二十一世紀への展望　Ⅲ政策と制度』ドメス出版,275-294.

・高木博史(2015)「今日におけるセツルメント運動と大学地域協働に関する一考察」『地域経済』34,25-31.
・高橋作太郎編集代表(2012)『リーダーズ英和辞典』研究社.
・高島進(1957)「戦前における学生セツルメントの性格について―東京帝大セツルメントを中心に―」『日本福祉大学研究紀要』1,16-29.
・高島進(1958)「戦後の学生セツルメントの『域組織化』について」全国社会福祉協議会『社会事業』42(12),26-33,16.
・高島進(1968)「学生セツルメントの動向」『月刊福祉』51(10),30-33.
・高島進(1979)「バーネットの大学セツルメント思想」『イギリス社会福祉発達史論』ミネルヴァ書房,110-122.
・高島進(1980)「トインビー・ホールの思想：A・トインビーと S・バーネット」『社会福祉学』21 (1) ,51-72.
・武田晴人(2008)『高度成長　シリーズ日本近現代史⑧』岩波新書.
・手塚英男(2009a)『酔十夢　第一巻』同時代社.
・手塚英男(2009a)『酔十夢　第一巻』同時代社.
・富永京子(2017)『社会運動と若者　日常と出来事を往還する政治』ナカニシヤ出版.
・東大セツル中央委員会 (1954)「Settler NO.Ⅱ」
・東北福祉大学(2016)「学生サークル『おいまわしセツルメント』が表彰されました(https://www.tfu.ac.jp/volunt/arpn890000006ryk.html,2019.9.2).
・東京都立大学大原セツルメント(1967)「全セツ連にむけて　大原セツル若者会レポート」

W
・和気純子(2005)「エンパワメントアプローチ」久保鉱章・副田あけみ編著『ソーシャルワークの実践モデル　心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店,205-226.
・渡邊かおり(2014)「戦後日本のソーシャル・アクション研究―近代社会改良運動との関係性―」『社会事業史研究 』46,117-130.
・渡部一高(1930)「セッツルメントの中心は人である」『社会事業』13(3),64-65.
・渡邊一高(1932)「細民教化の中心としてのセツルメントと其形態」『社会事業』16(4),12-20.
・渡部一高 (1936)「社会的実験室としてのセツルメント」『社会事業研究』24(10)(復刻版 第1刷,1976年,文教出版).

Y
・矢口悦子(1990)「第1章 自己表現への希求から共同化へ―戦後および1950年代の学習―」社会教育基礎理論研究会編著『叢書 生涯教育Ⅱ 社会教育実践の展開』雄松堂,13-50.
・屋形町セツルメント(1970)「ブラジルの実践　屋形町民主小Pa」

・屋形町かけっこパート(1972)「幼児部レポート＝幼児と生活＝」
・山田正行(1987)「自己教育思想の実践的把握に向けて」社会教育基礎理論研究会編著『叢書 生涯教育Ⅰ 自己教育の思想史』雄松堂, 179-199.
・山田正行(2010)『アイデンティティと時代 一九七〇年代の東大・セツルの体験から』同時代社.
・山田正行(2015a)「東大セツルメント・亀有セツルメント資料目録―創生期、及び 1970 年代を中心として―」『社会教育学研究』(大阪教育大学社会教育学研究室)35, 23-80.
・山田正行(2015b)「学生セツルメントに関する資料を読むために」『社会教育学研究』(大阪教育大学社会教育学研究室)35, 1-8.
・山田正行 (2018)「『思想史としての亀有セツルメント保健部五年史』を読む」『社会教育学研究』(大阪教育大学社会教育学研究室), 43, 13-15.
・山田栄(1977)「イギリスにおけるセツルメント成立の過程とその特質」『平安女学院短期大学紀要』8, 15-22.
・山口信治(2004)「英国における大学セツルメント運動の立役者, チャノン・バーネット(その 2)」『社会学部論集』(佛教大学学術委員会社会学部論集編集委員会編) 39, 133-148.
・山中明(1981)『戦後学生運動史』群出版.
・ヤジエセツルメント青年部(1969)「じっせんきろく―第 19 回東京大会に向けて―」.
・ヤジエセツルメント(1987)「弥次エ 老人生活実態調査報告書」
・弥次衛セツルメント(2014a)「第 144 回弥次衛セツルメント定期総括 2013 年度後期総括案・2014 年度前期基調方針(案)」
・弥次衛セツルメント(2014b)「理念基調」
・弥次衛セツルメント(2017)「153 期理念基調」
・四天セツラー会(1981)「ひつじのしっぽ」
・吉田久一(1990)『吉田久一著作集 3 改訂増補版 現代社会事業史研究』川島書店.
・吉田久一(2004)『新・日本社会事業の歴史』勁草書房.
・吉田裕一郎(2016)「子ども食堂活動の意味と構成要素の検討に向けた一考察―地域における子どもを主体とした居場所づくりに向けて―」『四天王寺大学紀要』62, 355-368.
・吉見俊彦(2009)『ポスト戦後社会 シリーズ日本近現代史⑨』岩波新書.
・楊睿昕(2018a)「(１) 午前パートワークショップ企画の経緯とこれからのセツラーの関係性」岡本周佳・山田正行編『学生セツルメントと大阪府立大学【大阪府立大学史資料叢書Ⅰ】』大阪府立大学 研究推進機構 大学史編纂研究所, 14-22.
・由井正臣(1995)「一九四〇年代の日本―世界制覇の挫折」朝尾直弘・網野善彦・石井進・ほか編『岩波講座 日本通史 第 19 巻 近代 4』岩波書店.
・夕陽丘セツルメント(不明)「夕陽丘セツル 10 月方針合宿！」
・夕陽丘セツルメント(1972)「自主レポート『父母とともに歩む子ども会』 おかあさんといっしょ」

・夕陽丘セツルメント(1975)「全セツ連大会自主レポート」
・夕陽丘セツルメント(1977) 「どっこい 第5号」

Z
・全国学生セツルメント連合(1972)「第25回全国学生セツルメント連合大会討論資料」
・全国学生セツルメント連合(1986)「第41回全国学生セツルメント連合基調報告(付、参考資料)Ⅱ」
・全国学生セツルメント連合(1987)「第42回全国学生セツルメント連合大会基調報告(案)Ⅰ」
・全国学生セツルメント連合書記局 (1967a)「第15回全国学生セツルメント連合大会 討論資料」
・全国学生セツルメント連合書記局 (1967b)「せつるめんと No.8」
・全国学生セツルメント連合書記局(1967c)「第16回全国学生セツルメント連合大会討論資料」
・全国学生セツルメント連合書記局(1969)「第19回全国学生セツルメント連合大会討論資料」
・全国学生セツルメント連合書記局(1971)「第22回全国学生セツルメント連合大会討論資料」
・全国学生セツルメント連合書記局(1973a)「第26回全国学生セツルメント連合大会討論資料(Ⅰ)」
・全国学生セツルメント連合書記局(1973b)「第27回全国学生セツルメント連合大会討論資料」
・全国学生セツルメント連合書記局(1974) 「第28回全国学生セツルメント連合大会討論資料」
・全国学生セツルメント連合書記局(1976)「第 31 回全国学生セツルメント連合大会第 2 回定期連合委員会討論資料」
・全国学生セツルメント連合書記局(1977a)「第32回全国学生セツルメント連合大会討論資料」
・全国学生セツルメント連合書記局(1977b)「第 32 回全国学生セツルメント連合大会第 2 回定期連合委員会討論資料」
・全国学生セツルメント連合書記局(1980)「全セツ連全国代表者会議―討論資料―」
・全国学生セツルメント連合書記局(1983)「第38回全国学生セツルメント連合大会基調報告(案)」
・全国隣保館連絡協議会(2016)
(http://www.rinpokan.com/rinpokannituite.htm,2017.1.22).
・全国セツルメント連合(1965)「第 16 回全国セツルメント拡大連合委員会 1965.11.27

～29. 於.東北大学　〖分科会討論方向〗」
・全国セツルメントの会・三役および代表者一同(1995)「阪神大震災・被災者への支援の呼びかけ」
・全国セツルメント連合歴史小委員会(1957)「学生セツルメントの歴史」
・全国セツルメント連合書記局(1966a)「第 14 回全国セツルメント連合大会討論資料」
・全国セツルメント連合書記局(1966b)「せつるめんと　N03」
・全国セツルメント連合書記局(1957)『同じ喜びと悲しみの中で』三一書房.

【資料1】　　セツルメントの発祥と、全国のセツルメントに関する略年表

年代	主な出来事
1876	大学拡張協会の設立
1878	セツルメント運動がイギリスで発足（ケンブリッジ大学、オックスフォード大学が中心）
1884	ロンドンにサミュエル・バーネットがトインビーホールを設立
1889	シカゴにジェーン・アダムスがハルハウスを設立
1892	ジェーン・アダムスが岡山博愛会を設立
1897	片山潜がキングスレー館を設立
1923	東京帝大セツルメント発足（学生セツルメント運動の前身） 関東大震災の被災者救援活動にかかわった学生救護団を母体に結成
1938	東京帝大セツルメント、解散を余儀なくされる
1948	全国学生連合結成
1949.9	キティ台風発生　東京大学学生の救援活動(東大セツルメント発足の契機)
1950.4	学内団体　東京大学セツルメント　発足
1953	氷川下セツルメントの活動が開始(日本医科大学、お茶の水女子大学、東京大学、東京教育大学、跡見女子短期大学)
1954.5.3	学生平和会議後、子供を守る会及びセツルメント関係者の懇談会開催 セツルメント連合準備会結成が満場一致で可決(事務局は東大セツルメント本部)
1954.11.14	関東セツルメント連合結成大会(加盟は11セツル)
1954	関東セツルメント連絡協議会結成
1955.11..27	全国学生セツルメント連合結成大会(第1回大会)　於：東京教育大学　約150名・26団体が参加
1956.5	第2回全国学生セツルメント連合大会
1957	関東学生セツルメント連合加盟セツル40へ増加
1957.5	第3回全国学生セツルメント連合大会
1958.5	第4回全国学生セツルメント連合大会・藤岡テーゼの提起
1958.11	全国セツルメント連合委員会・浦田テーゼの提起
1959.5	第1回大阪府学生セツルメント連合大会（於：大阪市立大学）参加：日東、夕陽丘、猪飼野
1960.6	第2回大阪府学生セツルメント連合大会（於：大阪府立大学）参加：夕陽丘、猪飼野、日東、住吉
1960	園田テーゼ
1960.11	第7回全国学生セツルメント連合大会、60テーゼの提起
1961.5	第8回全国学生セツルメント連合大会
1963.5	第10回全国学生セツルメント連合大会(於：東京)63テーゼ　(600名のセツラーが参加)
1964.6	全学連の再建
1964.6.13-15	第11回全国学生セツルメント連合大会 於：東京
1965.5.22-24	第12回全セツ連大会（於：東京教育大学）
1966	66テーゼ（学生セツルメント活動の基本的性格） 「せつるめんと　機関紙　No.167」セツラーが1万人を超えたとの記述。
1967.6.3-6.5	第15回全国学生セツルメント連合大会（於：東京（早稲田、明治学院大学、東京大学））
1967.12.21-12.23	第16回全国学生セツルメント連合大会（於：大阪（大阪外国語大学、社会事業短期大学、中小企業会館））
1968.6.15-6.17	第17回全国学生セツルメント連合大会（1300名のセツラーが参加）（於：東京教育大学）
1968.12.23-12.25	第18回全国学生セツルメント連合大会
1969.8.4-8.6	第19回全国学生セツルメント連合大会(於：東京大学駒場キャンパス)
1970.3.6-8	第20回全国学生セツルメント連合大会(於：立命館大学)
1970.8.4-8.6	第21回全国学生セツルメント連合大会（於：お茶の水女子大）
1971.3.4.-3.6	第22回全国学生セツルメント連合大会(東京学芸大学)
1971.8.5-8.7	第23回全国学生セツルメント連合大会（於：北海道大学）
1972.3.6-3.8	第24回全国学生セツルメント連合大会
1972.8.3-8.5	第25回全国学生セツルメント連合大会（於：都立大学）

1973.3.7-3.9	第26回全国学生セツルメント連合大会(於:大阪府立大学)
1973.8.5-8.7	第27回全国学生セツルメント連合大会(於:大正園・東大本郷)
1974	全国学生セツルメント連合の所属セツル62、約4000名のセツラーが活動
1974.3.5-3.7	第28回全国学生セツルメント連合大会(於:立命館大学)
1974.8.8-8.10	第29回全国学生セツルメント連合大会(於:北海道)
1975.3.7-3.10	第30回全国学生セツルメント連合大会(於:東京都立大学)
1976.3.21-3.24	第31回全セツ連大会(於:名古屋大学)
1977.3.18-3.21	第32回全国学生セツルメント連合大会(於:大阪府立大学)
1978.3.11-14	第33回全国学生セツルメント連合大会(於:社会事業大学(9日)東大本郷(10日～14日)工学院大学(9-11は連合委員会)
1979.3.17-3.20	第34回全国学生セツルメント連合大会(於:京都大学・立命館大学)
1980.3.14-3.17	第35回全国学生セツルメント連合大会(於:日本福祉大学)
1981.3.13-16	第36回全国学生セツルメント連合大会(於:東京大学本郷)
1982.3.14-3.17	第37回全国学生セツルメント連合大会(於:東北大学)
1983.3.12-3.15	第38回全国学生セツルメント連合大会(於:京都 立命館大学)
1984.3.12-3.15	第39回全国学生セツルメント連合大会(於:阪南大学、大阪市立大学)
1986.3.10-3.13	第41回全国学生セツルメント連合大会(於:日本福祉大学)
1987.3.9-3.12	第42回全国学生セツルメント連合大会(於:宮城県民会館、仙台市民会館)
19893.14	第44回全国学生セツルメント連合大会(於:愛知) その後の連合委員会集会で、全国学生セツルメント連合の機能停止を宣言。(決議機関の機能不全、書記局も人事が立たないため)
1989.5	千葉で「全国のつながり」のあり方について論議 ”全国学生セツルメントの会”体制案作成
1990.2	第1回全国学生セツルメントフェスティバル(於:千葉)
1992.3.12-3.14	セツルメント全国集会(於:日本福祉大学)
1993.3	全国セツルメントの会　集会(於:大阪)
1994.3.9-11	全国セツルメント集会(於:千葉　会場:ふれあいの郷 長南キャンパス長福寿寺)
1994.8.9-10	'94全セツ8月会議＆ミニ集会(於:愛知県・知多奥田)
1995.3.7-10	第6回全国学生セツルメントの会　3月集会(於:北海道)
1996.3.5-8	全国セツルメント集会(3月集会) (於:東京都・水元青年の家、約80名の参加)
1998.3.3-6	全国学生セツルメントの会　3月集会(於:北海道:恵庭青年の家)
2003.春	全国学生セツルメントの会　集会(於:北海道　Theセツルメント)
2003.夏	全国学生セツルメントの会　集会(於:福島　保健部・おいまわしセツルメント)
2004.春	全国学生セツルメントの会　集会(於:埼玉　保健部・おいまわしセツルメント)
2004.夏	全国学生セツルメントの会　集会(於:大阪　夕陽丘セツルメント)
2005.春	全国学生セツルメントの会　集会(於:埼玉　Theセツルメント)参加者11名。最後の全セツとなる

【資料2】　地域の広域セツルメント連合結成時期の略年表(関東・関西・愛知を中心に)	
年代	主な出来事
1949.9	キティ台風の発生と学生による救援活動
1949.9.16	東大セツルメント　設立準備会(各自治会、社会科学研究会、YMCAその他が参加)
1949.10.11	東大セツルメント　医療部、調査部が発足　葛西魚連の中割倉庫内で実費診療開始
1949.11上旬	東大セツルメント社会科学研究会を中心に葛西地区生活実態調査の実施
1950.4	東学内団体東京大学セツルメント　発足
1952	大阪大学医学部α会が日東地区で活動を開始
1953	名古屋大学セツルメント　発足(夏の帰省運動から発展)
1954　春	大阪社会事業短期大学、大阪女子大学る児童部活動の開始
1954.5.3	学生平和会議後、子供を守る会及びセツルメント関係者の懇談会開催 セツルメント連合準備会結成が満場一致で可決(事務局は東大セツルメント本部)
1954.6	愛染園学生セツルメント　発足(社会事業短期大学、阪大α会、大阪女子大)
1054.7	東北大学セツルメント　発足
1954.10.6	関東セツルメント連合　第1回準備会
1954.10.13-11.4	関東セツルメント連合　第2回準備会～第6回準備会
1954.11.14	関東セツルメント連合結成大会(加盟は11セツル)
1955.6	関東セツルメント連合　第2回大会
1956.7.1	関西社医研セツル懇話会(於:大阪大学、9団体・32名の参加)
1962	関西セツルメント連合結成(加盟は2セツル、準加盟は3セツル)
1963	関西セツルメント連合第1回大会((5セツルの参加)
1966	名古屋南部セツルメント協議会　結成
1967.7	名古屋南部セツルメント協議会をもとに愛知県学生セツルメント連合結成準備会　発足
1968.2	関西セツルメント連合の解消、大阪学生セツルメント連合結成
1968.9.17	愛知県学生セツルメント連合結成大会
1968.12.7-12.8	第1回大阪府学生セツルメント連合大会(於:大阪市立大学) 参加:日東、夕陽丘、猪飼野
1969.11.29-30	第2回大阪府学生セツルメント連合大会(於:大阪府立大学) 参加:夕陽丘、猪飼野、日東、住吉
1969.12.7	第1回愛知県学生セツルメント連合大会
1970.6	第1回大阪府学生セツルメント連合交流会
1971	関東セツルメント連絡協議会　結成
1971.6.13	第2回大阪府学生セツルメント連合交流会　(於:大阪外国語大学)

【 資料３ 】

学生セツルメント関係資料目録　（大阪府立大学収蔵）

※注記

１）個人名や、個人を特定できる固有名詞に関しては、プライバシー保護の観点から、〇〇と記載する。ただし、セツラーネーム（セツルメント内での名前）はそのまま表記する。また、講演、著書、論文の発表者や著者についても、一部実名表記としている。

２）目録の配列に関しては、保存されていた資料を整理した順番であり、意味のある配列ではない。

３）細かな情報については、データ上は適宜備考欄に記載しているが、目録には備考欄は設けず、資料名と発行年月、発行元のみを記載する。

４）背景色のある資料については、冊子やファイル等の形で複数の資料が１つにまとめられているもので、背景色のない資料は、単一の資料である。

５）資料の発行年に関しては、資料自体に記載のないものについても、大会の開催年等から推定したものを含む。

ファイル	No	題名	発行年	発行月	発行元
1		全セツ大会レポNo.1			
	1	日東セツルメント　分科会　合宿　コンパ　ハイキング	1968	12	日東セツルメント
	2	住吉セツルメント分科会　創造活動	不明		住吉セツルメント
	3	八千代町セツルメント　分科会　勉強会をどう進めるか「風の子」レポート	不明		八千代町セツルメント
	4	ヤジエセツルメント　分科会　幼児部活動	1969	8	ヤジエセツルメント
	5	寒川セツルメント　幼児部レポート	不明		寒川セツルメント
	6	20回全セツ連レポート　いかいの遊びとスポーツ	1970		
	7	しゃべる班	不明	不明	
	8	どんぐり班	不明		
	9	イモテル班	不明		
	10	タケノコ班	不明		
	11	堀之内セツルメント　セツラーの仲間づくり	1968	12？	堀の内セツルメント
	12	寒川セツルメント　ストラグル　-中学生勉強会を通して-	1968	12	寒川セツルメント　母子寮班　中学生パート
	13	マンモスセツルメント　芽No14　-文化，遊び，スポーツの実践を中心として-	1971		マンモスセツルメント　中学生パート
	14	住吉セツルメント　幼児パート　＝実践報告＝	1971		住吉セツルメント
2		住吉実践レポート’76			
	1	よってらっしゃい　79回阪セツ連交流会　　小低分野レポート	1976		
	2	どろんこの天使たち　住吉セツル新今宮幼児パート	1976	12	住吉セツルメント
	3	よってらっしゃい　Learning Camp 特別号	1976		白鷺小学校1年生パート
	4	中学生パート	1976	5	白鷺地域
	4	34パ　とらのまき	1976		白鷺3，4年生パート
	5	５・６年パ新聞	1976	3	
	6	今は山中	1976		住吉セツルメント　中学生1年生パート
3		住吉実践レポート’76			
	1	今に見ておれ！	1976	4～7	住吉セツルメント
	2	よってらっしゃい　79回阪セツ連交流会　　小低分野レポート	1976		
	3	3＋4＝7？			
4		住吉実践レポート’76			
	1	今に見ておれ！	1976	4～7	住吉セツルメント
	2	かくれんぼ　第7回父母と共に歩む幼児部活動	1976		住吉セツルメント　新今宮幼児パート
	3	青空の下　第7回阪セツ連交流会正式レポート	1976	7	住吉セツルメント　新今宮6年パート
	4	ねずみの学校　勉強って何だろう？　阪セツ交流会中学2・3年パート　正式レポート	1976		住吉セツルメント　新今宮　中学2・3年パート
5		衣摺セツルメント’78　実践レポート			
	1	まんまる　第9回阪セツ交流会　正式レポート　おにぎり	1978	7	衣摺セツルメント　小学生1，2年パート
	2	あなうめ34Pa　第9回交流会正式レポート	1978	7	衣摺セツルメント小学3，4年パート
	3	祝いth大会阪セツ連　気まぐれ中Paの自主レポートだよ	1978	12	衣摺セツルメント　中学生パート
	4	あなぼこ3・4Pa　第33回全セツ大会に向けて−自主レポ−	1978	3	衣摺セツルメント　小学生3・4年パート

	5	衣摺　生レポ　中パ-	1978	冬	衣摺セツルメント　中学生パート
	6	なかよし3，4年パート	1978		衣摺セツルメント　小学3，4年パート
	7	衣摺セツルメント	1978		衣摺セツルメント　5，6年パート
	8	衣摺セツルメント	1978		衣摺セツルメント　幼児パート
6		秋田＋熊本			
	1	鹿野セツルメント10年史「たいわ」	1964	3	鹿野セツルメント
	2	青葉実態調査報告	1962		熊本学生セツルメント
	3	全セツ連　第33回東京大会に向けて　分野別分科会　負けるなかつえちゃん！	1978		松原セツルメント　小学校低学年及び高学年パート
	4	杜の子全国学生セツルメント連合加盟レポート	1979		杜の子セツルメント
	5	仙台地域調査案内	1981		宮城野セツルメント　東北大セツラー会
	6	第25回全セツ連大会	1970		秋田セツルメント
7		方針合宿	不明		クルル
8		‘75　夏合宿	1975		住吉セツルメント（クルル）
9		財政局	不明		住吉セツルメント（クルル）
10		第四回阪セツ交流会レポート			
	1	風の子	1973	6	住吉セツルメント
	2	住吉せつる中P	1973	6	住吉セツルメント
	3	第４回阪セツ交流会に向けて	1973	6	日東セツルメント
	4	ひがしよどわせつめんと	1973	6	東淀川セツルメント
	5	現代の貧困問題	1973	6	日東セツルメント市大セツラー会
	6	幼児パート：実践レポート	1973	6	夕陽丘セツルメント
	7	猪飼野セツルメント	1973	6	猪飼野セツルメント
	8	地域子ども会論	1973	6	猪飼野セツルメント
	9	でんでんむし	1973	6	住吉セツルメント
11		第5回阪セツ交流会レポート			
	1	風の子	1974	6	住吉セツルメント
	2	5にんと2ひき荒野をゆく	1974	6	住吉セツルメント
	3	ひもすがら	1974	6	住吉セツルメント
	4	1・2年パート　実践レポート	1974	6	衣摺セツルメント
	5	なかよし	1974	6	衣摺セツルメント
	6	はばたけ小鳥おおぞらへ！	1974	6	日東セツルメント
	7	阪セツ交流会議事レポ	1974	6	東淀川セツルメント
	8	自主レポート	1974	6	東淀川セツルメント
	9	阪セツ　レポート（交流会）	1974	6	東淀川セツルメント
12		せつるのをと	不明		どど
13		せつるのをと（子ども祭り）	不明		どど
14		梅町ストリート	不明		住吉セツルメント
15		明日をめざして	1967	5	馬渕セツルメント

16		集団の中での私たちの発達	1982		立命館大学セツルメント
17		梅町ストリート	不明		住吉セツルメント
18		今は山中	1976	12	住吉セツルメント
19		歩きつづけよう	1976？		第31回全国セツルメント中央実行委員会財政局
20		なつの総括方針合宿	1976	3	阪セツ連？
21		～夏季合宿～　◇実践報告◇	1970	7	住吉セツルメント
22		どんたくれ	1983		第16回阪セツ連　事務局
23		たわごと	1959	11	福岡女子大学セツルメント
24		女子大セツルの歴史	1964		東住吉セツルメント
25		弘済院の歴史	1965	11	○○　他
26		Telephone	1976		単実実行委員会
27		はばたけ大阪へ	1976		31大会中実情宣局
28		雪だるま	不明		21大会実行委員会
29		夏合宿レポート	不明		
30		総括会議の報告	1974		住吉セツルメント
31		友好祭’74～’76			
	1	祭りだワッショイ	1976	5	住吉セツルメント
	2	「青年狂詩曲」アンケート集約報告	1975		
	3	第14回セツルメント友好祭	1975		住吉，夕陽ヶ丘セツルメント
	4	シンポジウム	1974	5	住吉，夕陽ヶ丘セツルメント
32		第9回　大阪府学生セツルメント連合大会　討論資料	1967		阪セツ連
33		第12回大阪府学生セツルメント連合大会　討論資料	1979		阪セツ連
34		第13回大阪府学生セツルメント連合大会　討論資料	1980		阪セツ連
35		第14回大阪府学生セツルメント連合大会　討論資料	1981		阪セツ連
36		第26回全国学生セツルメント連合大会　討論資料（Ⅱ）	1973		全セツ連
37		第32回全国学生セツルメント連合大会　第2回定期連合委員会討論資料	1976		全セツ連
38		第31回全国学生セツルメント連合大会　第3回定期連合委員会討論資料	1977		全セツ連
39		Sr. 総会レジュメ			クルル(kururu)
	1	大学における活ド	不明		
	2	その他名前なしレジュメ	不明		

40		京セツ連実践レポート			
	1	全セツ連第３１回大会（愛知）セツラー会執行部の原則的活動	1976	3	京セツ連大学Cap会議
	2	第27回全セツ連大会レポート―キャンプの取り組みを中心とした中学生の集団づくり―	1973	8	マンモスセツル中学生パート
	3	小学生パート分野別分科会　遊びとスポーツReport	不明		たかせがわ
	4	ブラジルの実践　屋形町民主小Pa	1970		屋形町セツルメント
	5	第３２回全セツ連大会（大阪）鴨川セツル小学生パート	1977		仏教大学セツ研小学生パート
	6	幼児部レポート＝幼児と生活＝	1972	3	屋形町かけっこパート
	7	でんしゃごっこ　第２４回全セツ連大会京都高瀬川ウルトラパート自主レポート	1972	3	
	8	ナナエ　鬼したいわあ・・・京セツ連マンモス花と夢の幼P	不明		
	9	トントントンなんの音？全国学生St連合第36回大会京都学生St連合屋形町St幼児部	1981		
41		愛セツ連実践レポート			
	1	幼児の文化創造活動（正式レポート）	不明		愛セツ連一ツ山セツルメントひまわりパート
	2	あいち少年少女スポーツ祭典	不明		ヤジエせつる小学生パート
	3	小学校一年「勉強会」	不明		井戸田せつる
	4	じっせんきろく―第一九回東京大会に向けて―	1969		ヤジエセツルメント
	5	実践報告集	不明		ヤジエセツルメント幼児パート
	6	全セツ連加盟レポート	不明		町っ子セツルメント
	7	自主レポート	不明		島田一ツ山セツルメントありんこパート
	8	子どもの要求と発達―子どもの要求のとらえ方とSrの働きかけ―	不明		名短セツル幼児部
	9	子ども集団の価値役割―ペープサート実践―	不明		トロッコ小低パート
	10	集団作りの価値と役割	不明		ヤジエセツルメント小低パート
42		表紙下部に「住吉セツルメント」、背表紙に「猪飼野セツルメント」と書かれたB5の紙製ファイル			
	1	「４１ねん夏の合宿」	1966	7	大阪学芸大学猪飼野セツルメント　子研
	2	７３前期・全文活（全国学生学術文化活動者会議）感想・報告集	1973	5	
	3	たけのこ班レポート・総括合宿（２／２７，２８，３／１）にむけて	不明		
	4	地域教育―《児童部活動》―	不明		大阪教育大学猪飼野セツルメント
	5	児童部レポート	不明		タケノコ班
	6	ラーニングキャンプ―討論資料―	不明		猪飼野セツルメント
43		名簿’77’78’80			
	1	知ってほしいの私のことを	1978		住吉セツルメント
	2	知って下さい．私のことを	1980		住吉セツルメント
	3	知ってほしいの！私のことを	1977		住吉セツルメント
44		東淀川セツル実践レポート　’73～			
	1	このゆびと～まれ！	1973		東淀川セツルメント
	2	大阪学生セツルメント第6回大会議事録レポート	1974	1	東淀川セツルメント
	3	阪セツ交流会　議事レポ　−幼児にとって生き生きする遊びとは−	1974	6	東淀川セツルメント
	4	このゆびと一まれ	1974		東淀川セツルメント
	5	1．2年生Part	1974		東淀川セツルメント
	6	このゆび　と一まれ！	1976		東淀川セツルメント
45		東淀川セツル実践レポート　’70～’73			
	1	3・4パート	不明		東淀川セツルメント

	2	幼児パート　実践レポート　第3回阪セツ連かわち交流会にむけて	1972		東淀川セツルメント
	3	るねさんす　Vo1,2	不明		東淀川セツルメント
	4	ルネッサンスVo1 Ⅲ	不明		東淀川セツルメント
	5	ルネッサンスVo1　4	不明		東淀川セツルメント
	6	この指　と～まれ！　創刊号	不明		東淀川セツルメント
	7	1．2年Part 実践レポート　どこまで子供に遊びを提供するのか？	不明		東淀川セツルメント
	8	ひがしよどがわせつるめんと			東淀川セツルメント
46		第15回　大阪セツルメント連合大会討論資料	1982		阪セツ連
47		第17回　大阪セツルメント連合大会討論資料	1984		阪セツ連
48		第24回　愛知県学生セツルメント連合委員会　第22回　愛知県学生セツルメント連合委員会　＜討論資料＞	1979		愛知県学生セツルメント連合書記局
49		第28回　愛知県学生セツルメント連合委員会　第31回　愛知県学生セツルメント連合委員会　＜基調資料＞	1983		愛知県学生セツルメント連合書記局
50		USA1	1994		
51		わた坊のノート	1993		
52		学習のノート	不明		
53		実践記録	1995		
54		part会ノート	2007		
55		無題	不明		
56		パート会			
57		第8回大学ゼミ報告会	1975		
58		全セツ情宣	2001		宮城県仙台市青葉区
59		住吉実践レポート			
	1	第2号　おちめぐる	1971		住吉セツルメント
	2	小学校低学年パートの実践報告	1970		住吉セツルメント
	3	第21回全セツ連大会　幼児パート　実践報告	1970		住吉セツルメント
	4	第3回阪セツ連大会　ようじぱぁと乃レポート	1970		住吉セツルメント
	5	Sumiyoshi Shokokikanshi	1971		住吉セツルメント
	6	ぺんとしゃべる	不明		さーくるキャラバン
	7	第23回全セツ連大会　おちめじる	1971		住吉セツルメント
	8	うさぎさんでておいで	1971		住吉セツルメント
	9	ちいちいいっぱい			住吉セツルメント
60		白鷺小低パート			
	1	無題	1983		
61		住吉実践レポート’79			
	1	白さぎ小低集団	1979		住吉セツルメント
	2	ガキッタレ　PartⅢ	1979		住吉セツルメント
	3	オマエら！！静かにせーや	1979		住吉セツルメント
	4	謹賀新年	1979		住吉セツルメント

	5	どろんこ	1979		住吉セツルメント
62		新今宮中Pa・R			
	1	ねずみの学校	1976		住吉セツルメント
	2	三色ねずみ	1977		住吉セツルメント
	3	ねずみの学校	不明		住吉セツルメント
	4	ねずみの学校	不明		住吉セツルメント
	5	ねずみの学校	不明		住吉セツルメント
63		無題	不明		大阪女子大セツルメント？
64		第8回阪セツ連交流会	1977		
	1	集団のなかで	1977		日東セツルメント
	2	るねさんす	1977		東淀川セツルメント
	3	明日をみつめる輝く瞳	1977		日東セツルメント
	4	かざぐるま	1977		猪飼野セツルメント
	5	第8回大阪府学生セツルメント連合交流会	1977		
65		京セツ連　15，16，17大会基調			
	1	第10回12月集会全セツ連理論交流会討論資料	不明		
	2	第11回12月集会全セツ連理論交流会討論資料	不明		
	3	第17回12月集会全セツ連理論交流会討論資料	1976		
	4	基調報告第16回京セツ連大会	不明		
	5	各分野の更なる発展のために	不明		
	6	第20回，第19回愛知県学生セツルメント連合会　基調報告　討論資料	1977		愛知県学生セツルメント連合書記局
	7	第16回，第18回愛知県学生セツルメント連合会　基調報告	1976		愛知県学生セツルメント連合書記局
66		大会及びビラ方針．(1)(桃園～)	1965		夕陽ヶ丘セツルメント
67		阪セツ連	1974		
	1	新歓対策実行．CニュースNo1	不明		
	2	子どもまつり	不明		
	3	第1回　統一ハイキング	1974		
	4	その他	不明		
68		住吉実践レポート'77			住吉セツルメント
	1	さんにんよれば･･･文殊の智恵･･･？	1977	3	住吉セツルメント
	2	ねずみの学校	1977	3	住吉セツルメント
	3	おまえらほんまに仲間か！	1977		住吉セツルメント
	4	3.4Paスケッチブック	1977	3	住吉セツルメント
69		第10回阪セツ連大会レポ	1977	12	住吉セツルメント
	1	つみき	不明		夕陽丘セツルメント
	2	日東セツルメント　下三小低パート	1977	12	日東セツルメント
	3	おひさま　1.2パー	不明		衣摺セツルメント
	4	どらねー　3.4PAR	1977	12	衣摺セツルメント
	5	WANTED	1977	12	衣摺中学生パート
	6	みちしるべ	1977	12	関西女子短大Sr会
	7	クレヨン	1977	12	住吉セツルメント
	8	おまえらほんまに仲間か！PARTⅡ	1977	12	住吉セツルメント
	9	トンネルをぬけるとそこは･･･	1977	12	住吉セツルメント
70		住吉実践レポート'78	1978		住吉セツルメント
	1	どろんこの天使たち	1978	7	住吉セツルメント

	2	雨上がりパート5	1978	7	住吉セツルメント
	3	ガキッタレ	不明		住吉セツルメント
	4	あした天気になあれ	不明		住吉セツルメント
71		住吉実践レポート'78	1978		住吉セツルメント
	1	こちら5.6Pa応答ねがいます	1978	7	住吉セツルメント
	2	ガキッタレ			住吉セツルメント
	3	白さぎ3･4Pa　音楽隊	1978	7	住吉セツルメント
	4	おまえらほんまに仲間か！PARTⅢ	1978	7	住吉セツルメント
	5	クレヨンPART3 第9回交流会に向けて	1978		住吉セツルメント
72		無名ファイル			
	1	キャンプに向けて？（無名）			
	2	キャッツ･アイ　せせらぎ	1984	7	市立･府立大学
	3	セツル学習会　青年の生き方	1984	12	
	4	第17回阪セツ連大会　Go for it!!	1984	12	大阪女子大学
	5	ゴンタクレ　特集：セツルと私		6	
	6	府大マップ（セツルメント編）	1981	11	大阪府立大学セツルメント
	7	さかゑ　全セツ連33大会に向けて	1984	3	住吉セツルメント　大阪府立大学セツラー会
	8	82年度総括合宿討論　大石教会にて	1983	3	住吉セツルメント
	9	地域実践全般	不明		住吉セツルメント
	10	人間らしさを求めて！！	不明		大阪府立大学セツルメント
73		阪セツ連１４大会基調ができるまで　″幼児部″ができるまで			
	1	14大会 第14回大阪府学生セツルメント連合大会	1981	12	大阪府学生セツルメント連合
	2	幼児部紹介原稿	不明		
74		阪セツ連事務局			
	1	阪セツ連事務局発足にあたって　事務局員へ	不明		
	2	阪セツ連機関紙　車軸　創刊号	1973	6	
	3	阪セツ連機関紙　第4号　ぼんとこいさん	1970	10	阪セツ連書記局文化部
75		77秋のセツル大学	1977		住吉セツルメント
76		第8回阪セツ連交流会（阪セツ連レポート）	1977		住吉セツルメント
	1	３色ねずみ	1977	7	住吉セツルメント
	2	第8回阪セツ連交流会正式レポート　あめあがり　なんばあつう	1977		住吉セツルメント3･4パート
	3	八戸の里　1･2年Part　実践レポート	1977		
	4	どっこい　夕陽丘セツルメント障害児パート第5号	1977	7	夕陽丘セツルメント
	5	やぶ蚊　そんなにせめるのやめてくれー　夕陽丘セツルメント小高Pa	1977	7	夕陽丘セツルメント小高Pa
	6	東淀川セツルメント　淡路地域　幼児パート　ななつのこ	1977	7	東淀川セツルメント
	7	千里地域456年生パート　あっかんべ～	1977	7	東淀川セツルメント　千里地域456年生Part
	8	るねさんす　生まれ変わり中Pa　東淀川セツルメント　淡路　中Pa	1977	7	東淀川セツルメント　淡路中学生Part
	9	かざぐるま　猪飼野　中Pa	1977	7	猪飼野セツルメント　中学生Pa
77		新今宮　中高青パート	1983	4	住吉セツルメント
78		全セツ連大会レポートNo.3	1972-1973		
	1	全セツ連自主レポート集	1972	8	京都セツルメント
	2	全セツ連加盟レポート	1972	7	こぶしセツルメント
	3	第25回全セツ連関東大会　あおいとり―幼児と生活―	1972		幸泉セツルメント

	4	昭和47年度　活動方針	1972	4	こぶしセツルメント　矢形町　青年部
	5	第25回全セツ連関東大会　REPORT　屋形町青年部	1972	8	屋形町　青年部
	6	第26回大会　全セツ連加盟レポート	1973	3	あおねセツルメント
	7	第26回全セツ連大会　課題別分科会レポート	1973	3	大原セツルメント
	8	第26回大阪大会自習レポート　風の子	1973	3	住吉セツルメント　幼少パート
	9	実践レポート　炊事遠足	不明		札幌セツルメント　菊水　小学生班
	10	青年部レポート　青年運動とサークルの価値	1973	3	中野セツルメント　若者パート
	11	第26回全セツ連大会　大阪大会　自習レポート	1973	3	住吉セツルメント　小高パート
79		全セツ連大会レポートNo.4	1973		
	1	第27回全セツ連大会レポート　キャンプでの取りくみを中心とした中学生の集団づくり	1973		マンモスセツル　中学生パート
	2	27回全セツ連大会　勉強会	1973	8	寒川せつるめんと　三丁目班中学生パート
	3	全セツ連大会勉強会&父母の会のレポート	不明		神戸大せつるめんと　子ども会班
	4	第27回全国学生セツルメント連合大会　課題別シンポジウム	1973		氷川下セツルメント教育大セツラー会
	5	第27回全セツ連大会　課題レポート	1973	8	京セツ連若葉パート
	6	自習レポート	1973	8	境南セツルメント　わらしこども会　中学生パート
80		実践・パート会	1988	9～11	住吉セツルメント　児童部　びいばあ
81		実践・パート会	1988～89	12～4	住吉セツルメント　児童部　びいばあ
82		たんぽぽ	不明		日東セツルメント　キリ短セツラー会
83		集団のなかで	不明		日東セツルメント　日本橋東五丁目　中学生Part♂
84		夏の日の太陽	1977	8	日五中パ男子
85		第17回友好祭	1978	6	住吉セツルメント
	1	第16回府立系大学　友好祭　総括集　1977	1977		府立系六大学
	2	健康について考える	不明		大阪府公衆衛生専門学校看護科2年1組
	3	自主企画のてびき	不明		第17回友好祭実行委員会総務部
	4	第17回友好祭　討議資料　新入生向け	1978		友好祭実行委員会
	5	友好祭実行委員会ニュースNo1～2	不明		有効再実行委員会
	6	上回生向け討議資料	不明		不明
	7	17th友好祭	1978		友好祭実行委員会
	8	Do you know settlement?(どうゆうのセツルメント)Part3	1978	6	住吉セツルメント
86		実践記録 No15	不明		不明
87		どろんこの天使たち	1979	6	住吉セツルメント新今宮幼児パート

88		日東セツル夏合宿in赤目at民宿たまき	1984	8～9	日東常任委員会
89		セツルメントってなあに？	不明		日東セツルメント
90		機関紙日東　新春特集　第6号	1980	2	日東セツルメント機関誌局
91		機関誌　にっとう　7号　総括合宿レジュメ号	1980	2	日東セツルメント機関誌局
92		大学祭　友好祭			
	1	友好祭ニュースNo2	1975		
	2	友好祭ニュースNo3	1976		
	3	シンポジウム	不明		
	4	公演　現代思想と仏教	不明		
	5	第15回学院祭	不明		大阪府立公衆衛生学院　学院祭実行委員
	6	第14回友好祭討論資料	不明		
	7	第14回セツルメント友好祭	不明		住吉，夕陽丘セツルメント
	8	応急手当	不明		白菊専攻科自治会執行部
	9	家庭医学	不明		白菊専攻科自治会執行部
	10	第27回大学祭　セツルメント	不明		住吉，大阪府立セツラー会
93		白鷺地域執行部	1980		住吉セツルメント
94		白鷺小高部	1980		住吉セツルメント
95		白鷺地域機関紙この指とまれ	不明		住吉セツルメント
96		無題	不明		○○
97		日東セツル　合宿レジュメ	1981		ちゃっぷ
	1	日東セツルメント　ラーニングキャンプ	1981		日東セツルメント
	2	夏合宿	1981		日東セツルメント
	3	総括合宿	1981		日東セツルメント
	4	方針総会	1982		日東セツルメント
	5	ラーニングキャンプ	1982		日東セツルメント
	6	夏合宿	1982		日東セツルメント
	7	総括合宿	1982		日東セツルメント
98		日東セツル			
	1	日東だよりNo13	不明		日東セツルメント
	2	機関紙　日東第4号	1979		日東セツルメント
	3	日東セツルメント	不明		日東セツルメント
	4	渡河	1968		日東セツルメント
	5	後期方針合宿レジュメ	不明		日東セツルメント
	6	後期総括合宿	1976		日東セツルメント
	7	下三総括	不明		
	8	日東総会	1976		日東セツルメント
	9	セツルメントってなあに？	不明		日東セツルメント
	10	第1回阪セツ連合大会　家庭訪問と父母の会	1968		日東セツルメント
	11	第3回阪セツ連合大会　家庭訪問と父母の会	1979		日東セツルメント
	12	第6回阪セツ連交流会　都市問題	1975		日東セツルメント
99		夕陽丘総括レポート	1989		夕陽ヶ丘セツルメント
100		セツルメント　新しい仲間とともに	不明		住吉セツルメント

101		セツラー機関紙第1号　みんなの輪　遠足編	不明		住吉セツルメント
102		基調報告	1993		はらい川セツルメント
103		８４年度　文連合宿	1984		大阪府立大学文化部連合
104		針葉樹	1989		22大会実行委員会
105		大阪府学生セツルメント連合　第19大会	1986		19大会実行委員会
106		第20回　夏の交流会　パンフレット	1989		
107		こどもフェスティバル	不明		住吉セツルメント
108		大阪府学生セツルメント　春の新歓ハイクのパンフレット	1989		阪セツ連　新歓ハイク実行委員会
109		セツルメント　新入生歓迎ハイク	不明		阪セツ連新歓ハイク実行委員会
110		新今宮　中高青パ～G.R,Pa会	1980		住吉セツルメント
111		小高part新今宮	1979		府大セツラー会
112		白鷺　幼パ～G.R,Pa会	1980		住吉セツルメント
113		新今宮　小低パ～G.R,Pa会	1980		住吉セツルメント
114		白鷺　小低～G.R,Pa会	1980		住吉セツルメント
115		大阪府学生セツルメント連合第10回記念大会	1977		しらぼん
	1	かざぐるま	1977		猪飼野セツルメント
	2	WANTED	1977		衣摺セツルメント
	3	おまえらほんまに仲間か！　PARTⅡ	1977		住吉セツルメント
	4	おひさま	1977		衣摺セツルメント
	5	みちしるべ	1977		関西女子短大Sr会
	6	この子らの未来を考える	1977		府立大学セツルメント
116		執行部レポート			
	1	B班レポート	不明		
	2	いやでよぉ	不明		
	3	おとしんせえへん！？	不明		
	4	第16回　阪セツ連大会に向けて	1958		日東セツルメント
117		「やんぐたうん　毎日放送」settlement kururu	1974-75		住吉セツルメント
118		settle 5.6p	1975	1	住吉セツルメント
119		ひがしおおさかおやこまつり3　KURURU	1975	5	住吉セツルメント
120		名前なしレポート用紙	1975	6	住吉セツルメント
121		1ねん生Part　ひまわり、セツラーネーム★KURURU★	1976	11	住吉セツルメント
122		名前なしノート	1976	9	住吉セツルメント
123		1.2Part　実践レポ　Kururu	1977	11,12	住吉セツルメント

124		第11回交流会　sr会レポート	1980	7	
	1	ほうせんか　阪セツル連交流会　正式レポート	1980	7	衣摺セツルメント　近大セツラー会
	2	日東セツルメント関短セツラー会　えくぼ	1980	7	関西女子短期大学子供研究サークル
	3	第11回交流会　″大学別分科会″用レポート　要求実現のために	1980	7	市大セツラー会
	4	社大sr会レポート	1980	7	社大（大阪社会事業短期大学）セツラー会
	5	いんじゃん　第11回阪セツ連交流会正式レポート	1980	7	大阪府立大学セツラー会
	6	ナイチンゲールの悩み　第11回阪セツ連交流会正式レポート	1980	7	大阪府立公衆衛生専門学校セツラー会
	7	花よりだんご　第11回阪セツ連交流会正式レポート	1980	7	大谷女子大学セツラー会
	8	ひつじのしっぽ　第11回阪セツ連交流会正式レポート	1980	7	衣摺セツルメント　四天セツラー会
	9	たんぽぽ	1980	7	日東セツルメント　キリ短セツラー会
	10	第11回大阪府学生セツルメント連合交流会	1980	7	大阪府学生セツルメント連合
125		全国代表者会議―討論資料―	1981	12	全国学生セツルメント連合第36期書記局
126		朝の詩　No.59　″深めの秋へ向けて″～地域実践全般～	1978	10	大阪府学生セツルメント連合常任書記局
127		学習討論資料	1978	10	全国学生セツルメント連合書記
128		どんぐりandさくらんぼ	不明		夕陽丘セツルメント幼児部レポート
129		下三小低パート　第10回阪セツ連交流会	1979	7	日東セツルメント
130		Festival　全国学生セツルメントフェスティバル　in千葉	1990	3	全国学生セツルメント連合
131		住吉実践レポート'75	1975	12	住吉セツルメント
	1	どろんこの天使タチ	1975	12	住吉セツルメント　幼児パート
	2	あたしらかて	1975	12	住吉セツルメント　5･6年パート
	3	雨上がり　住吉セツル3･4年パート	1975	12	住吉セツルメント　3･4年パート
	4	あしたてんきになあれ	1975	12	住吉セツルメント　1･2年パート
132		住吉実践レポート'75	1975	12	住吉セツルメント
	1	あたしらかて	1975	12	住吉セツルメント　5･6年パート
	2	どろんこの天使たち	1975	12	住吉セツルメント　幼児パート
	3	がんばってまっせ？―創刊号―9月期実践総括集	1975	12	住吉セツルメント
	4	あめあがりなんばあつう	1975	12	住吉セツルメント　3･4年パート
	5	台風の目	1975	12	住吉セツルメント　高校生パート
133		白鷺とびうおPa～G.R,Pa会　1980前期	1980	5･6	住吉セツルメント
134		せつるノート　Vol.22	2000	10	住吉セツルメント
135		sr会ノート　Vol.14	1995	6	住吉セツルメント

136		せつるノート　Vol.25	2001	12	住吉セツルメント
137		新セツルノート　Vol.24	2001	6	住吉セツルメント
138		sr会ノート　Vol.12,5	1995	1	住吉セツルメント
139		sr会ノート　vol.13	1995	2	住吉セツルメント
140		白鷺幼パ　パート会議事録	1980?	10	住吉セツルメント
141		全セツ連大会レポ　No5	1974	3	
	1	今日の都市問題	1974	3	弥次衛セツルメント
	2	手をつなげ！子どもたち	1974	3	夕陽丘セツルメント小学生パート
	3	じゃがいもセツル―自習レポート―（〇〇君実践）	1974	3	じゃがいもセツル？
	4	国民のための大学づくりめざして	1974	8	住吉セツルメント
	5	中学生と勉強　28回レポート	1973	3	ぐみの会　中学生パート
	6	今日の都市問題　長田野工業団地に見る京都民主府政の地域開発	1974	3?	京大セツルメント
	7	私ひとりでいいんだ―中学生勉強会―	1974	3	農村セツルメント　どんぐり会A班
	8	日東セツルメント　下三小低パート 全セツ連大会に向けて	1974	3?	日東セツルメント
	9	自習レポート　子ども会活動における一年間の流れ―子ども会の変化とセツラー―	1974	3	ズンガリセツルメント　大通パート
	10	雪像づくり＜小学生と遊び＞	1974	3?	あらぐさセツルメント　すずらんパート
	11	歩め！自ら学ぶ自らの道を！築け！真実見失わぬ連帯の時代を！	1974	8	札幌セツルメント
	12	おおいずみセツルメント(自習レポート)　第29回大会	1974	8	おおいずみセツルメント
	13	5にんと2ひき　荒野をゆく	1974	8	住吉セツルメント　小学生パート
142		全セツ連大会レポ　No6	1975	3	
	1	大学分科会　集団に支えられたsr会活動	1975	3	仏教大学
	2	切り開け！仲間たち	1975	3	夕陽丘セツルメント　小学生パート
	3	みんしゅてき大学づくりめざして	1975	3	大阪府立大学セツラー会
	4	課題Report婦人　おばちゃん	1975	3	北海道農村セツルどんぐり会B班市街パート
	5	公害問題への実践的アプローチ	1975	3	川崎セツルメント古市場公害パート
	6	あ　生きってる！	1975	3	京セツ連屋形町民主小P
	7	大学の民主化の展望と大学Sr会の関わり	1975	3	京都産業大学セツルメント研究会
	8	都市問題　課題別分科会レポート	1975	3	氷川下セツルメント都市対策部
	9	第30回全セツ連大会	1975	3	40番地セツルメント
	10	宿提施設、宿泊所とセツルメント　30回大会	1975	3	一之江セツルメント
143		白鷺小高パート　うめまちストリート			住吉セツルメント　白鷺小高パート
		うめまちストリートPART7	1984	7	住吉セツルメント　白鷺小高パート

		UMEMACHI STREET	1984	3	住吉セツルメント　白鷺小高パート
		うめまちストリート	1984	12	住吉セツルメント　白鷺小高パート
		ウメマチStreet	1983	12	住吉セツルメント　白鷺小高パート
		うめまちストリート	1985	12	住吉セツルメント　白鷺小高パート
		梅町ストリート	1984	7	住吉セツルメント　白鷺小高パート
144		府大セツラー会	1979	9	住吉セツルメント
145		どんぐり	1968	3	北海道大学　どんぐり会
	1	昭和42年度方針作製にあたってのレポート―会員の要求について―	1968		北海道大学　どんぐり会
	2	書記局	1968		北海道大学　どんぐり会
	3	コロン	1968		北海道大学　どんぐり会
	4	A	1968		北海道大学　どんぐり会
	5	夏訪の感想他（感想文集）	1968		北海道大学　どんぐり会
	6	B班活動経過	1968		北海道大学　どんぐり会
	7	C	1968		北海道大学　どんぐり会
	8	婦人会	1968		北海道大学　どんぐり会
	9	子供会	1968		北海道大学　どんぐり会
	10	感想文	1968		北海道大学　どんぐり会
	11	基調報告	1968	3	北海道大学　どんぐり会
	12	個人文章	1968		北海道大学　どんぐり会
	13	編集後記	1969		北海道大学　どんぐり会
146		文集　永久保存版　馬淵時代・東住吉			東住吉セツルメント
	1	もろは　第2号	1963	4	
	2	通天閣	1968	12	馬淵セツルメント
	3	道標　第5号	1963		
	4	アリとキリギリス	不明		住吉セツルメント
	5	総括　学生として　セツラーとして	1972	2	堪六書房
	6	宇宙の夢　馬淵子供会　第1号			
147		阪セツ連　事務局　機関紙　``ごんたくれ``　NO. 2			住吉セツルメント
	1	ごんたくれ　第11号　77’はるのごうⅡ	1977		阪セツ連　事務局
	2	ごんたくれ　’77　5月号	1977	4	阪セツ連　事務局
	3	ごんたくれ　第13号	不明		阪セツ連　事務局
	4	ごんたくれ　14・15合併号	不明		阪セツ連　事務局
	5	ごんたくれ　第16号	1977	10	阪セツ連　事務局
	6	ごんたくれ　17号	1977	12	阪セツ連　事務局
148		阪セツ連17大会レポート			
	1	せせらぎ　阪セツ連17大会に向けて	不明		下寺中高パート　キャッツアイ
	2	なきみそ	不明		阪セツ連17大会　日東セツルメント　地域執行部　パックマン
	3	丸火鉢	1984	12	大阪女子大学　日東セツルメント　下寺老人部
	4	障害児・者部　夕陽ヶ丘セツルメント　実践レポート			夕陽ヶ丘セツルメント
	5	うめまちストリート	1984	12	住吉セツルメント　白鷺小高パート

	6	阪女　GIRLS　－THE　LIFE CATALOG　of 阪女生一　阪セツ連大会　17大会	1984	12	女子大セツラー会
	7	不明	不明		不明
	8	花よりだんご　第17回　阪セツ連大会	1984	12	大谷女子大学
	9	北斗七星　第17回高い正式レポート	不明		阪セツ連　近大セツラー会
	10	さかゑ	1984	12	府大セツルメント
	11	Good - Days	1984	12	千代田セツラー会
149		1975年　セツル	1975		不明
	1	新歓ハイキング感想文から、新歓ハイク総括、各分担の問題点	不明		不明
	2	第8回大阪子どもまつり	不明		府立大学セツルメント
	3	阪セツ連　統一ハイキング	不明		不明
	4	住吉セツルメント部員名簿	不明		住吉セツルメント
	5	住吉セツルメント時代（1966～1975）	不明		住吉セツルメント
	6	東住吉セツルメント時代（1960～1966）	不明		住吉セツルメント
	7	愛染園セツルメント時代（1952～1960）	不明		住吉セツルメント
	8	せつるめんとの偉大なる歩み	1980	5～6	府立大学セツラー会
	9	セツルメント活動の性格と任務	1975	5	
	10	せつるめんと	不明		
	11	ためいき　PART1	不明		
	12	〃　　号外	不明		
	13	〃　　第3号	不明		
	14	Sr.総会	不明		
	15	第1回　New Settler　交流会　レジュメ	不明		
	16	10月7日(火)のSr総会レジュメ	不明		
	17	映画　青春狂詩曲	不明		
	18	地域実践のさらなる発展をめざして	不明		
150		阪セツ連　事務局　機関誌　“ごんたくれ”No.1　住吉セツルメント資料			阪セツ連事務局
	1	No.2　ごんたくれ　大会に向けて	1974	11	阪セツ連事務局
	2	No.3　ごんたくれ　特集！！試験期をどうのりきるか？―試験とセツル―	不明	1	阪セツ連事務局
	3	No.4　ごんたくれ　特集！！第30回全セツ連大会に向けて	不明	2	阪セツ連事務局
	4	No.5　ごんたくれ　’75春号	1975	6	阪セツ連事務局
	5	No.6　ごんたくれ　阪セツ連の団結とピース	1975	不明	阪セツ連事務局
	6	特別号　ごんたくれ　ごくろうさん！阪セツ連常任書記局員	不明	12	阪セツ連事務局
	7	No.7　ごんたくれ　‘76春号	1976	不明	阪セツ連事務局
	8	No.8　ごんたくれ　76’夏号　うて　夏に向かって！	1976	6	阪セツ連事務局
151		ファイル名なし			
	1	くれよん　第11回阪セツ連交流会正式レポート	1980	7	住吉セツル白鷺地域幼児部
	2	第11回大阪府学生セツルメント連合交流会　討論資料	1980	7	大阪府学生セツルメント連合書記局
	3	おっちゃんがんばるでぇ！第11回　交流会に向けて…	不明	7	夕陽丘セツルメント高校生パート
	4	絶対海やで　第11回阪セツ連交流会正式レポート	1980	7	住吉セツルメント　新今宮中高青パート
	5	55年阪セツ連交流会　どっこい	1980	7	夕陽丘セツルメント障害児パート
	6	第11回阪セツ連交流会　復活の日	1980	7	衣摺地域中学高校生パート
152		実践・パート会	1988	6～7	住吉セツルメント　新今宮　児童部　びいばあ

153		ノート名なし	1988	9～11	不明
154		執行部ノート	1989	10～1	住吉セツルメント　Fanta
155		ファイル名なし	1992	4～5	不明
156		全セツ連大会レポ　No.5	1974	3	
	1	第28回全セツ連京都大会課題別分科会Report　今日の都市問題	1974	3	弥次衛セツルメント
	2	手をつなげ！子どもたち	1974	3	夕陽ヶ丘セツルメント　小学生パート
	3	じゃがいもセツル-自主レポート-	1974	3	
	4	国民のための大学づくりをめざして	1974	3	住吉セツルメント
	5	中学生と勉強	1974		ぐみの会　中学生パート
	6	今日の都市問題　長田野工業団地に見る京都民主府政の地域開発	1974	3	京大セツルメント
	7	「私」ひとりでいいんだ　中学生勉強会	1974	3	農村セツルメントどんぐり会A班
	8	どんぐり会C班自主レポート	1974	3	
	9	下三小低	1974	3	日東セツルメント
	10	自主レポート　子ども会活動における一年間の流れ-子ども会の変化とセツラー-	1974	3	ズンガリセツルメント大通パート
	11	雪像づくり〈小学生と遊び〉	1974	3	あらぐさセツルメント　すずらんパート
	12	歩め！自ら学ぶ自らの道を！築け！真実見失わぬ連帯の時代を！　第29回全セツ連北海道大会	1974	8	札幌セツルメント
	13	調査研究発表	1974	8	札幌セツルメント　調査研究部
	14	おおいずみセツル	1974	8	おおいずみセツルメント
	15	5にんと2ひき荒野を行く	1974	8	住吉セツルメント　小学生パート
157		全セツ大会レポNo9			
	1	女性の生き方	1979		大阪女子大学セツラー会
	2	さわらび	1978		
158		第33回全セツ連大会			しらぼん
	1	なかえせつるめんとちゅうがくせいPart	1978		
	2	みかんの皮ぶつけ実践	1978		ズンガリせつるめんと
	3	中学生とともに	1978		境南セツルメント
	4	『としひと』君と未来を語りたい	1978		鴨川セツルメント
	5	PLAY　ROOM	1978		相模セツルメント
	6	冊子	不明		
	7	手記	1978		
159		大学祭　友好祭　パンフレット　パート1			
	1	学生諸君	1974		府大自治会
	2	新入生のみなさんに	1971		府大自治会
	3	新入生のみなさんに	1970		府大自治会
	4	第11回　友好祭	1972		友好祭実行委員会
	5	第13回　友好祭	1974		友好祭実行委員会
	6	第14回　友好祭	1975		友好祭実行委員会
	7	第21回　大学祭	1969		大学祭実行委員会
	8	第22回　大学祭	1970		大学祭実行委員会
	9	第24回　大学祭	1972		大学祭実行委員会

	10	第26回　大学祭	1974		大学祭実行委員会
	11	第27回　大学祭	1975		大学祭実行委員会
	12	第28回　大学祭	1976		大学祭実行委員会
	13	第29回　大学祭　白鷺祭	1977		大学祭実行委員会
160		第11回交流会レポート			
	1	ライオンはどこへいった	1980		住吉セツルメント
	2	明日天気になあれ			住吉セツルメント
	3	雨あがり	1978		住吉セツルメント
	4	ガキッタレ	1978		住吉セツルメント
	5	がきんち	1980		大阪外国語大学
	6	どろんこの天使たち			住吉セツルメント
	7	どんぐりとさくらんぼ	1980		夕陽丘セツルメント
	8	いじけんこ	1980		衣摺セツルメント
161		白鷺小高パート　阪セツ連レポート　うめまちストリート			
	1	UMEMACHI　STREET　PART4	不明		住吉セツルメント
	2	UMEMACHI　STREET	1981		住吉セツルメント
	3	うままちすとりーと　ぱーと2	1981		住吉セツルメント
	4	UMEMACHI　STREET　PART3	1982		住吉セツルメント
	5	梅町ストリート	不明		住吉セツルメント
162		全セツ連大会レポNo8			
	1	クレヨン	1978		住吉セツルメント
	2	幼児部レポート	1978		日東セツルメント
	3	つみき	1978		夕陽丘セツルメント
	4	あなぼこ	1978		衣摺セツルメント
	5	まる火鉢	1978		日東セツルメント
	6	わんべぇ公団	1978		
	7	みんなでどこへ行こうか	1978		市川セツルメント
	8	河岸ブロック　婦人部母子会レポート	1978		井戸田セツルメント
	9	おかあさんありがとう	1978		屋形町セツルメント
	10	第33回全セツ連大会大学セツラー会	1978		仏大セツルメント
	11	全セツ連33大会課題別レポート	1978		屋形町セツルメント
163		住吉セツルメントの資料(分類不可能)	不明		
164		第8回交流会セツルD第10回大会	不明		
165		機関紙「つゆくさ」連合大会資料など	不明		
166		1999年度卒業論文「セツルメント概念の推移」	1999		郷右近歩
167		せつるめんと　全セツ連機関紙	1966-73		全国学生セツルメント連合書記局
168		新今宮地域 80.4～81.3 Kappa	1980-81		住吉セツルメント
169		地域の貧困　貧困プロジェクトチーム	不明		ヤジエセツルメント
170		ドロンコ	不明		住吉セツルメント
171		白鷺小高パート	1980-84		住吉セツルメント
172		愛染園時代のアルバム	1959	11	

173		セツルメントの歴史なのだ	1976	6	住吉セツルメント
174		セツルメントの偉大なる歩み	1975	5	住吉セツルメント
175		阪セツ連書記局会議報告	1978		阪セツ連書記局
176		東住吉セツル活動報告	1962	12	東住吉セツルメント
177		人間らしさを求めて！！	1986		大阪府立大学セツルメント
178		このゆびとーまれ！	1978	7	東淀川セツル小高パート
179		第23回全国学生セツルメント連合大会報告書	1971	8	全国学生セツルメント連合書記局
180		機関紙日東　新春特集―第6号―	1980	2	日東セツルメント
181		機関紙にっとう　7号　総括合宿レジュメ号	1980	2	日東セツルメント
182		花には太陽を　子供には平和を	1963		東住吉セツルメント
183		仁義　マンモスS小高PART	1974?		
184		１－３月の飛躍に向けて　基本方針	1973		全国学生セツルメント連合書記局
185		阪セツ連交流会　実行委員会総括集ぬかるみ	不明		阪セツ連交流会
186		阪セツ連機関紙第5号ぼんこりさん	1970	12	文化部
187		明日をきづく仲間たち　春の総括方針合宿討論資料	1975	3	住吉セツルメント
188		みのむし　特集　新・私にとってのセツルとは…	1973	7	寒川セツルメント事務局
189		北星学園Sr会　学園祭取り組み総括	不明		北星大セツラー会
190		大阪府学生セツルメント連合　第20回大会	1987	12	阪セツ連
191		79住吉夏合宿資料＝住吉UFO会議＝	1979	9	住吉セツルメント
	1	79夏合宿　討論資料	1978		
	2	赤目までとどけ	1978		
192		76　住吉夏合宿	1976	9	住吉セツルメント
	1	確信求めて三千里	不明		
	2	新今宮地域実践	不明		
	3	白鷺　地域実践	不明		
	4	大阪府立大学セツラー会	不明		
	5	大阪女子大学Sr会	不明		
	6	夏合宿　大谷セツラー会討論資料	不明		
193		庄内セツル実践レポート	1976-78		庄内セツルメント
	1	庄内セツル保健部自主レポ	不明		
	2	タイトルなし	不明		
	3	ごんごろ小低Part　第7回阪セツ連大会レポート	1976?		
	4	実践レポートNo3　庄内セツル中学生パート	1978	7	

194		夕陽丘　総括レポート！　第22回大阪府学生セツルメント連合	1989	12	夕陽丘セツルメント
195		針葉樹	不明		
196		第20回夏の交流会パンフレット	1989		
197		住吉セツルメント　新歓パンフ	1988		
198		77　新歓を圧倒的に成功させ全セツ5000人の連帯を！	1977		全セツ連
199		たいよう　幸泉せつるめんと	不明		和泉短期大学
200		阪セツ連！　書記局会議・常任会議	1981		阪セツ連
201		阪セツ連　中Pa　実践レポート	1976		
	1	中学生の生活と要求から学ぶ全セツ連合31回大会	1976		境南セツルメント
	2	るねさんす　NO1 Vol,2	1976		東淀川セツルメント
	3	衣摺セツルメント中学生パート　ー阪セツ連交流会に向けてー	1976		衣摺セツルメント
	4	豆鉄砲	1976?		夕陽ヶ丘セツルメント
	5	日東の一番星ー阪セツ連交流会に向けてー	1976	7	日東セツルメント
	6	日東の一番星　第31回全セツ連大会に向けて	1976	3	日東セツルメント
	7	下寺町三丁目中学生パート実践レポート＜女子部＞	1975	12	日東セツルメント
	8	第8回阪セツ連交流会～うまれかわり中Pa～　ルネサンス　議レポ　第5号	1976	7	東淀川セツルメント
	9	＜生まれ変わり中Pa＞第3号　るねさんす　議レポ"勉強会"	不明		東淀川セツルメント
	10	エントツ　Part キズリ　中1	不明		住吉セツルメント
	11	エントツ　Part キズリ　中1	不明		住吉セツルメント
	12	エントツ　Part キズリ　中1	不明		住吉セツルメント
	13	阪セツ大会　中Pa　レポート	不明		夕陽ヶ丘セツルメント
	14	阪セツ大会　中Pa　レポート	不明		夕陽ヶ丘セツルメント
202		Do you know settlement? Part2			
	1	保存版　セツルメントて何？―セツルの全体像―'79年度住吉ラーニングキャンプ	1979	6	住吉セツルメント
	2	現代学生セツルメント運動の展開　81年度住吉セツルメントラーニングキャンプ	1981	6	住吉セツルメント
	3	現代学生セツルメント運動の展開　82年度住吉セツルメントラーニングキャンプ	1982	5	住吉セツルメント
	4	セツルメントの偉大なる歩み	1978	6	住吉セツルメント
	5	住吉セツルメント　規約			
	6	住吉セツルメント　規約修正案			
	7	住吉全体総会議事進行マニュアル・現代学生セツルメント運動の展開			ルーズリーフ数枚
203		無名ファイル			
204		市大セツラー会　'76.2～	1976	2	市大セツラー会
	1	たんぽぽ	1979	7	日東セツルメント　キリ短セツラー会
	2	市大ニュース　No.5　1975年度最終号	1976	2	市大セツラー会執行部
	3	交流会に向けて　酷思夢想	1981	7	市大セツラー会
205		大原セツルメント　萌える　第二版	1972	11	大原セツルメント
206		京女大自治会結成成る！　京女せつるめんとレポート	1969		

207		ぺんぺん草No.8　ナカタ町せつる　かけっこパート	1969	9	
208		氷川下セツル　久堅班2年パート実践記録	不明		B42枚つづり
209		僻地活動　特別報告―現状と問題点―	1964		熊本学生セツルメント
210		奈良学児童文化部ECHO	不明		
211		川崎セツル青年部　＊＊（解読不明）総括	1971		
212		図書販売目録　27回東京大会	1973		いちのえセツルメント
213		方針合宿まとめ	1975	5	春期方針合宿実行委員
214		せつるめんと　新歓パンフレット	1986	4	
215		（表紙・なし）　総括合宿の資料・フィーリングカップル　府大Sr会総括集	不明		府大Sr会執行部
216		今にみておれ！　住吉セツルメント　新今宮中1パート	1976		
217		どろんこの天使たち	1979	7	住吉セツルメント
218		Sr.会ノート　vol.18	1998-1997		住吉セツルメント
219		Sr.会ノートVol.16	1996-1998		住吉セツルメント
220		Sr.会ノート　vol.15	1995-1996		
221		Sr.会ノート　Vol.17	1998		
222		Part会ノート	1999		
223		Part会ノート　Vol.18	1997		
224		単実の手引き　38京都全セツ連大会に向けて	1982		全国セツルメント連合38京都大会実行委員会
225		第36回全国学生セツルメント連合東京大会	1981		全国学生セツルメント連合東京大会実行委員会？
226		小低sample28	不明		不明
227		子供の遊びについてのアンケート	不明		大阪府立大学セツルメント
228		仲間の詩	1982		大阪府学生セツルメント連合書記局
229		朝の詩　No.95　方針提起　幼児部・中学生部・障害児者部・老人部	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
230		朝の詩　No.94　児童部中学部高青部	1982		大阪府学生セツルメント連合書記局
231		朝の詩　No.92	1982		大阪府学生セツルメント連合書記局

232		朝の詩　No.91	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
233		朝の詩　No.90	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
234		朝の詩　No.89	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
235		朝の詩　No.88 PartⅡ　14大会総括集・講演集	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
236		朝の詩　基調学習のために　No.88	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
237		１４大会総括集	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
238		カラー写真9枚	不明		大阪府立大学セツルメント？
239		安全対策	不明		ずんがりセツルメント4K　レジェンド
240		基調報告　平成6年度後期総括合宿	1994		はらい川セツルメント
241		個人の手紙	1999		
242		PEACE　now! 知性、人間性、その輝きから―青年へのメッセージ	1982		全国大学生活協同組合連合会
243		ごんたくれ　No.40	不明	7	阪セツ連事務局
244		ごんたくれ　第99号	1982	5	阪セツ連事務局
245		思い出雑記実行C用Part10	1979		
246		無名紙袋			
	1	第22回仙台学生セツルメント連合大会討論資料	1982	12	仙台学生セツルメント連合常任委員会
	2	第23回仙台学生セツルメント連合大会討論資料（1）	1983	12	仙台学生セツルメント連合常任委員会
	3	第23回仙台学生セツルメント連合大会討論資料（2）	1983	12	仙台学生セツルメント連合常任委員会
	4	阪セツ連14大会の感想文集	不明		日東セツルメント
	5	第8章セツルメント拡大活動	不明		不明
247		セツルメントの歴史PART2	不明		住吉セツルメント
	1	SUMIYOSHI　白鷺小高パート　第18回交流会正式レポート	不明		住吉セツルメント
	2	紙資料数点（原稿・レジュメ・会議録等）	不明		住吉セツルメント
248		1979年度幼児Part白鷺　府大Sr会資料	1979		府大セツラー会
249		くれよん　第38回全国学生セツルメント連合大会　阪セツ連	1983		住吉セツルメント
250		おもろないッ　第38回全国セツルメント連合大会	1983	3	住吉セツルメント

251		Pa会ノート　Megumi Nakashioya	不明		不明
252		せつるノート　VOL.28	2003	2	大阪府立大学セツルメント
253		第14回阪セツ連交流会討論資料	不明		大阪府学生セツルメント連合
254		八戸の里　1・2班自主レポート　第10回阪セツ連記念交流会	1977		衣摺セツルメント
255		第32回全セツ連大会に向けて　ぶつかりあいの中で	1977		日東セツルメント
256		後期方針合宿レジュメ　方針合宿	不明		不明
257		日東単実キ関紙　大会に向かって走れ！No.2	1975	2	日東セツルメント
258		日東地域の歴史	1978	6	日東セツルメント
259		83年度夏合宿討論資料	1983		住吉セツルメント
260		仲間のうた　学習討論資料　No.1　―大阪府知事選と私たち―	不明		阪セツ連常任委員会
261		第1回阪セツ連　大学代表者会議への報告	1971	1	大阪府学生セツルメント連合書記局
262		夕陽丘セツルメント	不明		夕陽丘セツルメント
263		おまえらほんまに仲間か！PARTⅢ	1978		住吉セツルメント
264		せつるノートvol.26	2002		住吉セツルメント
265		パート会ノート	2004	7	住吉セツルメント
266		せつるノート	2003	9	住吉セツルメント
267		せつるノート　vol.27	2002	9	住吉セツルメント
268		Sr.会ノート　vol.19	1999	7	住吉セツルメント
269		Sr.会ノート　vol.12	1994	10	住吉セツルメント
270		セツルノート　Vol.21	2000	6	住吉セツルメント
271		全セツ連の提起3	1979		
	1	全国代表者会議―討論資料―	1981	12	全国学生セツルメント連合第36期書記局
	2	全セツ連第36回大会分科会第1次案	1981		全国学生セツルメント連合書記局
	3	全セツ連全国代表者会議―討論資料―	1980		全国学生セツルメント連合書記局
	4	全セツ連第35回大会分科会第2次案	1980	2	全国学生セツルメント連合書記局
	5	全セツ連第35回大会分科会第1次案	1980	1	全国学生セツルメント連合書記局
	6	全セツ連全国代表者会議―討論資料―	1979		全国学生セツルメント連合書記局

	7	豊かな秋の収穫をかちとるために	1979	10	全国学生セツルメント連合書記局
	8	語り合おう僕らの感動を　第2次案全セツ連34京都大会てびき	1979	2	全国学生セツルメント連合書記局
	9	語り合おう僕らの感動を！　第1次案全セツ連34京都大会てびき	1979	1	全国学生セツルメント連合書記局
272		府大・大谷合同部会	1974	5	住吉セツルメント
273		全国学生セツルメントの祭典'92	1991	3	中央実行委員会
274		住吉　ドド助's Vol.Ⅲ	不明		
275		住吉せつるめんと　菊池光洋　Vol.Ⅷ	不明		
276		無題ファイル	1990	4	
277		第33回全国学生セツルメント連合大会　討論資料	1978	3	全国学生セツルメント連合書記局
278		住吉セツルメント規約	不明		住吉セツルメント
279		住吉セツル　討論資料　ブルート			住吉セツルメント
	1	確信求めて三千里　住吉セツルメント夏合宿	1976	9	住吉セツルメント
	2	大阪府立大学セツラー会			
	3	息吹を目指して	1975	9	住吉セツルメント
	4	あしたのうた　44号	1976	10	阪セツ連書記局
280		新今宮児童部　87年度実践記録	1987		住吉セツルメント
281		無名ファイル（白鷺・新今宮地域など）	1983		住吉セツルメント
282		新歓パンフPART Ⅰ			
	1	知ってほしいの！セツルメント	1975		住吉セツルメント
	2	せつるめんと	1967	4	住吉セツルメント
	3	セツルメント―セツルメントを知っていただくための手引き―	1978	4	住吉セツルメント
	4	青空に向かってとびだそう！！―セツルの輪の中で―	1977		住吉セツルメント
283		せつるのおと（阪セツ連）　すみよし　どど	不明		
284		雪ん子　第1号・第2号・第5号	不明		阪セツ連第19回大会実行委員会
285		新今宮　幼パ（レポート用紙）	不明		住吉セツルメント
286		無名ファイル（全セツ連第38回京都大会のステッカーが貼っている）	1983		住吉セツルメント
287		第20回　夏の交流会　パンフレット	1990代		
288		無名ファイル（B5・緑）	不明		住吉セツルメント
289		第32回全セツ連大会	1977		32中実　生活局
290		反全セツ連 諸派の見解を追って 資料 大道へ アラシ卒論 他			
	1	大阪府学生セツルメント連合大会　第1回	1968	12	阪セツ連

	2	地域の形成	不明		
	3	第9回　関西セツルメント連合大会　討議資料	1967	5	関西セツルメント連合書記局
	4	第8回　関セツ連大会　討議資料	1966	12	
	5	無題ファイル	不明		
	6	全学連の歴史　崩壊～再建	不明		全学連　統一派
	7	セツルメント運動の正しい発展のために！！	不明		馬渕セツルメント
	8	阪セツ　アッピール	1968	12	第1回大阪府学生セツルメント連合大会
	9	無題ファイル	不明	9	運営委員会
	10	子供の要求とセツラの役割	不明		
	11	自主性とは、	不明		
	12	当面する情勢と大阪のセツルメント活動について	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
	13	馬渕セツルメント　列島	1969	3	馬渕セツルメント
	14	無題ファイル	不明		
	15	大阪学生セツルメント連合、京都学生セツルメント連合発足にあたって	1968	2	関西セツルメント連合委員会
	16	連合委員会	不明	6	連合委員会
	17	≪資料≫　６．１５　安保記念全国統一行動	不明	6	
	18	住民運動の現状と課題	不明		
	19	無題資料	不明		馬渕セツルメント？
	20	無題資料	不明		
	21	サークルの在り方と文化創造	不明		
	22	日東校下組織活動推進委員会について	不明		
	23	子供会診	不明		
	24	雑資料	1968-1969		
291		猪飼野児童部（小低・小高）レポート―1978年交流会に向けて―	1978	7	猪飼セツルメント
292		日東小低・ふれんど―阪セツ連交流会にむけて―198年、No.2	1982	7	日東セツルメント
293		大阪府学生セツルメント連合日東セツル〇秘情報―３８大会に向けて―	1983	3	日東セツルメント単実曲
294		住吉セツルメントのみなさんへ　from UFO	不明		
295		The　UFO　120%　中央執行部機関紙、No,2	1983	6	UFO
296		第30回東京大会関連資料			
297		うめまちストリートPART7　白鷺小高パート	1984	7	住吉セツルメント
298		はばたけ輝く夏に向かって　全セツ連夏への提起	1982	5	全国学生セツルメント連合書記局
299		北斗七星　第17回阪セツ連大会正式レポート　近大セツラー会	1983		近大セツラー会
300		基調報告　はらい川セツルメント 昭和60年度後期方針大会	1985	10	はらい川セツルメント
301		なにすんの！第15回交流会　新今宮中高青年パート正式レポー	1984		住吉セツルメント
302		セツル維新軍団　阪セツ連１５交流会一正式レポート	1984		衣摺セツルメント
303		第15回交流会正式レポート　花よりだんご	1984		住吉セツルメント

304		第15回阪セツ連交流会に向けての正式レポート　花には太陽を、子どもらには…	1984	7	日東セツルメント
305		王さんだぁーれ！　第39回全国学生セツルメント連合大会	1984		住吉セツルメント
306		第6回　大阪学生セツルメント連合大会基調報告	1974		大阪府学生セツルメント連合
307		81年度友好祭にむけて	1981		住吉セツルメント
308		新今宮地域実践	不明		
309		はらい川セツルメント機関紙及び礎第1号、案内状	1985		はらい川セツルメント
310		単St　SHOKAI　北海道より愛のMessage	不明		
311		その他バラ資料	不明		各セツルメント
312		懺悔　夕陽丘小低パート（つみき班）	1980		阪セツ連事務局
313		ごんたくれ第二八号	1980		阪セツ連事務局
314		ごんたくれ第三一号	1980		阪セツ連事務局
315		ごんたくれ第三三号	1981		阪セツ連事務局
316		その他バラ資料	不明		各セツルメント
317		ごんたくれ第三七号～阪セツ連１４大会を終えて	1982		阪セツ連事務局
318		ごんたくれ第三六号	1981		阪セツ連事務局
319		ゴンタクレ	不明		阪セツ連事務局
320		もうあかん	1981		住吉セツル新今宮中高青Pa
321		一期一会	不明		夕陽丘セツルメント中学生Pa
322		猪飼野中高パ　レポート―阪セツ連大会正式レポート―	1980		阪セツ連事務局
323		なかよしこよしNo3	1982		日東セツルメント
324		バラ資料	不明		
325		住吉セツルの歴史	1974		住吉セツルメント
326		子供会新聞の総括	不明		不明
327		局総括（やぐら局）	不明		氷川下セツルメント
328		第４回阪セツ連大会―基調報告―（案）	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
329		小高Part1年間のまとめ（草案）	不明		住吉セツルメント
330		五月一二日学区集会合宿に向けて！執行委員会	不明		

331		幼児パート	不明		不明
332		76新歓の成功のために	不明		全国学生セツルメント連合書記局
333		かわさき	1969		
334		うぶごえ＝夏合宿に向けて＝	1971	7	大阪、住吉セツルメント
335		バラ資料	不明		
336		合宿報告（保存用）	不明		
337		阪セツ連代表者会議に向けて	不明	10	第28回全セツ連京都大会中央実行委員会／京都実行委員会
338		がんばってまっせ！住吉セツルメント中学生パート機関紙	1975		住吉セツルメント
339		勉強会全体総括	不明		不明
340		子供まつり実行C報告	不明		住吉セツルメント
341		いしっころ　全セツ連加盟趣意書	1973	8	京都40番地セツル
342		せせらぎ　大阪セツルメント連合大会	1982		日東セツルメント
343		あおぞらパート勉強会自主Report	不明		あらぐさセツルメント
344		せつるめんと　全セツ連中央機関紙	1974		全国学生セツルメント連合書記局
345		72年度後期全セツ連財政報告	1973		全セツ連事務局
346		公害問題学習会学習資料	不明		不明
347		表題なし	不明		川崎セツルメント
348		北星学園Sr会　学園祭取り組み総括	不明		北星大セツラー会
349		1975年度夏合宿に向けて	1975		不明
350		夏合宿レポート　幼児パート幼児班	不明		不明
351		76新歓運動・勉強会全体総括・学生セツルメント運動の基本的性格	不明		住吉セツルメント
352		全セツ新聞vol.1	2003		全セツ連事務局
353		ずんがりセツルメント等個人メモ	不明		不明
354		76新歓	1976		住吉セツルメント
355		セツルメント活動	不明		端家Q理
356		77N歓	1977		住吉セツルメント

357		無題（CAMPUSノート）	不明		住吉セツルメント　ヒヨコ
358		第13回　大阪府学生セツルメント連合大会討論資料	1980		大阪府学生セツルメント連合書記局
359		第38回全国学生セツルメント連合大会　基調報告（案）	1983		全国学生セツルメント連合
360		第10回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料	1977		大阪府学生セツルメント連合書記局
361		第15回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料	1982		大阪府学生セツルメント連合書記局
362		第17回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料	1984		大阪府学生セツルメント連合書記局
363		第24回仙台学生セツルメント連合大会討論資料	1984		仙台学生セツルメント連合常任委員会
364		第16回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料	1983		大阪府学生セツルメント連合書記局
365		第18回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料	1985		大阪府学生セツルメント連合書記局
366		セツルノート（Asao Yaida)Mitte	不明		住吉セツルメント
367		阪セツ連交流会実行委員会総括　ぬかるみ	不明		
368		第15回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料	1982		大阪府学生セツルメント連合書記局
369		ばふんかぜ 全セツ連第29回北海道大会機関紙・覇気　第30回全セツ連大会中央実行委員会5役機関紙創刊号　その他	不明		全セツ連事務局
370		無題（THIS IS NOTE）	不明		住吉セツルメント
371		セツルのノート'90.6.8～　HSR住吉St.Fanta	1990		住吉セツルメントFanta
372		JNK'90.3.6～'90..4.2　HSRすみよし　はんせつれんいいんちょーFanta	1990		住吉セツルメントFanta
373		S局Note　'89.6.5～'89.10.16	1989		阪セツ連書記局
374		実践・パート会ノート　住吉新今宮児童部Fanta	1988		住吉セツルメント
375		90.6.17-7.29 Fanta(Campusノート）	1990		住吉セツルメント
376		第8回　大阪府学生セツルメント連合大会　討論資料	1976 ?		大阪府学生セツルメント連合書記局
377		第6回　大阪府学生セツルメント連合大会　基調報告	1974	1	大阪府学生セツルメント連合書記局

378		第7回　大阪府学生セツルメント連合大会　基調報告	1975 ?		大阪府学生セツルメント連合書記局
379		89.2.15～'89.3.25（Campusノート）	1989		住吉セツルメント
380		住吉実践レポート'77			
	1	雨あがりPartⅢ　新今宮ひまわりパート	1977		住吉セツルメント
	2	おまえらほんまに仲間か！'77　第8回阪セツ交流会	1977		住吉セツルメント
	3	どろんこの天使たち　'77　第8回阪セツ連交流会	1977		住吉セツルメント
	4	トンネルをぬけるとそこは…	1977		住吉セツルメント
	5	おまえらほんまに仲間か！PARTⅡ第10回阪セツ大会レポート	1977		住吉セツルメント
	6	あした天気になあれ　第8回阪セツ連交流会正式レポート	1977		住吉セツルメント
381		つぼみ　日五中学パート女子ーラーニングキャンプに向けてー	不明		不明
382		阪セツ連交流会に向けて　うねり　その2	1979		衣摺セツルメント
383		Pa会ノート（SCHOLARノート）	1994/1995		
384		無題（MR.DAYDREAMのノート）	不明		
385		大阪府学生セツルメント連合第19回大会	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
386		住吉セツルメント　阪セツ連書記局会議・住吉セツルメント執行部会・住吉セツルメント　大阪府立大学・大学Sr会	不明		住吉セツルメント
387		Part会note2001.10.9～2002.3.23	2001/2002		住吉セツルメント
388		まじめなノート　1996.11.28～1997.11	1996		住吉セツルメント
389		フィーリングカップル4:24　府大Sr会総括集	不明		府大Sr会執行部
390		がんばってまっせ？　住吉セツルメント　中学生パート　機関紙ー創刊号ー9月期実践総括集	1975		住吉セツルメント
391		少年少女を育てるために　No.129, 1975年11月	1975		少年少女組織を育てる全国センター
392		少年少女を育てるために　No., 1977年6月	1977		少年少女組織を育てる全国センター
393		子どものしあわせ　第193号　1972年5月	1972		草土文化
394		国民教育　第30号　1976年秋季号	1976		労働旬報社
395		文化評論　No.135 1972年10月	1972		日本共産党中央委員会
396		前衛　1970年12月号	1970		日本共産党中央委員会
397		前衛　1972年110月号	1972		日本共産党中央委員会
398		当面する大学問題	1969		日本共産党中央委員会出版局
399		続・当面する大学問題	1969		日本共産党中央委員会出版局

400		1995年度年間総括	1996		住吉セツルメント
401		語りあおう明日の学問を　第12回12月集会報告集	1976		第12回全国学生学術文化集会実行委員会
402		IVYNOTE（ノート）	1974		住吉セツルメント、幼児パート、ジャンパチ（〇〇）
403		子どもと教育　1979年12月号	1979		あゆみ出版
404		月刊　考える高校生　1982年6月号	1982		高校生文化研究会
405		大学自治と学生生活を守る全国学生ゼミナール第九回大学ゼミ報告集	1976		同実行委員会
406		学問、友情、そして生きがい　第13回12月集会報告書	1977		全国学生学術文化集会実行委員
407		猪飼野セツル実践レポート'71	1971		猪飼野セツルメント
	1	地域教育＜児童部活動＞	不明		猪飼野セツルメント
	2	第4回阪セツ連大会　実践と総括　どんぐり班幼児パート	1971		猪飼野セツルメント
	3	イカイノ　児童部レポート	1971		猪飼野セツルメント
	4	いもてる　実践レポートで～す	1972		猪飼野セツルメント
	5	ヤタデ どんぐり班児童部実践レポート ⑦阪セツ連大会に向けて	1974		猪飼野セツルメント
	6	シャベル班実践レポート　阪セツ連交流会用　ちゃりんこ	1975		猪飼野セツルメント
	7	猪飼野児童部（小低小高）レポート	1978		猪飼野セツルメント
	8	第9回阪セツ連交流会にむけて	1978		猪飼野セツルメント
	9	かざぐるま　第１１回阪セツ連大会にむけて	1978		猪飼野セツルメント
408		猪飼野セツル実践レポート			
	1	いもてる班Rport！	1971		
	2	イモテル児童部	不明		
	3	猪飼野セツルメント夏の実践	不明		
	4	猪飼野セツルメント中Paレポート　第４回阪セツ連交流会にむけ	不明		
	5	阪セツ連交流会　分野別討論資料　かざぐるま　猪飼野中パ	不明		
	6	どんぐり　イカイノセツル　幼Pa	不明		
	7	レポート　大教大障害児問題を考える会　どろんこ	不明		
	8	第１部　何故学生が地域に入るのか。地域の人の立場に立つ人間とは？	不明		猪飼野セツルメントキッド
409		セツル会ノート	1988		住吉セツルメント
410		展示説明　レデュメ、第３０回大学祭意義・課題・方針、アンケート等	不明		バラ資料その他
411		７７総括合宿（延命寺）	1978		住吉セツルメント
	1	雨あがり　PartⅢ	不明		新今宮ひまわりパート
	2	その他	不明		
412		課題別レポート　ブルート			
	1	75　全セツ連３０大会大学分科会レポート　みんしゅてき大学づくりめざして	1975		大阪府立大学セツラー会
	2	１９７３年６月３０日～７月１日かわち交流会　現代の貧困問題	1973		日東セツルメント市大セツラー会

	3	学術文化運動の系統的発展に向けて　京セツ連大学Cap会議	不明		
	4	学術文化運動の系統的発展に向けて　京大セツルメント（底辺研）	不明		
	5	第30回全セツ連大会にむけて　地域実践とSr会活動とのかかわり	1975		大阪市大セツラー会
	6	国民のための大学づくりめざして	1974		住吉セツルメント
	7	第6回阪セツ連大会　地域子供会論	1975		住吉セツルメント
	8	第6回阪セツ連大会　地域運動論分科会レポート　日東セツルメントに於る地域運動の経験と教訓	1975		日東セツルメント
	9	阪セツ連交流会に向けて　[幼児教育についてのあり方]	1973		日東セツルメント
	10	第28回全セツ連京都大会　課題別分科会Report　今日の都市問題	1974		弥次衛セツルメント
	11	今日の都市問題　長田野工業団地に見る京都民主府政の地域開発　28大会課題別レポート	1974		京大セツルメント
	12	あたらしい小平はみんなのものだ　28会大会	1974		津田塾セツラー会部室内　小平セツルメント
	13	阪セツ連交流会に向けて　地域教育運動　民主団体との提携　衣摺	不明		衣摺セツルメント
413		1983年度～とびうお	1983-1984		
414		1982.4～83.3　とびうおパート	1982-1983		
415		冬の集中実践　総括集 ぼくらいまここに ズンガリセツルメント	1975		ズンガリセツルメント
416		第15回阪セツ連交流会正式レポート　白鷺小低パート	不明		住吉セツルメント
417		1981　12月22・23日　全国代表者会議―討論資料―	1981		全国学生セツルメント連合　第36期書記局
418		▼中学生の実態と教育上の課題	1983		京都市立烏丸中学校〇〇
419		実践記録　白鷺3・4Pa1976.4～1977.2　1・2Pa1977.4～1978.2　3・4Pa 1978.4～1979.2	1976-79		住吉セツルメント
420		Sr会レポート　他連・単セツ編			
	1	第14回交流会正式レポート　東大阪短期大学セツラー会	1983		東短セツラー会
	2	北斗七星　近大セツラー会交流会レポート	1984		近大セツラー会
	3	きずりのすべての子どもたちと共に　阪セツ連16大会　衣摺小学生パート自習レポート	1983		衣摺セツルメント
	4	みをつくしだぁむ。　16大会に向けて	1983		大阪市立大学セツラー会
	5	1983．12．10　衣摺セツルメント	1983		東短Sr会
	6	7月の空に’82　交流会へ向けて	1982		市大セツラー会
	7	阪セツ連交流会に向けて	1981		日東セツル　市看Sr会
	8	お菓子に手が出た足が出た！	不明		京都女子大学セツルメント
	9	交流会に向けて　酷思夢想	1981		市大Sr会
	10	北斗七星　第17回阪セツ連大会正式レポート	不明		近大セツラー会
421		全セツ連障パレポート　1980年度夏季活動報告番町セツルメント　保健班Ⅲ　障害者パートの活動	1980		
422		全セツ連　京都大会　正式レポート　がきったれ	1983		住吉セツルメント
423		小さな手と手　屋形町セツルメント・民主小学生パート(児童部)　京	1983		屋形町セツルメント

424		サークル内の学習活動をどう進めるか	1965		東住吉セツルメント
425		けんぽうのてびき	不明		
426		この子らの未来を考える　セツルメント	不明		住吉セツルメント
427		お山の大将　第4号　大谷大学第12回大学祭	1977		大谷セツラー会
428		このゆびとーまれ！	1977		公衛セツラー会
429		読売新聞事件　資料	不明		不明
430		課題別分科会レポート　国民のための大学づくりめざして	1974		住吉セツルメント
431		平和のために	不明		不明
432		てんぽぽの仲間たち	不明		不明
433		子どもたちをとりまく情勢	不明		不明
434		都市問題	不明		住吉セツルメント
435		タイトルなし	不明		青山セツルメント
436		子供をとりまく社会環境	不明		不明
437		1．地域の現状	不明		不明
438		A.国民教育運動	不明		全セツ連？
439		教養審による「教員養成のための教育課程基準案」に関する意見書	1964		教育学教室（和歌山大学）
440		和歌山県高校全入運動の経過と運動から得た教訓	不明		和歌山県教職員組合
441		教員養成のための教育課程の基準について	1966		和大学芸学部自治会書記局
442		タイトルなし	不明		不明
443		理論学習シリーズNo2　新大管法　大学運営と学生の自治他	不明		阪セツ連常任出版局
444		風の子　第7回阪セツ連大会正式レポート	1974		住吉セツルメント
445		第5回阪セツ連大会に向けて　サークルと学生運動	1972	11	住吉セツルメント
446		新入生歓迎ハイキング	1988	4	大阪府学生セツルメント連合
		阪セツ連第21回大会パンフレット	不明		
		セツルメント新入生歓迎ハイク	不明		
447		セツルは愛だ(色紙)	不明		
448		阪セツ連第22回冬の大会	1989		
	1	第22回冬の大会	1989		府大印刷室
	2	夕陽丘総括レポート	1989		大阪府学生セツルメント連合

449		事務局（住吉）	1976		府大しらぼん
	1	実践記録帳新今宮中Pa　しらぼんです	1977		府大しらぼん
450		セツラー会DDK　Fanta	不明		府大Fanta
451		謹賀新年	1979		不明
452		第17回全セツ連大会報告集	1968		住吉セツルメント
453		参考資料＝総括について＝「何故、総括を問題とするか」	1969		住吉セツルメント
454		第5回阪セツ連大会に向けて　サークルと学生運動	1972		住吉セツルメント
455		太陽の賛歌	1972	5	住吉セツルメント
456		シナリオ　青春狂詩曲	1975		不明
457		全セツ連ニュース	1970		桃園セツルメント
458		阪セツ連＆全セツ連の資料	1989等		こぶしセツルメント等
459		日東セツル　下三小低　全セツ連32大会	1977		日東セツルメント
460		王さんだぁ～れ！！第38回全国学生セツルメント連合大会	1983		住吉セツルメント
461		衣摺りGキロク・Paキロク	1984		
462		1976年ラーニングキャンプ資料	1976		住吉セツルメント
463		すみよしセツルの資料	1989等		住吉セツルメント
464		すみよしセツル夏合宿	1977		住吉セツルメント
465		全セツ連38京都大会のきろく　討論のノートなど			
	1	タイトルなし（計算用紙）　第38回全国学生セツルメント大会　第1回定期連合委員会	1983		
	2	第38回　全セツ連大会	1983		全セツ連第38回大会中央実行委員会
	3	メモ、資料等	不明		
466		全セツ連大会レポート　No2			
	1	イカイノ　児童部レポート	1971		
	2	坂下セツルメント　幼児部レポート	1970		
	3	おちめじる	1970		住吉セツルメント
	4	文化創造活動レポート　第23回全セツ連大会	1971		まちっこセツルメント
	5	文化創造活動　第24回全セツ連大会にむけて	1972		島田一ツ山セツルメント
	6	風の子幼Pa　総括集	1972		寒川セツルメント
	7	父母の教育要求に基づいた児童部活動	不明		島田一ツ山セツルメント
	8	第24回　全セツ連名古屋大会レポート　集団づくりの課題と要求のとらえ方	1972		井戸田セツルメント
	9	全セツ連に向けて　第2回名古屋大会　ヤジエ	1972		ヤジエセツルメント
	10	愛生町幼児パート　総括	1972		
	11	第24回　全セツ連大会分科会　小パーレポート　集団づくりの課題	1972		寒川セツルメント母子寮班小学生パート
467		阪セツ連			

	1	大阪府学生セツルメント連合規約	1971	11	阪セツ連書記局
	2	第1回阪セツ連大学代表者会ギへの報告	1971	11	阪セツ連書記局
	3	統一のための前進を！	1970	11	阪セツ連
	4	全セツ大会成功に向けて大阪のセツラーは先頭に立とう！・メッセージ	1970	11	阪セツ連
	5	大会決議	1970	11	阪セツ連
	6	関セツ連のためのレポート	1964	6	兄弟会
	7	東住吉セツルメント	不明		東住吉セツルメント
	8	関セツ連ニュース	1964		
	9	関セツ交流集会に向けて	不明		寒川セツルメント
	10	機関紙　関セツ	1963		関セツ連書記局
	11	タイトルなし	1972	12	スポーツ研究会健康観パート
	12	12月集会の資料　学生セツルメントにおける大学民主化とは何か？	不明		阪セツ連書記局
	13	当面する情勢と大阪のセツルメント活動について	1969		阪セツ連書記局
	14	新歓実行C会ニュース	不明		阪セツ連
	15	書記局活動報告・方針案・行動要綱	不明		阪セツ連書記局
	16	阪学文幹事団体会議への報告など	1972	9	阪学文実C事務局
	17	9.10　書記局会議報告	不明		
	18	第3回大阪府学生セツルメント連合大会	1970	11	第3回阪セツ連大会実行委員会
	19	第3回阪セツ連大会総括集	1970		阪セツ連
	20	第2回阪セツ連大会歌集	1969	11	
468		タイトルなし			
	1	阪セツ連交流会　1970.6.14	1970	11	第3回阪セツ連実行委員会
	2	第3回大阪府学生セツルメント連合大会	1970	11	第3回阪セツ連実行委員会
	3	阪セツ連第3回かわち交流会　6月24、25日	1972	6	第3回阪セツ連実行委員会
	4	阪セツ連交流会に向けて　部落問題・社会福祉等	1972		住吉セツルメント
	5	第3回阪セツ連大会総括集	1970		阪セツ連
	6	第3回阪セツ連大会　家庭訪問と父母の会	1970	11	日東セツルメント
	7	第1回阪セツ連大学代表者会ギへの報告	1971	11	阪セツ連書記局
	8	大阪府学生セツルメント連合規約	1971	11	
469		第9回阪セツ連交流会	1978		
	1	ひとつぶのたね　'78阪セツ連交流会レポート	1978	7	公衛セツラー会
	2	公衛Sr会新歓第1弾ビラ・第2弾ビラ	不明		公衛セツラー会
	3	微笑返し　近大Sr会交流会正式レポート	1978		近大Sr会
	4	ガキッタレ　第9回交流会正式レポート	1978		住吉セツルメント
	5	こちら5・6Pa応答ねがいます　　第9回阪セツ連交流会正式レポート	1978		住吉セツルメント
470		だい9かい交流会			
	1	第9回阪セツ連交流会　大学別分科会正式レポート	1978	7	大阪府立大学セツラー会
	2	クレヨン　PARTⅢ　第9回交流会に向けて	1978		住吉セツルメント
	3	おまえらほんまに仲間か！PARTⅢ	1978	7	住吉セツルメント
	4	こちら5・6Pa応答ねがいます　　第9回阪セツ連交流会正式レポート	1978	7	住吉セツルメント
	5	白さぎ3・4Pa音楽隊	1978	7	
	6	ガキッタレ　第9回交流会正式レポート	1978		住吉セツルメント
	7	雨あがり　パート5	1978	7	住吉セツルメント
471		さなえちゃん	1979	7	近畿大学セツラー会
472		ふりかえりレポート	1977		不明(老人パート)

473		丸ひばち—79年度阪セツ連交流会に向けて—	1979	7	日東セツルメント
474		セツルメント　第27回大学祭	不明		住吉セツルメント・大阪府立大学セツラー会
475		うめまちストリート	1984		住吉セツルメント
476		阪代K討論資料　朝の詩No108	1984		大阪府学生セツルメント連合連合書記局
477		朝の詩　分野総括視点集　No109	1984		大阪府学生セツルメント連合連合書記局
478		阪代K討論資料　—阪セツ連代表者会議—	1983		大阪府学生セツルメント連合連合書記局
479		なかまのうた　10.21全国統一行動にむけて	不明		大阪府学生セツルメント連合常任委員会
480		人間らしさを求めて！！	不明		大阪府立大学セツルメント
481		全国代表者会議—討論資料—	1981		全国学生セツルメント連合第36期書記局
482		阪セツ連代表者会議　9.14　書記局常任C報告	不明		大阪府学生セツルメント連合常任C
483		No. 96　朝の詩	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
484		朝の詩　No. 95(PARTⅡ)	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
485		第13回阪セツ連交流会講演集	1982		大阪府学生セツルメント連合書記局
486		朝の詩　No. 97—第13回阪セツ連交流会に向けて—	1980?		大阪府学生セツルメント連合書記局
487		無題	不明		不明
488		80学園祭パンフ　確かな現実にこそ確かに築く君の人生が	1980		府大Sr会
489		総括合宿討論資料	1983	3	住吉セツルメント
490		新今宮　中高青　1984.4～	1984	4	住吉セツルメント
491		実践記録　ボブ	1992−94	10	住吉セツルメント・ボブ
492		大阪セツルメント連合第15回大会に向けて	1982	12	日東セツルメント高校青年パート
493		白鷺幼パ	不明		住吉セツルメント

494		東淀川セツル			
	1	ハノ里パート実践レポート　阪セツ連第7回交流会に向けて	1976		
	2	第23回北海道全セツ連大会に向けて　責任を取ることの価値は？　けつまずいてもころんでも　氷川下中1Partのある実践	1971		氷川下セツルメント
	3	全セツ連第21回大会レポート　ストラッタル	1970		寒川セツルメント
	4	プラスα　無限の可能性を追求する下三中1パート	不明		日東セツルメント
	5	はらのむし　No5　日五中学生Pa	1973		東淀川セツルメント
	6	ルネサンス　27回全セツ討論特別号	1973		東淀川セツルメント
	7	るねさんすNo1　Vo，2	不明		東淀川セツルメント
	8	るねさんすNo1	1972		東淀川セツルメント
	9	実践集　京都　高瀬川セツルメント中学生パート	不明		高瀬川セツルメント
	10	実践レポート　坂下セツルメント中二P	不明		坂下セツルメント
	11	中学生Part「エプロンで話そう会」報告	不明		坂下セツルメント
	12	ルネサンス　17会全セツ討論特別号	1973		東淀川セツルメント
	13	ルネッサンス	1974		東淀川セツルメント
	14	各駅停車　15号臨時増刊号　特集・夏合宿のすべて	1974		東淀事務局
	15	各駅停車第11号	1974		東淀川セツルメント事務局
495		第12回交流会　分野レポート　幼児中高青年部			
	1	かくれんぼ　～第12回阪セツ連交流会にむけて～	1981		下寺セツルメント
	2	けなりー　第12回阪セツ連交流会	1981		衣摺セツルメント
496		府大Sr会etc…	1981		府大Sr会
497		府大map	1981		大阪府立大学セツルメント
498		無題	不明		住吉セツルメント
499		幼児パート　白鷺　府大Sr会資料	不明		住吉セツルメント
500		1978年度　5・6年パート　白鷺　府大Sr会資料	不明		住吉セツルメント
501		実践パート会ノート　No2	不明		住吉セツルメント
502		太陽の仲間たち　われらが小低P	不明		住吉セツルメント
503		人形劇のシナリオ	不明		住吉セツルメント
504		新今宮地域	不明		住吉セツルメント
505		全国学生セツルメント連合第30回東京大会～足もとから未来を～	1975		一之江セツルメント
506		みやぎの幼Part総括	不明		宮城野セツルメント
507		幼児の文化創造活動（正式レポート）	不明		島田1ツ山セツルメントひまわりパート
508		第6回大阪学生セツルメント連合大会　基調報告	1975		阪セツ連書記局
509		住吉実践レポート’80	1980		住吉セツルメント
	1	どろんこの天使たち第3回	1980	3	住吉セツルメント
	2	どろんこの天使たち第5号	1980	12	住吉セツルメント
	3	第11回阪セツ連交流会正式レポート『ぼくは正義の味方だ』	1980	7	住吉セツルメント
	4	第13回阪セツ連大会正式レポート　ちびエミあそぼ～よ！！	1980	12	住吉セツルメント
	5	白さぎ小低集団	1979	7	住吉セツルメント

510		衣摺セツル			衣摺セツルメント
	1	なつ合宿	1987?	8	衣摺セツルメント
	2	阪セツ連交流会に向けて　地域教育運動=民主団体との提携=	不明		衣摺セツルメント
	3	討論資料　第6回衣摺セツルメント春合宿　Sr nameローガン	1976	4	衣摺セツルメント
	4	きずり統一団結合宿	1976	10	衣摺セツルメント
	5	第1回衣摺総会　スケジュール	1976		衣摺セツルメント
	6	総括合宿	1977	3	衣摺セツルメント
511		事務局（阪St連）　すみよしのしらぼん	不明		住吉セツルメント
512		第6・7大会基調　持出禁止			住吉セツルメント
	1	第7回大阪府学生セツルメント連合大会基調報告	1974		阪セツ連書記局
	2	第6回大阪学生セツルメント連合大会基調報告	1973		阪セツ連書記局
513		セツルノート	1999	12	住吉セツルメント
514		第9回阪セツ連交流会No2			住吉セツルメント
	1	微笑返し　近大Sr会交流会正式レポート	1978		近大Sr会
	2	雨あがり　パート5　交流会正式レポート	1978	7	住吉セツルメント
	3	ひとつぶのたね　'78阪セツ連交流会レポート　公衛セツラー会	1978	7	公衛セツラー会
515		白サギ地域（背表紙）　試1（表紙）	不明		住吉セツルメント
516		第9回阪セツ連交流会　分野別全体会：分科会児童部	1978		住吉セツルメント
517		せつるめんと　第24回大学祭文化祭	1974	11	猪飼野セツルメント
518		ハーイ！！赤目でがんばりマース　'77年度住吉セツル夏合宿	1977	8	住吉セツルメント
519		1973September　後期方針合宿	1973	9	猪飼野セツルメント
520		下三5・6年パート＝クリスマス会における実践レポート＝丘にあがった海ぞくたち	1973	2	日東セツルメント
521		でんごんばん3号	1978	7	夕陽丘セツルメント
522		夏合宿	1977	8	衣摺セツルメント常任委員会
523		関短Sr会合宿総括集			
524		無題	1988他		住吉セツルメント
525		新歓パンフPART2			
	1	セツルメントーセツルメントを知っていただくための手引きー	1980	4	住吉セツルメント
	2	セツルの手～この指と～～まれ～	1981	4	住吉セツルメント
	3	せつるめんと　新歓パンフレット	1986	4	住吉セツルメント
	4	地図			
	5	Do you know.（どうゆの）Settlement?PartⅡ	1977		住吉セツルメント
	6	新入生歓迎ハイク	1987	4	大阪府学生セツルメント連合
	7	セツルメント　新しい仲間と共に　さがしに行こうこの仲間と　若い僕らの進む道を	1979	4	住吉セツルメント新歓対策部
	8	野鳥との出会いのために	不明		大阪府立大学野鳥の会
526		第2回第3回阪セツ連交流会レポート	不明		

	1	私たちをめぐる情勢ー学園民主化のために一他	不明		不明
	2	社会福祉　　阪セツ連交流会	1972	6	不明
	3	婦人問題[現代の婦人(女性)はどういう立場におかれているのか？]	1972		住吉セツルメント
	4	第3回阪セツ連大会実行委員会総括集	1970	12	第3回阪セツ連大会実行委員会
	5	タイトルなし(土地・住宅問題)	不明		不明
	6	第2回部落問題論　阪セツ連交流会	1971	6	不明
	7	第2号おちめじる	不明		住吉セツルメント
	8	たいがー　No.1　下3　3・4ねん	1971	5	日東セツルメント
	9	幼児パート　阪セツ連交流会	1971	6	夕陽丘セツルメント
	10	幼児パート実践レポート　第3回阪セツ連かわち交流会にむけて	不明		東淀川セツルメント
	11	住吉セツル小低パート　阪セツ連交流会分野別分科会	1972	6	住吉セツルメント
	12	阪セツ連交流会にむけて。 Yuhi　小3・4パート実践記録	1972	6	夕陽丘セツルメント
	13	阪セツ連第3回かわち交流会　6月24日～25日	1972	6	阪セツ連実行委員会
	14	中学生パート　基調報告(案)　中Pa－Cap会談	1972	6	不明
	15	青年部基調	不明		不明
	16	経済”現代における貧困化とは”ーなぜセツラーは経済学を学ぶかー	不明		不明
	17	その他資料(集団主義、教育、児童文化について等)	不明		不明
	18	社会福祉　　阪セツ連交流会	1972	6	不明
	19	阪セツ連交流会に向けて　部落問題	不明		住吉セツルメント
527		無題(各セツラーの紹介文)	不明		住吉セツルメント
528		みのむし　浩ちゃん立ちションはやめようね！もうピカピカの一年生になるもんね！	不明		市川セツルメント
529		追廻の父母コン　ーSrの意識と地域住民の意識をどのように一致させていくかー	1982	3	追廻セツルメント
530		第37回全国学生セツルメント連合大会　課題別レポート　地域に育くまれる私たちの未来	1981		井戸田セツルメント
531		あゆみちゃんどこや　全セツ連37大会用レポート	1982	3	マンモスセツルメント
532		37大会　仙台保健部セツルメント　松原幼児パート	1982	3	仙台保健部セツルメント
533		なぁ本よんでーなぁー　京セツ連25大会	1982	2	つくしんぼセツル
534		第37回全国学生セツルメント連合大会　参加レポート　じゃりっこPart(幼児部)	1982		井戸田セツルメント
535		37th ZENstれん大会REPORT	1982		追廻セツルメント
536		37th全セツ連大会　パンフNo2　in仙台	1982		第37回全国セツルメント連合大会中央実行委員会
537		実践記録’64．4～5　　ー未来をみつめる子らー	1964		ヤジエセツルメント
538		Oh my Sun	不明		寒川セツルメント
539		1982　X’mas会実委の総括集	1982	3	追廻セツルメントクリスマス実行委員会

540		ぼくら いま ここに 84	1984		ズンガリセツルメント
541		幼パレポート	不明		各セツルメント
	1	「子守り実践いややぁー」	1984		鴨川セツルメント
	2	阪セツ連15交流会ー正式レポートーセツル維新軍団	1984		boonyan・pierrot
	3	どろんこの天使たち 阪セツ連15交流会	1984		住吉セツルメント
	4	白鷺幼児パート	不明		住吉セツルメント
	5	かくれんぼ ～第12回阪セツ連交流会に向けて～ 下寺幼パ	1981	7	衣摺セツルメント
	6	けなりー 第12回阪セツ連交流会衣摺幼パ 正式レポート	1981	7	衣摺セツルメント
	7	夕陽丘セツル幼パ自主レポート どんぐりとさくらんぼ特別号 あぷりこっと	不明		夕陽丘セツルメント
	8	7ひきのこやぎ 第14回阪セツ連大会 衣摺幼パ正式レポート	1981	12	衣摺セツルメント
	9	かくれんぼ '82阪セツ連交流会に向けて	1982	7	日東セツルメント
	10	日東幼児Part ようこそ 阪セツ連交流会に向けて	1982	7	日東セツルメント
	11	くれよん 第16回阪セツ連大会 第16回阪セツ連大会	1983	12	住吉セツルメント
	12	第14回大阪府学生セツルメント連合大会正式レポート!くれよん	1981	12	住吉セツルメント
	13	くれよん 住吉セツルメント白鷺地域幼児部 第12回阪セツ連交流会レポート	1981	7	住吉セツルメント
	14	かくれんぼ 16大会に向けて♡	1983	12	日東セツルメント
	15	どろんこの天使たち 第13回阪セツ連交流会 新今宮幼児パート正式レポート	1982		住吉セツルメント
	16	どろんこの天使たち 阪セツ連大会 新今宮幼児パート	1981	12	住吉セツルメント
	17	かくれんぼ '84 2/2-2/4日東総括合宿に向けて	1984		日東セツルメント
542		夕陽丘セツルメント			
	1	幼児パート ゆうひセツル 第4回阪セツ連大会	不明		夕陽丘セツルメント
	2	第5回阪セツ連大会討論資料 住吉セツルメント小低パート機関紙 つくしんぼ	1972	11	住吉セツルメント
	3	第3回阪セツ連大会 夕陽丘（1ページ目手書き） さくらんぼ（2ページ目）	1972	10	夕陽丘セツルメント
	4	第3回阪セツ連大会 ”さくらんぼ”を中心とした子供会	1972	11	夕陽丘セツルメント
	5	第2回 大阪学生セツルメント連合大会 幼児部活動	1969	11	夕陽丘セツルメント
	6	阪セツ連交流会 婦人問題	不明		夕陽丘セツルメント
	7	ロッキード事件資料集 夕陽丘セツルメント事務局編 総括合宿に向けて	1976	8	夕陽丘セツルメント
	8	もっと学びたい もっと語りたい 夕陽丘セツルメント 総括合宿に向けて	1976	8	夕陽丘セツルメント
	9	夕陽丘せつるめんとの機関紙3号 ゆうひ	不明		夕陽丘セツルメント
	10	夕陽丘セツルメント”方針合宿に向けて”	1976	10	夕陽丘セツルメント
	11	バラ1枚			
	12	仲間の詩 第15回友好祭に向けて 府大生協、住吉セツルメント・夕陽丘セツルメント共同企画 新どぶ川学級上映にあたって ″セツルメント″ってなあに	1976		夕陽丘セツルメント
	13	夕陽丘セツルメント 追いコンによせて セツルと私	1974	3	夕陽丘セツルメント
	14	まちぼうけ 第15号	1976	2	夕陽丘セツルメント
	15	夕陽丘セツル 10月方針合宿！	不明		夕陽丘セツルメント
543		無題（※住吉セツルメントの資料など）	不明		住吉セツルメント
	1	1970年代と思われる資料	1970代		住吉セツルメント
	2	1990年代と思われる資料	1990代		住吉セツルメント
	3	分類不可能バラ資料	不明		住吉セツルメント
544		分野別分科会レポート＆まとめの報告	1990代		全国学生セツルメント連合
545		課題別分科会レポート＆まとめの報告	1990代		全国学生セツルメント連合

546		せつるめんと　第42号	1973	11	全国学生セツルメント連合事務局
547		愛知県学生セツルメント連合代表者会議討論資料　夏に向かって	1978	5	愛知県学生セツルメント連合書記局
548		夏の集中活動ー1977ー　総括レポート	1977		島田一ツ山セツルメント
549		全セツ連幼パレポート　第31回全セツ連大回に向けて　実践レポート	1976	3	日東セツルメント
550		全セツ連大会に向けて　'83 3/12-15at京都　たんぽぽ	1983	3	日東セツルメント
551		桃花源　ー全セツ連大会に向けてー	1983	3	日東セツル・市看セツラー会
552		白鷺小高パ　パート会議事録	不明		住吉セツルメント
553		白鷺　とびうお　パート会議事録	不明		住吉セツルメント
554		無題（REPORT PAPER）	不明		住吉セツルメント
555		池袋セツルメント	1983	10	池袋セツルメント
556		セツルメント　新入生歓迎ハイク　by…トマト	不明		阪セツ連新歓ハイク実行委員会
557		新入生歓迎ハイク	1987	4	阪セツ連新歓ハイク実行委員会
558		私市（きさいち）ハイキング	不明		住吉セツルメント
559		バラ資料	不明		不明
560		阪セツ連第20回夏の交流会　'89 7/26～28			
	1	おいで①　第20回夏の交流会機関紙	1989	7	第20回夏の交流会実行委員機関紙班
	2	交流会用のメモ用紙や名札の原本、原稿原本	1989		第20回夏の交流会実行委員機関紙班
561		阪セツ連第20回夏の交流会　'89 7/26～28	1989		第20回夏の交流会実行委員機関紙班
562		新入生歓迎ハイキング	1989	4	大阪府学生セツルメント連合
563		府大セツラー会ノート	1979		府大セツラー会
	1	領収書、部会記録など	1979		府大セツラー会
	2	府大Sr会（第11回）部会	不明		府大セツラー会
	3	大阪府立大学セツルメント規約(草案) by young	不明		府大セツラー会
	4	府大Sr会部会（第5回）レジュメ	不明		府大セツラー会
	5	友好祭の個人的総括	不明		府大セツラー会
	6	府大Sr会部会レジュメ（第2回）　by young	不明		府大セツラー会
564		第28回的全国大会決議　1977年3月11日ー13日　於東京	1977	3	全日本学生自治会総連合
565		1977　府大Sr会白サギ実践レポ	1977		住吉セツルメント
		昭和52年度用白鷺地域3・4年パート子供名簿	1977		住吉セツルメント
		1977　白サギ幼児パート	1977		住吉セツルメント
		1977　白サギ小1・2パート	1977		住吉セツルメント

		1977　白サギ小3・4パート	1977		住吉セツルメント
		1977　白サギ小5・6パート	1977		住吉セツルメント
		1977　白サギ中学生パート	1977		住吉セツルメント
566		府大セツラー会執行部会に向けて	不明		府大セツラー会
567		″国民生活をまもり、教育・研究・医療の民主的発展を目指す4・28全大阪大学集会”へのご賛同ご協力をおねがいします(要請)	1976		4・28大学集会実行委員会
568		ハノイ市長が全世界によびかけ等バラ資料	不明		不明
569		中パ(男子部)住吉セツルメント中1パ男子部総括レポ	1972		住吉セツルメント
570		住吉セツルメント　新歓パンフ	不明		住吉セツルメント
571		夕陽丘　単セツ紹介	不明		夕陽丘セツルメント
572		全国セツルメント　愛知大会参加記念　・セツルメント運動・ボランティア運動文献目録	1992		こぶしセツルメントペーター
573		現在の学生とセツルメント活動	不明		不明
574		GOOD　DAY　児童パート	1982		庄内セツルメント
575		明日に向って躍進する　猪飼野中高パートの15大会用Report	1982	12	猪飼野セツルメント
576		ほほえみ　大会に向けて＝	1982	12	日東セツルメント
577		日東地域運動会ー第13回阪セツ連大会に向けてー	1980	12	日東セツルメント地域執行部
578		関東学生セツルメント連絡会議　1983年度基調報告I	1983	4	関東学生セツルメント連絡会議書記局
579		反則やでぇ　'82全セツ連37大会実践レポート　阪セツ連	1982		住吉セツルメント
580		くれよんPARTⅡ　第37回全国学生セツルメント連合大会　阪セツ連　住吉セツルメント	1982		住吉セツルメント
581		くれよんPART Ⅰ　第37回全国セツルメント連合大会　阪セツ連　住吉セツルメント	1982	3	住吉セツルメント
582		全セツ連37th大会に向けて	1982	3	庄内セツルメント
583		小高パート　ときどき新聞	不明		住吉セツルメント
584		あしたの詩　第71号	1980	6	大阪府学生セツルメント連合書記局
585		朝の詩　No.79　＝秋に向かって更なる飛躍を＝	1980？	9	大阪府学生セツルメント連合書記局
586		朝の詩　あしたのうた　No.80　ー私たちの未来のためにー	1980	9	大阪府学生セツルメント連合書記局

587		朝の詩　あしたのうた　No.81　－80学園祭を節として全面的発展を克ちとろう－	1980	10	大阪府学生セツルメント連合書記局
588		朝の詩　あしたのうた　No.82	1980	10	大阪府学生セツルメント連合書記局
589		朝の詩　－基調学習のために－	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
590		総括運動の圧倒的成功と阪セツ連の統一と団結のために No.89朝の詩	1982		大阪府学生セツルメント連合書記局
591		朝の詩No.90　～各分野の独自性の追求と学び成長できるPart会建設のために～	1982		大阪府学生セツルメント連合書記局
592		朝の詩No.91　若い力を結集し、夢とロマンと科学性に満ちたセツルメント運動の構築のために	1982		大阪府学生セツルメント連合書記局
593		朝の詩No.95　方針提起(幼児部・中学生部・障害児者部・老人部)	1982		大阪府学生セツルメント連合書記局
594		朝の詩No.95（PARTⅡ）	1982		大阪府学生セツルメント連合書記局
595		No.96　朝の詩　☆教育問題☆セツル攻撃	1982		大阪府学生セツルメント連合書記局
596		朝の詩　No.97　－第13回阪セツ連交流会にむけて－	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
597		朝の詩No.98	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
598		朝の詩　No.104　＝4－6月期の方針提起＝科学性と文化性につらぬかれたセツルメント運動発展のために！	1983		大阪府学生セツルメント連合書記局
599		地執NEWS、白鷺地域総会レジュメなどバラ資料			住吉セツルメント
600		現代学生セツルメント運動の展開　改定第2版　82年度住吉セツルメントラーニングキャンプ	1982		住吉セツルメント
601		ラーニングキャンプ　1982ねんど日東セツルメントラーニングキャンプ	1982	5	日東セツルメント
602		鹿野セツル高校生Part	不明		鹿野セツルメント
603		太陽の賛歌	1972	5	住吉セツルメント
604		阪セツ連38大会用　猪飼野中高パート	1983		猪飼野セツルメント
605		単St　SHOKAI	不明		不明
606		HOHOEMI　全セツ連38大会に向けて	1983	3	日東セツルメント
607		日五小低　フレンド　80年阪セツ連大会にむけて	1980		日東セツルメント

608		セツルメント　大阪市立大学医学部付属看護学校セツラー会	不明		大阪市立大学医学部付属看護学校セツラー会
609		Something good may happen!　ー14大会レポートー	1981		千代田セツルメント
610		ひつじのしっぽ　衣摺セツルメント　四天王寺国際仏教大学	1981	12	四天Sr会
611		桃花源　第14回阪セツ連大会にむけて	1981	12	大阪市立大学医学部付属看護学校セツラー会
612		PACKMAN　阪セツ連大会にむけて	1981	12	日東地域執行部
613		ワイルドインベーダー　14大会にむけて	1981	12	日東セツルメント
614		白サギ小高レポート＋白高ときどき新聞			住吉セツルメント
	1	小高パートときどき新聞	不明		住吉セツルメント
	2	第12回交流会レポート	1981	7	住吉セツルメント
	3	うめまちすとりーと　パート2　14大会正式レポート	1981	12	住吉セツルメント
	4	交流会正式レポート　UMEMACHI STREET　PART3	1982	7	住吉セツルメント
	5	UMEMACHI STREET PART4	1982		住吉セツルメント
	6	ウメマチstreet　阪セツ連16大会正式レポート	1983	12	住吉セツルメント
	7	小高パートときどき新聞	不明		住吉セツルメント
	8	うめまちストリート　PART7	1984	7	住吉セツルメント
	9	UMEMACHI STREET	1984	3	住吉セツルメント
615		新今宮中学生Part	1976-1977		住吉セツルメント
616		セツルメント　保健班案内	1977		番町セツルメント
617		活動記録	1977-	9	しらぼん(住吉セツルメント)
618		実践レポート＆議事録	不明		住吉セツルメント
619		たまご♡たまご	1982	6	住吉セツルメント事務局
620		たまごたまご　秋号	1981	10	住吉セツルメント事務局
621		たまごたまご　＝総括編＝	1981	8	住吉セツルメント事務局
622		たまごたまご　大会号	1981		住吉セツルメント事務局
623		どろんこ　第8回	1979	11	住吉セツルメント
624		ドロンコ	不明		住吉セツルメント
625		どろんこ　第10号	1980	9	住吉セツルメント(子ども会)
626		どろんこ　第7号	1979	7	住吉セツルメント
627		第37回全セツ連大会参加レポート　『一人でどうするの？』	1982		トロッコセツルメント
628		今,対象者は。。　37全国大会レポート	1982		追廻セツルメント
629		ーかだいべつぶんかかいーのれぽーと　「がくしゅうちょうさかつどう」	1981		あらぐさセツルメント

630		未来　第8号	1963	6	未来編集委員会
631		日東セツル実践レポート	1972-1975		日東セツルメント
	1	たいがー	1972	2	日東セツルメント
	2	日東セツルメント5・6年パート　青い芽　阪セツ連大会に向けて	1974	11	日東セツルメント
	3	シャベル班実践レポート　阪セツ交流会用　ちゃりんこ	1975	7	日東セツルメント
632		39大会関連資料他バラ資料	不明		住吉セツルメント他
633		茶色ビニル袋			
	1	社Ⅱクラス誌コスモス　第2号	1977	11	大阪女子大学社会福祉学科生
	2	クラス誌第3号　茶山花	1978	1	大阪女子大学社会福祉学科生
	3	タイトルなし	不明		全国セツルメント連合書記局
	4	子ども会少年団No186	1980	10	少年少女組織を育てる全国センター
	5	タイトルなし	不明		不明
	6	少年・少女を育てるために　No.147	1977	6	少年少女組織を育てる全国センター
	7	少年・少女を育てるために　No.129	1975	11	少年少女組織を育てる全国センター
	8	新しい子育てを求めて 「子どもの組織を育てる全国集会」基調報告集	1980	11	少年少女組織を育てる全国センター
	9	阪セツ連大会機関紙”友へ！”	1981		日東セツルメント
	10	第14回大阪府学生セツルメント連合委員会決議、おしくらまんじゅう他	1981		第14回大阪府学生セツルメント連合大会第1回定期連合委員会
	11	６．２３にむけて	不明		不明
	12	大きなかぶを追って…	1983	3	住吉セツルメント
	13	31財政局よりお詫びとお礼のメッセージ	1976		第31回全国学生セツルメント連合大会中央実行委員会財政局
	14	連合委員会決議案他	1976		各セツルメント及びセツルメント連合委員
	15	いつも明るい小高ぱあと	1971	4	不明
	16	実践レポート、部会レジュメ、方針合宿にむけて等バラ資料数点	不明		府大Sr会
	17	大阪府立大学セツラー会総括	不明		府大Sr会
	18	方針会議にむけて	不明		府大Sr会
	19	総括合宿の意義と任ム、連合委員会29大会スケジュール他バラ資料数点	1974他		住吉セツルメント
	20	地域運動	1974	9	住吉セツルメント
	21	「１．小高Paへの第一歩」から始めるタイトルなし資料	不明		住吉セツルメント
	22	中学生パート女子部のこの間の実践のほんのお知らせ	不明		住吉セツルメント
	23	幼児パートハイキング	不明		住吉セツルメント
	24	6/10実践レポート（ニセイ、ノッユ）	不明		住吉セツルメント
	25	JIL班日程	不明		住吉セツルメント
	26	2月28日Sr.総会レジュメ他	不明		不明
	27	シンポジウム討論資料　子供の本当の要求とは何かまたそれはどのように歪められているか	不明		東住吉セツルメント
	28	第10回近大Sr会☆レジュメ	不明		近大Sr会
	29	4/28(土)反省会、5月10日パート会記録	1990		不明
	30	じっせんきろく　松本博之・実践記録　アラシ	不明		不明
	31	タイトルなし反省会記録	1990		不明

634		第23回仙台学生セツルメント連合大会討論資料（1）	1983	12	仙台学生セツルメント連合常任委員会
635		子ども会少年団No.190	1981	2	少年少女組織を育てる全国センター
636		まつぼっくりの一年間・うちのクラブどうしたらいいんやろう？（まつぼっくりにし）	1988・1989		〇〇
637		―総括について―「何故,総括を問題とするのか」	1974	7	住吉セツルメント
638		総括合宿	1982	2	日東セツルメント常任委員会
639		全セツ連39大会に向けて　単実手引　NO2	1984		全国学生セツルメント連合39大阪大会中央実行委員会
640		朝の詩　No.106　交流会に向けて　総括視点	1984?		大阪府学生セツルメント連合書記局
641		表紙・タイトルなし（全セツ連の資料）	1983		全国セツルメント連合
642		朝の詩　No.102　・府知事選について　・39大会開催問題	1983		大阪府学生セツルメント連合書記局
643		朝の詩　No.百十	1984		大阪府学生セツルメント連合書記局
644		祖国をめぐる情勢	1984		不明
645		単実の手引き　38京都全セツ連大会に向けて	1983		全国学生セツルメント連合38京都大会中央実行委員会
646		セツルの手　この指とぉ～～まれ～　第8回新入生歓迎ハイキング	1981	4	住吉セツルメント
647		夕陽丘単セツ紹介	不明		夕陽丘セツルメント
648		夕陽丘総括レポート！　第22回大阪府学生セツルメント連合冬の大会	1989	12	夕陽丘セツルメント
649		第3回阪セツ連大会総括集	不明		大阪府学生セツルメント連合
650		子ども会少年団　No.188	1980	12	少年少女を育てる全国センター
651		フラッパー	1981	4	住吉セツルメント
652		大阪基督教短期大学セツラー会　総括合宿レジュメ	1982	2	大阪基督教短期大学セツラー会
653		ユーキ・ピーコ等のノート	1983		府大Sr会
654		NセツルのひろばN　　No4.1月号	1983		大阪府学生セツルメント連合書記局

655		77秋のセツル大学　第3抗議 「執行部活動」(レジュメ)	1977	10	住吉セツルメントなど
656		タイトルなし(独占体の教育への干渉から始まる文章等)	不明		不明
657		私達の生活と日本・世界の動き	不明		不明
658		今日の学生の要求とサークル活動	1989		T.Sugio
659		全セツ連大会で何が得られたのか？－全セツ連38大会感想文集－　第一集UFOセツラー編	1983		住吉セツルメント
660		バラ資料　数点	不明		住吉セツルメント
661		THE END OF SUMMER 夏合宿in赤目	1984	9	住吉セツルメント
662		つくしんぼセツルメント　中学生PART大会レポート	1983	2	つくしんぼセツルメント
663		少年・少女を育てるために　No.150	1977	8	少年少女を育てる全国センター
664		flapper　新今宮地域Sr向けキカン紙			住吉セツルメント
	1	フラッパー	1981	4	住吉セツルメント
	2	フラッパー　　第2号	1980	4	住吉セツルメント
665		クレヨン　白さぎ幼児パート機関誌1977.10.22～			住吉セツルメント
	1	幼パだより　クレヨン　創刊号	1977	10	住吉セツルメント
	2	くれよん	1980	6	住吉セツルメント
	3	クレヨン	1980	7	住吉セツルメント
	4	クレヨン	1981	7	住吉セツルメント
	5	クレヨン	1981	11	住吉セツルメント
666		月刊　考える高校生			
	1	月刊　考える高校生	1984	1	高校生文化研究会
	2	月刊　考える高校生	1983	12	高校生文化研究会
	3	月刊　考える高校生	1983	11	高校生文化研究会
	4	月刊　考える高校生	1983	10	高校生文化研究会
	5	月刊　考える高校生	1983	6	高校生文化研究会
	6	月刊　考える高校生	1982	4	高校生文化研究会
	7	月刊　考える高校生	1983	2,3	高校生文化研究会
	8	月刊　考える高校生	1983	1	高校生文化研究会
	9	月刊　考える高校生	1982	12	高校生文化研究会
	10	月刊　考える高校生	1982	11	高校生文化研究会
	11	月刊　考える高校生	1982	7	高校生文化研究会
	12	月刊　考える高校生	1982	10	高校生文化研究会
	13	月刊　考える高校生	1982	5	高校生文化研究会
667		共働き家庭の母と子の絆	1979	11	大阪女子大学セツルメント
668		ファンタ　大学Sr会ノート	不明		住吉セツルメント
669		84年度夏合宿	1984		住吉セツルメント
670		第12回交流会　大学Sr会(背表紙)	1981		
	1	第12回大阪府学生セツルメント連合交流会　正式レポート	1981	7	住吉セツルメント
	2	第12回大阪府学生セツルメント連合交流会討論資料	1981	7	大阪府学生セツルメント連合書記局

	3	交流会に向けて　酷思夢想	1981	7	市大Sr会
	4	ほうせんか！　近大Sr会のレポート	1981	7	近大セツラー会
	5	花よりだんご　阪セツ連第12回交流会正式レポート	1981	7	大阪女子大学Sr会
	6	ひつじのしっぽ	1981	7	四天セツラー会
	7	みちしるべ　ー第12回交流会に向けてー	1981	7	日東セツルメント　関西女子短大セツラー会
	8	第12回大阪府学生セツルメント連合交流会	1981	7	日東セツルメント　関西女子短大セツラー会
	9	福原健一様宛の封筒	1982	8	
671		なんで来えへんかってん　'81阪セツ連14大会新今宮中高青正式レポート	1981	12	住吉セツルメント
672		ほほえみ　第3号　第14回阪セツ連に向けて	1981		日東セツルメント
673		せせらぎ　第14回阪セツ連大会レポート	1981	12	日東セツルメント
674		第14回阪セツ連大会　ー児童部ー猪飼野セツル　正式レポート	1981	12	猪飼野セツルメント
675		日東小低1　フレンド　81年阪セツ連大会にむけて	1981		日東セツルメント
676		下寺幼パ　かくれんぼ　第14回阪セツ連大会に向けて	1981	12	日東セツルメント
677		ジュースおごってやぁ！　第15回阪せつ連大会正式レポート	1982	12	住吉セツルメント
678		第2号　道標	1960	3	大阪女子大学セツルメント
679		お山の大将　住吉セツルメント大谷女子大Sr会機関紙創刊号	1974	11	大谷女子大学セツラー会
680		お山の大将　昭和51年度大谷大学祭　第3号	1976	11	大谷女子大学セツラー会
681		せつるめんと	1966	11	大阪女子大学セツルメント
682		第12回交流会　分野レポート　児童部	1981		
	1	ひぃふぅみゆき　'81阪セツ連交流会レポート	1981	7	住吉セツルメント
	2	小低フレンド　NITTO　GORO特別号　81交流会にむけて	1981		日東セツルメント
	3	八戸ノ里5・6Pa　ジャングルジム	1981		衣摺セツルメント
	4	いつまでも夢を！　衣摺5・6Paの自主レポート　阪セツ連交流会	1981		衣摺セツルメント
	5	ふれあい　Part12　阪セツ連交流会に向けてのReport…	1981	7	日東セツルメント
	6	ようこそ　第12回交流会に向けて	1981	7	日東セツルメント
	7	あんたらあそんだれへんで　交流会にむけて	1981	7	日東セツルメント
	8	ひまわり　ー交流会に向けてー	1981	7	猪飼野セツルメント
	9	第12回阪セツ連交流会正式レポート　うち悪ないもん	1981	7	住吉セツルメント
	10	ルーズリーフ1枚			
683		セツルメント　平成元年ご入学おめでとー！	1989		夕陽丘セツルメント
684		ゴンタくれ　第27号　阪セツ連事務局	1980	6	阪セツ連事務局
685		夢とロマンと科学性を追求した82新歓大運動を決起しよう	1982		阪セツ連82新刊部
686		36大会成功に向けて　単実の手引き	1981	1	全セツ連36大会中央実行委員会

687		交流会討論資料	1982	7	大阪府学生セツルメント連合書記局
688		阪セツ連代表者会議討論資料	不明		大阪府学生セツルメント連合書記局
689		14大会総括集	1982		大阪府学生セツルメント連合書記局
690		大阪府学生セツルメント連合13大会総括集	1981	2	大阪府学生セツルメント連合書記局
691		第11回阪セツ連大会総括集	1979		阪セツ連常任書記局・第11回阪セツ連大会実行委員会
692		仲間の詩＝なかまのうた＝	1982	6	大阪府学生セツルメント連合書記局
693		第13回　阪セツ連大会正式レポート　Something good may happen	1980		大阪千代田短期大学セツラー会
694		風の子	不明		大阪女子大学セツラー会
695		ふれあい　阪セツ連交流会に向けて！Part18	1982	7	日東セツルメント
696		日東小低　ふれんど　'82 No.2　阪セツ連第13回交流会にむけてー	1982	7	日東セツルメント
697		あんたらあそんだらへんで～！　　交流会に向けて	1982	7	日東セツルメント
698		中学生・高校生PART　”第13回阪セツ連交流会に向けて”	1982	7	猪飼野セツルメント
699		NoⅡ　年輪　・阪セツ連交流会にむけて・全セツ連Ⅱ定委にむけて	1982	7	日東セツルメント
700		まるひばち　日東セツルメント下寺老人パート　交流会に向けて	1982	7	日東セツルメント
701		熱中時代　ナンバー2　交流会正式レポート	1982		衣摺セツルメント
702		むぎわらぼうし　第13回交流会に向けて	1982		庄内セツルメント
703		花よりだんご　第13回交流会正式レポート	1982	7	大谷セツラー会
704		7月の空に'82　交流会へ向けて	1982	7	市大セツラー会
705		82交流会に向けて　桃花源	1982		市看セツラー会
706		はみんぐ　交流会　Seisiki Report	1982	7	住吉セツルメント
707		EXCITING INVADER　交流会に向けて	1982		日東セツルメント
		いんべえだあ	1981	7	日東セツルメント
708		けなりー　第12回阪セツ連交流会　衣摺幼パ正式レポート	1981	7	衣摺セツルメント
709		まるひばち　ー交流会にむけてー	1981	7	日東セツルメント

710		せせらぎ　第12回阪セツ連交流会に向けて	1981	7	日東セツルメント
711		東淀川セツルメント　淡路地域中高パート『るねっさんす』	1981		東淀川セツルメント
712		女子大学Sr会　39.7～	1964	7	大阪女子大学セツラー会
	1	女子大セツルの歴史（ベル）	1964	7	大阪女子大学セツラー会
	2	せつるめんと	1966	11	大阪女子大学セツルメント
	3	セツルメント知ってる？	1977	5	大阪女子大学セツルメント
	4	めざまし時計”大阪女子大学学生の意識調査”	1978	11	大阪女子大学セツルメント
	5	女性の生き方　全国学生セツルメント連合第34大会	1979	3	大阪女子大学セツラー会
	6	百舌鳥っ子セツラー会　阪セツ連第10回交流会	1979	7	大阪女子大学セツラー会
	7	女と家庭と仕事	1979		大阪女子大学セツルメント
	8	第35回全セツ連愛知大会レポート　共働き家庭の母と子の絆	1980	3	大阪女子大学セツラー会
713		住吉関係　部会　総会etc.			住吉セツルメント
	1	もめんの手拭'76新歓総括集　最終号	1976		住吉セツルメント
	2	セツルメント　1975年度新入生歓迎パンフレット	1975		東淀川セツルメント
	3	阪セツN歓ニュース　木綿の手拭　日東特集	不明		日東セツルメント製作
	4	子供まつり	不明		大阪セツルメント連合書記局
	5	第8回大阪子どもまつり	不明		第8回大阪子どもまつり実行委員会
	6	その他バラ資料数点	不明		
714		庄内セツル・阪大セツラー会	不明		庄内セツル・阪大セツラー会
	1	庄内セツルメント	不明		阪大セツラー会
	2	さなえちゃん　7月14日交流会に向けて	1979	7	近畿大学セツラー会
	3	えくぼ　阪セツ連交流会正式レポート	1980	7	関西女子短期大学子ども研究サークル
715		猪飼野資料	1978		猪飼野セツルメント
716		住吉セツルメント資料			
	1	若い芽を守る会の歩み　父母の会・家庭訪問分科会レポート	1968		馬渕セツルメント
	2	セツルメント活動の基本的性格　14回大会基調報告より	1971		住吉セツルメント運営委員会
	3	女子大セツルの歴史	1964		大阪女子大学セツルメント
717		７５夏合宿のアンケート	1975	9	住吉セツルメント
718		きずりセツルメントってなあに？　'85新歓パンフ	1985		衣摺セツルメント
719		第39回全国学生セツルメント連合大会基調報告（案）	1984	3	全国学生セツルメント連合
720		白鷺小低部　１９８０後期	1980		住吉セツルメント
721		庄内セツルメント			庄内セツルメント
	1	春合宿	1975		庄内セツルメント
	2	実り合宿	不明		庄内セツルメント
	3	表紙　方針合宿	1976		庄内セツルメント
722		セツルメント　PiPi　地対	1972-1973		住吉セツルメント
723		うぶごえ　＝夏合宿に向けて＝	1971	7	住吉セツルメント

724		東住吉中学の生徒の不良化問題について	1963		不明
725		実践レポート　民主的な力の蓄積と行使を	不明		坂下セツルメント
726		方針合宿まとめ	1975	3	春季方針合宿実行C
727		秋の基本方針　学生セツルメント運動の力強い前進のために	1972	10	全国学生セツルメント連合書記局
728		サマー・スクール	1972	8	不明
729		住吉せつるめんと中学生パート男子部　総括レポート	1972-1973		住吉セツルメント
730		全国代表者会議の開催にあたって	1972	6	全国学生セツルメント連合
731		井戸田セツルメント　幼低パート　実践記録	1969	6	井戸田セツルメント
732		青年と共にNo2　ヤンPa総括集レポート　キャンプ特集　セツルメント運動理論機関誌	不明		不明
733		１９８１年度後期　NJK・PMK・PCKレジュメ	1981		日東セツルメント
734		第14回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料	1981	12	大阪府学生セツルメント連合書記局
735		第11回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料	1978	12	大阪府学生セツルメント連合書記局
736		幼児部活動骨子案等	不明		不明
737		合宿報告	不明		東住吉セツルメント
738		無題	不明		不明
739		昭和60年度　新今宮小低・小高Part実践レポート　Sr,Kuma	1985		住吉セツルメント
740		第31回全国学生セツルメント連合大会第2回定期連合委員会討論資料	1976		全国学生セツルメント連合書記局
741		住吉実践レポート’74	1974		住吉セツルメント
	1	ひもすがら　第五回阪セツ連交流会 住吉せつるめんと高校生ぱあと自主れぽおとNo.1	1974	6	住吉セツルメント
	2	小パ赤川　実レポ	1974	9	住吉セツルメント
	3	11月18日実践レポート	1974	11	住吉セツルメント
	4	4人と2ひき荒野をゆく　第7回阪セツ連大会正式レポート	1974	11	住吉セツルメント
	5	74阪セツ連交流会課題レポート　風の子　小学生パート赤川班	1974	6	住吉セツルメント
	6	5にんと2ひき荒野をゆく	1974	6	住吉セツルメント
	7	しゃぼんだま　すみよしせつる幼P　議事レポート	1974	11	住吉セツルメント
	8	風の子　第7回阪セツ連大会正式レポート	1974	11	住吉セツルメント
742		74基調	1974		住吉セツルメント
	1	1974年＜夏＞阪セツ連交流会討論資料	1974		阪セツ連書記局
	2	2.22　拡大連合C討論資料	1974	2	阪セツ連書記局
	3	書記局活動報告	不明		阪セツ連書記局
	4	学生セツルメント運動における執行部のあり方	不明		阪セツ連書記局

	5	26大会基調、30大会基調等	不明		阪セツ連書記局
	6	第3回阪セツ連大会総括集	1971		大阪府学生セツルメント連合
	7	第15回拡大連合委員会名古屋大会報告集	1967		東住吉セツルメント
	8	第16回全セツ連大会報告集	1967		日東セツルメント
743		75　ラーCan　前期総括方針合宿資料	1975		住吉セツルメント
	1	なつの総括方針合宿まとめ　於：伊吹山	1976	3	住吉セツルメント
	2	伊吹をめざして	1975	9	住吉セツルメント
	3	せつるめんとの偉大なる歩み	1975	5	府立大学セツラー会
	4	愛染園セツルメント時代・東住吉セツルメント時代・住吉セツルメント時代	1975		住吉セツルメント
744		せつるめんと―Pa会の資料プリントetc―	不明		住吉セツルメント
745		大学Sr会、Sr総会　等	1974	7	阪セツ連？
746		2001年度　セツルメント自己・他己紹介	2001		住吉セツルメント
747		無題ノート	1984		住吉セツルメント
748		77夏合宿　討論資料	1977		東淀川セツルメント
749		このゆびと～まれ！	1978		東淀川セツルメント
750		どっこい　第5号	1977		夕陽丘セツルメント
751		テーマ別分科会	1990		住吉セツルメント
752		実践記録No.15	1987		住吉セツルメント
753		Settle	不明		住吉セツルメント
754		全セツ連婦人部レポート	不明		不明
	1	農村セツルメント　どんぐり会（道セツ連）＜婦人部＞B班（富内市街パート・第二富内パート）	1981	3	どんぐり会
755		住吉Sr　白鷺小高パート	不明		住吉セツルメント
	1	UMEMACHI　STREET　PART4	1982		住吉セツルメント
	2	うめまちすとりーとパート2　14大会正式レポート	1981	12	住吉セツルメント
	3	その他	不明		住吉セツルメント
756		1979年度　小低Part　白鷺　府大Sr会資料	1979		府大Sr会
757		1979年度　中高生Part白鷺　府大Sr会資料	1979		府大Sr会
758		1979年度　小高Part　白さぎ　府大Sr会資料	1979		府大Sr会
759		ふれあい　日東・小高Part　第38回全セツ連大会に向けて	1983	3	日東セツルメント
760		日東セツル　実践レポート			日東セツルメント
	1	盆と正月がやってきた！　日五中パ女子正レポ　第9回阪セツ連交流会	1978	7	日東セツルメント
	2	はばたけ！我らが日五中パ男子　第11回阪セツ大会へ向けて	1978	12	日東セツルメント
	3	せせらぎ　日東セツル　下寺町三丁目　小高パート男子	1978	6	日東セツルメント
	4	ふれあい　PART3　’78阪セツ連大会に向けて	1978	12	日東セツルメント

	5	青い芽！！'78 6/3～6/4ラーニングキャンプ	1978	6	日東セツルメント
	6	AMaRiRiSu No.3 第11回阪セツ連大会に向けて 正レポート	1978		日東セツルメント
	7	フレアイ PARTⅡ 1978.阪セツ連交流会に向けて 日五小低正式レポート	1978	7	日東セツルメント
	8	ひま→わり 全国セツルメント32大会に向けて	1978		日東セツルメント
761		阪セツ連 自らの生き方を自らの手で Janpachi	不明		ジャンパチ（住吉セツルメント）
762		ごんたくれ			阪セツ連事務局
	1	ごんたくれ 14・15合併号	1977		阪セツ連事務局
	2	ごんたくれ 第 号	1978		阪セツ連事務局
	3	ごんたくれ'77 5月号 第12号	1977	4	阪セツ連事務局
	4	ごんたくれ 交流会特集号	1977		阪セツ連事務局
	5	ごんたくれ 第21号	1979		阪セツ連事務局
	6	ごんたくれ 第24号	不明		
	7	ごんたくれ 第26号	1979	2	阪セツ連事務局
763		全国学生セツルメント連合 第二十三回大会書記局報告	1971	8	全国学生セツルメント連合書記局
764		1980交流会大学問題講演by〇〇氏	1980		不明
765		阪セツ連事務局機関紙"ごんたくれ"No.3 住吉セツルメント資料			阪セツ連事務局
	1	ごんたくれ 阪セツ連事務局 14・15合併号	1977		阪セツ連事務局
	2	ごんたくれ 第16号	1977	10	阪セツ連事務局
	3	ごんたくれ 17号	1977	12	阪セツ連事務局
	4	ごんたくれ 第18号	1978	2	阪セツ連事務局
	5	ごんたくれ 第19号	1978	6	阪セツ連事務局
	6	ごんたくれ 特別号 ～ごくろうさん！阪セツ連常任書記局員～	1978	12	阪セツ連事務局
	7	ごんたくれ 交流会特集号	1977		阪セツ連事務局
766		阪セツ連事務局機関紙"ごんたくれ"No.4 住吉セツルメント資料			阪セツ連事務局
	1	ごんたくれ 第37号 阪セツ連14大会を終えて	1982	2	阪セツ連事務局
	2	ごんたくれ 第30号	1980	10	阪セツ連事務局
	3	ゴンタくれ 第27号	1980	6	阪セツ連事務局
	4	ごんたくれ 26号	1980	2	阪セツ連事務局
	5	ごんたくれ 第24号	1979	10	阪セツ連事務局
	6	ごんたくれ 第 号	1978	11	阪セツ連事務局
	7	ごんたくれ 第22号	1979	5	阪セツ連事務局
	8	ごんたくれ 第21号	1979	2	阪セツ連事務局
	9	ごんたくれ≪特別号≫ごくろうさま！阪セツ連常任	不明		阪セツ連事務局
767		馬渕文庫			馬渕セツルメント
	1	通天閣 若い芽を守る会ー大阪ー馬渕	不明		馬渕セツルメント
768		くれよん Part1 第37回全国学生セツルメント連合大会	1982	3	住吉セツルメント
769		全セツ連幼パレポート			
	1	第31回全セツ連大回に向けて 実践レポート	1976	3	日東セツルメント
770		中学生パート			住吉セツルメント
	1	おちめじる 全セツ連大会分野別分科会 中学生パート	1971		住吉セツルメント
	2	第2号 おちめじる 阪セツ交流会	不明		住吉セツルメント
	3	おちめじる 創刊号 明るい中学生パートをつくる会	不明		住吉セツルメント
	4	中パ機関紙	不明		住吉セツルメント

	5	実践レポート	不明		住吉セツルメント
	6	第6回阪セツ連大会に向けて　息づき　総括レポートNo.4	1973	12	住吉セツルメント
771		第30回大会報告　課題別講演　於都立大学	1975		全国学生セツルメント連合
772		第31回全セツ連大会　未権利大学での斗い　31大会正式レポート	1976		おおねセツルメント
773		第9回　関セツ連大会　分科会　サークル運営	1967		猪飼野セツルメント
774		全セツ連30回大会レポート分野別分科会　進み行く我等	1976	3	境南セツルメント
775		無題	不明		どんぐり会
776		young part 報告	1975	1	不明
777		おでん増刊号　かんとうだき 文化祭典を10倍楽しく	1983	12	文化祭典委員会
778		いろんな時の感想文　セツラーの生の声	不明		住吉セツルメント
779		無題ファイル	不明		住吉セツルメント
780		無題ファイル			住吉セツルメント
	1	セツルメント特報等	不明		住吉セツルメント
	2	第10回友好祭分科会『子供と文化』	1971	5	住吉セツルメント
781		たまごたまご・ごんたくれ			
	1	たまご♡たまご	1982	11	住吉セツルメント事務局
	2	たまごたまご　総括編	1981	8	住吉セツルメント事務局
	3	たまごたまご　No.1	1981		住吉セツルメント事務局
	4	たまご♡たまご	1982	6	住吉セツルメント事務局
	5	ごんたくれ　N生歓迎特集号	1982	3	阪セツ連事務局
	6	たまごたまご　秋号	1981	10	住吉セツルメント事務局
	7	たまごたまご　大会号	1981	1	住吉セツルメント事務局
	8	ごんたくれ　第34号	1981	5	阪セツ連事務局
	9	ゴンタクレ　特集：セツルと私	不明		阪セツ連事務局
	10	ごんたくれ　一第37号一阪セツ連14大会を終えて	1982	2	阪セツ連事務局
	11	ごんたくれ　第35号	1981	10	阪セツ連事務局
	12	ごんたくれ　第36号	1981	11	阪セツ連事務局
	13	ごんたくれ第36号PARTⅡ	1981	12	阪セツ連事務局
	14	たまご♡たまご	1983	10	住吉セツルメント事務局
782		Sr会レポート　住吉編			住吉セツルメント
	1	第12回大阪府学生セツルメント連合交流会　正式レポート	1981	7	大阪府立大学セツラー会
	2	さかゑ　全セツ連33大会に向けて	1984	3	大阪府立大学セツラー会
	3	第15回交流会正式レポート　花よりだんご	1984	7	大谷女子大学セツラー会
	4	第13回阪セツ連交流会　大学別分科会正式レポート	1982		大阪府立大学セツラー会
	5	花よりだんご　阪セツ連16大会　大谷セツラー会　準正式レポート	1983	12	大谷女子大学セツラー会
	6	花よりだんご　第14回阪セツ連交流会　大谷女子セツラー会　自主レポート	1983	7	大谷女子大学セツラー会
	7	花よりだんご　阪セツ連第12回交流会正式レポート	1981	7	大谷女子大学セツラー会
	8	花よりだんご　阪セツ連第13回交流会正式レポート	1982	7	大谷女子大学セツラー会
	9	花よりだんご　全セツ連３８京都大会正式レポート	1983	3	大谷女子大学セツラー会
	10	ひとつぶのたね　第14回交流会学校紹介	1983	7	公衆衛生専門学校
	11	’81阪セツ連大会自主レポート　公衛セツラー会	1981	12	公衆衛生専門学校セツラー会

	12	ひとつぶのたね　第13回交流会　学校紹介	1982	7	公衆衛生専門学校セツルメント
	13	すいーとぽてと　第16回阪セツ連大会　大阪女子短大セツラー会自主レポート	1983	12	大阪女子短大セツラー会
	14	Good　第16回大会正式レポート	1983	12	千代田短期大学
	15	Good days 大阪千代田短期大学　14交流会正式レポート	1983	7	千代田短期大学
	16	セツラーの紹介・大学紹介について	不明		千代田短期大学
783		第7回　32中実　7役K	1976	8	阪セツ連事務局
784		無題　（住吉セツルメント小高パート紹介資料原稿）	不明		住吉セツルメント
785		猫ふんじゃった（野洲高校1D学級通信）	1981	4	○○
786		Berry　第１５会阪セツ連交流会歌集です。	1984		阪セツ連
787		第１４回阪セツ連交流会	1983		阪セツ連
788		Go For It！　阪セツ連第１７大会歌集	不明		阪セツ連
789		京の街から　春どすえ　全セツ連３８大会歌集	1983		全セツ連38大会中央実行委員会
790		BON　VOYAGE	1990	2	全国学生セツルメントフェスティバル中央実行委員会
791		活動ノート　○○	1968		○○
792		大阪でのたたかいのあゆみ　1966－1980	1981	9	安保破棄・諸要求貫徹大阪実行委員会
793		今日の学生の要求とサークル活動、すみよしセツルメント機関紙UFO再来！！等	不明		住吉セツルメント
794		第9回阪セツ連交流会	1978		
	1	第1号　交流会実行Cニュース	1978		
	2	銀河鉄道一第9回阪セツ連交流会に向けて一第2号No.1	1978		交流会実行委員会
	3	銀河鉄道一第9回阪セツ連交流会に向けて一第3号	1978		交流会実行委員会
	4	銀河鉄道一第9回阪セツ連交流会に向けて一第4号	1978		交流会実行委員会
	5	交流会を支える仲間たち	1978		
	6	銀河鉄道一第9回阪セツ連交流会に向けて一第5号	1978		交流会実行委員会
	7	銀河鉄道一第9回阪セツ連交流会に向けて一第6号	1978		交流会実行委員会
	8	第9回阪セツ連交流会	1978	7	第9回阪セツ連交流会実行委員会
	9	微笑返し　近大Sr会交流会正式レポート	1978		近大Sr会
	10	青い芽　日五小高女子パート　☆第9回阪セツ連交流会に向けて☆	1978		日東セツルメント
	11	まんまるおにぎり　第9回阪セツ連交流会正式レポート　衣摺1・2Pa	1978		衣摺セツルメント
	12	第9回阪セツ連交流会正式レポート	1978		衣摺セツルメント
	13	八戸ノ里地域（きずりちいき）　ちびっこ3・4Pa	1978		衣摺セツルメント
	14	白さぎ　3・4Pa　音楽隊　第9回大阪学生交流会の夕べ	1978		住吉セツルメント
	15	おまえらだぼすけや！　住吉セツルメント新今宮中学生パート	1978		住吉セツルメント
	16	第9回阪セツ連交流会　大学別分科会正式レポート	1978		大阪府立大学セツラー会
	17	ひとつぶのたね　'78阪セツ連交流会正式レポート	1978		公衆衛生専門学校セツラー会

	18	こちら5・6Pa応答ねがいます　第9回阪セツ連交流会正式レポート	1978		住吉セツルメント
	19	どろんこの天使たち　住吉セツル　新今宮幼児パート	1978		住吉セツルメント
	20	雨あがり　パート5　第9回阪セツ連交流会　新今宮5・6パ　ひまわり	1978		住吉セツルメント
	21	幼児部レポート　日五幼児パート　ー第9回阪セツ連大会にむけてー	1978		日東セツルメント
795		中高青パート			
	1	セツラーってまじめやな！！	1984	3	住吉セツルメント
	2	第39かい全セツ連大会　結局何をするにも学力がものをいう	1984		トロッコセツルメント
	3	39meeting report LEMON	1984	3	市川セツルメント
	4	100%青春じゃん。	1984	3	屋形町セツルメント
	5	せせらぎ　日東セツル総括合宿	1983	2	日東セツルメント
	6	明日に向かって躍進する　猪飼野中高パートの15大会用Reportの表紙です。	1982	12	猪飼野セツルメント
	7	大会に向けて＝ほほえみ	1982	12	日東セツルメント
	8	中学生・高校生PART　”第13回阪セツ連交流会に向けて”	1982	7	猪飼野セツルメント
	9	＜実践記録＞	1982		日東セツルメント
	10	さあ来る　いんべぇだあ　創刊号No.1他	1982	7	日東セツルメント
	11	ーせせらぎーキャッツアイ　阪セツ連16大会	1983	12	日東セツルメント
	12	ジュースおごってぇやぁ！第15会阪セツ連大会正式れぽーと	1982	12	住吉セツルメント
	13	Reconstruction	1983	3	住吉セツルメント
	14	いいだしっぺを恐れるな！大阪府学生セツルメント連合16大会	1983		不明
	15	EXCITING　INVADER　交流会に向けて、いんべぇだあ(機関紙)	1981		日東セツルメント
	16	飛び出せ　13th阪セツ連交流会正式レポ	1981		住吉セツルメント
	17	おまえらほんまに仲間か？！	1983		住吉セツルメント
	18	14回交流会　インベーダーがまちにやってきた！	1983		日東セツルメント
	19	キャッツアイ　せせらぎ　83年度阪セツ連交流会	1983	7	日東セツルメント
	20	とんがりCornイカイノ　中高Pa	1983	7	衣摺セツルメント
796		ごんたくれ　第23号	1979	7	阪セツ連事務局
797		仲間の詩　第15回友好祭にむけて	1986		夕陽丘セツルメント
798		祭だワッショイ！第15回友好祭	1986	5	住吉セツルメント
799		ごんたくれ　76夏号　No.8　うて　夏に向って！	1976		阪セツ連事務局
800		あじさい＝キリ短より愛をこめてのメッセージ＝	不明		キリ短セツラー会
801		Part会Note　2001.2～2001.10	2001		府大セツラー会
802		せつらあ会のおと　Vol.5　1988.6-1988.12	1988		府大セツラー会
803		せつらあのおと　VOL6　1988.12-1988.9	1988		府大セツラー会
804		府大せつら一会ノートVOL.7　1989.9－1991.2	1989		府大セツラー会
805		セツラー会ノート　VOL.8　1991.2-1992.2	1991		府大セツラー会
806		Sr会ノート　Vol.9　'93.2.16～4.27	1993		府大セツラー会
807		Sr会ノート　Vol.10　1993. 9.17－1994.9.17	1993		府大セツラー会

808		Sr会ノート　Vol.11　'93.9.18-'94.10.13	1993		府大セツラー会
809		夏合宿(カニ新聞)　80　住吉	1980		住吉セツルメント
810		77　住吉夏合宿　1977.8.31～9.4　討論資料	1977		住吉セツルメント
	1	赤目百人衆　すみよしせつるめんとなつがっしゅく	1977	8	住吉セツルメント
811		第1回学生セツルメント祭典IN千葉　記念寄席	1990?		市川セツルメント
812		Settlement 全国集会in愛知　感想文集	1992	3	仙台セツルメント参加者一同
813		第23回全国ボランティア研究会in長崎　参加レポート　ボランティア思想の源流！「学生セツルメント運動ってなあに？…セツルメント思想と戦後の学生によるその実践」	1992		不明
814		1991年度　こぶしセツルメント活動報告(総括集)	1991		こぶしセツルメント
815		’82 日東連合大運動会	1982		日東セツルメントPMK
816		第16回愛知学生セツルメント連合大会・第18回愛セツ連定期連合委員会基調報告討論資料	1976	12	愛知県学生セツルメント連合書記局
817		第20回　愛知県学生セツルメント連合委員会　第18回愛知県学生セツルメント連合大会　基調報告	1977	12	愛知県学生セツルメント連合書記局
818		第22回愛知県学生セツルメント連合委員会　第20回愛知県学生セツルメント連合大会＜討論資料＞	1978	12	愛知県学生セツルメント連合書記局
819		第13回阪セツ連大会　正レポ	1980	12	大阪府立大学Sr会
	1	住吉セツルメント　第13回阪セツ連大会正式レポート　火のSr会	1980	12	大阪府立大学Sr会
820		住吉実践レポート'75	1975		住吉セツルメント
	1	我が3・4年パートの雰囲気、から始まる冊子	1975		住吉セツルメント
	2	あしたてんきになあれ　阪セツ連交流会分野別交流会正式レポート	1975		住吉セツルメント
	3	第6回阪セツ交流会正式レポート	1975	7	住吉セツルメント
	4	ねずみの学校　交流会レポート	1975	7	住吉セツルメント
	5	第6回阪セツ連交流会正式レポート	1975	7	住吉セツルメント
821		ぼくらはみた！！　京セツ連＝岩本町セツル＝　東北パート中P	1976		岩本町セツル
822		全セツ連第３１回なごや大会 「一代ちゃん！もっと大きな声で！」	1976		新篠津セツルメント
823		１９７５年　１２月集会レポート　情勢と要求	1975		境南セツルメント
824		境南セツルメント歌集実行委員会のソーカツ	1973?		境南セツルメント
825		住吉セツルメント　夏合宿各Part実践報告集　於：小豆島	1970	7	住吉セツルメント
826		住吉セツルメント　青年部　ー総括合宿用討論資料ー	1972		住吉セツルメント

827		伊吹をめざして　なつの総括方針合宿	1975	9	住吉セツルメント
828		学内ビラ	1974		住吉セツルメント
829		’79.3総括合宿、’80・8夏合宿、’81・8夏合宿	1979-81		住吉セツルメント
830		各種ビラ	1975等		住吉セツルメントなど
831		学内(ビラ)	1973他		各種
832		弥次ヱ　老人生活実態調査報告書	1987	3	ヤジエセツルメント
833		13大会　分野・課題別レポート	1980	12	
	1	第13回阪セツ連大会正式レポート　火のSr会	1980	12	大阪府立大学Sr会
	2	学習調査レポート	1980	12	猪飼野セツルメント
	3	日東地域運動会—第13回阪セツ連大会に向けて—	1980	12	日東セツルメント
	4	山茶花ーさざんかー	1980	12	衣摺セツルメント東短Sr会
	5	ひつじのしっぽ　四天セツラー会　第13回阪セツ連大会正式レポート	1980	12	衣摺セツルメント
	6	ふれあい　Part9　日東セツル日五小高男PA　正式レポート　第13回阪セツ連大会に向けて	1980	12	日東セツルメント
	7	のびのび太	1980	12	猪飼野セツルメント
	8	懺悔　阪セツ連大会自主レポート 夕陽丘小低パート(つみき班)	1980	12	夕陽丘セツルメント
	9	星屑ひろい　第13回阪セツ連大会　ー夕陽丘セツルメント小高パート—	1980	12	夕陽丘セツルメント
834		13大会分野別レポート	1980	12	
	1	第13回阪セツ連大会正式レポート　ちびエミあそぼ～よ！！　しらさぎ小低パート	1980	12	住吉セツルメント
	2	民主的番長・・新今宮小高パート・・	1980	12	住吉セツルメント
	3	日五小低OF NITTO　フレンド　80年阪セツ連大会に向けて	1980	12	日東セツルメント
	4	ふれあいPart9　日東セツル日五小高男PA正式レポート　第13回阪セツ連大会に向けて	1980	12	日東セツルメント
	5	星くず　第13回阪セツ連大会自主レポ	1980	12	衣摺セツルメント
	6	みんなのあそびば　ちびっこひろば　第13回阪セツ連大会正式レポート	1980	12	衣摺セツルメント
	7	心の汗	1980	12	衣摺セツルメント
	8	第13回阪セツ連大会正式レポート　あそび　なんにしよう？	1980	12	衣摺セツルメント
	9	第13回阪セツ連大会正式レポート　おちこぼれ	1980	12	衣摺セツルメント
835		実践記録　パート会　H4度(背表紙)	1992		住吉セツルメント
836		実践記録	1991		住吉セツルメント
837		産まない自由とは何か　小さな生命を見つめて	1974	11	大阪成蹊女子短期大学日本文化研究会
838		キャンプへの取り組み　仙台保健部セツルメント子供会大梶地区でこぼこパート	不明		仙台保健部セツルメント
839		連合委員会報告	1963	5	全国学生セツルメント連合委員会
840		東住吉セツル　活動報告	1962	12	東住吉セツルメント
841		憲法問題に関して—川崎セツルメントからのよびかけと報告—	1962	6	川崎セツルメント

842		御殿町班1年パート4～5月活動のまとめ	不明		氷川下セツルメント
843		セツルメント運動の意義と現代的課題－坂下セツル—	不明		坂下セツルメント
844		保存用 （2ページ目に「実行委員会総括」とタイトルがある）	不明		全国学生セツルメント実行委員会
845		全セツ連大会27回	1973	8	不明
846		全セツの歴史	不明		不明
847		大会年一回化のための調査	1974		全セツ連書記局
848		全国集会in大阪　感想文	1978?		夕陽丘セツルメント
849		ALL JAPAN SETTLEMENT めいぼだよ～ん4	1978?		中央実行委員会
850		新入生歓迎ハイキング　主題・大阪府学生セツルメント連合	1988	4	大阪府学生セツルメント連合
851		バラ資料数点	不明		不明
852		81.12.22・23　全代K　全国代表者会議—討論資料—	1981		全国の学生セツルメント第36期書記局
853		無題ファイル	不明		
	1	幼Pの実践	1974		夕陽丘セツルメント
	2	子供会ノート　さくらんぼ	1972	6	夕陽丘セツルメント
	3	さくらんぼ　第13号	1972	11	さくらんぼ子供会
	4	さくらんぼ	1972	11	さくらんぼ子供会
	5	冬の星座	不明	2	さくらんぼ子供会
	6	さくらんぼ	不明	2	さくらんぼ子供会
	7	さくらんぼ	1973	1	さくらんぼ子供会
	8	全セツ連大会　自主レポート	1975	3	夕陽丘セツルメント
	9	自主レポート『父母とともに歩む子ども会』おかあさんといっしょ	1972		夕陽丘セツルメント
	10	天王寺区下寺町・伶人町・夕陽丘町・逢坂上之町・逢坂下之町・椎寺町・上錦屋町　遊び場の問題について	1973	11	夕陽丘セツルメント
	11	リヤカーのうた	1974		夕陽丘セツルメント
	12	幼児をめぐる生活（手書き）	1974		夕陽丘セツルメント
	13	幼児パート：実践レポート　阪セツ連交流会用	1973	6	夕陽丘セツルメント
854		リフレッシュ'94全国セツルメント集会in千葉　水房総第1－第4号	1994	3	こぶしセツルメント
	1	1月会議　会議報告	不明		
	2	江戸はえェどォ　第5号	1996	2	95 3月集会情宣局
	3	江戸はえーど　くつひもを斬る号	1995	12	95 3月集会情宣局（北海道）
	4	江戸はえ～ど～　第1号	1995	11	95 3月集会情宣局
855		施設の資料			
	1	1995年度　年間総括　'95年度の反省と'96年度に向けての目標	1996	4	住吉セツルメント
	2	社会福祉法人　東光学園	不明		東光学園
	3	社会福祉法人　南湖会　泉ヶ丘学院	不明		泉ヶ丘学院
	4	ナニイとイザベル（犬養道子著「私のヨーロッパ」よりコピー）	不明		新潮選書
	5	遊びについての資料	不明		不明
	6	子どもの描いた絵	不明		不明
	7	メモ、実践記録	不明		不明

	8	地図(堺市金岡・初芝地区)	不明		不明
	9	心身障害児・者短期入所事業　友だちの家	不明		東光学園
	10	愛育社現況(平成5年9月)	1993		愛育社
	11	社会福祉法人　大阪児童福祉事業協会　児童養護施設　清心寮要覧	不明		清心寮
856		ほほえみ　No5　第37回全国学生セツルメント連合大会にむけてin仙台	1982	3	日東セツルメント
857		ぼくら　いまここに　第7号　XRS36大会によせて	1981	3	ずんがりセツルメント
858		幸泉セツルメント　中高パート　ひろゆき全体子供会中高でやろーぜ！！	不明		幸泉セツルメント
859		ねえいっしょに勉強しようよ　全セツ連36大会参加レポート	1981	3	国見セツルメント
860		36大会　課題別分科会「組織・執行部」によせて　学ぶ場の充実をめざして―於　東大―	1981		市川セツルメント執行部
861		全セツ連36東京大会	1981	3	ヤジエセツルメント
862		全セツ連36大会	1981	3	島田一ツ山セツルメント
863		全国学生セツルメントの会　3月集会感想文集	1995	4	Theセツルメント
864		関セツ機関紙かがり火	不明		大阪女子大セツルメント
	1	関西の全セツラーへの訴え	1967	10	関西セツルメント連合書記局全セツ連第16大会実行委員会
	2	全セツ実行委ニュースNo2	不明		実行委員会情宣部
	3	かがり火	1967	10	関セツ連書記局
	4	かがり火	1967	10	関セツ連書記局
	5	実行委ニュースNo3	不明		実行委員会情宣部
	6	かがり火　第2号	不明		関セツ連書記局
	7	かがり火　No.3	不明		関セツ連書記局
	8	かがり火[阪学文特集]	1967	11	関セツ連書記局
	9	かがり火	1966	11	関セツ連書記局
	10	かがり火No7	1966		関セツ連書記局
	11	関セツ連ニュース　かがり火No6	1966	10	関セツ連書記局
	12	かがり火　第4号	不明		関セツ連書記局
	13	かがり火　No.1	不明	2	関セツ連書記局
865		朝の詩　1973～1977　No.25～50			阪セツ連書記局
	1	朝の詩　第二十五号	1974	4	阪セツ連書記局
	2	朝の詩　全代K特集　第26号	1974	6	阪セツ連書記局
	3	朝の詩　No21	1973	11	阪セツ連書記局
	4	週刊　朝の詩　No.23	1974	2	阪セツ連書記局
	5	あしたのうた　第8回大阪子どもまつり特集	1975	4	阪セツ連常任委員会
	6	朝の詩　第28号	1974	11	阪セツ連書記局
	7	朝の詩　第29号	1974	11	阪セツ連書記局
	8	朝の詩　No.30	1974	11	阪セツ連書記局
	9	朝の詩　第33号	1974	11	阪セツ連書記局
	10	あしたのうた　No.40　阪セツ連代表者会議にむけて	1975	10	阪セツ連書記局
	11	あしたのうた=特別号=　全国学生学術文化集会12月集会　全セツ連にとっての12月集会とは…	1975		阪セツ連書記局
	12	朝の詩　新春号　阪セツ連代表者会議特集	1976	1	阪セツ連書記局
	13	あしたのうた　第42号	1976	4	阪セツ連書記局

	14	あしたのうた　43号　交流会中実特集	1976	6	阪セツ連常任書記局
	15	あしたのうた　44号	1976	10	阪セツ連書記局
	16	～春の息吹めざして～朝の詩　第46号	1977	2	阪セツ連常任書記局
	17	朝の詩	1977	7	阪セツ連常任委員会
	18	あしたのうた　第10回阪セツ連大会開催にあたって	1977		阪セツ連常任書記局
866		36(※以降、判読不可)			
	1	地域の貧困	1981		ヤジエセツルメント
	2	仙台地域調査案内　第26回全セツ連大会参加作品	1981	3	宮城野セツルメント
	3	36回大会　分野別分科会(81.3. 14)　荏原小高パート	1981	3	大原セツルメント
	4	集団学習の意義と方法	1981		千葉商科大学Sr会
	5	第36回東京大会　しょうていレポート	1981	3	幸泉セツルメント
	6	第2弾　かつや おまえでっかくなったなあ	1981		くま
	7	36大会	1981	3	こぶしセツルメント
	8	おー うまいエラー	1981	3	島田一ツ山セツルメント
	9	熱き友よ　大阪版	1981		不明
	10	36大会情宣紙　てのひらNo.8	1981	3	全セツ連36大会中央実行委員会
	11	36大会情宣紙　てのひらNo.2	1980	11	全セツ連37大会中央実行委員会
	12	36大会情宣紙　てのひらNo.3	1980	11	全セツ連38大会中央実行委員会
	13	36大会　成功に向けて－　単実の手引き	1981	1	全セツ連39大会中央実行委員会
867		第20回　仙台学生セツルメント連合大会討論資料	1980	12	仙台学生セツルメント連合常任委員会
868		フレアイPARTⅡ　1978,第9回阪セツ連交流会に向けて　日五小低正式レポート	1978	7	日東セツルメント
869		こちら5・6Pa応答ねがいます　第9回阪セツ連交流会正式レポート	1978	7	住吉セツルメント
870		おまえらだぼすけや！　第9回阪セツ連交流会	1978		住吉セツルメント
871		第9回阪セツ連交流会に向けて『学習会』レポート	1978		大阪基督教短大Sr会
872		第9回阪セツ連交流会　大学別分科会正式レポート	1978	7	大阪府立大学セツラー会
873		どろんこの天使たち	1978	7	住吉セツルメント
874		おまえらほんまに仲間か！PARTⅢ	1978	7	住吉セツルメント
875		白さぎ3・4Pa　音楽隊	1978	7	住吉セツルメント
876		たんぽぽ　第10回阪セツ連記念交流会大学別分科会正式レポート	1979	7	日東セツルメント
877		住吉実践レポート’73	1973		住吉セツルメント
	1	73. 6.4　Pキャップ連絡会議に向けて　住吉セツルメント中P男子部実践REPORT	1973		住吉セツルメント
	2	第26回全セツ連大会　自主レポート	1973		住吉セツルメント
	3	ねずみの学校　中パ　12月阪セツ連大会正式レポート	1973or1974		住吉セツルメント
	4	明日へはばたく住吉セツル幼パ　でんでんむし	1973		住吉セツルメント

878		阪セツ連資料			
	1	中学生の生活と要求	不明		不明
	2	仲間の詩　第15回友好祭にむけて	不明		夕陽丘セツルメント
	3	衣摺セツルメント夏合宿　8月27日～8月30日	不明		衣摺セツルメント
	4	「うらんちゃん」第2号　第4回阪セツ連交流会成功万才！	1973		機関紙部
	5	阪セツ連新歓アピール！	不明		書記局委員長キッド
	6	＜第五号＞実行委員会ニュース	1970		第三回阪セツ連大会実行委員会
	7	第三回阪セツ連大会　号外	1970		大会実行委員会
	8	すいがらNo.3	1973		第4回阪セツ連交流会実行委員会
	9	すいがらのつづき	1973	6	第4回阪セツ連交流会実行委員会
	10	すいがらNo.4	1973	6	第4回阪セツ連交流会実行委員会
	11	すいがらつづき　No.4	1973	6	第4回阪セツ連交流会実行委員会
	12	すいがら　No.4	1973	6	第4回阪セツ連交流会実行委員会
	13	実行委員会ニュース	1973	5	第4回阪セツ連交流会実行委員会
879		大学問題	不明		住吉セツル
	1	理論学習シリーズNo2　新大管法抜粋　大学運営と学生の自治他	不明		阪セツ連常任出版局
	2	中教審と大学問題	不明		不明
880		第16回　大阪府学生セツルメント連合大会討論資料	1983		大阪府学生セツルメント連合書記局
881		新今宮地域			住吉セツルメント
		新今宮.パート会 議事録ノート　児童部	1986		住吉セツルメント
		N宮　PARTnote	1986		住吉セツルメント
		ルーズリーフ・原稿数点	不明		住吉セツルメント
882		昨年の活動方針及び活動のまとめ	不明		住吉セツルメント
883		きずりっ子　第八回阪セツ連交流会に向けて	1977		衣摺セツルメント
884		衣摺セツルメント　幼児パート	1977		衣摺セツルメント
885		江戸はえェどオ　最終号	1996	4	96 3月集会情宣局(The)
886		SETTLEMENT　95	1995		夕陽丘セツルメント
887		全国学生セツルメントの会　3月集会	1998		The　Settlement
888		3月集会関係バラ資料（※A3資料を折って1つにまとめられている）			
	1	阪神大震災・被災者への支援の呼びかけ	1995		全国セツルメントの会・三役および代表者一同
	2	1月会議報告	不明		中央実行委員会
	3	3月集会・会議報告	不明		中央実行委員会
	4	全セツ3月集会 in東京　開催地（いちのえ）総括	不明		え一む
	5	'95 5月会議　報告	1995		中央実行委員会
	6	全国学生セツルメントの会　'96 3月集会　情宣局総括報告	1996		Theセツルメント

	7	もういくつねると…3月だ!!	不明		中央実行委員会
	8	北からきたの♡　第5号	不明		中央実行委員会
	9	北からきたの♡	1995	1	中央実行委員会
	10	北からきたの♡　第3号	1995	1	中央実行委員会
	11	中実役職決定♡	不明		中央実行委員会
	12	北からきたの♡　No.2	1994	12	中央実行委員会
	13	えぞはえーぞ	不明		中央実行委員会
	14	北からきたの♡　第1号	1994	11	中央実行委員会
	15	北かきたの♡　第0号	1994	11	中央実行委員会
889		感想文集　’94　8月集会	1994	11	Theセツルメント
890		せつるめんと	不明		大阪府立大学・大阪女子大学セツルメント
891		第37回全セツ連大会　第2回定期連合委員会　発言視点	1982		
892		第6回阪セツ連交流会レポート			
	1	ねずみの学校　何故に我々は勉強会をやるのだ？	1975		住吉セツルメント
	2	あしたてんきになぁれ　阪セツ連交流会分野別分科会正式レポート	1975	7	住吉セツルメント
	3	雨あがり　阪セツ連交流会正式レポート	1975	7	住吉セツルメント
	4	シャベル班実践レポート　阪セツ連交流会用　ちゃりんこ	1975	7	住吉セツルメント
	5	第6回阪セツ交流会正式レポート	1975	7	住吉セツルメント
	6	子供の生活と文化　第6阪セツ連交流会	1975	7	日東セツルメント
	7	阪セツ連交流会　青高Pa実践レポート	1975		日東セツルメント楡の会
	8	どろんこの天使たち	1975		住吉セツルメント
	9	このゆびとーまれ　第7号	1975	6	東淀川セツルメント
	10	フェニックス	1975		夕陽丘セツルメント
893		青春の詩　友好祭	不明		住吉セツルメント
894		16回友好祭　5/27 Hello Opening Fes	不明		住吉セツルメント
895		学テ裁判が私達に問いかけるもの―’76年度友好祭展示企画	1976		住吉セツルメント
896		統一ハイク　Gパン	不明		住吉セツルメント
897		白鷺祭パンフ(府大Sr会の研究発表)			
	1	この子らの未来を考える	1977		住吉セツルメント
	2	きいてよ　ボクらの叫び声を　”つき落とし・幼女殺し事件を通して”	1979	11	住吉セツルメント
	3	セツルメント　第27回大学祭	1975		住吉セツルメント
	4	映画　どぶ川学級	1974	11	住吉セツルメント
898		朝の詩　74年→76年(23・26・37・40・43)			
	1	朝の詩　第6号	1972	6	阪セツ連書記局
	2	朝の詩　第26号　全代K特集	1974	6	阪セツ連書記局
	3	朝の詩　第二五号	1974		阪セツ連書記局
	4	朝の詩　No. 37　特集　N歓！	1975		阪セツ連常任出版局
	5	朝の詩	1977	7	阪セツ連常任委員会
	6	あしたのうた　43号　6.23　交流会・中実特集	1976	6	阪セツ連常任書記局
	7	朝の詩　臨時号	1978	2	阪セツ連常任書記局
	8	朝の詩　新春号	1976		阪セツ連常任書記局
	9	朝の詩　臨時増刊―冬休みの過ごし方―	1978		阪セツ連常任書記局
	10	あしたのうたNo. 40　阪セツ連代表者会議にむけて	1975		阪セツ連書記局

	11	つくば　第2号　俺らセツラー機関紙	不明		不明
	12	朝の詩　第12号　子どもまつり特集号	1973	4	
899		第12回交流会　府大Sr会レポート　保存版　'81.7.11～13			府大セツラー会
	1	第13回　'82 阪セツ連交流会　大学別分科会　正式レポート	1982		大阪府立大学セツラー会
	2	第12回大阪府学生セツルメント連合交流会	1981		大阪府立大学セツラー会
900		全st大会31回　府大Sr会レポート　'75 12月集会.9・11交流会.35大会・32大会			
	1	第31回全セツ連大会大学別分科会レポート　大学セツラー会執行部の果たすべき役割	1976		大阪府立大学セツラー会執行部
	2	第9回阪セツ連交流会　大学別分科会正式レポート	1978		大阪府立大学セツラー会
	3	府大セツラー会　いんじゃんSr会　第11回阪セツ連交流会正式レポート	1980		大阪府立大学セツラー会
	4	大阪府立大学セツルメント　35大会　正式レポート　いんじゃんSr会	1980		大阪府立大学セツラー会
	5	現代学生セツルメント運動の展開～同じ喜びと悲しみの中で～	1981	6	住吉セツルメント
901		全セツ29大会小パレポート			
	1	第29回全セツ連北海道大会　8/8.9.10	1974		札幌セツルメント
	2	私たちにもこんな力が	1974		あらぐさセツルメント
	3	第29回全セツ連大会自主レポート　ひとりの問題はみんなのもの！	1974		どんぐり会D班
	4	札幌セツルメント集中実践レポート　西岡　菊木　苗穂　地区	1974		
	5	全セツ連29大会「小学生の集団の必要性と集団づくり」サブレポート　十字架ポン実践	1974		帯広じゃがいもセツルメント
	6	おおいずみセツル（自主レポート）	1974		おおいずみセツルメント
	7	ブンシュウ　桃山学園見学感想文集	1974	8	岩本町セツルメント
	8	どんぐり班(小パ)　実践レポート～ヤタデ～機関紙　6月30日阪セツ連交流会	1974		
902		第37回全セツ連大会　第2回定期連合委員会　発言視点	1982		
903		全セツ連31大会　課題別分科会レポート	1976	3	川崎セツルメント
904		実践レポート集　第10回京セツ連セツ連大会	1972	12	京セツ連
905		らいらっく　第伍号	不明		全セツ連
906		第11回阪セツ連交流会　復活の日	1980		衣摺セツルメント
907		第11回阪s熱連交流会正式レポート　ナイチンゲールの悩み	1980		大阪府立公衆衛生専門学校Sr会
908		海 うみ うみ うみ 絶対やで♡　第11回阪セツ連交流会正式レポート	1980		住吉セツルメント
909		せせらぎ　第11回阪セツ連交流会正式レポート　下三小高～中学生パート	1980		日東セツルメント
910		ひき潮　阪セツ連正式レポート	1980		夕陽丘セツルメント
911		Fresh Invader　日東日五中高パby虎吉	1980		日東セツルメント
912		結婚記念文集　二人に乾杯	1982		結婚祝賀会実行委員

913		無題ビニル袋			
	1	全セツ連36東京大会にむけて　ひとりひとりを大切にすべての矛盾にくらいついていく姿勢　'80総括と大会レポート	1981	3	いちのえセツルメント
914		えくぼ　阪セツ連交流会公式レポート	1980	7	日東セツルメント関短セツラー会
915		たんぽぽ	1980		日東セツルメントキリ短セツラー会
916		住吉の機関紙No．１　'80学園祭大々特集	1980		住吉セツルメント
917		日東セツル　82.夏合宿　by琵琶湖千鳥荘	1982	8	日東セツルメント
918		第11回阪セツ連大会レポート	1978	12	住吉セツルメント
	1	ガキッタレ　PartⅡ	1978	12	住吉セツルメント
	2	あした天気になあれ　住吉・新今宮3・4年生パート　第11回阪セツ連大会にむけて	1978	12	住吉セツルメント
919		課題別レポート　ブルート			
	1	75'　12月集会　課題別分科会レポート―大学Sr会の原則的内容―	1975	12	住吉セツルメント
	2	高校生集会＜教科書問題＞―ゆがめられていく教科書―			千代田高等学校
	3	第1回大阪セツルメント統一ハイキング　日東・猪飼野・東淀川・衣摺・夕陽丘・庄内・住吉	1974	5	阪セツ連実行委員会
	4	第5回統一外大祭　大阪外大セツルメント　シンポジウム　セツルメントのあゆみ	1974	11	夕陽丘セツルメント
	5	第6回阪セツ連交流会　都市問題―課題別分科会レポート―	1975		日東セツルメント
	6	子供の生活と文化　第6阪セツ連交流会・AT府大	1975		日東セツルメント
920		関St連			
	1	全セツ連32大会　児童部レポート―子どもをめぐる情勢と私達の課題―	1977		いちのえセツルメント
	2	氷川下セツルメント　らしんばん　45			氷川下セツルメント
	3	全セツ連36大会　課題別レポート　かぜの子まつり　広場と僕らと青空と	1981		池袋セツルメント
	4	中江光雪荘　生活実態調査報告書	1961	12	中江セツルメント
	5	夏合宿　討論資料　昭和51年度	1976	8	東淀川セツルメント
	6	1969　氷川下祭典総括	1969		氷川下セツルメント
	7	12月集会レポート　現代の貧困化　生活をめぐる諸問題	1972		氷川下セツルメントレポート作成員会
	8	大21回全セツ連大会幼児部分科会レポート　かいものごっこの実践	1970	8	氷川下セツルメント
	9	子どもにとっての集団作りの価値と役割	1977		氷川下セツルメント
	10	36大会レポート　駒場祭への取り組みby関セツ連北鹿浜セツル東C部会	1981		北鹿浜セツル
921		関セツ連			
	1	遠心力　第3号	1977	3	川崎セツルメント事務局
	2	第27回　東京大会　自主レポート　にこにこ班の子どもたち	1973	7	小平セツルメント
	3	第5回わらしこもちつき大会	1981	3	境南セツルメント
	4	幼児と生活＝田中洋子ちゃんのこと＝	1972	3	氷川下セツルメント
	5	第33回全国学生セツルメント連合大会討論資料	1978	3	全国学生セツルメント連合書記局

922		合宿(総括・夏)'70～'77			
	1	うぶごえ＝夏合宿に向けて＝	1971	7	住吉セツルメント
	2	伊吹をめざして　昭和50年度9月3日～7日　なつの総括方針合宿	1975	9	住吉セツルメント
	3	なつの総括方針合宿まとめ　50,9.3-7　於：伊吹山	1976	3	住吉セツルメント
	4	ハーイ！！赤目でがんばりマース　'77年度住吉セツル夏合宿	1977	8	住吉セツルメント
	5	やどちょう　清楚な滝の民宿たまき	1977	8・9	住吉セツルメント
	6	無題	1977	9	住吉セツルメント
923		関セツ連実践レポート			
	1	第22回全セツ連大会　幼児部レポート	1971	3	堀之内セツルメント
	2	保健部ケースパート夏の集中実践レポート　大塚3丁目・白山3丁目の地域の老人調査	1976	7	氷川下セツルメント
	3	全セツ連32大会　児童部レポート―子どもをめぐる情勢と私達の課題―	1977		いちのえセツルメント
	4	川崎セツルメント古市場老人班実践レポート　―全セツ連32回大会に向けて―生きることの重さを感じて	1977	3	川崎セツルメント
	5	第32回全セツ連大会にむけて　けやきの中で	1977	3	境南セツルメント
	6	全セツ連32回大会　分野別分科会小学生部	1977	3	境南セツルメント
	7	小低ガキンコ班　ぐみの会　関セツ連	1979		
	8	全セツ連36大会　分野別分科会　パイレーツ班の利英チャン	1981		池袋セツルメント
	9	36大会　分野別分科会　荏原小高パート　レポーター すみれ＆ドラえもん	1981	3	大原セツルメント
	10	36大会　分野別分科会　東ヶ丘小低パート　レポーター ポテロング	1981	3	大原セツルメント
	11	第36回東京大会　しょうていレポート	1981	3	幸泉セツルメント
924		ごんたくれ　'74～	1982		日東セツルメント事務局
	1	ごんたくれ　'74～◂特別号▸　ごくろうさま！阪セツ連常任	1976	7	阪セツ連事務局
	2	ごんたくれ 76'夏号　No.8　うて 夏に向って！	1976	6	阪セツ連事務局
	3	ごんたくれ'76春号　No.7	1976		阪セツ連事務局
	4	ごんたくれ6号　'75	1975		阪セツ連事務局
925		科学的社会主義への入門			
	1	第11回12月集会　全セツ連理論交流会　現代学生セツルメント運動論	1975	12	全国学生セツルメント連合
	2	33大会講演―総括の意義と方法―	1978		○○
	3	科学的社会主義への入門・経済学①－⑧　『賃労働と資本』をテキストに	不明		服部文男
	4	講座・社会発展史　①－⑦	不明		安藤貞男
926		第17回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料	1984	12	大阪府学生セツルメント連合書記局
927		無題ファイル			
	1	第15会拡大連合委員会＝討議資料＝	1964	12	東住吉セツルメント
	2	35愛知大会≪課題別分科会≫－地域調査の意義と方法―地域の貧困	不明		ヤジエセツルメント
	3	のぶく～ん　やめちゃうのお？　第36回全国学生セツルメント連合大会	1981		島田一ツ山セツルメント
	4	愛セツ連　井戸田セツルメント高校生パート『今日はパス！』	1981		井戸田セツルメント
	5	たっくんがんばれ！　全セツ連36大会分野別レポート	1981		井戸田セツルメント
928		第14回大阪府学生セツルメント連合大会討論資料	1981		大阪府学生セツルメント連合書記局

929		ごんたくれ			
	1	第13号　ごんたくれ	1977		阪セツ連事務局
	2	ごんたくれ’77　5月号	1977	4	阪セツ連事務局
	3	ごんたくれ　第11号　77’はるのごうⅡ	1977		阪セツ連事務局
	4	ごんたくれ’76春号　No.7	1976		阪セツ連事務局
	5	ごんたくれ 76’夏号　No.8　うて 夏に向って！	1976	6	阪セツ連事務局
	6	ごんたくれ　創刊号	不明		
930		児童心理学　テキストブック心理学(4)	1979		有斐閣ブックス
931		79’ラーキャン・N歓			
	1	ふれあい　日五小高男子パート	1979	6	日東セツルメント
	2	しもさん小低パート実践レポート	1979	6	日東セツルメント
	3	79日東セツルメントラーニングキャンプに向けて　せせらぎ	1979		日東セツルメント
	4	ラーキャン実践レポート　飛びたとう	1979		日東セツルメント
	5	丸ひばち　スペシャル—’79年度Larning　Campに向けて	1979		日東セツルメント
	6	かくれんぼ　ラーニングキャンプに向けて	1979		日東セツルメント
	7	たんぽぽ　キリ短	1979		大阪キリスト教短期大学セツラー会
932		幼児パート　レポート集			
	1	大阪セツルメント連合交流会　幼児部活動	1969	7	猪飼野セツルメント
	2	うさぎさんでておいで　第4回阪セツ連大会	1971		住吉セツルメント
	3	でんでんむし	1974		住吉セツルメント
	4	でんでんむし　阪セツ連大会住吉セツルメント幼パ自主レポ	不明		住吉セツルメント
	5	実践レポート　日五幼児部	1975		日東セツルメント
	6	かくれんぼ　母と共に歩む幼児部活動	1976		住吉セツルメント
	7	幼児部活動レポート	1970	9	井戸田セツルメント
	8	幼児と生活＝田中洋子ちゃんのこと＝	1972	3	氷川下セツルメント
	9	父母保母と共に歩む幼児部活動	不明		島田一ツ山セツルメント
	10	12/11.12愛セツ連大会　ヤジエセツルメント＝むぎっこ＝幼児部	1976	12	ヤジエセツルメント
	11	第16回愛セツ連大会	1976	12	井戸田セツルメント
	12	16回愛セツ連大会正式レポート　幼児をめぐる情勢と幼児の成長・発達	1976	12	ヤジエセツルメント
	13	ありんこ　全国学生セツルメント連合幼児部パート機関紙	1969	9	八千代町セツルメント
933		第7回阪セツ連交流会レポート	1976		
	1	七月の空に　第7回大阪府学生セツルメント連合交流会討論資料	1976	7	大阪府学生セツルメント連合書記局
	2	よってらっしゃい　第7回阪セツ連交流会レポート	1976		住吉セツルメント
	3	３＋４＝７？　さんたすよんはなな？！	1976		住吉セツルメント
	4	かくれんぼ　父母とともに歩む幼児部活動	1976		住吉セツルメント
	5	第7回交流会正式レポート—住吉セツル2・3P	1976		住吉セツルメント
	6	空の下で　第7回阪セツ連交流会正式レポート住吉セツル新今宮6年パート	1976	7	住吉セツルメント
	7	今にみておれ！　住吉セツルメント新今宮中1パート　’76年4月～7月	1976	7	住吉セツルメント
	8	ねずみの学校　阪セツ連交流会中学2・3年パート正式レポート住吉新今宮地域	1976	7	住吉セツルメント
934		住吉実践レポート ’72			住吉セツルメント
	1	住吉セツル　小低パート　第3回阪セツ連交流会・分野別分科会	1972	6	住吉セツルメント
	2	住吉セツルメント小低パート　つくしんぼ　1972年4月～7月実践レポート	1972	7	住吉セツルメント

	3	おちめじる　シュークリーム「私、夢にまで子供会のことをみるんやで」	不明		住吉セツルメント
	4	＝1968年度＝C3111大阪府立大学住吉セツルメント運動方針決定	1968		住吉セツルメント
	5	太陽の讃歌	1972	5	住吉セツルメント
	6	でんでんむし　No.1 ’72・12・2	1972	12	住吉セツルメント
935		78　猪飼野夏合宿　1978.8.20～23	1978	8	
	1	夏合宿	1978	8	猪飼野セツルメント
	2	1978.7　第9回阪セツ連交流会にむけて	1978		猪飼野セツルメント
	3	どん幼　交流会report	1978	7	猪飼野セツルメント
	4	パープリンレポート　交流会1978.7.15～17に向けて　於：大教大池田分校	1978	7	猪飼野セツルメント
	5	猪飼野実践レポート　for第9回阪セツ連交流会　KoPa	1978	7	猪飼野セツルメント
	6	めんはっちん―第9回交流会に向けて―東淀川地域淡路地区幼小低Part	1978	7	猪飼野セツルメント
	7	第　回東淀川セツルメント前期総括・後期方針合宿討論資料	1978	8	東淀川セツルメント常任委員会
936		Sr会ノート　1994-　　鳥輪（うりん）	1994		住吉セツルメント
937		全セツ30大会			
	1	5人と2ひき荒野をゆく　49/4月～6月	1974	6	住吉セツルメント
	2	うた　阪セツ連大会3th	1972		阪セツ連書記局
	3	75’春　全セツ連30大会大学分科会レポート　みんしゅてき大学づくりめざして	1975		大阪府立大学セツラー会
	4	第31回全セツ連大会中実委　機関紙　きずな　第3号	1975	10	
	5	単セツ　大会実行委員会からの便り	1975	1	
	6	ハガキ1枚(第30回全セツ連大会参加アンケート)	1975	1	全セツ連30大会中央実行委員会
	7	全国のセツラーのみなさんへ	1975		第30回大会中央実行委員会財政局
	8	全セツ連30回中実情宣紙　第8号たいまつ	1975		全セツ連30大会中央実行委員会
	9	全セツ連30回中実情宣紙　新年号No.7たいまつ	1975		
	10	NS担当総括	不明		
938		81年度　夏合宿討論資料	1981		住吉セツルメント
939		赤目百人衆	1977	8	住吉セツルメント
940		1995年度　年間総括　☆’95年度の反省と’96年度にむけての目標☆	1996	4	住吉セツルメント
941		総括　大阪府立大学・大阪女子大学セツルメント	1993		大阪府立大学・大阪女子大学セツルメント
942		保育所総括	1990-		住吉セツルメント
	1	バラ資料数点	不明		
943		第6回全国学生セツルメントの会　3月集会	1995	3	中央実行委員会
944		金銭出納長	1991-		住吉セツルメント
945		全国学生セツルメントの祭典	1992		中央実行委員会

	1	せっかく三角　企画のパンフ	不明		
	2	全国学生セツルメントの祭典’92	1992		中央実行委員会
	3	バラ資料数点	不明		
946		道セツ連実践レポート			
	1	冬の集中実践＝総括集＝ぼくらいまここに	1975	2	ズンガリセツルメント
	2	札幌セツルメント—菊水地区小学生パート—自主レポート	不明		札幌セツルメント
	3	カニの山のぼり—シナリオ—＜第26回全セツ連大阪大会文化祭典に向けて—	1973		不明
	4	第23回全セツ連北海道大会にむけて　遊びとスポーツ(キャンプ大会)	1971		宮城野セツルメント
	5	あそびとスポーツ	1971	8	札幌セツルメント
	6	自主レポート　子ども会活動における一年間の流れ—子ども会の変化とセツラー—	1974	3	ズンガリセツルメント
	7	—大学分科会—サークルとしての要求をかかげた権利獲得・拡大の運動　ロックアウト問題	1976		北星大セツラー会
	8	全セツ連第32回大阪大会自主レポート　道セツ連　あらぐさセツル菜の花パート	不明		あらぐさセツルメント
	9	第33回ZSR大会自主レポート—児童部—　THE「入れてくれ」と言えたあいつ	1978	3	大谷地セツルメント
947		県セツ連実践レポート			
	1	第18回全セツ連分科会レポート　文化　あそび　スポーツ	1968	12	寒川セツルメント
	2	寒川セツルメント春合宿.討論資料	1981	3	寒川セツルメント
	3	組織執行部活動	1977		寒川セツルメント
	4	クリスマス会総括集	1972	3	寒川セツルメント
	5	全セツ連第21回大会レポート　ストラックル—中学生の遊び・文化・スポーツを通して—状勢をきり開ける地域と我々を！第2部	1970	8	寒川セツルメント
	6	年刊獅子族	1979		市川セツルメント
	7	実践レポート　まことちゃんの変遷	1978	3	坂下セツルメント
	8	集団の価値と役割　33大会　分野別分科会レポート　児童部	1978		市川セツルメント
	9	この指とまれ！　35大会レポート★寒川セツルメント風の子班幼児パート	1980	3	寒川セツルメント
	10	全セツ連36大会レポート　ありんこ	1981	3	寒川セツルメント
	11	36回大会　1981.3.13～16　東京	1981	3	こぶしセツルメント
948		各駅停車			
	1	各駅停車　創刊号	1972	12	東淀川セツルメント
	2	各駅停車　第2号	1973	1	東淀川セツルメント
	3	かくえき停車　第3号	1973	2	東淀川セツルメント
	4	各駅停車　第4号	1973	3	東淀川セツルメント
	5	各駅停車　第5号	1973	4	東淀川セツルメント
	6	各駅停車　第6号	1973	5	東淀川セツルメント
	7	各駅停車　号外	1973	5	東淀川セツルメント
949		写真数点(「旅行の写真　トム君の方」)	不明		住吉セツルメント
950		1978　実践記録	1978		住吉セツルメント
951		ぐずる　5・6年パート　くるるです	1976		住吉セツルメント
	1	3月6日　実践レポート	1976		住吉セツルメント
952		1978年度幼児パート　新今宮　府大Sr会資料	1978		府大セツラー会
953		中学生パート　実践Report　府大’74・9～	1974		住吉セツルメント

954		府大小学生パート　実践Report'74・9～	1974		住吉セツルメント
955		かざぐるま　全セツ連大会にむけて	1978		猪飼野セツルメント
956		おれ　子ども実行委員やりたいんだ　全セツ連34大会3月17～20日　於,京都立命館大学	1979		一之江セツルメント
957		阪セツ連猪飼野中高パート　38大会用　全国のセツラーのためにこの一冊を	1983		猪飼野セツルメント
958		やったあクリスマス会だ　1980年度後期トロッコセツルメント中学生パート基調　1981年3月13～16　第36回全セツ連大会レポート	1981		トロッコセツルメント
959		全セツ連理論交流集会　分野別分科会/地域に根差した中P活動/	1982		ヤジエセツルメント
960		12月集会に向けて＝中学生の生活と要求＝つぼみ	1975		日東セツルメント
961		Reconstruction 阪セツ連　住吉セツルメント　新今宮中高青パート	1983	3	住吉セツルメント
962		せせらぎ一全セツ連大会に向けて一（課題別分課会正式レポート）	1981	3	日東セツルメント
963		もうあかんで　中学生高校生青年パート　大阪府学生セツルメント連合住吉セツルメント新今宮地域	1981	3	住吉セツルメント
964		第32回全セツ連大会にむけて　ぶつかり合いの中で　中学生をめぐる情勢・生活・要求	1977	9	日東セツルメント
965		新入生歓迎ハイキング！1989.4.23　主催：大阪府学生セツルメント連合	1989		
	1	SETTLEMENT　さあ君だ きみたちだ このセツルをつくっていくのは ここから今から　82N歓用パンフ	1982		阪南大セツルメントパンフレット編集猫理
	2	大阪府学生セツルメント連合　新入生歓迎ハイク　1986年	1986	4	大阪府学生セツルメント連合
	3	新入生歓迎ハイク　1987.4.26　大阪府学生セツルメント連合	1987	4	大阪府学生セツルメント連合
	4	セツルメント新入生歓迎ハイク　4月24日　by…トマト	1988		阪セツ連新歓ハイク実行委員会
	5	大阪府学生セツルメント　春の新入生歓迎ハイクのパンフレット於 大阪城公えん！	1989	4	89阪セツ連新歓ハイク実行委員会
	6	書籍コピー（3.「私の仲間」とはpp35-54）	不明		
	7	交流会実行委員会記録	不明		
	8	バラ資料（新歓ハイク実行委員会会議録、総括など）	不明		
966		東淀合宿			
	1	かごめ　日曜学校　幼児部　機関紙	1973	5	東淀川セツルメント
	2	地域教育運動における学生のあり方　第4回阪セツ交流会課題別分科会地域教育運動東淀川セツルメント教育懇談会パート	1973		東淀川セツルメント
	3	教育懇談会のあゆみ　大阪市東淀川区東淡路"母と子の会"	1973	12	東淀川セツルメント
	4	子ども会だより　＜新千里子供会機関誌＞	不明		東淀川セツルメント
	5	基礎知識　セツルメント　［東淀川セツルメント常任委員会］	1975	5	東淀川セツルメント
	6	東淀川　かおめ　創刊号　幼児部機関紙	1972	11	東淀川セツルメント
	7	7月定例合宿　1973.7.14-15 瑞光寺	1973	7	東淀川セツルメント
	8	新歓合宿　場所：久本寺	1973	4	新歓合宿実行C

967		せつるめんと　もちつき大会・たまご♡たまご	不明		住吉セツルメント
968		こんにちは～　セツルメントです。 ≪76N歓用パンフ≫	1976		猪飼野セツルメント
969		保健部セツルメント 松原 児童部レポート 1990年3月12日～14日 全国学生セツルメントフェスティバルin千葉	1990		保健部セツルメント
970		第35回全セツ連大会　於 愛知 日本福祉大　1980.3.14～17　幼児の発達と集団　愛セツ連ヤジエセツルメント幼児Part　げんこつ班	1980	3	ヤジエセツルメント
971		はないちもんめ 35大会レポート 千葉県セツ連 寒川セツルメント 愛生町班幼児パート	1980	3	寒川セツルメント
972		第16回 交流会 うさぎとかめ 一八戸ノ里 幼児パートーBY衣摺	1985		衣摺セツルメント
973		幼児部レポート 第32回全セツ連大会　大阪日東セツルメント（日五）	1977		日東セツルメント
974		ひま→わり　全国セツルメント32大会にむけて　日東セツルメント下寺町幼児部	1977		日東セツルメント
975		第31回全セツ連大回に向けて　実践レポート　大阪日東セツルメント幼児部	1976	3	日東セツルメント
976		住吉実践レポート’79			
	1	第11回阪セツ連大会レポート　ガキッタレ　PartⅡ　住吉SETTLEMENT　新今宮地域1・2年生Part	1978		住吉セツルメント
	2	西遊記　住吉セツル青年会阪セツ連11大会レポート	1978		住吉セツルメント
	3	クレヨンPart2　32大会に向けて　大阪 住吉 白鷺幼児Part正式レポート	1978	3	住吉セツルメント
977		HSR.住吉St.Fanta　（Campusレポート用紙）	1991		
	1	全国学生セツルメントの会会則（草案）　1枚	1991		
	2	全国学生セツルメントの会　体制（案）　1枚	1991		
	3	1990年度のあゆみ（案）　1枚	1991		
	4	その他記録（Campusレポート用紙1冊）	1991		
978		バラ資料数点（自己総括・実践記録）	1988		夕陽丘セツルメント
979		貧困に関する統計資料のコピー	不明		不明
980		’82　住吉事務局用	1982		住吉セツルメント
981		青クリアフィル			
	1	第25回全教ゼミ京都大会　79.3/12-15　チケット	1979		全教ゼミ
	2	全セツ連基調コピー（1970年代後半と推察）	不明		全国学生セツルメント連合
	3	’78住吉セツル夏合宿討論資料作製に向けて！	1978		
	4	1月27日ひまわりの実践レポート	1979		住吉セツルメント
	5	総括の意義と方法（資料）			○○
	6	第9回12月集会　全セツ連理論交流集会　討論資料　12月15日～17日京都	1973		全国学生セツルメント連合
982		住吉　新今宮　実践レポート’81	1981		住吉セツルメント
	1	私市ハイキング	1988		住吉セツルメント

	2	どろんこ子供会　1988.10.8発行	1988	10	住吉セツルメント
983		新今宮3・4Pa　実践レポート	1978		住吉セツルメント
984		ノート　’90.7.20-’90.10.08（※パート会、代表者会議記録など）	1990		住吉セツルメント
985		ノート　’90.10.15～’90.12.15（※阪セツ連書記局会議、行事の話し合い記録など）	1990		住吉セツルメント
986		ようこそ　第12回交流会に向けて　日東小低　その2パート　1981.7.11～13　於・市大	1981		日東セツルメント
987		小低フレンド　81交流会に向けて　NITTO　GORO特別号	1981		日東セツルメント
988		日東小高パート　ふれあいPart19　第15回阪セツ連大会に向けて　12月3－5日	1982		日東セツルメント
989		せせらぎ　大阪セツルメント連合　1982 12.4,5	1982		日東セツルメント
990		あんたらあそんだらへんで～！　日東st下寺小高　57,7月10・11・12日交流会に向けて	1982	7	日東セツルメント
991		第16回阪セツ連大会正式レポート　がきったれ　住吉セツルメント新今宮小低パート	1983	12	住吉セツルメント
992		ぼくらの島　衣摺セツルメント八戸ノ里小高Pa　正式レポート	1983	12	衣摺セツルメント
993		なかよしこよしNo7　/第16回阪セツ連大会に向けて/　’83,12.10・11　於 大阪市大　日東セツルメント下寺小低パート	1983	12	日東セツルメント
994		王さんだぁ～れ？　白鷺小低パート正式レポート	1982	7	住吉セツルメント
995		しゃぼん玉　白鷺小低パート　第12回交流会レポート	1981	7	住吉セツルメント
996		子ども会なんか・・・　’82 OSAKA SETTELEMENT CONV. PRACTICE REPORT	1982	12	住吉セツルメント
997		まぁた来たん　’82　第13回阪セツ連交流会　正式レポート　新今宮小高パート	1982	7	住吉セツルメント
998		ひぃふぅみゆき　’81　阪セツ連交流会レポート　住吉新今宮地域小高パート	1981	7	住吉セツルメント
999		第14回阪セツ連大会正式レポート　花いちごんべ　新今宮小低パート	1981	12	住吉セツルメント
1000		37大会〇〇部レポート『冬の集実』より　西多賀ブロックです	1982	3	仙台保健部セツルメント
1001		鹿野セツルメント小学生Part　アパートブロック―分野別分科会レポート―	1982	3	鹿野セツルメント
1002		阪セツ連　日東セツル　日東小高パート　ふれあい　Part16　第37回全国学生セツルメント連合大会に向けて	1982	3	日東セツルメント
1003		ようこそ　－阪セツ連大会に向けて―日東セツルメント日東小低②パート　正式レポート	1981	12	日東セツルメント

1004		第12回阪セツ連交流会正式レポート　うち悪ないもん　がきったれPart　住吉セツルメント新今宮小低パート	1981	7	住吉セツルメント
1005		第13回阪セツ連交流会正式レポート　がきったれ　すみよしせつる新今宮小低パート	1982	7	住吉セツルメント
1006		第15回阪セツ連大会　がきったれ　住吉セツルメント新今宮小低正式レポート	1982	12	住吉セツルメント
1007		あんたらあそんだれへんで 臨時創刊号! 交流会にむけて ’81.7.11～7.13	1981	7	日東セツルメント
1008		いつまでも夢を！　衣摺5・6Paの自主レポート　阪セツ連交流会	1982		衣摺セツルメント
1009		第37回★★★全国大会 分野別・課題別分科会レポート　仙セツ連杜の子セツルメント小低パート	1982		杜の子セツルメント
1010		1984.7.14～7.16第15回阪セツ連交流会にむけての正式レポート 花には太陽を子どもらには…　創刊号	1984	7	日東セツルメント
1011		”そっちの王さん一だぁれ？”第15回阪セツ連交流会正式レポート　白鷺小低パート	1984	7	住吉セツルメント
1012		王さんだぁーれ！ 第39回全国学生セツルメント連合大会 阪セツ連住吉セツルメント白鷺小低パート	1984		住吉セツルメント
1013		あんたらなー　かも川小P	1984		鴨川セツルメント
1014		八戸ノ里　小高Pa第14回交流会自主レポート	1983		衣摺セツルメント
1015		うた　阪セツ連大会3th	1970		大阪府学生セツルメント連合
1016		公衛セツラー会　’77.11～	1977		公衆衛生専門学校セツラー会
	1	このゆびとーまれ！	1977	11	公衆衛生専門学校セツラー会
	2	ひとつぶのたね　公衛セツラー会　’78 阪セツ連交流会レポート	1978	7	公衆衛生専門学校セツラー会
	3	第１１回阪セツ連交流会正式レポート　ナイチンゲールの悩み	1980	7	住吉セツルメント公衆衛生専門学校sr会
1017		第１９回大学祭　府大セツラー会　この子らの未来を考える	1977	11	府大セツラー会
1018		７６会用　府大(※部会レジュメ、CACE WORK CARD、事務局ニュース第１０号などバラ資料)	1976－		住吉セツルメント
1019		阪セツ連基調　第２～第６回			
	1	大阪府学生セツルメント連合規約　1971年11月19日 連合委員会にて改訂	1971	11	阪セツ連書記局
	2	第2回大阪府学生セツルメント連合大会　基調報告　1969.11/19～30 於 大阪府立大学	1969	11	阪セツ連書記局
	3	第3回大阪府学生セツルメント連合大会　基調報告　11/28～29 於 府大	1970	11	阪セツ連書記局
	4	第3回阪セツ連大会総括集	1970		大阪府学生セツルメント連合
	5	第4回阪セツ連大会ー基調報告ー(案)	1971		阪セツ連書記局
	6	第5回阪セツ連大会基調	1972		阪セツ連書記局
	7	第6回阪セツ連大会基調報告(案)→決定	1974		阪セツ連書記局

1020		フレアイ　PARTⅡ　1978第9回阪セツ連交流会に向けて　日五小低正式レポート	1978	7	日東セツルメント
1021		よってらっしゃい　第9回阪セツ連交流会　小底分野レポート　す	1976	7	住吉セツルメント
1022		全セツ来たる！	1993		中央実行委員会
1023		財政報告であります(1980.8～1981.3)	1980-1981		住吉セツルメント
1024		個人のノート（※実践記録、パート会記録、講演会・分科会のメモ）	1981		びーばー
1025		第37回全セツ連大会1982.3.14～17　幼パレポート　阪セツ連 猪	1982	3	猪飼野セツルメント
1026		くれよんPARTⅡ 第37回全国学生セツルメント連合大会 阪セツ連 住吉セツルメント　白鷺地域幼児部	1982		住吉セツルメント
1027		第31回全セツ連大会に向けて　実践レポート　大阪日東下三幼児部	1976	3	日東セツルメント
1028		くれよん　Part1　第37回全国学生セツルメント連合大会　阪セツ連住吉セツルメント白鷺地域幼児部	1982	3	住吉セツルメント
1029		35大会にむけて… 坂下セツルメント大塚パート　レポーターぎょ-	1980		坂下セツルメント
1030		Jumping Youji Part　全国学生セツルメント第35会愛知大会　京都学生セツルメント連合岩本町セツルメント幼児Part	1980		岩本町セツルメント
1031		こうちゃん何か言って！　全セツ連35大会　愛セツ連島田一ツ山セツルメントひまわりパート（幼P）	1980		島田一ツ山セツルメント
1032		明日への道　さわやかな青春を求めて　番町セツルメント	1979	3	番町セツルメント
1033		’75.6.14～15.Larning Campに於て　日東セツルメント実践レポート　若い仲間たち（「青年とともに」改題）	1975	6	日東セツルメント
1034		大阪府学生セツルメント連合　日東セツル㊙情報　37大会に向けて	1982	3	日東セツルメント
1035		第33回大会に向けて！－地域の生活と健康を考える－	1978	3	番町セツルメント
1036		［情勢］ 文責 ケムンパルス（※日東セツラー）	1971		ケムンパルス
1037		高校パート総括　氷川下　第13回全セツ連大会に向けて　’66	1966	6	氷川下セツルメント青年部高校パート
1038		これが全セツ大会に向けた日東のレポートじゃ～～！	1976		日東セツルメント
1039		全セツ連32大会は大阪であるのです！　1976.5.24 ケッサク・カ	1976		阪セツ連
1040		青年部			
	1	ずたぶくろ　青パーだよりNo.3	1971		住吉青年パート

	2	四十四年度定例総会　報告及び議案書　一九六九年　六月二十二日　ところ　住吉隣保館	1969		住吉青年会
	3	解放運動の中での青年の役割り　No.1－No.3	1969		
	4	子供会の意義・目的	1969		住吉青年会
	5	実践経過（5月13日）　ケン	1972		住吉セツルメント　ケン
	6	実践報告（4月22日）　トッコの日記！	1972		住吉セツルメント　トッコ
1041		白鷺幼児部　1980　后期　（※1980-1982年の実践レポート）	1980-1982		住吉セツルメント白鷺幼児部
1042		白鷺　とびうお会　1980　后期	1981-1982		住吉セツルメント白鷺とびうお会
1043		中学生パート　白鷺　（※11月11日（土）とびうお実践レポート計4ページ）	不明		府大Sr会
1044		実践レポート　小P5.6年　KURURU	1976		KURURU
1045		新今宮中パ　S.51 4月　実践レポート	1976-1977		住吉セツルメント新今宮中パ
1046		全セツ連大会レポ　No.7			
	1	第31回全セツ連大会　これが仏大セツラー会だ　京都 仏教大学セツルメント研究会　於:名古屋3/21～24	1976	3	仏教大学セツルメント研究会
	2	第31回全セツ連大会大学別分科会レポート　大学セツラー会執行部の果たすべき役割	1976	3	大阪府立大学セツラー会執行部
	3	ねずみの学校　”尾西は恐竜が好き”　全セツ連32大会　阪セツ連住吉新今宮中2・3パート	1977	3	住吉セツルメント
	4	地対レポートーそうかつしてないのにレポート書いていいんかナァ～！－　全セツ連第32大会　於 大阪	1977	3	ぐみの会地域対策部
	5	第32回全セツ連大会正式レポート　’77新歓の成功めざして　ただいま新歓中	1977	3	大阪府立大学セツラー会執行部
	6	3・4Paスケッチブック　阪セツ連住吉セツル　白鷺3, 4Part 第32回全セツ連大会正式レポート	1977	3	住吉セツルメント白鷺3・4パート
	7	さんにんよれば･･･文殊の智恵･･･？	1977	3	住吉セツルメント新今宮地域高校生パート
1047		白鷺　小高パート（※実践レポート）	1982		住吉セツルメント白鷺小高パート
1048		白さぎ小高パート			住吉セツルメント小高パート
	1	実践レポート(※1980年-1981年11月、バラ資料）・セツルメントときどき新聞キャンプ編	1980-1981		住吉セツルメント小高パート
	2	小高パートときどき新聞	1981		住吉セツルメント小高パート
	3	小高パートときどき新聞（※キャンプ参加児童の感想文集）	不明		住吉セツルメント小高パート
	4	小高パートときどき新聞	不明		住吉セツルメント小高パート
	5	白鷺小高パート実践レポート（※1980年9月-1981年6月、バラ資料）	1980-1981		住吉セツルメント小高パート
	6	UMEMACHI　STREET　’81　第12回交流会レポート	1981	7	住吉セツルメント小高パート
	7	白鷺小高パート実践レポート（※1980年10月-1981年6月	1980		住吉セツルメント小高パート
1049		全セツ連30～33大会（中実）			
	1	第31回全国学生セツルメント大会　1976.3.21-24 於 愛知　栞	1976	3	中央実行委員会、製作 名工大Sr会
	2	会の発展をめざして！　講演　地域に根ざした子ども組織　川合章　子ども会の指導　城丸章夫（1973年阪セツ連常任出版局発行の理論学習シリーズNo.1より）	1976	10	32中実（※再版）
	3	32の空　第1号	1976	11	32大会中実三役
	4	32回大会中央実行委員会　事ム局合宿に向けて！	1976	10	文責：モドキ

	5	全セツ連第32回大会を支える第一歩は借用金から！	1976	11	32中実財政局
	6	全国学生セツルメント連合第30回東京大会～足もとから未来を～　昭和50年3月7～10日　於 都立大学	1975	3	一之江セツルメント
	7	31大会へのおさそい　今までの大会、連合委員会、12月集会に参加したSrの生の声より	1976	3	住吉セツルメント総括会議実行委員会
	8	全国学生セツルメント連合第30回大会　中実総括〔第1回分冊〕	1975		中実委員
	9	2.24阪セツ連決起集会！　於：天分　思い切り語ろう！思い切り歌おう！阪セツ連は今…！（※決起集会案内ビラ）	1977		大阪府学生セツルメント連合書記局
	10	32の足おと　第2号　1977.2.21 夕陽丘単実	1977	2	夕陽丘単実
	11	青焼きB5資料3点（※単実CK討論資料など、32大会の準備記録）	1977		中実など
	12	第33回全セツ連大会 「聞こえないか　大地の鼓動が　感じないか　歴史の胎動を　さあ今こそうたえ　君と僕の青春の詩」	1978	3	第33回全セツ連大会中央実行委員会
	13	よっといで　No1-No8（※33大会機関誌 1977年10月～1978年3月14日）	1977-1978		33中実情宣局
	14	雨あがり　単実機関紙第1号	1977	2	東淀川セツルメント
	15	たんじつにゅうす　No.1←これが最後です	1976		猪飼野セツルメント
	16	第32回全セツ連大会　テーマソング・サブテーマソング	1977		中実生活局
	17	かんじょうせん　あけましておめでとう号（※32大会に向けた機関紙）	1977	1	中実生活局
1050		阪セツ連事務局　住吉セツルメント事務局も　在任昭和51年9月～	1976		
	1	【阪セツ連事務局活動に関する学習資料】	1978	10	
	2	Do you Know,（どうゆの）Settlement? PartⅡ	1977		住吉セツルメント友好祭実行委員
	3	第9回阪セツ連大会機関紙　あいうえお　原点をみつめなおそう第1号～第4号	1976		阪セツ連事務局
	4	’76 11/20～24　第28回大学祭　目覚めよ学生　みんなの力で	1976		大阪府立大学
	5	まちぼうけ（※大学祭本部企画、本部・部落研・セツル三者共同の「子どもフェス」ビラ）	1976		府大セツラー会
	6	お山の大将　昭和51年度大谷大学祭11月13～15日　第3号	1976	11	大谷女子大セツラー会
	7	事務局ニュース　第5号	1976		住吉セツルメント事務局
	8	全国の滞納金200万！　－全セツ連財政は火の車－（※滞納一掃を訴えるビラ）	1976	11	全セツ連書記局
	9	11/1阪セツ連書記局会議レジュメ　1976.11.1 於 天分	1976	11	阪セツ連書記局
	10	まちぼうけ	1976		大谷女子大学セツラー会
	11	くもりのち晴れ　No.2　（※第32回全セツ連大会機関紙、B4 ,2枚）	1977	10	32中実情宣局
	12	無題（※大学祭に向けた原稿、4枚）	1976		住吉セツルメント
	13	ごんたくれ　76’夏号　うて　　夏に向って！　No.8	1976	6	阪セツ連事務局
	14	まちぼうけ　第16号　N歓特集号	1976	4	阪セツ連事務局
	15	おいでやす京都へ（※二定委に参加した仲間への34大会案内ビラ、B4・1枚）	1978		34大会中実
	16	2定委に参加のみなさんへ　寒川セツル再建救援カンパの訴え	1978		寒川セツルメント
1051		全セツ連大会中実　～31			
	1	「なぜ総括をするのか」（※第31回全セツ連大会総括冊子）	1976		第31回中央実行委員会実務局
	2	はばたけ大阪へ！！　31大会中実情宣局総括集	1976		31大会中実情宣局
	3	第31回中実総括集	1976		第31回中央実行委員会
	4	歩きつづけよう（※第31回全セツ連大会の総括集冊子）	1976		第31回全国学生セツルメント中
	5	販売図書目録　26th 大阪大会	1973		猪飼野セツルメント

	6	21全セツ連大会　ひろげよ団結の輪を！（※21回全セツ連大会しおり）	1970		堀の内セツルメント（制作）
	7	第21回全セツ連大会　大会関係資料　住セツ幼パ中央書記局	1970		安保破棄をめざして前進しよ
1052		仙セツ連実践レポート			
	1	『母親との提携をどう進めるか』（※「仙台全セツ大会レポート 東住吉セツルメント」と手書き）	1963		鹿野セツルメント母の会専門部会・井戸田セツルメント婦人部
	2	＜秋に向って更なる発展を＞	1976	9	仙台セツルメント連合常任委員会
	3	みんなと話すぞ！！　おいまわし老人パート　32大会分野別分科会レポート	1977		仙セツ連追廻セツルメント
	4	オス！くにこちゃん　32大会幼児パート分科会　仙セツ連中江セツル幼児パート	1977	3	仙セツ連中江セツルメント幼児パート
	5	みんな集まれ―仙台追廻セツルメント小低パート―　―子供にとって集団の価値と役割―　第32回全国学生セツルメント連合大会分野別・課題別分科会レポート	1977		追廻セツルメント
	6	■全St連32回大会/児童部レポート■　たのしかったヨ！！	1977		仙セツ連追廻St・小学校高学年
1053		第18回仙台学生セツルメント連合大会　討論資料　1979.6.30～7.1	1979		仙台学生セツルメント連合常任委員会
1054		無題紙ファイル（緑）			
	1	阪セツ連書記局会議報告（※S50.10.6-S51.4.26分）	1975－76		
	2	阪セツ連だより	1977	3	阪セツ連書記局
	3	第9回阪セツ連大会定期連合委員会（※原稿）	1976		阪セツ連書記局
	4	財政報告　’75.12.1～’76.11.3	1975-76		阪セツ連
	5	S51.7.4　阪セツ連連合委員会へ向けて（阪セツ連書記局報告）	1976		阪セツ連書記局
	6	第8回大阪府学生セツルント連合大大会開催要綱	1975		阪セツ連
	7	第二回 全セツ連 書記局会議 報告　於 東教大桐花寮 ＝何よりも子供たちとセツラーのために＝	1975	9	全セツ連書記局
	8	集中実践の成果をふまえ後期カンパニア活動の成功を！	1975	9	阪セツ連
	9	◂子供に働きかける我々の願いの根底は▸（※B4,1枚）	不明		
	10	’76新年　阪代K＜はじめに＞（※B4,1枚）	1976		阪セツ連
	11	国公私学学費値上げ反対、全学連四項目要求実現、公共料金値上げ反対、学生生活危機突破、大阪市長選勝利、三木内閣打倒　―10.21全大阪学生総決起集会へのよびかけ―	1975		不明
	12	実践レポート　庄内小低Pa－集中実践―（※B4,2枚）	不明		庄内セツルメント小低パート
	13	実践レポート（9/28）（※B4,2枚）	不明		不明
	14	10・11・12月のスケジュール	1980		阪セツ連
	15	分野別分科会　○レポ（※各分科会名と参加者名）	不明		阪セツ連
	16	大阪市長選挙について申入れ（※下部に手書きで「セツルと政治」（※分科会タイトル））	1975		日本共産党大阪府委員会
	17	第8回大会定期連合委員会招請状（※B4,1枚）	1975		阪セツ連常任委員会
	18	75府知事選の教訓に学びともに大阪の”明日”を考える中で革新自治体を支え、地域・学園の要求をぶるけよう！―私たちの要求を基礎に―　阪セツ連常任委員会アピール	1975		阪セツ連常任委員会
	19	その他阪セツ連関係バラ資料数点（※阪セツ連大会分野別分科会一覧、スケジュール、新歓総括、新歓よびかけなど）	1975-1976		
1055		第20回大学祭　1968.11.2～8「教育の軍国主義化と反動化について」 大阪府立大学住吉セツルメント			住吉セツルメント
	1	11月4日（月）講演「神話及び教科書裁判について」（※レポート用紙2枚）	1968		不明
	2	シンポジウムの意ギ　1968.11.7(木)大学祭　教育の軍国主義化・反動化（※付・手書き資料「期待される人間像」（1枚）「日本国憲法・教育基本法」（2枚）「教育教科書年表」（1枚））	1968	11	不明

	3	期待される人間像No.1-8（B4、8枚）	1968		不明
	4	地方・教育行政の組織及び運営に関する法律48条・学校教育法（昭和22年3月31日）（※手書き写し）	不明		不明
	5	教育ニ関スル勅語　明治二十三年十月三〇日　（※手書き写し）	不明		不明
	6	義務教育諸学校における教育の政治的中立の確保に関する臨時措置法（昭和29年6月3日）（※手書き写し）	不明		不明
	7	１年をふりかえって　No.1-No.2（B5、2枚）	不明		住吉セツルメント
	8	地域運動におけるセツルメント活動（B5,4枚）	不明		
	9	セツラー会のあり方（B5,5枚）	不明		府大セツラー会
	10	’73年度新歓の圧倒的成功を勝ちとり住吉に更なる前進の灯をかかげよう！No.1-No.5・ー学生セツラーにとって政治とは何か？（意義と任務）—	1973		住吉セツルメント
1056		白鷺　小低パート（※実践レポート1982.4.17-1983.2.5）	1982-83		住吉セツルメント白鷺小低パート
1057		白鷺　小高	1984		
	1	朝の詩No.113　版代K討論資料　９月１６日　大阪市立大学	1984	9	阪セツ連書記局
	2	小学高学年パートのお知らせ（※ハイキングの案内と申込書）	1984		住吉セツルメント白鷺小高パート
	3	キャンプへ行こう—セツルメント小高パートー（キャンプの案内と申込書）	1984	8	住吉セツルメント白鷺小高パート
	4	実践レポート（※1984.4.28-10.20）	1984		住吉セツルメント白鷺小高パート
1058		新今宮　小高（※実践レポート1984.1.7-6.23）	1984		住吉セツルメント新今宮小高パート
1059		白鷺　小低（※実践レポート1984.6.16-6.30）	1984		住吉セツルメント白鷺小低パート
1060		新今宮　幼パ（※実践レポート1984.5.5-11.10）	1984		住吉セツルメント新今宮幼児パート
1061		梅町ストリート　住吉セツルメント白鷺小高パート　１７回交流会正式レポート	1986	7	住吉セツルメント白鷺小高パート
1062		新今宮小低Part♡note（※パートノート（各大学のセツラーの思い・考えや自己紹介）1982.5.3-1983.5.27）	1982-83		住吉セツルメント白鷺小低パート
1063		白鷺幼パ　パート会議事録vol.3（※1981.11.27-1982.9.17　レポート用紙1冊）	1981-82		住吉セツルメント白鷺幼児パート
1084		新今宮中高青パ　1980　後期　住吉セツルメント(1981.4.24-5.9)	1981		住吉セツルメント新今宮中高青パート
1065		実践レポート　新今宮　中高青パート（※1985.4.13-12.13）	1985		住吉セツルメント新今宮中高青パート
1066		無題（※白い紙ではさまれた一束）			
	1	S50.10.13　阪セツ書記局会議報告（第２号）by参念　（※B4,1枚）	1980		阪セツ連書記局 参念
	2	第二章　更なる阪セツ連の発展めざして　第一節 阪セツ連１２大会以降の半年間の私たちの歩み・第三節 地域実践の飛躍のために	1980		阪セツ連

	3	雨が空から降れば、僕の唄はサヨナラだけ等バラの歌詞（※歌集、A5両面１３枚）	不明		阪セツ連
1067		とびうお会のお知らせ（※サイクリング案内のビラ、B4・１枚）	1982		住吉セツルメントとびうお会
1068		バラ資料（※うたごえテープの曲名、全セツ連大会の感想文、1982.11.23・27パート総括（各１枚））	不明		不明
1069		紫の表紙のノート（実践レポート、新歓対策部レジュメ、方針会議レジュメ、Sr会記録、府大セツラー会レポート等）	1982他		住吉セツルメント
1070		沖縄記　謹呈 セツルメント様 著者（※ホッチキス止めB4 冊子）	1976	4	池長裕史
1071		どぶ川学級を上映するヨ～ 主催 猪飼野セツルメント（ビラB5・1枚）	不明		猪飼野セツルメント
1072		映画「新どぶ川学級」を見ての感想（B4・1枚）	不明		不明
1073		祭りだワッショイ！　第15回友好祭昭和51年度5月28～30日	1976	5	住吉セツルメント
1074		第15回友好祭への破壊策動を許さず学生の自主的学術文化運動と大学の自治を守ろう！	1976		第15回友好祭実行委員会・五者学生自治会連絡協議会・社大府大 部落研究会
1075		仲間の詩　第15回友好祭にむけて　府大生協・住吉セツルメント・夕陽丘セツルメント共同企画　新どぶ川学級上映にあたって”セツルメント”ってなあに	1976		夕陽丘セツルメント
1076		第15回府立系大学友好祭企画　逆流をこえて国民的融合へ講師：〇〇　映画：八鹿高校事件	1976		社大・府大　部落問題研究会
1077		大学祭（ファイル内に1970年～1975年の「新入生歓迎祭典」パンフ5冊）	1970-75		大阪府立大学新入生歓迎祭典実行委員会
1078		’79 第18回府立系6大学友好祭　住吉セツルメント			
	1	自主企画パンフレット　青春を鮮やかな軌跡でかけぬけろ	1980		第19回友好祭実行委員会
	2	自主企画パンフレット　羽ばたけ！若者よ！80年代は我らの手で！　地図・屋内企画・屋外企画	1979		第18回友好祭実行委員会総務部
	3	自主企画のてびき　第18回友好祭実行委員会	1979		第18回友好祭実行委員会
	4	第18回友好祭―クラス討論用―討議資料	1979		第18回友好祭実行委員会
	5	走りぬけ小さな命よ！	1979		不明
1079		学生部通信 大阪府立大学セツラー会（※1977.4の第3号～1978.10の第9号学生部通信綴込み。第5・6号は抜け）	1977-78		大阪府立大学学生部
1080		第8回阪セツ連交流会（住吉関係）　1977.7.15,16,17 於 大阪外国語大学、大阪女子大学　住吉セツルメント資料	1977		
	1	あした天気になあれ　　第8回阪セツ連交流会正式レポート　集団づくりの中の遊びの役割	1977		住吉セツルメント新今宮地域3・4年生パート
	2	ガリバーと巨人の小人たち　白サギ幼児パート	1977	7	住吉セツルメント白鷺幼児パート
	3	どろんこの天使たち　S.52.7.16～17　阪セツ連交流会	1977		住吉セツルメント新今宮地域幼児パート
	4	住吉セツルメント白鷺地域1・2年生Part　第8回阪セツ連交流会正式レポート　空とぶみゆきちゃん	1977		住吉セツルメント白鷺1・2年パート
	5	3色ねずみ　住吉セツルメント新今宮中パ　1977.7.16～17阪セツ連交流会	1977	7	住吉セツルメント新今宮中学生パート

	6	おまえらほんまに仲間か！’77　第8回阪セツ交流会　白鷺地域中学生パート	1977		住吉セツルメント白鷺地域中学生パート
	7	つゆくさ第1号～第3号（※交流会機関紙、B4・計5枚）	1977		交流会実行委員会
1081		第7回HSR大会レポート	1974		
	1	第7回阪セツ連大会アンケート	1974		
	2	第7回阪セツ連大会ー全大会・分科会の教室割りあて	1974		
	3	風の子　第7回阪セツ連大会11/30～12/1正式レポート	1974	11	住吉セツルメント小学生パート赤川班
	4	ヤタデ　どんぐり班児童部実践レポート　＝1974.11/30,12/1⑦阪セツ連大会にむけて＝	1974	11	猪飼野セツルメント
	5	第7回　4人と2ひき荒野をゆく　第7回阪セツ連大会正式レポート1974年9月～11月	1974	11	住吉セツルメント小学生パート
	6	第7回　しゃぼんだま　すみよしせつる幼P！　議事レポ　S.49 11/30～12/1　阪せつ連大会	1974	11	住吉セツルメント
	7	第7回ねずみの学校　中パ　12月阪セツ連大会正式レポート	1974	11	住吉セツルメント中学生パート
1082		全セツ連老パレポート			
	1	庄内Settlement老人部のIntroduction	1980		庄内セツルメント
	2	老人部レポート　’80交流会に向けて	1980	7	庄内セツルメント老人部
	3	庄内セツルメント	1980	11	庄内セツルメント
1083		80’ Junior Invader　第13阪セツ連大会にむけて	1980	12	日東セツルメント日五中パ
1084		テーマ別　対象　実践記録　（A4・1枚）	不明		Cherry
1085		1974年度方針合宿	1974		住吉セツルメント
1086		セツルメント活動をよりよく知っていくために	1980		住吉セツルメント中央執行部（UFO）
1087		「組織問題」「執行部問題」ほかバラ資料数点	不明		住吉セツルメント
1088		＝第15回交流会＝　月日：7/14（土）・7/15（日）・7/16（月）　場所：大阪市立大学、大阪府立大学	1984		大阪府学生セツルメント連合
1089		新今宮地域対策部（B4・1枚の青焼き）	1984		住吉セツルメント
1090		書籍コピー（『レ・ミゼラブル』第10章「3 葬式ー復活の機会」1枚、他B4・1枚）	不明		
1091		事務局会議　レジュメ　by茹玉（B4・1枚の青焼き）	1982	6	阪セツ連事務局
1092		Telephone 大作戦	1977	2	住吉セツルメント単実委員会
1093		現代における地域子ども会活動　分科会　地域における教育実践　レポーター 坂下セツル　12月集会全国学生セツルメント交流集会	1971	12	坂下セツルメント
1094		ようこそ大阪へ！　全セツ大会速報No1	1973		全セツ連実行委員会
1095		大阪でのたたかいのあゆみ　1966-1980　10. 21	1981	9	安保破棄・諸要求貫徹大阪実行委員会
1096		大阪府学生せつるめんと　第16回阪セツ連大会1983.12.10～11製作 衣摺セツルメント（印字紙封筒）			

	1	せつるめんと　第53号　昭和51年11月24日	1976	11	全国学生セツルメント連合
	2	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第43号　昭和49年1月31日	1974	1	
	3	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第38号　1973年2月21日	1973	2	
	4	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第36号　1972年11月20日	1972	11	
	5	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第35号　1972年10月11日	1972	10	
	6	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第34号　1972年7月15日（p3・4のみ）	1972	7	
	8	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第33号　1972年6月10日	1972	6	
	9	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第31号　1971年12月10日	1971	12	
	10	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第30号　1971年11月15日	1971	11	
	11	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第29号　1971年7月10日	1971	7	
	12	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第28号　1971年5月25日	1971	5	
	13	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第26号　1970年12月19日	1970	12	
	14	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第40号　1973年7月15日	1973	7	
	15	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第37号　1973年1月26日	1973	1	
	16	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第32号　1972年2月20日	1972	2	
	17	全セツ連中央機関紙　せつるめんと　第41号　1973年10月17日	1973	10	
	18	せつるめんと　第1号　昭和50年8月11日	1975	8	
	19	せつるめんと　第55号　昭和52年11月8日	1977	11	
1097		白鷺　幼児パート	不明	4～5	住吉セツルメント幼児パート
1098		全セツ39大会　中央資料　ガメラ			
	1	全セツ連39大阪大会に向けて　単実の手引No.2	1984		全国学生セツルメント連合39大阪大会中央実行委員会
	2	第6回中実会議831017	1983		全セツ連39大会中実
	3	くいだいおれ　第4号　全セツ連39大会中実発行　1983年9月30日	1983	9	全セツ連39大会中実・情宣局
	4	第39回大会中実会議資料関係　数十点	1983		全セツ連39大会中実など
	5	かにどうらく　No5　1983.10.24　39中実内機関紙だ…	1983	10	全セツ連大会39大会中実
	6	かにどうらく　No.6　1983.11.14　39大会中実内機関紙	1983	11	全セツ連39大会中実
	7	あしあとNo110　1982年7月3日	1982	7	南田辺ひよこ学童保育
	8	39大会へのスケジュール	1983		全セツ連39回大会中実
	9	愛セツ連大会参加記　わたしはついに、あのエリートビーチにはいった！	1983？		不明
	10	第39回全国学生セツルメント連合大会―その意義と任務―	1983		全セツ連書記局
	11	’84 子ども会　小学校　高学年サマーキャンプ　8月18・19日　金剛山キャンプ場	1984		
	12	全セツ連第39回大会中実　後夜祭実行委員会結成記念大集会討論資料	1984	2	全セツ連39回大会中実
	13	無題（※第39回大会スケジュール「市大」と右上に記載）	1984		
	14	借用券売り上げ到達＜840206＞	1984	2	全セツ連39回大会中実
	15	全国代表者会議（全代K）について　1983.11.12	1983	11	全セツ連書記局
	16	19831017阪セツ連統一学習会	1983		阪セツ連
	17	かにどうらく　No4　1983.10.17　39中実内機関紙	1983	10	全セツ連39回大会中実
	18	神奈川県川崎愛泉ホーム　活動案内	不明		社会福祉法人　神奈川県社会福祉事業団
	19	青年の課題について　文献「青年の色は何色か」高田求	不明		不明
	20	阪セツ連16大会に向けて	1983		阪セツ連書記局
	21	無題（※阪セツ連大会の報告の一部と推察される（pp24-31））	不明		阪セツ連
	22	六法全書コピー？（※日本国との平和条約、日米安全保障条約などの頁）	不明		不明
	23	文教予算を大幅に削減、教育の国家統制を強化	不明		○○
	24	大学内における正常な秩序の維持について（通達）、教育基本法などコピー	不明		不明

	25	第二章　学生セツルメント運動の社会的性格	不明		不明
	26	新今宮地域総会　レジュメ　840505	1984	5	住吉セツルメント新今宮地域対策
	27	各単セツ　セツラー数、北海道学生セツルメント連合・仙台学生セツルメント連合・関東学生セツルメント連絡会議・千葉県学生セツルメント連合・愛知県学生セツルメント連合・京都府学生セ	不明		不明
	28	’84年度新入生歓迎勧誘運動	1984		住吉セツルメント
	29	第3回作業所バザーに向けて1984.9.22	1984	9	不明
	30	障害者の働く場　なんば・なかよし作業所	不明		なんば・なかよし作業所
	31	無題（※ひこからがめらへの手紙（便せん3枚））	不明		ひこ
	32	学習会のテーマについて	不明		
	33	無題（※学習会に向けたレジュメ）	不明		府大セツラー会？
	34	総括レジュメ、島田豊「学問とは何か」抜粋コピー、会議報告ほか学習局関連資料	1983		全セツ連39回大会中実・学習局
	35	第2回　八役合宿　841225-26	1983	12	全セツ連39大会中実・八役
	36	学習局のみなさん！全セツ連39大会ポンフレット作成について by四役	1984	2	全セツ連39大会中実四役
	37	第3回　八役合宿　840218-19	1984	2	全セツ連39回大会中実八役
	38	キャッツ・アイ　せせらぎ　1984.7.14～16　15回交流会正式レポート	1984	7	日東セツルメント下寺中高パート
	39	阪セツ連第16回大会正式レポート　どろんこの天使たち 1983.12/10～11	1983	12	住吉セツルメント新今宮幼児パート
	40	全セツ39大会中実準備会合宿　1983.8.22～8.23　大石教会にて	1983	8	全国学生セツルメント連合第39回大会中央実行委員会準備会
	41	19830824 阪セツ連,二定委参加決起集会	1983	8	阪セツ連
	42	38大会中央実行委員会　事ム局総括　19830326 トーマ	1983	3	全セツ連38大会事務局
	43	財務局	1983		全国学生セツルメント連合第39回大会中央実行委員会準備会・財務局
	44	実ム局活動（案）レジメ　26th 38th 大会より　830822(土)	1983	8	全国学生セツルメント連合第39回大会中央実行委員会準備会・実務局
	45	中央準備会　合宿　部局会議　学習局　1983.8.22～23	1983	8	全国学生セツルメント連合第39回大会中央実行委員会準備会・実務局
	46	学習局　学習会総括	1983		全国学生セツルメント連合第39回大会中央実行委員会準備会・実務局
	47	全セツ連39大会　大阪開催に向けてのアピール　1983年8月29日	1983	8	第39回全国学生セツルメント連合大阪大会中央実行委員会
	48	第1回中実会議です　830912	1983	9	全国学生セツルメント連合第39回大会中央実行委員会
	49	第39回全国学生セツルメント連合大会　中央実行委員会　学習局 57.9.12	1983	9	第39回全国学生セツルメント連合中央実行委員会・学習局
	50	財務局	1983		第39回全国学生セツルメント連合中央実行委員会・財務局
	51	同じ喜びと悲しみの中（※重ねて、「題名考えてくれ！」と記載）1983.9.19第0号	1983	9	39中実事務局？
	52	9.26　中実学習会「セツルメントの社会的性格」	1983	9	第39回全国学生セツルメント連合大会中央実行委員会
	53	第4回中実会議831003	1983	10	第39回全国学生セツルメント連合大会中央実行委員会
	54	カニ道楽　No2　1983.10.3　39中実内機関紙	1983	10	第39回全国学生セツルメント連合大会中央実行委員会
	55	学習局・実務局	1983		全セツ連39回大会中実・学習局・実務局

	56	39中実　第4回　学習局・部局会議　10月3日	1983	10	全セツ連39回大会中実・学習局
	57	第5回中実会議　831010	1983	10	全セツ連39回大会中実
	58	かにどうらく　No3　1983.10.10　39中実内機関紙	1983	10	全セツ連39回大会中実
	59	別紙（八役合宿設定に向けて）byてっぱん　831006	1983	10	全セツ連39回大会中実
	60	第2回学習会「総括の意義と方法」　10月10日	1983	10	
	61	北海道学生セツルメント連合・仙台学生セツルメント連合・関東学生セツルメント連絡会議・千葉県学生セツルメント連合・愛知県学生セツルメント連合・京都府学生セツルメント連合	不明		
	62	育英　第183号	1984	12	日本育英会
1099		季刊せつるめんと　第3号＝復刊号＝　愛知県学生セツルメント連合機関紙	1978	9	愛知県学生セツルメント連合
1100		第22回　仙台学生セツルメント連合大会　討論資料　1982.12.10～12　於：東北大学	1982		仙台学生セツルメント連合常任委員会
1101		第21回仙台学生セツルメント連合大会　討論資料　1981.12.5～8 於：東北大学、宮城教育大学	1981		セツルメント連合常任委員会
1102		阪セツ連書記局会議報告			住吉セツルメント
	1	4.24　阪セツ連書記局会議報告	不明		
	2	幼パっ子のぉと―Sr.編―	不明		住吉セツルメント幼児パート
	3	スカイメイト　全セツ連書記局報告　アラヨット	不明		アラヨット
	4	阪セツ連代表者会議　９・１４　書記局常任C報告	不明		住吉セツルメント
	5	翼　特集号　’78　10.30	1978		阪セツ連学園祭センター
	6	S50.10.6阪セツ連書記局会議報告	1975		阪セツ連書記局
	7	書記局活動報告	不明		阪セツ連書記局
	8	当面する情勢と大阪のセツルメント活動について	1969		阪セツ連書記局
	9	まちぼうけ　第1次大学祭特集	不明		阪セツ連事務局
	10	第5回　大阪子どもまつり	1972		第5回大阪子どもまつり実行委員会
	11	第4回　大阪子どもまつり	1971		第4回大阪子どもまつり実行委員会